

DARK SOULS → SKYRIM
でまったり()スローラ
イフ()

佐伯 裕一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルどおり。DARK SOULS無印 ↓ III ↓ SKYRIM（原作開始時から二十数年前）。

とりあえず、好きなものと好きなものを合わせれば筆が進むんじゃないかな、と思ったので。

舞台はSKYRIMが主。DARK SOULS要素は、オリ主と、オリ主の齎す色々。

そしてメインクエスト関連は、オリ主ではなくどうあきんの仕事。常識的に考えて、ドラゴンの相手とか真面目にしてたらそれだけで手一杯になっちゃうし。

貯金ができない性質なので書き溜めは無し。

※小説としての整合性をとるため、細かく独自設定を入れてあります。苦肉の策であります故、何卒ご理解いただければ幸いです。

※『小説情報』からも見られますが、一話あたりの文字数が多いです。それも、回を経るに従って徐々に長くなっています。「一話をサクツと読みたい」とお考えの方には面倒な作品かもしれません。

※各話のこぼれ話みたいなのは、「〇〇の言い訳」として活報でやることにしました。

目次

序 スカイリム来訪

序 | 1

一、棺の中からこんにちは & 第一

村人発見 | 18

二、ヒト? | 37

三、兄弟 | 56

四、友とは | 76

胎動 盗賊ギルド

五、顔合わせ | 95

六、カチコミ | 112

七、ことこの仕置と今後の指針 | 124

八、作戦会議 | 149

九、はじめてのかちこみ(単独)

166

一〇、はじめてのかちこみ(二日目)

189

一一、お食事会 | 208

一二、亡き友に捧ぐ愛 | 220

一三、虫取りと新しい友達 | 240

一四、美味しいお酒 | 262

撰動 東より、北への旅路

一五、作戦会議第二 | 281

一六、突撃! 隣の同胞団 | 313

一七、盗賊砦のお坊ちゃん | 341

一八、外部協力者就任 & 出立

360	一九、脅迫	387	二五、サイジック僧兵とデイドラロー
	二〇、ストームクローク入り(仮)		ド
406	二〇改、アーチルの大冒険	427	二六、スカイリム筆頭魔術師
	二一、足留めと、暗躍と、乾杯		二七、三年経つて
468	閑話、ブリニョルフの憂鬱	502	閑話、ラーナルクの憂鬱(甲)
	蠢動 ウィンターホールド復興		654
	二二、二度の謁見	519	閑話、ラーナルクの憂鬱(乙)
	二三、作戦会議第三	543	677
	二四、錬金術師がついうっかり		閑話、ラーナルクの憂鬱(丙)
563			707
			閑話、ラーナルクの憂鬱(丁)
			739
			二八、試験前試験(上)
			767

序 スカイリム来訪

夕方、鴉の鳴き声で目を覚ます。

鴉とは何かと縁があるせいか、多少の愛着がある。こちらの好意を察してか、なんなら連中のほうから寄って来ることもある。

そして夕方の起床というあたり、私がまつとうな勤め人でないことは明白だ。

私は今、このスカイリムという土地で錬金術師として活動している。

……積極的に薬品を売り出しているわけでもない私の現状を、「活動」などと述べて良いものかは不明だが。

五日の内に近所の婆様へ副作用が軽くなるよう調整した睡眠薬を、半月の内に樵へ軟膏を納める予定だ。

そして今月の内には首長府の衛兵隊へ傷薬やマジカ回復薬を、信用があり直接衛兵隊へ納める立場にある錬金術師へ納める必要がある。ややこしいが、要するに下請けだ。

それなりの対価を頂戴しているとはいえ、便利使いされるのは気分がよろしくない。

「あの野郎いつか締めてやる」と独り言が零れる。

この錬金術師の身分は表で動くための仮の姿とは言え、なかなか忙しいのも嬉しいやら面倒やら。少々判断に困る。

そして今日も益体も無いと思いつつ、考えてしまう。

「神やそれに準じる化け物共と丁々発止を繰り返して来た私が、何がどうなってこんな場所で錬金術師なんぞしているのか」と。

半ば習慣的作業と化した薬品作成の下拵えと必要性の薄い夕食を同時に済ませつつ、現実逃避がてら常の如く思考を飛ばす。

私は『持たざるもの』であった。

幼い頃からやることなすことうまく行った試しが無く、人生に絶望していた。

救いが無かったわけではない。家族は私を愛してくれていたし、数少ない友人も私に気にかけてくれていた。

だからこそだろうか。私にとってそれらは、呪いに近いものであった。

不遜であろう。傲慢であろう。しかし現実として、日常的に人生の終わりを望む私にとって、彼等の愛こそが私の命を望まぬ現世に縛り付けていたのだ。

何度それらを振り切り、幕を下ろそうと思ったかわからない。

しかし私の矮小で臆病な精神は、私が死ぬことで悲しむ彼等を想像してはその罪を受け止めきれず、刃を、薬を、手放してきた。

ちなみに投身や入水を選ばなかったのは、少しでも彼等の受ける衝撃や後悔を軽くしたい私なりの気遣いだ。

刃であれば、物取りの犯行に見せられるかもしれない。薬物であれば、病に因る急死と見せられるかもしれない。

しかし投身や入水では、普段それらしい場所へ行かない私にしては不審であり、架空の犯人を想起させるより私自身による自殺という真実に辿り着いてしまうかもしれない。

それは彼等をより深く悲しませてしまい、なおかつ架空とはいえ『犯人』という恨んで心の澱みを僅かに晴らせる役割がないのは、大変よろしくないと考えたのだ。

閑話休題。

そうした絶望の中でただ命をつないでいるだけの私に、あるとき転機が訪れた。別に珍しくもない。流行り病だ。

しかし私にとって予想外だったのは、私を含めた身の回りの人間の中で、『私を除く全員』がその病に罹ってしまったことだ。

彼等は言った。

「お前だけでも無事で良かった。さあ、あまりそう頻繁に訪ねてくるものではないよ。看病してくれるのは嬉しいが、お前まで病に倒れたら大変だ。もうお帰り」

私は神を呪った。敬虔とは言えないまでも周囲の影響で『白教』徒であった私は、生まれて初めて心から神を呪った。

そして僅かに、彼等を妬んだ。

おお、神よ。何故彼等なのです。彼等は敬虔な信徒であり、善人であり、勤勉に自らの人生を生きております。

比べて私はどうでしょう。常に死を望み、仮に死んだところで彼等が悲しむ以外の損益を与えません。世間的には誰にも必要とされていないのです。病に罹るなら私であるべきでした。何故私ではなく彼等のですか。何故、死にたがりを生かし、生きるべき人間を殺すのですか。

他の罹患者と同じく打つ手が無かったのか、私が神を呪ったことがいけなかったのか、彼等は皆、死んだ。天に召されたとはあえて言うまい。

なんにせよ、だ。私は独りになった。誰も私の死を嘆かない。誰も私の自殺を止めない。

親しき者を一度に失った喪失感と孤独感、それに相反する解放感から、私はとめどな

い涙を流し続けていた。

そして、「さあこれからどんな死に方でこの糞つ垂れな人生に幕を引いてやろうか」と退廃的かつ魅力的な考えに思い馳せていたとき、左腕に強烈な痛みと、それが収まってしまうからは違和感が訪れた。

混乱した頭で見た左腕にあつたのは、昏い闇の中に浮かぶ炎の輪のような印。人間の世にはけして受け入れられることのない『不死人』の証——『ダークリング』だった。

愛する彼等が病に罹つたときの憤りなどまだ序の口であつたと、このとき私は理解した。

今から、やつと今から望みを叶えようというときに、その可能性をすり潰されたのだ。ちっぽけな輪、一つで。

なるほど私が今までに抱いていた絶望など可愛いものだったのだ。この僅かに残された小さな望みでさえ神は目敏く見つけ出し、蠟燭の頼りない火を吹き消してしまうように、簡単に潰えさせてしまう。

はつきり言つて狂つてしまいそうだった。

しかし私が頭を抱え唸り声や奇声を上げ逃避している最中にも、近隣住民が私の元へ迫り来ていた。

曰く、流行り病が起きたのにこのあたりでお前だけが生き残ったのは不死人であるからだと。

病が愛する彼等を襲ったことと私が不死人になったことは時系列が逆転しているため、その口上は的外れであるのだが、そんなことは『善良なる一般市民』にとつて関係など無いのだ。

市民諸君は私を追い立て、打ち据え、財どころか衣服までもを奪い、衛兵隊へ突き出した。

その頃になればいくら不死人とはいえ、殴られ過ぎた頭が全く思考をまとめることができず、自分がどこに居るのか、どういった状況であるのか、まるでわからずにいた。

次に私の意識が正しく浮上したのは、『北の不死院』と呼ばれる牢獄の独房の中であつた。

私がこの場所について知ったのは、連れてこられてから、かなりの時間が経つてからだった。

そう、かなりの時間だ。

なにせここには、情報を得られそうなものが何も無い。そのため、正確な時間など知りようがないのだ（ついでに言うとう昼も夜もない）。

情報収集をしようにも、おそらく私より遥かに早くぶち込まれたであろう諸先輩方は、『亡者』と表現するしかない廃人と化していた。

何度か話かけてみたが、満足に会話が成り立った試しがない。というか言葉を喋っている者がいない。更に言えば反応すらしない。

やはり、亡者や廃人と表現するのが適当だろう。

そもそも亡者達は骨と皮しかない様子である。どう考えても衛生的な食事を毎日摂取しているようには見えない。

そのような有様では、まともな交流を持つとうとするほうが阿呆らしいというものだ。

次にこの場所の住民と呼べるのは、私のかげがえのない心の友である鼠くん（さん）。彼（彼女）はその愛くるしさで私を癒やしてくれるだけでなく、時折、衝動的に湧き

上がる食欲の解消にも役立つくれる。

しかしどういいうわけか、その食欲も日に日に衰えている気がする。それに伴い、私の外見もそこいらの亡者共に近づいている気がするし、何故かそのことに対して然程頓着もしない。

……人間性の摩耗に従って、生物としてのヒトらしさを失っていつているのではない

かと思うのだが、正直この思考も廃人寸前の頭で考えたものであり、どこまで正しいのか。そも正しい必要があるのか。更に言えば正しさとはなんなのだ。

……思考がとつ散らかっている自覚だけが残る。

鼠くんさんは徐々に私の周りに増えていった。私を食べても、多分、美味しくはないよ。

最後に、姿の見えない（推定）巨大な化け物氏。

私の独房からは廊下や壁しか見えないが、壁どころか建造物自体を揺らす勢いでズシン、ズシンと足音らしき音と振動が伝わってくるのだ。

私の知識にある最も大きな動物は農耕用の牛だが、大きさを比べてみたなら、きっと大人と子供どころか、大人と猫くらいの差があるだろう。

何故この亡者だらけの牢獄にそんな化け物が居るのか甚だ謎であるが、別に亡者を食うというわけでもないらしい。

少なくとも、化け物氏が私や諸先輩方の前に現れたこともないし、そも、そも重苦しい歩みを乱したこともない。

常に一定の速度でズシン、ズシンと重量を感じさせる足音を鳴らし続けているだけなのだ。

この化け物氏こそが、北の不死院において最も謎深い存在であるかもしれない。

話は変わるが、これだけ長いあいだ不死人をやっていけば、私もとうに亡者となつていてもおかしくはないはずなのだが、それらしいのは外側だけだ。

話そうと思えば話せるし、思考も、自分基準ではすっかりしている。

これは仮説ではあるのだが、不死人となつて絶望し、思考を止めた者から廃人の亡者になつていくのではないだろうか。

確かにこの身にダークリングが現れたときの絶望感は凄まじかつた。しかし私にとつて絶望とは馴染み深い感覚であつたし、生まれ育つた町から、不死人と、獣と、化け物しかいないこの場所へ強制的に引越せられ、否応なく永い時を過ごしたことは、私の死生観に変化を与えたようだ。

より詳細に言えば、心のどこかで『既にここは死後の世界である』と認識している節がある。つまりは、一度死んだような気分なのだ。そのためか、身を焦がすほどに溢れていた希死念慮はなりを潜めている。私としては、苦しみが一つ減つたのであれば願つたり叶つたりである。

主観的観測によれば、生前の町での生活より柔軟かつ諧謔に富んだ思考になつたと自負している。これがあの頃にできていけば、私の人生ももつと違つたものになつていたのではないかと虚しい仮定の話を考えもしたが。

閑話休題。

諸先輩方、鼠くんさん、化け物氏との心温まる日々を数日、数週間、数ヶ月、数年、ン十年、ン百年……………数えることすら馬鹿らしくなるほど過ぎた頃、つまりかなりの時間が経った頃に再び転機が訪れた。

ああ、またしても転機だ。はつきり言つて良い予感がしない。

転機は、崩れた天井から僅かに見える外界より、綺羅びやかな騎士鎧の姿をしてやってきた。案の定その使者は、私を『巡礼』などという過酷な旅へと誘ったのだ。

別に無視してしまつても構わない話ではあつた。その場合、未来永劫あの退屈な不死院で自問自答し続けるという選択肢しかないだけで。

回らない頭で「流石にそれは御免被る」と考えたのが運の尽きだつたのだろう。

手始めとばかりに、『推定巨大な化け物氏』が『確定巨大な化け物氏』に変化し（これは後に別個体であつたと判明。もう片方の個体が何故大扉を守るわけでもなく徘徊していたのか、更に謎が深まつた）、その巨体に相応しい棍棒で磨り潰された。再度出会つた際に「不死人の恩恵を享受させてくれてありがとう」と例を言つたが、皮肉として通じたかは不明である。

何度となく虫ケラの如く殺され続け、どうにか震える足を叱咤して化け物氏をかいく

ぐつた先には中途半端に知恵を残した先輩方がおり、折れた剣や弓矢で攻撃してくる始末。

生まれてこのかた荒事とは縁が無かったために、化け物氏と比べるのも烏滸がましい程度の脅威ですら、意図も容易く殺される。

しかし進むべき道が、化け物氏を掻い潜り、先輩方をやり過ごし、粗末ながらも武装を整え、再び化け物氏に挑む気違い沙汰しかあり得ない、という鬼畜の所業。やはり神とは一度話し合わなければならぬようだ。

全く嬉しくない不死人の恩恵を何度と無く享受し、どうにかこうにか化け物氏を打ち倒して不死院を出たと思ったら、今度は化け物氏に引けを取らない巨大さの大鴉に連れ去られ、『ロードラン』なる地へと運ばれた。

しかし結局、不死院とやることは変わらないらしい。

亡者になって立ち止まり蹲るのが嫌なら、化け物を殺し、神を殺し、力を蓄え、そして始まりの火を継ぐ。

それ以外に道は無いと。

道中、様々なことがあった。

準神とも呼べる化け物共を打ち倒し、さて神々と『お話し合い』だと意気込んでいたら、あろうことか白教主神は不在。大王は既に『薪の王』。大王の長女は幻の姿を残すのみ。白教の神と言える神族は一柱しか残っていない（この一柱も実際には『暗月』なる姉妹教の神であったのだが。更に言えば未確定ながらも一柱が戦神として竜とよろしくやっていたりした。そちらは追放されていたので私の中では白教一族とは別扱いだ）。

振り上げた拳のよろし所がわからなかったため、残った瞬間移動と『ソウルの矢』が得意な彼は、八つ当たり気味だが念入りに突き殺しておいた。

ついでにそれなりの数に出会った白教徒共は、尽く殺すか勝手にくたばるのを眺めていた。

唯一『火防女』だけは不憫に思い、一度殺害されたのを生き返らせもしたが。

ああ、パツチなる坊主頭には一度罠に嵌められたが、拳と『メイス』を交えた正統かつ厳粛なお話し合いを経て『マブダチ』となったため、お友達価格にて品物を売買させてもらった。久しぶりの友人に気分が高揚したことは言うまでもない。奴も聖職者は気に食わないようであったし。時折メイスをチラつかせれば、色々と情報を吐いてくれた。交友関係には気を配るべきだ。

とまあ、結果として、私は火継ぎの儀を行い、薪の王となり、次代へと火を繋いだ。

火継ぎにあたり、私の中の神に対する考えに若干の変化が起きた。

姿を見てもいない『ロイド』については今を以てなお恨みの対象であるが、私は大王グウィンが然程嫌いではない。

彼は人の祖たる『小人』を恐れた。しかし『最初の火』が熾つたのは大王の責任ではないし、火から『王のソウル』を見出し仲間と共に古龍へと戦いを挑んだのは、彼の勇敢なる野心からだろう。そこに、小人はいなかった。

大王が仲間の列に加えなかったのか、小人が自らの王のソウルを後生大事に抱くことを至上命題にした故かはわからない。

しかし結果的に大王は自らの意思で時代を開いた。つまりは勝者となったのだ。勝者には古今東西、その後の世をある程度好き勝手にする権利が与えられる。繰り返すが、その陣営に小人はいなかった。強いて言うのなら、小人は負けたのだ。

私自身、負け組の人生を送ってきたものとして小人に対して鼻屑目を持つてしまうところはあるが、それでも負けたのなら、後からぐちぐち文句を垂れるのはあまり美しくない。

やや話がそれたが、大王は自らの開いた時代が終わりかけたときにはあらゆるものを

残る者達に分け与え、自ら薪の王となった。

アレはなつた者にしかわからないが、常時身を燻^{いぶ}られる苦しみ、世界の礎として消費されていく空虚感、それでもいつかは終わりがくるといふ徒労感と絶望感がひたすら続く。

それら全てにただただ耐えるしかない、そういう役割だ。

大王が時代の責任を取ったことで、小人、ないしは人に対して行つた様々な所業は、私にとつて許容できるものとして処理された。

私のように元々絶望だけを抱えていた人間にとつて、間違えながらも進み続けた大王の生き様は、そうありたかつた姿に思えてどうにも嫌いになれないのだ。一片の隙も無く完璧、というわけではないあたりが、眩し過ぎなくて余計に。

閑話休題^{それはそれとして}。

私が次に目覚めたのは棺の中であつた。

ちなみに、王であつた際の最期の記憶はほとんど無い。薄れた景色の中、何者かに打ち倒された気がするだけだ。

目覚めてから周囲を散策するうちに、襲いかかってくる懐かしの亡者や化け物然とした戦士をやり過ごして『祭祀場』にたどり着いた時、火防女が「薪の王が『灰』に選ばれるなど……」と随分と驚いていた。

そこで色々話を聞いたが、要するに現状は私が四苦八苦していた頃からずっとずつと気が遠くなるほど時代を下った世界で、最初の火継ぎをなぞるために似たようなことをしてこい、とのことだった。

私は、大王の繋いだ世が終わるのを忍びなく思い、再び火継ぎを行う決意をし、実際にやり遂げた。

しかしその瞬間愕然とした。

記憶にあった火継ぎは、世界にあまねく光をもたらさんと火が猛っていた。

それがどうであろうか。ちっほけな火がこの身ですら焼き尽くすこと叶わず、溢れんばかりの力などはもうどこにも残っていないかった。

悲しかった。寂しかった。侘しかった。

大王があれば手を尽くして望みを託し、私が文字通り死にももの狂いで成し遂げた火継ぎの末路がこれなのか、と。

ああ、そういえば、火継ぎについて何かしら知っているふうな連中の中には、火継ぎそのものに否定的な面々がいたことを思い出した。

あるいは彼等は個人的感情以外にも、この火継ぎという仕組みの限界を悟っていたのかもしれない、と思った。

少なくとも、私はそう感じた。

その無念故だろうか。私は再び棺から目覚めた。

不思議なこともあるものだと思います。また同じ道を辿っていると、死した火防女の遺体から『火防女の瞳』なる悪趣味な品を手に入れた。

自分が持つていても仕方ないと思い、祭祀場の火防女に見せてみると、何やら悩み、考え込んだあとで私に言った。「私は火守女。火の最期を看取るのもまた役目」と。

私は火の時代を終わらせようと考えた。大王は、グウィン王の始めた時代はもう十分人々に光を見せた。無理に延命するくらいなら、終わらせてしまうのもまた一つの選択である。

あるいは、私の諦念がもたらしたわがままであったのかもしれない。だがそのときの私はそう考えたのだ。

火を守る『王たちの化身』とでも言うべき戦士を倒し、再び最初の火の前に立つた時、私は火守女を呼び、火を終わらせた。

すると彼女は言うのだ。またいつか火は熾る、と。

それを聞いて私は、「ああ、それならば何もかもが終わりではない。無意味でもない。

大王が始めたこの時代も、大きな流れの一つであったということ。また誰かが、時代を始めるのだろう。ならば安心だ」とそう感じた。

徐々に強くなる眠気に抗いきれず、私は意識を手放した。これでやつと私の生も終わる。長く奇妙な一生が終わる。それを嘯み締めながら。

その感慨をぶち壊してくれたのは、今度はどこの神だろうかね。棺の中からこんにちは。三度目ともなれば新鮮さも糞もないな。

私が、スカイリムへやってきた瞬間だった。

一、棺の中からこんには & 第一村人発見

私は怒っていた。

まっとうな人であつた頃は常に自らの死を望むろくでもない人生を歩み、不死人となつてからは七転八倒の巡礼を半ば強要され、さらに灰となつてからも似たようなものだった。

しかしやつと満足のいく終わりを迎えられ、今度こそ本当の意味で死ぬことができるのだと、私は安らかな気持ちでいたのだ。

それがどうだろうか。また世界の終末なのか？ また私なのか？ 私でなければならぬのか？

私が見る限り、私がこなした役割を代われるだけの、いや更に言えばもつとうまくやつてのけるだろう英雄達はいたはずだ。

何故役目を終えた私をまた担ぎ出すのか。

実績か？ なまじ実績があるからいけないのか？

ならば声高に言い返したい。「新しい挑戦無くして未来無し」と。

新しい時代は新しい者たちの手で作り、紡がれるべきであるのだ。

そんな大層な理屈を抜きにしたって、私は元々死にたがりなのだ。

希死念慮はなりを潜めて久しいが、世に對しつゝい斜に構えてしまう程度には不健康な人間である。

要するに、これ以上の厄介事は「勘弁してほしい」のだ。

私を眠りから覚ましたのはいったいどのどいつだ。また付近を散策しないといけないのか？ 私は、さして興味の湧かない事情を聞いたうえで黒幕をとつちめてやる、とばかりに己の収まっている棺の蓋を怒りに任せて跳ね除け——。

「やあ」と挨拶代わりに肩を叩けるほどの距離にいた亡者（？）と目が合った。

気がついたらソウルから『ブロードソード』を手元に生成し、首を刎ねていた。反省はしている。後悔はしていない。

男の名前はブリニョルフと言った。

数年前に、男の所属する互助組織の『盗賊ギルド』で反乱騒動があった。

反乱自体はたった一人の幹部が引き起こしたものだだったが、そこで暗殺されたギルドマスターの喪失はあまりに大き過ぎた。

彼は盗賊として一流の技術を持つだけでなく、知識と知恵と諧謔に富み、あらゆる人を惹きつけた。

それは配下のギルド構成員のみならず、距離も立場も遠く離れた外部にまで協力者を作るほどであった。

ギルドの大黒柱であった彼が殺害されたことによつて、ギルドは壊滅状態にまで陥つた。

人員についても、古参の幹部を含めて少なくない者が逃亡し、絶対数が不足している。外部協力者との関係の多くは、ギルドの伝統の他、先述のとおり亡きギルドマスターの個人的な手腕と交友関係により築かれていたため、彼らも手を引く気配を見せている。

おそらく、それがきっかけとなり、ギルドの衰退は加速度的に進むだろう。

ブリニョルフはどうかそれ食い止められないかと、今も拠点である『リフテン』から比較的近い古代『ノルド』の墳墓へ忍び込み、宝物を手に入れようと企んでいる最中である。あるのだが……どちらも、困難極まりない。

一握りの傑物により権勢を誇った組織というのは、一度転ぶとたちまちの内に底まで落ちていくものだ。

再び栄光を取り戻したいのならば、取つて代わろうとする新参者共の頭を押さえつ

け、確実な仕事で信用を回復させ、そして何より財力や権力といった腕力を取り戻す必要がある。

それを成し遂げるには、言うまでもなく数々の困難が付き纏う。落ち目のギルドからすれば並大抵のことではなく、事実上『不可能』と言つても過言ではない。

そして墳墓の宝物奪取についても同じことだ。

男は隠密行動には格別な自信があつたし、荒事についてもそれなりのものと自負していた。

しかし墳墓の最も厄介な点は、敵として立ちはだかる者の多くが『ドラウグル』と呼ばれる死者であることだ。

かの死者達はある程度の損傷を与えれば打ち倒すことができるが、生者のような明確な急所が無い。

頭部を斧でかち割ろうとも、胸を矢で射抜こうとも、腹を剣で切り開いてやろうとも、活力とも言うべきものが尽きるまでは動き続ける。

手足の腱など人体の構造上欠損しては動けなくなる部位を断ち切る、といった有効な手段もなくはないが、それも戦いが長引けばいつのまにか修復されている。

すると男の取るべき手段は、隠密行動に徹して出来得る限り交戦を避け続けるか、死者独特の察知能力を掻い潜り不意をついた上で致命傷を与える、この二つとなる。

つまり、掃いて捨てるほどいるドラウグルの群れを突破して宝物を奪取するとなれば、かなりの無茶無謀を繰り返す必要があるということだ。

それでも、男はその危険な仕事に挑まなければならなかった。

もうギルドの衰退は避けられない。それを少しでも緩やかにし、復活の時期を少しでも早めるためには、ここが踏ん張りどころであるのだ。

ケチなスリ仕事では間に合わなくなる。

男は、ブリニヨルフは、必死であった。

ブリニヨルフは慎重に行動した。

ドラウグルの中でも比較的与し易い相手を一瞬で無力化し、手強い相手は隠れてやり過ごす。

古代ノルド人の悪辣な罠を解除し、意地の悪い謎掛けを解いて、少しずつ目的地である最奥の間へと近づいていた。

順調だ。何度「クソツタレ」と悪態をついたかわからない苦労を越えてここまでやってきた。さあ、あと一踏ん張りだ。

おそらく宝物が収められているであろう広間への最後の大扉を前にして、気合を入れ直した時 —— 違和感を覚えた。

原因は大扉の向こうから聞こえる小さな音だった。澄んだ音に鈍い音。聞き慣れた剣戟の音だ。

始めは自分の侵入が扉を隔てて察知され、ドラウグル達が猛り待ち構えているのかと背筋が冷たくなった。

しかしそれでは剣戟の音にはなるまい。古代ノルド人は現ノルド人と同じく、猛り声を上げたり盾を得物で叩いて威嚇するのだ。

ではこの事態は何だ？ 撤退すべきか？ いや、予想外の事態とはいえ危険かどうかも確認せずに帰ったのでは、ここまでの苦勞が報われない。

多少の危険を犯してでも、せめて何が起きているか自らの目で確かめなくては。

ブリニョルフは大扉をほんの指一本分だけそつと開けると、縦にも横にも上にも空間がとられた広間を目にし、そして、絶句した。

広間の中心では、一人の男が大勢のドラウグルを相手に大立ち回りを演じていた。

重厚な刃を持つ斧槍で目の前の一体を叩き割ったかと思えば、そのまま前転して後ろに控えていた数体をまとめて薙ぎ払う。

豪快な立ち回りを見せた次の瞬間には、何処から取り出したのか盾と片手剣に素早く持ち替えている。文字通り、敵対者へ死を運ぶデスロードが手にする黒檀の両手剣と相対すには明らかに重量も厚みも足りないが、軽々捌き、腕と首を刎ねる。

ただの力自慢ではないと見ていてすぐにわかったが、よくよく観察していればそれ以上の戦上手だと理解できた。

派手な立ち回りも、技巧を凝らした挙動も、見栄えのためではなく全て必要であるから行っているのだ。

その証拠に、ドラウグル達は十重に二十重に男を取り囲んでいるにも拘わらず、常に攻めあぐねている。

仲間の身体が邪魔だ。仲間の得物が邪魔だ。折り重なった仲間の死体が邪魔だ。

男は、広間にある地形を活かし、時には自ら有利な状況を作り出し、一度に相手取る数を限るよう常に敵を誘導している。

ブリニョルフは混乱した。この光景は何で、あの男は何者であろうかと。

もし、あの場にいるのが自分であればどうだろうか。いや、あんな立ち回りはできない。膂力が違うし、そもそも自分は隠密行動を至上とする。あんな大勢に囲まれた時点で終わりだ。

観戦者の乱れた思考などお構いなしに、ついには最後のドラウグルが倒された。

ブリニョルフは自分が唾を飲み込むことすら忘れていたことに気がついた。

男には、激闘と呼べる戦いを終えても疲労困憊な様子が僅かにも見られない。なんと
いう強靱な戦士だろうか。

どうする、このまま様子を見るか？ それとも接触を図る？ もしそれで敵対されたら？ 逃走は……いや、まず失敗して自分は死ぬだろう。姿を見せて友好的な態度を示したとして、敵対されない保証はあるのか？

ええい馬鹿か俺は。保証なんぞあるわけが無い。決めるんだ、今、すぐに。ぐずぐずして状況が好転することなんてこの異常事態にあるはずが………奴が弓をこちらへ向けている！

駄目だ！ 考えている暇はない！ 既に奴は俺に気がついていて。俺の隠密を見破った？ いやそんなことは今どうだっていい。とにかくすぐに姿を見せて敵意が無いことを伝えなければ。そして加勢しなかったことを詫びるんだ。それしか俺が生き残る手段は無い！

ブリニヨルフは両手を上げたまま、胆力を振り絞って大扉から広間へと歩を進めた。「待つてくれ！ 頼むから射たないでくれよ？ ……やあ、その御仁。優秀な戦士たる君には先の戦いでも物足りないのかもしれないが、生憎と俺は敵じゃあない。第二試合はまたの機会ということで、どうかその弓を下ろしてくれないかな？」

目が覚めて反射的に眼前の亡者（？）を殺めてしまつてから思った。

……………これは、多分、違うな？

時代を遡ろうが降ろうが、武器や衣服にはそれなりに文化というものが現れる。

それを鑑みるに、目の前の亡者（？）の鎧は見知らぬ上に馴染みがない。おお、新しい世ではこんな意匠が流行っているのだなあ、という感じがしない。

ついでにいうと多分、亡者ですらない。

私達、不死人は、人間だ。追ひ立てられようが、生き返ろうが、誰が何と言おうが人間なのだ。

しかし目の前のそれは不死人の成れの果てである亡者ではなく、動く死体であると直感的に理解した。

つまり、ここは自分の見知った場所ではないぞ、と。

或いは、新しく熾つた火の時代では私の知るそれと様々な差異が生じているのか、と考えもしたが……今はわらわらと集まつてくる死体共の処理が先だ。

下つ端らしい粗末な装備の死体から、^{いかめ} 厳しい装備の精鋭らしき死体の姿も確認できる。

……どうも『銀騎士』を思い出すな。あの身形のいい死体はちよつと嫌いなヤツだ。皮肉を込めて、便宜上『上級死体』としよう。

死体とはいえ、別に頭の中が腐りきっているわけではないらしい。きちんと連携をとって攻めてくる。なればこそやりやすい。

まずは下つ端共を『ハルバード』で吹き飛ばす。囲まれているのだ。自分が下るより相手を下からせて空間を確保するほうが手っ取り早くて安全だ。

そこに上級が切り込んで来たため、すぐに『塔のカイトシールド』とブロードソードに持ち替える。一太刀躲し、二太刀躲し、見切つたと確信を得たために三太刀目をシールドでパリイする。

一瞬、上級が呆けたような顔をした気がした。動く死体にも感情があるのだろうか？ 頭の隅で考えたが、身体は動きを止めずに致命の一撃を叩き込んでいた。

その後も、極力一度に多数を相手取らないよう立ち回り、なんなら一時的に足を止めて死者共を倒し続け、死体を重ねた簡素な障害を作ってみたりもした。

広間の石壁。階段。石机。そして斬りつける度に増える動かない死体。いくらでも利用できる物はある。

この程度の群れにやられているようでは、巡礼者も灰も務まらない。

全体の半分ほどを片付けたあたりで、死体連中の力量をおよそ把握した。そのため、以降は作業の様相を呈していたが……。とうとう最後の一体の首を刎ねた。

そして「やつと終わったか。ああ面倒だった」と気を抜いた時、残心を忘れていた事実に、後悔の念と激しい怒りを覚えた。

たしかにぬるい相手ではあった。しかし、見える範囲の敵を倒したことで油断し、何度痛い目に遭ったと思っているのか。

敵は狡猾だ。見えにくい物陰に潜んで、こちらの隙を窺っているかもしれない。

例えば………目覚めたときに比べて若干開いているように見える大扉とか！

取り敢えず『フアリスの黒弓』を構えてみる。別に勘違いならそれでいい。徒労で安全が買えるのなら安いものだ。

構えたまま待つ。敵が焦れて姿を見せるなら儲け物。何か仕出かす前に射殺してやる。

しかし実際には私の予想を裏切り、敵の姿より先に人の言葉が聞こえてきた。

「待つてくれ！ 頼むから射たないでくれよ？」

なんとまあ。まさか動く死体共の巣窟に生者がいるとは。いや、アレも巧妙に化けた死者なのか？ その可能性は留意しておいたほうが良さそうだ。

話が進まないの、ひとまず生者であろう男の様子をみる。

「やあ、その御仁。優秀な戦士たる君には先の戦いでも物足りないのかもしれないが、生憎と俺は敵じゃあない。第二試合はまたの機会ということで、どうかその弓を下ろし

てくれないかな？」

明らかにこちらを警戒しているが、これは敵対心よりも恐怖によるものではないかと思われる。私とて、これまで化け物だけを相手に戦い続けていたわけではない。人や人に近い者達とも、数えるのが馬鹿らしい程度には相対してきた。

その経験から思うのだが、目の前の男に今すぐ私と敵対するつもりは無いのだろう。どちらかと言えば、こちらを刺激しない用心がうかがえる。飄々とした言い回しは、生来のものか舐められないためのハツタリか。

「そこで生まれ。まず一つ、お前は誰だ。二つ、その扉の向こうで何をしていた。三つ、この死者の巣窟に何故生者がいる。答える。こちらはまだ、お前が敵かそうではないか、判断しかねている」

「俺としては君が用心深い性格で助かったよ。阿呆相手では会話が成り立たないからな。……俺の名前はブリニョルフ。この墳墓にとあるお宝の話聞きつけてやってきた、ケチな『冒険者』だ。明言するまでも無いが、敵対する意思は無い。

大扉の向こうで何をしていたかは、正直言いつらいな。君の戦いを、ただ見ていた。加勢しなかったことについては、全面的に謝罪しよう。

言い訳を聞いてくれるのなら言うが、俺程度の腕じゃあ、かえって君の足手まといになりかねないと思つたんだ。先程君を『優秀な戦士』と評したが、そいつは世辞でもな

んでもないんだぜ？」

……おそらく、この言い回しは性格だな。伊達男といった風だが、微妙に損をしそうな感じでもある。主に、同性相手に。

とはいえこちらの誰何に対して素直に応じ、目的を話し、直近の行動についても釈明した。

正直なところ、自分以外に誰かいるとは思っていなかったので加勢云々はいつでもいいのだが、「全面的に謝罪」とまで言うのだから、少しくらい高圧的に出てもいいだろう。こちらにも、舐められないためのハツタリは必要だ。

「わかった。お前が妙な真似をしない限り、武器を向けないと誓おう。それで、そのお宝とやらは見つかつたのか？」

「まずはありがとう。そして肝心のブツなんだが………君が積み上げたドラウグルの下に、石の棺が無いかい？　そこに収められているはずなんだ。所有権はこの広間のドラウグルを一掃してしまつた君にあるわけなんだが、俺にはそいつがどうしても必要でね。できれば交渉させてもらいたい」

石の棺……死体をどかしてみると、それらしい物があった。正直、長椅子か何かだと思つたから雑に扱つたのだが、宝箱だつたとは。最悪、ハルバードで叩き割つていたかもしれない。危なかつた。

ブリニョルフの言う通り見つかった棺を開けると、そこには金貨や宝石、綺羅びやかな武具といった財宝の山。そして一際大きな輝石の嵌はまったペンダントが収められていた。

この広間の死者共は、これを守っていたというわけか。

ペンダントを良く見てみる。素人目にも美しいとは思うが、私の身に付けている指輪と違い、特別な効果があるようには思えない。

ただ、台座に家紋のような紋章と、それを囲むように文字が彫られている。……読めないが。

「そう、まさにそのペンダントが『お宝』だ！ 古代ノルドの王家に伝わっていた代物だね。『付呪』が施された『アミュレット』とは違い特別な効果は無いんだが、好事家連中は伝説級の品として、そいつを文字どおり血眼になって探している。売れば一財産間違いないんだ。

……それでここからが本題だ。先程の戦いぶりを見て確信したが、君はまず間違いない俺の勝てる相手じゃあない。

絶対に敵わない相手の手中に、絶対に手に入れた品がすっぽりと収まってしまった。そんな悲劇的な俺はどうするのか。聞ける頼みならなんだって聞くしかないのさ。

まず、勿論金は適正な額を払う。そしてそれでも足りなければ、俺自身を売り出した

い。俺は君には及ばずとも、この広間まで一人で辿り着くだけの腕前だ。

更に外へ出れば、こう見えてなかなか顔が広くてね。君が欲しい物、成したいこと、それらの力になれると思うんだが、どうだろう？ 自分で言うのもなんだが、お買い得だと思っぜ」

このペンダントにそんな値打ちがあるとは。

しかし、ほいほいと奴の口車に乗るのも危険だ。自慢ではないが、私は知恵の回るほうではない。回転も速くない。口の上手な奴の言うことに大人しく従った結果、まんまと騙された、などということにならないとは言えないのだ。

「……悩ましいならもう一つ売出し文句がある。君は俺がそのペンダントについて説明するまで、そいつが何か知らなかったように見える。これは想像だが、君はそいつを適切な値段で売り捌く伝手も持っているだろうか？ 君にとってどうかは別として、偉業とも言える激闘の末に勝ち取った戦利品を、商売人のくせに物の価値のわからない愚図や、悪意を持って近づくと卑怯者に、けして買ひ叩かれなれないと言ひ切れるだろうか？ 賢明な君ならどうするべきなのか、すぐに最適な答えへと辿りつくだろう」

「……………どうも先刻からうまく言いくるめられている気がしないでもない。だがこの男の言うことも道理である。」

私がこのペンダントを町に持ち帰って、奴以上の値と安全性を保って売り捌けるかと

いえば、はつきりと言える。否、だ。

まあ、ブリニョルフ氏が奴自身の言う卑怯者であり、「適正な額」とやらが真実なのかどうか、私には見極める手段が無いのだが。

しかし、しかしだ。多少の損を勘定の内に入れてよく考えれば、この展開は願ったり叶ったりなのではないだろうか。

見知らぬ場所に放り出され私。目の前には、警戒くらいはしても表向き敵意を向けない、それなりの玄人が一人。ついでに自称「顔の広い男」ときた。

実に便利そうだ。

まずは自分の置かれている状況が見えてくるまで、奴を使って情報収集するのが得策ではないだろうか。

拾い物のペンダントでそれが叶うなら、それこそ儲け物だ。

……多少、油断ならない気配を醸してはしているが、そこは用心していればなんとかなるだろう。少なくとも腕つぶしでは負けないと思われる。何せこちらは神殺しだ。目の前の男が鼻歌まじりに神を殺して回る異常者でもない限り、問題は無い、はず。

「いいだろう。というか、私からも提案がある」

こちらが交渉の席についてたことで気を良くしたのか、奴の纏う空気が若干軽くなった。そのうえで、どんな提案かと催促される。

「本題の前にまず確認だが、お前が所望するのはこのペンダントだけで、他の財宝はこちらの懐に納めて構わないか？」

ブリニョルフの頬が若干引きつるが、承諾された。交渉で揉めるべきではないと思つたのか、その他の財宝を手放してでも入手する価値のあるペンダントなのか。おそらく後者だろう。彼ははずつとペンダントの話しかしていかない。それ以外は追加報酬といった類のはずだ。

「それから、自分は有り体に言つて迷子だ。近くの村か、できれば町までの案内を希望する。お前がそれを飲むなら、その場所まで到着し次第ペンダントを渡そう。ペンダントの代金は案内を以て帳消しとする。私だつて人目のあるところで揉め事は起こしたくない。ある程度は安心できる話だと思うが、どうだ？」

私が「ペンダント代金は実質タダだ」と口にしたためか、奴は怪訝な顔色を見せる。何か裏があるように思ったか。迷子発言にも訝しいものを感じ取つたかもしれない。少し考える様子を見せた。

私としては面倒な交渉は切り上げて話を進めたかつたために、「あまり欲を張るものではない」とは亡き母の教えでな。自分には残りの財宝がある。十分だ」と付け足すと、納得し、快諾してくれた。

彼にも良き母がいたのだろうか。

「いいだろう、交渉成立だ。君が桁外れの暴力性に十分な理性を伴った戦士で助かったよ」

褒めているのだろうが、奴の軽口を聞くと少々心外な評価を下されているように思える。

とはいえ、交渉も成立したのだ。いつまでも「お前」だの「奴」だのというものな……。「では改めて頼む、ブリニオルフ」

私が初めて名を呼んだことで、協力関係を築けたと思ったのだろう。案外可愛い顔で破顔して（こういうのがきつと異性に好かれるのだ）、「ああ、兄弟！」と返してきた。気さくな男だ。

「さて、そうと決まればさっさと移動しよう。財宝を回収してくれ。出口の見当は付いている。交渉ではだいたい譲歩してもらったからな。道案内でくらは役立ちたい。先に行……」

ブリニオルフの行動が迅速なので、遅れないようにと慌てて財宝の類をソウルに還元した。『ゴミクス』でさえ還元して持ち運べるのだ。況んや財宝をや、だ。

「これは、まいったな。『同胞団』にも勝る純粋な戦士だと思っていたのに、魔法使いでもあるのか。いやはや、敵対しなくて良かったとつくづく思うよ。ついさっきの自分を全力で褒めてやりたい」

……常のとおり
の行動であつたが、
これはやつてしまつたか？

二、ヒト?

ブリニヨルフの反応を見る限り、ソウルの業は、この地では一般的ではないようだ。

……いや、しかし、待つてほしい。少しだけ、弁明させてほしい。

誰に許しを請うのかも不明だが、余裕が無くいわゆる「テンパった」状態の精神を鎮めるために、自分への言い訳が必要だ。

一つ。私は、この何処ともわからぬ地へ放り出されたばかりだ。

一つ。状況の確認もできないまま、いきなり戦闘が始まった。

一つ。戦闘が終わったと思ったら、今度は曲者らしき人物との交渉が始まった。

一つ。自分なりの妙案を思いつき、交渉もまとまり、ふと気が緩んだ。

一つ。ブリニヨルフが急かすように動いたため、私にとつては常の如くソウルの業を使用した。

……つまりことの大半は不可抗力とブリニヨルフの非である。私のやらかしでは無い。状況整理完了。多少の鎮静を得る。

とまあ冗談はさておき、彼は彼で私へ好印象をもたらそうと、面倒事を引き受けるべく積極的な行動に出たのは理解できるので、誰を責めるだのという話ではないのだが。

都合の悪い話題はここまで
閑話休題。

過ぎたことを悔いても仕方ないので建設的に思考を進めよう。

彼の反応から察するに、少なくともこの近辺でソウルの業を使うものはいない……というかソウルという概念が無いのではと思われる。

よつて、私に一切の非が無いとしても、やらかしてしまったことは間違いないようだ。そして、ここが私のいた世界と概念的にも地続きな土地ではないことを示す証拠でもある。

火の時代かどうかは一度横に置いて、私の知る世界においてソウルが一切認知されていないなどということがあるのだろうか。いや、あるはずがない。

ソウルとはこの世を為す全ての根源とも言えるものだからだ。それが物質であれ、魂であれ。

そも、ソウルの業は別に不死人の特権ではない。不死人であれば必ず使えるが、不死人でなくても「使える者は使える」程度には使用者がごろごろしている。

でなければ、不死人を狩るロイドの騎士など存在もできまい。

仮に連中がソウルの業を持ち合わせていないのならば、いくら護符を用いて『エスト瓶』を無用の長物へ変えるとはいえ、ソウルを取り込んだ不死人と生身で決闘など気違い沙汰だ。自らにのみ回復手段を確保したところで、地力の差は如何ともし難い。

私のように、新米不死人の内に捕縛されるならまだしも、騎士団に捕捉され決闘騒ぎとなるからには、不死人となつてから多少の時間は経っているだろう。

シースに連なるソウルを用いた魔術の研究、教育機関である『竜の学院』も同様だ。ソウル無くして、如何にして学院が成り立つというのか。

また、懐かしのジークリンデ嬢も、不死人であり多くのソウルを取り込んだであろう屈強な『カタリナ』の騎士たる父君を殺害せしめた。

彼女のその後の消息は不明だが、故郷へ帰ると口にしていた。彼女自身は不死人ではなかつたのだろう。

……彼女が自らの命を絶つて「魂が還る」という意味であつたり、カタリナという陽気者の多い国が不死人を許容する異端国家でなければの話だが。

要するに、ソウルとは空気や水と同じく当たり前に存在するものなのだ。私が先程、ソウルの業を使用したことから、それは確かだ。そして、それを目撃した程度で目を見開いているブリニョルフこそ、ここが私の知る世界ではないことを雄弁に物語っていると言える。

と、なると、だ。どうかかこうにか誤魔化すべきだろう。

私は出来がよろしくないと自覚のある脳を全速回転させ、会話の糸口を探した。

そういえば、ブリニョルフは「魔法」と言っていた。ひとまずはこれに便乗しよう。

「……昔、少々かじってな。いくつかの魔法が使える。ただ、それが仇となって今では迷子になってしまっているわけで、あまり自慢できるものではないのだが」

「どうだろうか。我ながら会心の言い訳と思える。一般的ではないソウルの業を誤魔化しただけではなく、何故見知らぬ土地で迷子になっているのかも臭わせている。」

ブリニョルフの様子も「得心がいった」というふうに見える。

魔法の研究だが高んだかの際に暴発し、転移事故のような事態が発生した。そのように解釈してくれていることを祈ろう。

「なにはともあれ良くやった私。『ジークの酒』を空けたい気分だ。」

「称賛するよ、凄いな。その魔法があれば、物の重量や体積を無視して運べるのかい？」

「……そうか。いや凄い。俺も似たような技や装備を持つてはいるが、あくまで少し便利、といった程度だ。羨ましいよ」

彼に肯定の相槌を打ち、素直に称賛を受ける。その後も移動しつつ、「あの武器の持ち替えも魔法なのか？」などといった具合に色々質問が飛んで来る。

私にとっては当然の技術であるので妙に面映い。しかし、現状唯一の協力者である彼には私をデキる人間だと思わせておいたほうが良い気がする。

彼が実は腹の底で溶岩のような劣等感を抱えていない保証は無いが、おそらく他者の有能さを素直に受け入れられる人間だと思ったからだ。

それは同時に、彼自身に矜持と自負があることを意味する。少なくとも私はそう感じている。

……どうも私は、会ったばかりのブリニヨルフなるこの男を気に入ったらしい。

その後もあれこれと話をしながら、私達は広間から墳墓の出口へ向かつて進んで行った。

体感的かつこの世界の基準が不明なのでなんとも言えないのだが、広間から出口までは随分と安全かつ迷いにくい一本道に思えた。

ブリニヨルフに聞くと、曰く「そういうもの」らしい。

入るには並々ならぬ試練が待ち構えているが、出るにあたっては特に何も無いのが通例だとか。場所によっては、更に宝箱があったりすると。

彼はそれらしい物が見当たらず、若干残念そうであった。

墳墓を作るにもお約束が必要なのかと思いましたが、考えてみれば墳墓建設作業員を安全に外へ出すためには、あつて当然の通路だ。

古代ノルド人とやらは、少なくとも権力者の墓に民たる作業員を生き埋めにする趣味は無かつたようだ。

一瞬、あの動く死体共がその成れの果てかと思考がよぎつたが、連中は曲がりなりに戦士であつた。おそらくは墓の主^に死後も仕えんとした誇りある従者達のはずだ。

出口にある仕掛け扉を開け、墳墓から脱出した。

その際、ブリニョルフが隠された扉開閉用の小さなスイッチを容易く見つけ出したことに感心した。言うだけのことはあるようだ。

と、同時に、私の中で「古代ノルド人は性根がひん曲がっている」という偏見が生まれれた。

墳墓を攻略されたのならば、大人しく勝者を通らせたまえよと。何故仕掛け扉なのか。何故開閉スイッチが小さく、見つけにくい物なのか。

一矢報いるにしてもせせこましい。

暫し空気の滞留した空間にいたせいだろうか。扉から吹き込んでくる清涼な大気が心地良い。

見れば、空が白んで、もう直に夜明けだという時刻だった。

思えば不死人となって以来、永く黄昏の中で足掻き続けてきた。昼間の景色は目にも、払暁などいつぶりのことであろうか。

あまりに長く忘れていた光景だけに、懐かしさよりも新鮮さが勝る。

「ああ！ この瞬間は堪らないな！ 埃っぽい『ダンジョン』を抜けて澄んだ空気を胸いっぱい吸い込む開放感！ 時間も丁度いい！ なあ、兄弟もそう思う、だろう……泣いているのか？」

言われて気がついた。涙が、勝手に、ああ止まらない。

悲しい、わけではないと思う。美しさに感じ入った、のかもわからない。わからないのだ。何故、自分が泣いているのか。

しかし黙っていては妙に思われよう。何か話さなければと初めに思い浮かんだ景色を元に、口を開いた。

「故郷で見た景色に似ていたものでな、思い出していた。ろくでもない私を包み込んでくれた家族と友人を。なんと贅沢なことであつただろうかよ。あの頃、朝日は憂鬱さの象徴でさえあつたのに、今では耐え難いほどに焦がれる。……みつともないところを見た、忘れてくれ」

「……ご家族は? ご母堂についてはちらと聞いたが」

「うん、流行り病でな。友人を含め、皆まとめて死んでしまった」

「そうか、悪いことを聞いたな。……なあ、兄弟。色々驚くことがあつて後回しになつていたが、君の名前を覚えてくれないだろうか? そして君の大切な人達の安息を、俺と兄弟の神に祈らせてほしい」

律儀な男だと思つた。そして優しい男だとも。随分と警戒心が薄れていることを自覚しながら、言われるがままブリニョルフに名を告げた。

「ノメイだ。あまり名前では呼ばれないから、好きに呼んでくれ。私の神については結

構だ。幾柱も打ち倒して来たせいかな、あまり信じる気にはなれなくてな。強いて言うなら太陽信仰、になるのかな？ 友人に誘われた」

ブリニョルフは神殺しについて「君なら本当にやってのけていそうで笑えない」と言葉とは裏腹に苦笑した。

そして跪き、太陽と、私の知らない名の神に、「ノメイのご家族とご友人の」と言つて祈つてくれた。

嬉しかった。

いくら気分も落ち着いたところで、彼が切り出した。

「さて兄弟。ここから最も近い村と言えば小さな開拓村があるんだが、俺としては一度そこで休息を取つてから、『リフテン』という町まで案内したいと思つてる。五大都市の一つだけあつてそれなりに賑わっているし、その中では最寄りだ。何より俺の拠点もある。不肖ブリニョルフとしては、是非、兄弟を歓迎させてほしいと愚考するわけなのさ。

兄弟だつて、不自由の多い寒村に置いていかれるより、色々と揃つている町のほうがいいだろう？ ああ、ペンダントはリフテンに着いてからで構わんよ」

彼の提案は魅力的だった。言う通り、村か町か、他所者にとつてどちらが便利かと言えど考えるまでもない。

村で牧歌的な生活を送りたければ、それ相應の準備ができてからでいい。少なくとも今ではないだろう。

しかし私としては否やは無くとも、彼はそれでいいのだろうか。

ペンダント譲渡の条件は「村か町までの案内」であるのだから、「絶対に手に入れたい」とまで口にする報酬はなるべく早く入手し、安心したいと考えるのが人情ではないのだろうか。

そのあたりを尋ねてみると、ニヤリと不敵に笑いながら返された。

「勿論ペンダントは喉から手が出るほど欲しい。でも短い付き合いとはいへ、兄弟は約束を破る男には見えない。そいつは必ず、俺の手の中にすっぽりと収まることだろう。

それに、少し考えていることがある。これはもう少し兄弟のことを知ってから話そうと思うんだが、それについてもリフテン行きのほうが都合がいいのさ」

何やら思惑があるようだ。しかし彼が良いというのなら私に否やは無い。

私達は早速、第一目的地である開拓村へと向けて出発した。

—— 獣道すら無い森の中を進んで。

「なあ兄弟？　ここのうときは普通、街道か、それに近いものを通るのが定石ではないの

か？ 出発していきなり森の中では、流石に少し不安になる」

「おや？ 回り道をして街道に出るより、直線的に行軍したほうが君好みかと思つたんだが、違つたかな？ 実際、体力や腕つぶしに不足がなければ、こちらのほうが圧倒的に速い。というか、開拓村なんて辺鄙な場所では、満足に道が整備されていないことも多いからな。仕方ない面もあるのさ」

言わんとすることはわかるのだが……。それに、小さく零した「街道ではいけ好かない連中と鉢合わせることもあるからな」という言葉が気になつた。なんだろう、白教徒でも出るのだろうか。

実際、彼の言う通り体力にも戦闘力にも自信があつたし、私はともかく彼を休ませてやりたいと思ひ、早く目的地へ着きたいというのも同感だつた。

どうもこの男、『おとこのこの意地』なのか面子なのか交渉時を考慮してなのか、疲労困憊なのを私に隠し続けている。

考えてみれば、私が目覚めたあの動く死体だらけの墳墓を一人で攻略したというのだ。疲れていないわけがない。

それなのに……いや、私に「取るに足らない男」だと評価されまいとしているのか。故に見栄を張る。

張るのが見栄どころか虚勢に変わり、何か不手際を起こしたとなれば評価は地まで落

ちるところだが、今の所その様子もない。

好意的に受け取るならば、彼なりに私のことを買っているがための行動なのだろう。私は案外、こういうのが嫌いではない。

「体力に不足がなければ」などと発言が矛盾するようであるが、彼がそれで良いのならば良いのだ。

それに、整備された道を長く歩きたいか、「なんだっていいとつとと休ませろ」と思ふかは人それぞれだ。私はどちらかと言えば後者であるし。ここでも否やは無い。

しかし……墳墓で後ろに付いて歩いていたときから思っていたが、この男の身のこなしは亡き友人を思い出す。

自らを盗賊だと堂々と公言していた彼は、物音を立てないよう歩く術を身に着けていた。

眼前の男は彼ほど静かには歩いてはいないが、それは技術の未熟さを表すものではなく、私に手の内を隠さんとするが故に思える。

実際、この手の技術は盗賊か暗殺者の得意とするところだ。いわゆるまつとうな連中には必要の無い、もしくは嫌悪すらされかねない技術である。

この男は、先程私に「冒険者だ」と名乗った。おそらくは賊働きも生業にしているのだろうが、出会ったばかりの人間がどのような性質たちなのかもわからないまま、自らの事

情を詳らかにする阿呆もいないだろう。

亡き彼のアレは、人としての器の大きさの為せる業であったのだ。普通はしない。私だつてしない（というか、出会いが牢屋であったことが大なのだろうが）。

目の前の男は、「少し考えていることがある」とも口にした。事前に臭わせるのだからこちらにとって然程不利益になるとは考えづらいが、彼が正しく盗賊の類であるならば、なるほどそのあたりの事情を話すのは出来得る限り『私』という人間を見極めてからにしたいだろう。

今は、少し気に入ったこの男を信じてみることにする。

「付いてきているな？　直に道が開けて簡易な木柵が見える。そうすれば、我らが憩いの場へ到着だ」

考え事をしながら歩いてきたためか、いつの間にかそれなりの時間が経っていたようだ。第一目的地である開拓村は近いらしい。

なるほど、木の伐採跡がまばらに見える。樵は木を障害物とは見なさず、資源として計画的に伐採すると聞いたことがある。開拓村が拡大するにつれて村の付近は伐り尽くされるのだろうか、まだその段階では無いらしい。

更に考え事を重ねたせいか、既に木柵が見える距離まで近づいていた。そしてそのすぐ手前で作業をしている人影に気がつくのも遅れた。

私は、今日何度目かの驚きを味わう。

顔が猫の………何だあれは。ひとまずファリスの黒弓だ。

森の中を足早に移動しながら、ブリニョルフはチラリと後ろを振り返る。

特別、悪路を歩くことに慣れているというふうにも見えないが、男はしっかりと足取りで自分の後ろをびったりと付いてくる。

広間での戦闘を目撃して、男が恐るべき戦士であることは理解した。足取りを見るに、戦闘のみならず、単純な体力にも秀でているのだろう。

その後の交渉を経て、阿呆でもなく、こちらを騙す悪知恵を働かせる類の人間でもないと判断できた。

その手の輩は、実際にことを起こさずとも、カモがいなか、うまい話の種がないかと常に思考しているものだ。そこから滲み出る悪臭は、自分ならすぐに感付ける。何せ似たような臭いを自分も発しているのだから。

逆に、こちらが同類だと気が付けないような間抜けなら、遠慮無くハメてやるどころだ。ブリニョルフは生半な同業者者に対する容赦を持ち合わせていない。

そしてブリニョルフの目を最も惹きつけたのは、あの不思議な魔法だ。

はつきり言ってインチキだと思った。男の実力が偽りだと言うのではない。ただ「不公平じゃないか？」と神に愚痴を零したくなる程度には、インチキ臭い絶対的強者だと思っただのだ。

魔法それ自体も、自分たちの稼業にとつて素晴らしいものであった。

ブリニョルフが見たことのある魔法と言えば、せいぜい拳大の火球を放つたり、切り傷を少しずつ癒やす程度のものだ。

人を傷つけたければナイフ一本あれば足りるし、傷を癒やしたければ回復薬を携帯する癖をつけておけばいい。

どんなことにでも共通するが、代替手段が存在するものの価値は低い。

しかしあの魔法は違う。格別だと思った。

あれならば、盗品を素早く隠すことができる。持ち込みが禁じられた品を好きに持ち込むこともできる。山程の戦利品を持ち帰るのに手ぶらですむ。

利用の仕方など、それこそ幾通りでも思いつけば思いつくだけ存在するだろう。

どの程度の制約があるのかはまだ不明だ。もしかしたら案外使い勝手の悪いものかもしれない。

だが自分が目にしたときは、一瞬で武器を持ち替えたり、一瞬で財宝の回収を済ませ

ていた。しまい込める容量や出し入れの速度に難があるとは思えない。

あの魔法を見た瞬間、ブリニョルフは当然の如く閃いた。やもすれば、ペンダントなんぞよりも余程価値のあるこの男を、どうにかしてこちら側へ引き込めないだろうか。

ギルドへの加入が無理でも、外部協力者となってくれるだけでも有り難い。

利用するようで悪いとは思いますが、確かな実力者が協力者になったと喧伝するだけでも、衰退しつつあるギルドの現状には大きな効果を齎すだろう。

新たなギルドマスターであるメルセルの了承を得る必要があるが、否とは言うまい。

凄まじい戦闘力に加えて、極めて珍しい魔法まで備えた人材だ。敵対される可能性を一つ残らず潰して、「味方でいるほうが遥かに得だ」と思わせる必要がある。絶対にだ。

もし、かの偉大なるギルドマスターがそんな駆け出しでもわかることを理解できないとほざく愚図なら、最悪始末してやろうかとすら思う。ブリニョルフは万難を排して説得を成功させる決意を固めた。

そのために自分が今すべきは、男に友好的な態度を示し、同時に侮られないよう振る舞うことだ。

乱れそうになる歩行と呼吸を意識して整え、周囲へ警戒を怠らない。

おそらく男は、自分が盗賊稼業を生業にする人間だと勘付いている。

そして、それに対して忌避感を抱いてはいないように見えた。

巧妙に隠しているだけかもしれないが、ブリニョルフから見て男は、内心が顔や態度に出やすい性質だ。

自分が魔法に驚いたとき、明らかに動きがぎこちなくなつたのを見逃してはいない。男もワケありのようだ。

仮にそれすらも演技で、全て男がこちらを油断させ罠にはめるため仕組んだことだと
言うのなら、正しく「お手上げ」である。ブリニョルフは死に、ギルドの衰退は順調に
進む。それだけだ。

ブリニョルフの算段として、今のところ悪印象を与えていないことを前提に次に注意
すべきは、自分を、ひいてはギルドを無価値だと思わせないことだ。

これが失敗した場合、最悪「こんな雑魚共なら皆殺しにして全て奪ってしまおう」と
なつては一卷の終わりだ。

とはいえ、男はおそらく、そう短絡的な行動には出ないとも考えている。

職業柄、それなりに人を見る目はあると自負しているし、その上で警戒を忘れないだ
けの経験と鍛錬は積んできた。

そして、予想が正しければ男はそれなりに善人だ。

夜明けの、世界を切り開くような光を見て流した男の涙は、まじと真のものであつたと思う。

その後、半ば打算で男の家族や友人のために祈ったが、その際、自分に向けられた感謝の念は、涙と同じく真のものだと感じた。

我ながら、随分と入れ込んでいることだとブリニョルフは自嘲する。

「この俺が半ば本気で会ったばかりの人間の会ったこともない家族や友人のために祈るなんて」と。

ギルドを出発して墳墓へ向かうときは余裕も無く、相当に刺々しい空気を纏っていた自覚がある。

だというのに、その後の驚愕が問答無用で警戒心を吹き飛ばしたのか、短いながらも見える為人ひととなりに絆されたのか。

気づけば「兄弟」という呼び方も、妙にしつくりきいている。

初めは距離を詰める計算でしかなかったはずだと、一人苦笑するしかない。

「付いてきているな? 直に道が開けて簡易な木柵が見える。そうすれば、我らが憩いの場へ到着だ」

男の信用を勝ち取るための、まずは一つ目の小さな約束を無事に守れそうだと安堵する。

開拓村へ着いたら寝床を手配して、色々と話をしよう。

そして男の就寝を確認したら泥のように眠るのだ。もうそろそろ限界が近い。「がん

ばれよ、俺」と自らを叱咤する。ここまで来てボロを出しては、何のために意地を張ったのか。

更には、男が目を覚ます前に起きておきたい。ほんの些細なことだが、信用や信頼には積み重ねが大切だと考える。深い眠りになるよう期待したい。

ブリニョルフは、自身の肉体に蓄積された疲労に辟易した。

古代ノルドの墳墓への潜入の後だと、獣避けの木柵でさえ凱旋を歓迎する装飾に思えるものだ。

木柵の側に人影が見える。まずはあの者に声をかけて、村長に繋ぎをつけさせよう。開拓村は何かと物入りだ。幾らかの金銭を払えば、嫌とは言われないだろう。

逆に、寝込みを襲われないよう、男に立木の一本でも倒させてもいいかもしれない。黒檀の鎧を纏ったドラウグルを、数体まとめて枯れ草のように薙いでいた人間なのだ。木の一本くらい、長柄の一振りでも本当に倒してしまえばいい。

男の冗談めいた力の一端を見れば、愚かなことも考えまい。さて、人の第一印象とは馬鹿にできないものだ。

村人へ声をかけるため、人好きのする微笑みを浮かべ、片手を上げて気さくに挨拶をしようとして――。

男が村人へ弓を向けている事に気が付いた。いや、気付くのに遅れたと言うべきか。

「なあ兄弟? もしかしてあそこにいる村人に何か恨みがあるのか? それとも、寢床の確保に村ごと襲つてしまおうと? 今日俺たち二人が出会つた記念日じゃないか。必要以上の荒事はよしておこうぜ。それに強盗はあまり趣味じゃないんだ」

「ブリニョルフ。あれは、あの猫のような何かは、人、なのか? いや人らしくは見える。薪割りをしているからな。だが、猫だぞ?」

男は言つた。「迷子だ」と。不承不承といつた様子で弓を下ろしながらもしきりに尋ねてくるこの男は、どうやら随分と遠くから来た迷子のようだ。まさか『カジート』も知らないとは。

ブリニョルフは思う。これは厄介なのと関わつたかもしれない、と。

三、兄弟

日はまだ高いが、休息用の天幕の中で一人時間を持て余す。

この天幕で明朝まで休み、その後、日没までにリフテンへと移動する予定だ。

村との交渉の結果、村には天幕以外にも食事を用意してもらえなくなった。当然、それなりの対価を払ったが。

その際、対価については私も折半して渡そうとしたのだが、ブリニョルフが「ペンダントの件では十分譲歩してもらっている。これ以上は俺の矜持に関わる。男と思ってくれるなら、それ以上は野暮ってもんだぜ？」などと気障に決めるものだから、私は手を引くしかなかった。

残りの交渉についても、彼に丸投げとなつてしまった。申し訳なく思う。

空き家が無いわけではなかったが、「天幕のほうに夜間に襲撃を受けた場合、早く察知できる」とは彼の談だ（その際、らしい不敵な笑みで「家屋のほうに対処は楽なんだがね」とも。対処について優先度が低いのは私がいるからだそうだ）。

なるほど、相手は懐の温かい旅人二人。襲つて一時金を得ようと魔が差すこともあるだろう。

案外、彼が実際に体験したことなのかもしれない。

村に到着して少し経ってから、彼の勧めで樵の真似事をさせられた。

村人達は大いに盛り上がり、ついではばかりに、薪割りと製材も手伝わされた。元々の目的であるという示威行為になったのかは全くの不明だ。

……これ、おそらくだが襲撃を心配する必要は無いのでは？ 体良く労働力として利用されただけな気もする。

用心にし過ぎるということはない、という点には私も心から同意できるのだが。

村は食うも困って殺伐としている、などという状況とは真逆であった。リフテンという大きな町から遠くない立地もあるのだという。

明日は今日よりきつと良くなる。そう信じている一団だ。見ていて気分が良かった（同時に若干腹立たしくもあった。我ながら狭量なことだ）。

もし「仮にそれすらも演技で、全て村がこちらを油断させ罠にはめるため仕組んだことだと言うのなら」、そのときは彼と二人、存分に正当防衛お楽しみといこう。

……そう、彼だ。ブリニョルフだ。

今の私は、大変、彼と顔を合わせづらい心境にある。先程までの私は、言葉を交わしても視線は合わさないようにしていた。

対象には気付かれなかったものの、村へ到着の際、私は村人に弓を向けていた。反射的な行動だった。

ブリニョルフはそんな私を見て一瞬驚愕の表情を見せ、すぐに落ち着きを取り戻してから私に声をかけた。

私は彼の態度と対象の雰囲気から、化け物の類ではないと判断し、弓を下ろした。

下ろしたが、やはりすぐには納得できなかった。

あえて言おう。「だって人の体の上に猫の頭が乗ってたらめちやくちや驚くだろう？」と。

人の体と異形の体を併せ持った存在は知っている（厳密には『人』の祖である小人とは無関係であるため便宜上の話だが、今は置いておく）。

しかし彼女らは禁忌に触れた結果として、そのような業を背負うことになったのだ。

美しい女性の体と、蟲と、木と。

最も業が深い彼らの母君は、大樹の化け物と化していた。そしてその本体は、大型犬程もある醜悪な芋虫だった。

もはや元が人の形を成していたなどと信じられる者は、それこそ家族である『イザリス』の者たちだけであろう。

また、巡礼者時代にも灰時代にも絵画世界において『鴉人』を目にしたが、彼らは元

人であろうが既に異形と化していた。

あの猫人（カジートと言う種だそうだ）がその類だと思ひ違ひをしてみましたとしても、私の経験を踏まえれば致し方無いことだと理解していただけるだろう。

逃避により話がそれた
閑話休題。

自らの鎮静を図り、自らへ言い訳を重ねている私だが……今度ばかりはやらかしたと自覚している。

ブリニョルフの反応から察するに、件の猫人はこの大陸に当然居るものとして存在しているらしい。

そしておそらくだが、大陸レベルでそれなら、他の大陸、つまり世界に広くその存在が認知され、少なくとも話の上にくらひは拳がるのだろう。

それに対して私が見せた反応はどうだろうか。「そんなものはまるで知らない」と全力で主張してしまった。

これがやらかしでなく、何がやらかしであろうか。

いやだが待て。一応まだ言い訳はある。

私は巡礼者となる折、他の者と違ひ完全無欠の一般市民であったのだ。

それが寝物語に聞く神へ挑む旅をしろと言われる。氣違ひ沙汰だ、イカれ狂人の戯言

だと思った。

しかし本気で実行に移すとなれば、自身の思考も肉体も、文字通り全部を更なる狂気で塗り潰し、順応していくしかない。

身を守るためには、一に用心、二に用心、五も用心と心身に刻んだ。刻まざるを得なかつたのだ。ちなみに三は「殺られる前に殺れ」で四は「推定有罪」だ。

故に、墳墓で死者共（これも、この辺りではドラウグルと呼ぶのだとか）を相手取つた後にも弓を構えて警戒した。

結果としてブリニョルフが物陰に潜んでいたわけなので、私としては自分の行動に正当性を主張する。

そして今回も考えるより先に身体が覚えた動きをまっとうし————馬脚を現したというわけだ。我ながら笑うしかない。

今まで何のために頭を使って会話を繰り返してきたと思つてゐるのだ。

私は巡礼者で灰だぞ？　ン百年どころかン千年、ン万年、下手をすればもつと長い、いや永い悠久の時を文明社会と隔絶されて久しいのだ。

それが何を間違つたか、この地に来て早々に知恵者らしき人物と行動を伴にしている。これはちよつとした精神的負荷を覚えるものである。

ブリニョルフ自身が好ましい人物であつたために、幾ばくかは緩和され、どうにか取

り繕えているだけだ。

ああ、やはり彼と顔を合わせるのは気が重い。年頃の乙女でもあるまいに。だが日に二度のやらかしはなあ……。

村長と諸事交渉を終え、宅を出る。

明朝までの寢床と食事を始め、行商人に売れそうな物をこちらから提供し、リフテンまでの食料をいくらか融通してもらった。細かい調整は金貨だ。

空き家はあったが都合が良いことに修繕が必要な状態で、それならばと開拓村立ち上げの際に使用していたという天幕を借り受けた。

つい今日に絶大な開きを見せた彼我の戦力差を鑑みるに、不測の事態になった場合、優先すべきは対処より察知だ。

それに、天幕を希望することで「旅慣れている」「それほど裕福でもない」と印象付けられれば、より危険は減る。

男自身も、「嫌だ俺はベッドでしか眠れない」と駄々をこねるお坊ちゃん育ちでなかったための選択だ。そんなものを見せられては少々幻滅してしまうが。

ブリニョルフは未来の協力者の心象を僅かにでも良くしておこうと、細々した配慮を重ねていた。

そして思い出したように「彼にも一仕事頼んだことだし」と笑う。

予想では村人達は恐れ慄き、自分たちは腫れ物のように扱われると考えていた。

それがどうだろうか。やんややんやと持ち上げられ、男は随分と便利使いに奔走させられている。

男の冗談じみた力を知る者としては、些か滑稽であつた。そこいらの力自慢とはわけが違うというのに。

というか、その「力」を知る者としては男が気分を害さないかと慌てたものだが、男は困惑しながらも、気の所為でなければ少し楽しそうだった。

気の良い男である。

——— そう、現在最大の問題は渦中の男なのだ。

「常識がない」どころの話ではない。

『タムリエル』の外。いや諸々鑑みれば、更に遠く、全く別の世界から来たと言われとも納得できる。

見慣れない意匠の身なり。見たことの無い魔法。明らかにワケありだろう様子。そ

して欠落した常識。

リフテンも五大都市基準ではやや閉鎖的ではある。交通の便が悪いためだ。

そしてブリニョルフ自身は『スカイリム』中を股にかけて活動する盗賊である。

故に、他の開放的な町を見て、地域差というものが生じるのは十分理解できる。

それらを踏まえ、極論として仮説立てるなら、酷く閉鎖的な土地で、半ば軟禁状態で偏った英才教育を受け、常識を欠いたま『タロス』の如き戦士となった。

絶対にあり得ないとは言えない。この世は不思議であふれている。

しかし神々が創造したもうた『ムンダス』、もしくはこの星『ニルン』の外から来たという妄想のほうが余程得心が行くのも事実。

墳墓から慌ただしく落ち着かなかつたために、日の高い内に休息場所を確保し、男とじっくり話をしようと考えていた。

そしてリフテンの自宅で男の最終的な見極めを行い、うまくことが運べば、ギルドに連れて行って皆に紹介しようとも。

その皮算用の崩れた感触が、ブリニョルフの胃の辺りを締め付けていた。

幸いなのは、男が「おそらく」善人で、「おそらく」こちらへ好意的であるということ。

……不確定要素が大である。

まあ何にせよ話をしてみなければ始まらないと、村長から渡された軽食を持って天幕

に向かった。

「兄弟、いるな？　村長が君の献身的な働きに感動して、供物を用意してくれたぞ。いやあ、善行は積むものだ。夕餉までのつなぎにして欲しいとのこと………君はよく俺を驚かせるのが好きだな？　頭を上げてくれ」

「いや兄弟。村に到着した際のこと、誠に申し訳なかった。君の忠告が遅れ、村人に攻撃姿勢を目撃されていれば、このような待遇は得られなかっただろう。その後の交渉も任せてしまった。すまない、このとおりだ」

ブリニョルフが天幕へ入ると、男が大きな身体を小さく縮めて座り、頭を下げていた。それでは話がしづらいため、楽にしてほしいと言っても聞かない。どうしたものか。

……絶対的強者が恐縮している。いつそ少しづつ見て見るか？

良い方向へ転べばいいのだが。

「ならそのまま聞いてくれ。兄弟、今から俺の思っていることを話す。デカイ独り言だとも思ってくれ。否定も肯定もしてくれなくていい。その上で、兄弟がどう思うか、どうしたいかを教えてほしい」

男はブリニョルフの言葉を、姿勢を変えないまま、聞いている。

天幕へ近づいてくる足音が聞こえる。これはブリニョルフのものだ。

浮かんだ思いは「どうしよう」だ。堂々としていればいい、と戦士たる私が脳内で叫ぶ。いや、まずは苦勞をかけたことを詫びるべきだ、と市民である私が脳内で叫ぶ。

議論の猶予は無く、それでも二派閥が激しく争う内に天幕が開かれ……『私』による強行採決によりまずは頭を下げた姿勢で固まつてみる。

やつてから思った。この姿勢は目線を合わせないのに丁度良いのではないだろうか。やらかしによる羞恥心が晴れるか誤魔化されるまで、このままでいよう。

薪の王も卑屈になったものだ。同じ境遇に至ったお歴々は泣いてもいいぞ。

「兄弟、いるな？　村長が君の献身的な働きに感動して、供物を用意してくれたぞ。いやあ、善行は積むものだ。夕餉までのつなぎにして欲しいとのこと………君はよく俺を驚かせるのが好きだな？　頭を上げてくれ」

供物……匂いからして食べ物だろうか。記憶にある最後に口にした物は友と乾杯した酒であり、他で言えば食事に分類して良いものか迷う『エストスープ』だ（勿論『緑化草』などは除く。あれは一種の強壯剤であり、断じて食べ物ではない）。故に軽食は欲しい。

しかし今だに羞恥心が我が内心の最も上位に居座っているため、顔を上げづらい。何

か話そうかとも思うが、言葉が口をついて出ない。

「ならそのまま聞いてくれ。兄弟、今から俺の思っていることを話す。デカイ独り言だとも思ってくれ。否定も肯定もしてくれなくていい。その上で、兄弟がどう思うか、どうしたいかを教えてほしい」

なんだろうか。混乱した頭では、何を言われるのかおおよその方向性くらいしかわからない。

「まず、兄弟は良い奴だ。会ったばかりなのはわかっているが、俺はそう確信している。俺としては、兄弟とは長く続く友人関係を築きたい。

しかし兄弟は遠く、本当に遠くから来た。

それこそ、広い意味でこのあたり一帯を指すスカイリムなんぞではなく、大陸を指すタムリエルですらなく、星を意味するニルンなんて範囲ですら当てはまらない。

……人が球体である星の上に生活しているのは知っているか？ ああ、うん、取り敢えずそこは置いておこう。昔の上司が色々とういうことに詳しくあったんだ。

とにかくとんでもなく遠くから来た異邦人であることは間違いないと思っている。

ここからが本題だ。冗談みたいな腕つぶしや魔法を持つてはいても、異邦人たる兄弟を町まで案内して、さあ『人里だぞ自由にしてくれ』と別れたところで、兄弟はうまくやっていく自信があるかい？

大變失礼なのを承知で申し上げるが、兄弟が何かしら行動した結果、意図せず人々を驚かせてしまい騒動になる、そんな未来は想像できないかな？

そこでだ、暫くのあいだ、俺に兄弟の生活の世話をさせてくれないか？ その間にこのあたりのことを俺が教えよう。

そして兄弟がもう十分だと思えば、何処かへ旅立つてもいいし、個人的な望みを交えれば俺の仕事を手伝ってほしいとも考えている。

墳墓からこつち、取り敢えず頭に浮かぶのはこんなところだな」

色々と気になる単語が聞こえた。五大都市というだけあって、おそらくは都市国家のようなものが栄えているのだろう。それで、更にそれらを包括する地域をスカイリム。

そしてスカイリムが属する大陸がタムリエル。その大陸がある……星？ 些か理解が及ばないが、ニルンだったか。うん、いくら記憶の整理棚を引つ掻き回しても出てこない単語だらけだ。

これは町に到着しても、すぐさま一人で生計を立てていくのは困難だろう。

むしろ元いた世界でさえ、見知らぬ土地では難しい話だ。

彼のいうとおり、私にはこの世界の一般常識が全く足りていない。

様々な常識が異なる世界においてそれが可能かなど、考えるまでもなく否である。

というか遠い異邦人であるとは流石にバレたか。二度のやらかしを見逃してはくれ

なかつたらしい。

勿論、打算はあるのだろう。「仕事を手伝ってほしい」と言つた。臭わせていた話の全部かはわからないが、おそらくは間違ひあるまい。

盗賊稼業の彼が、自分に世間一般の常識を教え、その間の生活の世話をし、そして彼の後ろめたい仕事を手伝う。

「何処かへ旅立つてもいい」云々は建前だな。……いや、そうとも言えないか？

自惚れでなければ、私を手元に置いていることそのものが利益を生む、もしくは私が右も左も分からないあいだに外堀を埋めておく。

やりようは如何様にもあるはずだ。

………覚悟していたより、ずっと甘い。

厄介者だとわかつたうえでの親切心。少し、心が温かい。自分は今、新しい友をみつけようとしているのだろうか。

否やは無い。ああ無いとも。これで裏切られたとしたら、それもまた一興。赤い染みを地面に広げて、何処へなりとも流れて行けばいい。

いや、自分は、このブリニョルフという男になら騙されてもいいとすら考えてはいないか？

用心は何処へ行つた？ 知らぬ。今はこの男と共に居たい。

「いいのか？ 随分と私に都合がいいと思う」

「提案している俺に尋ね返すのは、建設的な会話とは言えないな。

大事な質問が無いのなら、答えは二択なのさ。

『失せやがれ糞野郎』か『世話になる、兄弟』だ。さあ、君はどちらを選ぶ？」

私は顔を上げて、得意そうな顔をしている彼の手をとった。

それから私達は、軽食を取りながら様々な話をした。この世界の創世の伝説。大陸のこと。人種のこと。スカイリムのこと。つい最近まで数年かけて続いた『エルフ』との大戦争と『白金協定』と呼ばれる終戦協定のこと。

話すことは多かったため、ブリニョルフが夕餉を村長宅まで取りに行った。

村長からは「是非一緒に」と誘われたらしいが、「連れが人見知りだ」と言つて断つた。そうだ。

昼間、人を村の玩具にさせておいてよく言うものだ。面の皮の厚さでは敵わない。

夕餉を食べながらも話は続いた。そしてブリニョルフが拠点とするリフテンのことに話が及ぶと、やや歯切れの悪いというか、迂遠な物言いで話すことが増えた。

盗賊である彼が拠点を置いているというのだ。他にも協力者や支援体制がある可能性は高い。

今更感はあるが、まだ自らの稼業を明かしていない彼にとつて、慎重に話すべき話題なのだろう。

私なりに、このあたりの私が盗賊稼業をどう捉えているかについては、早急に解消しておいたほうがお互いのためだと考えた。

とはいえ直接切り込むのも野暮だと感じ、件の友人の話をしてみることにした。

「少々話は変わるんだがな、ブリニョルフ、君を見ていて一人の友人を思い出した。唐突だと思いが聞いてくれ。

名はグレイラット。界限では知られた盗賊らしく、本人もそれを憚ることなく公言していた。義賊、という奴だそうだ。

出会ったときから陽気で、飄々としていて、好漢だったよ。

ちなみに初対面は牢屋の格子を隔ててだ。

なかなか無茶をする男でな。端のほうとはいえ、覇権国家の城に忍び込んで、目ぼしい物を盗もうとしたらしい。似たようなことは初めてではないようだったな。

彼を牢から出したのはもののついでといった側面が強かったので貸し借りは考えていなかったのだが、彼のほうは違うようだった。

彼に言われた野暮用を一件済ませたこともあつてか、私の力になりたいと言い、危険な場所に赴いては、私に役立つ品々を持ち帰ってくれた。

その彼が、件の城の本丸へ盗みに行くと言い出した。

私は一度は止めた。すると彼は『優しいな』と言った。

しかし彼はこうも言った。『危険なのはわかっている。だがあんたの友達のもりだから、行かせてほしい』と。

最期になる覚悟はしていただろう。それでも、私の役に立ちたいと。

結果、彼は私の永遠の友となった。寂しかったが、彼は彼の矜持を貫き、私との友情に殉じた。それでいいと思った。悲しむべきではないと、己に言い聞かせた。

……そんな男が、居たんだ」

「……その話をするってことはやはり、俺が盗みを生業にする人間だと勘付いていたな？　そして兄弟は、そういった連中を別段嫌っちゃあいない」

私はどちらも肯定した。

「まいったよ。君が今日、ここまで腹を割ってくれるとは思ってなかった。

君は本当に俺を驚かせるのがうまい。

今日は感じ取っていた程度の人間性を色々確認して、それから、今みたいな話をリフテンの俺の自宅で腰を据えてしようと思っていたところだ。予定が狂ってしまった。

勿論、物事が順調に進んで悪い、ということとは基本的に少ないと思っているがね。

なら、これから話すことこそが本題と言っている。勿論、これもリフテンで話すつも

りだった内容さ。誰かさんのおかげで予定は大幅に前倒しだ。

……察するとおり、俺は盗賊だ。それもスカイリム随一の盗賊ギルドの一員だ。

それが最近、幹部の一人がギルドマスターを暗殺なんかしたもんだから、もうてんやわんやさ。ほら、さつき話した、小難しいことに詳しい昔の上司つてのがそのマスターだ。ガルスと言った。

暗殺騒動が元で、今のギルドはめちゃくちゃだ。大多数は逃亡してしまった。

一応、俺に近い仲間達のあいだでは新しいギルドマスターが立てられたんだが、他にも何人が正統後継者に名乗りを上げている。要するに御家騒動つて奴だな。

そんなことをしている場合じゃないのは、ケツの青い新米だつてわかりそうなものなのに。

団結すべきときでも、あの欲の皮が突っ張った糞野郎どもは聞く耳を持たない。

新しく組織を立ち上げるより、元仲間と揉めてでもスカイリム全土に影響力を持った盗賊ギルドを我が物にしたい。

あるいは、巨大な影響力を保持した『出来物ガルスの後継』、そう言った肩書が欲しいのかもしれない。

客観的に見ていればわかるよ。『これはもう駄目だ』つてな。

一応、リフテンの実力者は俺達に正統性があると考え、支援を約束してくれている。

尤も、他の連中にも同じことを言つて、勝ち馬に乗る気でいるんだらうけどな。

そして支援があるうが無かるうが、ギルドの後継がどの派閥に決まらうが、盗賊ギルドの衰退は避けられない。

業突く張り共が欲しがっている魅力的な栄光の盗賊ギルドなんてものは、もう何処にも無いのさ」

ブリニョルフは皮肉気に笑うが、その目は寂寥感にあふれていた。

きつとそのガルスのことを好ましく思つていたのでらう。出来の良い兄を自慢するように話していた。

そしてそのガルス率いる巨大組織に属していたという誇りと喜びが崩れていくのを、ただ見ているしかない無力感と絶望感を味わっている。

「覚えているかい？　俺は『仕事を手伝つてほしい』と言つた。それに対して君は『私に都合がいい』と言つた。

実は全くそんなことはないのさ。

俺はギルドの衰退を止めたい。意地を張り合っている馬鹿共を始末したい。そのために兄弟、君の力を借りたいと思つている。

これは結構な難題だ。その難題に、君を巻き込もうとしている。

……自分で口にしたことだが、友情を謳いながら面倒事に巻き込むなんてのは、それ

こそ友情に値しないんじゃないかと、思わないでもないんだ」

ギルドにまつわる憤懣は、ブリニョルフの中でずっと溜め込んでいたものなのだろう。

出口の見えない閉塞感。抗争をしかけてくる元同胞の無理解への苛立ち。自分の行動が本当に正しいのかという不安や迷い。

部外者である私が相手だからこそ、口が軽くなつたのかもしれない。

愚痴を零し、弱音を吐き、知らず張っていた緊張の糸が少し緩んだのかもしれない。

心の防壁が脆くなり、彼は少し自信を失っているように思った。

だからこそ私は、胸の内を飾らずに伝えるべきだと思った。

「正直に言おう。私には『どうでもいい』。

いや、これでは誤解を生みそうだな。

まず君は私のことを『良い奴』だと言った。しかし私は君が良い奴なのかわからない。人を見る目には自信が無くてね。

その上で言おう。私は君を気に入っている。

別に私としては、君が悪人でも構わないのだよ。

私は永く、殺し殺され奪い奪われる、それはそれは素敵な状況に身を置いていた。

その中で知り合った連中は、善人もいれば悪人もいた。不快な者もいれば、馬の合う

者もいた。

だから、まあ、つまりだ、君自身がどうだとかは私にとつて関係無いのだ。

私は兄弟を気に入ったから、協力したいと思つている。それだけだ。

堂々と友情を謳いながら、堂々と友人に面倒事を押し付けるといい。

きつとその友人は、ブリニョルフという男を気に入っているあいだは協力するだろうし、面倒事の面倒さ加減が勝れば、文句の一つも零して酒をたかるだろう。

ああ、あまりに度が過ぎる場合は鉄拳と槌を交えてお話し合いの機会を設けることもあるかもしれないが……

これはそのような話だよ」

ブリニョルフは目を伏せ、少し湿った空気を醸している。

しかし涙は見せず、顔を上げると強い視線を私へ向けて言った。

「ありがとう、兄弟」

四、友とは

ブリニョルフと二人、朝日が顔を出すと共に開拓村を後にした。

出発の合図は「さあ兄弟。今日も俺達の素直な性根のように、東南東へただただ真つ直ぐ進もう！ 具体的には、森と川と谷と川を越えれば、あとは街道沿いに進むだけだ」だった。

山中行軍は相変わらずのようだ。

寧ろ、彼が異様に街道以外の移動手段へ通じていることに驚く。

訝しげな私の視線に気付いたのか、彼は不敵に笑って言った。「知らないのか兄弟。衛兵隊を巻くには森が一番なんだぜ？」と。

ただ、「連中に追われている内は半人前なんだがね」とも続けた。

この手慣れた道無き道を征く行軍は、彼の盗賊としての苦勞と成長の証のようだ。

村を出る際、勤勞な村人達が既にそれぞれの作業に取り掛かっていた。

昨日、真似事程度でも手伝ったためか、近くを通った者は皆、挨拶をしてくれる。

十分な休息を取りつつも飛び起きられるよう、一晩中心構えだけは解かずにはいたが、徒勞に終わったようだ。

しかし、このような無駄は嫌いではない。

「俺もあの村に立ち寄ったのは初めてだったんだが、ここまで牧歌的だと毒気を抜かれるな」

夜明け前から天幕を片付け、村長宅へ返却に行ったブリニョルフは、その手に土産を持っていた。村長の奥方曰く、「道中、摘んでくれ」とのことだ。

苦笑しながらも、彼は土産の中にあつた蕪を齧っている。

同感だ、と私も蕪を齧る。うん、うまい。

実際、ここまでの高待遇を受けられるとは思っていなかった。

交渉事は全てブリニョルフに任せてしまったが、それだけの対価を支払わせてしまったのだろうか。

彼は私の手出しを拒んだが、やはり気になる。

「君も心配性だな。墳墓ではそれなりの戦利品を得たからな。その中から少々融通したただけだから問題無いさ。それも、ペンダントに比べればたかが知れている。本当に大丈夫だから、この話はこれでおしまいだ」

隣に行く彼は私の背を軽くはたいた。

昨日より気安い態度がくすぐったい。

そう、昨日とは違い、私達は横並びで移動している。

別段、そのように打ち合わせたわけではないが、自然とそうなった。

目的地たるリフテンは「ひたすら真つ直ぐ」とのことなので迷いようが無く、移動に問題は無い。

今日はいいい日になりそうだ。

ブリニョルフは、隣を小走りに移動する男の顔を盗み見る。

少々距離を詰めてみたが、問題ないようだ。

というか、丸一日悪路を走り続けることをさも当然のように了解してみせるあたり、この男の体力に底はあるのだろうかと疑問を持つ。

悪いが自分に合わせてもらおう。ブリニョルフは、速度の主導権は必ず手放さずにいようと決めた。

……昨日は男と踏み込んだ話をした。うまくことが運ぶかはブリニョルフにとって多少賭けでもあつたが、腹を割って向き合ったのは正解だったようだ。

俺は、俺達はうまくやっていける。改めてそう実感した。

方角的に概ね朝日に向かって走っているが、それも明るい前途を示しているようで心

地良い。

闇夜に紛れて暗躍する盗賊が何を馬鹿なことを、と思わないでもない。

しかし今だけは、この感慨に酔いしれていたかと思ひ、『ノクターナル』には少々のお目溢しを願う。

何せ自分だけの話ではない。聞けば隣の男は太陽信仰だと口にした。

我らが女神様とは水と油である。何卒、何卒と重ねて願った。

男との雑談も弾み、何にせよ良い旅路だ、順調だと気分良く移動を続けていると、ふと男が尋ねてきた。

「なあブリニョルフ。こちらにも『巨人』は存在するのるか？」

その口振りではあちらにも巨人はいたのだろう。ブリニョルフは雑談の内、常識を教えるスカイリム講座の一環程度に考え、気軽に答えた。

「忌々しいことにね。どうやら連中は何処にでもいる厄介者のようだな。鼠か黒い油虫のように小さくすばしっこくないのがまだ救いだが。」

生態はと語れるほど俺は巨人専門家じゃあないが、大体は少数個体で集落を作り、狩猟生活を送っているな。

ああ、唯一『マンモス』だけは家畜として扱っているから、あのウスノ口共にも畜産を行う程度の知恵はあるようだがね。

ちなみに、マンモスというのは家屋くらいにデカイ、毛むくじやらの獣だ。

肉食ではないはずなんだが、やたらと凶暴でね。肉も別段うまいわけではないから、はつきり言ってこいつも厄介者だ。

例外的に、乳から作るチーズは珍味として人気がある。作ると言っても、巨人が勝手に作ったものが出回っているだけで、人間がマンモスを飼育しているわけではないが。

あと、これは更に例外中の例外だが、魔術師共がデカイ『魂石』に収める魂がどうのと追いかけて回しているのを……」

「ブリニョルフ、ならアレがそうなのだろう。森を抜けたところに、遠近感が狂った人影と、同程度に大きい獣が見える。二人と四頭だ」

ブリニョルフは緩んでいた気を一瞬で引き締め、止まれ！ と男に発した。

即座に身を伏せ、男に手招きをして巨人の正確な居場所を聞く。男も空気を読んで、自分と同じ姿勢になっている。

「言つたとおり森を抜けた……川か？ 沿って歩いてるようだ。進行方向やや右手の川下から、左手の川上に向かつて。このまま進めば丁度かち合うかもしれない」

ブリニョルフ自身、遠距離視力は悪くないほうだが、どちらかと言えば動体視力や、宝物の目利きを使う近距離視力に重きを置いている。

そもそも森の中というのは、当然だが、視界が悪い。木々やその葉で数間先とて満足

に見通せるものではない。

不思議に思い尋ねれば「指輪の……こちらでは付呪、だったか？ 遠目と遠射を助けてくれる効果がある」と返された。

狩人など世の弓を得物とする人間にとつては垂涎の逸品だなど呆れるばかりだ。ブリニオルフは男に対して、もう驚くのはやめた。

「よし、なら迂回だ。川上に向かっているなら、俺達は川下側。右側へ回り道しよう。いや、まったく君の遠目があつて助かったよ。きつと俺の日頃の行いの良さを神がご覧になっていたのだな」

強がつてはいても、巨人やマンモスは直接戦闘において脅威である。避けられるなら避けるに越したことはない。

そう考えてブリニオルフが移動を再開しようとする、不思議がった声が投げかけられる。

「倒して真つ直ぐ進むのではないのか？」

———ブリニオルフは何を言われたのか一瞬わからなかった。

だが、男が尋常ならざる戦士であることを思い出した。そして判断する。これは冗談の類ではないなど。

しかし繰り返すが、巨人の脅威は、基本的に人の敵う範疇ではない。

人間の最高位まで武を引き上げた同胞団でさえ、一体の巨人を複数人で囲んで倒す。仮に一对一で倒し切ることがあれば、それは伝説として語り継がれる偉業となるだろう。

それをこの男は先程何と言ったか。「二人と四頭」と言った。

男は戦闘に自信があるかもしれない。だが自分の本業は盗み働きであり、戦闘は門外漢。それは男も承知のはずだ。

つまり男は一人で六体をまとめて相手取るつもりなのだ。いくらなんでも無謀が過ぎる。

ブリニョルフは男へ巨人の脅威を伝えるが、どうも聞こえてはいても反対側の耳から抜けて行っているような手応えの無さを感じる。

その内、男は焦れたように「見せたほうが早いな」と呟いて駆け出した。

信じられない。ブリニョルフは自分が対巨人戦において何の役に立つのかと疑問符を浮かべながら、しかし友を一人で戦いに赴かせないため、気配を消しつつもその背を追いかけた。

ブリニョルフは私を「心配性だ」と言った。

まるで話題が違うのは承知の上だが、今の私にとって彼のほうが余程心配性に思える。幼い私を叱る母のようだった。

この世界の巨人がどの程度の力を持つのか、私は知らない。

しかし彼の口ぶりから、倒せないこともない、ということとはわかった。

相手が死ぬ存在であれば、神であろうと殺してきた。自らを近い高みへと無理やり押し上げてだ。その矜持はある。

それに、私は私の能力がどの程度この世界に通じるのかが、まだ理解できていない。ブリニョルフ曰く、墳墓での戦闘でもあり得ないと言わざるを得ない激闘だったらしい。

あれが？ 私に言わせれば、あんなものはぬるいの一言だった。揉んでやっただけ、とも。

何処からか迷い込んだ『黒騎士』と、『墓王』の眷属たる『車輪骸骨』共の群れを同時に相手取ったときのほうが余程堪えた。

私がアレに何度殺されたと思っているのだ。

それらを鑑みた上で結論付けるなら、慢心するわけではないが、おそらく問題はないだろう。

しかし友を心配させるのは本意ではない。危なげ無く完勝してみせる必要がある。ならばまずは如何なる攻撃にも耐えうる防備を固めるべきだ。

私は駆け続けながら兜、鎧、手甲、足甲、指輪と順に『ハベル』の戦士の物へと変えていく。

そして左手には大岩の様な盾を取り出し、右手にはハルバードを握る。

瞬く間に重装の戦士が出来上がった。

そこでふと思いついた。どうせなら全力でやってみよう。

一度出した盾をしまい、友より譲り受けた『太陽のタリスマン』を取り出す。

そして祈念する。戦神よ、我が戦をご照覧あれ。願わくば、勝利を得、御身に捧げん。

森の木々が徐々にまばらとなり、もう『鷹の指輪』が無くとも十分、川が視界に入る

地点で、一人の巨人の上半が見えた。こちらからはやや崖になっているようだ。

タリスマンを通じてハルバードへ太陽の光を付与する。

次に、タリスマンが太陽の光を圧縮したかのような、極太の雷を纏う。呼吸をおかず、

轟音と共に巨人へ投げつける。

さあここからが本番だと勇んで飛びかかると———そこには呆けた様子

の巨人が一人、音に怯えたらしい獣が四頭、そして上半が消し飛び、炭と化した断面を見せ

る元巨人があるだけだった。

………我が祈りを返せ、畜生共め。

八つ当たり気味に、残りの巨人の下肢を薙ぎ、頭が下がったところで首を刎ねた。獣はおびなりに突いて逃した。ブリニョルフが慌てて駆けつけてくるまでに、全ての脅威を排除した。

今の私は、不貞腐れている自覚がある。

武装を解いて川原の岩に腰掛けてみると、ブリニョルフが巨人の懐を漁っていた。

あんなものでも、それなりに値のある貴石や宝剣などを所持していることがあるらしい。

どうやら当たりを引いたらしく、「臨時収入だ」と喜んでいる。

しかし私は不機嫌だ。今の私はとても不機嫌なので、不機嫌であるということを隠そうという気も起きない。なにせ不機嫌だからだ。

ブリニョルフが苦笑しながら近寄ってくる。

「なあ兄弟。いつかスカイリム学専門家の異名をとるかもしれないこのブリニョルフ様が一つたためになることを教えてあげよう。有り難がつて聞くといい。」

巨人は、普通、ああやって、殺す、ものでは、ないんだ。理解できるかな？」

「ブリニョルフ……、見てわからないか？ 今の私は腹の虫の居所が悪い。幼子に言い

聞かせるような揶揄はやめろ」

「そいつは悪かったがね、兄弟。心臓が縮み上がった俺の身にもなってくれ。スカイリムで最も貴重な俺の寿命が、多分何年分かは短くなつたぞ。

しかも必死に駆けつけ、どう立ち回れば戦闘の役に立てるかと思案を絞つた健気な俺が到着してみれば、だ。二体のデカイ屍と、怯えて逃げていくマンモス、やりたいようにやったにも拘らず無然とした君が見えたんだ。

この気持が理解できるかな、ええ、兄弟？」

繰り返すが、今の私は不機嫌である。

しかし目の前のこの男、出会ってから初めて怒っている。なるほど、怒ると嫌味っぽくなる性質たちなのだと思考がそれだが、段々と悪いことをした気になつてきた。

「心配をかけたことは、謝る。私自身が腕試しをしたかったこともあるが、君に私の力を見せれば、この先、色々と言話が早くなるかと考えたんだ」

ブリニョルフは一度ため息をつき、「本当に君は随分、殺伐とした場所に長くいたようだな」と零した。

「二先ず、君の戦闘力については理解が深まつたと思われる。相手が多勢だろうが強大な個だろうが関係なく蹂躪できるとね。

目論見は成功だ。良かったな。

しかしそれとは関係なしに、友達が単騎で強大な相手に挑んで行くのを目の当たりにしたら、普通は過程も結果も関係なく心配するもんだ。

昨日は一般常識の触りと、俺の事情について少し話ただけだったな。今日は移動がてら、相互理解のために君の話を聞かせてくれ。

そうすれば、英雄と呼ぶべき優秀な戦士の君に対して、もつと最適な手助けができるようになるだろう。

………本当は、そのあたりの話は腰を据えて、つまりリフテンの俺の家で聞こうと思っていたんだ。まあ、色々、あるかと思つたからな。

でももう今は、そういう様式美はどうでもいい気がする。あと、君の事情は極力早く把握しておくのが俺の心臓にとって吉だと思うんだ。

つくづく君は俺の予定を前倒しにしてくれる。我が兄弟の親切心に感動の涙が溢れそうだよ」

一旦は矛先を収めてくれるようだが、怒りは治まらないらしい。まだ少し嫌味っぽい。

とはいえ怒り続けるのにも体力がいる。少々気怠げに彼は続けた。

「せめて『大丈夫だ』ということの説明するなりなんなりしてから突撃してくれれば良

かったのさ。そうすれば俺もこんなにやきもきせず済んだんだ。

俺が兄弟と呼ぶことを許し、俺を友だと思ってくれるのなら、それくらいは期待しても罰は当たらないだろう？」

今の私は不機嫌、で、あつた、はずだ。

しかし、どうもそれより彼に悪いことをした、という罪悪感が胸の深い部分から音を立てて迫り上がって来ている。

「すまない、友よ。言い訳だが、確かに私は殺伐とした場所に馴染みすぎていたようだ。客観的に認識していても、正しい理解が追いついていなかったと言うべきか。

昨日触れる程度に話したが、殺し、奪うことが当然の場所だった。

肩を並べて強敵に立ち向かったその相手が、少しあとには暗がりから襲いかかってくることも珍しくない、そういう場所だった。

会話を通じる相手にも、亡き友のような者がいたにはいたが、多くは「くたばるなら勝手にしろ」とでも言わんばかりの態度だった。それが普通だったんだ。

……その常識を引きずったままでいたがために、結果として君を軽んじてしまった。すまない」

私の言葉は一応、ブリニョルフに届いたようだ。

彼は痛ましげな顔や、苛立った顔、悲しげな顔など他にもころころ表情を変えて、最

後にもう一度ため息をついて言った。

「常識云々は土地が変われば違つてくるもんだ。そこに言及はしないでおくよ。」

ただ、圧倒的強者である君が俺の小言を聞き入れ、反省し、許しを請うている。君の気持ちはそれで十分に伝わったよ。もう怒つていない。

今は、俺が君の癒やしの一助になればと、そんなふうと思う。

……何なら兄弟、リフテンにいたら早速癒やしを求めて宿で女でも買うかい？ なかなか綺麗どころが揃つてるぜ？」

最後の一言は彼なりに空気を変えようとしてくれたのだろう。有り難かった。だからこそ、正面から向き合いたいと思つた。

「いや、兄弟。今日のこととは忘れたくない。女も、酒もよしておくよ」

彼は「そうかい」と肩を竦め、荷物をまとめた。

そして、折角迂回せずに済んだのだから時間を浪費すべきではない、と移動を再開した。道理である。

私は彼に遅れないよう、隣を走り、思索する。

友になる、友を作るとは、これほどまでに難題であつただらうかと。

『友』について巡礼者や灰であつた時期を除いて考えれば、私がまつとうな生者であつた頃まで遡る。

しかしどうやっても、友となつたきつかけが思い出せない。友がいたことも、どのような人間であつたのかも思い出せる。だがその始まりは？

やたら長く生きたせいかな、記憶の薄れではない、欠落を実感する。まるで思い出せないのだ。

遠くへ来たなど、今更ながら改めて思った。

「それで、そんな場合ではないのに我慢できずつい叫んでしまったんだ。『お前は倒したはずだろう!』 何で!!』とな。正直半狂乱だったよ」

「傑作だ! なるほど化け物氏は不死院に一体だけじゃあなかつたわけだ。慌てふためいている君の様さま、是非とも見てみたかったな」

男が叙事詩の一節に相違ない英雄譚を、さも近所で起こつた面白話のように話すものだから、ブリニョルフは堪えきれず笑つてしまう。

男が自身の話をする際、「長くなるから」と言つて、まず生まれてから今までのことを、ごく簡単に語つた。

愛を甘受できない人間であつたこと。不死人と呼ばれる存在になつたこと。永い時

をかけて人間性が摩耗していったこと。神や化け物を相手に死闘に次ぐ死闘を繰り返したこと。

世界の礎になったこと。

再び呼び戻され、一度は……継世^{けいせい}とでも言うのだろうか、儀式を行ったが、最終的には時代を終わらせたこと。気がつけばあの墳墓にいたこと。

巡礼者であったときも、灰であったときも、碌でもない連中ばかりの場所で、かけがえのない友情を育んだこと。

「さっきの遠目遠射の指輪、あれは鍛冶師の巨人の友から譲り受けたと言ってたな？しかし元の持ち主である、竜狩りの巨人の友にも会ったと。もし君が竜狩りの彼から指輪を直接譲り受けていたのなら、鍛冶師の彼が持っていた指輪はどうなっていたのだろうかうね」

「それは考えたことが無かったな。……どうなのだろうか？」

男以外の人間が語ったのなら、「面白かったよ、お代は金貨1枚でいいか？ 気が済んだらとつとと失せろ」とでも言っただけ追いかけて払うところだ。

しかし、荒唐無稽な大冒険が、全て真実だとブリニョルフには理解できた。

男は語りながらその当時を思い出していたのだろう。

寂寥、葛藤、憤怒、憧憬、懐古、それに野営時の篝火の如き温もり。それらが男の目

に浮かんでは消えていったからだ。

「そうか、悪党ほどのうのと生きて、良い奴ほど死んでいくのは何処でも変わらないのかもな」

「ああ、『闇霊』^{ダークレイズ}なぞ捨り潰してやるがな。亡者と化した友を見るのは、やはり辛かったよ。しかし彼らは矜持をもって己の人生を生きた。やり尽くした結果だと思った。だから引導を渡すのは私の役目だ、逃げてはならぬと思った。

それに亡者とならずとも、私のためにと無理をして、力尽きた者もいた。これは昨日にも一人話したな。彼等の亡骸を弔うのもまた、私の役目だった」

男の話は壮絶の一言であった。

それでも、男が同情を求めているようには見えなかった。寧ろ、悲劇的な場面ほど冗談めかして語った。

そして、自分の築いた友情をこそ君に伝えたい、と最も熱く語った。一度は軽く触れた場面を前後しながら、一人一人、順を追って。

男にとって、自身が英雄や神の化身に成ったことなど、友と過ごした時間に比べれば些細なことなのだろう。

突然の閃きを得たかのように、男は言った。「ああ、だから私は旅の中でも心折れず、亡者にもならずいられたのか。友に生かされていたのだ。今になって気がつくとは、

なんと友達甲斐の無い人間だろうか」と。

話しながら、男の頬に涙が伝った。

夜明けの朝日を目にして流したのと同じ、真の涙であったとブリニョルフは思った。

男にとって最も琴線に触れるのは、耐え難い地獄の中で育んだ友情なのだ、このとき理解できた。

男は先程、ブリニョルフを友と呼んだ。そのことが、言い表しようもなく誇らしかった。

男は自らの体験を話すことが苦ではなく、ブリニョルフは話を聞き出すのが達者であった。

気がつけばリフテンを囲う壁と門が見えていた。

ブリニョルフは男に歩を緩めるよう伝えると、素早く衛兵に近づき鼻薬を嗅がせた。

ブリニョルフはリフテンでは馴染みの顔である。門から出ていく姿を見ていなくとも、門から帰るくらいは常のこととして問われない。

しかし衛兵にとつても初めて目にする見慣れない男を連れていくなれば、多少の融通を利かせてもらわなければ町に入れない。

逆に言えば多少のことですれらの問題は全て解決してしまうわけで……男はこれで

大丈夫なのか？ と怪訝そうにしている。

リフテンとは、良くも悪くもそういう町なのだ。

『ソリチュード』や『ホワイトラン』ではこうはいかないだろう。解放的な町では、役人に堂々といかがわしい取引を持ちかける者など問答無用で投獄される（『ウインドヘルム』はリフテンと同じく閉鎖的ではあるが、軍の規律を重んじるという異なる方向性の特色があるために、同じく融通は利かないが）。

ブリニョルフはこのなんとも言えぬいい加減さを備えたりリフテンという町を気に入っていた。

「さあ兄弟。実時間では大したことはないんだろうが、今まで色々なことがありすぎたように思う。しかし俺達は辿り着いた。安息の地へと。ようこそリフテンへ！ 俺の家まで案内しよう」

二人は連れ立って町へ入る。

男にとって、このブリニョルフという盗賊と出会いリフテンの門を潜ることが、スカイリムでのとある事情に深く関わることになる一つの転機であるのだが、それをまだ知ることはない。

胎動 盜賊ギルド

五、顔合わせ

『ラットウエイ・ウォーレンズ』、あるいは単に『ラットウエイ』。

これはリフテンの町の地下に広がる、広大な空間を指す単語である。

元々は、水路を町中に張り巡らせて水運を最大限活用しているリフテンの、上下水道、並びに水路を整備するための通路でしかなかった。

それがいつからか脛に傷持つ者達が住み着き始め、各々が居住性と利便性のために拡張していったがために、今では実質『第二のリフテン』、『リフテンの裏町』として機能している。

盜賊ギルドの本拠などという悪の根城がありつつも表向き町並みが綺麗でいられるのは、このラットウエイにリフテンの暗部とも言える様々なものを詰め込んでいることも関係している。

それを示すかのように、時折ラットウエイの住民がさらなる拡張を行いたいがために掘削作業に入ろうとすると、ギルド、ないしは衛兵隊が押し入って来て、計画の見直しや中止を要求することもあるとか。

つまりかの地下王国について、リフテンの表と裏の有力者達は一見頭を悩ませているように見せつつ当然の如くその実情を把握しており、町に致命的な損害を負わせないよう管理しているのである。

水運を活用している土地ということは、逆説的に表の町の拡張性の乏しさを指すことでもある。全くの平野に比べて、どうしても水の流れや緩い地盤を意識せざるを得ないからだ。

その点、地下空間は衛生面などを考慮しなければ、拡張性に富んでいる。

ラットウエイは、貧民街であると同時に、リフテンの伸びしろでもあるのだ（比較的、社会的弱者の多いラットウエイの住民からすれば、そんなことは自身に欠片も関係の無い話しではあるが）。

と、何故私がラットウエイについて思考を巡らせているかと言えば、まさにそのラットウエイへこれから襲撃をかけるためである。諸事情は例によってブリニョルフから聞いた。

もう幾らか時が経てば日が西の山脈の稜線に沈むという頃、ブリニョルフと二人、リ

フテンの門を潜った。

彼は私を自分の拠点である町へ案内できたことが、少々感慨深そうだ。

やはり気が休まる場所というのは良い。

私も巡礼の折には、各地の篝火の世話になったものだが、その中でも祭祀場のそれなど、特別心休まる場所はあった。

難敵を倒して戻った時など、人知れずほっと一息ついたものだ。

……そうだ、忘れないうちに例の物を。

「ブリニョルフ、約束の品だ。このとおり、ペンダントを譲渡する。よくぞここまで私を案内してくれた。これからも何かと世話になると思うがよろしく頼む」

「こちらこそ、だよ、兄弟。ああそう言えば俺もすっかり忘れていた。ほら、巨人討伐の戦利品さ。あのときはお互い気が立っていてそれどころではなかったが、本来こいつは君の所有物だ。これから町で入用になるだろうから。受け取ってくれ。なんなら、換金してから後で渡してもいいが、どうする？」

その件に関しては今だに罪悪感が勝るため、君の取り分として私は辞退したい。そう伝えたところ、いや貸し借りというのはきちんと、いや男と言うのは一度口にしたら、いや今後のことを考えれば、と二人共妙に譲らない。

やんややんやとやり合っていると、一人の男性『アルゴニアン』が親しげに近づいて

くる（彼等種族にとって蜥蜴扱いは酷い侮辱になるとブリニオルフから教わった。しかし出身地によっては、より蜥蜴に近いほうが人間的魅力が高い扱いになるとか。難しいものだ）。

「やあやあ、ブリニオルフさん。丁度、あんたを探していたんだよ。ほら話していただろう？ あんたの雑貨屋で、仕入れて欲しい物のリストが出来上がってね。

とはいえ何処かから帰って来たばかりのようだ。どうするね。都合が悪いようなら、明朝にでも出直して、広場の店で話をさせてもらうけれど」

「いや、ズイージ、構わない。彼は協力者だ。俺の事情は知っている。それより復唱するぞ。連中の居場所がわかった。俺は『ラグド・フラゴン』へは戻らず、ラットウエイ東側出入り口から侵入。敵勢力は、可能であれば生け捕りが望ましい。決行は日没と共に。他にはあるか？」

アルゴニアン……名前はズイージか？ が「おいブリニオルフ！」と語気を荒げているが、ブリニオルフは「言ったはずだ、彼は協力者だ。問題無い」と受け流している。………それにしても今の言葉、聞いた限り全く普通の会話に思えたが、実は凄まじく隠語だらけだったわけか。

どの単語がどの意味を指しているのか想像するのは新鮮味があつて少し面白そうだと感じたが、それをすべきは今ではないだろう。

「何せこれから、ブリニョルフの言の端々を捉えるなら襲撃だというのだ。単語の意味を鑑みるに、平和的にお話し合い、とはまず間違ひなく正反対の行動である。」

町に着いたばかりだというのに、忙しないことだ。

しかし半ば部外者の私としては、ちと説明がほしいところでもある。

「友よ、どうする？ 私は君の家で待機していたほうがいいか？ それともその襲撃に

参加したほうがいいか？ その場合は、私にもわかるように話してくれないかな」

私の提案に対し、てつきり即断即決で返答があるものと思っていたら、彼は何やら葛藤しているようだ。

……この男、胸襟を開けば開くほど、どんどんお人好しになっていないだろうか。こちらが心配になる。

「散々見せまし、話して伝えもしたろう？ 私は荒事が得意だと。どうする？ 私は君の指示に従おう」

「……ズイージ、二つ確認だ。メルセルとデルビンはどうしている？」

「デルビンは留守の守りだ。メルセルも今はデルビンと共に最終調整に入っているが、襲撃開始時には北側出入り口から侵入し、内部で直接指揮を執る。おいそれよりブリニョルフ、その男は……」

「次だ。俺が襲撃前にフラゴンへ一度帰還し、襲撃時刻までに担当地点へ移動を完了す

る。これに何か不都合があるか？」

「いや、ことの開始に遅れなければ、然程問題は無いはずだ。おいだから無視をするな！
その男は信用でき……」

ブリニョルフが「急ぎだ！」とアルゴニアンを制してこちらに向き直る。真剣な顔だ。
「兄弟、町に着いて早々だが、協力してくれるかい？」

思いつめた顔が妙におかしくて、私はついからかってしまった。昨日のちよつとした
意趣返しでもある。

「提案している私に尋ね返すのは建設的な会話とは言えんな。」

答えは二択だ。『大人しくしていやがれ唐変木』か『付いてきてくれ、兄弟』だ。どち
らを選ぶ？」

自分の軽口を思い出したのか、ブリニョルフはニヤリと笑い、すぐに険のある顔付き
で「来てくれ、時間がない」と駆け出した。

ズイージとやらがまだ何か言いたげであったからか、「お前も来い、説明は一度のほう
が楽だ」と言い放つ。

アルゴニアンの彼は悪態をつきながらも私達の後ろを駆ける。……後ろに付いたの
は私の監視の意味もあるのだろう。

さて、うまくことが運ぶか。

ブリニヨルフ達が町に帰還して早々、盗賊ギルドと対立する派閥への襲撃計画を通達された。

少々慌てはしたが、ブリニヨルフは自分に付いて走る男を見て、昼間の巨人との一件を思い出す。襲撃に際し、これほど心強い味方はいないだろうと。

ブリニヨルフの行動指針の第一は、来たるべき日のギルドの再興。そのための、現在の衰退緩和である。今の所、現ギルドマスターのメルセルとも幹部デルビンとも、その考えは食い違つてはいないはずだ。

盗賊ギルドの構成員は皆、盗み働きを主な特技としており、荒事は専門外だ。特に近年は前ギルドマスターの意向もあり、そういつたことは遠ざけられてきた。

しかし、闇に生きる者として、奪うだけが能である者など居はしない。

傷つけ、殺すことに関して、そこいらの力自慢に引けを取らない技量は全員が持つている。それが、スカイリム全土に影響力を保持したギルドの一員であるということだ。

そんな者達がぶつかりあえばどうなるか。死傷者の数は考えるのも億劫になるほど拳がるだろう。

味方の損耗は極力避けたい事態である。

更に言えば、だからこそその「可能であれば生け捕り」だ。

今は敵対しているとはいえ、派閥の力関係がはつきりすれば、何人かは仲間引き入れまた共に活動できるだろう。

人的資源の絶対数が足りない今、敵とは言え味方になる可能性が僅かにでもあるのならば、それを選択しない理由はない。

しかし、生け捕りとは彼我の実力差に大きな開きが無ければ難しい。故に友の参戦を希望した。

彼は巨人を消し飛ばすこともできれば、ドラウグルの大群相手を手玉に取るよう立ち回ることもできる。ただの力自慢ではない。卓越した戦士だ。

問題は、突然連れてきた部外者を、あの栄光のギルドマスター殿に認めさせることなど、ブリニヨルフは小さく溜息をつく。寧ろそれこそが襲撃より余程困難であるかもしれない。

墓地の隅にある霊廟の内側、目立たない場所にある仕掛けを作動させ、フラゴンへの

道が開く。

見事な仕掛けに、私は「ほお」と感心してしまった。

……ブリニヨルフの視線が痛い。そんな暇があれば危機感を持つと言うのだろう。しかしなあ、今更盗賊を相手に苦戦するとも思えんのだが。

ここに来るまでに、大方のあらましは聞いた。

開拓村での話にあつた、『お家騒動』の相手である対抗派閥の潜伏場所をずつと探つていたこと。それがついに発見されたこと。しかしこちらが発見したのなら、あちらもそれを察知して潜伏場所を変えるために逃亡されかねないこと。そのために、迅速な襲撃が必要であること。

それらの連絡が、先程アルゴニアンの彼からもたらされた情報であること。得心はいったが、このブリニヨルフという男もよくよく忙しいヤツである。

命がけの冒険から帰還したと思つたら、今度は元仲間への襲撃、それも一方面的指揮官とは。苦勞が多そうな友人を、改めて支えてやりたいと思う。

仕掛けから降り階段を経て、すぐにギルド構成員の溜まり場であるラグド・フラゴンに到着した。

アルゴニアンの彼の言う通り、幾人かの構成員と共に幹部らしき男二人が打ち合わせを行っている。あれがギルドマスターのメルセルと、幹部のデルビンなのだろう。

ブリニョルフ曰く、『想定外』や『予定外』を極力潰しておくことが自信にもつながり作戦の成功率を上げる、と熟練の盗賊である二人は理解しているのだとか。

襲撃が失敗した場合も同様。多くの逃亡者を出した場合、逆侵攻を受けた場合など、他にも考えられる限りの事態を想定し予め行動を決めておかなければ、人は簡単に混乱する。それを防ぐのだという。

そんな『これ以上大切な時間はないだろう』というタイミングでブリニョルフが、やりにもよって部外者たる私を連れてやって来た。

二人の内の一人が、地図を広げた机から顔を上げることのないまま、ドスの利いた声で問いかける。

「ブリニョルフ、お前には東側出入り口からの侵入を指示したはずだが、何か不測の事態でもあったか？ それとも、後ろにいる見慣れない御仁がその不測の事態かな？」

……まさか、まさかとは思いますがブリニョルフ。裏切ったわけではないだろうな」

「メルセル、タイミングが最悪なのは認める。だが俺の腕も頭も知っているだろう？ 裏切ったのなら、四の五の言わずに殺しにかかっているか、もつと怪しまれないように振る舞うさ。馬鹿じゃあないんだ。少なくとも、初対面の部外者を堂々と真正面から連れてきたりはしない。」

時間が無いのは承知の上だ。二人共聞いてくれ。……デルビン、投げナイフをしまっ

んだ。彼は気付いている。

彼とはペンダント奪取のために赴いた墳墓で出会った。まだ数日の付き合いだが、俺の友だ。彼自身に盗賊としての技術は無いため、俺としては外部協力員としてギルドに貢献してほしいと考えている。

そして彼は今回の襲撃への協力を申し出てくれた。彼は巨人数体を一瞬で蹴散らすこともできれば、ドラウグル数十体を相手取って傷一つ負わない優秀な戦士だ。大きな戦力になってくれるだろう」

なるほど。怒り心頭、といった具合の男がメルセル。現ギルドマスター。そして抜けない玄人といった具合の男がデルピンか。別にナイフは投げられても良かったのだが。その場合、受け止めて、投げ返していいかブリニョルフに確認するだけだ。

「ああブリニョルフ、私は、いや私達はお前を買い被っていたのかもしれないな。その御仁が役に立つ立たないの問題じゃあないんだ。

この大事なときに、不確定要素を持ち込むということがどれだけ計画に支障を来すか、私はそれを問題にしている。

そして私の判断としてはこうだ。お前は拘束し、誰ともわかぬ御仁にはフラゴンの底へ沈んでいただく。これが一番面倒が無い」

「メルセル、繰り返し言うぞ。俺は『馬鹿じゃあない』。不確定要素を持ち込み計画に支

障を来したとしても、それ以上の利益があると判断したから彼をこの場に連れてきた。

それからこれも繰り返す言う。彼は『優秀な戦士』だ。さつき話したことは誇張でもなんでもない。彼を害そうとするのなら、瞬く間にお前の、次いでデルビンの、そして一呼吸の内にこの場の残り全員の首が胴とお別れすることになる。

仲間としての忠告だ。仮に彼を計画に参加させないにしても、害そうとするのだけは止める。ギルドを潰したいのでなければだ」

一つ聞き捨てならないことを言われた。

「友よ、私は君を殺したりしないぞ」

「ああうん、兄弟。そいつは本当に嬉しいよ。でも俺を含める『全員』ってのは言葉のあやうって奴だから、ちよつと黙っててくれないかな」

我々は知り合つてまだ間が無いため、どんな些細なことでも、重大なすれ違いになる前に解消する必要があると考へたのだが、確かに今の雰囲気にはそぐわなかつたかもしれない。

しかしこの三幹部、私の抜けた一言以降も、睨み合つて牽制したり、お互いの主張を延々と投げつけ合っている。埒が明かない。

これはブリニョルフの説得を待つより、私から行動を起こしたほうが良いのではないだろうか。

「ブリニョルフ。昼間の巨人の件を踏まえて聞く。『見せたほうが早い』のではと思うが、どうだ？」

彼は私が実力行使、もしくはそれに近い示威行為を行うと理解したようだ。僅かに悩んでから、頷いた。

「メルセル、デルビン、今から彼がお前達を攻撃する。勿論、怪我はさせない。防げるものなら防いでみてくれ」

呼ばれた二人は、交渉が難航したが故の短慮だとも思ったのかもしれない。即座に身構えた。

一見先程の自然体のままにも思えるが、臨戦態勢である。それなりにやるようだ。だが甘い。

私は『リカールの刺剣』を取り出すと、ブリニョルフの言った言葉どおり、瞬き一回分の間に二人の両首筋、両脇、両手首へ薄皮一枚傷つけるように突きを放った。この刺剣は持ち主に相応の技量を要求するため、私自身のそれが鈍っていないことに小さな満足を感じる。『公王』を打ち倒すのに世話になった武器だ。お気に入りはいつでも十全に使いこなしたい。

一挙動で全てを済ませてしまったが、衝撃や印象に弱い気がした。ついだとばかりに、メルセルと呼ばれた男の髪を短髪に刈り上げる。

デルビンのほうは……まだ中年と言った歳の頃だろうに。剃り上げているのか薄いのか……。不憫であつたのでやめておいた。

私の満足感や同情を他所に、二人は呆気にとられている。

さてはブリニヨルフの言葉を話半分に聞いて、頭から否定することばかり考えていたな。いかんぞ、議論とは感情を排し理性で行うものだ。

「男前になつたなメルセル。だから言つただろう。『優秀な戦士』だと。それで、どうする？　時間が無いのは承知している。決めるなら早くしよう」

ブリニヨルフが二人を促すが、二人は尚も結論を出しかねている。

仕方ないので、もう一つちよつとした芸を見せよう。それでも決めかねるのなら知らん。私は『ブリニヨルフの指示の下で』勝手にやらせてもらう。

フラゴンにいる全員に注目を呼びかけたあと、私は『霧の指輪』、『静かに眠る竜印の指輪』、駄目押しに『幻肢の指輪』を装備した。

「おい、おいおい兄弟。隠密が使えるなんて、いやこれは隠密と言つていいのか？　始めから隠れていたのならまだしも、見ている目の前で気配どころか姿が薄れた。それに音も消えた。これも魔法かい？

というか意外だな。君は巨人の一件からも、正々堂々戦うことを望む性質たちだと思つていたんだが、そういう真似もするんだな」

早速、相互理解を深めるべき機会が訪れた。

「あのときは張り切っていたからな。戦神に対して祈りも捧げた。だというのに相手がい甲斐なかつたために臍を曲げてしまったのだ。

しかしこれも伝えたとおり、私の信仰はいい加減でね。戦神本人とも手合わせをしてもいるし、然程敬虔ではないのだよ。

普段の戦闘姿勢としては、私が無事で、相手が死ぬのなら過程は何だつていい、というのが本音だ。畏も道具も、遠距離からの一方的な射撃も、私から言わせれば全て戦闘における正義だよ。

ああ、太陽神について厳密に言えば、戦神は太陽信仰と結び付けられているが、それは信徒たる人間が勝手にそう解釈していただけで、彼は別に太陽神でも何でもないんだ。

私としては、私に信仰を勧めた友の成し遂げたかった『唯一絶対の太陽を見つけ出す』ことができればと思ひ、太陽信仰を続けているだけのことであつて……」

ブリニョルフに我が信仰について語っていると、メルセルなる男から「おい！」と怒鳴られる。この男、自尊心が高く蚊帳の外に置かれるのが嫌いだな。好きになれそうにない奴だ。

「この忙しいときに二人だけでわけのわからない話をするのはよしてくれないか。作戦

の決行は刻一刻と迫っているんだからな。

そちらの御仁が実力者であり、隠密行動が可能であることも理解できた。しかしそれとこれとはやはり話が別だ。

作戦に不確定要素は……」

「おいメルセル、俺はこの男を作戦に参加させてもいいと思いは始めているんだがな。

襲撃先の連中には見知った人間も多い。しかし俺達だけでは生け捕りは難しい。なら、ブリニヨルフの言うとおりのこの男を参加させて、少しでも殺さずにすむ数を増やすべきじゃないのか？」

今までギルドマスターの顔を立っていたのか黙っていたデルビンが、ここで口を開いた。メルセルは敵でも見るようにデルビンを睨みつけている。それが仲間に向ける目か。

二対一の票がメルセル側からブリニヨルフ側に移ったが、まだ三人は喧々諤々言い合いを続けている。段々と面倒になってきた私は友に問う。

「なあブリニヨルフ、私は今、君の友としてここにいる。まだ盗賊ギルドの協力者ではない。君個人の友だ。だから君が決める。私を参加させるか、させないか。」

いや、いつそ私を道具だと思えばいい。よく切れる短刀か何かだと。作戦成功の確率を上げるための道具を使うか使わないか、それはそんなに君の権限を超えて議論が必要

なことか？」

怒鳴り合いに近かった言い合いがピタリと止み、ブリニョルフは考え込んだ。そしてすぐに顔を上げると、メルセルをまっすぐ見つめる。

「すまない、マスター・フレイ。後できちんと話し合おう。彼は作戦に参加させる。何かあれば責任は俺がとると誓う。以上だ。持ち場へ戻る」

彼はそれだけ言い捨てると、踵を返した。私は後を追う。酷な選択をさせたかもしれないが、いずれかの結論を出す必要はあったのだ。揉め続けているよりはマシだろう。

しかし、背後から聞こえる「おい！ まだ話は終わっていないぞ！」だの、「冷静になれメルセル。今は作戦に集中すべきだ。ブリニョルフの処分はあとでも決められる」だの、正統後継らしいこの派閥は大丈夫なのだろうか。

六、カチコミ

ブリニョルフは友である男と、ギルドの構成員と伴に、ラットウェイの出入り口にて準備を整えていた。

フラゴンでは喧嘩別れのようになってしまったが、お互い作戦決行前ということもあり、気が立っていたのだろう。特に自分は、丸一日走り通しだったのだ。疲労から気が短くなっているとは思議ではない。作戦後の話し合いでは、ある程度自分が折れてやる必要があるだろう。

というか、一度火がついたメルセルが自分に何かしらの処罰を言い渡しはしないだろうか。いや、独断行動を取ったのだからそれも甘んじて受けるべきだ。

長を尊重しない組織は脆い。現状を鑑みるに、組織の引き締めを図るためにも、「ギルドマスター、メルセル・フレイの権力は揺るがない」と示す必要があるとは自分も理解できる。間違いを犯したとは思わないが、やはり少々短慮だったかもしれない。

ブリニョルフがそう自省していると、男から声がかかる。

「友よ、少し馬鹿な質問をする。生け捕り、とはつまり『盗賊としての命』を保ったまま、という解釈であっているか？」

男の言わんとすることは理解できる。人間を生かして戦闘不能にするだけであれば、手段は案外多い。手足の腱を切る、膝や手足の甲を砕く、などだ。しかしそうした結果盗み働きに支障が出てしまつては本末転倒ではないのか。それを気にして、男は『生け捕り』の線引を明確にしたいのだろう。

「ああ兄弟。言うとおりの可能であれば、それでお願いしたい。だが正直なところ、逃亡されるくらいならその辺りはあまり気にしないでくれていいんだぜ？

逃亡するなら、そいつはいつ襲つてくるかわからない敵だ。仲間の命が脅かされるかもしれない。妨害工作に走られるかもしれない。

だが何かしらの障害を負つたとしても、そいつが降参してまた仲間になるのなら、そいつの培つてきた伝手は使えるし、後進への技術の継承を担当することもできる。

つまり兄弟の言う結果は最良のものではあるが、『比較的良い』程度でも十分に満足できるのさ」

男は納得し、頷いている。そして「盗賊の世界も厳しいのだな」と零した。

命が助かる道は広く用意してある。そう伝えたにも関わらず、厳しいと言う。普通は逆ではないかと思う。

そこでブリニョルフは、男が個々人の矜持に執着する傾向があることを思い出した。そんな男からすれば、自ら盗み働きができなくなつてまで生かされている状況という

のは、生き地獄ではないかと想像したのだろう。

もし自分の足が、手指が、満足に動かなくなつたならどうだろうか。本当のところはなつてみなければわからない。今はせいぜい、そうならないために最大限の注意を払おう。

自分は東側から、メルセルが北側から、西と南は蓋をするように人海戦術で封鎖。フラゴンはデルビンが守る。穴は無いはずだ。

辺りが暗くなつてきた。日没だ。リフテンに夜が、盗賊の時間がやつてきた。

「決行時刻だな。行くぞ」

ブリニヨルフは短く告げると、ラットウエイへと続く扉を開く。構成員達は臨戦態勢をとり、男はフラゴンで見せた気配を消す術を用いる。

先頭はブリニヨルフ、次に男、その後ろに構成員達が続く。

男の離反を監視するためでもあり、最も危険な殿を、何処の馬の骨ともわからぬ人間に任せられないためでもある。

ブリニヨルフは慎重に進む。これから相手取るのは自分達と然程変わらない技量を持つ盗賊だ。どのような罠があるかわからない。

襲撃決行時刻が深夜ではなく日没であるのは、一般市民からギルドの動きを隠しつつ、突入の際には多少時間をかけてでも細心の注意を払って進みたい、という事情が

あつた。

案の定、入り口からしばらく行つた場所に、罠が仕掛けてあつた。それも三重の罠だ。足元に見えづらく黒く塗られた細紐があり、これに触れると頭上の鳴子が作動する。手を上に伸ばして鳴子を抑えてから解除しようとするれば、丁度腹を曝した位置に、おそらく矢が飛び出してくるのである。穴が四方に空いている。穴の縁の欠け具合が特徴的だ。

かと言つて始めの細紐を無視して進もうとすれば、それを阻むように細紐が至る所に仕掛けてある。これのせいで、鳴子を無効化しようと矢の罠にそれぞれ人員を配置する、などという真似が不可能になつている。

つまり、どの道、細紐の罠を解除するしかない。かといつて、襲撃は迅速に行いたいため、こんな入口付近で足止めを食らうのは不本意甚だしい。

どうしたものかと思案していると、男が言った。

「この罠、面倒なのは矢の処理だけだと考えて良いか？ 矢さえどうにかすれば、あとは鳴子を抑えて罠を解除するだけ、と」

そのとおりではあるのだが、どうするつもりなのだろうか。男は「考えがある」といつて矢の罠の中央に位置どる。

そして左手にはいつの間にか革張りの円盾を持つている。男が解除を始めるよう、目

配せをする。滅多なことは起きないだろうが、不安はある。しかし男が自ら言い出したのなら、信じるしかない。

構成員の一人が男の側で鳴子を抑えたその瞬間、四方の穴から矢が飛び出る。

それと同時に男の身体がぶれて、側の構成員を中心に三回転したように見えた。終わってみれば、大道芸のお手玉のように、盾の上に矢が十数本乗っている。

「一応、硬質な音が立たないよう『ラージレザーシールド』を使ったが……これは毒矢だな。なかなか、相手も張り切って殺しに來ている」

今しがた見せた妙技などなんでもないような物言いで、男は静かに笑う。

ブリニョルフは思った。やはり自分の選択は間違っていないなかった。

メルセルとの話し合いには是非、今回同行している構成員にも味方になってもらいたいと考えるが、しかしそうすればメルセルは余計に臍を曲げそうな未来が見える。

能力はあるんだがなあ、とブリニョルフは先程怒鳴りあつたギルドマスター殿を思う。

が、すぐに意識を戻す。今は油断していい場合ではない。

その後も慎重に罠を解除しつつ進んでいくと、狭い通路を抜けたところに若干開けた場所が見える。一行は通路の脇にある窪みに身を隠す。

正面に独房のような居住空間が横並びに四つ、右手に二つ確認できた。

事前情報が確かなら、左手手前には登り階段がある。吹き抜けになっていて、通路を抜けたなら二階部分に相当する四方がよく見渡せるだろう。

おそらく、それぞれの地点に伏兵が潜んでいるはずだ。というか、これほどまでに待ち伏せが効果的な場所に人員を配置しないなど、そんな危機管理意識の欠如した者はかつての盗賊ギルドには一人もいなかった。

現に射手が一人、正面からこちらを警戒するように立っている。

さてどうしたものか。ブリニョルフが思案していると、再び男が言う。この男、実は楽しんでいないだろうか。

「正面に一人見えるな。おそらく他にも潜んでいるだろう。離れた仲間には知らせないためには、声すら上げさせない一瞬の制圧が不可欠。……友よ。今一度、私を信じてみる気はないか？」

類稀なる友人が、この手の物言いをするとき、それは何かしらの手立てを思いついているときだ。ブリニョルフはここ数日でそれを学んだ。

目線だけで肯定を示す。男も、頷きだけを返して一人進む。

男は「指輪の付呪だ」と話したが、本当に物音一つ立てないまま滑るように移動する。

そうしてもう一步で通路の暗がりから出る、といったところで一度足を止め、気が付けば獣のように一瞬で飛び出し、正面の射手へ当身を食らわせた。

返す刀で左後方を向いて懐から取り出した何かを投げつけ、同じく二階正面、二階右手へと数回投擲を続ける。

正直に言えば、ブリニョルフにも全て見えていたわけではない。あまりの速さに、そんな動きをしたような気がする、程度ものだ。

そもそも、男の姿は薄れ、透けている。至近距離で注視していた先程ならまだしも、距離が離れた場所で男が何をしたかなど、おそらく本人にしか正確なところはわかるまい。

後続のギルド構成員など、何が起きたのかまるで認識できていないものも少なくない。

男が、ひとまず終わった、とでも言うように手招きをするので、ブリニョルフ達は通路を出た。

するとそこには、当て身を受けて気絶した射手が一人。階段を転げ落ちた賊が一人。階段を登って確認すれば、一階部分と同じく計三人の気絶した賊が見える。

男が上機嫌に口を開く。

「どうだ私の投擲術は。ある程度の距離までなら、前に横に転げ回りながらも標的へ向けて正確に投擲する自信があるぞ。これは射的術も同様だがね。全員顎に掠めさせただけだから、まあ砕けていて多少殴り合いに弱くなったとしても、盗賊稼業に支障は

あるまいて」

顎が砕ければ稼業以前に日常生活へ支障が出るのだが、一応は男の優しさを喜ぶことにする。

見れば倒れている賊の側には、金貨が一枚ずつ落ちていく。はて、この男は金貨なんぞ持ち合わせていただろうかと考えたが、そう言えば墳墓でペンダント以外の戦利品は彼の物になったのだった。おそらくはそれを使ったのだろう。

……一つの懸念がブリニオルフによぎったので、一応確認しておく。

「なあ兄弟。君の故郷や、ロードラン、ロスリックでは、貨幣経済つてものは成り立っていったのかな？」

「妙なことを聞くじゃないか兄弟。勿論、そのようだったとも」

男があまりに当然の如く金貨を投擲物として用いたための心配であったのだが、一応は経済圏出身の民であったようだ。そういった常識までもが食い違っていないことに、ブリニオルフは安堵する。

そして男の言うとおり、自分達はすれ違いを起こさないためにも、常識や価値観を細かく擦り合わせていく必要があると思つた。少なくとも、友人が物々交換しか知らない野蛮人なのではないかという懸念を抱かずにすむまでは。

男は金貨を片手に警戒を続け、ブリニオルフと構成員達は気絶した賊を縛り上げてい

く。と、ブリニョルフは氣絶した面々を見てあることに気が付いた。

作戦決行までに時間が足りなかったために伝えられなかったが、現在襲撃中の派閥はブリニョルフにとって馴染み深い者達で構成されたものだったようだ。

「兄弟、連中を殺さずに無力化してくれたことに、礼を言わせてくれ。それから、もう一つ頼みができた。おそらくこの先にヴェケルという男がいる。こいつらの中ではおそらく第二席だろう。そいつは俺以上に方々へ顔が広がってね。その伝手は馬鹿にできない。これからのギルドに必要な人間と言えるだろう。……ついでに、俺と親しくもしていた。できれば、その男こそ生け捕りにしたい」

男は「君が言うのなら私に否やはない」とヴェケル生け捕りを了承した。

ブリニョルフの言葉には多分に私情が含まれていたが、元仲間を手に掛けるのは誰だつて後ろめたい。ことさらに問題視してメルセルに報告しよう、などと考える者はいなかった。

一行は更に進む。ブリニョルフ達盗賊ギルドの面々は順調に仕掛けられた罠を解除していき、男は配置された賊を素早く無力化していく。

男は密かに思った。いくら盗賊達の罠だとはいえ、罠の類が多過ぎやしないかと。そしてそれを解除する連中も、この手の作業に慣れ過ぎてはいないかと。

ギルドの面々は思った。ブリニョルフの連れてくる男が無能とは思わないが、それに

しても戦闘力が常識外れではないかと。自分達盗賊の素早い反応と動きは、けして楽に捻られる赤子の手ではないはずだと。

お互いが腑に落ちない思いを抱えつつも、一行は先へ先へと進み続ける。この調子なら、北側から侵入しているはずのメルセルが鉢合わせる賊の数を減らせられそうである。

実のところブリニョルフは、メルセルとヴェケルを極力接触させたくないと考えていた。

メルセルは情に流される男ではない。用心深く、安全を優先し、損害を回避するためなら多少の利益は簡単に捨てられる。

だからこそ、メルセルは失敗しない。性根は盗賊らしく強欲ではあるが、その仕事ぶりは堅実の一言だ。

そんな人間が友と接触すれば、「二度裏切った幹部」という事実を重く見て、生け捕りではなく殺害を優先してもおかしくはない。

ブリニョルフは密かに焦っていた。

これまで同様、男が賊を無害化した後、ブリニョルフ達はその部屋を見渡した。

そこは今までに見てきた広間や部屋とは違い、多少なりとも清潔感を保ち、少数の調度品まで飾られている。如何にも、『仮宿の中では一等の部屋、頭かしらの執務室』といった具

合だ。

執務室を制圧した男が「ここで最後か？」と尋ねて来るが、ブリニョルフには何かが見つかかる。まだ全ての区画を調べたわけではないが、おかしい。しかし何かおかしい？

じつと部屋を睨みながら考え込むブリニョルフを他所に、男と構成員達は回答を待たず、手慣れた様子で賊を縛っていく。わかった、『如何にも』が過ぎるのだ。『ここが終点だ』という主張がくどいとも言える。

ブリニョルフは執務室の壁と床を念入りに探る。違う、ここは行き止まりだ。

次に通路まで戻り、同じように壁を探る。僅かな見落としも無いように、五感を最大まで活用し、神経を研ぎ澄ませる。

ふと、右手の指先が違和感を覚えた。そこから手繰って、ほんの僅かな切れ目を壁に見つける。更に周囲を探り、巧妙に隠蔽されたスイッチを足元に見つけた。

スイッチを踏みながら、切れ目を押す。

すると、一瞥しただけでは壁としか思えなかったものは、簡単に手前と奥に半回転した。回転扉である。

これだ、これを隠したかったのだ。

ブリニョルフは扉を潜った。後ろから自分の様子を眺めていた男が「流石だな」と感

心している。おそらくこの先に……。

「来たか、ブリニョルフ」

ブリニョルフの友、ヴェケルがいた。

七、ことの仕置と今後の指針

「昼間にウチの大間抜けから、酒を買いに町へ出たと聞いてな。

本人は誰にも見られてはいない、怪しまれてもいない、なんて自慢気に吹いてやがったが。俺にはどうにも嫌な予感がした。

お前達が昼も夜も血眼になって俺達を探していることは知っていた。そんなお前達が、本当に何も気付かないままにいるだろうか。

……この状況を見れば、案の定だった、ということだな」

それはそうだろう。聞けばフラゴン一派は内外にその存在を示すため、離反派閥撲滅に随分と注力していたようだ。「血眼」とは大袈裟ではあるまい。

しかし、優秀な元盗賊ギルド員であつても、長く続く抑圧された生活に耐えられない者が出てしまった。それが此奴等の運の尽きだった、と。

隠し通路の奥の部屋に、男が立っている。他には、男の後ろに三人、おそらく死角になつている手前左右に一人から二人ずつ。全部で六人から八人。制圧は可能だな。

目の前の男がヴェケル、ブリニョルフが話していた友か。なるほど、なかなか油断ならない良い雰囲気だ。

「ガマシンの奴はどうした。お前たちの頭目はここには居ないのか」

「あの卑怯者ならもう居ない。俺が殺した。」

奴もここは危ないと判断したんだろうな。だが皆で逃げようとはしなかった。俺がこの部屋で奴を見つけた時、他の連中を置いて一人で逃げる支度をしていた。元はと言えば、メルセルを認められない連中を奴が焚き付けたって言うのにな。僅かでも自分が生き残る可能性を高めだっただらうが、俺は許せなかつたよ。

だから問い質したんだ。そうしたらあのクズ、なんて言つたと思う？ 『そうだなヴェケル、お前なら役に立つてくれるだろう。二人で逃げよう』だとよ。

あまりの有難さに、涙が出ちまつたよ。それで気が付けば奴を斬り殺してた。

だからもう、ここに奴は居ない。死体も片付けた。悪かつたな、手柄を減らしてしまつて」

「ヴェケル、ああ俺の友よ。寂しいことを言つてくれるなよ。」

俺が、メルセルにお前達の首を喜んで差し出す男だと思ふのか？ メルセルに尻尾を振る犬だと？ 馬鹿を言うな」

「だがお前達は奴を担ぎ上げた。違うか？ あの酷薄を絵に描いたような人間をだ。あんな奴をガルスの後継だなんて認められるか」

「頼むよ、わかってくれ。ギルドの状況はお前だつて理解しているだろう？」

現状を耐え忍ぶには、腕が立ち、何より頭の切れる人物が頂点に立つべきだと思ったんだ。

例え酷薄だろうと人望が無かろうと、力で面倒事を抑えつけ、外部と交渉し、外敵から皆を守り、確実な仕事でギルドの信用を取り戻す。

それを最も上出来に熟^{こな}せそうだったのが、メルセルだったというだけの話さ。

不満は理解できる。だがそれを飲み込んででも奴を担ぎ上げ、その上で俺達は結束するべきだったんだ」

「見解の相違だな、プリニョルフ。

お前は、俺達や他の連中がメルセルから離反したことが窮状の原因だと思っているかもしれないが、俺達から言わせれば、メルセルがギルドの頂点に立ったことがそもそも間違いだっただんだ。

メルセルでさえなければ、例えばリフテンの外に居を構えたブレックスの野郎のほうがいいマシだった。

フラゴンのお前達の中で言えば、デルビンでも、何ならお前だって良かった。

デルビンに比べればまだ若く貫目は足りないかもしれないが、お前の腕はギルドの誰もが一目置いている。

新しいギルドの出発に、若く勢いのあるマスター。どうだ、悪くないだろう？」

「……お前だから話すが、実を言えば考えなかったわけじゃない。でも、やつぱり俺じゃあ駄目だ。

結局はなにかにと不満が噴出して、大なり小なり離反者が続出しただろうさ。

本当の意味でガルススの跡目が務まる人間なんて、ギルドには居なかったんだ。心から残念なことだな。

ガルススが殺されたのは大きな痛手だった。痛恨と言つていい。だがその直後なら、まだ立て直しはできたかもしれない。それもこうなつては無理だ。

ギルドはこれから、坂を転げ落ちるように衰退していく。

だからこそ俺は、この苦境を乗り越えるために一人でも多くギルドに戻つてほしいんだ。そしてまた力を合わせて、輝かしい日々を取り戻したい。そう願つている」

「……………我が友ブリニヨルフと、ヴェケルなる男の言葉の応酬が続く。

部外者の私としては、やれることが他のギルド構成員と同じく警戒くらいしか無くて困る。

一応話は聞いていたため、連中の頭目は目の前の男が殺した、ということだけは把握できたが。

それにしてもメルセル・フレイ、嫌われ過ぎではないだろうか。

離反した者が掲げる理由がたった一つということはないだろうが、しかし多数の者が

『新ギルドマスター憎し』の動機を持つているようだ。

友の言うこともわかるのだが、理屈で全てが回るのなら誰も苦勞はしない。

まあそれだけ、ガルスなる前ギルドマスターが偉大な男だったということの裏返しなのかもしれない。

友の言葉を正しいとするならば、デルビンやブリニョルフがギルドマスターに就任したとしても、一時は凌げても能力的な問題からギルドの衰退には歯止めをかけられない。

その状況を憂いて見切りをつけ、離反する者が出る。

言い方は悪いが、『ギルドを守る』という命題以外を全て雑事と切り捨てられない膿を一度に出し切るか、後にまで尾を引かせるか。その二択でフラゴンの面々は前者を選択しメルセル・フレイをマスターと定めた、という話なのだろう。

何が正解かは私にはわかりかねる。ただまあ、純粹な感想として、彼のギルドマスターはもう少し人の心を繋ぎ止める努力をすべきだと思っただが。

「なあヴェケル、俺は本音で話した。だからお前も本音で話してくれ。

お前がメルセルの下を離れたのは、何も奴さんが気に食わなかったからだけじゃないだろう？

お前は仲間思いな奴だ。大方、メルセルは気に食わないのにリフテンを離れる踏ん切

りもつかない連中が心配で、共に行動したんじやあないのか？

まだ間に合う。少なくとも俺達が会敵した連中は全員生きてる。

ガマシンが居ないのなら、お前さえ投降してくれば、俺が一党まるごと許しを得られるようにメルセルに話をつける。必ずだ。

だからヴェケル、頼むから投降してくれ。それでことは全て丸とうまく収まるんだ」

そもギルドの方針として『可能であれば生け捕り』とされているのだから、投降したのなら一応は助命されるだろう。

しかしメルセル・フレイに不信感を覚えている人間にそれを言ったとしても逆効果になりかねない。

我が友は自らの手柄を水増しするために小賢しい知恵を働かせる人間ではないはずだ。真にヴェケルが受け入れやすい言葉を選んでいるのだろう。

だが当のヴェケルは「全員？」と訝しんでいる。

それはまあ、どうにか物音を立てずにここまで突破してきたとしても、まさか全員生け捕りとは思えない。

迅速かつ密やかに塵殺してきたと思うほうが自然だ。

ブリニョルフもそう考えたらしい。こちらへ目配せしてくる。

「お前が俺に嘘を言うとは思いたくないが、にわかには信じ難い。寧ろ、蒸し返すように悪いが、メルセルへの手柄とするために、俺達を謀ろうって考えのほうがつくり来る」「ヴェケル、悪いが俺も急いでいるんだ。仲間を無駄に死なせないためには、本隊のメルセルに先んじて皆を降伏させなきゃあならない。ことは一刻を争う。

少し痛むだろうが、我慢してくれ。そうすりや、『全員生きてる』手品の種が割れるつてもんだ」

ブリニョルフが後ろに回した手で呐喊の指示を出す。

それを見て彼の脇を滑るように駆けるが、私が動き出す直前、「口と足は傷つけるな」と追加の指示が入った。

お安い御用だ。

私はヴェケルの懐まで一足で詰め寄ると、立てた掌底で鳩尾を軽く撫でる。十分に勢いが乗っているため、力を込めずとも息は止まるだろう。

私の姿を鮮明には視認できずとも、何者かが副頭目に危害を加えたことは察知したのだろう。矢と懐剣ダガが死角であった出入り口の脇、左右後方から飛んでくる。

私以外の誰にも当たらない射線であるため避けてもいいのだが、相手に予想外の動きをされて同士討ちになっても悪い気がする。

味方ばかりのこの狭い室内で毒は使うまい。矢もナイフもそのまま受けた。

薄れた姿に得物が突き立っている様は強烈な違和感を呼び起こすようで、それを放った者等は一瞬動きが止まる。

そこに、今日、何度目かわからない金貨の投擲を行う。

ヴェケルの姿が陰になって状況の把握に数瞬遅れた後ろの三人が動き出す。しかしそれだけあれば十分。全員の顎を拳で揺らし、失神させた。

私がこれまで仕留めた賊の中で、実際に顎が砕けている者は少数だった。だと言うのに、縛り上げるギルド構成員達はやたら痛ましげで、少々据わりが悪かったのだ。

しかしこの部屋の人間は間違いない無き全員無事だ。

私が投擲の力加減に慣れたこともあるし、何より距離が近かった。然程威力は要らない。うまく金貨が面で当たると調節も出来た。

拳で撫でた三人に至っては、直接この手を用いたのだ。言うまでもあるまい。

私は私の仕事に満足していた。

唯一気絶させなかったヴェケルは、何が起きたのか、とでも言いたげに目を見開いて驚愕の表情だ。

……いや、目に関しては、四つん這いになって派手に嘔吐しているのが原因かもしれないが。見た目は悪くとも、生きているのだから許してほしい。

「ありがとう、兄弟。見事に全員無事だな。注文に応えてくれて助かるよ。」

さてヴェケル、まずは呼吸を落ち着けてくれ。それで、真実は見てのとおりだ。俺達はこうやってここまで進んで来た。生け捕りの信憑性は上がったかな？」

「ああ認めるよブリニョルフ。俺の負けだ。なんというか、エライ助っ人を連れてきたみたいだな。とてもじゃないが敵いそうにない。

……俺も、考えなしの馬鹿共とは言え、皆を死なせたくない。降伏する。

俺からも呼びかけよう。そのために俺の意識は保たれているんだろうしな」
ブリニョルフはヴェケルから言質を引き出した。一安心、といった様子だ。

だが、ヴェケルが一言だけ付け加える。

「投降はするがブリニョルフ、覚えておけよ。俺はメルセルを認めたわけじゃない。それは他の連中も同じだろう。

それを忘れると、いつか二の舞になりかねんぞ」

ブリニョルフの表情は一転して苦み走り、ただ黙っていた。

ブリニョルフ一行がヴェケルを降伏させた後、ヴェケルは残党となった仲間へ投降を呼びかけた。

頭目は死に、実質的な頭目となったヴェケルも降った。

中には攻め込まれたこと自体が信じられずに抵抗する者もいたが、概ねはヴェケルに従い投降した（抵抗した者は丁寧に寝かされた）。

そうして急ぎ残党を無力化すると、ブリニョルフはすぐにラットウェイを北側へと移動し、メルセルとの合流を図った。

ブリニョルフは、メルセルがヴェケル以外の離反者達に対しても『可能であれば生け捕り』の基準を高く見積もっているのではないかと懸念していた。そしてそれはどうやら当たりだったらしい。

会敵した頻度も人数もブリニョルフ達のほうが多いはずだが、メルセル一行の面々は、ギルド構成員の証である革鎧を血で汚している。

ブリニョルフ一行が本隊であるメルセル一行と合流したのは、メルセルが今まさに会敵し、奇襲に打って出ようとしたときだった。

奇襲を止める猶予は無かったが、ブリニョルフが言葉を発せずとも以心伝心とばかりに男が飛び出す。

男はメルセルの短刀を小盾で防ぎ、自分がまさに今、死にかけていたことにやっと気付いた賊が反応するより先に、後ろ手の肘打ちで黙らせる。

他の本隊の者が弓や投擲で狙い定めていた賊も、全て金貨の投擲で意識を奪った。

メルセルは何事かと身構えたが、ブリニョルフが出てきて事情を説明する。

敵の頭目は既に死んでいること。副頭目以下残党は投降したこと。会敵した者は全て生け捕りにしたこと。

メルセルはヴェケル同様「生け捕り」の件で訝くだけしんだが、たった今自分が見た光景を思い出し、すぐに納得した。

「面白くはない」といった面持ちではあったが。

その後、手分けしてラットウエイ内の敵対派閥一党を全て無力化したことを確認すると、盗賊ギルドの面々はフラゴンへ帰還した。

現在、私はブリニョルフの自宅で一人、寛いでいる。少々思案していることはあるが、人目につかない場所で心身共に弛緩しているのは確かだ。

彼に言わせれば「ギルドこそ我が家」らしいので、この家についてはどうも、世を忍ぶ飯の拠点、という意識が強いようだ。

まあわからないでもない。彼のギルドへの献身を見ていれば、陰と日向のどちらに重きを置いているかは自明である。

ちなみに、もう日は昇っている。やはり日の出の光景は良いものであった。

急な訪問があつても怪しまれないようにか、家の中にもそれなりの物資がある。

彼を待つ間はどうぞ暇なのだから、食事でも作つて時間を潰そうと思う。

遠い記憶を頼りに、根菜の皮を向き、適当な大きさに切り鍋で炒め、次に葉菜を投入する。

火が通つた気がするあたりで水を入れて茹でる。大の男が野菜だけでは足らんだろうと、干し肉も入れる。

あとは火を弱めて灰汁をとりながらダラダラと過ごす。

美味しいか不味いかは知らん。私は長く料理などしていなかったのだし、彼も私に料理の腕を期待してはいないだろう。

そもそも私は、食べられはしてもその必要は無い。

あれこれ忙しい友人の時間が多少減れば、それでいいのだ。

いい具合に根菜が柔くなった頃、家の主が帰宅した。

「遅かつたな、友よ。上司殿に絞られたか？」

「ただいま、兄弟。それはもうこつてりとね。君にも話しておくべきだな。」

それはそうと、飯の支度をしてきていたのかい？ 意外だな。君が料理とは。まるで上さんでも貰つたみたいだ。」

私は「そつちの趣味は無いぞ」と釘を刺し、続けて「丁度出来上がったが、味は保証しない」と言つて配膳を進める。

初めて敷居を跨いだ家だが、気安さだけは勝手知つたる、といった具合だ。

それに男二人、別段、気取る必要もあるまい。鍋ごと机の中央に鎮座した汁物に、パンとチーズを添えて、朝餉と相成つた。

「……ちと塩気が足らなくないかい、兄弟よ」

「干し肉だけでは不足であつたか」

ブリニョルフは、それなら丁度いい物がある、と別の干し肉を取り出した。こちらはかなり塩気が強いそうだ。

追加の干し肉をナイフで削りながら直接鍋へ投入し、食事が再開されたところで切り出した。

「それで、どうなんだ君の処罰は。私は組織運営に関わつた経験が無いから憶測だが、全くの不問、とはいかないのだろう?」

「ああ兄弟。『半年間のフラゴンへの立入禁止』、それが俺に下された裁定つてヤツさ。案外軽くすんでほつとしてゐるよ。ただ、デルビンが底かほい立てしてくれなきや、ちと危なかつたかもしれない」

彼の話の聞くに、ギルドの構成員は、基本的にフラゴンで仕事を割り振られるらしい。

勿論、自ら培った伝手で仕事を得ても良いが、いつ、誰から、誰を（若しくは何を）対象とした、どんな内容の依頼なのかは、必ず実行前に報告する義務があるようだ。

万一、密かにギルドが友好関係を築いている個人や勢力を害することがあつてはいけない、という理屈だとか。道理である。

そしてその報告義務が存在するために、フラゴンを一切介さずに盗賊稼業を行うことはできない。

つまり我が友の実質的な処罰内容としては『半年間の盗賊稼業禁止』、ということになる。

これを破ればギルドを追われるため、ギルド復興を目指す彼に従わない道は無い。

「実は、この裁定になったのは、兄弟とヴェケルの件もあつたのさ」

どういふことだろうかと思っていると、ブリニョルフの裁定と共にヴェケルへの裁定も同時に行われたことが原因らしい。

「予想どおりというか、メルセルがヴェケルを殺そうとしたんだ。平の構成員ならまだしも、幹部でありながらギルドを裏切つた事實は看過し難い、とね。

しかし理屈はわかつて、それじゃあ今回投降した連中が収まらない。

すると奴さん、『ヴェケルは自らの命と引換えに他全員の助命嘆願を行った』なんて話をでつち上げようとすましてね。流星にそれは信義に悖るだろうとデルビンも慌てた

ものさ。

一応、話の筋としては通らなくも無いあたり、タチが悪い。

それで俺が兄弟の言葉を思い出して提案したんだ。盗賊としての命を絶つことで決着としてはどうか、と。

ヴェケルは今後、フラゴンの管理を任せられる。しかし盗賊としてではなく、一雇われ人としてだ。当然、稼業は一切認められない。

奴は一流の盗賊だが、ギルドに所属している限り、仲間が稼業に精を出すところを眺めることはできても、自らその腕を振るうことはできなくなる。だがギルドを抜ければ、今度こそ裏切り者として確実に処分される。

俺は奴の命を助けることだけではできたが、同時に酷な人生を押し付けてしまったかもしれない」

寂しげというか自罰的というか、沈んだ表情の友に問うてみた。「ヴェケル自身は何と言っていたのだ」と。

すると友は答えた。

「二、三、短くな。『一度は捨てたと思つた命だ』『感謝する』。それだけだ。

俺は、この裁定が実際にどれほど辛いかわからないか、案外受け入れられる程度のものなのか、それがわかるのもう少し時間が経ってからじゃあないかと思つてる」

「君は友の命を助け、今の所、彼奴はそれを受け入れている。ならば良いのではないか？

人は生きていてこそ為せることもある。死んでしまえばそれまでだ」

少し据わりが悪く、「不死人の私が言うのも何だがね」と付け加えた。

ブリニョルフの面持ちは少し上向いたように見えた。

「そんな具合にヴェケルの処罰が決まったところで俺の番さ。親愛なるギルドマスターは初め、俺には幹部からの降格と、昇格資格の永久剥奪、他にも色々と考えていたらしい。

だがそれはデルピンが止めた。俺を平に落としてもどうせ手柄を上げる。それなのに長く昇格させない事態が続けば、組織として健全とは言い難く、何より他の構成員へ悪影響を与える、つてね。

ついでにこうも続けていたな。今回の件で俺に恩を感じる構成員の割合が増えた。そんな状況で俺に厳罰を下すのは、折角、敵対派閥を処理したつてのに、組織の盤石化を阻害することになる。本末転倒だ。『けじめ』を付けるための形式的なものであれば十分だと。

色々思うとおりにいかないメルセルは面白くなかつたろうな。

そこで奴さんはヴェケルの件から着想を得たのか、そんなに盗賊としての命を失うこ

とが辛いのならお前もそうしてやろう、と言つてね。なかなか得意気だったよ。

経緯としちやあそんな具合に、俺の処罰は決まったわけさ」

ヴェケルの件では友を慰めただけに、同じ裁定を下されたことについて重いとは言ひ辛い。

しかし裁定を下した側には人の嫌がることを率先して行おうという捻じ曲がった性根が見え隠れする。メルセル・フレイ、やはり好きにはなれんな。

「心配するな兄弟。言つたろう『案外軽くすんだ』つて。

別に俺は地位に拘る趣味は無いが、それにしたつて平と幹部ではやはり権限が違う。仕事をする上での『やりやすさ』つてもんが天と地なのさ。

そして、ギルド復興には長い時間がかかると覚悟している。それを考えれば半年程度の謹慎ならどうつてことは無いしな。

ついでに、『世間一般常識』つてものを教えて差し上げないといけない、手にかかる友人もいることだからね。……真面目な話、字の読み書きくらいはできないと色々と不便だぜ、兄弟」

それを言われるとちと辛いのだが……。

何にせよは、メルセル・フレイに対して友は欠片も含むところが無いわけではないだろうに、それを口にしてはいない。表にも極力出さないようにしている。私があればこれ

言うのは野暮だな。

いや待てよ、この処罰内容であれば、私が寛いでいる間に考えた『思いつき』を聞いて貰っても良いのではないだろうか。

「友よ、君の処罰については了解した。そこで話は変わるのだがな。少し考えたことがある。聞いてくれ。」

繰り返し言うが、私に組織運営の経験は無い。素人考えの域を出ないだろうから、間違いであれば指摘してくれ」

ブリニョルフは「はて何事であろうか」という顔をしている。

私が目下最優先で行うべきことは、スカイリムで生きる上での常識を知ることだ。どこか見知らぬ土地に辿り着いたとしても、問題無く生活を営んでいけるような。

しかしそれには時間がかかる。座学もいいが、実体験を得なければ身につかないこともあるだろうからだ。

そこで私としては、最優先課題は何か別のことに着手しつつ進めるべきだと判断した。

「ブリニョルフ、まず確認だが、他に離反派閥と言えるものはいくつある?」

「大きく分ければ三つ、正確に言えば一つだ。」

現状で既に所在が判明しているのは、ここから北にある砦を根城に定めた連中がい

る。頭目はブレックスという男だ。

こいつはメルセルを認められなかったこともあるだろうが、何よりガルス信奉者だった。奴の中では、盗賊ギルドという組織とガルスという存在が等分で結びついていた。

ガルス亡き今、ギルドは盗賊ギルドであつて盗賊ギルドにあらず、といったところなんだろう。似たような考えの連中と、あとは度々仕事を割り当てて子飼いのようになっていた連中を連れて、さつき言つた砦に籠もつた。

なかなか思い込みの激しい男だが、腕は確かだ。なんなら、今日相手にしたガマシ一派よりもな。

尤も、報告では盗賊というより大規模な山賊、という状況らしい。盗賊らしさを捨てたあたり、ガルスの居ない盗賊ギルドには本当に未練が無いんだらうな。

普通であれば討伐の触れが出されるが、奴はまだリフテンの支援者とのつながりを切つてはいないだらう。その辺りは、まったく嫌になるが強かと認めざるを得ないよ。流石は元幹部、と言つたところかな。

とはいえ、今日の襲撃作戦でリフテン内の離反者はあらかた片付き町の中は落ち着いたから、その支援も細くなつていくとは思うが。

もう一つは派閥と呼んでいいのか微妙だ。理由は様々だが、ギルドを離反し、広くス

カイリムに散った連中だ。シロデールに流れた連中もいるとかどうとか。

特徴としては、散った後も相互に連絡を取り合っている、ということだな。縦のつながりを切って、横のつながりだけを維持している、広く浅い集団だ。

まあ、時間の経過と共にそのつながりも薄くなるとは考えているが、正確なところはわからない。

そして面倒なのは、こいつらはいつどこで障害になるか、はつきり言って読めないところだ。

小蠅の如く実に鬱陶しいことだが、まとまって動かれなければ、こちらには情報も入ってこないし、手出しも困難だ。

散々気を揉んだ挙げ句、何事も起きず何の支障も無かった、なんてこともあり得るだろうが、一応悪いほうに想定はしておくべきだろう。

最後に、他にも幾らか『正統後継』に名乗りを上げている連中はいるんだがね。こいつらははつきり言って木っ端だ。どうとでもなるから考えなくていい。

どうも最初は二つ三つにまとまっていたようだが、阿呆なことにすぐに仲間割れを起こしたようだ。細分化した結果、脅威でもなんでもないゴロツキ集団にまで転落した、というわけさ。

まともに『派閥』と言えるものは案外少ない、ということか。

「ありがとう。よくわかった。では、折角説明して貰ったのに悪いが、今の話は脇に置いて本題に入りたい。

ブリニョルフ、君は現在の盗賊ギルドに、新しいシノギとやらを齎すつもりは無いか？ ……私が何を言いたいのか訝しげだな。聞いてくれ。

君たちは今、支援者とやらの援助を受けている。しかし組織だろうと個人だろうと『貸し』のある者が強い立場に、『借り』のある者が弱い立場になるのはどこも変わらないだろう。

そして君はギルド復興には長い時間がかかると見ている。つまり長い期間、支援を受け続けることになるな。立場の強弱はより顕著になり、無視できないものになるだろう。

悪くすれば、その支援者の胸先三寸でギルドを潰されかねず、それを回避するためにギルドが支援者の走狗となりかねん。

ならばその支援者に勤付かれないよう、別口で恒常的な稼ぎを用意するべきだ。…ここまでに何か大きな間違いはあるだろうか」

ブリニョルフは険のある表情で考えている。そして「続けてくれ」と促してきた。

「そこで私は考えたのだ。何処カリフテンではない町で、その運営に深く食い込むことはできないだろうかと。

五大都市は難しいだろうな。大きな町で新参者が力を持つのは現実的ではない。

私の古い記憶を辿っても、町の運営を担っていたのは、血を遡ればその土地での豪族だの、町が興つてすぐにやってきた貴族や豪商だの、といったところだった。

では五大都市以外ではどうだろうか。勿論、似たような存在はいらるだろう。

しかし中には都市運営に問題を抱えている場所もあるのでないだろうか。そこへ接触して、少しずつ食い込んでいく。

どうせギルド復興に長い時間がかかるのなら、こちらも長い時間をかけて町に根を張るのだよ。

そして計画が順調に推移したのなら、現支援者の影響力は相対的に小さくなる」

「兄弟、君がこうした暗躍というべき話を持ちかけてきたことに、強く驚いている。

君個人の力にはもう感覚が麻痺しつつあるが、これはまた毛色が違う。

……一先ず話を戻そう。兄弟の言うそれだが、問題もあるぞ。

町に介入するとなれば、それこそ個人の力では難しい。無理と言いつてもいい。

だからこそ、資金と人員を揃えた貴族や豪商でなければ難しいわけだ。その点はどうする？」

「君が先程話してくれただろう？ ブレックスだったか？ その一派を私の傘下におく。」

頭目が前ギルドマスターの信奉者というのだから、そう簡単ではないと理解している。

最悪、連中を塵殺する羽目になったとしても、ギルドとしては敵対派閥が消えただけで不都合は無い。

私としては、別に人員はその一派でなくとも構わんからな。行き場の無い連中を移住させてもいいし、近隣の賊共を従え押し込めてもいい。

とにかく、人員を揃えて、それを以て継続的な利益を出し、更にそれを町での地盤固めに利用する。

それに『外部協力者』だったか。君が道々話してくれたが、本来であれば表の顔として確固たる地位のある人物が望ましいのだろう。

ならば『町の有力者』はそれに相応しいはずだ。そして、ギルド側の担当窓口が君、という具合だな。

……なあブリニヨルフ、二人で町を牛耳ってみないか？」

ブリニヨルフの顔が一層険しいものになる。話題が話題だから理解できんでもないのだが、そんなに穴だらけな計画だろうか。

私としては、大筋だけ示して、仔細は知恵者たる彼が詰めてくれれば、くらいの思いだったのだが。

ブリニョルフは自省せねばならなかった。

目の前で呑気に「ああ、そういえば丁度、討伐の触れが出にくい状況にあるのだろう？ ならば頭目を討つてしまった後も、うまくすればそれを継続させられないかな」となどと提案している男を侮っていたことをだ。

確かに個人的戦闘力と言えば、タムリエル中を探しても並ぶ者はいないだろう。古き英雄ですら怪しい。

だが、どこか抜けた印象を与えるこの男を、善人だと誤解した。自分ならうまく付き合つていけるとも。道義さえ弁えれば、味方としてあてにし続けられる、とも。

男の語つた来歴を疑うわけではないが、纏うその緩い印象から軽く考えてはいなかっただろうか。

男は、殺し殺され奪い奪われる殺伐とした環境に長く身をおいていた異常者である。だというのに、自分と違和感無く会話をし、常識は通じずとも道義的には善性を保つていたために誤解した。

いや寧ろ、それこそが奇妙さをより強く引き立てると理解すべきだった。

尚武の氣風が強いスカイリムでは、流血沙汰など日常茶飯事だ。だから男が戦闘を躊躇しなくても不思議には思わなかった。

しかしそうではなかったのだ。男は、敵であろうとも無かるうとも、人を傷つけ、奪うことに躊躇いが無い。

男がそうしないのは、単に面倒事を嫌つてのこと。真に危害を加えない相手など、友とそれに連なる者だけなのだろう。

男は言った。殺伐とした場所に馴染み過ぎていた、その常識を引きずっていた、と。我が身を省みているあたり、血で血を洗う地獄の流儀を止めるつもりはあるのだろうか。

しかし人間の根底はそう簡単には変わらない。

自分は男を『良い奴』だと言った。それは間違っていないと今も思う。しかし『善人』ではけしなかつた。

ブリニョルフとて盗賊である。標的であれば奪うし、時には傷つけることもある。闇に生きる人間が、今更、道徳的かどうかなど気にしない。男との友情も変わらないだろう。

だが町を牛耳る？ いったいどれ程の血を流すつもりでいるのか。

ブリニョルフは、つい先程口にした「驚き」など可愛いものであつたのだと、現在の衝撃を以て実感した。

八、作戦会議

「兄弟の言い分はわかった。俺の個人的な思いや計画成功の可能性の多寡を別として考えれば、かなり有効な一手と言えるだろう。

それどころか、もし目論見どおりにことが推移したとしたら、支援者の発言力が相対的に小さくなるだけじゃない。多くの問題が解決し、ギルドの復興も格段に早くなるはずだ。良いことづくめだな。

ちなみに、主だった支援者は『ブラック・ブライア』家と言い、他にも他家がある。まあ、筆頭支援者殿の顔を損ねない程度だから、そいつ等は然程気にしないでもいい。我が友は蜂蜜酒を片手に机へ両足を乗せ、すっかり寛いでいる。これが彼の自宅での作法なのだろう。少々行儀の悪いことだが、家主であり、盗賊でもある彼にそれを期待してはいない。

その寛ぎ姿勢のまま、私に説明するような、ほろ酔い気分に任せて一人語るような、そんな調子で続ける。

「……話を戻すが、計画の恩恵は直接的収入源が増えるという実利に収まらない。

まず、ギルド運営を多少大胆にできる。どんな物事もそうだろうが、労力や危険を抑

えれば利益もそれなり程度にしか得られず、逆もまた然りだ。

メルセルに任せておけば失敗しないことは間違いないが、あまり萎縮した活動は皆の士気に関わる。

誰だつて失敗したくないとは思いつつ、その一方で、自分の持てる全ての力を使って難題に取り組みたい、とも思うものさ。腕に自信のある奴や若い奴ほどそういう傾向があるな。俺も、まあ、無いとはいえない」

私はどちらかと言えば臆病な性質であるため、そういった冒険心はやや薄いのだが。言わんとすることはわかる。

そして、士気に関しても。これが底をついたままでは、折角ギルドを纏めるためにメルセル・フレイを担ぎ上げたというのに、櫛の歯が欠けるように脱落者が出かねない。「そして、更なる支援を募ることもできるようになる。これはブラック・ブライア家に対してもそうだし、全くの別口にも言える。

君、『ブラック・ブライア家の発言力を弱める話をしているのに受ける支援を増やしてどうするのか』という顔をしているな？ からくり、と言うほどでもないが、まあ聞いてくれ。

支援者と被支援者の力関係つてのは、後者が困窮しているからこそ成り立つ。だが被支援者たるギルドが独自の収入源と影響力を得たなら話は別だ。

ギルドの困窮が一息つき、将来的に解決する目処が立ったとしたらどうなると思う？
切羽詰まっているわけでもない連中に金を貸したとして、感謝されるかな？ 借りだと認識されるだろうか？

支援者の伝家の宝刀たる『言うことを聞かないのなら支援を打ち切る』、こいつが鈍なまくらと化した時点で、支援者の発言力は額面どおりになる。額面以上にあつたはずの価値を失うと言い換えてもいい。

個人対個人でも言えることだが、これが組織対組織では更に顕著でね。色々理由はあ
るが、わかりやすいところで言えば、お互い図体がデカイせいで動きが鈍くなるんだ。

何か気に食わないことがあつたとしても、即座に『よし殴りに行こう』とはなりにくい
のさ。だからこそ、弱い立場にいるはずの側が多少調子づいたとしても、ある程度は
目を瞑ってやるしかなくなる。無論、限度つてものはあるがね。

そして発言力を保持するためには、支援の額を釣り上げるしかなくなる。それはギル
ド復興へ大いに役立つだろうさ」

なるほど、私の計画に関わらず、何かしらの要因によってその状況が齎されたのなら、
それだけでギルドの窮状はかなり緩和したと見て良いわけだ。

貸しがあり、そのために立場の強かった者が、ある意味対等な立場まで引きずり降ろ
されるのだ。全くの善意からの出資でもない限り、何のために金を出したのかわからな

くなるな。

「当然、守銭奴のブラック・ブライア家は妨害工作を行いたがるだろう。

だがそれは悪手と言わざるを得ない。

ブラック・ブライア家はリフテン一の名家であり豪商だ。スカイリム全土を見渡しても、上から数えたほうが圧倒的に早い。

しかし、だ。俺達ギルドだって、腐つてもスカイリム一の闇ギルドだ。これから新参者共が小蠅の如く湧いて出てくるだろうが、現状はまだそうだ。

計画が順調に推移したのなら尚の事だな。

そんな状況で、両者が手切れとなって困るのはどちらだと思う？ 支援者たる栄光のブラック・ブライア家の方々さ。

あくまで仮定の話ではあるが、ギルドには収入源があり、影響力を保持する土台もある。

となれば、ブラック・ブライア家は俺達に代わる都合のいい番犬を探さだろうな。しかしリフテンの闇を支配しているのは俺達だ。

俺達から喉元に刃を突きつけられながら、俺達に対抗し得る闇ギルドと新たに関係を構築する？ あり得ないな。端的に言って自殺行為だね。

だから争いは水面下でのものに限定される。だがその手の工作活動でメルセルを出

し抜くのは至難の業だ。我らがギルドマスター殿は、人の裏を読むのがやたらと達人だ。同時に、自らの行動や思考を読ませないこともな。そんなことはあの連中も理解しているだろうから、つまり『そうはならない』。

長々と話してしまつたが、要するに兄弟の提案は、成功すれば起死回生の一手に他ならないわけだ」

フラゴンやラットウエイで見た、メルセル・フレイの目を思い出す。あの目が常に支援者の腹を探り、急所を見つけ出そうとしている。その状態で自ら急所を作り更には曝け出すなど、辣腕振るうブラックブライア家相手では考えられんだろう。

回らない頭で考えついた思いつきであつたが、友からこれだけ絶賛されれば悪い気はしない。

だが、『しかし』とその友が続ける。

「だからこそ計画を成功させることそのものが困難だ。

先程も言つたが、まずは何をおいても莫大な資金と、ある程度の人員が必要だ。

資金のほうは、できれば継続的な収入によつて賄われるのが望ましいな。

次に人員だ。俺は謹慎を言い渡されている手前、幾らかは助けられてもあまり大つぴらには動けない。謹慎が明ければ本業へ従事することになるだろうしな。だから基本的には君が中心となつて動くしかないわけだが、一人でできることというのは限られて

いる。君の手足となって動く多くの人間は必要不可欠だな。

当面の課題としては、この二つをどうやって解決するかが問題になってくるわけだ。そして言い換えれば、これさえ解決してしまえば計画は成功したも同然と言っても過言じゃない。

というか、別に町を牛耳ることに固執しなくとも、ある程度目的は達せられたと言えるだろう。何せ配下が居て、稼ぎがあるんだ。大概の事業に手を出す土台にはなるだろうし、そこで満足してしまっても何も問題はない。だって稼ぎがあるのだから」
たしかにそのとおりだ。

私は、どうせならリフテンの有力者に比肩するだけの資金力と影響力を考えたが、それに及ばずとも、ギルドへの貢献として見れば、計画の途中であつても有益であることに変わりはないだろう。

とはいえ、それはギルドの困窮を幾らか軽減させるに過ぎず、根本的な解決とは言い難い。目指すなら、やはり計画の完遂を終着点としたところだ。

しかし、どうも友の言葉を聞いていると、ブレックス一派を我が傘下に置く、というのは難しいと見ているようだ。私が他に提案した、一派を始末した後他所から持つてくる、も同様だろう。

如何に実現困難なのか、私の頭ではすぐに理解できない。

私はその旨を正直に伝えた。友は順を追ってそれに答える。

「まず砦の連中だが、当たり前前の話ではあるが君の傘下につく理由が無いな。特に頭目ブレックスは今もおガルスを信奉しているあたり、誰かの下に付く、ということ自体しないだろう。」

主立った連中を始末したとしても、他の連中が君に従うかは望み薄だな。希望的観測でやつと未知数、と言ったところか。

兄弟には自信があるようだが、一体、連中をどうやって傘下に収める腹なんだい？」
「正面から訪ねて話をしようかと思っていた。抵抗されれば腕力にものを言わせようかとも」

「……………さっきの称賛を返してもらってもいいかい？」

そんなに馬鹿なことを言っただろうか。一派と何の関わりも無い私が其奴等に従えようと言うのなら、基本的には腕尽くしか無いと思うのだが。

「根っからの、頭にチーズでも詰まってるような山賊共ならそれでも良いかもしれないがね。奴等は腕利きの元盗賊だ。」

君に抵抗するだろうし、敵わないと思えばとつとと逃げる。

何なら、降伏したフリをしてその場をやり過ぎす、くらいはやってのけるだろうさ」
なるほど、確かに成功率は低そう。では一派を始末した後の策はどうなのだろう。

「他所から人を入れる、という案自体は悪くないとは思うがね。しかしブレックスが討たれたという話は絶対に伝わる。『代替わりをした』と報告をしたとしても、余程うまくことを進めなければ討伐指令が下るな。

これを回避するには、執政官を抱き込むためにメルセルに話を通してブラック・ブライアの人間を動かす必要がある。連中にバレている段階で本末転倒だな。

リフテンの前に立ち寄った開拓村よろしく、砦を中心とした開拓計画をでつち上げるにしても、やはり町の有力者たるブラック・ブライアと執政官、更には首長へ話を通す必要がある。

そこに孤児なんかを押し込んで盗賊として教育する、なんてことも今、思い付いたが、どちらにしても同じことだな。

ギルドにとつては有益と言えるが、君の計画として考えれば破綻している。痛し痒しと言ったところか」

簡単になんか運ぶとは思っていなかったが、どうも私の想定以上に実現は困難であるようだ。

支援者であるブラック・ブライア家に気取られないよう動く、ないしはギルドとは無関係だと思わせる、というあたりが全てを難しくしている。

……いや、視野を狭くしてはいかん。

手近な場所に脛に傷持つ集団がいると聞いたものだから砦の一派を中心に考えてしまったが、別に私自身は盗賊でもなんでもないので。

協力を仰げるならば、表側の者達でも良いのではないだろうか。

ブリニョルフにそのことを伝えてみると、考えながら口を開く。

「伝手ができてうま味がある連中と言えば、まずは同胞団の名前が挙がるな。

こいつらは、言ってみればスカイリム随一の武芸者集団だね。比較的安価な報酬で、狼からそれこそ巨人退治なんて害獣駆除や、賊退治、果ては市民のちよつとした困り事解決まで請け負う。

スカイリムは強い戦士が尊ばれるからな。ここに所属しているというだけで、尊敬の眼差しを向けられるほどだ。

だが奴等は生身での強さに拘る。ブレックスじゃないが、信奉者と言つてもいい程にだ。

君は腕っ節で言えば何の問題も無いんだが、ソウルの業だったか？ あれを連中が魔法だ、邪道だと思えば、毛嫌いされるかもしれない。

奴等とつながりを作ろうとするのなら、その最中は一切使わない、とでもするのが無難かな。君が窮屈でなければなんとかなるだろう」

ソウルの業を隠し通す？ ……できるだろうか。まるで自信が無い。

ソウルの業は私の日常と共にある。両手の揃った者に、「完全に自由な状態のまま片手だけ使うな」と言うようなものだ。しばらくは我慢できるだろうが、いつかはボロを出しそうな未来が見える。

しかし、そのときまでに私の戦士としての腕前を認めさせていれば、何とかならぬだろうか。

「たしかにな。君の圧倒的武力を前にすれば、連中がソウルの業を些事だと思ってくれる公算はそれなりにあるだろう。

ついでに言えば、同胞団は清廉潔白な印象が広く認知されている。

もし所屬が叶った場合、君が盗賊ギルドの協力者だとは思われないだろう。『まさか』ってね。そういう意味ではいい隠れ蓑になる」

同胞団、表の顔としては有望、と。私は頭の隅に刻んだ。

「他で言えば、『闇の一派』なんて連中もいるな。平たく言えば、殺し屋集団だ。正直、薄気味悪いんで俺はあまり近寄りたくない。

そしてこちらは既にギルドと協力関係にあり、デルビンが窓口になっている。

盗賊ギルドの人間が不手際で殺人を犯してしまった場合、主な対処としては、ブラック・ブライア家などの有力者に頼んで握り潰させるか、この闇の一派に話をつけて、『最初から連中の標的であった』ということにしてもらうのさ。

こちらの落ち度だからな。当然、それなりの金を要求される。だが必要なことでもある。

この連中に関して言えば、もし下手をうって敵対関係にでもなった場合、我らがギルドマスターが君を『協力者とは認めない』と言い出し、君と連中の争いに干渉を決め込むだろう。それどころか、俺と君の個人的友誼にも物申してくるかもな。

あまり触れないのが吉、だと思っぜ」

殺しの専門、となると微妙に闇霊を頭に浮かべてしまう。

だが連中はソウルや人間性、あるいは誓約の主捧げる供物を求めて襲いかかって来るのだ。

純粹に『殺すために殺す』というのは少々理解し難い。……いや、いたな。殺しそのものが目的になっているような闇霊も。

あの手の輩が集団になったのが闇の一派か。なるほど、たしかに薄気味悪い。

ついでに言えば、既にギルドと協力関係にあるのなら、私が接触して得られる利益は少ないだろう。

「更に毛色の違うところを挙げると、『ウインターホールド大学』や『吟遊詩人の大学』なんてのもある。

前者は魔法大学とも呼ばれるな。その名が示すとおり、魔術師共の総本山だ。年がら

年中、胡散臭い実験だの調査だのに走り回っているよ。

あくまで噂だが、俺が生まれるよりずっと前にウィンターホールドの大部分が海没する、なんて大災害があつたらしいんだが、その原因ではないかとも言われている。

元々変人共の巣窟なんて印象があつた上に、大災害の件が絡んで、スカイリム中の、特にノルドからは白い目で見られているよ。

ついでに言うと、大学にはガルスガルスの協力者がいたらしい。

そいつをあてにできないかとは俺も思うんだが、ガルス暗殺騒動なんて事件を防げなかったギルドに対して今も協力的なままでいてくれるか、不安だな。最悪、好意が裏返つて敵対感情すら抱いているかもしれない。

……町に根を張ることだけを考えるなら、この大学があるウィンターホールドの町が最も容易いだろうな。何せ首長会議ムニシに参加権を持つ首長を擁しているながら、町自体は村と言つたほうが相応しい規模と衰退具合だ。

尤も、そんな町を手にしてどの程度うま味があるのか、という話も持ち上がるわけだが――

ウィンターホールドという土地は、なかなか魅力的に見える。

ある程度の影響力を持つ大学と、衰退した町。この対象的な二つは、自惚れでなければ、私なら上手に扱えるように思うのだ。

私は魔術が使えるし、魔術に傾倒した人間なら、ソウルの業を見ても頭から否定はしないだろう。……多分。

こればかりは、彼等が、亡き友の話していた竜の学院のように、排他的かつ権威主義的ではないことを祈るしかないのだが。

私に前ギルドマスターとのつながりはないが、元協力者とやらもあてにできるだろう。

そして、衰退したウインターホルドの町自体も魅力的だ。

友の言うとおり、町を牛耳ったところでうま味が無いのでは意味が無い。無いが、その『うま味』をこちらで用意できればどうだろう？ ウィンターホルドの首長は、町に潤いを齎した人間を無碍に扱うだろうか。私なら厚遇する。

というか、そのような特殊な事情の無い町では、まっとうな手段で名を挙げる他ない。可能不可能で言えば可能であろうが、それは私の取れる様々な手段を封じての話になりかねん。友に相談すれば知恵をかしてくれるやもしれんが、いつもいつも側に置いておけるわけでもない。基本的には私一人の力でやり遂げるべきだ。

まだぼんやりとした程度だが、徐々に道筋が見えてきた。

そのあいだにも、ブリニョルフによる『吟遊詩人がいかに盗賊の協力者として優れているか』の講義が行われている。

曰く、吟遊詩人は様々な場所へ赴き、歌う。怪しまれることなく人の集まる場所を転々としていく人材。それは各地の情報収集に最適である、とか。

曰く、盗賊である自分達とは異なる目線を持つ、という点も捨てがたい。情報というもののは、多角的に見ることでその精度を飛躍的に上げることができる、とか。

だがしかし、如何せん吟遊詩人という人種は、『趣味人の集まり』という趣きが強いらしい。それ故、我が友の勧誘も難航しているとのことだった。

その後も私が幾つか問いかけ、ブリニョルフが答える。そんなやり取りを繰り返して、気が付けば日が高く昇っていた。

話を一度中断し、昼餉の支度をする。

食事を始めたところで彼に切り出す。

「ブリニョルフ、君のおかげで私の行動指針がだいぶ煮詰まったぞ。やはり頼りになる。まず、狙う町はウインターホールドだ。現状、恒常的な稼ぎを用意できるかは不明だが、首長を始めとした町の上層部に伝手があつて困ることもあるまい。」

魔法大学という集団も、少々奇異の目で見られているようだが、味方にできれば力になつてくれるだろう。

町の有力者に就いても稼ぎを用意できなければ、伝手を維持したまま、別の町に食指

を動かしてもいい。ひとまずの狙い、といったところだな。

次に資金、それを生み出す人員だが、第一候補はやはり砦のブレックス一派としたい。第二候補が同胞団、第三候補は先の大学だ。

話がうまくまとまらなければ廢殺して、ギルドの手柄とすればいい。その場合私は、第二第三の候補を回る。

それでも駄目だった場合は、また改めて考えよう。状況も少しは変化しているだろうし、時間を置けば君のことだ、何かうまい考えが浮かぶだろう?」

「兄弟。煽ててくれるのは嬉しいんだがね、俺は便利屋じゃあ無いんだぜ? 叩けばほいほいと妙案が出てくる魔法の知恵袋でもない。あまり期待してくれるなよ」

私としても、何でもかんでも彼に丸投げするつもりはない。

しかし彼の所属ギルドはおそらくスカイリム随一の情報通であるし、彼自身がそこから策を考えることのできる人間だと信じている。少なくとも、私より上等な頭脳を持ち合わせていることは確かだ。

そして、行動を起こしても特に不利益が無いのなら、まずはやってみるのだ。試行錯誤は不死人の得意とするところである。取り返しの付かない話でなければ、大概の物事は回数を重ねることでもうにかなるものだ。

一応、ブリニョルフを通してギルドへ私の行動指針を伝えてもらう。

メルセル・フレイは、私がブレックス一派を傘下に収めることに成功した場合、嘴を挟んでくるかもしれない。だが、私はまだギルドの協力者ではないし、ブリニョルフの友ではあっても部下ではない。言うことを聞かなければならない理由も無い。

メルセル・フレイが私に対して面白くない感情を抱いても、私がギルドにとつて有益な人物となつたのならその貢献を認めるべきである。個人的感情でそれに反するのは、ギルドマスターとして許されないだろう。大袈裟に言えばギルドへの背信ともとれる。

何もかもが全てうまく行かず計画が完全に頓挫したとしたら、冒険者にならなくても各地の宝物を狙うのも面白いだろう。

ブリニョルフの話では、そういった探索の場合、持ち運べる物資の限界から、戦利品を選別しなければならぬらしい。私はその手の悩みと無縁だ。根こそぎ持ち帰ってしまう方がいい。それなりの稼ぎにはなるだろう。

失敗しても良いというのは気が楽だ。駄目で元々。成功すれば儲け物。責任が無いとはある意味素晴らしいな。

腹の決まった私は、明朝、砦へ向けて出発することにした。

男が行動を開始してから数日後、帰宅した男が言った。

「ブリニョルフ、ブレックスと友達になってしまった。連中は殺せない。メルセル・フレイには上手に伝えておいてくれ」

ブリニョルフはマスター・メルセルの血走った目、ふんだんに嫌味をまぶした詰問、ほか諸々の後処理を考え、溜息をついた。

九、はじめてのかちこみ（単独）

ブリニョルフに今後の指針を相談した翌日、私は彼から渡された地図を頼りにブレックス一派が傭にしているという砦へと駆けていた。

計画についてまとめてしまえば、然程のことはない。

一つ。ウインターホールド、もしくはほかの町の有力者となるために、資金源と人員を確保する。

一つ。それら両者は、現在目標としている元盗賊ギルド員で構成されたブレックス一派を第一候補とし、個人の配下にするこゝで解決する。

一つ。配下の確保に失敗したときは、第二候補同胞団、第三候補ウインターホールド大学を訪ね、私自身の地位を確立しつつ内部で協力者を探す。

一つ。それら全てに失敗した場合は、計画を練り直すか、計画そのものを白紙撤回し、冒険者として名を上げる。

最後の一案は、一見、最悪の事態に思えるが、私としては特段気にはしていない。案外面白そうだからだ。

元々、私がスカイリムで生活する基盤を整えると同時に友の役に立つことができ

ば、との考えから提案したのだ。

それが頓挫したところで、彼は私を労うだけで責めはしまい。

更に聞くとところによれば、世には件のペンダントのような希少で高価な宝物が多く確認されているとか。

所在が判明しているのにそれが回収されていないのは、ペンダントが安置されていた古代ノルドの墳墓や、それと同じく『ファルメル』という異形が巢食う危険な『ドゥーマー』遺跡など、およそ人が立ち入れる場所では無いかららしい。

古い文献から所在だけはわかっているのに、脅威の存在故に手出しできない。そういった状況が求める者の欲を高め、宝物の値を吊り上げているのだとか。

それらを回収し、ギルド経由で好事家達に融通してやれば、私の計画とは別口で各地の有力者と伝手を持つことができるだろう。

何せブリニョルフの言う「一財産」を工面できるだけの財力を持つ者達だ。それなりの地位に就いていることは想像に難くない。

そしてその有力者がギルドを己にとつて有益な存在だと認識する公算は高い。

緻密に計算された策、というものにも憧れるが、私としてはやはりある程度余裕のある計画のほうが気が楽でいい。

「失敗したのなら、手を変え品を変え二の矢三の矢を射てばいい」という発想は、大変

馴染み深いものであるし。

私が計画について思いを馳せていると、街道沿いに林が見えてきた。

地図によれば、この林を北に抜けた先の小高い丘に砦はあるらしい。

砦を造るには納得の立地と言える。

私は林の中を突き進み、木々がまばらに開けてきたあたりで一度歩を止めて、砦の様子を探った。

こちらから覗えるのは砦の南側で、高い石壁がそびえている。出入り口の類は無さそうだ。

壁の左右には監視塔が備えられており、それぞれ弓を構えた見張りがある。

どう攻めるにしても、ちと情報が足りない。私は隠密用の指輪を付け、林の木々、林を出てからは岩、地面の細かな起伏などに身を隠しながら、砦を遠巻きに一周した。

今の私は姿が薄れているため、余程目のいい者でも見えはしないはずだが、万が一ということもある。違和感を覚えられるだけでも面倒だ。

そして偵察している内に思った。

連中を従えるにしても塵殺するにしても、逃走されてはどちらも叶わない。

私は逃げる敵を追いかける、という経験はそこまで無いのだ。『結晶トカゲ』は勘定に

入れるべきではないし、出くわす闇霊が不利を悟って逃走することがあった、程度のものである。

友に相談したときは真正面から殴り込めばいいかとも思っていたが、それでは不本意な結果に終わるだろう。

先日の襲撃よろしく、まずはこの隠密態勢のまま静かに賊を無力化し、ブレックスなる頭目の元まで辿り着きたいところだ。

戦闘の気配が近づき、頭の冴えを感じる。

どうも私の集中力というヤツは、鉄火場でしか発揮されないらしい。難儀である。

砦を探った結果、全体的に南側が高く、正面の門がある北側が低い造りになっているようだ。そのせいか、堀や柵など、北側の防備は四方において最も堅い。

南側同様、北側左右にも監視塔があり、それぞれ射手がいた。また、それぞれの監視塔のみ鋸壁きょへきとなっている。

東と西は一面壁であり、北側ほどではないにしろ、足元には堀と柵があった。問題無い程度の防備だが、多少面倒ではある。

この砦、元々の主目的は北からリフテンへ攻め入る外敵に備えたものなのだろう。

左右に広く兵を置き、正面の敵には開けた視界を存分に活用し、砦全体から矢を雨のように降らせる。そんなところか。

さて、砦の由来はどうでもよいのだ。問題はどうか攻めるか、だ。

まず正面からは論外だ。裏の南側が高いのだ。表の北側の異変を素早く察知されるおそれがある。

東西も忍び寄れないことは無いが、壁を登る装備など持ち合わせてはいない。

よじ登ることもできなくはないだろうが……。

いや、いつそそうするか。最も高い南側の見張りは全周囲を見渡してはいるが、足元までは注意が向いていない。

常に警戒していれば、敵が来たとしても壁に取り付かれる前に察知できるのだし、まさか最も高い壁をよじ登る者がいるとは思えないのだろう。

当然と言えば当然なのだが、今回はその油断に付け込ませてもらおう。

私はフアリスの黒弓と、手持ちの矢の中では最も殺傷能力の低い『木の矢』を取り出し、数本の鏃（木の矢は先端が尖っているだけで鏃は付いていないが）に、林で拾った土を握り固めるように取り付ける。

これを兜の上からでも当てれば、死ぬことはあるまい。

とはいえ、全く音がしないわけでもないだろうから、出来得る限り接近した上で無力化したいところだ。

簡単に準備を整え、砦へ慎重に近づく。

ブリニヨルフの反応から察するに、私の指輪による隠密を見破る付呪、というものは存在しないか、もしくは極めて珍しい品であると思われる。

眼前の見張りがその付呪された装備を所持している、とは考えづらいが、これも万が一を防ぐためである。

南側には防備らしいものも無かったため、壁まで辿り着くのにその時間はかからなかった。

そこで私は、最初の標的を向かって右側の見張りに定めた。

なんとなく、という程度だが、左の見張りのほうが警戒心が薄いように思えたからだ。

不意打ちが成功しやすい場合は、初撃で難敵から始末するのが私のやり口だ。

壁沿いに右の監視塔足元まで移動する。

壁を登る際にも注意を払う。

ここまで来れば、右の見張りには気付かれまいが、左の見張りはこちらからも目視でききる。

折角こんな面倒なことをしているのだ。壁に貼り付いた間抜けな格好で発見されれば、何のための苦勞か。

極力、左の見張りの視線が北や西に向いているときに登り、それ以外のときはじつと

動かす耐える。多少は違和感も減るだろう。

監視塔の頂上に手が届いた。

ここを登りきれば、一瞬の油断も許されない。

最善は全員を生かして無力化。次善は逃走を企てる者のみを殺害。最悪は塵殺。

最悪の場合でも私は困りはしない。ギルドも手間が省けて喜ばしい。何の問題もない。

私は何度も考えたことを再度思い出し、精神を落ち着かせていく。

それと同時に集中力を高める。一度目を閉じ、耳をすませる。鼻で大気を嗅ぐ。肌で風を感じる。

目を開け、視点を定められないよう意識する。

さて、連中はどの程度出来るのだろうか。お手並み拝見。

ちらりと目だけを鋸壁の狭間から出し、見張りの注意が北に向いていることを確認する。

準備が整ったところで壁を蹴り、腕一本で体を引っ張り上げる。

そのまま見張りの背後に着地し、口を押さえながら掌底で頭を横から揺らして寝かせる。

素早く残りの見張りを確認するが、誰もこちらを向いてはいなかった。

先日の襲撃ですっかり慣れた捕縛術を用いて無力化すると、塔から外壁へ飛び降り、
急ぎ左側の監視塔まで駆ける。

駆けた勢いそのままに跳躍し、勢いを殺さず手足を使って猿ましろの如く登る。

今度は見張りの注意を確認している暇は無い。

勢いそのまま鋸壁の縁から躍り出ると、こちらも北側を向いて背を曝していた。

先程と同様に声を上げさせないまま無力化し、拘束する。

急ぎ北側を確認すると、そちらの見張りも正面や左右を警戒している。

背後である南側には味方がいる、という安心感もあるのだろう。

私は現在位置から近い左手の見張りから排除することにした。

先程と同様に駆け寄り、こちらも同様に拘束する。

最後の一人は、と視線を向けたところで緊張が走る。

右手の見張りが、最初に襲った見張りの辺りを見て訝しんでいる。奴が右手を口元へ

と近づける。異常の有無を確認する口笛だろうか？

こちらからでは体側面しか見えないため、顎は狙えない。

急ぎファリスの黒弓と土付きの矢を取り出すと、兜を狙って放つ。矢は狙い違わず命

中。見張りは倒れ伏した。

土がよい塩梅に音を消してくれたようだ。

異変に気付いた者がほかにもいないか周囲を見渡す。……おそらく問題は無いはずだ。

矢で倒した見張りを拘束し、改めて周囲を確認する。

砦の外壁上に人影は無いが、内側には中庭のような空間が見える。演習場と言うべきか。訓練や出撃前の整列にでも使うのだろう。

その端で六人の賊が談笑している様子を確認する。

監視塔から外壁へ、外壁から演習場へと飛び降りる。賊を倒す前に周囲を探る。

この場にいるのは奴等のみようだ。

接近し、金貨を一人に投擲しつつ駆ける。

顎に金貨を食らった者が突然崩れ落ちたことにほかの者が驚くと同時に、一人へ当身を食らわせる。

残りの四人が口を開きかけるが、全員顎を撫でて黙らせる。

見張りに比べて多少手荒くなつたし、手加減も怪しかったが、それでも気を遣つただから感謝してほしいものだ。

今一度、周囲を探る。砦の外部に居た者は、これで全員無力化したらしい。襲撃に慌てる足音や喧騒などは聞こえない。

さて、と。ここから見えるのは、まず砦内部へと通じる大扉が一つ。正面の門からまっすぐの位置にあり、人が二人か三人は横並びになれる。

次に大扉に向かって左右背後には、勝手口のような扉が一つずつ。こちらは通常の大きさだ。

出入りの度に大扉を開閉しているとは考えにくい。勝手口を常用しているのだろう。

問題はどちらから侵入するかが。

……右の扉から行くことにした。理由はこれまた「なんとなく」で特に無いが、強いて言えば最初に襲撃した見張りが向かって右手だったから、といった具合だ。

あえて開閉時に立てる音には頓着せず、扉を開く。

あまりに慎重に開けた場合、近くに賊がいればそれだけで怪しまれるからだ。

扉を全開にし、片側への目隠しとする。そのあいだに反対側を確認。人影、無し。すぐに飛び出て、扉側を確認。一人の賊が椅子に座り寛いでいる。

まだ異変には気付いていないようだ。接近し、当身を食らわせ無力化する。と同時に周囲を再度確認。こちらを目視できる範囲に人影は無し。

まずは侵入成功である。

一先ずの安堵を得て大きく呼吸をし、気を締め直す。

まずはこの右手部分、砦東側内部の制圧を急がねば。

見張りの仕事を見るに、奴等は符牒に口笛を用いるようだ。全員が使えると思ったほうが良いだろう。

可能なら誰かが異変に気付く前に、一人残らず無力化したい。

私は慎重かつ迅速に歩を進め、廊下で、階段で、度々賊と会敵しては制圧を進めていく。

体感で東側はおよそ片付いたと思う頃、砦内部では外周に位置する廊下を西へ進んでいると、分かれ道が左手に見えた。

構造的に、司令官の執務室へと通じるなら左だろう。

しかし頭目ブレックスと話をすると、という段になって邪魔が入るのはよろしくない。そのまま進んで、西側の制圧を進めた。

西側が片付き、やっと本命だと分かれ道まで戻りいくらか進んだところで……見覚えのある黒い細紐が足元に見えた。おそらく罠だろう。

「またか」と思うが、寧ろ「ここに来てやっと」とも言える。

思えば、外部からこつち、罠らしい罠は見かけなかった。

まあ、考えてみれば、ここはいつ襲撃があるかわからないラットウェイと違い、奴等

が定めた罠なのだ。

自宅のそこかしこに罠を仕掛けるのは神経質に過ぎるだろう。

それに、ここが砦という防衛施設である事実を鑑みれば、内部への侵入を許した時点で逃走を図るべき異常事態とも言える。

故に罠の類は少なく、しかし執務室へと通じる通路には、念の為仕掛けておく。一応、筋は通る。

しかし前回の襲撃とは違い、今現在ここには頼りになる盗賊ギルドの面々がいない。いるのは戦闘しか能のない男が一人だけだ。

罠の可能性を考えなかつたわけではないのだが、困ってしまった。

何せこの罠、作動させたところで何が起こるのか見当が付かないのだ。

矢が出てくるなら受け止めよう。しかしそれらしい穴は無い。鳴子も見えない。

左右の壁を素人なりに探るがわからない。頭上や足元を注視してもわからない。

ここまで順調に来ただけに、こんな細紐一つで足止めを食らうとは。

だがあまり時間をかけるわけにもいかない。

取り敢えず細紐を跨いでみる。案外それだけで回避できる代物かもしれないし。

そうして、大きく踏み出した右足が床に着いた瞬間、床が崩れ浮遊感を味わった。

ブレックスは配下の報告で襲撃を知ったとき、一味の中でも一部を除いて、それを隠すよう指示した。

報告と、実際に拘束された配下達を見たときから、襲撃犯は只者ではないと感じたからだ。

外傷はあれど、重度の障害が残るものは一つとして無い。

拘束されていた全員が、それこそ物語にのみ存在する不殺の英雄を相手取ったかの如く、無力化されていた。

これを為した者が何者かは不明だが、接近すら気取らせない腕前を鑑みれば、少数の極めて優秀な精鋭による仕業であることは間違いない。

同時にギルドの襲撃ではないと確信し、更に新たな疑問が増えた。

ギルドの面々は、自分達が再び戻ることはないと理解しているはずだ。

であれば態々生け捕りになどせず、速やかに命を断つだろう。それをしないのは何故だ？

冒険者が首長府からの討伐依頼でやってきたとしたら、ギルドと同じく自分達の命になど頓着しないはずだ。そもそも、隠密行動に徹する理由が薄い。

ギルドでも冒険者でも、当然、基本的に数で圧倒する戦術を取る衛兵隊でもない。

ブレックスは襲撃犯が何者で、何の目的があつて自分達を狙うのか、その背後関係を問い質すべきだと判断した。

それ故に、相手を油断させるため襲撃を配下達に周知せず、更にいくつかの罠を仕掛けた。

どの罠も大きな音が鳴るようになっており、耳のいい自分ならば何処にいてもすぐに気がつく。

仮に全ての罠を解除されるようであれば、襲撃犯はあらゆる面において自分達の敵う相手ではないことが判明する。

そのときは一度撤退し、相手の出方を窺ったうえで拘束された配下の救出を狙う、と算段を立てた。

ブレックスは仕掛けた罠の内の一つ。砦の外周部から内部上層へ通じる、一番手前に仕掛けた罠の真下へ移動した。

そこは、砦が機能していた頃は捕虜収容に使われていた牢である。

ここに襲撃犯が落ちてくるようであれば、その時点で相手は盗賊や斥候の技術を持つ者ではない可能性が高まる。

また、近くには狭い隧道が掘られており、脱出の際にも都合が良かったためこの場所を選

んだ。

しばらく待機した頃、牢の中に派手な音を立てながら男が一人落下してきた。

受け身を取るまでもなく姿勢を整え着地し、素早く周囲を警戒する。

そして男の視線が、格子の前で数人の配下と共に待ち構えていたブレックスと合った。

「……なるほど、盗賊の仕掛けた罠を素人が回避するのは難しいようだ」

「お褒めに預かり光栄だクソ野郎殿。手前にや聞きたいことがある。見てのとおり袋の鼠ってヤツだからよ、正直に口を割るが吉つてもんだぜ？」

ブレックスは男の態度を見て警戒を強めた。

この状態で落ち着いていられるのは、ハツタリではなく平常心を保てるだけの胆力と実力を備えているからだろう。

「まず手前は誰だ？ ほかに仲間は？」

ギルドの人間じゃあねえだろう？ だが明確に俺達を狙って来た。

ギルドが冒険者の類を雇うとは考えられねえ。面子に関わるからな。

おそらくは極最近にギルドの協力者となった者、違うか？」

「ほぼ正解だが惜しい。私はブリニョルフの個人的な友人であつて、まだギルドの外部

協力者ではないのだ。

ついでに言うと、一人で来たので仲間はいないぞ。

……ついでにのついでに聞くが、お前が頭目のブレックスで相違ないか？」

ブレックスは「質問しているのはこっちだ」と男の問いを切り捨てた。

男が本当のことを喋ったかは不明だが、この外部協力者云々で嘘を言う意味も無いだろう。

しかしブリニョルフの友人？ ブレックスは、彼の若い幹部の交友関係を全て把握しているわけではないが、このような男は影も形も窺えなかった。

男の言う「ほぼ正解」には「極最近」も含まれているのだろうか。

だとすれば、単独だという言葉の信憑性は高まるが、それはそれで訝しい。

「次だ。ブリニョルフは若さ故か多少甘い、間抜けじゃあない。たった一人の襲撃犯で俺達をどうこうできるとは考えんだろう。

何かほかに策があるはずだ。吐け」

「残念だが、今度は不正解だな。特に策らしいものは無いぞ。

ああ、私知らされていないだけで、心配性の彼が後詰を寄越した可能性が無くはないが。

どの道、私の預かり知らぬことだ」

ブレックスの目配せで配下の一人が弓を構える。

「それこそ残念ではあるがな、無いと言われてはいよいよと鵜呑みにするわけにやいかねえんだよ。」

痛みを用いる尋問は正確性に欠けるが、何かしら策がある場合あまり時間がねえ。悪いが、多少強引でも吐いてもらおうぞ」

「さて困ったな。私を知る限り、言ったとおり策らしい策は無いと思うのだが。」

ブリニョルフも今は謹慎中で、ギルドの力を借りることはできんだろうしな」

ブレックスは思わず「何？」と聞き返してしまう。

そして、あまりに事情が不明瞭であるため、男に説明を求めた。

男曰く、つい先日、ラットウエイにてガマシン一派に襲撃をかけて大部分を捕縛、吸収した、と。

曰く、作戦決行にあたりブリニョルフは自分を参加させたが、それはメルセル・フレイの承諾を得ない独断行動であった、と。

曰く、その責任を取る形で、ブリニョルフは現在謹慎中である、と。

男はヴェケルにまつわる話もしていたが、聞く限り矛盾は無いように思えた。

少なくとも、格子越しにこちらを見ている男の力量は、ブレックス一味が身を持って体験した。

「忌々しいが、手前がホラを吹いていると断じるだけの判断材料がねえし、それをうただ聞き出してゐる暇もねえ。

最後だ。奴のご友人とやらは何を頼まれてここに來た？ 何故俺達を生け捕りにしようとする。

素直に答えるなら、月並みだが命だけは助けてやるよ。約束する」

「頼まれたわけではないぞ。

ここには、お前達に私の計画を手伝う手足となつてほしいがために來た。

計画が失敗したところで困りはしないのだが、彼には大風呂敷を広げてしまったからな。できれば成功させたい」

全く要領を得ない男の言葉に、ブレックスは困惑した。

男の言う「手足となつてほしい」とは、つまり一味を丸ごと自らの配下に加えようという意味だろうか。

そのために、たった一人でのこのこやってきたと？

ブレックスは意味がわからず、再度男に説明を求めた。

曰く、自分達一味を配下に加え、それを礎にスカイリムのいずれかの町で力を持つ、と。

曰く、その計画が成功すれば、現在のギルドの支援者に大きな顔をさせずにすむ、と。

「……手前の言葉に嘘は感じられねえ。

だが、それなら何故俺達を襲撃した？ 配下に加えようってんなら、当然俺達がそう思えるだけの何かを用意しているんだらう？

交渉の席に付く前に実力行使つてのは、随分と穏やかな作法じゃねえか」

男はブレックスの問に対して、やや首を傾げる。

「特に何も用意はしていないぞ。

一先ず頭目ブレックスに直接話をして、それで駄目なら領いてくれるまで腕力に物を言わせようと思っていた。

これは持論だがな。人の心が折れるときというのは、恐怖や絶望や、もしくは諦念に
よるものだ。

何度でも、いつまでも暴力に曝されてなお心が折れない者は少ない。

お前か、別のどこかに隠れている者なのか私には不明だが、ブレックスとやらがどの程度のあいだ耐えられるのか、試してみるのも一興と思つてな」

男は囚われたまま、からからと物騒なことを言つてのける。

そして「失敗して逃げられそうになつたのなら、皆殺しにすれば良いだけの話である
しな」と更に物騒な言げんを重ねる。

ブレックスは男を狂人の類であると判断した。

何せ男は牢の中にいて、こちらは閉じ込め、武器を向けている側だ。

この状況でこの態度を取り続けるのは、いくら男が精銳だとしても異常である。

狂しているのならば、それこそ尋問など無意味であろう。当然、拷問もだ。

更に言えば、男の行動と話から、助命して野放しにしておくことも得策ではない。再び襲撃を企てる可能性が高い以上、解放してやることもできない。ブレックスは弓を構えた配下に目配せした。

しかし、事態はブレックスの思ったとおりににはならない。

放たれた矢は、男がいつの間にか左手に構えた盾に阻まれていた。

おそらくは魔術の類。まだ奥の手があつたかと自らの短慮を悔いたが、尚の事、何か反撃を打たれる前に男を始末する必要がある。

ブレックスの、殺せ！ という号令の元、配下達が一斉に弓や投擲を放つ。

自身も、毒の塗られたナイフを男の首元や足を狙って投擲した。

だが、それらも全て防がれる。

「どうも認識に齟齬があると思っていたのだ。

お前達、私が牢の中にいるから自分達が優位だと思っていたな？ こんな物は何の障害にもならないと言うのに。

……少し下がっていたほうがいいぞ。怪我をすといけないからな」

ブレックスが再度攻撃の号令を出そうとしたとき、男は巨大な槌を振りかぶっていた。

柄の長さも、頭の長さも、口の直径も、全てが一人分以上という冗談のような大きさだ。

牢は元々、複数人の捕虜を収容できるよう、広く作られている。男が大槌を振り回すのに支障はない。いやそういう問題ではない。

何だあの大きさは？ どこから出した？ 何故振りかぶれている？ 張りぼてか？
だがそんな物を振り回して何の意味がある？

では見た目どおりの重量がある？ あ、速い……。

男が格子に大槌を叩きつけ、耳をつんざく轟音と共に扉が吹き飛ぶ。

それが運悪く扉の前にいた者に命中し、壁に叩きつけられた。

ほかに格子の前で武器を構えていた面々も、格子だった鉄棒が何本か吹き飛び、食らったため、数人が昏倒している。

被害が無かったのはブレックスを始め、脇に避けていた者たちだけだ。

男が、出したときと同様にいつの間にか大槌を消し、牢から出てくる。

ブレックスが口を開く前に、配下の男が叫ぶ。「頭を守れ！」と。

ブレックスは配下に逃げろと言うつもりだった。しかし配下達は素早く自分を後方

に押しやり、男に対して臨戦態勢を整えている。

男の戦闘力は異常である。まず間違はなく殺されるだろう。

いや、男の言葉が真実であれば、全員が拷問を受け続けることになる。そんなことはさせられない。

だが、配下達は自分を背にして誰一人その場を動かない。

ブレックスの胸中にいくらかの歓喜と、それを塗り潰すほどの苛立ちと焦りが浮かぶ。

「やはりお前が頭目ブレックスであったか。しかし聞いていた話と少し違うな。

ブリニョルフによれば、敵わないと見ればとつと逃げ出す、とのことだったが……。

お前の配下は決死の覚悟でお前を守ろうとしている。誰も逃げる様子が無い。お前も配下を置いて逃げる様子が無い。

さて、どうしたものか……」

男が独り言を呟き、顎に手を当て呑気に考え事をしている。

ブレックス達の配下は、男がいつ襲いかかってきてもいいよう身構えてはいるが、内心は男に吞まれてしまっており、自ら飛びかかることはしなかった。

配下達にとって幸か不幸かは不明だが、恐怖から錯乱して無鉄砲な行動に出るほど胆力の無い者もいなかったのだ。

奇妙な停滞が数拍訪れたかと思えば、男が何かひらめいたように口を開く。

「よし、気が変わった。」

私は明日また、ここへ来る。そのときに再び話をしよう」

男はブレックス達の身構えなどには頓着せず、一瞬で配下達を抜いてブレックスまで詰め寄り、胸に当身を強く食らわせる。ブレックスの意識が遠のいた。

そして左手を怪しげに赤く光らせたかと思うと、ブレックスを指差し光を移した。「今、この男に魔術を施した。これで、私には此奴の居場所がわかるようになった。」

此奴を含めた全員が明日、砦にいれば良し。いなければお前達を守ろうとした頭目は何処にいても必ず見つけ出し殺す。いいな？」

男はそれだけを言うと、その場から去った。

……………と思いきや、少ししたら戻ってきて「出口はどっちだ？」と問うてくる。

配下の一人が素直に答えると、男は礼を言い、今度こそ去って行った。

気絶した頭目と、呆気にとられる配下達を残して。

一〇、はじめてのかちこみ（二日目）

ブレックスが目を覚ましたのは、男の襲撃があつた翌日の、もういくらかすれば日が中天にかかろうか、という頃になつてだつた。

起き上がろうとして、鳩尾から胸にかけて走る痛みに顔をしかめる。

次いで迫り上がる吐き気を堪えきれず、ベッドの近くにあつた桶に吐瀉物を散らす。見れば、赤黒い塊も混じっている。

物音に気付いたのか、部屋の外で待機していたのであろう配下の一人であるハンが、慌てて扉を開く。

「良かった。息があるのはわかつとりましたが、あんなことのアトですから、心配しました」

ハンは安堵の表情を浮かべた。

一味の中で誰がどの役職、などとは特に定めていないが、ハンはギルド時代からブレックスと長く行動を共にしており、実質的な副頭目と他の面々から目されている。

腹心を始め皆に心配をかけたことは悪いと思うものの、ブレックスはそれより状況確認がしたかつた。

「ノックくらいしろい馬鹿が。……俺がくたばつてからどの程度時間が経つてゐる？ あのとのこと、被害状況、わかつたことを全部話せ」

ハンは順を追つて説明していく。

現在は男の襲撃があつた翌日の昼前であること。

男が襲撃でブレックスを昏倒させた直後、『居場所の把握が可能になる』という怪し気な魔術をかけ、その上で翌日、つまりは本日「自分が再度訪れたとき、砦に一味全員が揃つていなければブレックスを殺す」と通告したこと。

通告のあとは、特に何もせず退散したこと。

襲撃時に昏倒させられたほぼ全員が既に行動に支障が無いまで回復しており、男の吹き飛ばした牢の格子の破片を受けた者達以外に重傷者はいないこと。それも、命に関わる容態ではないこと。

念の為に砦全体を調べたものの、何の細工もされておらず、仕掛けた罠も作動した一つ以外に手を加えられた形跡が無いこと。

その先の執務室へと通じる場所のいずれにも、立ち入った形跡が無いこと。

それらの報告を聞きながら、ブレックスは自己診断を下していた。

血を吐きはしたが、臓腑が破れたというわけではなさそうである。しかし胸骨と、肋骨の第六、第七あたりはおそらく折れており、行動に支障が出るだろう、とも。

どうも件の男は、配下達に比べて自分には随分と丁寧な当身を食らわせたらしい。クソツタレ、と一人毒づいていると、報告を終えたハンが覚悟を決めて切り出す。

「……頭、どうしますか？ 俺達は頭にどこまでも付いて行くと決めてギルドを抜きました。頭が殺ると決めたんなら、肚括って全員でかかりますよ」

ブレックスは馬鹿垂れとハンの頭をはたき、照れ隠しと呆れと痛みを緋い交ぜにして顔を歪める。

「あんな化け物相手にどう立ち向かうってんだ。犬死にして何の得がある。

最も分が良くて手前等だけ逃がすって話だが、どうせ聞きやしねえだろうが。言っておくが俺はろくに動けんぞ」

ブレックスは自分の容態を告げながら、状況の悪さに歯噛みする。

男がかけたという魔術など、今まで聞いたことが無かった。尤も、自分は亡きギルドマスターと違い魔術に精通しているわけでもないため、ハツタリだと断じることできない。

一味総出で逃げ出すのは、自分が足を引っ張り難しい。配下だけではそも逃げない。結局は男の言うとおり、皆で男の再訪を待つしかない、という状況だ。

今まで、個人的武勇や政治的手腕に長けた相手を、磨き上げた業一つで手玉に取ってきたブレックスにとって、理不尽なまでの圧倒的暴力で選択肢を一つに狭められるの

は、甚だ不愉快であった。

それでも、何か対抗する術すくは無いものかと思案していると、なにやら遠くから物音が聞こえてきた。近ければ喧騒とも呼べる類の慌ただしさである。

嫌な予感に再び顔を歪めていると、開かれたままの扉から、配下の一人が駆け込んできた。

「頭、あの男が……！」

ブレックスはもう少し早く目覚められればと頭痛までし始めた体を起こし、喧騒の発生源まで足を引きずることにした。

砦で頭目ブレックスと話をし、配下達に再訪を告げられた。私はこれらの成果に満足して帰宅した。

そして今日のあらましを極簡単に家主殿へ語り、時間が惜しいとばかりに面倒事を頼み込んだ。

「ブリニョルフ、砦の連中に振る舞う酒や食材を融通してもらえよう、手配を願えないだろうか。できれば百人前か二百人前ほど。勿論、代金は払う」

「それくらい朝飯前さ兄弟……と言いたいところなんだが、いくらなんでも多すぎる。『ブルー・パレス』でパーティを開ける規模だ。件の砦が大改修をしたなんて報告は聞いてないんだがね。」

何件か当たってみるが、明日までに用意できるのはせいぜい三十から四十といったところだろう。残りは随時、となるが、それでいいかい？

代金は君から預かっていた宝物から差し引いておくよ。多分、これで墳墓と巨人から得た分が相殺されるかな」

私は問題無いと彼に告げ、食事の支度を始める。

何せ彼にはこれから何件もの店や卸商を梯子してもらわなければならないのだ。

夕飯の支度くらいは買って出ても罰は当たらないだろう。

早速作業に取り掛かろうとした私に、友が声をかける。

「しかし君も気が早いな。今日は（砦襲撃のための偵察など）様子見だったんだろう？」

連中を懐柔したあとの宴会に備えているとは、随分自信があるようじゃないか。英雄に相應しい天啓でも授かったのかい？」

「わかっていて言ってるな？ よしてくれ。」

それでも、備えておいて損ということもないだろう？ 必要になつてから慌てて用意するよりは余程良いはずだ。

連中については（一派の反応が思っていたものと違つたため）、もう数日は時間をかけようと思う」

彼は「違いない。備えを怠る者は自ら昏い道を進む愚か者だけだ」と格言めいたことを言いながら家を出た。

おそらく臍を曲げているであろうブレックス一派が、これで多少なりとも機嫌を直してくれるといいのだが。

翌朝、ブリニョルフが手配してくれた酒や食材の詰まつた木箱や樽を市場で回収した。

口にしていたとおりせいぜい三十人分といったところだが、十分だ。

連中はまさに男盛りといった年頃の者が多いように思えた。

彼が気を利かせて多めに用意してくれた肉やチーズは、きつと喜ばれることだろう。

日暮れから翌日早朝にかけてこれだけの物資を用意するとなれば、複数の店と面倒な交渉する必要があつたはずだ。単に割増料金を払うだけでは済まなかつただろう。

だが彼は、それでも私が言うのだから必要なのだ、と無理を押ししてくれたのだ。

やはり持つべきものは友、それも出来る友である。

私は彼の献身に温かなものを覚えながら、それに報いられればいい、今日も良い日に

なればいい、と気分良く町を出た。

道を覚えるのは然程得意でない私だが、砦までは街道を通つてほぼ一本道と言つていい。

道中、あちらこちらから視線を感じたが、邪魔にならないのなら問題はないだろう。昨日も特に支障は無かつた。

狼や、スカイリムでも特に自然の豊かなリフト地方ならではの害獣である『フロストバイト・スパイダー』にも遭遇したが、何の問題も無かつた。寧ろ収穫が増えて幸先がいい。

あの大蜘蛛については害虫と呼称するのが正しいのかもしれないが、足を含めれば牛程もある巨大な蜘蛛を誰が虫ケラ扱いできると言うのか。

どうでもいいが、通常の蜘蛛は割と好きである。害虫どころかれつきとした益虫であるのだし。

そんな益体もないことを思い浮かべているうちに、砦が見えてきた。暇な移動中は思考の海へ潜るに限る。

今日は密やかに襲撃するつもりはない。裏手から近づく必要も無いだろう。

私が昨日と同様に林から出ると、気付いた見張りがこちらへ弓を向けた。

無駄に刺激することも無いだろうと、そのまま遠巻きに正面の門まで移動する。……のだが、砦のある左手では口笛がひっきりなしに飛び交っている。

どうということだろうか。

訝しみながら砦正面へ辿り着くと、門が固く閉ざされているではないか。私はこちらへ弓を向ける見張りに声をかけた。

「おうい、再訪すると言付けておいただろう？ 何故門が開いていないのだ。客人を持って成すにはちと無作法ではないか？」

「野郎、何様のつもりだ。言われて大人しく通す馬鹿がどこにいるってんだ。兄貴んとこにや行かせねえぞ」

「そうだ！ 魔術だか何だかで奇襲をかけるのは得意らしいがな、今日はそうはいかねえ。来るとわかって何度ものされるものかよ。おやっさんはやらせねえぞ！」

私は、昨日伝えたとおりの話をしに來ただけで別段ブレックスを害する気はないのだが、どうもそのあたりの連絡がなされていない気がする。

居場所を探知する魔術など当然ハツタリであるため、ブレックスには逃げられないよう強く当身を食らわせたわけで、それ故まだ目覚めていないのだろうか。

しかし、言付けたのは奴の周りにいた面々だ。頭目が寝ていようが起きていようが、関係は無いと思うのだが……。

末端までうまく伝わらなかつたか？ 襲撃を受けて頭目が昏倒するというのは、紛れもなく異常事態だ。混乱から上意下達が正しく行われずとも無理はない。

……いや、それも違うな。

昨日、牢を破ったときに見た、決死の色が目に見ええる。

腐つても元盗賊ギルド員。ブリニョルフの同胞であつたのだ。彼の言を借りるならば、『頭にチーズでも詰まつてる』ほんくらではないはず。

私が何を言おうとも、自分達の頭目へ近寄る危険を僅かでも遠ざけようとしているわけか。まあ、私が奴に無体を働かない保証など、どこにも無いしな。

成程、なかなかどうして予想を裏切り続けてくれる。

しかし、それならば、だ。こちらにも相応の態度で臨まねば礼を失するというもの。

弾んだ心そのままに、私は声を張り上げた。砦にいる全員に届けとばかりに。

「その心意気や良し！ ならば派手に喧嘩といこうではないか。食料を持ってきたからな。終わつたら宴会にしよう」

「どこまでも舐め腐る……！」

見張りが我慢の限界を迎えたのか、左右二人が同時に矢を放つ。この程度なら簡単に防げる。

と、思いきや、私の視界の左右ぎりぎりから、地を這うように四本の矢が迫り来る。

予め、射手が地中に潜んでいたようだ。私が正面から来る、という信頼が嬉しい。

しかしこれを受け切るのは無理だ。自慢ではないが、私は攻撃特化であり頑強性は然程でもないのだ。

おそらく様々な仕込みがまだまだ至る所にあるのだろう。もたもたしていると針鼠になりかねん。

前転して矢を躲し、即座に昨日同様『スモウハンマー』を生成し門へ叩きつける。

派手な音は鳴るもの……手応えが鈍い。重い、と言い換えてもいい。土囊か何か内側に盛ったか。

連中は不用意には近づかず、射撃の間隔を僅かずつずらしながら矢を射ち続けている。いやらしいな。いいぞ。

だが感心してばかりもいられない。口笛で知らせ合ったのか、こちらへ近づくと気配を感じる。

あとのことを考えれば皆は極力壊したくなかったのだがやむを得んだらう。

私は左手に『呪術の火』を宿らせ、『混沌の大火球』を門へ投げつけた。

殴り飛ばせないのなら燃やしてしまえばいいのだ。

この炎は、地面に着弾すれば溶岩溜まりを作るほど、ひどく粘る。門に直接当てたなら、表層を燃やすに留まらず、熱が収まるまでしっかりと門を破壊してくれる。

門が破壊し尽くされるのを悠長に待っている猶予は無い。ある程度脆くなったところで、勢いをつけ蹴破る。

門の内側には、人一人分ほどの隙間を残して効率良く力を逃がすよう左右に土嚢が山と積んであり、足元には溶岩溜まりが僅かに見える。

どうも燃えるのに時間がかかっていたと思った物には、門だけではなくその後ろの土嚢も含まれていたようだ。

土嚢の隙間から見える演習場にも、弓や剣を構えた者達がいる。ガラ空き、などということはあり得ないと思っていたが、然程の数でもない。

門の突破を許したことで、口笛の応酬が一際激しくなり、程無くして止んだ。敵はすぐ側にいるのだ。知らせることももうあるまい。

先のように四方から矢を放たれては敵わなので、土嚢を手近な射手に投げつけながら右手の壁沿いに走る。

勝手が視界に入ったが……今日は無視した。

どの侵入口にも罫はあるだろうが、侵入し易い場所に仕掛けたくなるのが人情というものだろう。昨日は無視した大扉へあえて向かう。

矢を躲し、私の歩みを止めようと複数人で連携して飛びかかってくる連中を平手で叩き、仲間へ投げ、肩と背で弾く。

一瞬、一人二人を抱えて盾にしようかとも考えたが、やめた。仲間の矢で死ぬのは不憫であるし、今日は捕縛でも殺しでもなく話をしに来たのだ。

大扉が射程に入ったところで、先程同様、超高温の大火球を投げつける。

砦内部へ侵入したあと、後ろから狙われるのは面白くないので、振り返り、外部にいる連中へこちらからも弓矢と投擲で応酬する。

ちなみに、矢は昨日同様、鏃に土を付けた木の矢で、投げているのはこんなこともあろうかと林で拾った比較的丸い石だ。毎度金貨を投げているのは文無しになつてしまう。

外部にいる者は粗方片付けたところで、燃え滓となつた大扉を蹴飛ばし……待ち構えていた者共からの矢を防いで一度物陰まで引いた。

砦とは防衛用の軍事施設であるのだ。

正面の門から続く大扉を突破しても、侵入者を撃退しやすいよう長く射界が開けているのは当然である。

が、飛来する矢の数がちと想定外だ。少しでも顔を出せば、まるで横殴りの雨のように矢を見舞われる。

どうりで、外部にいた者が少ないと思つたのだ。

門の突破や内部への侵入を阻止できれば良し。しかしその公算は低いと見積もり、迎撃しやすい内部に多数の人員を配置した。そんなところか。

しかしこの矢雨は酷い。こちらから把握できる以上の数が飛んできている。どうも壁に狭間が空いているようだ。何人潜んでいるのだろう。

また大火球でも投げられるかと思うが、あれでは焼殺してしまうだろう。困った。

どうしたものかと思つたところで、ふと、この場に丁度良い道具を大量に所持していることを思い出した。友の言う天啓であろうか。

奴等の狙いは正確だ。意を決して通路の中央まで飛び出し、我が身を曝すことで、両の手から放たれる品が射線から外れるようにし、投げる。

手が空いたところで『ロスリック騎士の大盾』を地に打ち立てるように構え矢を防ぎ切り……轟音。『火炎壺』はいい具合に連中の中心付近で爆ぜたらしい。

巡礼を始めたばかりの頃はよく世話になったものだが、いつ頃からか手間の割に威力不足ですっかり存在を忘れていた。闇霊相手には案外使える品であるのだが。

さて、効果の程はと思ひ盾から目だけを出し覗き見るが、一息後には変わらぬ勢いで矢雨が降りかかる。

数は若干減っているし、狙いも多少甘くなっているが、どうも怒りを買つたようだ。

このまま盾に隠れていては、奴等も何かしらの手を打ってくるだろう。

現に口笛が再び聞こえた。通路で挟撃などされてはたまらん。念の為、背後にも『黒鉄の大盾』を打ち立て、防御とする。

一応の安全を確保したところで、火炎壺が駄目なら『黒火炎壺』だと再び両手から投げる。文字通りの爆音。元々狭い室内で使う品ではないのだ。熱風はこちらまで漂い、音は乱反射してよくわからなくなっている。

流石に効果有りだろうと思いきや、まだ矢が降ってくる。……段々面倒になってきた。自慢ではないが、私はあまり堪え性が無いのだ。

そつちがその気ならこつちもこの気だと、黒火炎壺を盾の陰から投げ続ける。安心しろ、数なら無限に近くある。

途中、空中で撃ち抜かれ爆ぜる壺もあつたが、問題無い。一番の効果は縦横無尽に暴れまわる音であるからだ。連中には耐え難い圧を伴う音であろうが、不死人は音程度で死んだりしない。

それぞれと調子に乗って投げ続けていると、盾に当たる矢の音が徐々に減り、やがて途絶えた。

これで全員を昏倒させたとは思わない。

おそらく大部分は一時撤退し、次の迎撃地点で待ち構えているのだろう。

とはいえ正面からの矢雨では効果がないと理解したはずだ。全方位を警戒し、不意打ちに備える。

一先ず、会敵するまでは進むことにした。壺の効果か、そこかしこに寝ている者は足

で軽く小突いて狸寝入りではないことを確認する。

一応、罾も警戒しておく。これだけ人員が入り乱れているのだ。誤作動を防ぐためにも罾が仕掛けられている可能性は低いが、奴等は盗賊である。あるとわかっている罾の回避くらいなら、どれほどの緊急時にも軽く熟してみせるかもしれない。

大胆細心。警戒は怠らないまま、砦内部を突き進む。

一度、二度と口笛が聞こえる。今度は何の悪巧みだろうか。

そこから少し進んだところで、昨日私が見事にはまった罾の地点まで辿り着いた。

昨日は砦の東西を回っていたためそれなりに時間がかかったが、大扉から直接赴けば、然程の距離は無かつたらしい。

しかしどういいう仕組みなのか、崩れたはずの床が元通りになっている。石造りの床とはそれ程容易く崩したり戻したりできるものではないと思うのだが。

ちなみに黒い細紐は見あたらない。

これは矢雨より余程困ってしまう。罾なのかそうではないのか、私には判断がつかない。

どうしたものかと数瞬悩んだところで、再び妙案が閃いた。

別に今日は隠密行動ではないのだ。先程もどかんどかんとやらかしたばかりであるし。

ならば罨があるかどうか、叩いて調べながら歩けばいい。今日の私は調子が良いかもしれない。

私は『ルツツエルン』を取り出し、さあ調べるぞと振りかぶった。

「待て、このトンマ。そんなお化け鶴嘴で叩かれちゃあよ、折角歩けるように直した床がまた抜けちまわな。

にしても、人の寝起きに馬鹿でかい音を好き放題鳴らしやがつて。人生でも一二を争う最高の目覚めだ。心から礼を言うぜ。あ、り、が、と、う、よ」

目的の人物に会えたことで、私は得物を下ろした。一人、配下を付き従えているが、さしたる問題でもあるまい。

しかしこの男、当身を食らわせたときに何本か骨をやった手応えがあつたが、顔には一切それを見せない。普通なら息をするのも辛いだろうに。

ブリニョルフといいこの男といい、盗賊ギルドの幹部は痩せ我慢の教練でも受けるのだろうか。

「昨日ぶりだなブレックス。いやあ、礼には及ばんぞ。今日はなかなか歓迎してもらえたからな。

しかしやつと会えたという心境でもある。困難を乗り越えた分、感慨もひとしおというものだ」

「生憎だがクソ野郎殿、俺はできることならそのツラ、二度と拝みたかなかつたぜ」
なんと、聞き捨てならない。

「いかにぞブレックス。命を粗末にしてはいかん。」

私はお前に会いに来ると言ったのだ。私に会わないということは、お前が自害することを意味する。それはいかん。

命は普通一つしか無いのだ。大事にしろよ」

「……手前、ブリニョルフの奴によ、『常識が無い』って言われたりしてねえか?」

「彼は広い心を持っているからな。私が多少馬鹿を抜かしても許してくれる」
ブレックスは処置無しとばかりにこめかみを押さえ俯いている。

いや、流石に今の命云々は私なりの冗談のつもりだったのだが……これは『滑った』というヤツなのだろうか。

私が調子外れなことを言ったのもそうだが、ブリニョルフなら上手な返りで会話を誘導してくれる気がする。

やはり此奴とは相互理解が足りない。

「それで、聞くところによると今日は話し合いに来たそうじゃねえか。

なのにやつてゐることは正面切つての殴り込みだ。昨日に引き続きとも言えるな。

手前は何か? まず殴つてから挨拶をしるだけでも母親に教わつたのか?」

今度こそ聞き捨てならない。今度は冗談ではない。

「まさかまさか。今日は本当に、穩便に話をしに来たのだ。」

だがお前の配下達はお前を守ろうと必死でな。その心意気を無下にしては興が醒めると思い、相手になつたまでだ。

それに相互理解を深めるためには、喧嘩が必要なこともあるだろう？ 私はお前の可愛い配下達の『おとこの心』を尊重したに過ぎん。

……それはそうとブレックスよ。私の母について、いや母だけではない、私の親族と友人達について一言でも再び侮辱してみる。この砦の一味全員に『殺してくれ』と懇願させてやる。

私が大口を叩いているなどと考えるお前ではあるまい？」

「……クソめ。了解だ。そして今の一言に関してのみ、謝罪しよう」

素直に謝るか。まあ許してやろう。私と此奴は知り合つて間が無いのだ。何が逆鱗であるかなど、知つていようはずもない。

私は仲直りの宴会を催したいといい、ブレックスに食堂まで案内させた。

奴は初め、執務室へと案内したがつたのだが、私は砦の全員と仲良くしたいのだ。大勢が集まれる食堂のほうが都合がいい。

勿論全員は収まりきらんだらうが、幾らかは寝ているか飯が食える状態ではないだろ

う。であればそれも結果として都合がいいというもの。

さて、ブレックスではないが、今日も昨日に引き続き、実りある一日となれば良いのだが。

私は、有意義な話し合いになることを祈った。

一一、お食事会

ブレックスに食堂まで案内させた私は、その広さを見て意外に思った。

廃棄された砦ということもあり内装を好き勝手に改めたらしく、面倒を嫌ったのか厨房から食堂までの壁や扉が取り除かれている。

椅子や机を運び込むか、最悪、床に敷物でもすれば、一味の者共が十分に収まるだろう。

今は調子の悪い面々も含めて、快復のあかつきには大宴会としゃれこめそうだ。

私はブレックスに数人の人手を借り、調理に取り掛かる。

初めは私を持ち込んだ食材への忌避感から反発されたが、頭目が改めて指示を出すと、しぶしぶながら大人しく従ってくれた。

奴の「生かしておいて毒を盛る理由も無え」だとか「近頃はろくな物を食ってねえんだから、食えるときに食え」という言は道理ではあるが、感情の問題は如何ともし難い。

特に寄越された人員は若い者が多かった。年嵩の者に比べれば尚更であろう。

ちなみに若者が多い理由は、毒も薬も自前で用意するこの一味にとつて、「まともな飯も作れない奴に錬金術なんぞ恐ろしくて任せられるか」とのことだった。

つまり食事当番は若い構成員の錬金術修行でもあるらしい。これも道理である。

持ち込んだ食材は多いが、人海戦術で取りかかれれば然程の時間はかからない。

パンとチーズ、肉や魚の汁物と、数品の焼料理。急ぎで拵えたにしてはよく料理してくれたと思う。

一つ首を傾げたのは、明らかに甘味とおぼしき焼き物や練り物が添えられていたことだ。私の感覚では、その手の品は食後に食べるものだという認識があるのだが、このあたりではそうでもないらしい。

配膳が終わる頃には、砦の無事な面々が既に食堂に詰めかけていた。

私が妙な動きを見せたなら身を挺して頭目を守ろうという心積もりなのだろうが、今日は仲直りの宴会であるのだ。連中のそれは杞憂というものである。

そも、私は食べ物を粗末にするのが嫌いだ。そのような事情が有ろうと無かろうと、食事中に荒事を起こしたくはない。

食堂は中央に長い大テーブルが鎮座しており、壁際には数人掛けのテーブルと椅子が大テーブルをぐるりと囲むように配置されていた。

本来は大テーブルの短辺壁側が上座となるのだろうが、私は長辺中央に陣取り、ブルックスにはその対面に座るよう指定した。

話をするのにあまり離れていては何かと面倒である。ここでも配下達が騒ぎ立てか

けたが、奴が一喝した。奴自信、そろそろ面倒になったようだ。

「さて、酒も料理も行き渡つたな？ それでは一言。」

我々の出会いは少々手荒いものとなつてしまつたが、腹を満たすことでいくらか溜飲を下げて欲しい。

ああ、これは今日だけの話ではないぞ。食材は明日以降も持つて来る。存分に飲み食ひしてくれ。

それでは、我々が手を取り合い輝かしい未来へ進むことを願つて、乾杯！」
訪れる静寂。音頭を取つたはいいものの、盛り上がりはしなかつた。

だが、ブレックスが仏頂面で黙つたまま杯を掲げ、隣に座つた男、奴の腹心らしいハ
ンが「乾杯！」と応じ、景気良く一息に飲み干した。

数人が目を見開いて驚いているが、ハンは何事でもないという顔をして、食事に取り掛かつている。

ガツガツと豪快に食べ、「まともな飯は久し振りだ！」とはしゃいでいる。
というより、他の者も自分に倣えと言いたいのだろう。察した者達も皿に手を伸ばし
ている。

ハンは機嫌良く舌鼓を打つようで、その目の奥には油断ならない光がある。この場
においては私の振る舞う食事を甘受することが、ブレックスの安全に繋がると考えている

のだろう。

そしてブレックスもハンの思いを理解しているがために、不機嫌面のまま何も言わない。

尤も、仮にブレックスがハンを誤解して「自分を裏切り奴に乗り換えようとしている」などと思いい違いをしても、おそらくこの男は変わらぬ行動を取るのだろう（見る限りでは、この頭目はそこまで愚物ではなからうが）。

この砦の連中は誰も彼も、頭目殿が余程大切らしい。違うのは経験の有無からくる立ち回りくらいなものだ。

しかしここまで心を砕く男が、他の面々から悪く思われても不憫である。少し助け舟を出すでしょう。

「ハンと言ったな。喜んでくれているようで、私も嬉しいぞ。わざわざ持参したかいがあると言うものだ。」

さあ、毒見役はこの者が買って出てくれた。他の者も皆、遠慮せずに食べてくれ。食材に罪はないのだ。折角の美味しい料理が冷めてしまうぞ？」

手を付けて居なかつた者達も、おずおずと手を伸ばし始めた。

私の言葉、というより既に察して食べ始めていた者達がそれぞれ目配せしたためである。

皆が食事を始めたのはいいが、たったそれだけのことがここまで面倒になるとは。

皆へ襲撃をかけた際には殺すか拷問にかけるつもりであったとはいえ、今になってみると少々対応を間違えた感がしなくもない。

まあ、過ぎたことは仕方ないのだ。気持ちを切り替えていこう。失敗をいつまでも引きずるのは良くない。

私が溜息を堪えていると、ハンが話しかけてくる。

「しっかし旦那の魔法は便利ですね。これだけ大量の食料を手ぶらで持ち運べるなんて。厨房で旦那の手元から樽や木箱がごろごろ出てきたときにや、随分驚かされました。昨日も頭に不思議な魔術をかけとりましたし。」

素晴らしき戦士であり、素晴らしき魔術師でもある。古の英雄のようですな。

ただ、これ程の力をお持ちだというのに、あたしや高名なはずの旦那のお話を聞いたことが無いんです。浅学で申し訳無いんですが、もしかして旦那はどこか遠くからおいになつたんじゃありませんかい？

折角こうして同じ釜の飯を食つとるんです。よろしければ旦那の話を聞かせてくださいな」

この男、人懐っこい雰囲気醸して私の情報を少しでも得ようと虎視眈々である。程良い緊張感が背筋を駆け抜け、とても心地が良い。

それに、昨日はブレックスの尋問に付き合う形で聞かれたことにしか答えていないので、たしかに私自身の話はあまりしていない。

私の特殊な個人的事情に関して一から説明するのは面倒であるし、何よりスカイリムではブリニヨルフにしかまだ話していかないのだ。おいそれと誰にでも語ってやるつもりもない。

故に墳墓でブリニヨルフにしたような言い訳を基に（ブリニヨルフが）脚色した物語を披露する。

結果、私はタムリエルの東や南の大陸を股にかけて活躍する凄腕冒険者で、私の特異な魔術に目をつけた魔術師の一団に依頼され実験を行っていたところ、転移事故に巻き込まれて件の墳墓に飛ばされ、ブリニヨルフと出会った。という話になった。それなりに自負はあるとはいえ、友の創作した話をさも自らの実績であるように語るのは少々気恥ずかしいものがある。

そしてそれを聞くハンは、相槌を打ち、細々とした質問を挟み、嫌味にならない程度に笑い驚き場を盛り上げている。なかなかの聞き上手であった。

私のロードランやロスリックでの実体験をこちら風に脚色して語ってやると、周りの者にも話を振りながら会話に興じている。

内容がやや雑談めいて来たところで、それまでずっと黙っていたブレックスが口を開

いた。

「ハン、済まねえな。だが、そろそろ突っ込んだ真面目な話をしてもいい頃合いだろう」
私としてはハンと楽しい話を続けていても良かったのだが、ハンを含めて私に心から
気を許している者がいない現状、茶番めいた空気が無かったとは言い難い。

頭目殿が水を向けてくれるのなら、私に否やは無い。

『仲直り』は一応済んだことにしようや。幸い、こちらに死人はいねえ。痛みと屈辱を
味わったが、手前が相手だったことを鑑みれば、御の字といったところだろう。酒に流
してやるよ。

だから手前は今から、正式に俺達の客人だ。……全員そのつもりでいろ」

今やつと、『話し合い』の席に着けたということなのだろう。長かったような、短かっ
たような。

いや、訪問二日目であるのだから、短かったのだろう。大金星と言っても良いのかも
しれない。やはり今日はいいい日である。

「話を戻す。手前の目指すところは俺達を手駒として力を持つことだろう？　だがそれ
は極めて難しい。客人を相手として誠意を持って伝える。手前への反発心で言ってい
るんじゃないかねえ。それは誓う。」

まず俺達は、言うまでもなく盗賊としての技能集団だ。だが、ギルドを抜けた今、そ

の腕を振るい続けるのは自殺行為になる。

いずれはギルドの権益を犯すことになりかねんし、そうなれば待つのは肅清。つまりは論外だ」

まあそれはそうだろう。仮に連中の盗賊働きを続けさせる道があるとするならば、連中を完全に私の管理下に置き、その上でブレックスがメルセル・フレイに頭を下げ、実質的な下部組織に納まらないことには難しい。

だが、そんな真似をするくらいなら、そもギルド脱退などせんだろうし、ブレックスに付いてきた連中も納得はしまい。

「別に賊稼業しか能がねえわけじゃねえ。ギルドの中には盗賊としての腕だけを磨けばいいなんて考えの連中も居たがな。

俺はギルドマスターに倣い、こいつ等には優れた盗賊であるために、錬金術、鍛冶、魔術、土木建築、宝物の鑑定、暗殺、商売と、様々な技能を身に着けさせた。だが当然、全員が全てを修得しているわけでもねえ。

盗賊から足を洗ってまっとうな稼ぎで生きていくことはできるだろうが、それは個々人がそれぞれにとって話だ。

この馬鹿共は寂れた砦まで俺に付いて来たがな、実利的には俺達はまとまっている必要がねえんだよ。

それで何人かはハマこいて幾つかの都市で手配書が回つちまってるからな。散らばつてつても難しい。

しかも最後が決定的だが、俺を含めてどいつもこいつも盗賊であることを捨てる気が一切ねえんだわ。

ここしばらくの実態は良くて山賊といったところだが、心は盗賊ギルド員のままだ。フラゴン一派、なんて意味ではなくな。

そんな連中だからよ。デカイ山のために一時的に表の顔で潜入することはあつても、それを本職になんて御免被んだよ。そもそも、育ちが悪いのが多いから、堪え性のいる生活に向いてねえつて話もあんだが。

真面目なところよ、俺達にとって、磨き上げた業を捨て、誇りを捨て、手前の元で何かしら世間様に顔向けできる事業にでも従事するなんてのは、それこそ耐え難い。手足を縛られたまま生きて、何が楽しい。何のための人生だ。

手前は昨日、言うことを聞くまで拷問にかける、とか何とか抜かしていやがったがな。そんな手間は取らせねえよ。

従うこと自体が拷問なんだから、速やかに自害してみせらあな。

が、もしかしたら何人かは今の生活に嫌気が差してるかもしれねえ。そういうのがいたら、手前の手で日の当たる場所へ戻してやつてくれや」

ブレックスの最後の一言に配下達が熱^いり立つ。やはり頭目殿は慕^われているらしい。だが「頭！」だの「おやっさん！」だの「兄貴！」だの「大将！」だの、呼称に統一性の欠片も無いな。このあたりも、規律を重んじるフラゴンにいるギルドの面々とは違^うと思わせられる。

しかしそうか。ブリニョルフの話から、ある程度力づくでことを運べるかと思つたのだが、存外連中は盗賊としての生き方に執着しているようだ。

私としてはそれを尊重してやりたいと思う。ブリニョルフではないが、私は会つたばかりのこの連中を少し気に入りにかけているのだ。

それに、無理を押ししてことを運べば、此度の砦への一件が丸々無駄足になりかねん。

どうしたものだろうかと思ひ……一先ず問題を先送りすることにした。

「ブレックス、お前の言うことはわかつた。

聞きようによつては恐れ知らずというか開き直つたというか、なかなか危うい奴だと思わされたが、腹を割ってくれたことに礼を言おう」

奴は「酒と飯の代金だ」などと吹いているが、有り難いことには変わりない。

「その上で提案だ。何かお前達、食料事情以外で困つていないことは無いか？ 私はその解決に助力しよう。

そしてそのあいだに、お前達は双方が納得できるような、互いに利があるような、そ

んな妙案を考え出してくれ。

自慢ではないが私はタムリエルの事情に詳しいわけでもなければ、知恵が回る性質ではない。その点、お前達はお前達の力量や実現可能な範疇などその他諸々把握しているのだし、自らが許せる範囲で差し出せる労力を弾き出すこともできるだろう」

ブレックスは「また勝手なことを」とでも言いたげな顔だが、隣のハンが「それなら地下の拡張工事を頼めますか？」と申し出た。

恐ろしい素早さで首を副官のいる隣へ向けたブレックスの裏切られたような顔が少々滑稽で面白い。

「いやね頭。この自由極まりない旦那を野放しにしておくほうが危険だと思うんでき。それなら妙案が浮かぶかは別として、何か仕事を割り振ってしまうのが短期的には良いのではと思うんですが、如何でしょう？」

ブレックスは少し考えてから、一理あると思ったのか「勝手にしろ」とぶつきらぼうに言い放す。

そして更に少し考えてから、ハンを叩いた。楽しそうである。

「それでは、私は早速工事に取り掛かる。考え無しにあちこち掘って地下水脈にでも当たっては不味いからな。誰でもいいから詳しい者を付けてくれ。ではな」

歩き出した私の後ろから、頭目と副頭目が追いかけてくる。特に頭目は「地質に土木

となると、わかるのは俺くらいなもんだ。結局俺がこいつに付き添わにやならんだろうが」またハンの頭を叩いている。仲が良い。

しかしお前、出会ったときはもう少し泰然としていなかったか？

一二、亡き友に捧ぐ愛

地下の狭い隧道に、ガツーン、ガツーンと耳を痺れさせる音が絶え間なく響いている。ブレックスが男の催した宴会で手打ちを決めてから、男は有言実行とばかりにすぐさまお化け鶴嘴を地下で振るい始め、既に三日が過ぎてゐる。つまり、今は工事開始から四日目だ。

男は毎日、朝餉の片付けが終わる頃にはやってきて、食材を放出。自らは地下に籠もり、昼餉の支度ができれば皆と食事をし、夕餉の支度が始まる頃には帰つていく。そんな日を繰り返していた。

その間、「絶え間なく」を地で行くように、男が休息を取ることとは一度も無い。指示が無ければひたすらまっすぐ掘り進め、ブレックスが指示を出せば素直に従い進路を変える。その繰り返しである。

元々地下で行う工事というのは重労働であり、小まめな休憩を挟まなければ効率が落ちること、空間が狭く一度に作業できる人数が限られていること、空気が塵芥にまみれ呼吸器に悪影響を与えること、掘り出された土砂の処理に時間がかかること等、様々な理由で進捗が極めて遅い。

しかしこの男は、通常の数倍の大きさと長さを誇る鶴嘴（？）を通常の何倍もの早さで休むことなく振るい、冗談じみた速度で空間を拡張し続けている。

ブレックスの仕事は、男の掘る進路を指示すること以上に、掘り出された土を土囊に詰めて男に回収させることであつた。地味に腰にくる作業である。

初日、二日目と随分剣呑であつた男の来訪であるが、手打ちとなつてからは堂々と正面の門から入り、堂々と門から出ていく。

聞けば、リフテンから通つていふと。不思議に思い、乗つてきた馬はどこに繋いでいるのか、砦から離して野生動物にでも襲われては不味くないか、と尋ねてみれば、「父母からもらつた両の足がある」と自慢気に叩いてみせた。

リフテンから砦までは歩いて一日、馬車で半日、夜明けと共に早馬を飛ばして朝餉の最中に滑り込むかという距離だ。

移動に適した魔術を使つているのか、馬鹿げた体力にものを言わせて駆け抜けているのかブレックスには判断がつかないが、男の非常識さについて考えを巡らせることすら面倒になつてそれ以上の追求を止めた。

「なあブレックス、何か面白い話は無いのか？ 地下空間の拡張はそれなりに達成感もあるから飽きはしないが、首から上は少々暇だ。適当な話でもしてくれないか」

ブレックスは内心で悪態をつく。

口に出さないのは、男の出し続ける大音量のせいだ。これに負けないように声を張ると、喉がすぐに枯れてしまう。工事初日はそれで痛い目に遭った。ついでに腹立たしきで頭の血管も数本切れた。

と、男の出す音が変わる。硬い岩盤から土の層に変わったらしい。

ブレックスの予定する工事完了まではまだ岩盤を掘り進める必要があるが、何よりブレックス自身が耳にじんわりと残り続ける痛み能耐えかねたため、土壁を掘り進めるよう指示を出して男にシャベルを渡した。岩を砕いて進むのでなければ、十分な得物だ。

しかし男はシャベルより良い得物があると言い、四又になった長い鋤、を取り出した。形状から鑑みるに、ほぐれた土砂を運んだり、山と重ねた草を運ぶのに使うのではないかとブレックスは思ったが、いやこの男のことだ、この鋤で一気に土壁を崩し掻き出すのだらうと放っておくことにした。

常人であれば岩盤だらうが土壁であらうが、得物が鶴嘴だらうが鋤だらうが掘り進める苦労は大きなものであらうが、この馬鹿力をもつてすれば関係あるまい。寧ろ岩盤より土壁のほうが音も小さくなる分、ブレックスの耳に優しい。

地層の変化は、恩恵であると同時に会話を拒否する理由が一つ減ったことを意味し、今度は鼻を鳴らして応じる。

「手前と仲良くお喋りせにやならん理由は無いと思うんだがな」

「お前はなかなか懐かない猫のようだな。食事の世話もし、それなりの時間を二人きりで過ごしてもいる。少しくらい絆されてくれてもいいだろうに」

現在ここには、「誰が猫だ馬鹿垂れ」と毒づくブレックスと男の二人しかない。ハンはブレックスの指示で砦全体の指示を担当している。

更に言えば、配下の半数以上を狩猟や賊働きの名目で砦の外へ出している。

男がこちらを害する可能性は低くなったが、消え去ったわけではない。

何かの拍子に男がブレックスを殺害した際には、ハンを頭目として砦の配下達を逃亡させるよう指示していた。その場合、既に多くの者が砦から出ているほうが、都合がいい。

ハンは「死ぬなら共に」とブレックスを睨みつけながら食ってかかったが、ブレックスが「頼む」と一言告げて頭を下げた姿勢のまま幾らか待つと、やるせない面持ちを浮かべて最後には承諾した。

まあ、ハンに関してはどうかこうにか上手に出し抜いて、もしもの事態には自分の元へ駆け付けるのではないかと思わないでもないのだが。

閑話休題。小っ恥ずかしい話は止めにしと

ブレックスとしては、そうした危機管理の他にも、現実的な面からもこの機会に蓄えを増やしておくべきだと考えた。

人間、余裕が無くなると思考が短絡的になりがちであるし、普段は仕出かさない失敗が増える。何より、稼業に精を出すための活力が日に日に失われていく。

フラゴン一派がリフテンの掌握を進め、リフテン有力者からの支援があてにならなくなった現状、男の持ち込む食材は一味にとつて非常に有り難いものであった。それを思いつかべるだけでも業腹であるため、絶対に口にすることはないが。

しかしブレックスは多数の配下を抱える頭目として、実利を優先せざるを得ない。それ故に好機を逃さず、食料と財を蓄えるのだ。自分に何があつても、配下達が路頭に迷わないように。

「そうだ、適当な話題が思い浮かばないのなら、ガルスの話をしてくれないか。

どうもギルドの面々は、ガルスの話題になると暗い面持ちになるのだ。聞くのが憚られる。

そのくせ、誰もが栄光の日々を思い出し、僕物であつた己がマスターを誇らしく思い、心の何処かでは話題を共有したがつている。

今はまだ、心の整理がついておらんのだろうな」

「それが察しきれてんに遠慮無く俺に持ちかけるつてのは、手前どういふ神経してやがんだ」

「お前はまだ私の友ではないからな。

それに、ブリニョルフはお前を『ガルスの信奉者』だと言っていた。私に面識は無いが、彼が出来のいい兄のように語る人物だ。さぞ良い男であったのだろうよ。

皆を惹きつけた一人の人間について、『信奉者』とまで呼ばれるほど近くにいた男の口から聞いてみたいと思うのも、然程おかしな話でもあるまい」

ここ数日のあいだにブレックスが男に対して腹立たしさを覚えた回数など、最早数えるのも馬鹿馬鹿しいが、今度ばかりはそれを通り越して憎いとまで思った。

ガルスの死は、自他共認める『信奉者』であるブレックスにとって、今だ傷口を抉り血を流し続けているものであった。

いや、本当は血もすつかり流れ果てている。今、傷口から零れ出ているものは、ブレックスが生きていくために大切な何かである。

「口が重いな。だが私はガルスの話が聞きたいのだ。」

……そうだ、話してくれないのなら、明日から持参する食料の一部に、刺激の強い香料や極めて酸味の強い果実を仕込んでおこう。

あれだけの量だ。食材を一つ一つ丁寧に確認などできんだらう。そして見事当たりを引いた者には高らかに教えてやるのだ『ブレックスが悪い』と」

憎い、と思ったはずだ。だがブレックスの奥底からは再び腹立たしさが迫り上がり、

頭を掻き毟りたくなる。次いで「自分達はこんな馬鹿に負けたのか」と情けなさど呆れが込み上げる。

何故、こうまでわがままなのだ。何故、自分の口を割らせるための手段が子供の悪戯と同等なのだ。大量の食材とは言え、何故、仕込みが調理中に臭いで気付かれることなく成功すると確信しているのだ。

そして何故、自分はこの傲岸不遜な阿呆の言うことに一々駄目出しをしているのか。ブレックスは一通り心を乱し、乱し続け……………脱力した。もう、何も考えたくない。鈍った頭のまま、口が動くに任せた。

「……………ガルスは、俺の全部だった。強くて、賢くて、笑えて、唯一意地を張らずに心から尊敬していたと言える相手だった。

奴に付いていけば、クソツタレな俺の人生もマシなものになると信じられた」

男は鋤を動きを鈍くした。話を聞く態勢になったようだ。

「奴と出会ったのは、仕事先のとある屋敷でな。双方、数人の配下を連れていた。一触即発つてヤツだ。互いの力量は見た瞬間ある程度わかったからな。

死を覚悟したが、あの野郎、ぬけぬけと言いやがったのさ。『どうせ狙う獲物は同じだろう？ なら競争しよう。私が勝つたらお前、私の手下になれ。私が負けたらお前の手下になってやる』つてよ。

言い終わるや否や、奴は背を向けて駆け出した。後ろから襲われるとは思わなかったのか、それでも問題無いと判断したのかはわからねえ。奴の配下も苦笑しながら付き合っていたな。多分、その手の非常識はいつものことだったんだろう。

俺にも意地がある。すぐに追いかけた。

その屋敷は面倒な作りで、一度地下に降りてから屋根裏へ続く梯子と階段を通らにやならなかった。

奴は俺の先を行っている。ならそのまま追いかけたって勝負には勝てねえ。だから俺は一度外に出てから外壁を伝って屋根まで登り、少々強引だがそこから侵入しようとした。

乗る必要も無い勝負に乗って冷静さを失っていたあたり、既に奴の術中だったんだろうな。

屋根には屋敷の私兵の詰め所があつて、まんまとかち合つた。思わず『八大神に呪いあれ』なんて口走つたな。

こっちは盗賊。相手は本職の戦士。苦戦は必至だった。

いつの間にか囲まれて撤退も難しくなつたとき、屋根裏からガルス達が私兵共の死角をついて飛び出し、奇襲をかけた。まあ、有り体に言つて助けられちまつたわけだ。

勝負にも負けて借りまで作つた。奴に負けを認めないわけにはいかなかった。

だが、どうしても気になって尋ねた。『いつもこんな勧誘をしているのか』、『俺のことを以前から知っていたのか』と。

すると奴は『こんなことは片手で足りる程度だ』『お前のことは名前くらいしか知らなかった』と答えた。

なら何故と重ねて問うと、『お前の目と、配下達の挙動だ』と言いやがった。

曰く、盗賊として誰よりも名を上げてやろうという野心が見えた。

曰く、配下達はお前を信頼しており、そのうえで万一の際には身を挺する覚悟があった。

奴は『野心と、それに見合う技量と、相反する甘さを兼ね備えたヤツは珍しい。だから欲しくなった』と締めた。

勝負に負けたこと、命を救われたこと、奴の不思議な雰囲気呑まれたこと、トドメにそんな口説き文句を聞かされたことが決め手になって、俺はギルドに入った

ブレックスは、まさに転機となったその日を懐かしく思い出していた。

ガルスのことを考えるだけで辛い。しかし、記憶を辛くするだけの素晴らしい思い出も確かにあるのだ。

「なかなか運命的な出会いであったのだな。ちなみにそれはいつ頃のことだ？」

「あー、何年前になるか？ デルビンのおっさんは居たな。フレイの糞もだ。二人共、既

に幹部だった。プリニョルフは新進気鋭の若手って感じだったな。ニルインやバイパーはまだ居なかったと思う。俺のあとにそれぞれ加入してきたはずだ。

……まあ馴れ初め程度聞けりや十分だろう。あとは他の連中にでも尋ねろ」

「待て待て、馬鹿を言うな。

こんな面白い話を聞かされては、余計に続きが気になってしまいうだろう。もう食材に悪さはしないと誓うから、話してくれ。

ほら、土を掘る音だつて静かだろう？」

馬鹿デカイ音を出していた自覚はあったのか、とブレックスはまた一つ溜息をつく。

ブレックスは仕方なしに口を開くが、同時に、何故自分の口がこれほどまでに軽くなっているのか、ふと疑問に思った。

男が魔術を使ったか？ いや、その素振りは見えなかった。ではどうして？

ブレックスの頭の隅の隅に、ちらと一瞬だけ、荒唐に過ぎる考えが浮かぶ。男に、僅かながらガルスの面影があるのではないかと。

ブレックスは自分で自分を殴りたくなかった。この『デイドラ』とも思える非常識さと人の事情を鑑みない傍若無人さ、それに冗談めいた戦闘力を誇る異常者が、あの出来物ガルスに似ている？ ありえない。

まず知恵と知識が足りない。ガルスなら己が望み成就させるための策の立案を、味方

でもない集団へ任せたりしない。

次に人間的魅力が足りない。それは諧謔であったり、常に周囲へ目を配り苦惱する者へ必要なとき必要なだけ手を差し伸べる言動であったり、組織の長として申し分の無いものであった。

翻つて男はどうであろうか。

初日。自分に密やかに会いたがために、道中にいた配下達を軒並み昏倒させた。腕力に物を言わせる前に頭を使えトンマめ。

二日目。誰も頼んでいない宴会を催し、ほぼ無理やり手打ちにさせられた。あそこでブレックスが判断しなければ、配下達が良からぬことを考え返り討ちにあつていた可能性を否定できない。『仲直り』とやらがしたいのなら、男を魅せて惚れさせてみせろ。

考えれば考えるほど程遠い人物像を重ね合わせてしまったことへの自己嫌悪が高まつていく、が、一つだけ、気付いてしまった。

ガルスは常に深謀遠慮を巡らせ、用心に用心を重ね、巨大組織の長に相応しい貫禄を備えていた。ブレックスはそんなガルスの側近であることが何よりも誇らしかった。

しかし彼には、時折、子供染みた行動をとる悪癖があつた。

どうしても欲しい書物を手に入れたがために、採算を度外視して作戦を組んだり（その書物は高価な魔導書でも、歴史的価値のある文献でもなかった）。

思いつきで定めた標的（各地の首長）の寝所へ忍び込み、警備状態の甘さを指摘する置き手紙を枕元に置いてみたり（実害が無く、沽券に関わるため誰も表沙汰にはしなかった）。

それらの庇い立てが難しい過去を思い出すと、男との共通点が毛ほども無いかと言われれば、少々否定しづらいものがあつた。

「とはいえ、あとはそんなに面白い話しも無いぞ。

ガルススの指揮の下、俺達ギルドは躍進を続け、過去類を見ないほどの勢力となつた。組織がデカくなるとな、それ以上デカくしようと思わなくなつたつてデカくなるよう世の中が動くんだよ。貴族や豪商共が向こうから伝手を作つておきたいと近寄ってくる。

何もかも順調だつた。『我が世の春』つてやつだな」

ブレックススは栄光の日々を思い出していた。

ガルスと二人だけで城へ忍び込み、精鋭中の精鋭を手玉に取つては無事逃亡した帰路で夜空に何々と大笑した日。

幹部となり、ガルスから受けた指示を上々の首尾でこなし、称賛を受けた日。

ガルスの後釜、なんて声も聞こえてきたためにそれを否定し、それなりに見込みのありそうな若手を鍛えてやつた日。

増していく影響力。フラゴンが小さな王国と呼べるまで豊かになつていつた暮らし

振り。自己満足と理解しつつも、恵まれない出自であった自分と重なる少年少女若者達を掬い上げてやれた、達成感。

何もかもが輝いていた。紛れもなく、人生最良の日々であったのだ。

そのあたりの話を思い出しながら散発的に話す。いや、男へ聞かせるというよりは、ただ思い返して、一人思い出に浸るついでに口から漏れ出していた、というほうが正確であった。

だが、ガルス的人生が暗殺によつて幕引きを迎えたのなら、思い出は美しいままでは終わらない。

黄金色の景色が、ドス黒く粘る汚泥によつて汚されていく。

カーリア。それが汚泥の正体だ。あの女が存在している限り、いや違う、あの女がこの世に存在していたという事実がある限り、ガルスの栄光に彩られた人生には、一つの汚点が付き纏う。

それが何よりも許せなかった。

男の勝手な言い分に吞まれて比較的穏やかな心持ちで昔語りを続けていたブレックスだが、仇敵の存在を強く認識した途端、全身から滲み出る昏い憎しみを抑えきれなくなった。

「……ブリニョルフから簡単にだけ聞いているのだがな。幹部であり恋仲でもあった

カーリアという女が、ガルスを暗殺したと。

ギルドの窮状の根本的な原因はそれであるとも」

男も多少の事情は知っているようだ。

ここまですで口を滑らせた勢いもあり、ブレックスは遠慮無く悪態をつく。

「ああそうさ。あの女狐め。最もガルスに近い人物になっておいて、その恩も、愛も、何もかもを仇で返しやがった。

当時、最盛期を迎えていたギルドのマスターだったガルスを狙う馬鹿共は、掃いて捨てるほどごろごろしていやがった。

俺達も防衛には気を配っていたが、ガルスが寝所まで共にするカーリアこそ、奴の身を守るのに最適な人材はいなかった。

二人の仲睦まじさは皆の認めるところだったからな。カーリアは腕も悪くなかったし、俺も納得していた。

それが、よりにもよって……。唯一心を許した女に殺されるなんて思わねえだろ。そんなの、あんまりだ。酷すぎらあな。

あの女だけは何があつても許せねえ。命に替えても殺してやる。ついでに、のほほんとして構えていた当時の俺を殺してやりてえよ。

……俺がギルドを抜けたのはな、女狐の皮を剥いで生き地獄を味わわせてやるためつ

てのが一番デケえ。

当然、フラゴンの連中も動いちやいるだろうがな。デカイ図体が動くほど、あの女に察知されやすくなる。だから少数か、俺一人で動いたほうがいい。

それに、甘い甘い復讐の蜜を他の連中に横取りされてたまるかよ」

ブレックスの胸中に、先程までの穏やかさは欠片もない。ただひたすらに、昏く、黒い、憎しみだけが支配していた。

だからだろうか。男が次に、軽やかとも言える調子で発した言葉に対して、一切の理性も効かなかったのは。

「……なるほど、そうではないかと思っていたが、お前、もう復讐以外に生きる理由が無いな？ そう思い詰めるものでもないと思うのだが。

何セガルスは、なかなか男冥利に尽きる死に様だったようだからな。私も死ぬときは惚れた女に刺されて死にたいものだ。

尤も、私は異性に魅力的と映る性質ではないようだから、難しいかもしれないが」

男の発した言葉が、ブレックスには一瞬理解できなかつた。つい今まで、曲がりなりにも会話が成立していたからだ。だから全くの予想外な返答に対して、脳が機能を一時放棄した。

そして考えるより先に、男の喉元へ向けて身体ごと短剣を突き込んでいた。男は圧倒

的強者である。そんなことは知ったことか。今はこの短剣で喉笛を切り裂くのが先だ。

男が鋤で短剣を防ぐ。

ブレックスは怒り狂うあまり、意味を持った言葉を発することが叶わず、獣のような唸り声を上げたのみだった。

「どうした？　愛していた男が死んで悲しいのはわかるが、その死に様は尊重してやるべきだろう。

勿論、仇を許せなどと言うつもりは無いぞ。しかし本当に愛していたのなら、ガルスの人生命全てを認めてやってもいいではないか。

誰も彼もがガルスの最期について暗い顔をする。一人くらい全てを肯定してやる者がいても良いではないか。

そしてそれはお前であるべきだ。そう思ったが故の発言だったが、お前も他の者と同じか？」

ブレックスの脳の、思考を司る機能が再び停止した。今度は先程のような怒りで我を忘れたからではない。

男の言うことを飲み込み、理解するのに時間がかかったためだ。何を言っているのか、わからなかったのだ。

「ん？　もしかしてお前はガルスを愛してはいなかったのか？　ああ、男色的な意味で

はないぞ。いわゆる『男が男に惚れた』というヤツだ。

自分の人生を賭けて、ガルスが何処まで行けるのか、見てみたい。そのための力になりたい。そう考えたのだろうか？」

今度は理解できる。何せブレックスの考えそのものだったからだ。

「それを表現するのに、人の言葉は不自由が過ぎるのでな。愛という単語を用いた。別に愛とは、男女間だけで成立するものではあるまい。

他の者から聞くガルスという人物は崇拜の対象であるように思ったがな、お前の話しぶりを聞くに、どうもお前は尊敬しつつも対等な友として並び立とうとしていたのではないかと感じた。

始めは『信奉者』などと聞いていたのな。そういった類かと思つたが、お前のその実際は友のそれだ。

崇拜は一方的な理想像の押し付けだが、愛は理解が伴つてこそ。だからお前はガルスを愛していたのだと思つた。違うのか？」

男が「愛」などと口にするために余計話が複雑になつているが、言わんとすることはわからないでもない。

自然と、鋤に防がれている短剣に込めた力が抜けていく。

「ならばだ。ガルスへの愛はそのままに。仇であるカーリアへの憎悪もそのままに。二

つを分けて考えればいい。キャリアは必ず殺す。ガルスはギルドに最盛期をもたらした傑物として、後々にまで語り継いでいく。

それではいのかんのか？

そも、ガルスの人生はガルスのものだ。どれだけ親しかろうが、お前がどうこう言っている筋合いでもあるまいに」

ブレックスは混乱していた。

ガルスを想えば、当然のようにその最期にも思考が向く。するとキャリアへの憎しみが湧き上がる。

いつの間にか、ブレックスだけではない、盗賊ギルドの面々にとって、ガルスとキャリアは不可分となっていた。

だからこそ、ガルスを思い出すことが苦しかった。栄光の日々を思い出すことが辛かった。

だが、男は言う。「それはそれ、これはこれ」と。

頭の片隅では「そう簡単に割り切れれば苦労はしない」と反発の声が上がっているが、大部分は呆けている。考えもしなかつた意見によつて、一度真っ白に洗い流されてしまったのだ。

一つだけ確かなのは、ブレックスにとって、ガルスが逝去してから長く付き纏っている

た、鈍く締め付けるような、苦く臍腑を焼くような、重くのしかかるような、どうしようもない不快感が消え去ったことだった。

勿論、男の言うことが正しいとは限らない。

特に、混乱の最中にあるブレックスにとつて、この羽根が生えたように軽くなつた気分さえ、やもすればガルスへの裏切りではないかとすら感じ、恐怖が襲いかかつてくるほどだ。

だが、しかし、でも、わからない。非常識の塊からもたらされた視点を、どう処理すればいいのかわからないのだ。

ブレックスは全身の力を振り絞つて男に短く告げ、その場を後にした。

「今日の作業はここまでだ。俺は部屋にいる。何かあればハンに聞け。明日の昼餉には参加する」

のろのろと足を引きずり、ふらふらと頼りなく歩くブレックスのことを「大丈夫だろうか」と男は思ったが、彼の頭目殿がいなければ工事はままならない。うっかり地下水脈を掘り当てれば、雷が落ちるでは済まないだろう。

男は岩が出るまでにすれ違つた配下の一人に事情を話し、いつもより早く帰路に着いた。

一三、虫取りと新しい友達

私がブレックスに短剣を突きつけられた翌々日、つまり今日は私が砦の攻略に取り掛かってから七日目なわけだが、現在私は左右の手に虫取り網を持ち、色とりどりの蝶を追いかけて回している。

別に遊んでいるわけではない。これはブレックスの協力を得るための試練なのだ。

しかしこの蝶共、あちらへひらり、こちらへひらり、まるで私を小馬鹿にしているようである。

段々と腹が立ってきたため、このあたり一帯を『炎の嵐』で焼き尽くしてしまおうかとすら思うが、私はこの蝶共を生きたまま捕まえにきたのだ。焼いては意味が無い上に間抜けを曝すのみである。

どころか、折角見つけたものを再度探し出すところから始めなければならなくなるあたり、大きな後退とすら言える。

思えば私は、基本的に自分と同等か、それ以上に大きな敵ばかりを相手取ってきたのだ。

中には『大沼』の『羽虫』など人間大より小さな輩もいたが、奴等は明確に私を狙っ

て攻撃してきた。ならば対処も容易い。

弓で射る。ナイフを投擲する。近寄つて来たところを剣で打ち払う。如何様にも思ふがまだ。足元の毒沼など何程のことはない。

しかしこう、私の網を避ける意思が有るのか無いのかすらわからない挙動を繰り返されると、動きが読めなくて一向に捕まえられない。

いや、捕まえるだけなら素早く網を振るえば良いだけなので何の支障も無いのだが、ブレックスからは『生きたまま』と指示を受けている。どうも死亡してから時が経つと、鱗粉や体液の成分が変化するらしい。

遠い過去、幼い頃に虫を追いかけて遊んだような気もするが、巡礼を終えたこの身が同じように、いや正確には完全に翻弄されているなど、あつて良いものだろうか。

数日前にも思ったが、同じ境遇に至つたお歴々は泣いてもいいぞ。

だが、男が一度やると決めたことは、余程環境や気分が大きく変わらない限り基本的にはやり通すべき、と世間一般ではされている。

目的が達成できれば手段は何だつて良いとばかりに試行錯誤を日常とした不死人の私には、少々理解し難い価値観ではある。時折訪れる、血沸き肉踊る真つ向勝負の機会には、『手を変え品を変え』も多少控えたが。

しかし、そうであるならば、どれだけ絵面が酷かろうとも、そこかしこから寄せられ

ている視線に呆れが含まれている気がしようとも、目標を貫徹するためには致し方ないことなのだ。

……そろそろ成果を出さないと、連中がブリニョルフに妙なことを吹き込みかねん気もする。もういくらか本気にならねばいかんか。

私とブレックスがガルスに関する件のやり取りをした翌日、つまりは昨日、奴は己が言の通り昼餉には顔を出した。

しかし折角の食事であるのに、常に仏頂面……というよりは殺気立っており、寄らば斬る、とでも言わんばかりであった。

配下の者共も怯えており、私に向けて「何か馬鹿をやらかしたんだろう」と非難の眼差しを向けてくる始末である。

私としては甚だ心外であった。そも一応の顛末を極簡単にハンには報告をしており、そこでとやかく言われなかったのだから、組織運営上も問題無いことがわかる。

頭目の腹心であるハンは、当然の如くブレックスの胸中をある程度把握していたらしい。

ハンを始めとした一味の面々は考えた。自らが仰ぐ頭目が唯一無二の友を喪い、絶望から停滞を選ばずなら、自分達が全力で支えよう。

しかし停滞どころか、不自然にならないよう周辺の整理を行い終着点にしか焦点が合わない頭目は、見ていてあまりに痛々しく、また己等の力不足を突きつけられるようで、口惜しさのあまり自罰的にすらなっていたらしい。

ところが、ここしばらく見受けられなかった感情の起伏を良くも悪くも見せてくれて、険のある不機嫌面の下ではガルスについて考え続けているのだろう様子も目の当たりにし、いくらかの安堵を得たようだ。凧よりも高波を求められるとは、相当だな。

それと同時に、頭目にその感情の変易を齎したのが部外者であるという事実に対し、主に若い配下達を中心に私へ反感を抱いているとか。

ハンは敬愛する頭目が気を持ち直すのなら何だつて良いようだ。殺気立った男の隣にご機嫌顔があるのは、何とも言えない光景である。

ついでにいえば、ハンは頭目が地獄に向かって突き進むのであっても、躊躇なく付いていくのだろう。

問題なのは仮定や結果ではなく、頭目ブレックスの胸中に救いと納得があるかどうか。それのみだ。

この男もまた、美しい主従愛の持ち主と言えるのだろう。まだ付き合いの短い私では、『狂信』というつまらぬ一言と紙一重であることを否定できないが。

閑話休題。
(ハンのイカれ具合はどうでもよし)

昼餉が終わり、三々五々配置へ戻ろうという段になり、終始仏頂面だった件の頭目めが、徐に一枚の紙を突き出した。

私自身腰を浮かしかけていたため、初めは誰に対する行動なのか判断しかねたが、周囲の者は奴の対面にいる私を見つめ、奴もまた私を睨むため、渋々その紙を受け取った。見れば植物や茸を始めとした様々な品々の名が、小盾ほどの紙いっぱい書き綴つてある。

「これは……錬金術の？」

奴は視線を合わせないまま鼻を鳴らす。

「魔術師だけあつて多少の心得はあるか。だが手前はこのあたりに来たばかりだと聞いた。『所変われば品変わる』じゃねえが、当然の如く植生も小動物の分布も違うはずだ。

手前がそこに書かれた品々を書いてある必要数集めることができたなら、俺がタムリエルで通じる錬金術を教えてやる」

心得も何も、私はブリニョルフから「様々な材料を、魔術的要素のある器具を用いて掛け合わせ薬品を作り出す、『錬金術』という技術がある」としか聞いておらず、その際、耳にし綴を教えられた品名が渡された覚書に記載されていたので見当をつけただけな

のだが……。

しかしどういふ心境の変化であろうか。

昨日のやり取りで私に対し怒り心頭、といった具合だと思つたのだが。

私が、たつた数瞬だけ逡巡すると、眼前の頭目殿は怒鳴り散らした。

「やるのかやらねえのか、どっちだ！ 俺は手前の面倒なんざ見たかねえんだ。やらねえつてんなら手前に協力してやることなんざ何一つ有りやしねえ。この砦からとつと失せやがれ！」

「待て待て、早まるな。勿論やるとも。喜んでやらせてもらう。

ただ、なかなか懐かなかつた猫がやつと靡いてくれたために、少々感慨に耽つていたのだ」

言うや否や、「あ」も「う」も無しに短剣が雨霰と飛んでくる。

照れ隠しとは可愛い奴め。だが投擲するに毒付きの短剣は殺意が高くないだろうか。

私が逃げ去るように砦を出ようとすると、いつの間にか居なくなつていたハンが、大扉の脇で私を待ち構えていた。

そして「どうぞ」と言いながら長柄の虫取り網を二本、渡してくれる。

「頭のあるなはしゃいだ様子は久しぶりです。旦那には感謝しとります。

覚書を盗み見る限り、素材には危険な猛獣を相手取らにやならん物もありますが、そ

のあたりは旦那なら問題ありやせんでしょう。

寧ろ、ほら、そこに書いてある蝶々。このあたりが曲者ではないかと思ひまして、お節介を買つて出たというわけでき。

何卒、ご武運を」

全くもつて何くれとなく如才の無い男である。

しかし、先程は軽口を叩いてみたものの、奴にはあまりよく思われていない気がするのだが、それは良いのだろうか。疑問に思い尋ねてみた。

「そこはほら、旦那もそろそろお気づきでしょうが、頭は多少素直ではないところがありますし」

そんなにさつくりと片付けていいのか副頭目よ。

「……あと、これは頭に付き従う全員の思ひですがね、『盗賊ブレックス』は、絶望に侵されて腐っているより、獲物を虎視眈々と狙い、味方には喝を入れている様のほうが、ずっと生き生きとして格好良いんですき。

今日の頭にはそれらしさが窺えました。あたし等は、そいつが見られりや御の字つてもんで。

それに旦那なら、頭が多少じゃれつこうが物ともせず平気で居られやしよう？」

実際に問題無く防ぎ、躲した私が言うのも何だが、毒付きの短剣を急所に投げ続ける

様を「じやれつく」と表現するあたり、やはりこの男は狂しているのではないだろうか。

まあ、それを別としても、『信奉者』とはまま『狂信者』と評されることがある。

ブレックスがガルスの信奉者と呼ばれたように、ハンもまた、ブレックスの信奉者であるのだろう。

だからこそ、愛する者を死なせてしまったブレックスの見えぬ慟哭が、誰よりも理解できてしまう。

今ここでそれを持ち出すのも野暮であると考え、虫取り網についての礼をいい、私は砦を出た。

「頭。奴さん、今日も元気に駆け回つとりますよ」

ハンが男の動向を伝えて来る。

ブレックスは、ギルドから持ち出した錬金器具と付呪台を砦の執務室に設置し、作動に問題が無いか確認していたところだ。

このところ毎日砦へ通っている男であるが、男に錬金材料の覚書を渡してからまだ二日目である。当然の如く、材料を集めきつてはいない。

そのため、採集に向かうあいだは拠点であるリフテンから直接赴くよう進言したが、「毎日食材を届けると約束した。約束は守る」と言い、頑として聞かない。

食料はいくらあっても困らず、またお互いに貸し借りを気にする性質でもないため、ブレックスは男のしたいようにさせていた。同時に、拘る場所のよくわからんヤツだ、とも思った。

報告では、『クマの爪』『サーベルキャットの目』『スプリガンの樹液』『巨人のつま先』『トロールの脂肪』など猛獣から採集する物や、『鷹の嘴』『ニルンルート』など単純に入手難度の高い品は手にしたらしい。

反面、『フロスト・ミアム』『ツンドラの綿』など寒冷地であるスカイリム独自の品や、各種茸、『山の青い／赤い／紫の花』など見分けに一工夫必要な品の入手には苦戦しているらしい。

ブレックス達スカイリム原住民や近隣諸国の者からすれば山の花など幼少期から見た慣れたもので、何がどうわからないのか理解が及ばない。だが遠目に監視している配下の言では、「微妙な！ この色は！ 品種なのか！ 未熟なのか枯れているのか！ ハッキリしろ！」と癩癩を上げる様を見たそう。 「傑作でした」と付け加えられたが、それはブレックスも同じ気持ちだ。

更には、各種蝶の羽の採集にも手こずっているようだ。

これもまた、天空を舞う鷹を射落とすことは容易いのに、蝶如きを捕まえないとは、と意外に思う。

砦一つを単独で陥落させる戦士が間抜けに網を振り回している様を想像して、ブレックスは吹き出すのを我慢できなかった。

ところで、ブレックス自身が痩せ我慢を通しているために忘れがちであるが、この男、胸の骨が数本折れている。そう気軽に馬鹿笑いをしていい身体ではないのだ。久しぶりに機嫌良く大笑したと思えばすぐさま痛みが走り、余計に機嫌が悪くなった一味の頭目である。

「しかし意外ですね。俺はてつきり、奴さんには砦と関係が薄くなるような策を授けて、頭はそれで良しとするもんだとばかり思っていました。

でも実際には頭が手ずから協力してやるなんて。策は策で別に用意してあるんでしょう?」

ブレックスはハンの言葉に、すぐには口を開けなかった。

自らの胸中の変易に最も戸惑っているのも、ブレックス自身であったからだ。

「仕方ねえだろ。あの馬鹿垂れ、こっちの都合なんざまるで無視しやがる。

下手な策を授けて文字通り下手を打ってみろ。あの野郎、『二の矢は無いか?』なんて言いながら、砦の門を叩きかねんぞ」

それはまあ確かに、とハンも思う。寧ろ容易に想像できるまで男に対する理解が深まったことが癪だった。

「だから一番の理由は『仕方無く』だ。『やむを得ず』でも『不可抗力』でも何でもいい。とにかく俺が本意ながら協力していると誤解無く手前等が理解できればいい。『照れ隠し』だとか言いやがったら、張り倒すだけじゃ済まさねえからな」

そりやおつかかない、とハンは戯けて見せるが、しかしその視線は穏やか且つ鋭いまま、ブレックスを捉えて離さない。

腹心に建前を見透かされて、幾許か据わりが悪い頭目は、観念したように溜息を一つ吐き、逆に問うてみた。

「話はちつと変わって、これは例えばだけだよ。俺がああの野郎に、いや一味の誰かのほうがいいな。殺されたとする。

……いいから聞け、例え話だ。

俺はくたばってつから、この一味は手前がまとめるつきやねえ。まあ解散するも自由だがな。んで下手人は行方知れずと来たもんよ。

そんなとき手前、どう思う。まあ当然、まずは怒るわな。そのあとだ。

多少時間が経つてよ。俺との今までのことだとか、あつたかもしれない未来とか、そういうことを考えるくらいには環境も落ち着いた頃だ。手前ならどう動く？ どう思

う？ どう考える？」

「これ程までに想像したくない『もし』もありませんが……。」

まずはどう動くかですが、おそらく、一味全員に声をかけ、希望者のみを率いて下人の搜索に当たります。そこで躊躇うような輩は足手まといですし、その手の望まない働きを強要するのは、頭の好みじゃありませんので。とまれ、そんな鈍亀が一味にいるとは思えませんが。

それで、下手人が例えばどおり一味の誰かだったとすれば、二通り考えられます。

万全を期するためにフラゴンの連中に頭を下げて搜索の協力を仰ぐか、『頭の仇は絶対に一味の者だけで取る』と俺達だけで動くか。まずはおそらく後者からでしょうが、成果が上がらない場合は前者でも何でも、それこそ如何なる手を使ってでも探し出します。

ギルドが無駄骨に終わったんなら、奴さんじゃありませんが、五大都市の有力者達に新しい伝手を作る工作も始めるかもしれません。正攻法で締め上げます。その手の工作がうまく運ぶかは全くの不透明ですが、せすには居れんでしょう。

どう思うか、は……難しいです。想像しようにも頭が拒否して、考えがまとまりません。強いと言うなら、頭の言うとおりまずは怒り狂うでしょう。そのあとは……どうで

しよう。

嘆き悲しみ無為の日々を過ごすか、全くの無気力になつちまつて生きてたまま死んだようになるか、復讐だけを支えにする鬼になるか。何にせよ碌なことにはならんでしような。

どう考えるが先の『思う』とどう違うのかちとわかりかねますが、どうすれば頭が死なずに済んだのかを考え続けると思います。ですが、おそらく答えは出ない。

外敵からの襲撃だったってんならまだ対処はわかりやすいんですがね。身内からとなると、断言しますが未来を予知する魔術でも使わない限り、阻止は限り無く不可能に近いでしょう。それでも、考えることを止められるとも思いません。堂々巡りですな。

そんでそれから、頭のこれまでの人生はなんだったのだろうか、多分そんなふうに見えるんじゃないかと。

頭がギルド時代から下の者の面倒を厚く見てくださっていたのは、多くの連中が知っております。だからこそ俺達は一も二も無く頭に付いてきたわけです。

どうかしたら、ガルスの大将よりも個人的な親愛の情は強いって連中も、聞いてみれば結構いるかもしれませぬぜ？

それなのに、その中の一人がもし頭を裏切ったとしたら、俺はそいつの寿命が尽きるまで痛めつけなければ収まりませぬし、頭のしてきたことは、とやっぱり最初の考えに

戻って堂々巡りになるんじゃないかと思えます。

「……もう、このへんでいいですか。頭の質問とは言え、これ以上は、すみません」
ブレックスはハンだからこそ、この例え話を持ちかけた。

ハンが、ブレックスにどのような意図があり話をしたのかを当然理解している前提で、更には言えばそれ故に真剣な検討をしてみせると信頼したうえでのことだった。

だからこそ心からハンに申し訳ないとは思いつつ、その行動が、思考が、己と似通っていることを実感した。その検証に、ハンの回答は必要だったのだ。

そのうえで、ハンが血を吐く思いで口にした、どう動くか、どう思うか、どう考えるかについて、噛み締めるように、自身のそれと比較するように、擦り合わせるように、一つ一つ、確認していった。

一つ違ふとすれば、ブレックスには彼を慕う配下が大勢いて、ハンには失うものが少ないという点であろう。思考が似通っても、行動に差異が出ているのはそのせいだ。

ブレックスは心からハンに詫びを述べてから、独りごちるように口を開いた。

「そうだよなあ。そうなるよなあ。カーリアにガルスを殺されて、俺もそんな感じのことを思った。

盗賊としての純粋な力量はフレイやカーリアに及ばずとも、組織の幹部としてはガルスの右腕を自認していたし、そのことは誰にも文句を言わせなかった。それが俺の誇り

だった。

ガルスの際に立っている、そのことが俺にとって最上の名誉で、何もかも全ての内で最も価値のあることだった。

カーリアのことも認めてた。ガルスが見込んだ女だったのがデカかったが、奴自身相
当な腕の持ち主だったし、何より二人は愛し合っているように思えた。だから納得し
た。

馬鹿な話だがよ。ガルスとカーリアに子ができたら、隠居した俺が手解きしてやって
もいい、なんて夢想してたんだぜ。笑っちゃまうよな。

だが、結果は皆の知るとおりだ。そんな優しく暖かな未来は訪れなかった。

断っておくが、手前等に恨み言を言うつもりはさらさらねえからな。俺じゃあ、本気
で雲隠れしたカーリアを見つけて出すのは不可能だったろうからな。

身一つなら、無駄だと思いつながら何かしら動いたかもしれないねえが、おそらく成るよ
うにしか成らんかったろうよ。

強がって『カーリアは必ず殺す』と啖呵を切ってはみても、実現はしなかっただろう。
俺なんざそんなもんだ。

だからまあ、ぶっちゃけちまうけどよ、俺は死にたかつたんだ。

友を守れず、誇りも失われ、仇は追えず。ギルドも壊滅状態。

ガルスの人生に意味はあったんだろうか。俺の人生に意味はあったんだろうか。組織も、愛も、矜持も、何一つ残っちゃいねえ。……正直、結構しんどかったんだわ。

そしたらよ、あの馬鹿垂れが無遠慮にずかずか踏み入って来てよ、言うんだわ。

ガルスの人生はガルスのもの。お前はただ友としてガルスを愛し、その人生を肯定してやればいい。別にカーリアを許さなくてもいい。納得がいかないのなら、遠慮無く仇を討て。

たしかそんな感じのことをほざきやがった。

俺は、カーリアを恨んだまま、ガルスという一人の英雄を、誰に憚ること無く誇り続けていいんだと。そこにカーリアは関係ねえんだと。

視野が狭くなつてたのか、んなこた考えもしなかつたぜ」

ハンはどういう顔をしていいのかわからなかつた。

自分はその非常識人から頭目の様子が少しおかしかつた当日の話を尋ねたが、そんなことを口にしたとは聞いていない。

ただ、「ガルスについて昔話をしている間に気分が悪くなつたらしい」としか聞いていない。敬愛する頭目のこと。それはまあそうなるだろう、とその場は納得したが……あの男は！

ハンの脳内が怒りに染まりかけるが、今は当の頭目と話している最中だ。思考を切り

替える。

それに、ハンの思考をより強く乱したのは、非常識人が原因だからではなかった。

ブレックスという自らが敬愛する一流の盗賊が、自分にここまでの弱さを見せるのが初めてのことであったからだ。

ハンにとってブレックスは、出会った頃からずっと格好良かった。

高難度の仕事を余裕で熟す。

不測の事態に陥っても、動揺した配下を叱咤して、すぐさま態勢を立て直す。そして次善の策にて仕事は完遂する。

皆と同じ、ギルドから支給された黒の革鎧を身に着けているはずなのに、不思議と特別に詭えたように見える。

この人に付いていけば大丈夫だ。何も心配はいらない。いずれはこの人のようになりたい。この人の助けになりたい。盗賊ブレックスから頼りにされたい。

そう惚れ込んだ面々が、今、砦にいる一味の者達だった。

件の男と自分達で、何が違ったと言うのか。人間的な器の大きさがどうという下らない話でもないのだろう。おそらく、死生観が違い過ぎるのだ。

どれだけの友を愛し、どれだけの友を喪えばそのような考えに至るのか、ハンには到底理解できかねた。いや、あまりに陰惨な想像を働かせたがために、理解すること自体

を拒否してしまつたきらいもある。

だが事実として、男の、ある一面の真実を大上段に構えて強引に押し出した乱暴な物言いが（お世辞にも説法や格言のようには扱いたくない）、親愛なる頭目の目を覚まさせた。

配下を抱えながらどう終わらせれば皆に苦勞をかけずにすむのか、などという馬鹿げた思考の海からようやく浮上してくれた。

そのことが、ハンには何より嬉しい。

この際、男が何者のつもりで持論を偉そうに押し付けてくれやがったのかはどうでもいい。

ハンにとって、件の話があつたその日まで遡つて、男は恩人となつた。

そしてその男は、そういうた少々湿つぽい雰囲気の木っ端微塵に打ち壊すことに定評がある。

「ブレックス！ おおハンもいたか。見てくれ！ 見事な蝶々だろう？ これを捕まえるのにどれだけ苦勞したことか。これで全ての素材は集まつたはずだ。さあ、錬金術の指南を頼む！」

しんみりとした空気が吹き飛んだことを力なく笑いつつ、ブレックスが男へ貸し出さ

れた檻のような小さな木箱を覗き込み、厳正なる審判を下した。

「おう、リフト中駆けずり回ってご苦労さん。それはそうとこの蝶だがよ、淡い青緑に光つちやいるが、『ルナ・モス』とは違うぜ？」

大方、夢中で捕まえて意識から外れた『青い蝶の羽』にスプリガンの樹液でもついて、そのまま勘違いしやがったんだろ。

大体手前は夜になるとリフテンに帰つちまうんだから、月夜に舞う蝶をどうやって捕まえんだよ、このトンマ。

「つてなわけで、ほい、やり直しだ」

繰り返すが、男は砦一つを相手取れる尋常ならざる個人戦力である。

しかし今、ブレックスの言葉に衝撃を受け、啞然とし、膝の力が抜け、床に四つん這いになり、慟哭を上げる男の姿は、誰がどう見ても滑稽に過ぎた。

男の、芝居小屋の道化の如く、それぞれの挙動にめりはりを付けて順番に繰り出す様に、ブレックスとハンは揃って笑い、またしてもブレックスの胸に痛みが走った。

友を喪った一人の男は、常識外れの異邦人が齎す笑いと痛みのせいで、様々なことがどうでも良くなっていた。

「冗談だ。いや、手前のへマは冗談じゃねえが、及第点つてことにしてやらあ。そろそろ、お守役のブリニョルフも気を揉んでいる頃だろうしな。」

奴にはこう伝えな。『ブレックス一味を味方につけた。これをもつてギルドと一味は互いに不可侵とされたし。また、一味がギルドの名を騙ることは無いと、八大神とノクターナルに誓う、とのこと。後日、頭目ブレックスが諸々記載した誓書をギルドへ届けるので、確認されたし』ってな。

これで一応はギルドの面子も立つし、手前が阿呆みたいに地下を掘ったおかげで、表向き一味は解散したと衛兵隊の目を欺くこともできる。

そうやってできた時間的猶予でもつて、悪巧みのついでに手前の錬金術修行と洒落込もうつて寸法よ。どうだ、少なくとも土産話には十分だろう？ 感謝しろよこのトンマ

得意気に語るブレックスに対し、ハンは朗らかに笑みを浮かべ「良かったですな旦那。頭を頼みますぜ」と余計な一言を付け加えたために頭を叩かれている。

肝心の男は、膝をついたまま感極まって声にならない声が口から漏れ出ている。

「つまり、お前は、私の友になると言うのだな？」

和やかだった空気が、一瞬で困惑に満ちたものへ変わった。

特に、砦側二人の脳内は何がどうなつてそうだったのか、記憶の引き出しという引き出しを開けて何か不味い言い回しをしていないか確認中である。

「何を呆けている。初めは敵対していた我らだが、お前は私への協力を申し出てくれた。

それも、私や我が友の立場を慮ったうえでだ。

そして錬金術の修行という実益のみならず、何やら策まで授けてくれる様子ではないか。

私はお前達に食料を供給したが、十分に釣りが来る内容だ。

更にお前は私を『トンマ』と愛称で呼ぶようになった。ハンも『頭を頼む』と言う。これは控え目に言つて身内ということだろう？

協力者であり、愛称で呼ぶ気の置けない仲であり、腹心という半保護者からのお墨付きまで貰つた。これはどう考えても友であろう。悪く言つても悪友だ」

男の言わんとすることは理解できる。心情的にも完全に否定するのはちと難しい。だがいきなり友と言われても、少々話の飛躍が過ぎるのではないかと思う皆側二人である。

「おい、この馬鹿垂れ。待てこら！ 誰が友だ！ ふざけたことを抜かすと全部御破算にしちまうからな！」

「ハツハツ、照れるな照れるな。それでは、すぐに帰つてブリニョルフに新しい友ができたと報告するでしょう。今日は良い日である！」

新しき友、ブレックスよ。明日からの教授、よろしく頼むぞ！ ではな！」

男は言うやいなや、風のように駆けていった。

ハンは「ああ、あの足ならリフテンから通いでも不思議ではないな」とやや現実逃避した感想を抱いた。

しかし呑気に呆けていたハンの頭を、一際強く叩く者がいる。非常識人から友人扱いされたブレックスだ。

「何を寛いでやがる！ 追いかけてあの野郎とっ捕まえてこい！」

「いやぁ頭、あれは無理です。追いつけません。諦めてください。」

それに、俺も少々迂闊ではありませんでしたがね、捕まえたところで駄々をこねられて、結局こちらが折れなきやならなくなる未来が容易に想像できません。

受け入れちまったほうが、きっと心の平穩のためです」

ブレックスはつい先程、腹の底まで見せた腹心の裏切りに頭を痛め、屈み込んだ拍子に再度胸に痛みが走った。今度の痛みは、何一つどうでも良くはなかった。

一四、美味しいお酒

砦から戻った私は、我が友の自宅窓から人影を確認し、喜び勇んで帰宅を告げた。今は、砦にて勝ち得た成果を、一刻も早く報告したくて堪らないのだ。

ほどなくしてブリニヨルフが扉を開き、労いの言葉をかけながら屋内へ誘ってくれる。一つ予想と違うのは、息を切らした見覚えの無い男が一人、扉の脇で私を見て気まぐすそうにしていることだった。たしか、彼の種はウッドエルフと言うのだったか。

客人であろうか。いや、『雑貨商ブリニヨルフ』はあくまで表の顔。仮の拠点とはいえ、不用意に人を招き入れたりはしないだろう。

であるならば、この者はギルド関係者、ないしは彼の稼業に関わる何者かと推察すべきだ。

「さて兄弟、ここ数日、随分と忙しそうにしていた君だが、慌てて帰って来たりして、何か困り事かな？

ご入用なら『雑貨商ブリニヨルフ』に、計画の件であれば『盗賊ブリニヨルフ』を、ご用命いただければ幸いです。なんてな」

はて、困り事。何故そのような話になるのか。

彼には毎日、極簡単とは言え報告はしていた。「連中への攻め方を考え直したほうがいいかもしれない」「若干の進展あり」「苦戦中」などだ。

彼は私にも意地があると察してくれていたため、深くあれこれと詮索してはこなかった。私は彼の友人であつて、部下ではないのだ。

だが現実として、私と彼のあいだに認識のズレが起きているようだ。

何が原因であろうか考えてみる。

報告が簡潔に過ぎて正確に伝わらなかつたか？ 大いに有り得る。

それからこのギルド関係者であろう見知らぬ男。男の息を切らした様子から、つい今しがた駆け込んで来たのではないかと思われる。

更には気まずげな男の視線。何か引っかかる。……そこで、ここ数日、常に感じていた視線を思い出し、私の中で一つの線に？がった。

「ああ、なるほどな。彼は私についていた監視要員か。そして何ぞ変事が起きたと勘違いをし、急ぎ報告に飛んできた、と」

私の推理に我が友はやや驚いている。君、私とて「頭にチーズでも詰まつてる」わけではないのだぞ？

「完全に君の言うとおりだが、どうして気付いたのか、ご教授願つてもよろしいかな？

……どうやら逼迫した事態でも無さそうだし、そのくらいの種明かしを聞く時間はある

「何、特別冴えた話でもない。」

ギルドとしては砦のブレックス一味について、当初は私を勘定に入れず、ラットウエイのガマシン一派同様に襲撃をかけ、処理しようと企んでいたわけだ。

ならば連中に逃亡を囮られては面白くないことになる。彼奴らに監視が付くのは当然、どころか必然と言える。以前、君に相談を持ち掛けたとき、君が一味の状況がある程度把握していたのも、ギルドから伝わった情報だろう？

そして私は砦への襲撃計画に動き初めてから、常に遠巻きな視線を感じていた。

初めはメルセル・フレイの指示で私を監視しているのだと思ったのだが、その割には接触がない。

あの男なら、私が動き出した時点で『計画に支障を来す』とか何とか言つて来るだろうからな。しかしそれは無かった。

だから思ったのだ。元々監視として駆り出されていた者達に、君が話を付けて、万一の際には助けとなるよう手を回してくれていたのではないか、とな。

「どうも反応を見る限り当たりのようだな」

友の驚きが、やややからかなりに変化した。……本当に私の頭はチーズだと思われていたのだろうか。であれば酷く心外だ。傷ついてしまう。

「いやいや、兄弟がけして阿呆ではないことは知っていたがね。こうまで見透かされているとは。これは君を貶めているのではないよ。純然たる称賛だ。

だって考えてもみてくれ。こいつらはギルドの一員だぜ？ よく盗賊の監視に気付けたものだね」

私に『五感で把握しきれない、他者の視線や殺気を感じる』などという超常じみた便利な能力は無い。

為し得ることを正確に表すなら、待ち伏せや監視を行うならどの地点が最もあり得そうか、と想像を働かせるだけの話だ。もはや癖のようなものだな。

そも、そんな能力があつたのならば、どこからともなく飛んできた矢や魔法、猛毒の吹き矢で散々痛い目に遭わせられることも無かつたろう。あれらの経験を積めば、おそらく誰でもこうなる。

それを踏まえて、リフテンから砦までの道中や、錬金術材料採集中の山中や野を思えば、大体どのあたりに監視要員が伏せているのかの当たりをつけること自体は、そう難しくはない。

どれだけ熟練の野伏だとしても、そこに人が存在すれば、虫や禽獣は居場所を変えるか息を殺して大人しくなり、程度の差はあれど多少静かになる。

その不自然さはけして消えず、発する違和感を辿っていけば視線に辿り着く、それだ

けの話だ。

そのあたりを語って聞かされると、友は痛ましげでありつつ機嫌良さそうに称賛する、という器用な芸当を見せてくれた。

まあ私の場合、天性の勘働き、というわけではなく不本意ながら身体に叩き込まれた一芸であるわけで、妙な不幸自慢に聞こえてしまったかもしれない。

彼は一通り私を褒めちぎると、襟を正してこちらへ向き直る。

「兄弟、君の友として、君を侮っていたことを詫びさせてくれ。そして、余計なお節介を焼いたことについても」

「何をいう兄弟よ。君は私の自尊心をいたずらに傷つけないよう心を砕きつつ、私のために骨を折ってくれたのだろう。それも謹慎中の身でだ。」

ただでさえ食材の調達とて頼り切りだったのだ。感謝こそすれ、詫びを入れられる筋合いはどこにも無いとも。

尤も、手出しできる範囲に限界があつたためか、最後に情報の齟齬があつたようだが。……その者も、私のせいで苦勞をかけてしまったようだな。埋め合わせと言つては何だが、酒が数種、手元にある。好みの物を持ち帰ってくれ」

ウツドエルフの男は苦笑しながら「気持ちだけで十分だ」と辞退した。「何ぞ任務に必要な品を懐に忍ばせて、メルセルにどやさされても面白くないからな」とも付け足す。そ

ちらは苦笑ではなく皮肉げであり、なかなか良い面構えの『盗賊』といった雰囲気だった。

酒を勧めたことを気遣いと思ってくれたのか、気まずさは鳴りを潜めて「サデインだ」と名乗りながら握手を求めてくれた。断わる理由も無いので応じる。

「前置きはこのあたりで十分だろう。」

さてさて、我が親愛なる兄弟よ。優秀なる盗賊ギルド構成員が、『脱兎の如き逃走』と思いをするほどの快足を見せてくれた君だ。

理由が困り事ではないのなら、齎される報せは吉報なのだろう？ 是非聞かせてほしいな。お誂え向きに報告要員もいるものだから、この場であれば、手間も省ける」

たしかに。そう考えれば、サデインの勘違いも満更悪いばかりでもないか。報告は迅速なほうが良いだろう。

しかし、私の報告には難があるらしいことが先程判明したため、時系列に沿って一つずつ詳細に話すべきだな。

サデインにも、酒の土産は断わられてしまったが、骨折りの対価に食事くらいは馳走しても良いだろう。どうせそのくらいの時間はかかる。

長居をさせてはメルセル・フレイに小言を言われるかもしれないが、何が起きたのか確認しなければ、報告を上げることにもまなるまい。

皆で調理した残りを持っていたため、それらを取り出し振る舞う。寧ろ私に食事の必要は無いのだから、機会を見つけて放出しなければいつまでも減らなくて困る。

「では二人共、聞いてくれ。」

詳細はあとできちんと話すので、まずは結論から言う。皆の一味を傘下に収めることこそ叶わなかったが、協力者にすることはできた。

そしてこれが一番大事なところだが……。ブリニョルフ、ブレックスと友達になってしまった。故に、協力者であり友達の配下である一味の連中は絶対に殺せない。

奴からは、君とメルセル・フレイ宛に言伝を預かっている。後に誓書を渡すとも言っていた。そのあたりを踏まえて、メルセル・フレイには上手に伝えておいてくれ」

サデインは、これぞ『模範的な驚愕の顔』という表情を浮かべ、ブリニョルフはこめかみを押さえている。

「兄弟、君の言うとおり、是非詳細を聞きたい。本当に、何から何まで一つとして端折らずに、全部を」

友の様子が妙に鬼気迫るので、無駄口を叩かず大人しく詳細へ移る。……そんなに不味いことを言っただろうか？

砦襲撃初日、まずは頭目であるブレックスと話がしたいと考えたが、配下に騒がれたり逃走を図られては面倒なので、隠密を心がけて奇襲を仕掛けたこと。

罫にかかり、結果的としてブレックスと対峙し、その際の連中の態度が想像していたものと違ったため、奴の意識を奪い、その日はそのまま帰宅したこと。

帰宅後は、ブリニョルフに連中を懐柔するための食材の手配を頼んだこと。

二日目には正面から押し入って喧嘩をし、ブレックスの指示でそれらは終結させられ、その後執り行つた食事会で私と砦の一味のあいだでは手打ちとなつたこと。

その後は当日を含めて五日目までの四日間、地下に籠もり、拡張工事に勤しんだこと。五日目にしたブレックスとの会話の中で、何かが奴の琴線だか逆鱗だかに触れ、その日は解散となつたこと。

六日目、突然に奴から錬金術の材料収集の試練を言い渡され、それが済まなければ協力はしないと告げられたこと。

故に、七日目、つまりは本日までの二日間は錬金術材料の収集に従事し、完遂後には無事に友の契と計画への協力を取り付けたこと。

明日から錬金術の指導を受け、大目標達成のための小目標を授けられる予定であること。

これらを全て、微に入り細に入り、まさに詳細に話してみせた。

ブレックスからの言伝も、ここで伝えた。皆からこっち、駆けながら繰り返し口ずさんだため、間違つてはいないはずだ。

牢をハンマーで打ち破つた件でサディンが目を見開いていたのが、少々面白かつた。

しかしこの二人、私を除け者にして、いつの間にか酒を飲んでゐる。陽気な酒盛りと自棄酒が緋い交ぜになつた雰囲気だ。

どうしたものかと訝しんでゐると、突然ブリニョルフが立ち上がり、腕を大きく広げ芝居がかつた様子で口上を述べる。

「おお兄弟よ。俺が、この寒々しいばかりのスカイリムで唯一損得勘定を抜きにして信賴し、お互いに支え会えるかけがえの無い友よ。

よくも、やつてくれた。よくぞ、やつてくれた。

色々言いたいことはあるが、終わり良ければ全て良し！　今は大戦果を祝おうじやあないか！」

口上の勢いそのままに私へ杯を渡すものだから、三人揃つて乾杯し、酒盛りの続きと相成つた。

「……………いや、違うな。やつぱり言いたいことは言わせてもらおう」

友の発する空気が怪しい。酔つてゐるといふこともあるだろうが、不穩だ。

「君はアレかい？　俺が山程の食材と酒を用意するためにリフテン中を走り回つていた

そのときには既に、連中へ襲撃をかけ終わっていたというのかい？

更に、俺の動きがメルセルに伝わって話がこじれないよう細心の注意を払って君のためにと働いていたそのとき、君は気持ちよく連中をぶっ飛ばして、その後は俺の用意した食材と酒で宴会と洒落込んでいたわけだ。

もつと言えば、監視の連中に心付けを配ったりなんなりとしているそのときには、何？ 地下を掘っていた？ 意味がわからない。いや、報告は聞いたから理解はできるがそんなことは知らないね。

極めつけには、ええ？ 『ようやく一仕事終えたぞ疲れたぞ』とゆつくり心身を休めようとしたそのとき！ 現れた店主たちに『お前の無茶な注文に応えた影響で狂いが出た出納整理が忙しいから、雑用を手伝え』と引きずられ、こき使われていたときには、君はちようちようを、色鮮やかなちようちようを幼子の如く追いかけて回していたと！

友は立ち上がった状態から机に手を付き、こちらへ乗り出してゐる。

……私は私なりに最善を尽くしたつもりではあったのだが、こうやって友の愚痴を聞くとかかなり心苦しい。

私とてけてして遊んでいたわけではないのだ。

しかし、それを支えてくれた人間の苦勞をいまいち想像しきれていなかったかもしれない。済まなく思い、頭を下げる。

「まあ、俺の苦勞は事實だが嫌味は半分冗談だから、そこまで真剣に受け止めないでくれ。」

正直なところ、あまりに予想外だったから、ちよつと、何というか、取り乱した。こちらこそすまない。酒のせいだと許してくれれば助かる」

彼は口上からずつと立ちつばなしだったが、どかりと椅子に座り直した。矛を収めてくれるようだ。

思わずほつと一息ついてしまう。この友人は怒らせると理屈と嫌味で責めてくるのだ。

諸々許してくれるのなら、多少の愚痴くらい軽いものである。「気にしていない」と伝えた。

「……實際、準備や下調べに随分時間をかけるのだなと思つてはいたんだ。

何せ今日で君が動き始めてから七日目だぜ？

だが、よく考えてみれば俺は君の本来の口を知らないんだ。

今まで見てきた戦闘は、墳墓や、その後の巨人との遭遇戦。リフテンに着いてすぐのラットウェイ襲撃。言ってみれば、全てなし崩し的に始まっている。

だからもしかしたら君は、調査と下準備を念入りに整え、慎重に慎重を重ねて確実性を可能な限り高め、そして攻める際には一気呵成！　そういうのが好みなのかと思つた

んだよ。

実際、墳墓ではなかなか用心深いように感じたからね。

それで俺は、今回の砦攻略も、連中を逃さず一網打尽にし、心を捉えるための策を考えているから時間がかかっているんだ、と思った。監視組から、不味そうな報告も無かったしな。

それがまさか、もう決着をつけて来ただつて？ それも最良に限り無く近い決着で、だ。

愚痴は終わりだ。今度はただただ君の大活躍を称賛させてほしい。あまりに鮮やか。あまりに奇想天外。

そしてあまりに……俺達に優しい」

先程とは打って変わって、穏やかで、何処か物悲しい雰囲気を漂わせている。それは、黙って話を聞いていたサデインも同様だった。

しかし「優しい」？

「ラットウェイ襲撃を思い出してくればわかるだろう。誰だつて元仲間を手に掛けたくはない。

特にブレックスは、まあ奴本人はガルスに首ったけだったが、案外、下の面倒を見る男だったからな。

一味に合流まではせずとも、世話になったと感じている連中は多い。

だからギルドを抜けたと聞いた時でも、ガマシンとは違って、『致し方無い』という見方が大勢だった。ガルスへの想いと、メルセルへの嫌悪感を鑑みれば、誰でもそう思うだろうさ。

君はそんなブレックス一派を、いや、君に習つてもう一味と呼ぼうか。誰一人欠けることなく味方につけてくれた。

君の味方ということは、直接的ではなくともギルドと関わりを持つ。

ギルドマスター殿がどう考えるかは別として、下つ端としては仲間が命を落とさなかつたのなら、これほど嬉しいことも無いさ」

友が杯を掲げて、「兄弟の慈悲と功績に」と口にした。サディンも做う。少々、面映いので、少しつついてみる。

「言葉の綾なのだろうが、君は下つ端というには権力を持っているのではなかつたか？盗賊ギルド幹部のブリニョルフ殿？

ああ、それから、ブレックスも君のことは褒めていたぞ」

友は一瞬意外そうな顔をしたあと、すぐに愉快だと笑い出した。

「そうだったな。俺様は泣く子も黙る盗賊ギルドの幹部様よ！……自分で言うのも何だけど、似合わないな。

しかしブレックスがねえ。奴さんには良く思われていないと感じていたんだが」
「どういふことだろうか。我が友はいたずらに敵を作るのは損であると考え、自省する性質だと思ふのだが。」

「なんといふかね。俺の若さといふかガキっぽさといふか、そういう恥ずかしい話さ。俺がギルドに入ったのは、髭も生え揃わない頃だった。」

当時のギルドは、小さな王国、とまではいかずとも『飛ぶ鳥を落とす勢い』といった具合でね。

そんなギルドに加入が叶ったとはいへ、使えない奴だと思われればどういふ扱いを受けるかわからない。

それに人から舐められるのは我慢ならなかったからね。文字通り死にもの狂いで業を磨いたもんさ。ガルスには少し無茶を諫められたな。

でもそのかいあつて、俺は立場を築き、腕前も一目置かれるようになった。

それで、さつきも言ったとおりガキだったからな。どいつもこいつも押し退けて、ゆくゆくはガルスの右腕に、と思つていた。

言わなくてもわかるだろうが、そんなガキは『現右腕』のブレックスにとって面白くないだろう？

だから俺は距離を置いていたんだが……そうか、奴はそんな俺を褒めていたか。やつ

ぱり、色々と貫目が足らないな」

自嘲気味、というにはやはり穏やかである。

ブレックスもそうだが、ブリニョルフにも、ガルスが生きていた頃の話をも、こうして暗くならず思い出せるようになってほしいものだ。

……それはそうとして、ちと気になった。

「もしかして、私がブレックスや側近達と対峙して覚えた違和感の原因は、君の言うその『距離』のせいかな？」

我が友は「あ」と一音漏らして、視線を彷徨わせ、頭を掻き、咳払いをして背筋を伸ばし、頭を下げて、言った。

「誤った情報を伝えてしまい、申し訳ない」

今度は私が笑う番だ。友はいつも飄々としているが、今日は特にひょうげている。

酒精のせいかな、同胞が生きていた喜びのせいかな、どうも今日の彼は程良く酔っているらしい。まあ、愉快に酔えるなら存分に楽しんでもらいたいものだ。

「しかし、兄弟の話では、奴さん、随分と甘っちょろいんだな。それに素直じゃない。いじり甲斐がありそうだ。

明日も砦に行くんだろう？ 俺も付いて行っていいかい？ 別にギルドの活動ではないんだし。

というか、いい加減、俺も話に嘯みたい。もう店主達にこき使われるのはうんざりだ。十分借りは返したはずなんだ。あの業突張り共め。

……真面目な話、奴さんの言う悪巧みだという策に興味がある。

俺なりに考えたこともあるにはあるが、『ガルスの右腕』がどんな案を出して来るのか、是非聞いてみたいもんだ」

彼のほうから我儘を言うとは珍しい。私に否やはないので、了承した。しかし、『盗賊』に業突張り呼ばわりさせるとは、リフテンの商人は随分と逞しいようだ。

それはそうと、一つ問題が有る。

「私はいつも、サデインが思う『脱兎の如き逃走』といった具合で駆けていたのだが、君はそれに付いてこられるのか？」

「心配には及ばないよ。ギルドで数頭の馬を共有しているんだ。『砦監視』の名目で持ち出せば、バレやしないさ」

やはり今日の彼は酔っている。発想が悪戯小僧のそれだ。

「持ち出す」のは当然彼ではないのだし、当たり前のように他人を巻き込もうというあたりが正に悪戯小僧である。

何本目かわからない蜂蜜酒を開け、上機嫌の家主殿が染み染みと語る。

「しかし、また奴等と生きて会えるとはなあ。

兄弟を侮辱するつもりは欠片も無いが、俺は君が連中を皆殺しにする未来しか予想出来なかった。良くてブレックスだけを殺し、残りを力づくで従える、といったところか。君の能力の問題ではなく、奴等の矜持のためにね。君自身が「此奴は殺してやるが情け」と考える、そういう流れになると思っていたんだ。

それが一人の死者も出さずに一味全員協力者に仕立て上げ、討伐指令が下されないよう欺瞞工作まで終えてきた、だつて？

断言してもいいがね。そんなことは世界広しとは言え、君以外の誰一人として不可能だつたらうさ。

それこそ、全く手法は違えど、ガルスの仕事を見ているようだ。……ああ、ブレックスが君に絆されたのは、そのあたりもあるかもしれないな」

いやあ、奴自身はガルスの話をした際に全力で殺しにかかつてきていたから、それはどうかと思うのだが。

「もしくは、君に人誑しの才がある、という話かな？ 事実、ここ十日ばかりで俺とブレックスの二人は誑かされてしまった。

俺達がそこらの町娘だったら両親は揃って怒り狂い、『この女の敵！』なんて怒鳴りながら剣を振り上げ、君を追いかけ回していただろうな」

余計に酷い話になった。流石にそれには反論させてもらいたい。

「私はそれほど人に好かれる性質ではないと思うんだがなあ。

私が友情に重きを置くのは君も知っているだろう？ それは敵が多かったことの裏返しだ。

殺伐とした話でまた場を盛り下げるのは不本意なので控えるが……、そうだ、ほら、現にメルセル・フレイからは多分嫌われているぞ。

二人に好かれて一人からは嫌われているから、差し引き一人。許容範囲だろう？」

我が友は笑いのツボに入ったのか「何の許容範囲だ！」と大笑している。

私はそれを見て、思った。

良い報告ができて良かった。彼が笑っていられる結果に終わって良かった。彼の力になれて良かった。彼の飲む酒がうまいものになって良かった。

私はラットウェイ襲撃前に、彼の力になりたいと思ったことを思い出した。

数日前に一人、胸中で願っただけの誓いとも言えぬものだが、上々の首尾となったのなら嬉しい。

もしかしたらハンも、胸の痛みで顔をしかめながら笑っていたブレックスを見て、こんな気持ちだったのかもしれない。

………とりあえず、明日、砦に着いたら、まずは奴の怪我を治療してやろう。ブリニョルフとも顔合わせをして、今更裏切るとも思えん。問題はあるまい。

なにはともあれ、こんな日が続けばいいと、心からそう思う。

擧動 東より、北への旅路

一五、作戦会議第二

酒盛りが一段落した頃、サデインがフラゴンへ報告するため、腰を上げた。その足で監視の配置へ戻るらしい。

その際、男が、砦への監視がいつ解除されるのか気にしたので、誓書を交わしてしばらく経つてからだろう、とブリニョルフは伝えた。

その決定を下すのはギルドマスターたるメルセル・フレイだが、然程大きな罪は無いと考へてのことだ。

組織の長として、袂を分かつた組織を安易に信用するなど心情的にも様式的にも看過できはしないし、そのような危機管理意識の低い者であれば、新しいマスターに立てられることは無かつただろう。あの性格なのだから。

しかし現実的に、男の戦闘力を直に味わい心も絆されたとなれば、砦の一味は、おそらく男どころかギルドに対しても牙を剥くことはあるまい。

ギルドとしても、極論、面子が立つて最低限の利益が確保されるのなら、長々と監視を続ける意味は無いのだ。

寧ろ、監視の長期継続は皆の一味へいたずらに警戒心を植え付けることにもなりかねず、更に言えば人手不足の現状で監視にその貴重な人手を常に取られるなど、不利益ではない。

ブリニョルフは、筋書きの妥当性をそのように語り、男も納得した。

男が監視を気にしたのは、気分的な問題からだろう。

誰だつて友人が疑いの目でもつて見張られ続けているなど、気持ち良くはない。

一人家を出ようとしたその瞬間に話が始まってしまい、いまいち時を逃した感のあるサディンだが、区切りがついたと見て、男と再び握手をしてから夜闇に消えていった。ブリニョルフと握手をしなかったのは、単に同じ組織で必要が無かったからに過ぎない。

ちなみに、表向き謹慎中のブリニョルフと連絡を取っていたとばれるのは不味いので、話は全て男から聞き出したことになっている。そしてその裏取りをしていたため、報告まで少々時間がかかった、と。

食事と酒の臭いを消すにも丁度良い言い訳であろう。

メルセル・フレイならばそのあたりを見抜くこともあるやもしれないが、一度処罰を下した幹部を決定的な証拠も無く疑うとなれば、色々と面倒なことになりかねない。

他にも気付く者はいらるだろうが、同じく前述の理由でブリニョルフを槍玉に挙げるこ

とは無いだろうし、メルセル・フレイはあえてそれに触れないことで構成員達に度量を示す機会にするだろう。プリニョルフはそう考えた。

信頼や不満など、善きにしろ悪きにしろ、人の感情とは小さな出来事の積み重ねであることが多い。

無論、件のギルドマスター殺しの幹部など、一事をもつて全てをひっくり返した者もいるわけだが。

サデインが去ったあと、まだ酔いの残っているプリニョルフは、男が砦攻略に使ったという魔術（呪術）から、三人いるという術の師の内、イザリスの娘の話の特に聞きたがった。

男としても多少浮いた話ではあるので口が重くなるのだが、プリニョルフにはそれが面白く思え、少々しつこく絡んでしまった。

数百年数千年で大きくも怪しい男の人生の中で、惚れた腫れたの一つたりとて無かったとは思わないが、普段の雰囲気から異性を簡単にこましている様子は窺えなかった。

そんな男、英雄の、準神の浮いた話である。興味を持つなどというほうが難しい。

男が、どうしても伏せておきたいことだけを除いて粗方語ってしまうと、「恋歌として叙事詩が書けそうだな」とからかった。

全くの冷やかしなら、男も手刀の一つでも見舞ってやるところだが、プリニョルフの

視線は温かかった。男の地獄巡りの旅に、幾人かの友と歩んだ以外にも救いになるものがあつたのだと知って、安心したからだ。

男は「君は時々父母の眼差しになって困る」と愚痴った。

なにくれと男の世話を焼いた覚えはあるが、この言に対して「光栄だ」と返すのが正解なのか、「こんな大きな息子を持った覚えはない」と返すべきか、うまく考えがまとまらなかつた。

ブリニヨルフは、自分にしては珍しいと思ひ至つたあたりで、強かに酔いが回つていることを遅まきながら自覚した。

そこで、明朝から馬の背に揺られることを思ひ出し、若干の後悔と共に大量の水を飲み干す。

水っ腹を抱えたブリニヨルフが寝台に転がり込んだのを合図に、その夜はお開きとなつた。

私は街道を駆けながら、やや後方で駈歩で馬を走らせている友を、度々振り返る。明らかに調子が悪そうだ。

「なあ友よ。もう少し速度を落とそうか。昼餉には間に合わなくなるかもしれないが、事情があれば連中も一日くらい許してくれよう」

しかし友は頑として首を縦に振らない。

一度だけ口を開いたときに、自分から言い出したことだ、君に約束を違えさせるくらいなら置いていってくれ、と口にし、以降は迫り上がってくる昨夜の夕餉と戦い続けている。

これで確信した。盗賊ギルドでは幹部に対して『痩せ我慢』の鍛錬を施している、と。それがガルスの教えなのかギルドの伝統なのかは知らないが、強情が過ぎないだろうか。

とはいえ、「二日酔いで友人に迷惑をかけた」など、彼の矜持が許さないのだろう。そして、「自らが足を引っ張った」という事実も。

ただ、なんというか、今にも吐瀉物を撒き散らしそうな人間に背を追われている気分というのも、少しは考えてほしい。

現在、苦しい戦いの最中である彼には、そんなことを言えるはずもないのだが。

彼に対しては珍しく、青い顔色以外にも文句がある。

昨夜、酔いを言い訳に私の色恋についてしつこく聞いてきたのだ。

巡礼者時代に大沼で出会ったイザリスのクラナナ。彼女は我が師であり、まあその、

良い仲であった。

初めて会ってからしばらくは、私の呪術の拙さに呆れと叱りの言葉ばかりを投げかけていた。

ある程度上達すると、意外なほど素直に褒めてくれ、それが嬉しくてやたらと舞い上がったのを今も覚えている。

そして私の実力が、古都イザリス踏破に手が届こうかという頃、彼女は言った。「皆を開放してくれ」と。

炎の業に飲み込まれた者を開放するとは、即ち死を与えるということ。それを私に頼むまで、どれほどの自責の念を抱えていたことか。

母君を討伐し帰ってきた私に、彼女は思いの外、弾んだ声で話しかけた。幾らかは無理をしていたのかもしれない。それでも意外だった。

だが、千年苦しみ続けた愛しい家族の解放は、彼女にとって文字通りの意味のみを持つていたのだろう。

自責も、後悔も、罪悪感も吹き飛ばし、千年ぶりの晴れ晴れとした気分だったのだと理解するのに、多少の時間を要した。

薄情とは思うまい。古都から逃げ出しながら程近い場所に居続け、見込みのある者に術を授けては、そのときをずっと待っていたのだ。たしか、私の前にも『呪術王ザ

ラマン』という者がいたはずだ。

多少の鼻目があるかもしれないが、彼女なりに戦っていたのだと思った。私に、彼女の千年の戦いを非難することはできなかつた。

それから幾度となく逢瀬を重ねた。家族と友人から与えられる以外の愛を知らなかつた私に、自ら勝ち取る恋とは、愛とは、どのようなものなのかを、教えてくれた。

その後、最期にと思い「火を継ぐ」と告げたときには、延々と酷く罵倒され……泣かせてしまった。もう少しうまい伝え方は無かつたものか。もう少し悔いの無いよう察して動いてやれなかつたか。もう少し……。

私の、数多ある後悔の中でも、一際大きなものだ。

だがけて後悔だけではない。彼女と過ごした時間は、友とのそれと同じく、いや厳密には少々趣きが異なるが、かけがえのない大切なものであると言い切れる。

だからこそ、童心に帰った友の追究には弱ってしまった。

こんな話を素面でしろというのは、随分と酷である。

気分良く酔っている聞き手はいいが、話し手たる私は不死人であり、酒には酔えぬのだ。甘いやら酸いやら、全て鮮明に思い出して、口がうまく回らなかつた。

ブリニョルフからすればそれすらも喜ばしい一幕だつたらしいが。困つた友人である。

砦が近づき、人の気合とは凄まじいものだと感じた。

我が友は、馬に揺られ続けながら、その揺れと胃腸のご機嫌取りに成功したのか、砦に着く頃には常の顔色に戻っていた。

先のとおり私自身は酒に酔えぬのだが、他人への助言として使えるやもしれぬし、単純な興味として「どうやって尋常ではない吐き気を抑えたのか」、その方法が知りたくなつた。

体調が戻つたことで機嫌が良くなつたのか、得意気に「秘密だ」と言つて教えてはくれなかつたが。

既に八回目の訪問となつた砦では、二回目と同じく門が下りている、ということも無かつた。

まあ、正確に言えば門の燃えカスを一度外して、残骸と切り出した材木を継ぎ合わせた『門もどき』があり、それを上げているだけなのだが。

「やあやあ、今日も良い天気だな。今日は我が友ブリニョルフを連れてきた。

彼は現在、表向きは盗賊ギルド幹部ではなくただの雑貨商であるため、そんなに警戒しないでくれ」

見張りに声をかけつつ、馬を演習場の隅に繋ごうとしたところ、一味の一人が馬の世話を買って出てくれた。

昨日、ブレックスと協力関係を結んだためか、正式に客人としてもてなしてくれようである。

いくら食事会を開いて頭目の手打ちだと言ったところで人の感情とは如何ともし難く、早まった真似を抑えるために刺す釘にしかない。

それがこうしてまともな応対を受けられるとは……。数日間とはいえ、努力が実を結んで感無量である。

我が友にもみつともないと場所を見られずに済み、ほっと一安心もしている。

我々の到着を知らせる先触れを見送り、いつもどおり厨房で食材を放出したあと、ブレックスがいるという執務室へと向かった。

既に執務室の扉は開いていたが、礼儀としてノックをし、返事を待つてから入室した。「来たな。ブリニョルフが一緒なのは手間が省けて丁度いい。俺からも擦り合わせておきたいことがあったからな。」

しかし手前、今日は随分とお行儀がいいじゃあねえか。いつからそんな常識人になった？」

甚だ不本意で失礼なことを言われたが、先に口を開いたのは私ではなく、私に続いて

入室したブリニョルフであった。

「いやいや叔父貴。彼がもし常識人であったなら、きつと俺もあんたもこうして彼と穏やかに話をする状況になんてなっていないなかつたらうき。

偉大なる非常識の賜物つてね」

「違いねえ。こいつが常人でさえあれば、凡蔵だろうが精鋭だろうが対処できたんだ。

何を間違えたかこのトンマに協力してやろうなんて血迷ったのは、何もかもがイカれたこいつの非常識さ故だろうぜ」

ブレックスは口角を上げて皮肉げに笑う。

思わぬ追撃に私は、ありありと不満だと表情に出して後ろを振り返った。

「すまない、冗談、冗談さ。軽口に対して、彼の頭目殿がどんな反応を返してくれるのか、見てみたかつたんだ。

ほら、話しただろう。苦手意識があつて距離を置いていた、と。思いの外、胸襟を開いてくれているようで、安心したよ」

なるほど、それなら納得できる。おそらく、ブレックスもわかつていて乗つたのだから。

だが、フン、と鼻を鳴らしてブレックスが言い返す。

「ケツの青い若造が吠えかかつて来たところで、このブレックス様が揺らぐかよ。

そもそも俺はガルスが引退するあかつきには、足を洗おうと思つてたんだ。そのあいだくらい、ギルド第二席に鎮座するくらいわけねえつてんだ」

流星は頭目ブレックス。その矜持はなかなかのもの。と感心していると、今度はブリニョルフの取まりがつかないらしい。

『ケツの青い』とは言つてくれるじゃないか。これでもガルスに幹部と認められたんだ。あまり侮つてくれるなよ？

ああ、ギルド第二席を守ること必死だった叔父貴に、そんな余裕を持つとは些か酷な話だったかな？」

「若造が、吹かしやがるじゃねえか。そんなに一人前ツラ面するんなら、あとで遠慮無く諸々について駄目出してやるから覚悟してやがれ。

……そもそも俺は手前に『叔父貴』呼ばわりされるほど歳を食つちやいねえ」

最後だけ視線を部屋の隅に反らしながら呟く哀愁漂う一言で、盛り上がりかけていた空気が若干冷めた。

そしてブリニョルフの「あんた、そんなこと気にするののか」という呟きに「お前もこの微妙な歳になればわかる」と返すブレックス。

その手の悩みを遠い昔に置いてきてしまった私としては、仲間外れにされているようで少し面白くない。

冷めた空気で幾ばくか冷静になったのか、ブレックスが切り出す。

「話すことは色々あるんだ。挨拶はこのへんにしとこうや。」

「……おらトンマ、手前はこつちで錬金術の修行だ。話は全部ながらで聞け。必要なことだ」

「少し待ってくれ。その前に二、三、いいだろうか？」

「……ブリニョルフ、この男にも私の特殊な事情を話そうと思う。一番の友である君に、一応断っておきたい」

言いながら私は左手に太陽のタリスマンを取り出し、ブリニョルフの顔を見る。彼は一瞬考えたあとで、然りと頷いてくれた。

ブレックスが怪訝な顔をするが、既に私は聖句を口に始めている。途中で止めては意味がない。

奴の「何を？」という声が聞こえたあたりで、部屋いっぱい『大回復』の光が満ち溢れた。

私は錬金器具の設置された作業台に向かって、手を動かし続けている。

そこからほど近くの場所では、執務機の脇に備え付けられた机でハンが書き物をして

いる。「今日は書記ですのお気になさらず」とのことだ。

私には『書記』が何かわからなかったが、ブリニョルフ曰く会話を速記で記録する者らしい。……正気か？ 技術というものは、あるところにはあるようだ。

というか、だ。私は、この男にできないことは無いのではないかと思ひ始めている。

また、食材の提供については今日までで十分、とのことだった。ギルドや衛兵隊を警戒せずにすむ現状、食ひ扶持くらいは自分達で稼げる、とも。

「知っている話かもしれないが、聞いておけ。まず説明するが、錬金術師つてのは上は首長、下は庶民まで誰からも頼りにされる。

だが最近スカイリム全体がきな臭くなつて来てるからな。需要に対して供給が追いついてねえ。そしてこれは時間の経過によって更に酷くなるだろう。

だからこそ、何処で何をするにしても、大きく動き出す前の隠れ蓑としては最適だ。

多少怪しかろうが頼らざるを得ず、人間、助けてもらった相手には態度が軟化するもんだ。

中にはそういう道理をドブに投げ捨てるクズもいるが、そういう輩は何をしたつて不利益にしかならんから無視しろ。それでも取まらねえんなら、最悪人知れず始末しろ」

私の事情を打ち明け、言うなれば『真の友』となつたブレックスの語りが続く。

先程、胸の骨折を癒やしたこともあり、その声は痩せ我慢などするまでもなく、はき

はきと調子が良さそうだ。

ちなみに、事情を打ち明けたときの奴は「そんな、ほぼほぼデイドラロードみてえな奴に絡まれて、よく無事だったな俺達。儲けたぜ」とケタケタ笑っていた。剛毅なことである。

更にはものついでと、今だ伏せている（初日に牢の破片を食らった）一味の者達の治療にも駆り出された。医務室に行つて聖句を唱えるだけなので、特段手間でもなかった。治療を受けた側は呆けていたが。

私は、袋から取り出した茸を一つずつ細切りにしたあと、器具で順に乾燥させていく。「ひとまずの身分に錬金術師を選んだ理由は理解したな？」

次に『修行しながら』の理由だが、錬金術つてのは意外と同時並行で作業を進めることが多くてな。

秘薬を作るために慎重を期すってんなら別だが、そんな機会はまずねえ。

相手が小口の庶民なら作らにやならん飲薬、粉薬、軟膏の種類は手足の指じや足らねえし、衛兵隊なんかの大口が相手だとそも作業の効率化のためにそうならざるを得ねえ。

つまりあれこれ話ながらも余裕で作業を熟せるようじゃなきや、「腕一本を頼りに流しでやってる」と強弁するには心許ねえんだわ。

手前は促成で一丁前にならにやならんのだから、ちつときついだろうが我慢しろ。

……おい、今、器具に入れた茸を全部出せ。作業台にその前の茸が僅かに残ってやがる。違う材料が混ざると、どんな恐ろしい代物が出来上がるかわからんぞ。ながらでの作業でも、一つ一つの手順を疎かにするな。一つ終えたら、作業台の上は必ず毎回綺麗に片せ」

言われたとおり、器具から茸を出す。魔法的な工程を経て乾燥されるはずだった茸は、何故か反対に湿っている。それだけではなくぬめりけまで出ているあたり、鍊金器具とは不思議なものである。

作業台を綺麗にしてから、もう一度始めからやり直す。

「次に、どうしても確認しておきたいことがある。俺は今のギルドの状況を知らんからな。

このトンマがぶち上げた計画ってのは、基本的には表からも裏からも情報がブラック・ブライアに伝わらないことを前提にしている。

それで、極論だが失敗しても構わんのだよな？ 更に、かなり長期的な猶予を見積もっている。そうだな？

……よし、なら幾らでもやりようはある。かなり大胆にこの『非常識の塊』を動かせるぜ。

ガルスが死んで張り合いが無くなっていたが、野郎が臍を噛んで悔しがるほど、このスカイリムを面白くしてやれるかもしれねえ」

ブレックスは「ヒツヒ」と悪人のような笑いを浮かべている。いや、盗賊は悪人か。しかしガルスの件について、かなり吹っ切れたようだ。もしくは私達の手前強がつているだけかもしれないが、悪い兆候ではないだろう。

やり直して乾燥させた茸を種類ごとまとめて乳鉢へ移し、乳棒で磨り潰していく。「計画について俺がこのトンマから聞いた、というか地下を掘りながら勝手に喋りやがったんだが……。聞いて、思ったことだな。

ウインターホールドを狙うつてのは悪くねえ。寧ろそこしかねえと俺は思う。

五大都市を除いた四都市でも、大なり小なり強みはある。『ファルクリース』の『戦士達の墓場』なんかだな。

そこにいくと、ウインターホールドは言葉どおり何もねえ。

財力も、武力もだ。この二つが無ければ発言力なんざあるわけもねえ。

ここに威光があればまだマシだったが、かつてウインターホールド首長が上級王を務めていたときの兜を紛失してから、それも無くなった。

極めつけは大学と大災害だ。

ガルスの話では、ノルドの噂話とは違いこの二つは無関係で、大災害は遠く離れた火

山の噴火が原因じゃねえかと言っていた。俺も本当のことは知らん。

問題は、多くのノルドが『大災害は大学が引き起こした人災だ』と信じ、大学を厄介者だと捉えているってこったな。首長ですらその一人だ。

逆説的に、ここまでどん詰まりの無い無い尽くしてもなけりや、大した後ろ盾も無い新参者が数年程度で力を持つなんてのは、不可能と言っても過言じゃねえ」

私は思いつきで言った「狙いはウインターホールド」にお墨付きを貰えて、少々得意気である。

しかし肝心の町は、私の想像以上に厳しい状況であるようだ。それをどう栄えさせるかが問題である。

磨り潰した茸を脇にどけ、ラベンダーとツンドラの綿の花弁だけを集めていく。根から葉のついた茎があればまた収穫できるらしいので、そちらも捨てずに避けておく。あとで一味の者に砦外周にでも植えてもらおう。

「そこでだ、一つ、考え方を変えろ。……ブリニョルフ、お前には二つ駄目出しな？」

まず、ことを成就させるに資金と人員が必要だつてのは間違っちゃねえ。常識だからな。

だが、その二つを最初から自前で用意する必要がどこにある？

資金が必要なら持つてるヤツを脅しつけてでも出させろ。人は用意するんじゃない。

勝手に集まるように仕向けるんだよ。

ブリニョルフ、お前、このトンマの計画が穴だらけなのを承知で、そのまま任せるつもりでいたな？　自分は頼られたときにだけ力になろうと。

断言してもいいが、それだとまず失敗するぞ。こいつ、お前が思っているより戦闘以外は酷え凡蔵だ。今回の砦襲撃のあらまは聞いたんだろう？　ならわかるはずだ。

五分の兄弟だからって遠慮してんじゃねえ。こいつが無謀な大計画をぶち上げたんなら、それに必要な物資と伝手と手順くらいは全部こつちで考えてあれせいこれせい指示してやるくらいが丁度いい。

その代わり、難度は天井知らずで構わねえ。横暴さと非常識さで天秤が釣り合う。これが駄目だし一つ。

二つ目はさっき言った、資金と人員の思い違いだ。視野が狭え」

「待ってくれ叔父貴。一つ目はまあ、俺としても思うところはあから呑むのしても、二つ目はどうすればいいと？

生憎、俺達盗賊に『ゼニタール』が微笑んでくれたことなんて無いんだ。

今の俺達に資金を融通してくれる資産家なんて、どこにもいないぞ。それに人が集まるように仕向けるたって……」

「その『今の俺達』ってのは誰を指してる？　無意識的にギルドを基準に考えてねえか？

まあ手前からすりや、ギルドへの支援者を探すことに血道を上げていたせいもあつて仕方がねえ節もあるが、この計画はギルド抜きでやるんだろう？ だつたら話は変わつてくる。

……『スノー・シヨッド』家。当たつてみな。今すぐは無理だろうが、多少ことが動き始めてからなら、十中八九乗ってくるぜ。話だけは先に付けておきな」

ブリニョルフが「あ！」と声を上げる。そんなに意外な視点だったのだろうか。

そういえば、以前支援者について話していたとき、『ブラック・ブライア家以外は然程気にすることは無い』というようなことを言っていた。

その話の上から排除されていたのがスノー・シヨッド家というわけか。それはたしかに、彼にとつては盲点だろう。しかしブリニョルフが候補から外す家が、役に立つのだろうか。

『鶏の卵』を割り、卵黄と卵白に分ける。卵黄は使用しないため、器に除けておく。昼餉の足しにでもしてもらおう。卵白を解かし、茸同様磨り潰したラベンダーとツンドラの綿の花を加え、器具へ投入する。

「スノー・シヨッド家はブラック・ブライア家がリフテンへやつて来た際、資金援助した家だ。連中自身は養蜂業や水産業を営んでいる。」

自前の分とその援助分の資金を元手に、ブラック・ブライア家は蜂蜜酒醸造業へ大々的に乗り出した。

現当主は、最近代替わりしたばかりのメイビンという若い娘だが、これがなかなかのやり手だ。女傑つてヤツだな。先代から続いて優秀、というより優秀な者が当主に立つ家風なんだろうな。

同業者を出し抜き、あるいは排除し、『ブラック・ブライア・リザーブ』を価値有る銘柄に仕立て上げた手腕は、ガルスでさえ称賛したほどだ。

駄目出ししておきながら擁護するものなんだが、手前は自身の腕を磨くことに必死だったからなあ。

リフテンの力学に目を向け始めたのは、幹部の席が見えてからだろう？

その頃には既に、ブラック・ブライア家はリフテン随一の富豪、正に飛ぶ鳥を落とす勢いだつた。それに加えて、昔からもっている帝国との伝手を鑑みれば、リフテン随一の名家と呼んでも遜色はなくなっていた。

他の家々を『その他』で括つちまうのも、まあ無理はねえよ。俺としちや、手前がその若さで幹部張つてる時点で大したもんだと思うんだからよ。

……話を戻すが、新参者に懐深いつもりで手を貸してやったら、あつと言う間に立場が逆転していた。

そんな名家の方々は、その新参者共に対して今頃どんな気持ちを抱いておられることだろうか？」

それは、はつきり言つて面白くないだろう。余程、清廉で徳高い人物でなければ、腹に一物抱えることになるのが人情というもの。

現在、それらしい話が表面化していないのだとしたら、ブラック・ブライア家は相当にうまく立ち回つているといふ話だ。

養蜂業と醸造業。持ちつ持たれつの関係ではあるが、人の情とは理屈だけで片付くものではない。

ちなみに、我が友は「スノー・シヨツド家か。ああクソ！ どうして思いつかなかつたんだ。チクシヨウが！」と大變荒れている。珍しい。そんなに悔しがるとは。彼の矜持、というより自尊心か？ は私の思つていたより高いものだったのかもしれない。

あるいは、己が承知のうえで見逃す計画の穴は良しとしても、見落としていた穴については自分が許せない。私の計画については全てにおいて第一人者でなければ気が済まない、というくらいが見えなくもない。それはそれで彼の思いが面映ゆく照れるのだが、今は言わないほうがいいだろう。

器具へ投入した物とは別種の茸を磨り潰し、純水に少しづつ溶かして溶液を作る。次に、粘体、と表現すべき状態になつた茸と二種の花を器具から取り出し、溶液と混ぜ合

わせる。これは氣力と腕力の勝負らしい。零さないように、粘り氣に負けないように、かき混ぜる。

「これで資金についての目処はある程度立った。次に人員だ。

これは多少賭けだが、現状分かたれているウインターホールドの町とウインターホールド大学を結びつける。

お前ら大学に行ったことはあるか？ ……だよな。あそこは人種の坩堝だぞ。

街道でサルモールの大使に会えば、連中の強権のせい以最悪殺し合いになりかねん。だが、あそこじゃハイエルフの連中も、魔術への造詣が浅ければ、ただの一学徒だ。

どれだけ魔術に精通しているかだけが地位を決める。「猫」だの「蜥蜴」だの「野人」だの呼ばれている連中が、ハイエルフ様と一緒に講義を受けたり実験を繰り返したりしてんだ。勿論ノルドもいる。魔法嫌いのノルドがだ。

この『大学は素質のある者なら誰でも受け入れる』という『知ってる者は知っている』状態を、もっと広げんだよ。そして大陸中から人を集める。

するとどうなる？ 大学内部には人が収まりきらなくなつて、町に逗留することになるわな。人が増えれば町が栄える。どうよ？

そのためにこのトンマを送りつけ、錬金術師の身分を活かして一人の住民としてまずは信用をつけさせる。そのうえで、町の連中にはある程度隠したまま大学に在籍。完全

な隠蔽は難しいだろうから、取引相手、くらいに思われておけばいい。

そして、アークメイジ、ないしはマスター・ウィザードに話をつけて、こっちに引き込む。

大学側はそこまで心配しちやいねえ。連中だつて霞を食つて生きてるわけじゃあねえんだ。町とそれなりの取引はある。町を完全に無視することはできん。

それにガルスのだちだったエンシルつてウツドエルフがいる。俺もガルスと一緒に何度か会つてるからな。俺から手紙を書けば、このトンマがこのこ尋ねて行つてもそれは邪険にしねえだろう。

そして今のマスター・ウィザードのサボス・アレンは開明的でな。色々歴史や文化なんかの背景があるが、ぶつちやけると『余所者に優しい』。

この二人を起点に大学を町に歩み寄らせる」

現実味を帯びるにつれて、私の大風呂敷が壮大な計画へと変貌しているように思う。しかしこの男、よくこれだけの策を思いつくな。投げたのは私だが。

私は溶液を混ぜている。

「問題は町のほうだ。住民はまだいい。苦しい生活が続いてりや、余所者がこぞつて集まろうが、町が栄えるなら諸々言いたいことは呑んで歓迎するだろう。

解決すべきは首長だ。現首長はもうくたばりかけで、直に息子のコリールがその座を

継承するだろうって話なんだが………奴さん、大の魔術大学嫌いだ」

「おいおい叔父貴、ここまで来てそりやあないぜ。その老いぼれ首長は、計画の肝心要ってヤツじゃないか。それが大学嫌いじゃ、全部絵に描いた餅だ」

「だから賭けだつて言つたろう？ 繰り返すが、大学側は心配してねえ。先述の二人が駄目でも、トンマの奇異な魔術を見れば、おそらく全員が食いつく。

それで首長だが……こっちは安心できるって手はねえから、数を射つ。

まずさつき話した、ウインターホールド首長が上級王だった時代の兜を探して献上しろ。これは、一人の住民、一人の錬金術師として受け入れられてからでいい。

次。首長はストームクローク派だ。そしてリフテンも首長一族からしてストームクローク派だ。スノー・ショッド家もな。そのあたりを仄めかせ。多少無理筋で関係をでっち上げて構わん。どうせこの時勢に、首長同士が表立つて関係を確認しあつたり否定したり、なんて危なくてできやしねえ。

それで、このストームクローク派のような古きを重んじるノルドほど、先の兜みたいなもんを有難がる。少なくとも派閥界限では多少の効果はあるはずだ。

リフテンでもブラック・ブライア家はどちらかと言えば帝国派になるんだろうが、あそこは儲けられればなんでもいい節操無しだ。気にするな」

私の魔術、呪術、奇跡。これを総じて魔法と呼んでいるが、おそらく成り立ちも発動

の仕組みもこちらの魔法とは異なるだろう。

たしかに、大学が人種に拘らない様子を鑑みれば、おそらく研究以外どうでもいい、とばかりに話や実演をせがまれそうさ。……揉みくちやにされないだろうか。

とんがり帽子の翁おきなが辿り着いたとしたら、永遠にアークメイジとやらを続け研究に没頭していそうさ。

……いや、あの翁のこと。文献を読み尽くし大学でできることが無くなれば、大学責任者の地位をあつさりと捨てて、新たな知識を求め放浪の旅に出かねん。残された者達が右往左往するだろう。想像の上でも近づけてはならん人物だな。

しかし町側責任者の首長が計画最大の障害とは。どうしたものか……。

ストームクロークとは、雑にまとめれば反帝国派、ノルド至上主義者、といった勢力だったはずだ。

『マルカルス事件』と呼ばれる一件を解決したウインドヘルム首長（当時は継承前）のウルフリック・ストームクロークが旗頭となつていことから、派閥の名前が付いたとか。

私なりに考え込んでいると、ブレックスがニヤリと悪人面でこちらを見ている。いや、盗賊は悪人なので面構えは別にいいのだが、嫌な予感がする。

「ああ、薬を混ぜ終わったな。あとはそいつを冷暗所で丸一日寝かせれば、魔法耐性薬の

完成だ。

手頃な材料で効果は抜群。魔法嫌いサルモール嫌いのノルドにやなかなかウケがはいぜ。じゃ、今の手順をもう一度最初から。繰り返しして身体に覚え込ませな。

………実はよ、手前等が来る前だが、ふと『ガルスだったらどうするだろうか』なんて考えたんだ。奴ならこの『非常識』をどう動かすつてな。

ちよつと面白いことを考えついたから、これはちつとあとで話させてくれ。笑いを堪える時間が必要だ」

いい加減『非常識』呼ばわりについては慣れてきたが、何をさせると言うのか。

私が白い目で悪戯親父を見つめつつ袋から茸を取り出ししていると、馬を勝手に持ち出して砦までやって来た悪戯小僧が口を開いた。

「話が一度止まるなら、ちよつと話題を変えていいかい？ 俺からも相談があつたんだ。兄弟には、ほら、『俺なりに考えたこともある』と伝えていただろう？」

叔父貴がこれだけの計画を披露してくれたんなら、俺だつて少しは頭を働かせていたことを証明しておかないと、英雄たる君の友人として見劣りしてしまうからね。

さて、この計画の資金源としてスノー・シヨツド家を宛てにする件は俺も賛成だ。接触の仕方を考えておこよ。

だがそれとは別件で、ギルドの活動資金確保のために考えついたことがある。

実現可能か、改良の余地は無いか、話を聞いてくれないか叔父貴」

ブレックスが何事だろうかとにやけ面を引つ込め、襟を正した。この男、私と彼で対応が違わないだろうか。あるいは私を玩具か何かだと思つてはいまいか？

悪戯親父が「話してみろ」とばかりに顎をしやくる。

「まず叔父貴も知つてのとおり、エルフとの戦争からこつち、このスカイリムはどんどんきな臭くなっている。

しかも、大戦時は帝国軍に合流しての外征だったが、今はスカイリム内でさえおかしな空気だ。

外から来る商人たちはその気配を敏感に察知して、徐々に手を引き始めている。大して影響を受けていないのは、東帝都社の港が有るソリチユードくらいなもんさ。

叔父貴には言うまでもないが、表の繁栄無くして、裏の繁栄も無い。まっとうな商業活動の衰退は、ギルドにとつても面白くない。

……が、逆にこれはチャンスなんじゃないかと思つたんだ。

現在の筆頭支援者であるブラック・ブライア家は、まあ多少は裏の顔もあるが、基本的には表の連中だ。

そして支援額を渋られないようにするためには、計画同様ブラック・ブライア家に気取られないよう動かなければならない。

だったら、スカイリムでは存在そのものが表と裏の間はさまにある連中との取り引きなら、うまくいくんじゃないかって思ったのさ。

例えばカジート商隊キャラバン。こいつらは既に先遣隊とも呼べる連中が確認されている。

例えば『ブラックマーシユ』の貿易船。こっちは水運という一度の規模が大きな商いだからか、まだ数人の行商人を派遣している程度だ。

だがギルドのアルゴニアンが探りを入れたところ、ソリチュードやウインドヘルムとの取引を考えてはいるって言うんだ。少なくとも、連中はそれが利になると思ってる。

この二通りの交易路に一噛みできれば、案外大きなシノギになると思うんだが、どうかな？

幸い、と言つていいかは微妙なところだが、兄弟から聞いているとおり俺は謹慎中でね。稼業に精を出すことはできない。なら表の顔で稼いで見るのも一興かと思つたのさ」

友がどうかな？ と聞くのだ。私も気になり、聞かれた友へ「どうなのだ？」と視線を投げる。

するとこの聞かれたほうの友、悪人面のまま仏頂面になる。私にはわかるぞ。これは内心で褒めているときの顔だ。気持ちわざとらしく鼻を鳴らしているのがその証拠である。

手元は鶏の卵を割り、卵黄と卵白を分けている。

「思つてたよりギルドも次代が育つてゐてえだな。技量だけの男じゃあねえつてか？……結論から言う。『どつちもアリ』だ。

問題はどちらも閉鎖的、というより排他的な社会だという点か。まあ、スカイリムでノルドが連中にとる態度を思えば、無理からぬことではあるがな。

カジートに関しては、連中が要求する品を納められれば可能性はあるだろう。奴等には付き合いを始める前に、試練を課す風習がある。

アルゴニアンは……さっぱり読めん！俺にそつちの伝手は無かつたからな。こういうときガルスがいれば……。言つても詮無いか。

ひとまず、カジート同様接触するだけしてみて、駄目なら東帝都社の荷受け係に鼻葉を嗅がせるあたりが妥当なところか？

ウインドヘルムもその伝手でイけるだろうしな。どうせあのノルド至上主義者共のことだ。アルゴニアンの商船や船員なんざ、町からなるべく遠ざけようとするはずだ。不満が溜まれば付け込めるつてもんよ。

どちらも動くだけの可能性と利益がある。先達のおっさんとしては、存分にやればいいと思つて。

フレイがなんと言うかは不透明だがな。

ついでに言えば、『ブラック・ブライア家に悟られないよう動く』というのが、ことが大成功した場合多少難しくなる点もある。

痛し痒しだが、成ったあとならどうとでもなるだろう話だ。それだけデカイ山が成るとなれば、トンマのほうも多少は進展してらるだろうからな」

ブリニョルフは最後の一言でやや顔をしかめたが、すぐ自信有り、とでも言うかの如く胸を張った。

まあ、あの偏屈男とてギルドの益になるのなら否やはあるまい。寧ろそこで否を突き付けるなら、いっぞやの話ではないが、ギルドへの背信行為と言える。

手元は問題無い。

「まだ何も成してはいないが、太鼓判を押してもらえて、少し肩の力が抜けたよ。必要以上背負った気味でいた荷が降りた、と言うべきかな。

彼からもあんたの話の色々聞いたが、やつぱりまだまだ貫目が足りないと思ひ知らされてね。

正直言うと、今日顔を出すのは、距離を置いていた云々を抜きにしても、少し緊張してた。実際、駄目出しも貰ってしまったしな。

でもなんというか、今はすつきりしてる。そして彼に見劣りしないだけの働きをしてみせようと、肚の底から熱が沸いてきてる。

あんまりこういうのは柄じゃないんだがね」

我が友がやる気になったのなら何より。私にとっても喜ばしい。

「よっし。若人の元気を分けてもらつたところで、だ。さつき勿体ぶつた話をさせていただけこうじゃあねえか。」

トン……なあ英雄殿？ お持ちの武器の中に、銀で作られた、ないしは銀が使われた代物、なんてのはありやしませんかね？」

悪戯親父が何を企んでいるのかまるで読めない。作業は続けつつ、質問に答える。

「あるぞ。それも神代の銀で作られた鎧一式に、劍、盾、槍と武装もな。なんなら見てみるか？」

何をさせたいのかは不明瞭だが、とりあえずどんな物かを見せてみる。兜、鎧、手甲、足甲と銀騎士のものを纏い、右手に劍、左手に盾、背には槍を背負う。

ブリニョルフもブレックスも揃って驚き顔だ。

私としてはそこまで良い印象のあるものでもないのだが、大王に仕えた騎士の武器だけあって、浮世離れた綺羅びやかさと、それに見劣りしない純粋な武器としての性能をもっている。

個人的には、それなりに重量のある劍と盾は好みと言えば好みであるし、槍のこの長さは突いてよし払ってよしと気に入っている。

何より、連中を打ち倒して手に入れた武具だという点が最も好ましい。

……どうもブレックスのにやけ笑いが酷くなっている。寝物語の魔王のようである。「予想以上にギンギラギンだなおい。………完っ璧だぜ英雄殿。」

じゃあ『悪巧み』を披露するぞ？

手前よ、その姿のままホワイトランの門を潜って、同胞団に殴り込んで来いよ」悪戯小僧が悪戯親父に向ける首の速さが面白かった。年季の勝利か。

一六、突撃！ 隣の同胞団

ホワイトランの門前に、衛兵の誰何の声が響く。

「止まれ！……見かけないナリだな。何の用で来た」

衛兵たちの眼前には、全身を綺羅びやかな銀製の鎧で覆った、大柄な男が佇んでいる。顔は兜で見えないが、両手を見せて、身なり以外に怪しい様子はない。

「私は遍歴の戦士。タムリエルを転々としながら強者を探し歩いている。

ここホワイトランに居を構えるという同胞団は、スカイリムのみならず他国にもその名を轟かせている。是非、手合わせ願いたく、罷り越した」

「なるほどな。しかし……凄い鎧だな。総銀製か？」

「ああ、神に仕える兵つわもののみが纏うことを許された特別な鎧だ。同胞団を相手取るに相応しいと考える」

門の両端にいた二人の衛兵は、顔を見合わせ苦笑した。

銀は希少で高価とは言え、金属の中でも柔らかい部類だ。それで鎧を誂えるなど、まさしく神に捧げる祭事用か、もしくは伊達や酔狂としか思えない。

あるいは、いずこかの宗派では防具に適さない銀製の鎧を纏って諸国を巡り腕を磨

く、などという教えがあるのかとも頭をよぎったが……。

どちらにせよ、「名を轟かす」同胞団の相手になるとは思えない。身の程を知ることになるだろう。二人はそう考えた。

郷土愛の強いノルドには無理からぬことではあるが、衛兵達は銀鎧の男が口にした『我が町の英雄達』への評価を耳にした際、自然と警戒心が薄れてしまっていた。

「いいだろう、通れ。言うまでもないが、揉め事を起こすなよ。騒ぎになったとき、余所者が痛い目に遭うのを、完全に止められるとは限らない」

「ああ、勿論承知しているとも。同胞団の強さを確かめる。もしバルグルーフ首長閣下が手隙であれば挨拶くらいはさせていたたくやもしれんが、それ以外に揉め事を起こさうなどとは考えんよ」

一人の衛兵は頷き「よし、通れ！」と声を張る。もう一人の衛兵は門上の者に合図を送り、開門させる。

現状、スカイリムに二つと無い鎧を纏った男が門を潜った。

同胞団、いや、ホワイトランの市民たちは、これが何を引き起こすのか、すぐに知ることとなる。尤も、自ら目の当たりにしたとて、信じられるかどうかは別の話なのだ。

銀鎧は、眼前に広がる街並みに驚いていた。

銀鎧とて、高度な文明を持ち、栄えた都市を目にしたことはある。それは情緒と寂寞を湛えた古都であつたり、静謐かつ荘嚴な貴族街であつたり、威嚴と苛烈さを隠さない城と城下であつたり。

しかし、今まで銀鎧がスカイリムに足を踏み入れてから訪れた都市と言えはリフテンのみであり、その街並みは、ホワイトランと比べてしまえばどうしても見劣りするものであつた。

無論、リフテンに力が無いわけではない。しかし、自然豊かで産業に恵まれているとはいへ、交通の便が悪くやや閉鎖的であるリフテンと、スカイリムのほぼ中央に位置する交易都市であり、スカイフオージなどその興りからしていわれがあるホワイトランでは、如何せんその繁栄ぶりが街並みの差として表れてしまうのだ。

銀鎧は遠目に見える天を突くような砦を確認し、歩き出した。

—— いか、手前は出来る限り目立て。とはいへ、そのギンギラで目抜き通りを行くだけでも注目の的だろうからな。とりあえず肩で風を切つとけ。

そして銀鎧が街並みに驚いているのと同様、右手にある炉で鉄を精錬していた男がちらと視線を向け、次いで慌てて振り返り驚いた。

鍛冶師である男は少々距離があるにも拘らず、その鎧がおそらく銀製であること、一切の錆が無いこと、鎧の意匠が神々しいまでに洗練されていることに感嘆した。そして

職業柄、鎧の立てる音から張りぼてでないことにも気付いた。

鍛冶師の視線に気付いた銀鎧が、堂々とした歩みで近寄ってくる。鍛冶師の男は何事かと身構え、護身用に下げている剣を意識した。

—— あとは、そうさな……散々地図を見せたから場所はわかっているだろうが、わざと先々で道を尋ねる、とかな。手前が声をかけ『ジオルバスクル』の名を出せば、誰だつて気になるつてもんよ。

「貴公、少々尋ねたい。ジオルバスクル、とは、この『平野地区』の目抜き通りをまつすぐ進み、『風地区』の広場に出て、更に階段を昇ったところにある……相違ないかな？」
鍛冶師は気もそぞろに小さく返事を返した。銀鎧は同じように小さく礼を言い、進む。

炉の火は絶対に落とせない。だが、この見事な鎧をもつと見ていたい。どうしても付いていきたい。鍛冶師は己の欲に勝てず、普段なら滅多に触らせない見習いへ炉を見ているように指示を出し、男のあとに続いた。

銀鎧が通りを歩くと、同様のことが起こった。いつの間にか見物やら冷やかしゃらが銀鎧の後ろに続き、ちよつとした行列、いや人集りができており、それは銀鎧の移動に合わせて動く。

そのうえ銀鎧は、市場のある広場や、『ギルダググリーン』の根本の腰掛けに座る老婆

など、行く先々でジョルバスクルについて聞いている。

—— おっと大事なことだ。やるのは昼飯時にしろ。きつとそのほうが色々とうまくいく。

老婆が「首長様の砦を見て、右手にある館がそうですよ」と答えると、慇懃に礼を言い、また歩を進める。まるで物語の英雄のようだと、子供達のはしゃいでいる。

銀鎧が、とうとうジョルバスクルの扉の前まで辿り着いた。

後ろに続いた見物人達は、階段下、ギルダグリーンの広場に屯している。昼餉の頃だというのに、耳ざとく噂を聞きつけたのか自宅や酒場から走って来る者までいて、詰めた人々は増える一方である。

恐れ知らずな者は、首長の砦であるドラゴンズ・リーチのある雲地区へと繋がる階段の途中まで登り、よく見ようと目を凝らしている。

その中には、滅多に、どこか死ぬまで雲地区には行かないであろう浮浪者や孤児などもおり、皆、不思議なことに一様に熱に浮かされ、何が起ころのか、あの銀鎧が何を起こすのかと興奮している。

銀鎧が扉を叩く。ドン、ドンと、遠慮の無い鈍い音が響く。

中から一人の男が顔を出した。町でもそれなりに知られている、同胞団の一員だ。

—— あとは話し方もだな。手前の喋りは常から仰々しいきらいがあるが、き

し、だったか？ こっちでは聞かねえ戦士の呼び方の。そいつ等の喋りを特に意識して話せ。面倒でも演じろ。銀鎧と手前は表向き無関係だ。

……まだ、な。

「突然の来訪、あいすまぬ。私は遍歴の戦士。タムリエル中の強者を求めて旅をしている。

その旅の最中、行く先々で同胞団の名を耳にしてな。一つ、手合わせ願いたく罷り越した。さあ、存分に頼むぞ」

同胞団の男は、銀鎧を頭から爪先まで無遠慮に眺め、冷やかしの類だと断じた。

同胞団が居を構えるジオルバスクル、その側にある『スカイフォージ』では、良質な鉄が取れる。そしてその鍛冶場で腕を振るうのは、壮年にして既にスカイリム随一の名を欲しいがままにするエオルンド・グレイ・メーンである。その技量はこの先、更に高まるだろう。

同胞団は元々、武器への付呪ですら許さない武芸者達の集まりである。付呪が施されていないければ『黒檀』でも『翠水晶』でも構わないと言えば構わないはずだが、立地の影響や心情的に、鋼鉄の武器へ信仰にも似た執着を持っている。

そういつた理由から、『銀製の鎧を纏う者』など、富豪か神官の戯れにしか思えない。「ふざけているのか？ 今、皆で飯を食っているのが見えるだろう？ そうじゃなくつ

たつてお前みたいなのは間に合ってるんだよ。

「まったく。たまにいるんだよなあ、こういう勘違いした阿呆が。自分が『イスグラモル』の再来じゃあないかと思つて、やたら派手な格好で来やがる。うんざりだ。本当の戦士なら、腕前だけで全てを証明できるというのに。」

……ほら、いつまで突つ立ってんだ。とつとと失せろ」

食事を邪魔されたことと相手の出で立ちに機嫌を害した同胞団の男は、銀鎧を突き飛ばし、素気無く扉を閉ざした。

銀鎧はもう一度扉を叩き「頼もう!」と声を張り上げるが、内側から蹴りでも入ったのだろうか。バンツ、と大きな音と共に口汚い罵声が聞こえる。

銀鎧が踵を返して広場のほうへ歩いてくる。見物人達も、なんだこれでおわりか、と落胆して散り散りになりかけたとき、銀鎧が声を張り上げた。

—— 十中八九邪険にされるだろうからよ、そしたらおちよくり倒せ。そんで

「どういふわけか随分と人が集まつてしまったな。これでは少々危険だ。その大樹のあたりまで下がっているといい」

見物人達はまだこの見世物に続きがあるのだと理解し、素直にギルダーグリーンまで下がる。

さて、あの銀鎧は何をする気なのか、と注視していると、視線の先の両手が、見間違いでなければ真つ赤に燃えている。

注目の集まる中、燃えた手の平が上に向けられ、一瞬ののちには人の頭など優に呑み込んでしまう大きさの火球が生み出される。

誰しもが「まさか」と思った瞬間、銀鎧が両の火球をジョルバスクルの扉へ投げつけた。

轟音。……その後、余韻がやけに耳に残り、そして静寂。

見物人達は、不安になるほどの停滞を感じた。しかし実際には数拍程度の時しか経っていない。

誰かが言った。「やりやがった」

次いで誰かが言う。「死んじまうんじやねえか?」

一足飛びに、ジョルバスクルの中から先程の男が駆け出でた。

「お前! 自分が何をしたのかわかっているのか!」

文言こそ質問だが、激しい口調と腰の剣を抜く動作は、既に臨戦態勢のそれである。

「無論だ。多少、雅を欠いたのは承知しているが、こうでもしなくては相手として立つのも怖くて仕方無いようだったのだな。血気と理由を与えてやった。どうかな?」

ああ、安心しろ。金は置いていくから、扉はそれで直すといい」

飛び出した男以外にも、ジョルバスクルの中から出てきた同胞団の面々は、先の言を聞いて、頭の中の何かが切れた気がした。それは血管であつたかもしれないし、いわゆる堪忍袋の緒であつたかもしれない。

同胞団の一人が短く「殺す」と呟き、吶喊した。

—— そのあとは適当に、好きに、手前のやり口で暴れる。………ただし、なるべく殺すなよ。

まず一人突出した男の顔面に、銀鎧が大袈裟に振りかぶつた張り手をぶち当てる。そして勢いそのままに吹き飛ばし、ジョルバスクルの中へと逆戻りさせた。

吹き飛んだ男は首をいわせたのか頭を打ったのか、一撃で昏倒している。

それを見て遅まきながら、この極めてふざけた客人が、いっばし以上の達人であると理解した。

同胞団の戦士は、冷静さを欠いていたとしても、そう安々と打ち倒せるものではない。次は盾と剣をそれぞれ構えた二人が左右から飛びかかる。

銀鎧も背負っていた盾、帯びていた剣を構えて対処する。

銀鎧に向かつて左の男は、盾を前面に出し体当たりを繰り返す。これで剣を封じると同時に体勢を崩し、右の男が切り込む。

……はずだったが、そっくりそのまま盾で同様に体当たりを繰り返される。

男は疑問に思う。銀鎧は多少面倒でも躲すべきだったのだ。これでは拮抗してしまふ。そうすれば結果は同じことだ。それがわからぬ相手か？

その疑問は、自らの浮遊感と共に消え去った。盾と盾の衝突で耳障りかつ派手な音が鳴り、拮抗どころかジョルバスクルの屋根が上から見えるまで吹き飛ばされた。既に男の意識は無く、着地点には仲間が走り込んでいる。

連携を前提に切りかかっていた右の男は予定が狂いはしたが、ガラ空きの背に向けて切り掛かる。剣も、まして盾も間に合いはしまい。

しかしその予感はある意味当たりながらも裏切られる。銀鎧は剣と盾を捨て、すぐさま肘で当身を食らわせるよう半身で飛び込んだ。そのまま近くなった剣の持ち手を掴み、変則的に横向きの背負投げで宙へ放り投げる。

そこに、褐色の女戦士が矢を放つ。盾がなければ防げまい。躲すのならば、その先を狙つて他の物が更に矢を放つまで。

だが、女戦士の予測もまた外れる。銀鎧は背負った槍を器用に体を捻るように回し、構え、矢を穂先で防いだ。

皆が思う、ありえない。熟達した戦士ですら、得物で矢を防ぐのは難しい。それを為すならば、せめて剣が届く程度まで引き付け見極めてから、柄で受けるか払うものだ。それを長い槍の穂先で弾くなど、尋常な技量ではない。

指導層の男が叫ぶ。「三人以上で掛かれ！ 射手もだ！」

銀鎧はそれでも止まらない。槍を横に寝かしたまま投げ、距離の近かった者達をまとめて押しつける。その隙に捨てた剣と盾を拾い、腰を落とした自護体で手招きをする始末。

挑発に乗るのは癪だが、ジョルバスクルを取り囲むように群衆がおり、自分達の戦いをつぶさに見ている。元より逃げるつもりは無いが、余計に情けない姿を見せるわけにはいなくなつた。同胞団の面々は、銀鎧に次々と挑み掛かる。

横薙ぎは盾で上方に弾かれ、ガラ空きの腹へ蹴りが入り吹き飛ばす。

唐竹の一撃はまとわりつくような剣の軌道で銀鎧に引き寄せられ、いつのまにか腕ごと脇に抱えられた。一瞬見つめ合い呆けたかと思つたが錯覚だ。そのときには頭突きを食らつて昏倒している。

銀鎧と仲間の距離が近いため、慎重に機会を窺つて居た射手は、標的の足、それも脛を狙つた。外れても地面に刺さるだけの射線だ。

だが、いや、やはりというべきか。後ろに目でも付いているのか銀鎧は足踏みで矢を躲し、踏み折り、頭突きでのびている男を射手へ向かつて投げた。

受け止めさせる投げ方ではない。頭から槍投げのように突っ込んできた質量武器は、見事鳩尾に決まり、射手も崩れる。

最後の射手も、戦いの中で地に転がった盾を円盤のように投げつけられる。顔に対して縦に当たったため、額から顎までが割れてはいるが、力が分散した分、死んではない。い。

そのあいだにも第二陣が既に銀鎧を取り囲んでおり、誰一人として動きを止めていた者がいないことを示す。

銀鎧は戦いで昂ぶったのか、機嫌良く声を張り上げる。「良き相手。良き強者よ。まだまだこんなものではないだろう？ かかってこい！」

来いと言われて行く理由など、本来は無かった。

だが戦士の憩いの場である神聖なジヨルバスクルを焼かれ、何人もの仲間が昏倒させられている今となつては、既に銀鎧は許せる相手ではない。

それに、基本的には守るより攻めるほうが容易い。流麗な護剣を最も得意とする戦士など、歌の中のみ存在する。

彼我の力量を見切り勝てぬと思いつつ、同胞団に攻め掛からない選択肢は、最早無かった。雄叫びを上げて戦士たちが銀鎧に挑む。

大勢の攻勢を受けてなお「良き心意気！」と笑う声が妙に腹立たしい。とはいえその怒りもすぐに消え去る。先人に倣って昏倒するからだ。

徐々に、銀鎧の、相手を打ち倒す早さが減じてきた。

体力切れかとも思ったが違う。すぐに打ち倒すことを止めて、斬り合い、組み合い、指南するように戦っている。

その証左か、「脇が甘い！」だの「速さに惑うな！ 足元！」だの声を張りながら、そのとおりの場所を剣の腹で叩いている。当然、降りかかる矢を全て躲しながら、だ。

射手に至っても、足を止めていれば仲間を槍代わりに投げられ、射ちあぐねれば、ここだと言わんばかりに一瞬の隙を作られる。

射ったあとに気付くのだ。誘導されていた、と。しかしそこにしか好機が無いのも事実。指南を受けているのは、近接組だけではなかった。

銀鎧の蛮行を見た。巨人の如き臂力で仲間を吹き飛ばされた。卓越した技量で子供のようにあしらわれた。銀鎧はけて許せない。しかし、最も我慢ならないのは、戦いがいつも間にか『殺し合い』から『手合わせ』に、『手合わせ』から『稽古』に変化してしまっている事実であった。

自分達同胞団は、スカイリム随一の武芸者。その名に驕ることなく、日々腕を磨き、スカイリム全土の民草のために、獣を、巨人を討ち、つまらない喧嘩の仲裁も買って出た。全ては、この身一つで戦士の規範たらしめとするがため。戦士の真髄を見せんとするがため。戦士の誇りを貫かんがため。

それが、こんな男一人に！

同胞団の皆が、正確には指導層を除いた皆が一丸となつて銀鎧に攻めかかるが、一人、また一人と抱え投げられ、肘で打ち落され、槍の大回転を喰らい、ついにはその場にいる全員が倒された。

いつの間にか、戦いの喧騒に紛れて指導層はジオルバスクルの中へ退避している。

銀鎧は溜息をつき、誰に聞こえるともなく、「お楽しみは終わりか」と呟いた。

そして振り返ると、危険であるから今暫く近寄らぬように、と既に群衆の域まで増えた見物人達へ釘を刺す。

そんな釘などなくとも、同胞団が一方的に蹂躪されるなど悪夢以外の何物でもない光景を目の当たりにして、それでもなお動ける者など、衛兵を含めてこの場には一人としていなかった。

銀鎧がジオルバスクルに足を踏み入れる。

それを見た同胞団の指導層、『サークル』の一人であるジャーケンが口を開いた。

「よし、サークルメンバー以外はいないな？ あの様子じゃ、見物人が近づくこともないだろう」

「だがジャーケン、町の中で変身するなんて、前代未聞だぞ！」

コドラクという名のサークルメンバーの言葉にも、「事ここに至つちや構うかよ」と

ジャーケンなる男は聞く耳を持たない。

そのまま、気合を一つ入れたかと思えば、鎧を脱いだあとの肌着を突き破って体が膨張していく。それだけではなく、夜闇の如く黒い体毛を全身に生やし、頭部は狼そのものである。

銀鎧が再び溜息を吐く。

「それだ、それがいかんのだ。父母から授かった己が肉体。そこに宿つた力と技だけを頼りに、高みへと至つたのだろうか？ 何故そのような不純物を混ぜる。理解に苦しむな。」

伝統なら捨ててしまえ。強さのみを求めらるなら、武芸者などとは二度と名乗るな。見苦しいことこの上無い。

まだ、外で掛かつて来た者達のほうが尊敬に値する戦士であつたよ。

私はある目的のために道場破り紛いのことをやらかしているわけだがな、一つには勘違いをしている半獣に灸を据えてやろうと思つて来たのだ」

銀鎧の無遠慮な物言いに、サークルメンバーの怒りは止まらない。

「何を！ 『シルバーハンド』が偉そうに！」

「ああ、そのような誤解をされるだろうと我が友が言っていたな。」

断つておろが、私はその『銀の手』とやらとは全くの無関係だぞ。別に『スカイリム

からのわーうるふ撃滅』なんぞ、どうでもいいと思っている。賛成も反対もせん。

ただ、同胞団という存在と、その半獣の姿が合わされることに対して、個人的に我慢ならんほどの苛立ちを覚える、というだけの話だ。

ほら、躡をしてやるから掛かって来い、犬っころ」

銀鎧の挑発を受け、ジャーケンの人としての理性が無くなつていく。人狼形態であることに加え、怒りのあまり普段以上に狼へと近づいているのだ。

男の鎧を引き裂き喉笛を食いちぎらんと飛びかかるジャーケンに対して、男は武器を全て放った。

—— 一応言っておくがよ、『殺すな』ってのはサークルメンバーも含めて、だからな？ なるべくスマートに行こうや。それが俺等の流儀だ。

「聞けば、お前達は銀に弱いのだろう。鎧ならまだしも、剣や槍では触れただけで死にかねんからな。甲冑拳法で相手をしてやる。安心しろ。変わり者の闇霊と特訓したから、それなりのものだぞ？」

ジャーケンが振りかぶる鋭い鉤爪のついた右手を、銀鎧は右手で受け、指を絡ませてしつかりと握る。

次いで振りかぶられた左手も、同じように左手で受けて握る。

それだけでジャーケンの両手には激痛が走った。

通常、手甲の手の平の部分は、形状にもよるが、指が分かれる類であれば金属部品は少ない。

その例に漏れず銀鎧の手の平の銀も少ないのだが、触れている銀はただの銀ではない。世界を形造った大王。その大王に仕える騎士だけに与えられた、誉れ高き銀である。聖なる加護も纏っており、人狼では微かに触れただけで、ただではすまない。

変形した頭部故に悲鳴を上げることすらままならないのだろう。ジャーケンはくぐもった声を上げ、男から逃れようとする。

「外の者達はなるべく傷が残らぬよう加減したが、お前達は別だ。痛い目に遭ってもらうぞ」

銀鎧はジャーケンの手と同じ手を組み合わせて握っている。つまり銀鎧の両腕は交差している。それを力任せに捻じりながら開く。

結果、今度はジャーケンの両腕が交差することになり、捻じりを入れられたことで肘が壊れた。

ジャーケンが獣そのものの声で「ガアア！」と鳴くと、銀鎧は一度手を離し、小さくまとまった人狼の身体を抱き締めた。

今度は悲鳴すら上げられない。銀の接地面が広過ぎるのだ。そのまま鯖折りに力を込めて行き、ジャーケンが白目を剥いて気絶したところで開放された。

とはいえそこに情けなどは微塵も無い。音を立てて崩れ落ちた人狼を邪魔だとはかに蹴り飛ばし、場所を確保する。

「まずは一人、と。さて、見たところ、ここにいる面子がサークルメンバーとやらなのだろうか？ ご丁寧に、私が屋内へ飛ばした者も何処いずこかに除けて。

それほど半獣の姿を見られたくないのなら、何故その血を受け入れるのか、重ね重ね理解に苦しむ。

とりあえず全員躡けてやるから、有難く思え。お前達の誘いに乗って屋内に来てやったのだ。遠慮するな」

ジャーケン『導き手』ではないにしろ、サークルの中でも一、二を争う優秀な戦士であり、その力は変身することで数倍に膨れ上がる。

それがこうまで容易くあしらわれるとは……。

膂力で負ける。技量で負ける。装備の相性が悪過ぎる。先程の倒れた相手への所業を見て、目の前の銀鎧が見逃してくれるとも思えない。

ジャーケンの言葉ではないが、ことここに至って、サークルメンバーに残さえた道は唯一つ。『同胞団』に撤退が許されない以上、破れかぶれでも呐喊することだけだった。

……一人を除いて。

「それで、首長、バルグループ閣下。貴公は旅人とも謁見を行うと聞き、また衛兵諸君にいたく勧められた故、挨拶に伺ったわけだが、多勢にて囲み弓持で戦斧を向けるがホワイトランの習いか？」

現在私は、ホワイトランの行政区たるドラゴンズ・リーチにて、大歓迎を受けている最中である。勿論、皮肉だ。私とてこれを本気で友好的だとは思わない。

「奇異なる戦士よ、それは何一つ揉め事を起こさなかつた模範的な旅人にのみ許される物言いだ。……あまり俺を舐めるなよ？」

「舐める？ さてそれはどちらの台詞なのか。この砦に詰める衛兵や従者、貴公個人の私兵が同胞団全員よりも武芸に優れるというなら理解できるのだがな。」

「そうでないのならば、いたずらに私の機嫌を損ねる以外の意味を持たない。違うか？」

バルグループは忌々しげに頬を歪めると、片手で合図を出し、武器を下げさせた。奴の言葉に倣うなら、模範的な苦虫を噛み潰した顔、というヤツだろう。

「それで、何故、私は出頭を求められたのかな？ ホワイトランでは、街に到着した旅人を即日、首長の下まで引つ立てる、という規則でもお有りか？」

「こうまで慇懃無礼だと感心すらしてしまうな。同胞団への一件、どう釈明する気だ」「釈明？ それこそ異なること。私は正面から訪ね、彼の武芸者集団と腕試しをしたまで。何一つ恥じることは無い。たまたま、彼我の力量差が私に傾いたがために全員を眠らせてしまったが、誰も殺してはいないはずだ。」

そも、聞けば彼等は日々、入団希望者と腕試しを行い、認められれば仲間に、認められなければ追い返しているそうではないか。今日のそれと何が違う？

私が犯した罪は魔術を用いジオルバスクルの扉を焼いてしまったことだが、それも代金を弁償してきた。ホワイトランの刑法には明るくないが、こうも大仰に騒ぎ立てることかね」

いよいよもってバルグルーフの顔が酷いことになってきた。ついでに触れると、隣の私兵イリレス（首長の個人的護衛。従者や衛兵への指揮権有り）の顔は既に限界まで酷い。表情で人が殺せるなら、私は何度も死を繰り返している。

友（悪戯親父のほう）の話では、バルグルーフはイリレスと共にサルモールとの戦争において功を上げ、ホワイトラン皆の支持を得る形で首長に納まったのだとか。

強さと、勇敢さと、公平さを持つ良き指導者らしい。一部界限では「偉大なる」と枕につける者達もいるとか。定着すれば二つ名になるだろう。

しかし如何せん若いな。

当然、首長に相応しい矜持も持ち合わせているだろうが、自尊心がやや前に出るきらいがある。両者は似て非なる。大成するまで今少し、といったところか。

「閣下。業腹ですが、ここはあの者の言うとおり、解放するしかないかと」

「俺に舐められたまま引き下がれと言うのか！」

執政らしい老人に諫められているが、収まりがつかんようだ。しかし老人も負けてはいない。「閣下！」と再び諫める。眼力が強いあまり、睨みつけているようにすら見える。

「旅人を拘留するのに相応しい理由が足りませぬ。それ以上に！ 何を置いてでも！

御身をこそ大事になさいませ！」

ほどなくして、バツが悪そうにバルグルーフが目を背ける。老人の気迫が勝った。

実際問題、ここで私が暴れ出せば、同胞団と同じ結末になりかねん。あくまで民である武芸者集団ならまだしも、ホワイトラン地方を治める首長が多勢で一人へ挑み負けたとなれば、仮に命が助かっても権威の失墜は免れない。

怒る主へ諫言できる、良い側近を置いている。きつとこの男は二つ名を得ることだろう。

そして私へ視線を戻すと、八つ当たり気味に吐き捨てた。

「俺が首長であるあいだ、ホワイトランで自由を謳歌できると思うなよ。道端の樽一つ

蹴飛ばしただけでも、牢に叩き込んでやるからな。

わかつたら一刻も早く俺の前から消えろ！」

「言われずとも。では壮健でな、『偉大なる』バルグルーフ閣下」

踵を返して砦を出る私の後方では「お止めください閣下！」だの「離せ！」だの聞こえてくる。……煽り過ぎただろうか。

悪戯親父の指示で理由有つてのことらしいが、別に私はバルグルーフに恨みは無いのだ。少々気の毒である。胸中でのみ謝るから許せ。

風地区まで下りてきて、ジョルバスクルに寄つてみる。目を覚ました同胞団の者から睨まれるが、それだけである。

私の再訪に気付いたのか、奥からコドラクが出てきた。

「首長との会談は如何だったかな？」

「別に。可もなく不可も無し、だ。それより本当に治療はいいのか？」

一人の人狼をのしたあと、他全員が変身して飛びかかってきたと思いきや、このコドラク一人だけが隅で控えていた。

怖気づいたのかとも思ったが、誰か一人でも冷静に話をしなければ全員殺されかねない、と考えたらしい。

別に私は言葉通り灸を据えてやろうと思っただけで、殺す気は無かったのだが。友（親父）からも、人狼状態で負った傷は治りが早い、と聞いていたし。

私が治療を買って出たのは、狼の血を受け入れていない、つまりはサークルメンバー以外の者達についてだ。

「流石に誇りと沽券に関わるからな。控えてくれ。ああ、だが一人だけ重傷者がいたから、その者だけは頼む。回復薬ではどうにもならないのでな。」

本人は拒んでいるが、両脇から抑えているあいだに手早く頼む」

この男、温厚そうに見えて実は酷いヤツなのではないだろうか？

と思っている内に喚き声が近づいてくる。盾を顔面で縦に受けた男だ。流石にこれは骨がイカれて薬だけではどうにもなるまい。今も額と鼻と口から血をダラダラと流している。その割には随分と元気だ。

いや、その元気と血を薬で回復したうえでこれ、ということか。

私の治療について聞いていたのだろう。必死に抵抗しているが、指導者の言うことなので私は悪くない。すぐに『大回復』を唱えた。友の骨折も直したお墨付きである。

顔面の痛みが消えて気持ちも落ち着いたのか、喚きはしなくなったが、代わりに殺氣立った目でこちらを睨んでいる。

がんばれよ、その悔しさがあればもつと強くなれる。私はそうやってきた。

コドラクにそれではと退去の挨拶をして、ジョルバスクルを後にしようとする……が、当然のように呼び止められた。

「差し支えなければ聞かせてほしい。どうしてこのような暴挙を？ 純粋に腕試しだと言いつ張るなら、それで納得してみせるが」

さて、このコドラクという男。

あの状況で話し合いだなどと口にするのは、私の頭に一度は掠めたように「怖気づいた」と怒りを買ひ、誰よりも惨たらしく鬨り殺しにされてもおかしくはなかった。しかしこの男はそれをやった。

同胞団という、苦楽を共にする一つの家族を守るために、命を張ったのだ。私はこの男が嫌いではない。

……ので、正直に話してしまおうと思う。声の聞こえる範囲に人はいないようであるし。

『純粋な腕試し』というのも、別に全くの嘘というわけではないのだ。同胞団という武芸者集団に興味があった。実際、ジョルバスクルの外での戦いは楽しかった。

もう一つは、これも既に伝えたとおり、裏では人狼の力などを受け入れながら表では『誰よりも武芸に身を捧げている』と吹聴する馬鹿共を、懲らしめてやろうと思った。

力の信奉者であるなら、そう言えば良いのだ。聞こえの良いことを言いながら実態が

違うなど、詐欺ではないか。義憤……というよりは私の個人的不快感から動いた。善行を為したなどとは間違っても思わんが、お前達に悪いとも思わん。

あとは、ある計画のためだ。これは私が主でありながら私は全てを把握していないというお粗末な話なのだが、まあ必要だったのだ。……理由としては以上だな」

コドラクは何やら考え込んでから口を開いた。

「正直に言うと、私自身、狼の血を受け入れたことについてずっと後悔していた。それを改めて考えさせられたよ。」

しかし、文字通り同胞達を一方的に黜つた相手を好意的に受け止められるかといえ、そこまで人間ができてはいないようだ。

ある意味、助けられておいて身勝手とは思うが、できれば二度と会わないことを祈らせてほしい」

私はこの男の正直な物言いに思わず笑ってしまう。

「身勝手結構！ それを諫められると、私など何もできなくなってしまふからな。」

究極的には誰も彼もが皆、身勝手なのだ。お前も身勝手に生きればいいさ。では、壮健でな」

バルグルーフと同じ挨拶を残してジョルバスクルを去る。今度は皮肉ではない。

ところで、私が歩くと人垣が割れて、即席の道ができる。別に猛獣ではないのだから、嘸み付いたりはしないと云うのに。

平野地区の市場のあたりまで戻ると、それが顕著だった。元々人が多い場所で道が用意されるなど、これはそういう嫌がらせなのだろうか。

自業自得とはいえ、少々心が寒い……………と思つていたら、何やら足にひつついているものが。

「坊主、何をしている？」

「……………」

「口が利けぬのなら衛兵を呼んで対処を頼むしかないが、そうなのか？」

「……………連れてつて」

「親はどうした？」

「……………お父さんがいる。……………昔はお母さんもいた。でもお母さん死んじやった。もしたら、お父さんに出て行って言われた」

「それはいつのことだ？」

「……………去年の秋」

「冬のあいだはどうしていたのだ？」

「よその家の、のき下とか、じょうへきのくぼみとかにかくれて、風が当たらないようにしてた。」

ごはんは、そのへんのや草とか虫とか食べたたり、キナレスのしさい様に分けてもらってた」

口の重たい子供だが、思わず呵々と笑ってしまふ。

「ではこのスカイリムで丸々一冬、家無しで耐えきったのか。見上げた根性だな。」

しかし何故私だ? 言っておくが私は優しくもなんともないぞ?」

「……………」

「言わねば置いて行くぞ」

「……………強かったから。ぼくが強かったら、お父さんに出てけって言われても、いやだって言えた。」

付いて行ったら、強くなれると思ったから」

「強くなるのが幸せに繋がるとは限らんど。現に私は、否応なく強さを求めさせられ、絶望し、人間性を摩耗させきった亡者共を見てきた。何人もだ。」

どこかの丁稚に納まるか、それこそキナレスの司祭殿に頼んで、神官への道を目指すほうが良いのではないか?」

足にしがみつく力が一層強くなった。理屈がわからぬ年頃なのか、それとも幼いなり

に強さへの憧憬と渴望を捨てられぬのか。

まあ、いいか。いざとなつたら強面のくせに実は世話焼きの悪戯親父を頼ろう。

「よし、ならば来るといい。今日からお前は私の子だ。よろしくな」

一七、盜賊砦のお坊ちゃん

「おい、何でこうなった。俺は『同胞団に喧嘩を売ってこい』とは言った。ついでに『不自然でなければバルグルーフにも』と。だが、『孤児みなしこを拾ってこい』とは間違つても言つてねえぞ。

いやな、先触れから聞いちやいたがよ。本当になんで手前つてヤツは、目を離したほんの一時のあいだにガキ拾つてんだ？」

「そうは言われてもな。私と共に門を潜るわけにはいかぬため、その直前まで見届けてから先に町を出たのは理解できるが……。どの時点で私から一味の者の目が離れたかなど、私にわかるわけがなからう」

悪戯親父の悪巧みを聞いた翌日、私は一味の者を一人帯同させ、ホワイトランへ向かった。

そして現地では同胞団、首長、と無事用件を果たし、馬車も留まる馬小屋のあたりで帯同者と合流した際、私が子供を連れていたために驚かれた。

事情を話し、ひとまず彼には先に馬で砦へ戻つてもらった。

こちらは、子供を私や帯同者の馬の足に合わせて走らせるわけにはいかなかったため、馬

車での帰還となった。

馬車に乗る前、ホワイトラン城壁の見張りが見えなくなった物陰にて『銀鎧』の装いは解いたのだが、念の為の欺瞞工作として、馬車はウインドヘルムを経由し、乗り継ぐ形でリフテンへと帰還した。

己が成果を自慢するわけではないが、当時は衛兵隊も混乱していたであろうから、『銀鎧』がリフテンから来たかと勘付く者はおるまい。

私としては特に問題無いと考えるのだが、どうも目の前の頭目殿は違うようだ。

「いや、兄弟。僭越ながら、叔父貴が聞いているのは多分そういうことじゃあないと思うんだがね。そもそも犬や猫じゃあるまいに。そんな簡単に孤児なんて拾って大丈夫なのかい？」

砦の執務室に、我が友ブリニョルフの倦怠感漂う声が響く……いや、染みる。二人共やけに反対してくるな。私の膝に乗せている坊主が不安がるではないか。

ちなみに、ブリニョルフは例のカジート商隊先遣隊の足取りを追っていたらしいが、先触れの報告を聞いて飛んできたらしい。律儀である。

というか、私は寧ろ犬猫をこそ飼う趣味は無い。

愛らしいとは思いますが、言葉の通じない生き物の世話を焼いてやれる自信が全く無いからだ。

そこに行くくと、彼の英雄は素晴らしい。

狼を友とし、自らが力尽きる寸前まで友を案じ、長年愛用したであろう盾まで費やしてその身を守った。狼は亡き友の剣を携え墓を守り、その友情に殉じた。

英雄の墓で狼と会ったときは再会の形であったが、強敵を倒すために一時肩を並べただけの私を、何百年も経つてなお覚えてくれていたのだ。嬉しく思うと同時に、だからこそ心苦しかった。

火継ぎを行うことは私の使命と思い定めていたため、彼を打ち倒したことは『やむを得ない犠牲』だと、『彼は使命を果たした』のだと思いつくと努力したが、無神経なフラムトの言には辟易としたものだ。

何が『世界の蛇』か。何が『王の探索者』か。長く生きてただけで自分では何も成し得ぬ役立たずめが。

巨大なソウルの持ち主達が、「役目を終えた」？「道を誤った」？ 何故、悪臭を撒き散らすだけの蛇がそれを決めるのか。不遜にもほどがある。

誰も彼も世界のために生きていてのではない。己のために生きていてなのだ。それを超越者気取りの視点から見下しおって。思い出すだけでも忌々しい。

己の思うとおりの火継ぎ以外に価値を見出だせぬ欠陥動物のくせに、よくほざいたものよ。

閑話が休れた題だ。

「だが本人が連れて行ってほしいと言うのだ。こちらとしても特に断る理由も無かつたしな。」

それに、今は一味もギルドも人手不足であろう？ この時分から鍛えてやれば、それなり程度はものになると思ったのだが、いけなかつたか？」

二人して疲れた顔をしていた悪戯親子が、意外そうな顔でこちらに振り向く。

「兄弟、その子を盗賊にしまつていいのかい？ その、戦士としての教育を施すんだとばかり思つていたんだが。」

だから俺も叔父貴も、計画に支障が出はしないかとも心配したわけで」

ああ、なるほどな。砦襲撃の際にも思い知らされたが、やはり何をするにしても報告と相談はまめに行つたほうが良い。

「この坊主が言うには『強くなりた』らしいのだ。しかし強さにも色々あるだろう？」

腕つ節や胆力、あとは知恵や芯の強さもそうだな。全て簡単には身につかず、それ故、強い者は周りから軽々には扱われなくなる。

見たところ坊主は、生命力、と言うのか、生にしがみつ়く力が強いように思えた。それを鍛え伸ばすのなら、戦士より盗賊のほうが向いていのではないかと考えたのだ。君等は潔く死ぬくらいなら生き汚く落ち延びるほうを選ぶだろう？」

そのあたりを含めて、君等の思う強さを教えてやってほしいと思つてな。

ほら、私の場合は腕つ節を磨いた事情が事情だし、手法も手法だ。誰にも真似できんだらう？ ついでに言うのと、ある程度の腕がなければ、私自ら坊主を鍛えるにしても、壊してしまいかねん」

「で、その『ある程度』つてのは最低でも『ギルド構成員程度』つて話なわけか。そりや光栄だこのクソ野郎。拾つてきておいて人に丸投げしてんじやねえぞ。

大体さつきから坊主坊主つて。名前と呼んでやれよ。親子になつたんだろ？ ちと酷かねえか？」

言われて気が付いた。この坊主、名は何と言うのだろうか。馬車で旅をしているあいだも、野營のあいだも宿に泊まつているあいだも、別段困らなかつたのでそのままにしていた。

それを言うとブレックスが椅子を蹴倒して立ち上がり、「手前！」と力いっぱい私の頭を叩く。激高……とは少し違う。なんだろうか。

「叔父貴、横から嘴を挟むのもどうかと思うが、一応兄弟の名誉のために言い訳させてくれ。

彼はその、自分の名前にすらあまり頓着しないんだ。

ご家族を愛しているから名を捨てることこそ無いが、あまりに永いこと呼ばれること

も無く過ごして来たから……。

だから多分、その孤児を軽んじていたがため、ではないと思う。……多分」

ブリニョルフが私に代わって口を開くと、私の事情を思い出したのかブレックスがバツの悪そうな顔になり、倒した椅子を戻して座り直す。当然の如く仏頂面だ。

ついでのように、私の脛を蹴りながら「俺が悪いみてえじゃねえか」となお収まらない苛立ちをぶつけてくる。子供の前でそういう暴力的な仕草は教育に悪いと思うのだが。

それに我が友よ。庇うならしつかり庇ってくれ。自信無さげに二度も「多分」と付けないでくれ。

「それで、今更だがお前の名は何というのだ？　ちなみに私はノメイで、こっちの若いほうはブリニョルフ、年嵩のほうはブレックスだ」

私が水を向けると、「手前も名乗って無かったのかよ」とブレックスに呆れられた。

普通、名前とは名乗り名乗られるものだ。一方が知らないのなら、もう一方も知らないと考えるのが普通だ。

大体名乗られて名乗らないことなど……あつたな。ブリニョルフもブレックスも、出合いの始めは私が一方的に知っている状態だった。

これは私の新しい悪癖が見つかってしまったかもしれない。面倒な。

私もどこかの頭目殿よろしく仏頂面になっていると、坊主がおずおずと口を開いた。「……………ラーナルク。でも、お父さん……………前のお父さんはあんまり呼んでくれなかった。お母さんがつけてくれた名前」

一度口の中で繰り返して、感触を確かめる。そして複数の大人の男に囲まれて少々縮こまっている坊主の、ラーナルクの頭を撫でる。

「良い名ではないか、ラーナルク。ご母堂には感謝を忘れるなよ。実の父親に関しては、お前の好きにすればいい。忘れたければ忘れる。覚えていたければ覚えていろ。

ただまあ、これからここがお前の新しい家になるのだ。帰る場所だ。それは、忘れるなよ。とても大事なことだ。いいな？」

故郷を追放された不死人として、一時でも帰る場所があるから存在できるのだ。それすら無くした人の心とは、想像を絶する寒々しさを湛える。

物理的にでも精神的にでも構わない。自分には帰る場所があると認識することには大きな意義がある。私はそう考える。

ラーナルクがどこまで理解したかは不明だが、私の言葉に頷いた。砦の一味に、小さな仲間が加わった。

私がホワイトランから帰還して三月みつきばかり経ったが、今日も今日とて錬金術修行に明け暮れている。

たった三月か、もう三月か。受け取りようは人それぞれだろうが、一つ言えるのは『ブレックスは極めて効率主義である』ということだ。効率主義の鬼、効率主義のデーモンである。

私が極論、睡眠や食事などの休息を必要としないと知った途端、教える人員を自らを含めて五人まで増やし、一日を等分して私の教導役としたのだ。

ラーナルクが見かねて泣きながら抗議してくれなければ、私はこの三月、文字通り『一時も休まず』錬金術修行に明け暮れることになっていただろう。結果、一人頭の時間配分はそのまま、教導役は三人になった。

しかし、それでも与えられた休息は、毎晩ラーナルクと共に寝て起きるまでのあいだだけだ。私の休息というよりは、情操教育のために側にいてやれ、という趣旨だろう。今ではそうでもないが、初めの頃は父親らしくするにはどうすれば良いのか戸惑った。ブレックスに指摘されて、私の胸中でも変化が起きたらしい。

閑話休題。

当然、そんな調子で修行を続けていれば、材料がすぐに枯渇し、頻繁に採集に出かけることになる。私の真の休息時間はこのときだけだ。

自分でも、幼子の相手をするより、禽獸を弓で射ち殺し、劍で切り裂いているときのほうが気が休まる、というのはいかがでしょうかと思う。世の子育てに携わる全ての人間は偉大である。

砦の執務室から解放され、スカイリムの美しい自然を全身で謳歌する。おお、偉大なるかな母なる大地よ。偉大なるかな天の風よ。

そして採集が終わると重い足取りで砦へ戻るのだ。尽きぬ体力があるとはいえ、気疲れくらいはするというのに。あの男はまったく。

ちなみに、試練として初めて採集したときとは違い、獸の死体は解体して、持ち帰れる物は全て持ち帰っている。

食える物は砦の食卓に並び、それ以外は金へと変わる。

別に私の蓄えが増えるわけではない。その金はブリニョルフがリフテンの薬師から材料を買うためのものであるからだ。

つまり、私の鍊金術修行が捗ることはあっても、安息のときや息抜きの機会が齎されるわけではないのだ。

一度、修行に手心を加えてくれはしまいかとブレックスに頼んでみたのだが、「スカイリムの情勢がどう変わるか読み辛い時期であるため、可及的速やかに鍊金術師としての完成を見るべし」とのこと。

必要なこととはいえ、取り付く島も無く切つて捨てられた嘆願に、少しほろりと雫が眼尻から零れそうであった。おかげでそこいらの猟師に負けぬだけの解体技術が身に付きはした。何せ捌いた数が違う。

私が涙を飲んで修行に明け暮れているあいだ、件のラーナルクはと言えば、すっかり砦に馴染んでいた。

ホワイトランからの道々、そして寢床で少しづつあれの事情を聞いてみたのだが、どうも日常的に父親から手を上げられていたらしい。

父親は傭兵稼業を生業としており、家を空けることが多かった。

そのため、妻が子供を産んだときに、本当に自分の子なのかと疑念を抱いたらしい。そのような言葉を、父親から投げつけられたと言っていた。

私が話を聞いて思うに、おそらく父親自身が外に女を作っていたのではないかと思う。だからこそ、同じように妻も他に男を作り、その間男との子を自分の子だと騙っているのではないかと考えた。

私には何が真実かなどわからん。たしかなのは、肝心の母親はもうこの世にはおらず、子を捨てた父親の元へ返してやる気が私に一切無いということだ。

あれが心の整理をつけて、どうしても父親の元へ帰りたいたいと言うのであれば考えるが……。しかし無理をするでもなくその様子も見えない。おそらく、ここで生きていくと

決めたのだろう。

馴染むきつかけになったのは、ハンの一言であつたと思う。あれを「坊っちゃん」と呼んだのだ。

砦に連れてきて数日は、誰もがどう接していいかわからない様子だつた。有り体に言えば、「腫れ物に触るよう」というヤツだ。大の男が雁首揃えて情けないことだと思つたが、まあ仕方ない側面もあるだろう。

なにせ、やつと受け入れる肚を決めたとは言え、砦に襲撃をかけた私の、その養子なのだ。さもありません。

ブレックスはそのあたりを気にする度量の小さい男ではなく、また別れた妻子がいるようだが、自分で育てた経験は無いとのこと。そのため、単純に子供への接し方がわからない。

呼び方も、名前呼びは稀であり、大概は「ガキ」か「坊主」だ。人の頭を叩いておいて、意気地の無いことである。

ブリニョルフは「お前さんがいっぱしになつたら名前前で呼んでやるよ、『小僧』と氣障に決めていた。……我が友に限つてそんなことは無いと思いたいが、それらしいことを言つて子供の世話から逃げただけな気もする。

そういうわけで、あれについては呼び方さえも定着していなかつたのだ。本人も、ど

のような態度で接して良いのか迷っているようだった。

そんなとき、ハンが言ったのだ。

「頭の正式な客人である旦那の子なら、それ相応にお呼びするべきでしょうな。『坊っちゃん』、あたりが妥当でしょうか」

それを契機に、若い者は「坊っちゃん」、年嵩の者は「ボン」など呼ぶようになり、やつと砦の一人として認められた感が出た。現在、少しずつ名前で呼ぶ者も増えている。

本人も、それなりに大事にされている、少なくとも邪険にはされていない、と理解したのか、徐々にではあるが自ら砦の生活に馴染もうと、様々なことについて教えを請うている。

炊事、洗濯などの日々の生活に関わる作業を手伝い、盗賊の業や体術、投擲術などを手隙の者に尋ねてみたり。

触れ合う時間が増えるほど、本人の帰属意識も、一味の同族意識も高まるだろう。良い傾向である。

ちと寂しいのは、養父たる私はほぼ休まず修行をしているため、共に過ごせるのが先述の寝かしつけのときと、外へ採集に出るときだけだと言ふことだ。流石に獣の相手はまださせられぬが、植物採集なら人手は多いほうが私も助かるし、親子の時間はなるべく取ってやりたい。

先の言と矛盾するようではあるが、私とて一応はあれの養父であるのだ。健気に、必死に日々を生きる姿は愛らしく思うし、接する時間はもう少し欲しい。……養父が「一応」程度でしかない自覚があるあたり、何とも情けない話ではある。

言うまでもないが、私の事情については、ラーナルクへ既に話してある。でなければ、飯も食わず眠りもせず平然としている状態など、人外の何かしらと思われても仕方無い。

そういえば、このリフテン近くには吸血鬼狩りを至上命題に据える集団がいるらしい。そのあたりから連想して、私が吸血鬼だなどと誤解されては堪らん。私は人間だ。誰が何と言おうと人間だ。

事情を話しても、わかったような、わかっていないような顔をしていた。ひとまず今は、私が普通とは少し違うと理解していれば十分だろう。

さて、本日出されてた課題は熟せた。厳しい目で一つ一つ合否を見極めている教導役に、「良し、今日はこれまで」とのお許しをいただき、解放感と共に執務室を後にする。常人ではまず過労で倒れる修行を送っているだけあって、錬金術の腕は日を迫う毎に上達している。

それは私の認識でもそうであるし、教導役の評価でもそうだ。他の者が時間を置いて

忘れては覚え直すことを、忘れる間もなく身体に擦り込み、覚え込ませているのだ。これで苦勞ほどの効果が無い、などとなつては目も当てられない。

最近はこの倦怠感への一番の特効薬として、ラーナルクとのひと時がある。

夕餉もとうにすみ、大人には早くとも子供の就寝には丁度良い頃、私にあてがわれた部屋の扉を開けると、眠気を我慢して私を待っているのだ。そして少しはにかんだように、「お父さんおつかれさま」と労つてくれる。

常から「眠たくなれば先に寝るように」と伝えているのだが、こればかりはどうしても聞かない。そのため私も、出来る限り夜は早く修行を切り上げられるよう努めていく。

さて、これではどちらが世話を焼かれているのかわからぬが、どうも本人としては「お父さん」という言葉を気兼ねなく言える事実が嬉しいようだ。

それはつまり、ただ父親を呼ぶだけで恐れや引け目を感じざるを得ない状況であったことを意味しており……それなりに愛情が芽生えてきた今となつては、次にホワイトラへ赴く機会があれば、『元お父さん』と少々お話し合ひの席を設けることも吝かではないと考えている。

それはそれとして、親子の時間である。癒やしの時間でもある。

初めの頃はどう言葉をかければ良いのか、心に傷を負っているであろう幼子に言つて

はならぬこととは何かと気にしてはいたが、今ではお互い自然に会話を楽しめている。

同じ寝台で同じ毛布にくるまっていると、ラーナルクから「今日はどんなことをしたの？」と聞かれる。それに対し私は「今日も怖い教導役に見張られながら錬金術の修行だった」と答える。半ばお約束のようなやり取りである。

それがすむと、今度は私が聞く番だ。すると、私とは違いなかなか面白そうな話が聞ける。

例えば、煮込み料理の手伝いをした。火傷をしないよう注意され、味見の名目で調理担当と一緒に摘み食いをして、美味しかったし楽しかった。

例えば、置いてあった弓を引こうとしたが、あまりに固く、暫く奮闘していたが駄目だった。それを見ていた数人に笑われたが、「手本を見せてやろう」と次々に的を射る姿を見せられ、憧れたし楽しかった。

そのような話が続く。それを私は、相槌を打ちながら聞く。

大体の話が「楽しかった」で締められるため、無理をしていないか尋ねたことがあるが、そういうわけではないようだった。

ホワイトランではあまり身体の丈夫でなかった母親が心配で、表には出ずに二人で過ごすことが多かったらしい。父親が在宅中は、勘気を被らぬよう、極力静かに過ごしていたとも。

砦に来てからは、野晒しで凍えることも無く、食事の心配も無く、たくさんの人が構ってくれる。だから、楽しい、と。

そうして話をしていくうちに、段々疲れて眠気に勝てなくなってくる。本人はまだ話したが、子供が夜更しをするものではない。眠るまで頭を撫で続ける。そして私も束の間の休息をとり、明日の英気を養う。

朝になれば私がどこかへ消えていないか確認するラーナルクをまた撫でてやり、一日が始まる。

一度、ラーナルクが目を覚ます前に、気を利かせたつもりで飲水を取りに行ったことがある。

すると、部屋に戻った際、あれは泣いていた。温もりが消えてしまったと。怖かったと。ホワイトトランの冬を思い出したと。

それ以来、あれが眠りに就いてから目を覚ますまで、ずっと寝台から動かないことにしている。私としても、心身（主に前者）を休める貴重な時間である。特段、動きたくて仕方無いわけではない。

そんなことを気にするくらいなら、愛らしい寝顔と、幾ばくかの痛ましさを含むものの寝起きに見せる安堵の顔を見るほうが、余程互いのためになるだろう。

ホワイトトランの一冬が齎した「突然放り出されはしまいか」という不安も、時が解決

してくれるものだと言いたい。

それから更にひと月が経った。

今日も今日とて錬金術修行に励んでいると、私の作った薬を眺め、口にしたブレックスが口を開いた。

「そろそろ手前も『錬金術師』を名乗っていいだろう。俺もこれだけの短期間で知識と技術を他人に詰め込んだのは初めてだったからな。どれだけかかるか未知数だったが、『不死人』様々だな」

なかなか際どい冗談を言う輩である。しかし、だからこそ気の置けない仲、という気もする。

私としては、これでいっぱしを名乗れるのであれば、否やは無い。あとは計画を遂行するだけだ……と言いたいところだが、一つ懸念がある。ブレックスも同じことを考えたのだろう。だが、私の予想とは少々異なる答えた返ってきた。

「あのガ……ラーナルクだがな、ウインターホールドまで連れて行きな。

初めは計画の妨げになるかとも思ったが、考えてみりや、子持ちのほうが疑われにくい。

首長からしたって、同じ錬金術師でも独り身の流しよりは、定住を考える子持ちのほうを歓迎するだろう。

……それにありやあ、まだ手前から引き離せる状態じゃねえだろう？」

正直、意外である。ブレックスはどちらかと言えばラーナルクを避けているように思っていたのが、案外見ていたようだ。気にかけてくれたことが、嬉しい。

計画について、この盗賊ブレックスが言うのなら、おそらくそれで問題は無いのだろう。私としても、愛息と別れずにすんで喜ばしい。

ブレックスがあれを置いていけと口にしたならば、どうにかならないかと頼み込むつもりではあった。だが、同時に難しいだろうとも。

これは私が主であり骨子こそ私が考えた計画ではあるが、その他全てを二人の友に任せてしまっている。

……いや、私は大風呂敷を広げただけで、骨子と呼べる部分もほぼ全て眼前の男の立案だというのが本当のところだろう。既に計画は私一人の問題ではない。

それを私の我儘で台無しにしてしまうのは、心苦しいどころの話ではない。

我が友が、私やあれのことを考えてくれたことが有難く、また単純に嬉しく思う。勿論、こちらに關しても否やはない。あるはずがない。

「手前が特に問題ねえってんなら、決まりだな。半月かひと月ばかりかけて準備を整え

て、出立は秋の半ばか終わり頃つてところか？

子連れで旅をするなら、普通、春を迎えてからなんだが、老いぼれ首長がどの程度保つてくれるか読めねえ。

別に次代様でもいいっちゃいいんだが、人間、くたばりかけのほうが色々と後悔やら何やら思い返して、行動が短絡的になりがちだ。俺達としては、そのほうが都合がいい。というわけで、手前には可及的速やかにウインターホールドの町へ溶け込んで、首長閣下の心を捉えてほしいわけよ。いいな？」

友がここまでお膳立てを整えてくれたのだ。これで「やれません」などと返事をする者がいるだろうか。

私はしっかりと頷き、まずは準備の一環としてサーベルキャットを何頭か狩ることにした。あの大きな猫の毛皮は温かいのだ。毛布や外套を用意すれば、ラーナルクも風邪を引かずにすむだろう。

一八、外部協力者就任 & 出立

春の終わり、今を以てなお僅かに残雪が見えはするものの、身を切るような寒気からの解放感で心弾む季節。

私は、リフト地方の北端に位置する村で、十日ほど過ごしていた。

当初の予定では、今頃はとうにウィンターホールドへ到着し、一介の錬金術師として活動しているはずであった。

これが遅れたのには二つの理由がある。

一つは、出立の準備中にラーナルクが熱を出してしまったこと。

ラーナルクは幼児とはいえ、孤児の時分にはスカイリムの冬を一人で生き延びた実績がある。私もブレックスも、そんなあれが体調を崩したことについて訝しんでいたが、ハンが「張り詰めていた気が緩んだのでは」と口にした。

たしかに、健康的とは言えないにせよ、人間、気を張り続けていれば風邪などの病を遠ざけることはある。しかしそれも行き過ぎれば心身の衰弱を招き、いずれは倒れてし

まう。

ホワイトランから盗賊の砦へ居場所を移し、ようやく芯から安心できるまでに至ったのがこの時期だったということなのだろう。無意識下ですら頑なに解ほくれることのない緊張が消えたというのなら、喜ばしいことではある。

が、寝台で辛そうにしている愛息を見ているのは心苦しい。痛し痒しである。

ひとまず、予定より数枚多い『ユキグマ』とサーベルキヤットの毛皮を確保し、予め用意しておいた分でラーナルクを包んでおいた。多少汗ばむかもしれないが、それは日に何度か下着を着替えさせてやればいい。凍えるよりはずっとマシなはずだ。

新たに確保した分は、出立までに処理をすればいい。毛皮の処理には案外時間がかか
るのだ。

砦の面々は、さすが元盗賊ギルド構成員と言うべきか。自己管理を怠ったことは無く、体調を崩した記憶など遠い過去だと言う。立派なものだと思ふ反面、それは連中が病人に、特に幼い病人に慣れていない事実も同時に表しており、看病のあてにはならなかった。使えない一流共である。

かくいう私は、錬金術の修行を経たことで、簡単な料理なら問題なく作れるようになっていた。

初めは麦粥でもと思ったものの、これでも伏せった子供には辛いのではないかと思

い、微塵切りにした各種根菜を目の細かい網に入れて獣の骨と共に煮込み、丁寧に脂を除き、更にパンを投入して葉菜と共に軽く煮込んだ物を出した。日によつては鳥の卵を用いる。

健全な者が口にすれば、齒ごたえの無さに奇妙な怖気を覚えるかもしれない。しかし弱つた病人には丁度良い塩梅だろう。身体に負担はかけず、それでいて少しでも味の感じられる物をと考えたのだ。

また、熊の肝は乾燥させれば薬にもなるらしい。発熱が何に由来するものかは不明であり、どれほどの効果があるかも未知数だが、少量であれば毒になることもあるまい。

錬金器具で乾燥させ、粉末状になるまで、刻み、叩き、磨り潰した物を、比較的体調の良い日を選んで小匙程度食べさせてやった。私はそう嫌いでもない味だったのだが、ラーナルクは酷く苦そうにしていた。

看病のかがあつたのか数日である程度快復はしたものの、やはりウィンターホールドへの出立は春を待つてからが良いだろうと結論付けた。

それに、『お父さん』がかんびようしてくれた」という事実をやたら喜ぶ我が子を見て、環境を変化させるのはもう少し先でも良いのではないかと思ひもしたのだ。

もう一つは、私に『魂縛』と付呪の適正があることがわかり、ギルドから正式に外部協力者に就任してほしいとの要請を受けたことだ。

ラーナルクが熱を出し、出立を春の始まりに延期したことで、私にはいくらかの時間的余裕が生じていた。

錬金術修行や材料採集を継続しても良かったのだが、それだけでは芸がないと、ブレックスが物は試しとばかりに私を『アルケイン付呪器』の前まで引つ張り、付呪と、ついでに魂縛を行わせたのだ。結果は、先述のとおりである。

暇潰し程度に考えていたブレックスは随分と驚いていた。どうも、魔術師の中でも付呪の適正を持つ者は、全体から見れば稀なのだそうだ。

だからこそ、各砦の首長お抱えである筆頭魔術師となるには須らく付呪が使えねばならないし、そうであっても、都市の末端の衛兵にまではその恩恵が届かない。

我らが標的であるウィンターホールド大学においても、付呪の依頼は貴重な収入源であることから、その使い手の希少性が窺える。

そのうえ、私の付呪の腕前は錬金術とは違い、既に熟練や達人の域にあるらしい。いきなりそう言われても、いまいち実感が湧かないのだが。

付呪を覚えるためには、まずそれらが付呪された品を用いる必要がある。そして用い

られた品は塵になって消えてしまう。つまりあまりに希少な武器は、覚える際の消耗品としては使えない。そのため、手始めに覚えたのは、武器に炎、氷、雷の力を付与するものだった。

しかし……なんというか、私が魂石を用いて付呪をしてみせる度にブレックスやハン他砦の面々は褒め囃し立ててきたのだが、私の胸中では混乱が浮かぶばかりであった。炎も、氷も、雷も、どれも「あれば多少便利」程度の物であったからだ。

私の思い浮かべる属性武器というものは、対象を一瞬で火達磨にし、あるいは凍てつかせる力を持っていた。雷など語るまでもない。元は、大王が岩の鱗を持つ古き竜を打ち倒すための力であったのだ。

険しい旅の中、それ等の力にどれだけ助けられたかわからない。それがこの程度の力で一つの魔術分野として成り立っているとは……。しかも、付呪の力は使い続けられればやがては尽きてしまい、そうなれば魂石で充填する必要があるのだという。少々納得のいかないものがある。

ブレックスが言うには、私が用いたのは魂石の中でも並か小さめの、中や小、もしくは極小といった力の弱い物であり、大や極大とされる魂石を用いれば、更に強力な付呪を行えるとのことであったが……。

閑話休題感傷に浸りすぎた

もう一つ判明したのは、私はソウルの業の応用として魂縛を行えるため、魂縛の呪文や魂縛の付呪が施された武器を用いる必要が無いということだ。

更に私にとって都合が良いことに、魂縛に用いる魂とは、生物だけが持つわけではないということだ。

この魂縛という魔術、というか技術であるが、通常であれば先述のとおり呪文かそれ用の武器を用いて魂を持つ者を殺め、その際に肉体から離れた魂を『魂石』と呼ばれる物質へ納める術、であるのだとか。

説明を聞いて思った。なんのことはない。それは私が常の如く使うソウルの業に酷似しているのだ。最近では物資の移送にばかり役立てていたが、ソウルの業は別に物を出し入れすることが主ではない。

他者のソウルを己が力として取り込み、望むように活用することが本質である。

取り込んだソウルは、自己の強化以外にも、ソウルで構成された武器の修繕にも使える。……他者との取引にも用いていたが、それは相手もソウルの業を使えることが前提となる。スカイリムでは無縁であろう。

なんにせよ、私にとってソウルを、魂を用いる術など、今更な話であるのだ。しかしこの土地では違つたらしい。

魂を捕らえておくには魂石が必要であり、一度魂石に充填した魂を抜き取るなど不可能。しかし私のソウルの業を思えば、私自身を『魂の出し入れ可能な巨大な魂石』に見立てることができる。これはかなりの利便性を誇るらしい。

私はソウルを用いて、私という器の上限まで自己を強化した（ソウルを用いて筋力や理力を高めることを、『鍛錬』とは呼ぶまい）。

だが、武器の修繕に用いることを考えれば、ある程度余剰分を確保しておきたい気持ちはある。簡単な手入れくらいは問題ないが、修繕や鍛え直しなどの作業に至っては全てソウルに頼っていたため、長く親しんだくせに私にその手の知識や技術は皆無であるのだ。

故に、やろうと思えば空の魂石を満たし続けることもできようが、それは可能な限り避けたいというのが心情である。

そして話は「都合の良い」まで戻るのだが、私がこのスカイリムの地へと足を踏み入れたとき、死者の身体に魂を宿したドラウグル共を大量に打ち倒した。

その後も友の前で巨人を殺したり、錬金術材料採集のために様々な生物を殺めた。これらはスカイリムで活動する限り、錬金術のため、身を守るために行い続けるだろう。

要するに、私は現状で空の魂石をほぼ際限無く充填するだけの大量の魂を保持しており、それはこれからも変わらない、ということだ。

ちなみに、魂の大きさは持ち主の力や大きさでおよそ量ることができるといって、人を殺めた際の魂はどの程度のもなのか、とハンに尋ねてみたところ、目を見開かれてしまった。

人の魂を消耗品扱いしてしまったが故であろうと理解はできるのだが、他者の魂を好き勝手に利用している時点で非情であることに変わりはないと思うのだが。

そもそも私は長く化生や人外と慣れ親しんでいるために、人だけが特別であるという意識が希薄なのだ。味方に薄気味悪い価値観の持ち主がいては面白くはないだろうが、おそらく変わることに無いものであるから、皆には我慢してほしい。私も、あまり人前で披露しないほうが良い言であるとは学んだのだし。

余談ではあるが、人の魂を縛るには、黒魂石なる特別な魂石を用いるらしい。しかし、黒魂石の用途から考えて、所持しているだけでも白い目で見られる品であることは言うまでもない。

魔術の総本山であるウィンターホールド大学にでも行けば話は違いかもしいないが、それまではまずお目にかかることも無いだろう。

再び話がそれた。
閑話休題。

私のソウルの業と魂縛についての関係を知ったブレックスは、すぐさま配下達に空の

魂石を集めるよう指示を出した。購入してでも、盗んででも、だ。そしてブリニョルフに使いを出し、彼を通してギルドでも同じ動きが起きた。

慌ただしいブレックスに事情を聞くと、市場での相場として、魂石は空か充填されているかで値がまるで違うのだからか。

つまり空の魂石を大量に集め、私に充填させ、それを売り捌くだけで利益が出る、ということらしい。魂石が然程嵩張らないことも、その商売の利点であるとか。

魂石の需要は付呪以外にも、魔術的な働きをする道具や儀式の魔法陣の動力源など多岐に渡るため、いくらあっても困らない。

そして私は、魂の在庫不足とは無縁である。悪戯親父曰く、ボロい商売、だとか。

そのボロい話をギルドにも通したのは、友誼の証と、力関係を鑑みてのことらしい。いくら相互不可侵の約定を交わしたとはいえ、ギルドがその気になれば、砦を丸ごと一網打尽にすることは可能なのだ。

砦の襲撃に踏み切ってもギルドには劣に見合った得が無いばかりか、ギルドマスターには不審の目が向けられるだろうが、可能不可能で可能ならば、それを極力遠ざけるのが頭目の役目だとも。一味の長は色々大変である。

なお、砦の面々が魂石を買い集める際の軍資金の一部として、私の作った大量の薬がある。

私が修行中に作成した並から低品質の薬品を、砦の物資として消費されることに否やはない。その分、私には錬金術師としての腕前が身についたのだから。授業料として納得できる。寧ろそんなもので良いのだろうかという気さえする。

ギルドについては、軍資金など気にするまでもない。代替わりしようが内部分裂しようが、腐ってもスカイリムの裏社会を牛耳った闇ギルドなのだ。空の魂石を集めるくらいわけはないだろう。

そうこうしていると、ブリニョルフがメルセル・フレイの書いた書状と、予備の盗賊の鎧一式を持ってきた。

書状を要約すれば、私にギルド外部協力員への就任を願うものであった。私は魂石の充填や依頼された付呪によりギルドへ利益を齎し、ギルドは私に様々な便宜を図る、とのことだった。

ギルドの外部協力者となるのはウィンターホールドで実績を出してからだと思っていたのだが、ギルドマスター殿は伝手があり利益を生み出す存在を放置しておくつもりは無いらしい。

私としても、砦の面々だけでなくギルドからの協力を受けられるのならば計画の成功率が上がるし、何より我が友のギルド内での立場も多少は良くなるだろう。否やなどあ

ろうはずもない。

尤も、通常であればメルセル・フレイが砦を、もしくは私がフラゴンを訪ねて顔を合わせたうえで交わされる契約についてブリニョルフを介した書面で済ませるあたり、彼のギルドマスター殿が抱く私への嫌悪感は根深いようだ。とはいえ私も好きではない顔をわざわざ見たいとは思わないので、お互い様である。

それより、我が友ブリニョルフが顔を綻ばせて「就任おめでとう。これからよろしくな、兄弟」と握手を求めてきたあたりで、そのあたりの雑事はどうでも良くなった。

次いで、ブリニョルフの持参した鎧にかけられた付呪を覚えるため、盗賊の鎧一式を用いた。ちなみに、塵となった鎧一式については、在庫管理の者へ幾らか握らせて持ち出したらしい。幹部とは言え、なかなか好き勝手をする悪戯小僧である。

流石にまずかろうと思ひ、新たに鎧を用意し付呪を施す提案をしたのだが、彼はそれを断った。

曰く、ギルドの鎧は成果を挙げた者への恩賞として性能の良い品が与えられることが伝統であり、その性能はある程度定まっているため、私が勝手に高い効果の付呪を施した鎧を提供しても、使うことができないのだとか。

実利に重きを置くメルセル・フレイらしからぬと思いはしたが、ギルドの伝統を犯す行為は、今だ足元の定まらぬ彼の御仁が踏み込める領域ではないらしい。主に古参の構

成員から無視できないほどの反感を買うだろう、とのことだ。

砦の面々にしても、己が鎧を纏ってギルドの最盛期を支えたという自負がある。更に言えば、各々が磨き上げた業についても同様である。

いくら私が付呪を施した鎧を纏えば、鍵開けが、盗みが容易になるとしても、用いることはない、とは頭目殿の言である。

しかし「なるほど、それが此奴等の矜持か」と感心した矢先に、売買交渉が有利になる頭巾については、それなりの数を用意させられた。所持品を相対的に軽くして持ち物を大量に運べるようになる鎧については、苦悩した末に一つだけ依頼された。

友等の暮らしぶりが楽になるのなら私は構わないのだが、格好良く決めたそのすぐあとに前言を翻すような依頼をするのは、正直よしてほしい。

その際、ハンが軽口を叩いて頭を叩かれていたが、奴は頭目殿に怒りの抗議を行う資格があると思う。

各々流儀は違うのだろうが、盗賊ブレックスにとって、売買の価格交渉などは商人の領分であり、持ち出す品の選定ができぬ者は半人前、なのだそうだ。故に盗賊の矜持とは無関係、と。

私は盗賊ではないのでわからぬが、信と忠を得ている頭目がそう言うのならば、この一味ではそうなのだろう。多分。

それからは細かい調整に時間を取られた。

まず、計画を遂行するに当たって、私のそばには常に最低一人は砦から付けられることになっていた。

筋書きとしては、こうだ。

私は流しの身でありながらリフテン逗留中に豪商から気に入られ、お抱えの薬師としての雇用を持ちかけられた。しかしそれを断ったがため、せめて旅に協力することで定期的な取引を続けて欲しいと懇願され、家中の者から旅の供を付けられている。付き人は定期的に交代することで、薬と材料の売買を同時に行う。……というものである。実際には今回の一件で、そこに魂石のやり取りが含まれるようになるのだろう。

そして、私が外部協力者となったことで、側に付けられる者にギルドの者も加わることとなった。

追加された筋書きでは、私はリフテンを訪れる前にマルカルスでの取引で同様の話を持ちかけられており、そのためリフテンとマルカルス、双方の豪商が私の身柄を渡してなるものかと牽制しあっている、というものだ。

悪戯親父の考えでは、然るべきときに私が『銀鎧』であることを公表するため、それ

までは『銀鎧』と私とギルドとの関係を極力覚られぬよう『流しの錬金術師』という偽りの身分が必要になる。

ギルドの協力でリフテン逗留以前の足取りを偽装できるのなら、私と『銀鎧』を結びつけるのがより一層難しくなる。計画遂行の助けとして純粹に有り難い。

それに、文字は覚えたとは言え（錬金術修行のあいだに材料や工程を目で読み口で読み上げることで無理やりにも覚えさせられた。初めての材料収集のときは、理解できる品だけを優先的に集め、皆へ帰還してからは恥を忍んでハンの助けを借りていた）、未だスカイリムに不案内な私にとって、旅の供が増えることは有り難い。何しろ子連れでもあるのだ。

ただ、如何せんこの小っ恥ずかしさは何とかならないものだろうか。

厳しくも温かい先生方のおかげで、促成教育とはいえ「いっばしの錬金術師」を名乗れるだけの技量は身につけた。とはいえ、架空の話の上で私がやたら評価され、その証である付き人を連れて旅をするなどと。尻から首筋に悪寒が走って気持ち悪いし痒くなる。

そのことをブレックスに愚痴るように抗議したが、まるでとりあつてもらえなかつた。筋書きに致命的な欠陥が無ければ、愚痴程度のことでは改める気はないらしい。更に言えば、『流し』の時点で怪しい人物であることに変わりはないのだから、多少特異な筋

書きが書き加えられたところで変わらない。寧ろ一周回ってまともに見える、だとか。一周とはどの何を示しているのだろうか？ 首を傾げていると、「慣用表現だ馬鹿垂れ」と頭を叩かれた。理不尽である。

その他には、体力の戻ったラーナルクの鍛錬も行った。

あれが体調を崩したことで、どれだけ生命力や精神力が強くとも、まだ幼い子供なのだと思知らされた。そのため、基礎体力を付けるために砦の演習場で走り込みを行わせたのだ。

それに、何をやるにしても足腰の鍛錬は重要である。

あれの身は私が必ず守るつもりではいるが、敵の数が多くて取り零してしまふことが万が一にも無い、とは言い切れないのだ。そのとき、ラーナルクには下手に立ち向かうよりは逃げ延びてもらいたい。

足を止めて戦えば手傷を負う可能性が高まるが、逃げて時間さえ稼いでくれれば、私が駆け付け敵を屠ることもできるからだ。

私も、何度となく敵に背を向けて逃走を図ったものだ。逃げることは恥ではない。死にたくないのならば、敵を打倒しなければならぬのであれば、一時的な戦略的撤退は時として下手な攻め手に勝る闘争手段である。

体を動かすなら剣の鍛錬がしたいとぐずるラーナルクにそのような実体験を交えて話してみれば、ひとまずは納得して走り込みに取り掛かってくれた。「お父さんとおそろい」が嬉しいらしい。まあ、今はまだそれでいいだろう。

とはいえ、男の子らしい剣への憧れも垣間見えたことであるし、一味の中でも手隙の者を捕まえて短剣術と投擲術の鍛錬も行うことにした。延々走るだけでは流石に面白くあるまいと。

私が錬金術修行にかかりきりだったときに多少の手解きは受けていたらしいが、この考えはあれの興味を大いに惹き付けることとなった。私自身が教える、という点が琴線に触れたらしい。

投擲術の鍛錬は砦の外で行った。体が出来ていないことを鑑みて、素手では軽めに行うほか、投石紐を用いて鳥を狙う練習を繰り返した。

今までは砦の中での的当ての鍛錬だけを行っていたこともあり、思いの外遠くへ飛んでいく石に、投げた本人が驚いていて愛らしかった。獲物が獲れたら私に食べさせてくれるらしい。いつになるかはわからないが、楽しみだ。

短剣術は、まず一味の者に基礎を教わり、その後、組み手を。疲れたら休憩を取りながら、私と一味の者が行う組み手の見取り稽古を、と。私の短剣術（と言うか私のあらゆる戦闘術に言えるが）は我流ではあるものの、両の手に短剣を構え、身軽さと手数

多さで相手を翻弄しつつ押し切る、という戦法は嫌いではなく、それなりに使う機会もあつた。披露して見苦しいものではないはずだ。組み手を眺めていたあれも、「すごい！」とはしゃいでいた。お父さんは鼻高々である。

すると鍛錬の様子を見ていた頭目殿が、砦の全員に命令を出した。曰く、時間を作つてその『非常識』に揉まれておけ、とのこと。殺す気で挑んでも死なない相手というのは貴重であるからして、春になつて砦を去る前に挑めるだけ挑んでおけ、とも。

理屈は理解できても「ひたすら打ち倒されろ」という指示を喜んで行う者は少ない。それを見かねたハンが、旦那に一太刀入れた者には褒賞金を出す、と告げた。また、それに及ぼすとも目ぼしい動きを見せた者にも粗品を渡す、とも。

どうも、ブレックスやハンが褒賞と口にしたときは、それなりの品が下賜されることが通例らしい。皆の目の色が変わった。

こうなると、ラーナルクの鍛錬なのか砦の面々の鍛錬なのかわからない。演習場であれが体を動かしていた時間と、見取り稽古をしていた時間は、半々程度であつたのではないかと思う。

餌に釣られてやる気を出したとしても、相手が一向に動じず千切つては投げ千切つては投げを繰り返していると、不満も出てくるらしい。面白くない気持ちを頭目殿にぶつける者が出てきた。「頭は揉まれんでいいんですかい？」と。

するとこともなげに「俺は手前等と違つて強えからいいんだ」と嘯く頭目殿であったが、この男、ただ単に配下達の前で転がされるのが嫌なだけなのであつた。

皆が寝静まつた頃、「手前に睡眠は必要ねえんだろう？」と連れ出され、何度も何度も挑みかかつてきた。回復薬をがぶ飲みしながら、「春までに絶対一太刀入れてやる」と餓狼のような目で切りつけてくるのだ。

どうもこの悪戯親父、私が以前入れた当身を、素知らぬ顔をしつつ実は根に持つていたようなのだ。

私は私で、寝床から抜け出したあとでラーナルクが起きてしまわないように、温石を布団に仕込む手間が必要であり面倒だったのだが。

結果から言えば、私は勝負？ に負けた。私の根負け、というか、奴の執念の勝利と
いうのか。

出立の時期が近づいた頃、その日も何度手合わせをしたか数えるのも馬鹿らしいほどの回数を重ねており、いい加減気疲れした私の集中が切れた瞬間、運悪く地面の窪みに足を取られた。体勢を崩すまではいかずとも重心がよれたその隙を逃さず、奴は己の肘を私の盾の縁に叩きつけるよう振るい、折れた腕をしならせながら短剣を私の首に刺し込んだのだ。

狂しているのではないかとすら思った。私の油断もあつたとはいえ、たかが手合わせ

で肘を折る馬鹿がどこにいるのだと言いたい。が、「ざまあ見ろ」と満足気に倒れ伏した頭目殿を見やるに、負けは負けと認めねばならぬだろう。

奇跡を用いて首の傷と奴の腕を直し、背負つて部屋まで運ぼうとしたところで、ハンが現れ自分が運ぶと申し出た。この腹心、聞けばブレックスの挑戦を初めからずつと見守っていたらしい。

相変わらずブレックスのこととなると度を越した献身を見せる男である。ずつと見守っていたということは、ブレックス同様、夜は寝ていなかったということだ。頭目殿の朝が若干遅かろうが仮眠を取ることが増えようが配下達は気にしないが、雑事等、砦の実務を統括する副頭目が同様であれば訝しむ者も出るだろう。しかし、そのような様子は一切見せなかった。大したものである。

とは言うものの、去り際に「頭が旦那に一矢報いたことは、折を見て連中にも武勇伝として伝えます」と断るのはどうなのだろう。私は別に構わんが、わざわざそれを伝えるということとは、ハンもまた襲撃についてはちと思うことがあったのだろうか。

まあなんだ。それを面と向かつて口にできる程度には、仲が深まったということなのだろう。きつとそうだ。仲良きことは良いことである。

そうして、砦で過ごす冬は過ぎ、春を迎え、出立の日と相成った。

私や砦の者、またはギルドの者だけであれば徒歩の旅でも良かったのだが。こちらには幼子がいる。というわけで、旅立ちにあたってリフテンの馬屋で馬車を一台購入した。この代金はブレックスが出してくれた。どうも、『春までに一太刀』という目標を達成できたことで機嫌がいいらしい。

友が良いというのなら、私は有難く受け取るだけだ。ちなみに、馬の名前はマルッコである。ラーナルクが名付けた。

また、ラーナルクが寒さで体調を崩さないように、毛皮も多めに用意した。ただでさえ多少は慣れた砦を後にすることでぐずっているのだ。環境の変化を甘く見るわけにはいかない。昨日の夜は「寂しい」と泣いてしまったあれをなだめるのに大変であった。

最終的には、出立してからののお楽しみにとっておこうと思っていた、サーベルキャットの毛皮で作ったラーナルク用の寝間着と、ユキグマの毛皮で作った私用の寝間着を見せて、どうにか泣き止ませた。寝間着は頭部がそのままフードに、前肢が袖に、後肢が裾になるよう縫い合わせてある。一頭では皮を割く位置の関係上足りないため、一着で二頭分の皮を使った贅沢品だ。その分、空気の逃げる場所が無く、温かさは補償できる。夏は無用の長物になりかねんが。

私とあれの体格差故に毛皮の種類までは揃えられなかったものの、獣の仮装にも思え

る揃いの寝間着を見て喜んでくれたのだから、苦勞が報われるだけの効果はあったのだ。準備しておいた自分を褒めてやりたい。

ついでに、ブレックスから私の言葉遣いについても矯正が入った。

ホワイトラン襲撃の計画時にも言われたが、どうも私の話し方は固いらしい。『銀鎧』のときには騎士の如き口調で話したため、そこから乖離させるためにも、「これから外の人間と接するときは、もつと柔らかく話せ」とのことだった。

口調とは身についた癖であるから一朝一夕に変えられるものでもないが、『銀鎧』のときでも上手にやれたのだ。ブリニョルフやブレックス……は伊達男とべらんめえ調が過ぎるにしても、砦の面々、そして記憶に刻み込まれた友等のそれを思い起こせば、なんとということはないだろう。

同行する砦の者は連絡を密にするためにも頻繁に、具体的には長くても十日前後で入れ替わるが、ギルドからの同行者はそうもいかない。短くても半月、といった具合になるようだ。

ギルドから来る同行者について、ブリニョルフは当日のお楽しみだと言っていた。さて、どうということかと思っていたら、現れたのは友の家で酒を交わしたサディンであった。

聞けば、ギルド内で各々が担当する地域や案件はある程度固まっており、私の一件は

ブレックス一味に関わる延長線上、という扱いらしい。ブリニョルフからも、初めに付ける者は、多少なりとも私のやり口を知っている者のほうが合わせやすく、引き継ぎも容易になるのではないか。それには、砦の監視要員から選ぶのが適当ではないか。と口添えがあつたらしい。

私としても、顔を合わせたことのある者であればやりやすい。友の気遣いに感謝しつつ、私達は砦を出立した。

そうして現在逗留中の村にいたるまで、二つの村と一つの監視塔を経由した。監視塔では丸一日、村ではそれぞれ数日を過ごした。

軍事施設である監視塔に民間人が長居するわけにはいかないが、回復薬を中心として、それなりの取引が行えた。監視塔に置かれていた錬金作業台を使って薬の在庫を作っておけたのも良かった。作業台自体は藁を敷き詰めた木箱に入れて持参しているが、実際に私が作業をしている姿を現地の人間に見せる、という意味もあつたからだ。

村では監視塔とは違い、関節症薬や痛み止めなどを所望された。農村であれ、鉱山採掘用の村であれ、労働者の多くは膝や腰を痛める。それらを緩和する軟膏は、田舎暮ら

しでは必需品と言える。また、痛み止めについても、治療院を兼任する大きな神殿が無い場合、切傷、骨折、虫歯、下り腹など、あらゆる場面において必要とされる。直接的な処置を施せないのなら、痛み止めを用いて治療力に任せるしかないからだ（虫歯の場合、痛み止めを用いて抜歯を行うため、直接的処置と言えなくもないが）。

また、それらの村々では、薬の代金を若干値引きする代わりとして、数少ない子供達にラーナルクの遊び相手を務めてもらった。

村では子供とは言え労働力として勘定に入れられることも多いが、「薬が効けばすぐに働けるようになるのだから」と言つて我儘を聞いてもらった。先方としても、何かと入用な暮らしの中で出費が抑えられるなら、数日程度子供が遊ぶくらいはなんといいながらもあるまい。

それにブレックスの言ではないが、不調から立ち直るときの人間というのは、得てして浮ついた気分になりがちだ。こちらも、断られることはまずあるまいと思つて提案している。

それもこれも、ラーナルクには同世代との交流が必要だと考えたからである。

まだ不死人となる前。私のようなどうしようもない愚か者にも、友と呼べる人間は居た。それがどれだけ有り難いことであつたのか、理解したのはずっと後になつてからだつたが、おそらく自覚しないあいだにも救われていたのだと思う。ラーナルクにも、

いずれは友と呼べる存在ができることを願っている。

あれはホワイトランではほとんど母親と二人きりで過ごし、砦に移ってから周りは大人しか居なかった。

私は私で、計画では一応、ウィンターホールド到着後は腰を落ち着けることにはなっているが、絶対とは言えない。あれが独り立ちするまでは私の都合で各地を転々とすることになるやもしれん。

であれば、大袈裟かもしれないが、同世代の子供と遊べる機会というのは、あれにとつて貴重な時間となりかねない。なんなら、薬代を全額負けてでも頼み込みたいくらいだというのが本音だ。……明らかに不審であるため、実行はしないが。

しかしあまりに長逗留しても、それはそれで不審であるし、何より目的地のウィンターホールドは未だ遠くにある。このあとはウィンダムヘルムを経由することになっていするため、地図を見て鑑みるに、到着は夏の終わりか秋頃になっているだろう。

当初の計画より遅れが生じている以上、「先を急ぐ」という印象を持たれない範囲で、その実、ちと急がねばならないのも事実である。なにせブレックス曰く、くたばりかけの老いぼれ首長のほうが何かと都合が良いのだ。現実にくたばってしまう前に計画を少しでも進行させたいところだ。

折角、子供同士の関係に慣れたラーナルクには悪いが、私達は村を出立した。

幾人かの不調を治し、予備の薬を「子供のため」と言って安価で売り渡したからか、村人は好意的に見送ってくれた。

一つ気になるのは、昨晚、村長に出立の意を伝えたときのことだ。

村に逗留中、寝泊まりできるのが村長の家くらいだったこともあり、宿として一室を借りていた。付き人は、申し訳ないが納屋だ。

毛皮の寝間着で「サーベルキャットごっこ」をしているラーナルクを微笑ましく見ていた私に、村長が告げる。

曰く、少し前からウインドヘルムはおかしい。最近ではイーストマーチ地方全域のみならず、このあたりにまでそのきな臭さが漂ってきている。ウインドヘルムへ向かうなら用心するように。なるべく早く町を出るように。特に、ストームクローク軍とは関わり合いにならないように。独り身の戦士ならまだしも、子連れの身ではろくなことにならないだろう、と。

ブリニオルフもブレックスも、スカイリムがきな臭いとは話していたが、その発生源はウインドヘルムとのこと。当初は私と砦の者だけであつたので何の心配もいらなかつたが、今はラーナルクがいる。

砦を出立する前に、進路を変更しようかと一度は提案したのだが、ブレックスはしばし悩んだ末に、ウインドヘルムの現在の空気を知っておきたい、とそれを認めなかつた。

あの世話焼きがそう言うのであれば、ウインドヘルム経由は計画にとって必要な要素なのだろう。あれのことは、私がしっかりと守ってやるより他あるまい。幸い、ラーナルクはノルドである。差別を受けることは無いだろう。

私は……混血なのか人種が判断できない人相だそうだ。私はそもそもノルドでもブレトンでもインペリアルでもないのだから、別にどう見られても構わないのだが、それで実害を被るといふのは正直面倒である。

ブレックスからはノルドとブレトンの混血とでも言っておけと言われたが、両親と両親から受け継いだ血を偽るのには抵抗があつたため、私をごねた。結果、私の祖父の代でノルド以外の血が入つたことになつた。

私は両親より上の代の顔を知らず、名前も臆気であるため、あまり家族という実感は無い。血を誇るような名家でも無かつたし。それ故、筋書きとしてはそのように落ち着いたのだ。細かいことではあるが、計画に関わる全員がしっかりと把握しておかなければ、どこで齟齬が生じるかわからない。そんなどうでも良さそうな話から怪しまれて尻尾を掴まれた、などとなつては泣いても泣ききれん。

面倒事の気配が色濃く漂っているが、そもそも面倒事を起こさんと旅をしているのが私である。巻き込まれる面々には悪いとは思ふものの、胸中でのみ謝るから許してほしい。

そのようなことを考えイーストマーチへ足を踏み入れて数日、白昼堂々街道上にて、二手に分かれ争う者達を見かけた。

思つていた面倒事とは違うものの、さてどうしたものか。巻き込まれないよう引き返して迂回すべきか、それともどちらかに加勢すべきか。

私が付き人の二人に相談していると、事もあろうに一手の内の一人が、こちらへ向けて馬車を丸呑みにするほどの大きな火球を放つたではないか。

火球には咄嗟に大火球を投げて相殺したが、対処が遅れていれば、ラーナルクが怪我をしていたかもしれぬ。

よし、火球の一手は皆殺しにしよう。約二名ほど袖を引いてうるさいのがいるが知つたことではない。ラーナルクは馬車の陰に隠れていなさい。

一九、脅迫

馬車を下げてラーナルクの安全を確保しつつ、サデインをラーナルクの護衛につける。

もう一人が「旦那！ 頭からはなるべく問題を起こさないように言われて……」とまだうるさく袖を引くが、力任せに振りほどいたらわかってくれたらしい。相互理解が深まったな。

街道を北上する私達から見て、争う内の一手は手前から左手に、もう一手は奥から右手に広がり交戦している。人数は手前が六、奥が七といったところ。奥の一手が優勢なようだ。手前の一手は、鎧からしてこのあたりの衛兵隊ではなからうか。

少数同士での戦いでは普通、陣形などはいくらかの変化を見せるものだが、奥の一手が前衛と後衛の役割をうまく分担して立ち回っているせいか、然程には崩れず乱戦とはならないようだ。

……が、今そんなことは問題ではない。重要なのは、奥の一手の黒いローブ姿の者がこちらへ攻撃を放った、という一点のみ。

位置的に、意図せぬ流れ弾なのか目撃者を消すための攻撃だったのかの判断がつかない。

い。それ次第では、最期に言い残すことがあるなら聞いてやっても良いと考えている。いずれにせよ、二度とこちらへ魔法が飛んでこないよう、さつさと片付ける必要がある。

思えば私は、誰かを守りながら戦う、という経験が、我が闘争の記憶の中でも極めて希薄だ。

白霊として召喚された際、召喚者が手傷を負ったときに敵の目を引き付けるよう立ち回った、程度のものだ。戦う力のある者を一時的に庇っただけの行いを、『護衛』などとは言わんだろう。

私が対象を守るためにできることと言えば、可及的速やかに脅威を排除するだけである。

馬車が十分に下がったことを確認した。二人もついていれば、ラーナルクの目を流血沙汰から反らす、くらいのこととしてはしてくるだろう。

ひとまず、火を放った黒ローブの両肘と両掌をファリスの黒弓で射抜く。自らの射線を広く取るためか、やや高い場所にいたので当てやすかった。岩の上にも立っていたのだろう。

スカイリムの者は魔法の行使に触媒を用いないようだが、手元から発することに違いは無いらしい。発射口と、そこに近い関節を潰しておけば、武器も魔法も使えまい。次

いでメイスと塔のカイトシールドを取り出す。

本当は魔術か奇跡を用いて遠距離から先制攻撃をと考えたのだが、もう一手を巻き添えにして敵対してしまい、纏めて相手取ることになれば面倒だ。この後は近接戦闘に持ち込むしかあるまい。

一射目の時点では誰もこちらへ注目していなかったが、無駄なく魔術師を無力化したことで、両陣営ともこちらへ気付いたようである。馬車より私へ注目を集めるため、雄叫びを上げつつ呐喊する。手前の一手は……盾に熊の模様。思ったとおりだ。

「イーストマーチの守護者達よ、義によって助太刀する！」

身構えた衛兵隊の最後列を刺激しないよう、右手を膨らむよう気持ち遠巻きに駆ける。

奥の一手は前衛に黄金色の甲冑戦士が四人、後衛に射手が二人、無力化した魔術師が一人。

通り抜けざま、右手端で切り合う前衛の脛を、駆ける勢いそのままにメイスで殴り付ける。然程の力は込めていない。脚甲ごと骨を砕いて動きを崩した程度だ。これで最前線の天秤は衛兵隊に傾くだろう。あとは後衛を潰す。

邪魔な前線の者共を通り過ぎると、視界が開ける。両腕に計四射浴びた黒ローブの男が喚いており、その護衛に一人、剣を抜いている。片手は無手だ。一人は弓を構え、今、

こちらへ放った。

すぐさま塔のカイトシールドを構え矢を防ぎ、そのまま低く沈むよう駆けながら真つすぐに突つ込む。相手からすれば盾が迫つて来るように見えるだろう。弓を捨てざるを得ないはずだ。

こちらの間合いに入つたところで、剣を抜いた元射手を確認。メイス相手と思つて待ち構えているところ悪いが、メイスと入れ替えるよう取り出した『ブルーの腐れ槍』を腹に振じ込み、貫通させた。即死ではないし、無駄に時をかけなければ、治療のしようもある。余程の事情が無ければ殺すのだが、何かの役には立つかもしれない。

元射手の胴を蹴つて槍を抜き、今度はブロードソードを取り出し、黒ローブの護衛に詰め寄り斬り掛かる。一合斬り結び、二合目……と思いきや、無手から魔法を放つてきた。慌てて躲し、距離を取る。片手で剣を扱いながら、魔術発動の直前段階で保持していたようだ。こちらの魔術は戦闘における自由度が高いらしい。

無手は盾を持たないがためかと思つたが、剣と魔法を組み合わせた戦闘術の使い手か。ちと油断したとも思うし、まともにやり合つては厄介だとも思う。

一刻も早くラーナルクの安全を確保したいと考える私にとつては、鬱陶しいことこの上ない。面倒になつたので、ハベルの大盾を取り出し、両手で構えて突進する。ギリギリまで引き付けて横に跳ばれたが、その程度は難なく追尾してみせ、そのまま体当たり

でかち上げる。

シールドバツシユ、というよりは大盾と私の体重による質量武器で撥ね飛ばした、と言うのが正解だろう。落下してきたところで首を踏み折る。

後衛を全員無力化したため前線を窺ってみると、丁度、衛兵隊が最後の一人を切り倒し、戦闘が終わったところだった。後衛の援護も無い、一人欠けた前衛など、衛兵隊の敵ではなかったのだろう。『市民の安全を守る』などといって好き勝手している」との噂も聞く。ならばこの程度、熟してくれなくては困るというもの。

ラーナルクのことであつたので少々神経質になつたが、終わってみれば呆気なかつた。

さて、何と声をかけようかと思案していると、向こうから相好を崩しながら歩み寄つてくれた。

「旅の者かな？ いや、実に助かつた。最適な挙動でこちらに流れを引き寄せ、手早く後衛を排除してくれたな。大した腕前だ。

名を聞いてもいいか？ 私はアーチル。普段はウインドヘルムに詰めているのだが。最近サルモールの人間が市民に横暴を働くとの陳情が上がるものだから、首長からの命を受けて街道警備の任に就いていた」

攻撃前に声をかけておいたことが良かったのかもしれない。衛兵隊のアーチルは表

向き好意的に私を労ってくれた。

応じない理由も無いし、応じなければ不審に思われるだろう。私は自らの名と、流しの錬金術師であることを告げた。

戦士は本職ではないという私の言に怪訝な顔をしたが、「錬金術師は町で店を構える裕福な者でもなければ、素材収集のために自然と荒事に慣れる」と誤魔化した。アーチルには通じたようだ。

この男、少なくとも錬金術師の事情に詳しくないようだ。流石に、錬金術師が皆、私と同じだけの戦働きができるのなら、私は自らの足跡を見つめ直す必要がある。

あるいは、深く詮索するべきではないと考えたか。……まあおそらく後者だろうな。彼等にとつて私は、一応『恩人』にあたるのだろうし。

話しながら、打ち倒した者達を見やる。前衛の四人は……全員死んでいるな。

後衛も、体当たりをかました剣士は首を折ったのだ。当然、死んでいる。腹に穴が空いた元射手は、毒が回ったのか、腹のほかにも、顔中から血を垂れ流し痙攣している。遠からず死ぬだろう。特に役には立たなかつたな。

黒ローブは喚くことを止めたらしい。決着が付いて気落ちしたこと他に、両腕からの出血と痛みで体力を消耗したのかもしれない。

連中の装束は黒ローブ以外揃いだ。全員黄金色の、エルフの甲冑を纏っている。イー

ストマーチの衛兵隊と争つていたことから考えても、サルモールの人間であろう。なんとなく、連中を見たときからそんな気がしてはいた。

火球を不意打ちで放たれた故にサルモールの一行を許すつもりは毛頭無かったが、一方が衛兵隊だとわかつてからは、ウインドヘルム逗留が予定に組み込まれている以上、恩を売っておいて損は無いだらうという打算が働いたのも確かだ。

「それにしても、衛兵隊がなんでまたサルモールの耳長共と戦闘に？ どうせ奴等が難癖をつけてきたんじゃないかとは思うが。しかし、いくら帝国が協定を結んだとはいえ、あんまり連中が好き勝手をすれば、ウルフリック首長が黙ってないだらうに」

今のはなかなか自然な話し方だったのではないだらうか。ブレックスめ。私がいちんとやつてのけられるのかやたら心配そうに見ていたな。今だけではない、これまでの道中だつて不審がられることは無かった。私とてやればできるのだ。

そして、そうウルフリックである。奴はサルモールのせいで拘束され、父親の死にも会えなかつたという過去がある。連中へは恨み骨髄であろう。

ウインドヘルム首長を頂点に据えるイーストマーチ衛兵隊としては、連中に対して吐き捨てるように罵倒が跳ぶかと思つたのだが、アーチルは苦笑いと共に事情を語つた。

「実は、連中が数日前に立ち寄つた村で『外交特使に無礼を働いた』とかなんとか言つて幼い子供を殺害した、と早馬で報告を受けたんだ。仮に市民の落ち度が事実であつたと

しても、殺人を犯された以上は俺達だつて「はいそうですか」と引き下がるわけにはいかない。事情を聞かせてもらうため、またその場で首長へ伺いを立てる必要があるかとも思つたからな。ウインドヘルムまでの同行を願ひ出たんだ。

だが断られた。そうこうしているうちにお互い熱くなつてしまい……まあ、少々面目ないんだが、向こうの放つた威嚇用の魔術でこちらの何人かが我慢の限界を迎えた。それで……あとはお前も知るとおりだ」

なるほど。法的にはサルモールの『外交特使』とやらの言い分が通るのだろうが、首長の反サルモール感情と衛兵としての手続きから連行しようとしてお互い譲らず、結局、先に手を出したのは衛兵隊である、と。多少バツが悪いのもわからないではない。それは災難だつたなと言つて労うと、再び苦笑しながらも礼を返し、握手を求めてくれた。この男の実直そうなところは嫌いじゃない。

さて、それはそうと、後処理をどうするつもりなのか尋ねた。私としては、サルモールの生き残り連中（内一人は瀕死、内一人は衰弱が激しい）には、きつちり止めを刺したい。黒ローブだけは、初めの一発が故意か過失なのかを確認したうえで殺したい。

それを告げるとアーチルも同意し、ことここに至つては皆殺しにして、連中はまるごと行方不明としてしまったほうが都合が良く、痕跡も可能な限り消しておきたいとのこ

と。

それならと、まずは身動きの取れない連中の身包みを剥ぎ、装備や所持品を馬車に運んだ。助太刀の対価として、また公的には何も無かったことになるため、それらの所有権はまるごとこちらのものとなった。

次に、馬車から引つ張り出したように見せつつ、ルッツエルンと『グレートメイス』を取り出した。装備の所有権云々は、この挙動のための口実である。無欲はときに要らぬ嫌疑を生む。本当はスモウハンマーのほうが手つ取り早いのだが、あまりに巨大なため、馬車からとはいえ取り出せば不自然極まりないと考え妥協した。というか、あんなデカブツ、所持していることすら不審である（錬金術師がグレートメイスを所持していることには目を瞑ってもらう。戦鎚は比較的親しまれている武器であるのだし）。

ルッツエルンで十分な大きさの穴が掘れたら、今度は死体を穴に放り込む前にグレートメイスで一つずつ潰していく。一振りですたくなるのだが、顔は念入りに行く。もし獣が掘り返したとき死体の損傷が軽く、それが原因で万が一にでも連中の身元が割れては面倒だと考えたのだ。可能性は極力潰すに限る。

あとは、潰して血の広がった土と掘り返した土で埋め直してしまえば、見た目にはわからない。上から踏み固め、草を適当に被せる。

初めに穴を掘る時、表層の草は土ごと剥がすように掘ったため、そのうち根が伸びて

痕跡は消えるだろう。血の染みた土のせいで深くは根を張れず多少元気が無くなるかもしれないが、然程問題はあるまい。一雨二雨降れば、処理し損ねた血付きの土があつても流れてしまふだろう。完璧だ。

ちなみに、黒いローブの男は私の参戦理由となつた一発について、故意でもあり過失でもあるという微妙な証言をした。尤も、証言を引き出すにしても喧しかつたため、「素直に答えれば痛まないようにしてやる」と約束する必要があつた。

黒ローブ曰く、戦闘中に私達の馬車が見えた。脅して追い払うもよし、魔法が着弾すれば目撃者が消えてよし。そう考えたところで、それまで狙いを定めていた衛兵が部下の攻撃を躲し、偶然馬車との射線上に躍り出た。渡りに船であると高威力の魔術を発動させ、衛兵、馬車、どちらに着弾してもよし。そんな心境で放つたのだと。そして、衛兵が魔術を躲したため結果的にこちらへ飛来した、と。

そうか、と言つてメイスを振りかざしたところでまた喚き始めたが、別に私は殺さなうとは言つていない。そして奴の証言からは、こちらの無事が一切考慮されていなかったことが十分に伝わつたため、最期の言葉を聞いてやる義理も無い。「痛まないようにする」という約束を守つてやるだけ、有り難いと考へてほしいものだ。それを「話せば治療を受けたうえで助命される」などと勘違いしていたとしても、それは私の与り知るところではない。

一通り作業を済ませて衛兵隊を振り返ってみると、比較的若い者が二人ほど街道脇の草むらで嘔吐しており、他の者も顔を酷く顰めたり若者の背を擦ったりしている。まあ、死体の処理など気持ちのいいものではないからわからないでもないのだが、その作業は私一人で行ったのだ。本来は当事者皆で協力するはずだろうに。それを鑑みれば、劳いの言葉の一つや二つくらいかけてほしいと考えても罰は当たるまい。

私の非難がましい視線に気付いたのか、若者に付いていたアーチルはぎこちない笑みを浮かべて、劳いと、作業に参加しなかった不義理を詫びて来た。

そして、外交特使一行を消したことについて首長に報告する必要があるため、今後は隊を分けるという。内訳は、報告にアーチル他一人。街道警備にその他、だ。

こちらウインドヘルムへ向かうのに、一度別れてから再会することがあれば不審がられてしまう。立ち寄った村の長の言では、あまり関わり合いにならないほうが良いが、ことここに至ってはこちらから同行を依頼するべきだろう。

幸い、アーチルは「衛兵隊と一緒に道中心強い」という私の言を快く受け入れてくれた。私達は血生臭い現場を後にし、旅を続ける。

二つの村を経由し、明日にはウインドヘルムに到着するだろうという日に立ち寄った

村での夕食後、ラーナルクと付き人一人を除いた皆で鍋を囲んでいたら、アーチルの部下が私に話しかけてきた。ちなみに場所は野外である。小さな開拓村で、六人が追加で席に着けるほど大きな家が無かったのだ。

「折角、優れた戦士と知り合えたと思つたのに、ウインドヘルムでの滞在は短いのか。残念だよ。ウインターホールドが目的地というのはわかるんだが……なあお前、やつぱり衛兵隊に入らないか？ うん、そうだ、それがいい！ ウィンターホールドになんか行つたつて、あそこにはなんにも無いぞ。ウインドヘルムで首長のために働くことこそ、お前のためにもなるはずだ。力量を活かすのにも最も相応しいだろう。間違いない」

誘いはそれだけ評価されているという裏返しであろうから悪い気はしないが、計画を変更するわけにもいかん。それに少々解せない。既に道中でアーチルからも勧誘され、それを辞退していたのだ。何故部下が再び同じ話を蒸し返すのか。何より、アーチルと違いこの男の目はあまり好きではない。

「いや、有り難い誘いだが、やはり遠慮しておくよ。暫く流しでやってきたが、先祖が愛したウインターホールドの助けになりたくてな。『なんにも無い』からこそ行くのさ。男たるもの、先祖に恥じない生き方を、とも思うし」

筋書きでは、我が家は私の祖父より更に上の代、大崩壊が起こる前まではウインター

ホールドに居を構える家であった。それがウインターホールドを出てしばらく経つと大崩壊が起こってしまつた。帰るに帰れず、寂れていく故郷をただ遠くから眺めているしかない。見放したようで罪悪感を覚え、その思いが私にまで引き継がれている、という事になつてゐる。

仮に現地で問ひ質されても、大崩壊以前の住民は既に死亡しているか、離散しているだろう。当時のことを覚えてゐる者がいない以上、記録を用いて調べるしかないわけだが、町の大部分が失われる未曾有の大災害が起きてなお住民一人一人の記録が残つてゐる、とは考えにくい。

足はつかず、故郷を大切に思うノルドへのウケも良いように、とブレックスが考えたのだ。

その後も男は言い募るが、アーチルが諫めてくれた。しかし、どうやらそれがまた氣に食わなかつたらしい。

男はしばらく不機嫌面を隠しもしないでいたが、ふと氣が変わつたように、にやにやと不快な笑みを見せた。

「うん、そうだな。あまり無理強いしてはいけないな、うん。すまなかつたよ。隊長も、申し訳ありません。」

……ところでこれは全く関係の無い話なんだがな。数日前のサルモールとの一件、あ

れはなかなか厄介な出来事だったな。秘密裏に片付けられて本当に良かった。

尤も、仮にことが明らかになり問題になつても、我らイーストマーチ衛兵隊ならば、ストームクローク軍ならば、然程のことはない。ウルフリック首長は毅然と対応してくださるだろう」

何を言いつ出すのだろうか？ 碌でもないことだ、という予感しかしい。

というか、衛兵隊自ら『ストームクローク軍』の名を出して良いものなのか？ あれはあくまで俗称であり、公的にはまだウルフリック自身が否定していたと思うのだが。とはいえ、いわゆる『公然の秘密』というヤツなので、その否定を信じる者も少ないが。「だが、ストームクローク軍の一員でもないお前は、幼子を抱えて旅をしている。そして確たる後ろ盾も無い。商人との繋がり程度はあるようだが、別に何処かの首長の従者というわけでもない。

そんなお前が一件に関わっていると知られるのは、当然困るよな？ いやいや、気になるな、ただの事実確認だ。

お前がサルモールから召喚状を送られ、詰問を受ける、なんてことがあつてはならない。ああ！ そんなことになればお前も、お前の子も、どんな目に合うかは言うまでもないからな。それだけは避けなくてはならない！ ……そうだな？」

男の芝居がかった言い回しを受けて、腰が浮き、自然と手が剣に伸びる。

……私の鈍い頭が怒りで更に鈍くなっているためまいち確信が持てないのだが、これは、この男は私を脅しているのだよな？ それもラーナルクをダシにしてまで。

私の隣でサディンも腰を浮かす。こちらは男に対してというより、私の抑えのためだろう。大丈夫だ。私は怒りつつもまだ冷静だ。サディンの動きにも気づけているし、ラーナルクがこの場にいらなくて良かったと安堵できる程度には落ち着いている。

あれは口数さえ少ないが、頭は鈍くない。どうかすれば、既に私よりマシな代物を積んでいるとすら思える。こんな話は聞かせられない。馬車で砦からの付き人に見守られながら眠っていてくれて良かった。

アーチルの激しい怒号と叱責が飛ぶ。誇りを重んじるノルドには受け入れ難い言だったろう。

不倶戴天の敵であるサルモールとの戦闘中に助勢してくれた者を、よりにもよって当のサルモールへ売り渡す、などという話は、恥を知る者なら、脅し文句だとしても看過できないはずだ。

だが男は先と違い止まらない。

「しかし隊長。この男が得難い人材であることは間違いありません。優れた戦士であり、錬金術師でもある。これを陣営に加えないのは損ですよ。まあ多少褒められた方法でないことは私も承知していますが。」

というかですね、サルモールから首長に詰問状なり使者なりが届いて、連中の行方について心当たりがないか問い質すでしょう。そこで知らぬ存ぜぬを通すわけですが、それは同時にこの男を庇う行為でもありますよね？

ここで味方にならないということは、将来敵になる可能性が無いとは言い切れないのです。そんな相手を何故、首長や我々が守ってやらなくてはならないのです？ この場で快く仲間になってくれると言うなら話は別でしょうけど」

「お前のそういう物言いが、かえって味方を減らすとは考えないのか！

大体、信念無く参加した者が、どれほどあてになると言うのだ。己の意思で戦うからこそ、戦士は戦士たり得、戦友は戦友たり得るのだ。俺は脅されて嫌々仲間になった者なんぞ、恐ろしくて背中を預けようとは思えん」

……怒りのあまり、今度は随分と冷めてきた。まず、アーチルの反論は尤もだ。現に私はこの男を敵と定めた。もし私がストームクローク軍に入りこの男と同じ隊に配属されれば、戦鬪のどさくさに紛れて必ず殺すだろう。

しかし一方で、この場においては従うしかないのかもしれない、とも思い始めている。一つには、私の助勢を知るアーチルの部下が、この場以外にもいること。その者達が、同じ考えを抱かないとは限らない。

一つには、この場を収めたとしても、憤懣を溜めたこの男が嫌がらせ程度の考えで短

慮を起こしかねないこと。恩人に対してこんな馬鹿な真似をする輩だ。自分本位に物事を考え、馬鹿を繰り返す可能性は大である。

業腹ではあるものの、一時的に此奴の言うことを聞いておいたほうが良いだろう。

私は了承の旨を告げた。アーチルは苦虫を噛み潰したような顔をしている。

まったく、下手を打ったものだ。衛兵隊へ貸しを作るより、村長の忠告を重く受け止め迂回すべきであった。要らぬ欲をかけた結果か。

巡回を続ける別働隊さえいなければ、アーチル諸共この男を殺してしまうのが最も面倒の無い解決法であると思うのだが……。仮にここで二人を殺した場合、急ぎ別働隊を追いかけ、そちらも塵殺する必要がある。そうすれば、サルモールと衛兵隊のどちらも消えたことになり、私の預かり知らぬところでサルモールとウインドヘルム首長が外交という名の戦いを始めるだろう。だが私は、別働隊を追うために肝心な、連中の巡回経路を知らない。二人に吐かせることもできようが、嘘をつかない保証も無い以上、やはり現実的ではないだろう。

裏目に出るときはとことん出るのだと、実感させられる。

その後、アーチルと男は村長の家の客室へ、私とラーナルクは居間に布と毛皮を敷いて休んだ。男は自分の思いどおりにことが運び気分が良くなったのか、酒を飲んで早々

に床に就いてしまった。あれだけ上司の顔を潰しておいて、肝の太いことである。

アーチルからは何度も謝罪を受けたが、私は部下の男を敵と定めた。謝罪を受け取りはするが、形だけである。

そんなことより、ことのあらましを迅速かつ正確に首長へ伝えてくれと念を押しした。そして私のストームクローク入りについても撤回をと。

私に言われずとも、アーチルも元よりそのつもりであつたらしい。サルモールの一行が姿を消したとなれば、首長への問い合わせは必ず行われるだろう。その前に事実を報告しておく必要がある、とのこと。道理である。

また、自らとイーストマーチのノルドの誇りにかけて、必ず恩人に報いてみせる、とも。

今日会ったばかりの人間をどれだけ信じられるかという話ではあるが、部下が卑劣だったからといって、その上司まで同じだとは決めつけたくない。何より、一度はアーチルを嫌いではないと思つたのだ。信じてみたい。期待しておこう。

夜半、二人の盗賊が寝ているはずの、馬車を収めた納屋に向かった。隣に増設された、厩と呼ぶには寂しい屋根だけの物置に繋がれたマルツコを撫でて騒がないようにし、納屋の扉を開ける。入ってきたのが私だと分かると、二人は寝具の下で構えていた得物を納めてくれた。こんな状況ではあるが、味方が頼りになるのは有り難い。

二人の内、サデインには明朝に馬車で立ち、ブレックスとプリニョルフへことの子細を伝えてほしいと頼んだ。ついでに外交特使一行の装備を換金してくれればいい。

幸か不幸か、出立を遅らせたことで私は正式にギルドの外部協力者となった。表の人間には関わり合いのないことではあるが、「外部協力者に手を出せばどうなるか」と裏の人間に対し見せしめを行うためにも、ギルドが動く公算は高い。今のギルドにとって、引き締めが必要なのは組織内部だけではないのだ。多少時間はかかるやもしれんが、部下の男が無事に済むことはないだろう。

それにブレックスに話が伝われば、何かしらの手は打ってくれるはずだ。なにせ私だけではなく、ラーナルクの身の安全もかかっている。

馬車の出立について部下の男が何か文句を言うかもしれないが、構うまい。というか、渋々言うことを聞かされている人間が何の手も打たないほうが怪しい。伝手のある商人へ助けを求めた、無駄な足掻きだ、とても思ってくれればいい。そのあたりはアーチルに口裏を合わせてもらおう。

もう一人は引き続き側にももらう。この先何があるのかわからないし、サデインの出立後、再度緊急の連絡に走ってもらうかもしれない。下手を打った以上、僅かな油断もすべきではない。

二〇、ストームクローク入り（仮）

翌朝、案の定というか、御者となりマルツコに鞭を入れようとするサディンに向けて部下の男が物申して来たが、「自分は旦那様の指示で同行しているだけで、この方がストームクローク軍に入ろうが関知するところではありません」とすげなく断り、構わず走り出した。

ではもう一人はと視線を向けられた砦の者は、「ここで旦那を見捨てることなく引き続きお世話を焼いていれば、後々旦那に良くしていただけるのは我々にとって寸法でさ」と異なる意見を述べる。「郷へ戻って主人から抗議させてもらう」と言うのは馬鹿正直なように憚られるにしても、息の合ったことである。とはいえ、それとて表の顔としてらしく見せているに過ぎないのだから、男が「下手な誤魔化しを口にして手を打った」と勘違いしてくれば十分だ。流石に、郷の主人とやらがスカイリムの闇ギルドとは思うまい。「嘘をつくなら、二重三重と徹底的に」とは二人の盗賊の談だ。

にしても、盗賊は演技が上手だ。私も騙されないように気をつけねば。自分の交友関係がほぼほば盗賊で占められていることから目は背ける。……尤も、仮にそんな事態が訪れたとするならば、『そうする』だけの事情があるのだろう。それを鑑みれば、然程

気にもするかも知れない。まあ、どの道、仮定の話である。そのとき、成るように成るのだろう。

鼻を鳴らす男を放置して、一行は歩き出した。

馬車が無くなったことでラーナルクを歩かせる必要が出たが、本人の機嫌は悪くない。どうも馬車の上でじっとしているのは、暇どころか揺れと衝撃に耐え続ける不快な時間だったようで、街道を歩いて進むのが楽しいらしい。

我が身のことより、サデインやマルツコと離れることを惜しんでいた。サデインは自身がそろそろ交替の時期であることを伝えていたため、少し言い聞かせれば納得したようだ。マルツコにしても、すぐに戻って来ることをこつそり伝えようと、抑えてくれた。忍耐強く、性根のまつずくな子だと思う。しかし、今まで一言も愚痴を零さなかったことについては、そこまで我慢しなくても良いのだと伝えた。子供が、少なくとも今のラーナルクが思うところを押し殺す必要はない。

同時に、「愚痴も零さず受け答えも問題ないのだから平気なのだろう」と考えていた己を殴り飛ばしたい。あれが口の重い子だということはわかっていただろうに。無駄に長く生きているくせに、親としてはまだまだ未熟なようだ。ストームクローク軍云々よりずっと落ち込む。

ラーナルクに、疲れたらときは背負うから正直に言うようにと伝え、あまり離れない

程度ならと許し、はしゃぐのを眺めている。

そして私は、息子の愛らしさに目を細めつつ、アーチルの部下の男の存在を意図的に無視するよう振る舞っている。怒りを湛えているのは事実であるし、このくらいは不快感を表明したほうが自然だろう。ギルドが動けば例え時間がかかろうともどうにかなら、と悠長に構えていては、不審がられる。

私に無視されて腹を立てているらしい男は、アーチルに叱り付けられ、不貞腐れている。私としては、静かになるのならなんでもいい。

昼を過ぎて、もうしばらくすれば空が朱に染まるだろうというころ、ウインドヘルムの城壁が見えてきた。

なんといいのか。いかにもな『城塞都市』である。ホワイトランの城壁も見事なものであったが、あれは丘というか、岩山のようになった土地の上に建てられているため、高さの幾らかは元の土地によるものだ。それによくよく見てみれば、市街地の目立たないところでは補修が必要な箇所もあった。

しかしこちらは、河口沿いの平地に堂々と聳えている。人の手で造り上げられた、不可侵の領域である。ストームクローク軍には思うところあるものの、ウインドヘルムの町を造り上げた人々の業には、見事と言わざるを得ない。ラーナルクも、ホワイトラン以外で初めて見る巨大都市に、口をぽかんと開けて驚いている。家からあまり出ない子

供だつたのだから、町を外から眺めたのは初めてなのかもしれない。ホワイトランを出るときは、あまり振り返りたがらなかつたように思うし。

少々険悪な雰囲気である一行だが、私達親子の反応に気を良くしたのか、アーチルも男も少し柔らかい態度になつた。

私達は川の手前にある衛兵の詰め所へ連れて行かれた。どうやら、処遇が決まるまではウインドヘルムの町内には入れずに留め置くつもりらしい。とはいえ、アーチルの計らいにより、入町前、一時的に貴人を待機させるための部屋へ案内された。直に夏だとはいえ、夜は冷える。防寒性の高い部屋に通してくれたことには、素直に感謝したい。

アーチルと部下の男とはここで別れた。部下の男が成す、一度は正式な志願申請として受理される私の入隊手続きを、アーチルが追いかけて撤回する、という形らしい。ややこしいうえにまどろっこしい。

しかしこの愚か者を黙らせるには、「一応は自分の提案が通つた」と思わせる必要がある。初めから書類の手續自体が止められるのならばしているし、もつと言えば昨日頭に過ぎつたとおりとつくに殺している。大きな組織を相手にすると面倒が発生する、と学んだ次第である。巡礼とは違うなあ、とも。

ラーナルクは結局、道程の半ばを過ぎるまで「歩き疲れた」と申告することが無かつ

た。子供の足では辛かろうに、また我慢をしたのかと思つたが、そうではないらしい。皆と同じように歩いて旅をする楽しさが疲れを自覚させず、そのまま体力の限界を超えて歩き続けてしまつたようだ。そのせいで、限界を迎えてからは、多少は足が休まつても自分で歩くことはほとんど無かつた。とはいえ、背負われる、という行為を一度味わつてからは、歩くことより私の背で揺られることに楽しさを見出したらしく、歩かなかつた理由にはそちらもあるのではないかと思う。勿論、その程度でへばる私ではない。

現在ラーナルクは、寝台に腰掛けた私の膝を枕に夢の中で過ごしている。大人が馬車に乗つて旅をするだけでも、それなりには疲れるのだ。子供の足ではしやぎながら歩き、不安定な人の背で揺られ、疲れなはずがない。夕餉が済んでも、今日は早目に休ませてやるべきだろう。

夕餉そのものは、用意ができれば誰かが持つてくるはずだ。部屋は客室とはいえ、ここは曲がりなりにも軍事施設。ただでさえ私達は微妙な立場なのだから、勝手にうろつくのは控えるべきだろう。来なければそのとき対応すればいい。そう考え、それまでは寝台で横にならせておくことにした。

ラーナルクの寝顔を眺めながら頭を撫でていれば、不思議と手持ち無沙汰だと感じることもない。

今日は体力を使い果たしてへばったとはいえ、それらを管理してやるのは大人の役目であるし、そも私の都合で連れ回しているのだ。それに、アーチルはともかく、部下の男がラーナルクに何を言うかわからなかったため、今日の足取りは子供の足に合わせたいとは言い難い。こちらもそれなりに気を使い、休憩をために挟みながらではあつたが、それでも朝から昼過ぎまでは遅れずにきちんと歩き切った。偉いものだと思う。ラーナルク本人が望んで私に付いてきたとはいえ、ホワイトランからこつち、このような奇異なる生活を送ることになるとは、思つてもみなかつたらうに。

しかし以前から思つていたことだが、ラーナルクの、誰かと一緒にいることを好み、誰かと同じ行動を喜ぶ、この植え付けられた性癖とも言える心の問題。これをどうしたものかと思う。

焦つてはならないことくらいは私にもわかる。だから今は、計画に関わることでなければ基本的にラーナルクの好きにさせている。ただ、いつかはその癖を乗り越えさせなければならぬとも思う。あるいは私の杞憂に終わるのかもしれない。成長と共に心の傷が癒え、自我を確立し、健全に発達していくのかもしれない。そうなればいい、そうなつてほしいと願う。だがもし傷が癒える類のものではなく、それ故にこの癖を引きずつたまま大きくなつたとき、子供とは呼べない図体のままいつまでも独り立ちができずにいるかもしれない。

極論ではあるが、それでも問題無いと言えば無いのだ。私は老いるということがないのだから、ラーナルクが死ぬまで面倒を見てやればいい。健全とは言えないかもしれないが、必ずしも世間一般で言う『健全』である必要などあるまい。

ブレックスのおかげで、どこにいても財を稼ぐ手立てはできた。計画が一段落したのなら、世間体を気にする必要も無い。不死人たる私が死ぬときは、亡者となり自我を失ったうえで命を落とすか、自らの生に一片の悔いも無く満足したときだ。ラーナルクを養っているあいだに、私が死に切ることには無いだろう。だからこそその極論である。

しかし、それが喜ばしいことではないのも確かだ。ラーナルク自身の人生として『楽しみ』が少ない。楽しみが少ないからといって、不幸であるとは言わない。何に幸せを見出すかは人それぞれであるし、他者からは一見恵まれない一生であるように思えても、本人は充足感を覚えて命に幕を下ろすかもしれない。ラーナルクの幸せを私が決めるなどという、そんな傲慢な親にはなりたくない。

だが、何気ないことに幸せを見出し、小さな幸せでも心から満足できる人間というのは、極々稀である。だからこそ、人は与えられたもの以上を求めて苦しみ、何事かを成すために修練を重ね、己を昇華させることを美德とする。何より、あらゆる物事において多くの場合、受動的であるより能動的であるほうが、幸せに繋がる『楽しみ』を見つけやすい。

子を初めて持つ私の自問自答は際限なく続き……扉がノックされ、夕餉が持ち込まれたところで閃いた。私は多くの事柄を力によつて解決してきた。力が無くて困ることはあつても、力が有つて困ることは少ない。必要が無ければ、振るわずにいればいいだけのこと。力を持つが故に面倒に巻き込まれたり、力に吞まれることもあるが、それは本人の自制心の問題であり、力の有無と直接的には関係がない。

ということ、ラーナルクを鍛えることにした。そのあいだにラーナルクの性癖にもいくらか変化が訪れることだろうし、何より力が付けば自信に繋がる。案外それが諸々の悩みを解決してくれるやもしれない。幸い、砦や旅の途中に砦の者やサディンから受けた手解きで、それなりの体力は付き、ままごと程度の投擲術と短剣術は使えるようになっていた。私が気をつけていれば、壊してしまふこともないだろう。多分。……いや、初めのうちは、誰かに監督していてもらつたほうがいいかもしれない。そうだ、そうしよう。

私はラーナルクを起こし、二人で夕餉に舌鼓を打った。腹が膨れたラーナルクは再び眠たくなつたようで、予定どおり早目に就寝と相成つた。私はというと、ラーナルクを起こさないよう注意しながら、少しでも疲れが取れればと、足腰を揉んでやっている。今日はがんばつたのだ。この程度はしてやりたい。

翌日の昼前、一人の子供を連れ、アーチルが沈痛な面持ちで訪ねてきた。曰く、しくじった、と。そして私達を急かすように詰め所から連れ出し、馬車に乗せて走り出した。本人は別で馬に乗っている。

移動しながらしきりに詫言を入れられるが、それだけでは全く要領を得ない。「誠意を見せたいのなら、包み隠さず全てを話せ。長くなつても構わん」と少々突き放した物言いをして、やつと少しはまともになつた奴に顛末を催促をした。

奴はきまり悪そうではあるが、ぼつぼつと少しずつ話し始めた。

「あまり繰り返しても鬱陶しいだけだろうが、これで最後にする。本当にすまない。……結論から言えば、下手を打った。

俺はお前達と別れてすぐ、首長に直接報告しようと、時間をいただけるよう取り次ぎに伝えたんだ。しかし偶々首長は他の要人との会談を行っており、すぐには顔を出せない、と返された。だがこちらにも緊急かつ重要な話だ。首長の会談が終わるまで控室で待たせてもらう、と俺はその場に居座つた。すると取り次ぎが、『そんなに緊急かつ重要なら、首長の腹心と呼んでくる』と駆けて行つてしまつたんだ。

彼からすれば良かれと思つてのことだろうが、そこに登場したのが『石拳のガマル』。先代様から使える重臣で、首長にとつても腹心中の腹心と言える。結果、俺は彼に

捕まり洗いざらい吐かされた。彼は強引な勧誘にこそ眉を顰めたが、『其奴の力はストームクロークと共にあるべきだ』と言って、自らが率いる隊への編成手続きまで済ませてしまった。俺の最大の失敗がこれだ。

彼が下した決定、ましてや軍事方面における案件とあれば、覆ることはほとんど無い。言い纏つても馬耳東風だ。

俺は焦った。焦って焦って頭がどうにかなったのかも知れない。俺は人目を憚つて、翌朝首長へ目を通していただく書類がある保管庫へ忍び込み……書類を改竄した。そしてそれを『本来であればとうに執行されていなければならぬ、遅延をきたした命令』として急ぎ処理するよう俺の名で指示を出した。そこまでの段階で、俺は妙な解放感に支配された。全能感といつてもいい。

翌朝、つまりは今日だが、首長が重臣達と行う朝の定例会議に乗り込んで、この子細を話した。サルモール一行との件。お前への間違つた勧誘。ガルマルの裁定。俺の軍機違反。その全てを。ちなみに、書類上ではあるが、その時点で既に、お前達はこの町を発つたことになっている。

重臣達からは重大な規律違反を犯した俺を処刑しろと怒号が飛んだが、首長がそれを止めてくださった。『それほどの大事、出来心やもしれんが、理由あつてのことである。話せ』と。

俺はここが踏ん張りどころだと思つて、必死に思いの丈を伝えた。その場では色々々と語つたが、要すれば『信義に悖る行いは、首長の大願にとつても、ストームクローク軍にとつても、スカイリムに住む全てのノルドにとつてもためにならない。今このとき、首長が件の旅人へどのような対応を取るかによつて、後々の何もかも全てが良きに傾くか、悪しきに傾くかが決まる。どうかご英断を』と。

首長は暫く黙つて考えたのち、道理である、と短く零して、俺の忠言を聞き入れてくたさつた。そこでほつと気を抜いたのがいけなかつたとは思いたくないんだが……首長が続けるんだ。『お前は信義のためであれば、その者がどれほどつまらぬ男であつても同じ行動をとつたのだから。だが幾らかは、男の非凡さに感化されたのではないか？』と。つまりはガルマルどころか、お前の存在を首長までもが気にし始めてしまった。そこからまた俺は必死に説得して、お前には然程重要ではない任地で暫く軍のために働いてもらう、というところに落ち着いたんだ。面倒をかけるが、そこでほとぼりが冷めるのを待つていてほしい。首長もお前を解放することは吝かではなく、引き留めてるのは言つてみれば単純な人材収集欲とも言える我儘からだ。説得を続けければ、諦めてくださるだろう。

……ストームクローク軍編入を撤回するという約束を叶えられなかつたこと、最後に言つたがやはり詫びさせてくれ。本当にすまなかつた」

アーチルの長い独白を聞いて私の胸中に浮かんだのは——

——この男、無茶をし過ぎなのでは？ というものだった。

あまり神妙な態度で切り出すものだから、もつと状況は如何ともし難く、この男は流されるまま長いものには巻かれていたのかと思つた。しかし実態は、己と種族の誇り、それに首長への忠節に命をかけ、出来得る限りのことをしてくれたように思う。

寧ろ何故、この男はここまで恐縮しているのだろうか。

たしかに、結果として私との約束を守ること叶わなかったが、状況が然程悪いとは思えない。首長はこちらの道理を認めたくえで、少々子供じみた駄々をこねているだけだ。計画が遅れるのが痛いと言えば痛い、その程度は首長とアーチルの顔を立ててやつても良いだろう。おそらく、そのほうが後々良い結果となるはずだ。馬車に同乗している砦の者に目配せしても、察して領いてくれた。

以上から私としては、大満足、とはいかずとも特に不満は無いのだが……アーチルは約束を守れなかった一点について、非常に気に病んでいる。生真面目過ぎないだろうか。他人事ながら少々心配になる。

そのあたりを伝えようと口を開きかけたが、まだ続きがあるらしい。

「そこでだ。お前の任地に、私の子を連れて行つてくれ。名はトルドス。今回の経緯は伝えてあるし、俺の思いも、こいつの使命も言い含めてある。そのときには好きにして

くれて構わない。これが俺にできる最大限の詫びの印だ。かえって面倒だと思うかも知れんが、呑んでくれると有り難い」

要するに人質ということか。『首長に私を諦めさせる』という約束が果たされなかった場合、最悪殺してしまっても良い、と。私が思うに首長の説得くらいならどうということはないのだろうが、ガルマルだったか？ 他にも強硬派の重臣が横槍を入れて来た場合、どうなるかはわからない。そのため、と。

ラーナルクを引き取つてから、以前より子供に対して当たりが柔らかくなつたと自覚する私だ。あまりこういう話は好みでないのだが、当の息子もその気にいるらしい。ラーナルクより少し上、といった程度の年で、大したものである。既に戦士の教育を受けているのだろうか。となれば、言うだけ野暮か。幼くとも戦士であると主張するのなら、それは尊重せねばなるまい。

任地については、ウインドヘルムから馬車で南東へ一日程度進んだところにある、鉱山採掘村だそうだ。

武器の生産量を徐々に増加させているストームクローク軍にとって、鉱山は資源確保に重要な地だ。それなりには賑わっているのだろう。あばら屋に住まわされてラーナルクが風邪を引く、ということもあるまい。そのへんの開拓村ではないあたり、アーチルがせめてもと気を遣つたのだろう。悪くない。

……実を言うと、一件についてブレックスに使いを出すまでもなく、砦の者が少々伝手を使い首長に働きかけていたのだとか。曰く、万一の事態あれば、自分の裁可仰ぐ必要なく、最良と思われる行動を取れ、と。その結果、砦の者は夜の内にウインドヘルムの有力者にあたり、首長と面会させ、ことを穏便に済ませるよう話をつけたのだとか。このあたりは、組織として運営するギルドより、一人一人の裁量が大きいブレックス一味の即応性が役立った形であろうか。何にせよ助けられた。交替の際には、私が礼を言っていたと伝えてもらうことにした。当然、本人にも礼は言った。「役目ですからなんてことはありやしません」とは功労者たる砦の者の談である。

閑話休題。内を固めたい首長は有力者を無下にするわけにもいかず、要求も然程重いものではない。寧ろ有力者への貸しとして呑むだろう。なんなら、自らの指導力を誇示するため、強硬派を率先して抑えるくらいはしてのけるかもしれない、とのことだった。ウルフリック・ストームクローク、派閥の領袖に立つだけあって、それなりにはやり手なようだ。扇動力だけの男ではないらしい。

私は否やの無いことをアーチルへ伝えた。

ほっとした顔を見せたかと思うと、今度は再び神妙な面持ちを見せた。忙しい男である。

「それから、あの馬鹿についてだが……」

ああ、なるほど、そちらもあつたな。私達を面倒事に巻き込んだ張本人であるのだから、話題としては重要だな。目の前の男の意外な大冒険の印象が強くて、一時、頭から抜け落ちていたが。それに、ギルドが動く以上、私の中では済んだこと、という認識が強い。私とラーナルクの安全に比べれば、優先度は極めて低い。

聞くに、男はウインドヘルムの豪商の息子らしく、根底ではストームクローク軍と私に良かれと思つて行動した、正しく確信犯だったようなので、直接的にはせいぜい首長からお叱りの言葉を受けて終わりだろうと。まあ、強硬派が眉を顰めながらもそれを採用してしまっているあたり、そんなものだろう。

「そちらについては、私の友人達が動いてくれている。何もしくなくていい」

私のすました様子を不審に思ったのか、アーチルは顔を近づけ声を落とし、眦を釣り上げて問うてくる。

「……殺すのか？」

「いや、そういったやり口は彼等の流儀に反するらしいのでな。安心するといい」

そう言うのと、しばし表情をころころと変えながら迷つたような顔をして、終いには脱力してしまった。殺されるのと、殺されたほうがマシな目に遭うのと、どちらが有情であるか悩んだのだろう。矛を納めてくれたあたり、一応の納得はしたのだろうが。

「いやはや、初めは優れた戦士と知り合つたかと思つたが、とんだ食わせ者だったな。

……採掘村でのことだが、錬金術が使えるのは本当だよな？」

勿論である。そのために私は効率主義のデーモンによって、字の読み書きと錬金術の詰め込みという拷問染みた促成教育を受けたのだ。というか、立ち寄った村々で実演してみせたらうに。アーチルがそれどころではなかったのは理解できるが。

「私がお前に嘘を言ったことはまだ無いはずだが？」

私の言に対し、アーチルは今日初めて皮肉げに笑ってみせた。

『『義によって』、は嘘だろう？』

……ばれていたか。

「すまない、失念していた。たしかにそれは嘘だ。あのときは、サルモールの愚か者から攻撃を受けた私怨と、衛兵隊に貸しを作りたい打算から動いた。最もお前達を混乱させずに済むかと思いい口にしましたが、騙ったことについては謝ろう」

謝罪を発する側と受ける側が入れ替わったことが面白かったのか、アーチルはカラカラと笑う。

「この分では、貴殿の言うノルド的美徳についても、幾らか怪しいのではないかな？」

……いやいや、構わんとも。冗談だ。それにどうしてだろうな。お前に助けられた直後よりも、こうして話している今のほうが、お前という人間を好ましいと思っている。俺は自らに課すだけではなく、他者からも認められる正しきノルドでありたいと思ってい

るはずなのに、そこから外れるお前が何故か嫌いになれない」

それはお互い様である。私とて、眼前の男を一度は面倒を嫌って部下諸共殺そうと考えたのだ。つい二日前のことである。悪い男ではないと感じつつも、その程度のものだった。しかし今は、気安く交わす会話が心地良い。

「アーチル。我が父母と信仰する太陽にかけて誓おう。ことがどう転ぼうとも、お前の息子は無事に返すと。まあそれまでのあいだは、倅の遊び相手として暫く借りておくことにするよ」

アーチルは破顔して、握手を求めてきた。私はそれに応じ、他に二三言葉を交わしてから、馬車は任地へ、アーチルはウインドヘルムへと戻っていった。

計画に遅れが生じるのは面白くはないが、ラーナルクを鍛えてやる時間ができたと思えば、全くの無駄な時でもあるまい。それに今日は気持ちの良い陽気である。急ぐ旅でもなし。私は馬車の荷台に布と毛布を敷き、子供二人と共に並んで寝転び、到着を待つことにした。人生、成るように成るのだ。

ウインターホールドにて一人の男が、まだ日も高いというのに寝台で伏せている。

壮年などとうに過ぎ、中年とも呼べなくなり、老年、それも老境に入った力無き老人である。

そこいらの物乞いが聞けば、怒りのあまりに廃材でも持ち出して「何が『力無き』か」と殴り掛かるやもしれない。なにせ老人は、首長会議への参加権を持つ、ウィンターホールドの首長その人なのだから。しかし老人は自らをそう自覚していたし、近しい人間からも、概ね同様の認識を持たれている。

たしかに、庶民に比べれば広い家にも住んでいる。銀器を始めとした調度品も多少は揃えている。しかし、その程度の暮らしは、ウィンターホールド以外の諸都市であれば、豪族、豪商程度でも、わけもなく整えることができる環境である。首長の暮らしぶりとしては、侘しいことこの上ない。

老人は、その生まれが建前上持つ権威とは裏腹に、多くのものを持たないまま生を受けた。

老人が産まれる、ほんの少し前のことである。ウィンターホールドに大災害が起きた。大きな揺れを感じはしたものの、それ自体に被害はほとんど無かったため、当時の首長を始めとして、不思議なこともあるものだと言へるほどとした。しかし、時を置かず海が押し寄せたのだ。

誰にも、どうすることもできなかった。海は幾度となく町に押し寄せ、その度に土を、

岩を、陸地そのものを削り取り、当然の如くそこに居た人々や建てられた家々を呑み込んでいった。大学も、己が居城を守らんと、魔法結界が正しく作動しているかの確認に奔走している有様で、余裕などは全く無かった。古の英雄とて、この未曾有の事態の前では同じく無力であつただろう。

生き残つた皆が呆然としていた。そして現実感の無いまま、ある事実に気付いてしまった。寒冷地であるスカイリムの中で最も地域の多くを凍土に覆われたウィンターホールドにおいて、家無くして生きていくことが可能であろうか、と。答えは誰に教わるでもなく自明であつた。否、である。

誰も彼もが、ふわふわと足元の定まらない奇妙な浮遊感を覚えていた。心の弾む躍動感などありはしない。文字通り地に足がついていないのだ。それ故か、いち早く立ち直つた首長の号令により、家を持つ者は家を失つた者達をそれぞれ自宅へ招いた。首長自身も、砦と邸宅が流されたため、多少裕福な者の家に転がり込んだ。市民としては、上位者の声があつたとはいえ、深く考えないままにわかりやすい善性に突き動かされた、というのが実状である。それ故か、暫くの後には住民同士で争いが絶えなくなつた。

町全体が大きな被害を受けたのだ。運良く直接的被害に合わなかつた者でさえ、生活は徐々に苦しくなる。そこに、家を持たず多くは食ひ扶持を稼ぐ手段すら流されてしまった者達が同居しているのだ。初めは互助精神で招き入れた同じ町の仲間を、いつし

か厄介者と感じるようになった。家を持たない者達としても言い分はある。面倒をかけているのは承知していても、現状でできる限りのことはしているのだ。これ以上どうしろと？ 寒風吹き荒ぶ野外で過ごし、朝には冷たく硬くなっているとしても？

町への被害の他にも、それらの閉塞感や険悪な空気に耐えかねて、多くの者がウインターホールドを去っていった。

かつてウインターホールドは魔術大学と共に歩み、スカイリムの中でも栄えた都市であった。しかし二百年近く前に起きた『オブリビオンの動乱』により魔術師そのものへの不信感が高まった。それを受けてノルドを中心に、魔術も魔術師も信用ならない。ノルドは鋼と己が肉体こそを信ずる。そういった世論が形成されていった。元々あった気風を叫ぶ声が相対的に大きくなった結果である。そこに此度の大災害だ。長い時をかけて培われた不信感が「大災害は大学が引き起こした」という噂を生み、ウインターホールドと魔術大学の仲は決定的に引き裂かれた。

ウインターホールドは大学の影響で他の土地に比べて非ノルドが多く住まうとはいえ、あくまでそれは比較的話で、主な住民はノルドである。またスカイリムの一都市であり、地方を運営する首長一族もノルドである。そのような土壌もあり、一度引き裂かれた仲を修復することは生半ではなく、事実、大災害から現在まで、成し遂げられてはいない。老人は、町が加速度的な衰退を見せ始める、その時分に生を受けた。

老人はウインターホルドの繁栄など知らない。現在の住処ですら、大崩壊後に建てられたものであり、大崩壊以前とは比べるべくもない。しかしそれらは、老人には不幸なこと、老人が『老人』ではなかった当時の年嵩の者達からすれば、忘れ去るには記憶に新しかったのだ。影も形も無い、現状ではありもしない栄光の日々。そのような昔話を聞かされて育った老人は思った。「では、何故今の我らは貧しいのか」と。

老人とて馬鹿ではない。理屈では理解している。だからこそ声を大にして言いたかった。叫びたかった。懇願したかった。「俺に、在りし日の話をするのはやめてくれ」と。だがそれは、ウインターホルドを治める者として、許される行いではなかった。老人は呪いとも言える話に耳を塞ぐこともできず、いつしか憎悪と、それすらも叶わぬと理解してからは諦念、冷笑、絶望を友に人生を過ごした。

どうかすれば、ウインターホルド再興の道もあったのかもしれない。しかし、首長の息子に生まれたというだけの凡人であった老人には、それを成し遂げることはできなかった。老人は、『持たざるもの』であった。

そんな老人を寝室の屋根裏から覗く者がいる。その者は、老人とその周囲を監視するよう指示されていた。今はまだこのまま、時が来るまでは、と。

二〇改、アーチルの大冒険

翌朝、案の定というか、御者となりマルツコに鞭を入れようとするサディンに向けて部下の男が物申して来たが、「私は私の主人の指示で同行しているだけで、この方がストームクローク軍に入ろうが関知するところではありません」とすげなく断り、構わず走り出した。

ではもう一人はと視線を向けられた砦の者は、「ここで旦那を見捨てることなく引き続きお世話を焼いていけば、後々旦那に良くしていただけるのは我々って寸法でさ」と異なる意見を述べる。「郷へ戻つて主人から抗議させてもらう」と言うのは馬鹿正直なようで憚られるにしても、息の合ったことである。とはいえ、それとて表の顔としてらしく見せているに過ぎないのだから、男が「下手な誤魔化しを口にして手を打った」と勘違いしてくれば十分だ。流石に、郷の主人とやらがスカイリム一の闇ギルドとは思うまい。「嘘をつくなら、二重三重と徹底的に」とは二人の盗賊の談だ。

にしても、盗賊は演技が上手だ。私も騙されないように気をつけねば。自分の交友関係がほぼほば盗賊で占められていることから目は背ける。……尤も、仮にそんな事態が訪れたとするならば、『そうする』だけの事情があるのだろう。それを鑑みれば、然程

気にすることも無いのかもしれない。まあ、どの道、仮定の話である。そのとき、成るように成るのだろう。

鼻を鳴らす男を放置して、一行は歩き出した。

馬車が無くなったことでラーナルクを歩かせる必要が出たが、本人の機嫌は悪くない。どうも馬車の上でじつとして居るのは、暇どころか揺れと衝撃に耐え続ける不快な時間だったようで、街道を歩いて進むのが楽しいらしい。

我が身のことより、サデインやマルツコと離れることを惜しんでいた。サデインは自身がそろそろ交替の時期であることを伝えていたため、少し言い聞かせれば納得したようだ。マルツコにしても、すぐに戻って来ることをこつそり伝えると、抑えてくれた。

忍耐強く、性根のまっすぐな子だと思う。しかし、今まで一言も愚痴を零さなかつたことについては、そこまで我慢しなくても良いのだと伝えた。子供が、少なくとも今のラーナルクが思うところを押し殺す必要はない。

同時に、「愚痴も零さず受け答えも問題ないのだから平気なのだろう」と考えていた己を殴り飛ばしたい。あれが口の重い子だということはわかっていただろうに。無駄に長く生きていくくせに、親としてはまだまだ未熟なようだ。ストームクローク軍云々よりずつと落ち込む。

ラーナルクに、疲れたときは背負うから正直に言うようにと伝え、あまり離れない程

度ならと許し、はしやぐのを眺めている。

そして私は、息子の愛らしさに目を細めつつ、アーチルの部下の男の存在を意図的に無視するよう振る舞っている。怒りを湛えているのは事実であるし、このくらいは不快感を表明したほうが自然だろう。ギルドが動けば例え時間がかかろうともどうにかなら、と悠長に構えていては、不審がられる。

私に無視されて腹を立てているらしい男は、アーチルに叱り付けられ、不貞腐れている。私としては、静かになるのならなんでもいい。

昼を過ぎて、もうしばらくすれば空が朱に染まるだろうというころ、ウィンドヘルムの城壁が見えてきた。

なんとというのか。いかにもな『城塞都市』である。ホワイトランの城壁も見事なものであったが、あれは丘というか、岩山のようになった土地の上に建てられているため、高さの幾らかは元の土地によるものだ。それによくよく見てみれば、市街地の目立たないところでは補修が必要な箇所もあった。

しかしこちらは、河口沿いの平地に堂々と聳えている。人の手で造り上げられた、不可侵の領域である。ストームクローク軍には思うところあるものの、ウィンドヘルムの町を造り上げた人々の業には、見事と言わざるを得ない。ラーナルクも、ホワイトラン以外で初めて見る巨大都市に、口をぽかんと開けて驚いている。家からあまり出ない子

供だったのだから、町を外から眺めたのは初めてなのかもしれない。ホワイトランを出るときは、あまり振り返りたがらなかったように思うし。

少々険悪な雰囲気である一行だが、私達親子の反応に気を良くしたのか、アーチルも男も少し柔らかい態度になった。

私達は川の手前にある衛兵の詰め所へ連れて行かれた。どうやら、処遇が決まるまではウインドヘルムの町内には入れずに留め置くつもりらしい。とはいえ、アーチルの計らいにより、入町前、一時的に貴人を待機させるための部屋へ案内された。直に夏だとはいえ、夜は冷える。防寒性の高い部屋に通してくれたことには、素直に感謝したい。

アーチルと部下の男とはここで別れた。部下の男が成す、一度は正式な志願申請として受理される私の入隊手続きを、アーチルが追いかけて撤回する、という形らしい。ややこしいうえにまどろっこしい。

しかしこの愚か者を黙らせるには、「一応は自分の提案が通った」と思わせる必要がある。初めから書類の手続自体が止められるのならばしているし、もつと言えば昨日頭に過ぎつたとおりとつくに殺している。大きな組織を相手にすると面倒が発生する、と学んだ次第である。巡礼とは違うなあ、とも。

ラーナルクは結局、道程の半ばを過ぎるまで「歩き疲れた」と申告することが無かつ

た。子供の足では辛かろうに、また我慢をしたのかと思つたが、そうではないらしい。皆と同じように歩いて旅をする楽しさが疲れを自覚させず、そのまま体力の限界を超えて歩き続けてしまったようだ。そのせいで、限界を迎えてからは、多少は足が休まっても自分で歩くことはほとんど無かつた。とはいえ、背負われる、という行為を一度味わつてからは、歩くことより私の背で揺られることに楽しさを見出したらしく、歩かなかつた理由にはそちらもあるのではないかと思う。勿論、その程度でへばる私ではない。

現在ラーナルクは、寝台に腰掛けた私の膝を枕に夢の中で過ごしている。大人が馬車に乗つて旅をするだけでも、それなりには疲れるのだ。子供の足ではしやぎながら歩き、不安定な人の背で揺られ、疲れなはずがない。夕餉が済んでも、今日は早目に休ませてやるべきだろう。

夕餉そのものは、用意ができれば誰かが持つてくるはずだ。部屋は客室とはいえ、ここは曲がりなりにも軍事施設。ただでさえ私達は微妙な立場なのだから、勝手にうろつくのは控えるべきだろう。来なければそのとき対応すればいい。そう考え、それまでは寝台で横にならせておくことにした。

ラーナルクの寝顔を眺めながら頭を撫でていけば、不思議と手持ち無沙汰だと感じることもない。

今日は体力を使い果たしてへばったとはいえ、それらを管理してやるのは大人の役目であるし、そも私の都合で連れ回しているのだ。それに、アーチルはともかく、部下の男がラーナルクに何を言うかわからなかったため、今日の足取りは子供の足に合わせていたと言ひ難い。こちらもそれなりに気を使い、休憩をために挟みながらではあつたが、それでも朝から昼過ぎまでは遅れずにきちんと歩き切つた。偉いものだと思う。ラーナルク本人が望んで私に付いてきたとはいえ、ホワイトランからこつち、このような奇異なる生活を送ることになるとは、思つてもみなかつたらうに。

しかし以前から思つていたことだが、ラーナルクの、誰かと一緒にいることを好み、誰かと同じ行動を喜ぶ、この植え付けられた性癖とも言える心の問題。これをどうしたものかと思う。

焦つてはならないことくらいは私にもわかる。だから今は、計画に関わることでなければ基本的にラーナルクの好きにさせている。ただ、いつかはその癖を乗り越えさせなければならぬとも思う。あるいは私の杞憂に終わるのかもしれない。成長と共に心の傷が癒え、自我を確立し、健全に発達していくのかもしれない。そうなればいい、そうなつてほしいと願う。だがもし傷が癒える類のものではなく、それ故にこの癖を引きずつたまま大きくなつたとき、子供とは呼べない凶体のままいつまでも独り立ちができずにいるかもしれない。

極論ではあるが、それでも問題無いと言えば無いのだ。私は老いるということがないのだから、ラーナルクが死ぬまで面倒を見てやればいい。健全とは言えないかもしれないが、必ずしも世間一般で言う『健全』である必要などあるまい。

ブレックスのおかげで、どこにいても財を稼ぐ手立てはできた。計画が一段落したのなら、世間体を気にする必要も無い。不死人たる私が死ぬときは、亡者となり自我を失ったうえで命を落とすか、自らの生に一片の悔いも無く満足したときだ。ラーナルクを養っているあいだに、私が死に切ることは無いだろう。だからこそこの極論である。

しかし、それが喜ばしいことではないのも確かだ。ラーナルク自身の人生として『楽しみ』が少ない。楽しみが少ないからといって、不幸であるとは言わない。何に幸せを見出すかは人それぞれであるし、他者からは一見恵まれない一生であるように思えても、本人は充足感を覚えて命に幕を下ろすかもしれない。ラーナルクの幸せを私が決めるなどという、そんな傲慢な親にはなりたくない。

だが、何気ないことに幸せを見出し、小さな幸せでも心から満足できる人間というのは、極々稀である。だからこそ、人は与えられたもの以上を求めて苦しみ、何事かを成すために修練を重ね、己を昇華させることを美徳とする。何より、あらゆる物事において多くの場合、受動的であるより能動的であるほうが、幸せに繋がる『楽しみ』を見つけやすい。

子を初めて持つ私の自問自答は際限なく続き……扉がノックされ、夕餉が持ち込まれたところで閃いた。私は多くの事柄を力によつて解決してきた。力が無くて困ることはあつても、力が有つて困ることは少ない。必要が無ければ、振るわずにいればいいだけのこと。力を持つが故に面倒に巻き込まれたり、力に呑まれることもあるが、それは本人の自制心の問題であり、力の有無と直接的には関係がない。

ということ、ラーナルクを鍛えることにした。そのあいだにラーナルクの性癖にもいくらか変化が訪れることだろうし、何より力が付けば自信に繋がる。案外それが諸々の悩みを解決してくれるやもしれない。幸い、旅の途中に砦の者やサディンから受けた手解きで、それなりの体力は付き、ままごと程度の投擲術と短剣術は使えるようになった。私が気をつけていれば、壊してしまふこともないだろう。多分……いや、初めのうちは、誰かに監督してもらつたほうがいいかもしれない。そうだ、そうしよう。

私はラーナルクを起こし、二人で夕餉に舌鼓を打った。腹が膨れたラーナルクは再び眠たくなつたようで、予定どおり早目に就寝と相成つた。私かというと、ラーナルクを起こさないよう注意しながら、少しでも疲れが取れればと、足腰を揉んでやっている。今日はがんばつたのだ。この程度はしてやりたい。

アーチルは一介のストームクローク軍兵士である。名家の生まれでもなければ、特別優秀な戦士であるというわけでもない。

しかしその実直な仕事ぶりとは、何より『ノルドの体現者』たらんとする姿勢が多くの者に評価され、ここウインドヘルムにおいては多少名の通った軍人である。それは、首長、ウルフリック・ストームクロークの耳に入るほどでもあった。

そしてアーチルは、此度の『旅の錬金術師を名乗る男の処遇』を、可及的速やかに正さねばならないと考えた。

ノルドは信義と強さを重んじる。その体現者たらんとする人間として、サルモール一行との争いに助勢し、素晴らしき腕前を披露した彼の錬金術師について、正當に報いなければならぬと切実に思った。これが成されないのならば、自分達は、自らの口で非難している帝国と変わらない存在であるとすら思う。タロスが統一したタムリエルの正統後継国家でありながら、サルモールに敗れ、ましてや肩を並べ戦ったハンマーフェルを売り渡し、スカイリムの誇りに傷を付けるなど、何のための帝国か。何のための統一国家か。『スカイリムは帝国の一地域である』と主張するのならば、帝国は寄り親で、スカイリムは寄り子ということになる。外敵から子を守るでもなく、子に助けられた挙

げ句に子を抑えつける親が、親足り得るとでも思っているのか。耳長の干渉を唯々諾々と受け入れ、結果ハンマーフェルは自力で独立。スカイリムでも我が首長が音頭を取って同様の兆しが見える。どう転ぼうとも、タロスの齎した『強き帝国』が蘇るのは、遙か先のことだろう。

思考がそれた。とにかく今は、件の男の処遇をどうにかしなければならぬのである。考え事をしながら首長の執務室へ歩いていると、廊下に控えていた首長の側仕えが立ち上がりこちらに気付いて近寄ってきた。

「これはアーチル殿。如何なさいましたかな？」

「悪いが緊急の用だ。すぐにでも閣下へお目通り願いたい」

側仕えの表情が曇る。アーチルと側仕えは別段険悪な仲ではない。それがこの表情ということは何か面倒事か、と嫌な予感がアーチルの脳裏によぎった。

「……実は間の悪いことに、閣下は現在ソリチュードから来た貴族と会談中です。表向きは貿易の話ですが、内実は我等の軍拡について探りを入れに来たのでしよう。既に予定を少々過ぎています。今暫くかかるやもしれません」

こちらは急ぎだというのに。それにしてもブルーパレスのもやしだと？ 大方、ドル城の帝国軍が直接詰問に来ては関係が悪化しかねないため、言われるがままに態々足を運んだのだろう。ノルドの面汚しよ。帝国の走狗になんぞ落ちぶれて、恥ずかしくな

いのか。

だが首長が応対しているというのなら、アーチルが踏み入っても主の顔を潰すだけだ。業腹ではあっても待機せざるを得まい。アーチルは側仕えが使っていた椅子の隣に腰掛け、ウルフリックを待つ旨を伝えた。幾らか気まずい時間が流れたが、側仕えは突然、閃いた、という顔で立ち上がり、言うや否や駆けて行ってしまった。終わりのほうは声掛けられたアーチルにすら聞き取れないほどのせつかちさである。

「何うに、何やら重要かつお急ぎの様子。……私は本来、常にこの場にて待機し、閣下のお世話を務めるが役目。しかしそれも時と場合によりましよう。真に閣下へ忠義を果たすのならば、一時の叱責を覚悟してでも動くべき時もあるはずです。私にお任せください！ 代わりの方をすぐに連れて参りますので！」

アーチルは呆気に取られていた。実のところ、側仕えもまた、ウルフリックがソリチュード貴族の相手に時間を浪費している中、自らはただ座って待機しているしかない状況に対し、憤懣を溜めていたのだ。結果として、側仕えは驚くべき速さで駆けていった。

アーチルがそんな悠長に構えていたのが悪かったのだろうか。側仕えの連れてきた人物を目の当たりにしたとき、ことが不味いほうへ転ばないか、アーチルは不安になった。眼前にいるのは『石拳のガルマル』。先代首長の懐刀であり、就任から数年しか経つ

ていない当代ウルフリックの最も頼れる腹心である。ウルフリックを除けば最高軍事司令官であり、なるほど、側仕えが連れてくるに不足の無い人物と言える。……今のアーチルが訴えたい事柄に相応しい御仁かは何とも言えないところだが。

アーチルは側仕えに礼をいい、ガルマルへ件の錬金術師についてのあらましを語った。少々強引なところがあるとはいえ、この男もまた、正しきノルドであると信ずるが故に包み隠さず。

「……名までは覚えておらんが、其奴、たしか甘ったれたぼんぼんだったか？ 入隊時の訓練でしごいてやった覚えがある。とても許せるものではないな。忠義故とはいえ、恩人を脅すなどノルドどころか男の風上にも置けん不屈き者だ。安心しろ。その件は私が責任を持つて必ず処罰する。表向き軽くなるうとも、今後其奴がどれだけ功を上げようとも、軍の中枢に上ることは有り得んだらう。そしてそれらは全て私の名で行う。お前が逆恨みされてもいかなからな。文句を言うようなら、自慢の拳で黙らせてやるわい」

朗らかに笑い、部下を労うガルマルを見て、アーチルはほつと一息ついた。「私はガルマル殿を少々誤解していたかもしれない。やはり彼もまた、正しきノルドであったのだ」とアーチルは感じ入った。

「しかしその錬金術師とやら。このまま物別れとするのはあまりに惜しいな。子供や従

者を下げ一人で吶喊する勇氣と義侠心。お前の隊が苦戦する戦況を一変させる腕前。そして鍊金術にまで精通しているとは。素晴らしき戦士であり、素晴らしきノルドである。この時期にそのような男と巡り合ったのも、タロスの思し召しであろう。

……決めたぞ。その男は私が預かろう。ウインターホールドで鍊金術師として働くのが望みとはいえ、それだけの力量、在野に埋もれさせるにはあまりにも惜しい。せめて説得する時間くらいは欲しいものだ。なに、お前の話どおりのノルドであるなら、暫く行動を共にすれば、我らストームクロークの理念に理解を示し、入隊を快諾してくれることだろう。そのときが楽しみである！

それにだ、先祖の故郷へ貢献するなら、何も自ら赴かずとも叶うことだろう。我が軍で力を振るい、得た給金を送れば良いのだ。其奴の望みとはちと形が違うかもしれないが、一介の鍊金術師として住民の傷や病を癒やすより、そちらのほうが何かと良いのではないかの。彼の町への貢献という意味では、願いに沿うだろう」

ガルマルは肩で風を切りながら、機嫌良く去りつつあった。その場に残されたアーチルは一時呆け……正気に戻ってすぐに彼を追いかけた。

ガルマルの言にも理はある。しかしものには手順というものがある。件の鍊金術師は現状、ストームクロークへの入隊を望んでいない。それを無視してことを進めるのは、悪く言えば裏切りである。男を高く買うのであれば、入隊云々は横に置いたうえで

持て成し、礼を伝え、それから勧誘をすべきだ。ガルマルの言う提案もそのときに伝えれば良い、とアーチルは言い募る。

しかし己の考えを否定され、「私の珍しく浮かんだ妙案にケチを付けるか！」と怒鳴られてしまえば、一介の兵士にできることは無い。一度頭に血が上ったガルマルを諫めることができるのは、未だ手の空かない首長以外には存在しないのだ。

アーチルは済まなそうにしている側仕えに気にするなど伝え、改めて礼を言った。そのあと、彼の記憶はいまいちはつきりしていない。夕餉を取ったような、とつていないような。

運の悪いことに、ウルフリックは会談を済ませたあとも、続けざまに他の貴族や重臣と会議を行っており、アーチルが緊急だと伝えても面会が叶うことは無かった。翌朝一番の面会は約されたものの、それではガルマルの提案が決定事項として処理されてしまふ。

気落ちしたアーチルの頭に浮かぶのは、恩人にどんな顔をして詫げればいいのか、ということばかりだ。下手をすれば、自分だけではなく隊員全員がサルモール一行に殺害されていたかもしれない。良く戦い良く死ぬのなら、それも本望である。しかし、首長の大望の一助になることを望むアーチルに取って、街道での遭遇戦などという重要性の低い戦いで命を落とすことは避けたい話である。件の自称錬金術師は、そこから救つ

てくれた。それに報いると啖呵を切ったにも拘らず、現在の体たらくを顧みて、アーチルは無力感に苛まれていた。

アーチルの胸中が自罰的かつ自虐的になればなるほど、無力感と罪悪感で苛まれれば苛まれるほど、精神的負荷は雪だるまの如く膨れ上がり……アーチルから『保身』という人間が最も無くしてはならないものの一つが抜け落ちた。

アーチルは間違っても盗賊ではない。人目を盗んで目的を遂行することなどできない。そも、元より「誰にも知られず思いつきを完遂する」という心算が欠如しているアーチルにとって、あとになり己の所業が発覚しようとも構うものではない。

開き直つてからのアーチルの行動は素早かった。思い立ったなら行動あるのみとばかりにすぐさま酒場へ行き、自らの懐から金を出して上等な蜂蜜酒を数本購入した。次いで偏屈者の店主が開く錬金術店へ行き、睡眠薬を購入する。

そして夜半、首長の執務室に近い書類の保管庫で寝ずの番をしている同僚へ酒を進めた。高い職業倫理を持つてはいてもノルドである。酒好きは種族柄でもあるし、蜂蜜酒を丸々一本空けてほろ酔い以上に自分を見失うものなど『下戸』扱いなのがノルドという生き物だ。番兵は進められるがまま蜂蜜酒を口に……睡眠薬によつて昏倒した。

アーチルはその隙に保管庫へと忍び込み、ガルマルの命により作成された書類を細切れに破り、懐にしまった。あとで暖炉の火にでもくべるつもりだ。次いで、筆跡に注意

しながら偽の書類を作り上げた。翌朝には全てを自ら白日の下へ曝すつもりではあるが、怪しまれて命令が遂行されないのは困る。危ない橋、どこるか自殺行為を現在進行系で行っているのだ。せめて成果は得たい。

工作を済ませたアーチルは薬を盛った番兵を起こして水を飲ませ、「疲れているのではないか？」と声をかけた。番兵の面目無さ気な顔を見てみると胸が痛んだが、それも正直に暴露するつもりでいる。番兵に罰が下ることは無いだろう。

そのまま何食わぬ顔で帰宅し、大黒柱の帰りを待つていた妻と物音に起きた息子を抱き締めた。自分は信念のために行動しているが、軍において重大な違反行為をしたことは事実である。この温もりを味わうことも、最後になるかもしれない。いや、おそらくはそうなるだろう。アーチルは嘔み締めるように最愛の家族を抱き締めた。

妻も息子も、違和感を覚えはしたが、それを指摘することは無かった。詳しい事情はわからない。しかし、今この瞬間。覚悟を決めた様子の夫の、父の姿を、目に焼き付けなければならぬ。そう感じ取ったのだ。アーチルは屈んで出来の良い息子と目線を合わせ、「誇りを忘れるな」と伝えた。そして素直に頷いた息子を見て破顔し、頭を撫で、床に戻るよう促した。立ち上がり、今一度妻を抱き締め、あえて心のままの言葉を紡いだ。君と出会えて良かった。君と一緒に良くなった。君と子供を儲けて良かった。愛息を立派に育ててくれてありがとう。そのように告げた。息子と違い目を合わせな

かったのは、そうしてしまえば、声が震え、涙が止まらず、言いたいことの半分も伝えられないと思つたからだ。妻もアーチルの気持ちを察し、鼻を嚙りながらも黙つて夫の言葉を聞き、強くその身を抱き締めた。

その晩、二人は出会つた頃のように愛し合つた。

ことを終えて疲れから眠つた妻を横にして、アーチルは思つた。こんな辛い思いをするのならば、家族を愛しているのならば、件の錬金術師のためにここまでしてやることもないのではないだろうか、と。

得られる成果は、恩人へ正当に報いること。ノルドの誇りを守ること。失う最悪を想定するのならば、自らの命と名譽。蓄えた財産。家族の安全。その後の後ろ指を指される苦しい一生。つまりは自らの持つ全て、だ。それが本当に釣り合つているのだろうかと思う。……こんな迷いを抱くのならば、家に帰らず『王の宮殿』で夜を明かせば良かったとすら思つた。

すると、眠つたとばかり思つていた妻がアーチルへ語りかける。

「ノルドの誇りは、正直に言えば私にはわかりません。それに、詳しく知らないのを見当違いかもしれません。貴方はいま動かなければ、きつと一生を後悔するでしょう。そういう不器用な人です。私が愛したのは、そういう人です。私は、貴方の苦しむそんな姿を見たくはありません。ですから、どうか思うままに。あの子のことは、私が責任を

持つて育てます。誇り高き父親のように」

アーチルの肚は決まった。

翌朝、夜番の兵が上がる前にアーチルは砦へ足を運び、偽造した書類を元に命令を下した。命じられた兵は、書面上とうに執行期限が過ぎていることを確認し、跳び上がる勢いで手続きを済ませた。常に帝国軍を意識するストームクローク軍において、軍令の遅れなど許されることではない。

命令が遂行される様を見届けたアーチルは、首長の執務室前にいる側仕えへ「大変勝手ながら、朝一番の陳情は取り止めとさせていたきたい」と伝えた。未だウルフリックの起床時間ですらない時分での申告であったため、側仕えも眉をひそめる程度で、了承の意を伝えた。ちなみにこの側仕えは、昨日とは別人である。

準備を終えたアーチルは衛兵隊の詰め所で朝餉を腹いっぱい詰め込み、蜂蜜酒とワインを空けた。同僚からは勤務に差し支えると苦言を呈されたが、「今日だけは良いのだ」と笑って返した。普段と違うアーチルの様子を怪訝に思うものの、何か特命でも受けたのではなからうかと当たりをつけて、誰もそれ以上は詮索しなかった。

食べ終わった食器を下げたあと、井戸で水を多めに飲み、顔を洗い、髪と髭を整え、鎧

と剣を磨き上げ、身嗜みに問題が無いことを確認した。アーチルに、一世一代の勝負の時^どが来た。

アーチルが王の宮殿の入り口からまっすぐ進んだ謁見の間に差し掛かったとき、両脇の番兵に止められた。この時間に朝の定例会議を行っていることはウインドヘルムの衛兵ならば誰でも知っていることであり、そこに立ち入る者は誰であれ一度は足を止められる。ましてやアーチルは、隊を率いることがあるとはいえ、一介の兵士である。番兵の見る目も鋭い。アーチルは腰から剣を鞘ごと外し、番兵へ突き出しながら朗らかに口を開く。アーチル自身も、何故それほどまでに穏やかな気持ちなのか、不思議であった。

「これより閣下に直訴奉る。止めなければ、この場で俺を切り捨てろ。さもなければ、俺は決して止まらんぞ。通してくれるのなら、この剣を持って付いてきてくれ。俺が妙な真似をしたなら、こいつで遠慮なく首を落とせ」

二人の番兵は顔を見合わせて困惑した。眼前の男は、全く知らぬ仲でもない。首長や重臣から直々に命を受けることもある、それなりに信を受けた男だ。それが何故堂々と「これから無礼を働く」などと世迷い言をほざくのか。酔っているのか？ 狂したのか？ しかし男は自らの剣を差し出し、直訴ならぬなら切れと言う。番兵は口々に考え直すような言葉を尽くすが、アーチルは譲らない。番兵達は、アーチルが本気であることを

悟った。そして自らの職業倫理と同族意識と男の誇りとが脳内で荒れ狂い……交差させた戦斧を下ろした。余程の覚悟である。戦士が何を置いても諫言せねばならんと言うのだ。殺すならそれを聞いてからでもいいはずだ。番兵の内一人は「減給か叱責で済むだろうか……」と肩を落としている。妙に緊張感が無いが、それがやや現実逃避を含みながらその場の空気を和らげようという意図であることは皆が察したため、柔らかな笑いだけが浮かんだ。

番兵の理解を得たアーチルが、一度、二度と深呼吸をし、謁見の間の扉を開いた。扉の内両側で待機していた二人の番兵は、アーチルと、次いでに足を踏み入れる外側の番兵二人を見て目を見開いた。現在、謁見の間では、ウインドヘルムの重臣達が会議中である。余程の緊急時を除いて、この場に臨席を許されていない、つまりは重臣でもない者の邪魔立てなど許されはしない。

その場の皆は、会議を中断させるだけの緊急事態が起きたのかと身構えた。しかしいつまでまっても、堂々と入場し、悠然と歩を進めるアーチルからは、報告前の口上が述べられる様子が無い。

何らおかしいことは無いとばかりにアーチルは進み続ける。重臣達の横を通り過ぎ、番兵ですらどこまで進むのかと肝を冷やし「もしや謀反では？」と疑いを持ち始めた頃、ウルフリックから十歩の距離まで近づいたところで、アーチルは跪いた。

「閣下に置かれましては、ご機嫌麗しゆう存じます。此度は重大かつ緊急の案件が出来ましたがために、ご無礼を承知のうえ、参上仕りました」

ウルフリックはアーチルの口上を受け、今が会議中であることを再確認し、アーチルは、無論存じております、と返す。迂遠なようだが、ウルフリックからしても、部下が何故非常識を働いているのか、わかりかねているのだ。

遅まきながらそして混乱が解けた重臣達が、口々に、分を弁えろ、直ちに退出せよ、と声を張る。しかしアーチルには届かない。

ウルフリックは再度問いかけ、何用であるか、とアーチルを促した。

アーチルは語る。二日前、市民殺害の嫌疑がかかるサルモール一行にウインドヘルムまでの同行を求め、断られたため戦闘に発展したこと。戦況は相手方へ傾き、あわや全滅かと思いきや、旅人の助勢により一行を殲滅せしめたこと。一行は証拠隠滅のため、地に埋め処理したこと。ウインターホールド行きを望む旅人を、自らの部下が愚かしくも脅し、ストームクローク軍へ入隊させたこと。それをガルマルに報告したが、入隊の撤回はなされなかったこと。上位者の決定には表立って逆らえず、書類を改竄し、既に処理したこと。ここには、その弁明に来たこと。

当然の如く、重臣達から怒号が飛んだ。ガルマル同様、旅人を脅した、という件ではくだり眉をひそめたり、ノルド的正義に厚い者は「その愚か者を引つ立てよ！」と怒りを顕に

した。ガルマルも、ここで自らの判断を口にしており、頷く者も多い。しかしアーチルの書類改竄に話が及ぶと、揃って絶句した。

軍幹部の命で作成された書類を改竄するなど、重罪以外の何物でもなく、悪くすれば極刑、良くても厳罰は免れない。それをアーチルは堂々と告白したのだ。会議に乱入するという非常識に、更に非常識を重ねた形だ。そんな馬鹿はなかなかお目にかかれな

い。

数拍の静寂を破るように再び怒号を飛ばそうと重臣が口を開きかけた瞬間、ウルフリックが片手を上げて制した。若いとはいえ、自然と人を惹き付ける雰囲気纏う男である。僅かな動作でも、場の空気を掌握してみせた。

「アーチルよ。私としては、ガルマルの下した処分は多少強引ではあるものの、然程悪いものではないと考えている。お前や私達の考える『正しきノルド』を別にして、旅人にとっては不本意かもしれぬが、しかし多額の礼金や高い待遇を与えれば、不満は腹に収めてくれるのではないか？ それにいくら先祖の故郷とはいえ、彼の者はウィンターホールドにおいて余所者である。様々な物が不足するあの町で、彼の者がすぐに受け入れられ満足に働けるかは全くの不明だ。しかし、そこに我が軍で厚遇されていたという事実が加われば、多少の箔が付き有意となるのではないか。私はそう考えた。

……が、お前は今まで、私や、私の友の命に忠実であった。そのお前の口から軍機違

反を犯したと聞いて信じられぬ思いが先立つが、それが事実として、それほど重大。出来心やもしれんが、他にも理由あつてのことではないのか？ であるならば話せ。お前の主として、聞こう」

アーチルは、ウルフリックの一度はガルマルに賛同するような言を聞き、焦りもしたが、きちんとこちらへ水を向けられたことに安堵した。アーチルは、我が首長ならばきつとこの思いを聞き届けてくださる、と信じていた。しかしそれは賭けでもあつた。問答無用で斬り殺されていてもおかしくはなかつたのだ。アーチルは一つ関門を越えたことを実感しつつ、口を開いた。例えこの口上が終わつたとしても、自らの命の保証など何処にも無いと承知していながら。

「恐れながら申し上げます。件の旅人は素晴らしい戦士であり、ガルマル様の仰るとおり、義侠心とそれに相応しい力量を備えたノルドであります。同胞として迎え入れることができれば、心強いことこの上無いでしょう。しかしそれでは信義に反します。それは、確かな力量の戦士を得る以上の損害を、我が軍のみならず、閣下ご自身にも齎します。私はそれこそを危惧しております」

ことがウルフリックにも関係するという段になつて重臣達が口を開きかけるが、再び制され、ウルフリックが鋭い眼光のまま「続けよ」と口にする。

「例えば旅人が、我が町の英雄であるブランウルフ・フリー・ウィンターであれば、もし

くは余所者であつたとしても、ホワイトランのバルグルーフなどであれば、閣下はそれ相應に扱うことでしょう。それはノルドとしての信義によるものでもあり、政治的判断でもあるはずです。それ自体に何ら問題はありませぬ。ですが、それ故にイーストマーチの民のみならず、他地方の者達でも、フリー・ウインターであつたから、バルグルーフであつたから、そのような扱いを受けたのだと解釈します。

しかしそれでは駄目なのです。閣下の大望を果たすには、それでは足りないのです。肝心なのは、旅人が取るに足らない人物であろうとも、恩を受けたのならば賓客として遇し、そのうえで閣下の理想を語つて聞かせ、心服させることなのです。そして、仮に旅人が閣下の思いを理解し得なかつたとしても、それを寛大に許し、旅の幸運を祈る。そういうった姿勢を見せ続けることで、閣下は必ずや大望を成就されることと私は信じます。

逆にそれが成されない場合、ストームクローク軍とは、ウルフリック・ストームクロークとは、ノルドでさえ市井の者であればその意向を蔑ろにし、勝手気ままに扱う。そのような集団である、との印象を抱かれかねませぬ。それは閣下の大望にとつて百害あつて一利無し。寧ろ帝国を利するのみであると考えます。どうか、ご英断を」

アーチルの言葉を静かに聞いていたウルフリックが、短く尋ねる。

「先程からお前は『大望』と口にするが、私がどのような望みを抱いているというのだ？」

「はい、閣下。閣下はスカイリムの全てのノルドの支持を得て、弱さと誇り無きが故にサルモールの走狗へ堕ちた帝国からの真の独立を果たし、以てスカイリムの誇りあるノルドの生き方そのものを守護せんとなさっている。私はそう理解しております」

ウルフリックは部下の言葉を聞き、目を閉じた。アーチルは主人に思いの丈を伝え、次の言葉を待った。それはある種の神聖さを伴い、切り取られた一枚の絵の絵のようにも思えた。先程までアーチルの処罰を叫んでいた重臣達ですら、この空気を壊すことは憚られ、唾を飲んでウルフリックの言葉を待った。

「……旅人は書類上、既に入隊済みとなつているのだつたな？　であれば急ぎその決定を撤回……いや、それでは彼の者に不名誉な何かがあつたと邪推されかねん。除隊とせよ。それとは別に、謝礼もな。恩には報いねばならん。また、我が過ちを命がけで正した忠臣を罰するわけにもいかん。アーチルの犯した数々の違反は、無罪放免とする。異論は許さん」

アーチルは一瞬頭が真っ白になった。思わず聞き間違いは無いか確認しようと口を開きかけたが、万一それが原因で臍を曲げられ除隊扱いが更に撤回されては泣いても泣ききれないと思ひ、慌てて固く口を結んだ。そして跪いたまま、地に頭をつけんばかりに平服した。

驚いたのはアーチルだけではない。後ろに付き従つた番兵も、重臣たちも、言葉が無

い。乱入者の言には理があるものの、それを全面的に受け入れ、そして全面的に許すなど。高い矜持に見合うだけの高い自尊心を備えている主の寛容さが、想像の埒外だったのだ。

その場にいる全員が呆け気味な中、ウルフリックは側仕えに指示を出し、先程の言葉が嘘偽り無いことを証明した。

一介の兵士が、首長すら納得していた決定を覆した。凄いものを見たと皆が感心していたとき、ウルフリックは今一度、皆を困惑させることを口にする。

「彼の錬金術師については、形式としては入隊後、間を置かず除隊が許可された、という形になる。まあ書類上のことだから然程時間はかからぬはずだが………いや、その男、やはり欲しいな」

アーチルの頭が再び真っ白になる。重臣達も困惑する。今、たった今、美しき主従の絆を以て良い落とし所に落ち着いたのではなかったのか、と。

しかしウルフリックは、先程のイーストマーチの主に相応しい敵威纏う空気を放り捨て、悪戯でも思いついたかのように片側の口角を上げている。

「アーチルよ。お前は私を諫めるためであれば、信義のためであれば、その者がどれほどつまらぬ男であっても同じ行動をとったのだろう。だが幾らかは、男の非凡さに感化されたのではないか？ この男との約束のためなら命をも賭けられる、と。実際、報告を

聞くだけでも並ではないことは明白である。できることならば私の私兵としたい。指揮能力があるのなら、方面軍を任せても良いかもしれない。ガルマルでは無いが、説得する時間が欲しいな。……そうだ、我が軍の者ではないにも拘らず無理を言うのだ。給金どころではない。多額の迷惑料を支払うべきだ。それも彼の者が困惑するほどの。そして毎日使いをだし、根負けさせるのだ。金と誠意を以て当たれば、仮にスカイリム中にこの件が広まったとしても、不義理と思う者は少ないだろう。強引さへの嫌悪より、寧ろ厚遇ぶりに羨望の眼差しが集まるのではないか？ もし上手にことが運んだのなら、「我も我も」と優秀な戦士たちが我が宮殿に詰めかけるやもしれん」

ウルフリックの言葉は、始めこそアーチルへ語りかけるものであったが、途中からは誰に聞かせるでもない独白の様相を呈していた。そこに、アーチルにとっては間が悪いことに、一連の裁定に不満を持っていた一部の重臣が同調し、あれよあれよと言う間に件の旅人の処遇が決まって行く。

アーチルは反対意見を述べようとしたが、どうにも身体に力が入らない。その場で姿勢を崩さないでいることで精一杯になっていた。一度は死を覚悟して直談判し、主の恩情により命を拾った。その全身を浸す安堵感から抜け出して、再び決死の覚悟で物申せるようになるほど、アーチルという男の心身は頑丈にはできていなかったのだ。

結果、錬金術師を名乗る彼の旅人の処遇は、入隊後即除隊。しかしその身柄はウィン

ドヘルムから遠くない土地に、首長の我儘、という形で留め置かれることになった。アーチルに出来たのは、男の赴く土地を、主からの使者が日帰りで訪ねるのにやや苦勞する程度の距離まで離すことだけだった。

アーチルの胸中には、成し遂げた達成感と、それが台無しになった虚無感と、それらを覆い潰す巨大な疲労感が残った。

会議も終わり、謁見の間から所変わってウルフリックの私室である。ここには現在、部屋の主とガルマルの二人だけがいる。

「さて、ウルフリックよ。お前にも何か考えあつてのことと思ひあまり口を挟まなかったが、随分と大盤振る舞いが過ぎたのではないか？」

先の会議（乱入案件）でのウルフリックの裁定に対してガルマルが物申すが、ウルフリックは何事もないとばかりに返してみせる。

「ガルマル。今の私はここぶる機嫌がいい。何故かわかるか？」

少々話をそらされたようにも思ひ、また自分の質問に答えが得られなかつたガルマルは、やや無然として『優秀な戦士』が現れたからではないのか？」と答えるが、ウルフリックは首を振った。

「あんなものは演技に過ぎん。腕の立つ戦士自体はいつでも軍に加えたいと考えていることに間違いは無いが、戦争は一人の優秀な戦士によって行われるものではない。……かつて力を求めてグレイビアードを頼った私が言うのだ。間違い無い。

今回の件で素晴らしい点は二つ。

一つは、私が裏で仕込みなど行わずとも、兵の中から私に諫言するために命を張ろうという者が出たことだ。

これは完全に硬直した組織では有り得ない。私はこれまで、少々強引にことを運んで来た自覚があったが、この分なら然程問題もあるまい。そして彼奴を許した話は瞬く間に広まるだろう。自称錬金術師への勧誘などどうでも良い。今日の一件をもって、私と我がストームクローク軍の名声は高まり、参加希望者は増え続けるはずだ。私が『清廉なノルド』の姿を見せ続ける限りな。人は見るものを望むように見る。如何にソリチュードが帝国とつながろうとも、如何にバルグルーフがこちらへ靡かずとも、市井のノルド達が味方につけば意味は無いのだ。

もう一つは、『私が “見せたい” と思う姿』が兵士にも共有されていると確認できたことだ。

図らずも、アーチルは私の理想像を語った。勿論、全てのノルドがそのように考えているとは間違っても思わんが、しかし彼奴一人だけの思い込み、ということもあるまい。

あれは良くも悪くも平均的な善性のノルドだ。同意見の者はそれなりにいるだろう。つまり、先の一点とも重複するが、私のこれまでの方針は間違っていないかった、という確認がとれたのだ。これは大きいぞガルマル。人心を動かそうと工作すれば、余程巧妙でもなければどこかに痕跡が残る。そしてそれは不審と嘲笑の種に変わる。しかしその手の労苦を経ることなく、我々は望ましい結果を手に行っているのだ。これが上機嫌とならずにいられるか？ お前の言う大盤振る舞いはついでのようなものだ」

ウルフリックの下す件の旅人の処遇については、実のところある理由から既定路線であった。裁定までの問答は、それを少々演出して見せたに過ぎない。だからこそ、旅人については『優秀な戦士』以上の価値を見出してはいない。寧ろ、今回、自分にとって良い結果を齎した駒の内の一つ、という認識が強い。それに人は美談を耳にしたとき、つい穿った考えを持つ者も出てしまうものだ。だからこそ、主従の美しい絆の話では終わらせずに、ウルフリック・ストームクロークという一人の人間の欠点が垣間見えるよう意図的に仕組んだ。それにより、いわゆる『出来過ぎた胡散臭さ』を消そうとしたのである。つまりは、旅人を留め置いた件についても、演出に過ぎない。

ガルマルは、そんな饒舌なウルフリックの独演を黙って聞き、思った。政治のわからぬ自分では、年下の友であり主でもある男の考えが正しいのか間違っているのかの判断がつかない。しかし、これまでの方針が良い結果を齎したと浮かれる男を見て、言わず

にはいられなかった。

「ウルフリック……。やはりお前が上級王になるべきだ」

翌日の昼前、一人の子供を連れてアーチルが沈痛な面持ちで訪ねてきた。曰く、しくじった、と。そして私達を急かすように詰め所から連れ出し、馬車に乗せて走り出した。本人は別で馬に乗っている。

移動しながらしきりに詫びを入れられるが、それだけでは全く要領を得ない。「誠意を見せたいのなら、包み隠さず全てを話せ。長くなつても構わん」と少々突き放した物言いをして、やっと少しはまともになった奴に顛末を催促をした。

奴はきまり悪そうではあるが、ぼつぼつと少しずつ話し始めた。

要してみれば、曰く、首長への報告は叶わず、代わりに首長の腹心へ訴えたが失敗。そのため、軍規違反を承知で書類改竄のうえに偽の命令を発した。その後、首長を含めた重臣達にことのあらましを伝え、説得を成功させる。私のストームクローク軍入隊こそ避けられなかったものの、除隊は既定路線であり、その間、鉱山採掘村にてほとぼり冷めるまで働いてほしい、とのことだった。

アーチルの長い独白を聞いて私の胸中に浮かんだのは……………
……………この男、無茶をし過ぎなのでは？ というものだった。

あまり神妙な態度で切り出すものだから、もつと状況は如何ともし難く、この男は流されるまま長いものには巻かれていたのかと思つた。しかし実態は、己と種族の誇り、それに首長への忠節に命をかけ、出来得る限りのことをしてくれたように思う。

寧ろ、何故この男はここまで恐縮しているのだろうか。

たしかに、結果として私との約束を守ること叶わなかったが、状況が然程悪いとは思えない。首長はこちらの道理を認めたくて、少々子供じみた駄々をこねているだけだ。計画が遅れるのが痛いと言えば痛い、その程度は首長とアーチルの顔を立ててやつても良いだろう。おそらく、そのほうが後々良い結果となるはずだ。馬車に同乗している砦の者に目配せしても、察して領いてくれた。

以上から私としては、大満足、とはいかずとも特に不満は無いのだが……アーチルは約束を守れなかった一点について、非常に気に病んでいる。生真面目過ぎないだろうか。他人事ながら少々心配になる。

そのあたりを伝えようと口を開きかけたが、まだ続きがあるらしい。

「そこだ。お前の任地に、私の子を連れて行つてくれ。名はトルドス。今回の経緯は伝えてあるし、俺の思いも、こいつの使命も言い含めてある。そのときには好きにして

くれて構わない。これが俺にできる最大限の詫びの印だ。かえって面倒だとも思つかもしれんが、呑んでくれると有り難い」

要するに人質ということか。『首長に私を諦めさせる』という約束が果たされなかつた場合、最悪殺してしまつても良い、と。私が思うに首長の説得くらいならどうということはないのだろうが、ガルマルだったか？ 他にも強硬派の重臣が横槍を入れて来た場合、どうなるかはわからない。そのため、と。

ラーナルクを引き取つてから、以前より子供に対して当たりが柔らかくなつたと自覚する私だ。あまりこういう話は好みでないのだが、当の息子もその氣でいるらしい。ラーナルクより少し上、といった程度の年で、大したものである。既に戦士の教育を受けているのだろうか。となれば、言うだけ野暮か。幼くとも戦士であると主張するのなら、それは尊重せねばなるまい。

任地については、ウインドヘルムから馬車で南東へ一日程度進んだところにある、鉱山採掘村だそうだ。

武器の生産量を徐々に増加させているストームクローク軍にとって、鉱山は資源確保に重要な地だ。それなりに賑わっているのだろう。あばら屋に住まわされてラーナルクが風邪を引く、ということもあるまい。そのへんの開拓村ではないあたり、アーチルがせめてもと氣を遣つたのだろう。悪くない。

……実を言うと、一件についてブレックスに使いを出すまでもなく、砦の者が少々伝手を使い首長に働きかけていたのだとか。曰く、万一の事態あれば、自分の裁可仰ぐ必要なく、最良と思われる行動を取るべし、と。それ故、砦の者は夜の内にウインドヘルムの有力者にあたり、首長と面会させ、ことを穏便に済ませるよう話をつけたのだとか。このあたりは、組織として運営するギルドより、一人一人の裁量が大きいブレックス一味の即応性が役立った形であろうか。何にせよ助けられた。交替の際には、私が礼を言っていたと伝えてもらうことにした。当然、本人にも礼は言った。「役目ですからなんてことはありやしません」とは功労者たる砦の者の談である。

閑話休題。内を固めたい首長は有力者を無下にするわけにもいかず、要求も然程重いものではない。寧ろ有力者への貸しとして呑むだろう。なんなら、自らの指導力を誇示するため、強硬派を率先して抑えるくらいはしてのけるかもしれない、とのことだった。ウルフリック・ストームクローク、派閥の領袖に立つだけあって、それなりにやり手なようだ。扇動力だけの男ではないらしい。

私は否やの無いことをアーチルへ伝えた。

ほっとした顔を見せたかと思うと、今度は再び神妙な面持ちを見せた。忙しい男である。

「それから、あの馬鹿についてだが……」

ああ、なるほど、そちらもあつたな。私達を面倒事に巻き込んだ張本人であるのだから、話題としては重要だな。目の前の男の意外な大冒険の印象が強くて、一時、頭から抜け落ちていたが。それに、ギルドが動く以上、私の中では済んだこと、という認識が強い。私とラーナルクの安全に比べれば、優先度は極めて低い。

聞くに、男はウインドヘルムの豪商の息子らしく、根底ではストームクローク軍と私に良かれと思つて行動した、正しく確信犯だったようなので、直接的にはせいぜい首長からお叱りの言葉を受けて終わりだろうと。まあ、強硬派が眉を顰めながらもそれを採用してしまっているあたり、そんなものだろう。

「そちらについては、私の友人達が動いてくれている。何もしなくていい」

私のすました様子を不審に思ったのか、アーチルは顔を近づけ声を落とす、眦を釣り上げて問うてくる。

「……殺すのか？」

「いや、そういうたやり口は彼等の流儀に反するらしいのでな。安心するといい」

そう言うと、しばし表情をころころと変えながら迷つたような顔をして、終いには脱力してしまった。殺されるのと、殺されたほうがマシな目に遭うのと、どちらが有情であるか悩んだのだろう。矛を納めてくれたあたり、一応の納得はしたのであるが。

「いやはや、初めは優れた戦士と知り合つたかと思つたが、とんだ食わせ者だったな。」

……採掘村でのことだが、鍊金術が使えるのは本当だよな？」

勿論である。そのために私は効率主義のデーモンによって、字の読み書きと鍊金術の詰め込みという拷問染みた促成教育を受けたのだ。というか、立ち寄った村々で実演してみせたらうに。アーチルがそれどころではなかったのは理解できるが。

「私がお前に嘘を言ったことはまだないはずだが？」

私の言に對し、アーチルは今日初めて皮肉げに笑ってみせた。

『『義によつて』、は嘘だろう？』

……ばれていたか。

「すまない、失念していた。たしかにそれは嘘だ。あのときは、サルモールの愚か者から攻撃を受けた私怨と、衛兵隊に貸しを作りたい打算から動いた。最もお前達を混乱させずに済むかと思ひ口にしたが、騙ったことについては謝らう」

謝罪を發する側と受ける側が入れ替わったことが面白かったのか、アーチルはカラカラと笑う。

「この分では、貴殿の言うノルド的美徳についても、幾らか怪しいのではないかな？」

……いやいや、構わんとも。冗談だ。それにどうしてだろうな。お前に助けられた直後よりも、こうして話している今のほうが、お前という人間を好ましいと思つている。俺は自らに課すだけではなく、他者からも認められる正しきノルドでありたいと思つてい

るはずなのに、そこから外れるお前が何故か嫌いになれない」

それはお互い様である。私とて、眼前の男を一度は面倒を嫌って部下諸共殺そうと考えたのだ。つい二日前のことである。悪い男ではないと感じつつも、その程度のものであった。しかし今は、気安く交わす会話が心地良い。

「アーチル。我が父母と信仰する太陽にかけて誓おう。ことがどう転ぼうとも、お前の息子は無事に返すと。まあそれまでのあいだは、倅の遊び相手として暫く借りておくことにするよ」

アーチルは破顔して、握手を求めてきた。私はそれに応じ、他に二三言葉を交わしてから、馬車は任地へ、アーチルはウインドヘルムへと戻っていった。

計画に遅れが生じるのは面白くはないが、ラーナルクを鍛えてやる時間ができたと思えば、全くの無駄な時でもあるまい。それに今日は気持ちの良い陽気である。急ぐ旅でもなし。私は馬車の荷台に布と毛布を敷き、子供二人と共に並んで寝転び、到着を待つことにした。人生、成るように成るのだ。

ウインターホールドにて一人の男が、まだ日も高いというのに寝台で伏せている。

壮年などとうに過ぎ、中年とも呼ばなくなり、老年、それも老境に入った力無き老人である。

そこいらの物乞いが聞けば、怒りのあまりに廃材でも持ち出して「何が『力無き』か」と殴り掛かるやもしれない。なにせ老人は、首長会議への参加権を持つ、ウィンターホールドの首長その人なのだから。しかし老人は自らをそう自覚していたし、近しい人間からも、概ね同様の認識を持たれている。

たしかに、庶民に比べれば広い家にも住んでいる。銀器を始めとした調度品も多少は揃えている。しかし、その程度の暮らしは、ウィンターホールド以外の諸都市であれば、豪族、豪商程度でも、わけもなく整えることができる環境である。首長の暮らしぶりとしては、侘しいことこの上ない。

老人は、その生まれが建前上持つ権威とは裏腹に、多くのものを持たないまま生を受けた。

老人が産まれる、ほんの少し前のことである。ウィンターホールドに大災害が起きた。大きな揺れを感じはしたものの、それ自体に被害はほとんど無かったため、当時の首長を始めとして、不思議なこともあるものだと言日常へ戻ろうとした。しかし、時を置かず海が押し寄せて来たのだ。

誰にも、どうするもできなかつた。海は幾度となく町に押し寄せ、その度に土を、岩

を、陸地そのものを削り取り、当然の如くそこに居た人々や建てられた家々を呑み込んでいった。大学も、己が居城を守らんと、魔法結界が正しく作動しているかの確認に奔走している有様で、余裕などは全く無かった。古の英雄とて、この未曾有の事態の前では同じく無力であつたらう。

生き残つた皆が呆然としていた。そして現実感の無いまま、ある事実気付いてしまった。寒冷地であるスカイリムの中で最も地域の多くを凍土に覆われたウィンターホールドにおいて、家無くして生きていくことが可能であろうか、と。答えは誰に教わるでもなく自明であつた。否、である。

誰も彼もが、ふわふわと足元の定まらない奇妙な浮遊感を覚えていた。心の弾む躍動感などありはしない。文字通り地に足がついていないのだ。それ故か、いち早く立ち直つた首長の号令により、家を持つ者は家を失つた者達をそれぞれ自宅へ招いた。首長自身も、砦と邸宅が流されたため、多少裕福な者の家に転がり込んだ。市民としては、上位者の声があつたとはいへ、深く考えないままにわかりやすい善性に突き動かされた、というのが実状である。それ故か、暫くの後には住民同士で争いが絶えなくなつた。

町全体が大きな被害を受けたのだ。運良く直接的被害に合わなかつた者でさえ、生活は徐々に苦しくなる。そこに、家を持たず多くは食ひ扶持を稼ぐ手段すら流されてしまった者達が同居しているのだ。初めは互助精神で招き入れた同じ町の仲間を、いつし

か厄介者と感じるようになった。家を持たない者達としても言い分はある。面倒をかけているのは承知していても、現状でできる限りのことはしているのだ。これ以上どうしろと？ 寒風吹き荒ぶ野外で過ごし、朝には冷たく硬くなっているのでは？

町への被害の他にも、それらの閉塞感や険悪な空気に耐えかねて、多くの者がウインターホールドを去っていった。

かつてウインターホールドは魔術大学と共に歩み、スカイリムの中でも栄えた都市であった。しかし二百年近く前に起きた『オブリビオンの動乱』により魔術師そのものへの不信感が高まった。それを受けてノルドを中心に、魔術も魔術師も信用ならない。ノルドは鋼と己が肉体こそを信ずる。そういった世論が形成されていった。元々あった気風を叫ぶ声が相対的に大きくなった結果である。そこに此度の大災害だ。長い時をかけて培われた不信感が「大災害は大学が引き起こした」という噂を生み、ウインターホールドと魔術大学の仲は決定的に引き裂かれた。

ウインターホールドは大学の影響で他の土地に比べて非ノルドが多く住まうとはいえ、あくまでそれは比較的話で、主な住民はノルドである。またスカイリムの一都市であり、地方を運営する首長一族もノルドである。そのような土壌もあり、一度引き裂かれた仲を修復することは生半ではなく、事実、大災害から現在まで、成し遂げられてはいない。老人は、町が加速度的な衰退を見せ始める、その時分に生を受けた。

老人はウインターホールの繁栄など知らない。現在の住処ですら、大崩壊後に建てられたものであり、大崩壊以前とは比べるべくもない。しかしそれらは、老人には不幸なこと、老人が『老人』ではなかった当時の年嵩の者達からすれば、忘れ去るには記憶に新しかったのだ。影も形も無い、現状ではありもしない栄光の日々。そのような昔話を聞かされて育った老人は思った。「では、何故今の我らは貧しいのか」と。

老人とて馬鹿ではない。理屈では理解している。だからこそ声を大にして言いたかった。叫びたかった。懇願したかった。「俺に、在りし日の話をするのはやめてくれ」と。だがそれは、ウインターホールドを治める者として、許される行いではなかった。老人は呪いとも言える話に耳を塞ぐこともできず、いつしか憎悪と、それすらも叶わぬと理解してからは諦念、冷笑、絶望を友に人生を過ごした。

どうかすれば、ウインターホール再興の道もあつたのかもしれない。しかし、首長の息子に生まれたというだけの凡人であつた老人には、それを成し遂げることはできなかった。老人は、『持たざるもの』であつた。

そんな老人を寢室の屋根裏から覗く者がいる。その者は、老人とその周囲を監視するよう指示されていた。今はまだこのまま、時が来るまでは、と。

二一、足留めと、暗躍と、乾杯

ラーナルクが夕餉の席で、最近暖かくなってきた、と顔を綻ばせて私に話す。寒波が緩めば、ラーナルクやトルドスが追いかけて遊ぶ虫や獣が顔を出す。それが楽しみなのだろう。

体躯の大小に関わらず、生き物の多くは冬のあいだ、じっと大人しくしているものだ。様々な文化文明において『死の季節』と比喩されるのも無理はない。更にスカイリムの厳しい冬での連中は、狩人の貴重な収入源であるため、採掘村で暮らす子供がお目にかかれる機会は滅多に無い。ラーナルクがそわそわと喜色を顕わにするのも納得である。そして私とは言えば、凍える雪山だろうが灼熱の溶岩地帯だろうが問題無く活動できるせいか、季節の変化など意識せねばなかなか気付かないのだ。しかし、そうか。もう冬も終わりか。

冬が終わる。うん、冬が終わるのだ。そして私の今現在の所在は、相も変わらずアールに指定された鉱山採掘村である。私がこの村へ派遣されたのは、春の終わりから夏の始まり、といったところだったはずだ。……よもや一年弱も足留めを食らうとは全く予想だにしていなかった。とはいえ、これにはあちこちの事情が絡み、致し方ない面も

あるのだが。

私は当初、村への逗留は、首長が私を諦めるようアーチルが説得を成功させるまでの辛抱であるのだから、早ければ半月、長くてもひと月、まさか三月はかかるまいと考えていた。それが半年を超えてまさかの一年弱である。私達の計画は長期的かつ柔軟に対応するものであるため致命的な損害を負ったわけではないが、とはいえここまでの長逗留は流石に予想外であった。計画の重要人物であるウィンターホールド首長の様子を砦の者に確認してみれば、老いぼれ首長殿は今なお健在であり、急ぐに越したことはないが慌てるほどでもない、とのこと。時折やたら長く生きる者もいるにはいるが、寒さ厳しいウィンターホールドでよく持ちこたえるものだ。そして当たり前のように監視しているのだな、お前達。

逗留がひと月半を過ぎたあたりでちと不安になり、巡回の衛兵隊に頼んで、事情を説明してほしいとアーチルに手紙を出した。すると奴からは妙な返事が来たのだ。曰く、首長との交渉は当初、世間話を交える程度の軽いものであり感触も悪くなかった。それが徐々に態度が変化し、終いには「お前は何も聞いていないのか？」と逆に尋ねられる始末。何のことやらと混乱していたら、いつの間にか私の処遇は保留となっており、自分にも何が起きているのか不明である。引き続き首長へ翻意していただくよう努める、とのこと。

一度は、アーチルも拳を槌を交えたお話し合いが必要な手合かと考えもしたが、どうもそういうことでは無いらしい。そも、奴は息子を人質に出しているのだ。子を邪険に扱っているようには見えなかつたし、当のトルドスの為人を見れば、よく愛されよく躰けられているのがわかる。どう考えても馬鹿なことを考えたわけではないだろう。

さて、普通なら「何が起きているのか」と焦る場面かもしれないが、私には情報に通じた頼りになる仲間がいる。付き人として世を忍ぶ盗賊の二人なら、実は既に何かしら情報を得ていながらあえて伏せているのではないかと尋ねてみると………二人は顔を合わせ何ぞ小声で言い争い、次いでその目を泳がせ、「すぐ代わりの者を！」と揃って駆け出してしまった。

最低でも一人は私の側に付けておく体制であつたはずなのにと訝しみ、砦、ギルド双方の面々が真相究明のために度々入れ替わること半月、ようやく事態が明らかになつた。といつても、無駄に手間暇がかかつて面倒なやり取りを経た割に何のことは無い。実際は幾つかの行き違いから起きた、ただの連絡不備であつたのだ。

まずことの始まりとして、私がウインドヘルムを訪れた際に砦の者が自ら工作に走り、町の有力者を動かして私の処遇についての落とし所を作つた。

そして私が現在の任地に赴くと同時にその者は次の者と交替して、砦へ帰還した。当

然、この仔細はブレックスの耳に入ることとなるのだが、彼の頭目殿は配下の話す有力者の感觸を良好と判断し、更に太い伝手を作ろうと考えたらしい。

現在、ブレックス一味の立場は微妙なものである。ギルドとは不可侵の約定を交わしたために、ギルドの支援者を含めた関係者から付け狙われることは無い。そして、私の地下拡張工事も一助となり、表向きは解散して散り散りになったことになっている。しかし、依然として砦を占拠していることは事実であり、ギルド支援者の知らぬ間に『残党の討伐指令』が下されないとも限らないのだ。そこで頭目殿が目をつけたのが、ウィンドヘルム、ということらしい。

まず、一味の安全を確保するのなら、現状のまま砦に居座るわけにはいかない。それを通そうとするのなら、表立って攻撃されないだけの正当性が必要になる。あとは、その正当性とやらを保持し続ける資金力と政治力か。成らなければ居を移すしかない。……のだが、そのどちらにとってもウィンドヘルムは都合がいいらしい。まず、五大都市の中でも最も古い歴史を持つウィンドヘルムの有力者ともなれば、スカイリムの中でも上位に入る実力者だ。一味の支援者とするには申し分無く、一度だけとはいえ繋がりができたのならば、それを強固なものにしようと思むのは自然と言える。また、砦を引き払うにしても利がある。なんとと言っても、リフト地方の砦に比べてウィンドヘルムは、ウィンターホールドまでの距離が圧倒的に近いのだ。流石に、頭目殿の言う「無い

無い尽くし」のウインターホールドに一味がござって移動し潜伏する、というのは無理があるが、ウインドヘルムならばそれも可能だと。もつと言えば、船を使った交易にも便利だという判断だとか。普通、一味程度の規模で考える話ではないのだが、私の存在がそのあたりの常識を崩してしまつたらしい。報告に来た砦の者は「旦那は、ほら、アレですから」などという。アレとはなんだアレとは。儲けさせてやっているだろうに。盗賊ならおべっかの一つでも使つてみる。

と、ここまでが一つ。

次に、ブレックスの動きを受けてギルドがそれ等のあらましを察知し、彼のマスター殿が「一口噛ませろ」と嘴を挟んで来たのだ。後から便乗しようというのだから、ブレックス達は面白くはない。横取りも邪魔もしない、と約定を交わしたらしいが、そんなものは当然の話である。ブレックスは一応納得したらしいのだが、私は、ギルドのやり口に腹を立ててしまった。ちなみに、そのときのギルド側連絡員は我が友ブリニョルフである。他の者では私を抑えきれないと、メルセル・フレイは判断したらしい。正しいぞ。友でも無ければ殴りつけていたやもしれん。

しかし、カジット商隊やブラックマーシユの先遣隊と伝手を構築するために東奔西走しているはずの彼が何故、と思つたが、正にその両者とついでに私が別件に関わつており、その説明を兼ねていたらしい。

曰く、商隊や先遣隊に接触したところ、彼等にとって最も望ましい交易品は貴金属、次いで魂石なのだという。きな臭さが強まるスカイリムでは何をもち込んででも売れるが、輸送費を鑑みれば、小さくて値の張る物が好まれるのは道理である。地域に根ざした雑貨屋ではないのだ。そこで彼等が目をつけたのが、『ブラックリーチ』の魂石鉱床である。

そもブラックリーチとはなんぞや、という話なのだが、これはイーストマーチからウインタールドの地下に広がる巨大空間のことを指すらしい。入り口はドゥーマー遺跡であるため、侵入は当然の如く危険極まりなく、目的地たるブラックリーチに辿り着いてもそれは変わらないとか。なにゆえそんな場所へ行きたがるのかという話のだが、それが先の魂石鉱床である。

曰くスカイリムに今回ついている魂石のほとんどは、ドゥーマー遺跡深部か、このブラックリーチから齎されているらしい。後者の広大さを鑑みれば、その大部分はそこから考えていいだろう。私も、およそで書かれた地下空間の地図を地上の地図と重ね合わせるとき、あまりの、というより馬鹿げた広大さに驚いた。思わず、地下であることが信じられんほどの空間に聳える大樹と、静謐かつ雄大な水面みなもばかりが広がる『燻りの湖』を思い出したほどである。そしてこのブラックリーチなのだが、地下らしくかなり暗い空間なのどうか。ドゥーマーが持ち込んだ光る茸のおかげで全くの暗闇、というわ

けではないらしいが、「月明かりだけを頼りに街道を行く程度には面倒」と言われれば、どれほど暗いかの想像は付く。ここで、カジート、アルゴニアン、両者の関わりに行き着くわけだ。

まずはカジート。当然ではあるが、採掘にあたり暗闇で光源を用意すれば、それは脅威であるブラックリーチの住民に自らの所在を曝す自殺行為に他ならない。多民族であれば極々小さな光源を用意するか、茸の灯りだけを頼りに悪戦苦闘するのだが、カジートならば話は別だ。彼等は種族柄、夜目が利く。危険度を高める光源などを用意せずとも、昼間の地上と変わらず行動できるのだという。

次にアルゴニアン。聞けば、ブラックリーチに存在する危険は、直接的脅威と暗闇だけではないのだという。それは、深淺の別はあつても、そのほとんどが水没しているということだ。暗闇の中、何に足を取られるかわからない。そんな中でもし身の丈を超える水深の窪みに落ちたらどうなるか。頼りない光源では上も下もわからず溺れる可能性は高いし、よしんば助かったとしても、その過程で派手に音を立てていけば、散々話題に挙げている脅威が寄って来るだろう。だが彼等アルゴニアンであれば、そもそも水中の活動を苦にしない。何なら、潜水したままで数十分は活動できるのだとか。

つまり、夜目の利くカジートと水中活動が得意なアルゴニアンが協力すれば、最強の魂石発掘隊が結成されるのだ！（ブラックリーチまでの行き来と流通にはギルドが直接

的間接的問わず協力させられるらしいが)

が、まだ一つ大きな問題がある。魂石とは市場に出回る数が少ないため、貴金属ほどではなくとも高値で取引される。考えなしに市場に流し続ければ、値崩れを起こすのは自明である。その程度は私にも理解できるので、その問題をどう解決するのだろうかと思ねてみたら、私と、初めて聞く名前が出てきた。

曰く、スカイリム西端のマルカルスに、カルセルモという男がいるらしい。彼の御仁の正式な身分は首長へ魔術的貢献を行う宮廷魔導師であるのだが、その実態は『スカイリムにおけるドゥーマー研究の第一人者』という側面が強いらしい。世間一般の認知として、魔術師には変わり者が多く、忠誠より自らの知的好奇心を上位に置く者が多数らしい。彼も例に漏れず、首長への貢献は最低限に、他の全ての時間は寝食を忘れる勢いでドゥーマー研究に没頭しているのだとか。彼自身は自らの研究成果を嚴重に秘匿しているらしいが、彼独自の基準により取るに足らないとされたものに関しては、交渉次第では開示してやることも吝かではないとか。そして、面倒を嫌う研究馬鹿に代わってそれらの交渉を行うのがマルカルス首長イグマンドであり、要するに制御できない部下の研究が回り回って首長の利益に繋がっているから目を瞑られている、というのが実態だと。

閑話休題。そんなカルセルモ師であるが、彼の魂石消費量は他の宮廷魔導師の比では

ないらしい。普通の魔術師ならば、懷事情もあるのだろうが、必要最低限の材料を以て実験を行う。「必要最低限の材料が揃い次第、我慢がきかず実験にかかってしまふ」という氣質が往々にしてあることも否定し難いが。そんな中で師が取る手法は、気が遠くなるような試行回数を重ねて統計を取る、というものだ。仮説を立てたうえで、ドゥーマー遺跡から持ち出された用途も使用方法も不明な機械に魂石を用いて、動作を確認。結果を記録しつつ新たな推論を立て、再度実験、と。そんな手法ではいくら魂石があつても足りない。足りるわけがない。「何故この町の鉾山から産出されるのが銀なのかな？」とは魂石不足に噴瀧を溜めた師の談である。

そして、そこに目をつけたのが我が友ブリニョルフである。カジート・アルゴニアン合同魂石採掘隊の構想を練り、安定的かつ大量の魂石確保への筋道を立てた。採掘された魂石は私が充填する。それをカルセルモ師に直接卸す。すると魂石市場への影響は最小限に抑えつつ、ギルド、カジート商隊、ブラックマーシユのアルゴニアン貿易隊は互いに莫大な利益を得、マルカルス首長の側近にも伝手ができるといふ妙手が誕生したのだ。我が友ながら、流石である。

ちなみに、カルセルモ師と接触を持つ前は、魔術大学へ赴く私の背後に巨大な魂石産出組織があれば心強かろう、という心算だったらしい。いつも私のことを考えてくれる友の友情に、少しほろりと来た。彼は「お互い様だ」と笑って私の肩を叩いた。

以上のことから、ギルドとしてはイーストマーチからウインタールドにかけてカジットやアルゴニアンが快適に移動できるよう取り計らう必要がある、同時進行でウインドヘルムの有力者達にも食指を動かしている。

砦のブレックス一味は、ウインドヘルムを中心に有力者へ伝手を作りつつ、こちらはこちらで意趣返しの意味もあるのかは不明だが、魂石採掘に一噛みしようと企んでいる。

ここでまた話をややこしくするのが、私の立ち位置だ。

私は今でこそ盗賊ギルドの正式な外部協力者ではあるが、元は単独でブレックス一味に接触し、彼等の仲間となった。正確には頭目殿と友達になったのでなし崩し的に一味全員がついてきたのだが、今はどうでもいい。そして、両組織のどちらと先に友誼を結んだかといえば、ブレックス一味なのだ。となると、彼の頭目殿としては私の行う魂石の充填や付呪について「こつちに優先権がある」と主張したくなるのは人情というもので。かと言って、ギルドとて莫大な利益が見込める儲け話は極力単独で当たりたいわけで……。

私も当事者なはずなのだが、私の一切預かり知らぬところで利害調整に丁々発止の議論が続いていたそう。ちなみに、地力で圧倒的に負けるブレックス一味がギルドと対等にやり合っていたのは「あんまり欲の皮突っ張らせると、あの非常識が何をしで

かすか知らねえぞ。こっちは全員ダチになったから関係ねえが、そっちはブリニョルフ他数人以外全滅したって不思議じゃねえ」と一つハツタリをかましたかららしい。私とて、一味の中で顔と名前が一致しない者は多い。盗賊顔、とでも言うのか。印象に残りづらいのだ。聞けば、意図してそういう相貌を心がけているらしい。職業意識もあまり高いと周りが困る。主に凡人たる私とか。

また、ここでも我が友の名前が出たことで、いい加減メルセル・フレイの堪忍袋の緒が切れはしないかと心配になったが、彼のマスターは我が友と私について、考えを改めたいらしい。私という利を齎しながらも扱いづらい駒の手綱を、責任持って握らせてしまおう、と。その代わり、一見褒賞のように見せた権限の拡大や金銭の下賜などを行ったのだとか。要するに、見せかけでも優遇してやっているのだから、万一抑えが利かなかった時にはわかつているのだろうか？ とそういう脅しなわけだ。

私としては、そういうことなら心配無用と安心した。私がギルドに齒向かうときは、ブレックスではないが、ブリニョルフ他数名を除いて幹部連中を塵殺する。それでもブリニョルフに対する反感が収まらないのなら、ギルドを潰す。故に、ブリニョルフがこの件でギルドから懲罰を受けることは有り得ないのだ。友は悲しむかもしれないが、構成員が一掃されるだけで、また再建すればいい話である。まあ私とてだいたい人界の流儀には慣れて来たつもりだ。そうそう物騒なことにはなるまい。進んで友を悲しませた

いと思うわけもなし。

閑話休題。ギルドと一味が利害調整をするのは良いのだが、それなら別に私と関わりないところでしてくれれば良いものと思ったのだが、主に地理的な問題から私がイーストマーチに留まっているほうが、双方にとつて都合が良いらしい。

それ故、ギルドだか一味だかがウインドヘルムの有力者を通じて首長ウルフリックに私を緩く留め置き続けるよう要求し、ウルフリックはウルフリックでそのうち解放するつもりだったのが妙な話になったと首を傾げつつ了解し、混乱する現場のどこかの誰かの時点で私への連絡が疎かになったために、私は何も知らないまま採掘村で待ち惚けを食らっていた、というのがこの全容である。

わかるぞ。人間、余裕が無くなると親しい相手の扱いがぞんざいになるよな。ウインドヘルムの有力者然り、魂石採掘隊然り、大体場所はこの地域である。私だけ先に向うと、ただでさえ工作と利害調整に誰も彼もが忙殺されている中で、ウインタールドでの私の護衛が増えてしまい、「やってられるか!」と愚痴も零したくなるだろう。まあ、わかるぞ。でもな、少なくとも、私こそ親しい相手だからだと自らをそう納得させなければ、同じことを叫びたくなる。

正直に言おう………阿呆らしい。

おかげで私は要らぬ心配を抱いたし、顔を潰した形になったアーチルにも「例の友人

達がはしやぎ過ぎたようだ。すまぬ」と明かせる範囲で事情を書いた詫び状を送る羽目になった。言うまでもなく、事態の全容が判明した段階で、ギルド、一味の双方から何度か謝罪とその金品が送られた。しかし、どいつもこいつも本拠へ帰還する足が鈍いだ。ギルドマスター、メルセル・フレイも、頭目ブレックスも、毛色は違うがどちらも怖いからなあ。こつてりと絞られるといい。実際に私は迷惑を被ったのだから。

確認を怠った私に非が全く無いとは言わんが、暗黙のうちに情報については彼奴らの領分だと棲み分けができていたのだ。そのうえ、私の補助のために付いてきているものが足を引っ張る形になったわけなのだから、どちらに非があるかは言うまでもない。

余談だが、謝罪のためにやって来た最後の人員は、ギルド側は再度ブリニョルフ。一味側はハンであった。

我が友ブリニョルフに酒を奢られて、誠心誠意頭を下げられれば、私は強く出られない。メルセル・フレイはそのあたりを把握しているのだろうから、こういうところはちと狡いと思う。そしてその人選の理由についても承知していながらただ頭を下げるしかない友を見て、余計怒るに怒れなくなるのだ。それに今回の一件は、彼が私のためにと動いたことが遠因にもなっている。本人の罪悪感はひとしおだろう。しかし魂石探掘に目処がつけば、彼の目論見どおり、魔術大学へ赴く私の大きな助けになるはずだ。何せ大学全体を巻き込んで町の復興に協力的にさせねばならぬのだ。餌は多ければ多

いほど助かる。私にできることは、できるだけからりと笑い飛ばし、気にもしていないと全身で表現し、我等の友情には毛ほどの影響も無いと示すことだ。……多分、私の氣遣いも察せられているだろうから、妙な自罰的思考から友の胃に穴が開かないか心配だ。彼が寝静まったあとにでも、こつそり胃薬を鞆に忍ばせてやろう。私の胃薬は、今ではちよつとしたものなのだ。

ハンに関しては、ブレックス直筆の詫び状を持参し、「平に、平に」と自らの首を差し出してきた。此奴のこと、演技ではあるまい。私が滅多なことで無体を働くとは思っていないだろうが、この男、一味に厄が降りかかりそうになると、こういう肚を決めてくるからなあ。やはり怒るに怒れない。しかも、子供の訓練用に長さで調節された、木製の剣、短剣、短槍、それに弓と矢をそれぞれ予備分含めて持参してきた。ラナルクとトルドスのためだろう。下手な金銭より、こういう物を私は喜ぶとわかつているのだ。相変わらず如才無いことである。あまりに準備が良いので、怒りは消えて笑ってしまった。私が「もう気にしていない」と告げると、頭を掻きながら、肝が冷えました、などとほぎくのだ。食えん男だ。しかし、「二度は無いと誓います」と口にした奴の目は据わっていた。……もしかしたら、頭目ブレックスより副頭目ハンの叱責のほうが余程厳しいものになるのではなからうか。まあなんだ、ほどほどにな？

そんなこんなで一年弱を採掘村で過ごした私だが、そのあいだ遊んでいたわけではない。

まず、カジート商隊、ブラックマーシユ先遣隊両者から、莫大な数の魂石充填を依頼された。彼等にとつては計画の骨子である。担がれていないかの確認と、どの程度までなら可能であるのかの試しは必要であろう。こちらも、私個人が行っていることは秘匿するが、侮られないよう莫大な数の充填済み魂石をそっくり送り返した。それが不眠不休を要する作業であったとしてもだ。しかし種族柄からかスカイリムで差別に合ったからか、連中、なかなか用心深い。似たような量の魂石を何処からか掻き集めて、何度となく依頼してくるのだ。

今思えば、どこかの段階で妥協すれば良かったのかもしれない。しかし互いに意地を張ってしまったのか、莫大な魂石のやり取りが終わらない。途中から感覚が麻痺して、「どの程度から『莫大』』と言うのだったか？」などと阿呆な思案を浮かべながら作業を続けていたが。

結局、見かねたギルドの物言いにより、試しの儀は終わった。連中としても、こちらの輸送や隠蔽を含めた魂石充填から流通までの能力には納得したらしい。ギルド、一味、私は莫大な金貨を得て、連中は莫大な充填済み魂石を手にした。連中には今頃、無

理に魂石を掻き集めたツケが押し寄せているだろうが、私の知ったことではない。何せこちらは、不眠不休の疲れから独り言をぶつぶつと呟き、焦点の合わぬ目でひたすら作業を続ける様をラーナルクとトルドスに目撃されているのだ。父親の威厳が損なわれたのだから、少しくらい恨み言を言ってもいいだろう。

そのラーナルクであるが、私がトルドスを『遊び相手』として紹介したこともあつてか、少しして打ち解けられたようだ。素性の割に人懐っこい子だ。寧ろ打ち解けるには、トルドスの引け目が足を引つ張つた感まである。アーチルが余程言い含めていたのだろう。私が「無事に返す」と口にしたことをあれも聞いていただろうに、数日は緊張しどおしであつた。ラーナルクと同等、とまではいかずとも、私がそれなりに気を遣つて接している、と理解してからは、ラーナルクとも打ち解け、共に遊ぶようになった。

ちなみに、トルドスは十二になるらしい。ラーナルクは本人曰く「多分九つ」だそうだ。何故あやふやなのかは、物心ついた頃に母親が口にしてはいたものの、体調を崩し出してからは会話自体が減り、そうこうしているうちに『本当は自分が幾つなのかはつきり覚えていない』ことを伝えるのが母親を悲しませると幼心に思い、口をつぐんでいたそうだ。そのあたりを気にし始めるとキリがないので、この話題が出た日からラーナルクは九つとした。自分の歳が不明などと口にすれば、何処の世界でも不審がられる。面倒の無いよう適当に決めておき、母親への慕情は別としてしかと覚えておけば良

い。

採掘村へ着いて間もない頃。一日が始まり朝餉を食べればラーナルクはトルドスと遊びに行き、日が中天にかかる頃に揃って戻って来て昼餉を済ませ、そのまま並んで昼寝。昼下がりにまた遊びに行くか、私を相手に『訓練ごっこ』に励む。父親に教わった剣の素振りをするトルドスに触発されたのか、ラーナルクも皆で行ったような訓練をしたがるが増えた。やはり歳の近い者がいることは良い影響をあれに与えるだろう。アーチルには感謝したい。

……そんな日々が続くと思っていたのだが、私の威厳とやらは、早々にまた損なわれることとなった。

ウインドヘルムの町にヌレリオンという男がいる。偏屈で横柄で嫌味つたらしい男ではあるが、錬金術の腕だけは確かなのだ。その腕でウインドヘルムに小瓶がどうのという名の店を開いており、首長府のお抱えでもある。

しかしこの男、お抱え錬金術師の癖に、首長のために働くという気が全く無い。ある程度の金が稼げれば、あとは小瓶とやらの研究や捜索に少しでも時間を割きたいという、雇われ人にあるまじき職業倫理をしている。そしてこの男が採掘村へわざわざ出向き、私の仕事ぶりを眺めて言う。

「お前になら、私の仕事を任せられるだろう。金は払うから注文通りの数を期日までに

用意しておけ。私への連絡は不要だ。荷運びは衛兵を使え。以上。わかったらとつとと仕事にかかれ！」

これである。かかれも何も、お前が作業中に高圧的かつ一方的に物申したんだろうに、と腹が立った。手元に生成しかけの淡く透けたブロードソードが浮かび上がったが、ここで刃傷沙汰は不味いと思ひ直し、すぐさま散らした。この時期はまだギルド、砦一味の連絡不備が判明しておらず、私の処遇がどうなっているのか不明だったのだ。下手な行動は慎み、ある程度の地位を確立している人物との揉め事は避けるべきだと考えた。また聞くところによると下請け仕事としては割の良い給金が支払われることになっっているらしく、横柄ではあつても無体ではないと感じ、一応要求を呑むことにした。後悔は先には立たんのだが、それがいけなかったのだ。

私の魂石充填は、私の計画同様に秘匿事項である。にも拘らず、カジート・アルゴニアン連中の件が無くとも、ギルドや砦の一味へ供給する仕事はある。そのため、皆が寝静まったあとに、あてがわれた仮宿の中の錬金術工房で作業をすることになる。この頃にはラーナルクも、私が添い寝しなくとも泣くことはなくなっていた。隣にはトルドスもいることであるし。ただまあ、時々寂しそうな顔をするので、そういうときは「暖を取りたい」と言つて子供等を両脇に呼ぶことにしている。ラーナルクは喜ぶし、トルドスも親元離れて苦勞をしているのだ。少しくらい甘くしてやっても良からう。

魂石の充填で夜が使えないとなると、日中、普通の人間と同じだけの時間しか私には残されていないわけだ。その時間を使って、朝起きたら朝餉の支度をし、済めば片付けをし、村の住民に必要な薬を作成し、昼餉の支度をし、寝ている子供等を起こさないよう片付けをし、ヌレリオンからの下請け仕事を熟し、夕餉の支度をし……とこのような有様である。休みが、無い。少しも、無いのだ。汁物を一日分大鍋で作ったりと少しでも時間の節約を図ったが、身体が成長する時期の子供というのは、よく食べるのだ。効率を求めるにしても限度がある。かと言って、ラーナルクに「勝手に食べていろ」とは間違っても言いたくない。

そして、たしかにこの体は休息を必要とはしない。究極的には集中力とやらも脳の体力と言えるのだから、不死人たる私に『集中力が切れる』などという現象は起こり得ない、はずだ。はずなのだが、起こるのだ。説明はできないが、精神力と呼ぶべきか、何かこう、目に見えない靈魂的体力が消耗していく気がするのだ。そうすると、精密作業を要求される錬金術においては、事故の元でしかない。私はやむを得ず休息を取ることが増え、ラーナルク達の『訓練ごっこ』も付き人達に任せることが増えてきた。

それにヌレリオンの小狡いことに、私への発注量を徐々に増やしていったのだ。世の糊口を凌ぐ末端錬金術からは殴り掛かられそうな話ではあるが、奴の狡猾なところは、毎度の発注量を僅かずつ増やしたかと思えば、時折減らして見せるのだ。そうすること

で私に「なるほど、単にばらつきがあるのだな」と思わせておいて、また量を増やす。一度にドンと増やされては私も事情を問ひ質そうと考えるが、微量ではやむを得ぬかと呑んでしまう。それが重なり一年弱が過ぎた今となつては……当初の五割増の量を熟している。彼奴め、おそらく最初からこの量を任せる気でいたに違いない。

私の処遇についての連絡不備が発覚した時点でこんな依頼は蹴つてしまおうかとも考えたが、この地でこさえた錬金術師としての悪評がウインターホールドでどのように作用するか読めなかつたため、泣く泣く下請け仕事を受け続けるほかなかつた。おかげで私の時間的余裕は日を追うごとに無くなつていき、起床時間などの生活習慣はめちやくちやである。ラーナルクには常日頃から、こうなつてはいけない、と私を反面教師にするよう伝えている。その度に困つた顔をさせてしまうのだから、駄目な父親である。

今日も今日とて夕餉前に起床し、頭の中で取り掛かるべき項目を洗い出す。村民に納める分は先日荒方片付けてしまったから、残りは少ないはず。たしか、五日の内に近所の婆様へ副作用を軽くした睡眠薬を、半月の内に樵へ軟膏を納める予定がある。まずはそれからだ。そしてその次には、今月の内には首長府の衛兵隊へ傷薬やマジカ回復薬を、首長からの信用があるマスター・ヌレリオンへ恐れ多いことではあるが納品する必要がある。

先述のとおりそれなりの対価は頂戴しているとはいえ、便利使いされるのは大変気分

がよろしくない。「あの野郎いつか締めてやる」と独り言が零れる。同時に、私の口調もだいぶそれらしくなってきたものだ、と自嘲する。

ちなみに、連絡不備が発覚してから半年ばかり経つわけだが、ギルドや砦の一味にも様々な進展があつたらしい。そのあたりはブリニョルフが訪ねてきて、酒を勧めながら話してくれた。この日ばかりは私も流石に休息日とさせてもらう。ツケは翌日以降の私が払うのだ……と思いきや、彼は「君に時間を取らせるのだから」と、錬金術に通じた人員を数人寄越してくれた。筋書きでは、豪商達が私から錬金術を学ぶよう言いつけた使用人となっている。つくづく有難い。

「忙しいところすまないな、兄弟。さんざん迷惑をかけた手前、顔を出すのも厚かましいとは思うんだが、嬉しい報告はまず君にこそ聞いてほしいと思つたのさ」

「何を言うか兄弟。君はいつも私のためを思つて動いてくれているではないか。多少の行き違いがあつたとはいえ、私にはその心こそが温かく、最も重い。というか君は少々卑屈になりすぎなのだ。我々が単なる業務提携者でしかないのならば別だが、友なのだ。厚かましいくらいで丁度いい。それに謝り過ぎでもある。男が廢る。これ以上は聞かんで」

少し強く窘めたことで彼は苦笑し、それ以上の謝罪を口にしなかった。

「それじゃあお言葉に甘えて。まず第一に、ギルドの再興が予想より遙かに早く実現できそうなんだ。君の計画そのものはまだまだ途中であまり影響を及ぼしてはいないのだが、ほら、外部協力者の件と、その他選り取り見取りの英雄譚でね」

私が、無駄に煽て上げられるのを嫌うと知っていてこういう言い方をするのだ、この友は。よしてくれ、と虫でも払うような仕草を見せると、彼は悪戯つぽく笑ってみせた。彼が「第一」というこれは、私の魂石充填と付呪による新たな収入もあるが、ギルド分裂後、迅速にガマシン一派を吸収し、同様にブレックス一味を相互不可侵勢力としたことが大きいらしい。ギルドは基本的に無法者の集まりではあっても、ガルス在りし日の秩序はある程度は保たれており、その力も健在である。裏社会の事情通にはそう判断する者がそれなりにいるらしい。

そしてスノー・シヨッド家からさらなる資金援助と人脈の紹介を受けたことで、『膝下の有力者は、ギルドが立ち直る公算が高いと見ている』との噂が広がった、もとい積極的に広めたいらしい。スノー・シヨッド家云々はギルドとは無関係の私達の計画への出資だろうが、外から見ればわかるまい。特に、ここで話題に上げているのは全て裏の情報である。ただでさえ真偽を見極めるのは難しいのだ。無理もない。情報の流布はギルドの十八番であるのだし。

最後に、ウィンドヘルムでの新たな伝手を使い影響力を取り戻しつつあるという事実。これも砦の一味との協同作戦ではあるものの、概ね事実である。多くの者の目からしても、首長に裏から望みを伝えられる組織の力は確かなものと見えるはずだ。この件に関しても発端は私のやらかしであるからして、そのあたりも英雄譚とやらに含まれているのだろう。

「それから第二に、だが。スカイリム内に散った馬鹿共の始末がおおよそ終わった。結構長く鬱陶しい思いをすると覚悟していただけに、連中の不甲斐なさに呆れるやら、これからの仕事への不安材料が減ったことを喜ぶやら、まあ悪くないとみんな感じてるよ」

私が日々を魂石充填と錬金術に明け暮れているあいだに、ギルドは「第一」で語ったそれら好意的な視線をより強く引きつけようと、メルセル・フレイの指揮の下、スカイリム内に残った対抗派閥を一掃したらしい。ブリニョルフ曰く「木っ端」にまで離散した者共は、スカイリムの北部から西部にかけて潜伏していたようだが、それがかえって仇になった。件のカルセルモ師がギルドの外部協力者に就任したためである。とはいえ、師はギルドの活動に欠片も興味が無い。優先的かつ安定的に魂石が供給されれば、あとはどうでもいいという、ある意味研究者の鑑のような男なのだとか。……どこかのとんがり帽子の翁を思い出すな。

外部協力者となつたはいが自らの労力を一切割くつもりが無い師は、思い出したように懇意にしているという錬金術店の女店主をギルドに紹介した。このことが、自称『正統後継派閥』殲滅の決定打となつたようだ。どうもこの女店主、元々蛇の道にも通じる女傑であつたらしい。それにより、「リフト地方の真反対に位置する西部ならば」と油断していた者共を一網打尽にできた、と。そして既に東部から北部東側には影響力を取り戻しつつあることも踏まえ、東西両側からまずは中部を締め上げ、そして北に追い詰めるよう誘導して、トドメ、となつたらしい。

この『木つ端』共であるが、ギルドの衰退が思ったほどではないという情報を得ながらも帰参を願ひ出なかつたわけである。ガマシン一派やブレックス一味とは違い、こちらは見敵必殺とばかりに殺し回つたそうだ。彼等の言う「殺しは無しだ。ことはスマー卜に」は稼業にのみ適応されるらしい。まあ、ガマシン一派のときから「可能ならば生け捕り」だつたのだ。時勢を見極められない者にかける慈悲は無いのだろう。

極僅かな者が、スカイリムに安住の地無し、とシロデールに逃れたらしいが、それならそれで構わない、とは友の談である。実際、木つ端の更に木つ端が大陸中央に渡つたところで、スカイリム随一の闇ギルドへどうこうできるとは思えない。

「流石に、全盛期から比べればまだまだまだ天と地の差があるがね。あの頃は富が富を呼び、まさに小さな王国だつたんだから。でも俺が覚悟していた復興までの数十年は、確実に

大幅な短縮を見たよ。君のおかげだ。本当にありがとう。心から礼を言わせてほしい」「よせと言うに。私と君のあいだでそう何度も同じことを言わないでくれ。『親しき仲にも』とは言うが、限度がある。かえって面倒くさい」

「おや？ 兄弟が先程制止したのは謝罪についてじゃあなかったかな？ 礼については言及されていないなかったものだから、これから君が『頼むから止めてくれ』と懇願するまで褒めちぎろうかと思っていたんだが」

空恐ろしいことを言う男である。私とて人間であるから、褒められれば嬉しく思う。しかしそれも私の中の労力と見合ったものだと思うまでが限度だ。それを超せばただただ痒い。

「まあ、兄弟の面白い、もとい嫌そうな顔を見られただけで良しとするよ。

……ただ、これだけは覚えておいてくれ。謝罪はまだしも、俺が口にした礼については、一片の世辞すら無いということ。もしあの墳墓で俺と君が出会っていないければ、俺が君を兄弟と呼び君が俺を友と呼んでくれなければ、もし君がギルドに協力しようと思ってくれていなければ、ギルドの衰退はもつと目に見える形で進んだはずなんだ。これだけは言い切れる。俺だけじゃない。他の幹部も同意見だ。あのメルセルですらな。多分、ブレックスに聞いたとしても、似たような判断を下すと思うぜ。

仮定の話しをいつまでも続けたって意味は無いが、君がいなければ、きつと十年経と

うが二十年経とうが、再建の目処すら立っていないなかつたはずだ。もしかしたら、ギルドはさつき話した木つ端共と変わらない、リフテンを根城にする単なるごろつき集団にまで転落していたかもしれない。君の危惧するとおり、ブラック・ブライアあたりの走狗となつていたかもしれない。

ギルド再興の目的は完全達成されちゃいない。だが今話したような『かもしれない』未来とは、完全に決別することができたんだ。これからギルドは順調に再興を果たすだろう。俺がどれだけそれを喜んでゐるか、それを齎した君にどんな思いを抱いているか、わからない君じゃあないだろう？ なあ兄弟」

仮定の話をする内に独白の様相を呈していた彼の語りだが、あとのほうは声が震えていた。彼にとって、ガルスに残したギルドの、その再興は悲願である。たしかに、話に聞く絶頂期を思えば、足りぬものだらけだろう。資金力。政治的影響力。人員の再確保。何より、人々の中に抱かせる畏れ。『ギルドの復興具合を値踏みされている』という状況自体が、その証左とも言える。何せ在りし日の盗賊ギルドと言えば、できないことなど無く、敵に回せば確実に身の破滅が待つ、という恐怖の象徴のような存在だったのだ。ちよつとしたデイドラのようなものである。それを鑑みれば、友の口にするとおりの『まだまだ』なのだろうが、その目処がついたことは、やはり嬉しかろう。

出口があるのかすらわからない暗闇を、何の標もあても無くただ彷徨い続けるという

のは、なかなか堪える。足を止めてしまおうか。引き返すべきか。いつそ何もかもやめてしまおうか。この命さえ……。彼はそういう日々からの脱出を果たしたのだ。だからこそ、親しき者と喜びを分かち合いたいと思ひ、ここへ来たのだろう。

私は二人分の杯になみなみと酒を注ぎ、少し距離を詰めた。そして杯を掲げ、言う。「我が友の宿願の、序の口なれど確実に一步を踏み越えた偉業を祝つて」

彼も杯を掲げ、言う。珍しく、涙を隠すことをしなかつた。

「宿願達成への更なる飛躍と、我が友の計画成就を祈つて」

互いに互いの健闘を祈りつつ、乾杯、と口にして酒を飲み干した。彼は少し気分が落ち着いたのか、「いや実際、本当に『まだまだ』これからなんだがね」と頭を掻く。……なんとなくなのだが、この『まだまだ』という言葉、我々のあいだで事ある毎に出てきそうだ。まあそうだな。私とて力ばかり有り余っているだけの未熟な人間。『まだまだ』これからである。うん、しつくりくる。

感慨に耽つていと、少し照れくさい空気を変えようというのか、友が切り出した。「今までの俺の用事は終わりだ。ギルド構成員としての本題はここから。連絡事項の通達だな。よく聞いておくれよ。この前みたいなのは、お互いに困つてしまうからね。メルセルの嫌味はもう十分だ。

……まずはメルセルとブレックスからの伝言だ。イーストマーチへ再度根を張る工

作は一応の完成を見たため、これ以上の逗留は必要無し、だと。俺はカジートやアルゴニアン相手にあつちこつちしていたからあんまり関わってはいないんだが、流石は『ガルススの右腕』と我等がギルドマスター、といったところかな。そういった政治的作業ではまだ敵う気がしないな。

そしてこつちはブレックス個人から。不可抗力を多分に含みながらも当初の計画に比べて手前の動きが制限されたもんだから、件の老いぼれ首長はこつちで先に落とした。とつととウインターホールドへ向かつてご挨拶と洒落込めや。最終的な段取りは手前が町に到着してから詰める。だつてさ。やるもんだ」

友からの伝言を聞いた正直な感想は「ようやくか」といったもの。今ではすっかり村の者共とも馴染んでしまった。出立にあたり挨拶回りが必要なほどだ。しかし一方で、ギルドは一年とかからず五大都市の一角に根を張り直した、ブレックス一味としてはそれとは別に独自の伝手を構築したわけで、面目躍如といったところなのではないだろうか。友の言葉からもそれが窺える。というか、頭目殿の声真似が上手いな。我が友は多芸である。

そして、ウインターホールド首長をこちら側に引き込んだ、と。砦で計画を聞いたときには、その首長こそが一番の課題だったはずなのに。友の言ではないが、私もどんな手を使ったのか気になるころだ。頭目殿の話では、魔術大学に關しては然程支障は無

いとのこと。気が早いかもしれないが、これは計画が成つたも同然なのでは？ いやまあ、軽々に油断するべきではないな。いかん、気を引き締めよう。

私と同じように気を緩め「計画の明るい前途を願つて」と杯を掲げる友であつたが、私に行く先々、予期せぬ厄介事だらけだ。まだ油断したくない、と伝え、乾杯はもう少しあとまでとつておくことにした。多少白けさせてしまつたが、何の心配も無くなつてから飲む酒のほうがうまいだろう。それには彼も納得してくれた。

さて、そうと決まれば残つた仕事を片付けて、近所に別れを告げて、ウルフリックに形式的な挨拶をして、と。ああ、馬車の調子も確かめないとな。ここ一年近く、マルツコの牽く馬車は砦の者が輸送と移動に使つていた。どこか傷んでいないか、確認しておかないといけない。それくらいか？ いや、トルドスのことがあつたな。あれをアーチルに返すこと自体は何の問題も無いのだが、ラーナルクがまた泣きかねない。長く付き合つた同年代は初めてだつたらうからなあ。兄のように慕つていた。どうしたものか……。

悩んでいると、友がからかい混じりに言う。

「君も、あの小僧のこととなると子煩悩なことだな。もう十になるんだらう？ なら、ウインターホールドに着いてもう少し鍛えてやつてからだが、ギルドか叔父貴のところを人に借りて、ウインドヘルムまで会いに行かせればいいじゃないか。君のいないとこ

ろで色々経験させるのも手だろう？ それに聞いたぜ。あの小僧、俺達の業を手解きしてやったら、飲み込みが異常なくらいだとか。実は期待の新人、には早いが。その卵として、ギルドと一味の連中が水面下で処遇について綱引きをしてるんだ。君の養子で、本人の資質もとびきりと来れば、無理もないな」

友はからからと笑うが、私はそれどころではない。そんな話は一言も聞いていないのだ。……いや、私が話をさせてやるだけの余裕を持たなかったが故か。幾らかは仕方のないこととはいえ、駄目な父親だと幾度かの実感を得て、落ち込む。あれは父親に恵まれんなあ。

「そう落ち込むことはないと思うぜ？ 俺は小僧とあまり接点が無かったが、『お父さんみたいになりたい』と口にしてるのを聞いたことがある。どうせ無理だし、兄弟自身が嫌がりそうだと思ったんで『やめておけ』と忠告したんだがね。意地の悪いことを言われたと思ったのか、睨まれちまったよ。なかなか慕われているじゃないか。え？ お、と、う、さ、ん？」

私を元気づけようとしてくれているのはわかるので、空元気で背筋を伸ばして友に礼を言うが……。しかし私のようになりたいたと。友の言うとおり、こんな欠点だらけの人間など目標にするべきではないというに。それでも一途に慕ってくれていることに涙腺が緩くなりそう。我慢するが。多分目の前の兄弟にはバレているだろう。い

かなな。

「君の言うことも道理だな。あれの心の傷が許すようなら、少しずつ、色々やらせてみるのもいいかもしれん。少なくとも、スカイリム随一の闇ギルドの幹部を睨みつけるだけの度胸はついたようだしな？」

実際のところ、あれは自分の周りにいる人間がどれほど恐ろしい者達かなど知りもしないだろう。が、友も私の言を聞き「おお怖い」なんぞと言っておどけて見せる。まあ成るように成るか。それは私も、あれも、同じことだ。

人が感慨に耽っていると、「あ、忘れてた」と言う友が一人。何事かと思えば、「兄弟に無礼を働いた愚か者は、ギルドが密かに所有している鉱山に飛ばした。表向きは武者修行の旅だ。数十年働けば出られるが、そのときはスクーマ中毒の廃人にしてソリチュードに放り捨てる予定だ」とのこと。

アーチルには納得してもらったが、そんな目に遭うのなら、やはり死んだほうがマシなのではなからうか？ とはいえ私自身言われるまで忘れていた程度の話だ。どうでもいいことである。

が、我が友が「愚か者」など重い言葉を使うときは、真面目に怒っているときだ。あまり軽い反応を見せて話がかじれても面倒なので、私はそれで満足だと伝える。友は笑顔を見せてくれた。かえって怖い。

ウインターホールドにて一人の老人が、まだ日も高いというのに寝台で横になつてゐる。ウインターホールドの首長、その人である。

少し前まで、病気がち、というわけではないのだが、全身を犯す倦怠感に抗う気力も湧かず、首長としての務めも最低限に、空いた時間のほとんどを寝台の上で過ごしつゝした。しかし、今、体を休めているのは全く違ふ、それこそ真逆の理由である。

ここ数日の彼は、朝は早くに起き軽く剣の鍛錬を行い、精の付く朝餉を済ませたら政務に励む。昼餉のあとにはあえて横になり、老いた身体を労ることにしている。そしてまた鍛錬と政務に励み、夕餉を終えれば十分に温かくして床に入る。

周囲の者達は揃つて訝しんでいる。しかし、首長本人からは「そのときが来ればわけを話す」と伝えられてゐるため、また悪い変化でもないのだと、好意的に受け止め好きにさせてゐる。だが、健康的な生活を送る老人の、その内面までもがそうであるとは限らない。老人は周囲に悟られないよう振舞つてはいるが、一人になると決まつて淀みながらも怪しい光を湛えた目をする。そしてこれから己の為すことに思いを馳せ、昏く笑うのだ。

そこに、一人の男が忍んで来た。

「閣下。直に彼の者が到着するとの報告が入りました。表での謁見を執り行い、その後は段取りどおりに裏での話し合いに参加していただきたく、お願い申し上げます」

老人が現在いるのは寝室である。声の主はおそらく屋根裏であろうが、声の出どころがわかりにくく聞こえる。これも連中の業か、と老人は気味の悪さを思いつつも、同時に頼もしさを覚える。

しかし、自身が承知したことでありながら、老人はついおかしくなり嘲笑が浮かんでしまう。

「不遜よな。盗賊如きがこのウインターホールド首長を捕まえて、その行動を意のままに操ろうというのだから。故にこそ愉快でもあるのだが」

以前なら、盗賊など薄汚い鼠としか思えず、そんな者から話を持ちかけられるという事態そのものにウインターホールドの凋落を強く実感させられ、無力感に苛まれたろう。しかし今は計画を思えば、それもまた一興と感じる。正道ではないから成せることもあるし、元よりそんなくだらない道を歩む気も無い。

屋根裏から返事は無かった。良いのだ。どうせ形だけの謝罪など求めてはいないし、それなりに使いやすい、と思わせておくほうが、身の安全にもつながるだろう。尤も、計画がある程度推移したのならば、己が身の安全などに如何程の価値があろうかとも思う

のだが。

「さて、順調にことが運べば良いの。でなくば面白くない。この老いぼれに夢を見せてみよ。そのために、上手に儂を使えよ？」

屋根裏から返事は無かった。老人は再び笑った。

閑話、ブリニヨルフの憂鬱

男が『旅の錬金術師』としてイーストマーチに長逗留しているあいだ、ブリニヨルフは精力的に活動していた。

ガマシン一派襲撃後の謹慎などはとうに解け、表の顔と裏の顔を存分に發揮し奔走してみれば、むしろ謹慎期間から襲撃まで、ブリニヨルフは盗賊にも拘らず休み無く勤勉に

働き続けていたのだ。全力稼働の前には、休息も必要である。

後に友と酒を交わしながらこの頃のことを思い出すのだが、ギルド再興に力を尽くす日々の、なんと充実したことであつたらうかと。

自らの働きがギルドの益となり、それが着実に再興へと繋がっている。ギルドの誰もが今日より明日は良くなると信じ、精力的に活動している。自らが齎す成果。仲間との連帯感。いずれも心地良いものだった。

それがブリニヨルフには、暗闇の中で微かに、しかし確かな灯りをもたらす篝火の如き風景に見えていた。今はまだ昏く、寒い。しかし夜明けは必ず来る。篝火に向かって進めば、きっと望みは叶う。そう信じられた。

時折、文字通り光明の象徴である篝火が、一人の人物と重なることがあった。心象風景ではあるが、ブリニョルフはその非現実を抵抗無く受け入れることができた。頭で理屈を、心で繋がりを感じる。標となる温かな火の灯りは、友が齎したものであると。

当の『灯り』は、本心を過不足無く伝えようとすればするほど、照れ臭そうに制止するため、ブリニョルフとしては少々不満が無いでもない。それだけ、自分の受けた恩は大きいと思っているし、それはギルドの他の面々も認める事実である。

……一部、個人的感情により素直に認めたがらない者達がいなくてもないが。そしてそれ等とは別に、ギルドにも様々な動きがあった。

ブリニョルフがカジート商隊、並びにブラックマーシユの先遣隊と接触を持った頃、レッドガードの女盗賊が一人、ギルドへ加入した。名はトニア。

加入に際し、当初はメルセル自らが高待遇を口に勧誘したが、トニア自身の希望により志願の形をとった。

彼女は、盗賊としての技量は然程でもないものの、頭が回り、与えられた簡単な仕事程度なら何でも卒なくこなせる能力を周囲へ示した。

在りし日のギルドでは、ブレックスなど名の通った人材でなければ、慣例として平の構成員から長く下積みを経験することになる。だが、現在のギルドの人手不足は深刻であり、彼女の有能さを見抜いたメルセルは、この極上の獲物を逃してなるものかと勧誘した。しかし彼女は慣習を守り、自らの能力でギルドへの有用性を示した。

トニリアのそういった態度は、今なお昔日の思いを抱く構成員に下手な不満を持たせないものであった。鳴り物入りの加入を避けた結果か、当初彼女が周囲に抱かれた印象は『如才の無い新入り』である。

そうこうしているうちに、トニリアが銭勘定に明るいこともわかった。そのうえ宝物を始めとした物品の目利きに長け、何より独自の販路を持つていたことが決め手となり、彼女がメルセルの提示した待遇を受けることに物申す者はほとんどいなくなった。

販路について初めから明かさなかったのは、「まずは認められてから」という思いであったことと「使い捨てにされては堪らない」という用心からであった。ギルドの面々には、その胆力と慎重さは好意的に受け止められた。

そのように上手な立ち回りを見せていたトニリアではあるが、時として幹部の意向には逆らい難い場合もある。彼女はデルビンからの熱い要望により、後の話ではあるものの、数年後には幹部入りとギルドの倉庫番に納まることが決定する。

メルセルはともかくデルビンからの要望は、先述にもあるが、とにかくその手の仕事

を任せられる人間が離散してしまつたがための人手不足が原因であつた。

ギルドの分裂は構成員の絶対数のみならず、組織運営を担う幹部や台所事情を把握し任せられる人員を大きく減じた。これは、スカイリムの裏の経済を支配してきたギルドにとつても痛恨事であつた。

そのため、日に日に勢力を取り戻しつつある組織によつて忙殺されかけていたデルビンは、それを解消できる人材を、喉から手が出るほど欲していたのだ。

とはいえ、トニリアに約束された高待遇に反発する者が全くいないわけではない。物資及び資金管理の役目は、どの組織でも大なり小なり嫌われるものだ。新入りがその席に就くなど、反発があつて当然とも言える。

しかし、ここでも彼女はそれらの問題を自らの力で解決していった。

トニリアの有能さは、単に能力の高さだけではなく、無法者の巣窟で上手に融通を利かせられることであつた。

仕事はできるが経費としての出費が多いものには、窘めながらもある程度は融通してやる。それによつて本人は存分に力を発揮して仕事を成功させ、自信を付けて更に大きな仕事へ挑んで行く、という好循環を作る。

ほかに、自制心が弱く、酒や女で散財してしまい、肝心の仕事に取り掛かるにも必要な装備を整えられない、などという者もいる。以前はブレックスが目を光らせていた

が、居ない者をあてにしても仕方が無い。彼女は、そのような愚か者には目立たないところで激しく叱責したうえで彼女自身の財布から援助してやり、装備を整えさせる。

勿論、仕事が成功したあかつきには、祝い酒で散財される前にきっちり援助金を回収することも忘れない。

そうした日々を通して、無法者共の中に、彼女に頭が上がらない人間を増やしていた。その成果の一環として、ある者は彼女を親しみを込めて「トン」と呼び、あるものは彼女を悪戯心で「お袋さん」と呼ぶようになった。

身内としての空気がすっかり形成されてしまえば、新入りの高待遇に不満を持っていた者も、表立っては言えなくなるし、なんなら良い関係を結んで自分もお零れに預かったほうが得だ、という算盤を弾くくらいはする。

そうして地位を確立していったのが、トニリアという女性であった。

また、レッドガードはノルドからすれば外見から歳が判別しづらいが、彼女はかなり若いように思える。そして他種族の目からしても、滅多に見ない美貌を誇っていた。

構成員達は、トニリアの目が肥えていたこともあり、「大戦か政争で敗れた部族の姫がスカイリムの裏社会に流れてきたのでは？」と噂した。

それが真実であるかは不明であるが、しかしメルセルが当初から高待遇を持ちかけていたことを考えれば、「無い話でも無い」というのが皆の結論であった。

それから少しして、ブリニョルフがマルカルス宮廷魔術師のカルセルモを外部協力者として迎えたことを契機に、しばらくギルドと距離を置いていた銀細工師のイーザイルが再び外部協力者として就任した。

ギルドとしては、政治的影響力やその伝手を思えばカルセルモも貴重な人材であることには変わりないのだが、如何せん、彼の魔術師はギルドの活動に対して興味が無さすぎた。現地の外部協力者を通してその地域での経済活動に一瞥みたいギルドとしては、痛し痒し、というのが本音であつたのだ。

しかしここで、代々マルカルスで銀細工師を営み、代々ギルドと浅からぬ関わりを持つていたイーザイルに焦りが生じた。

ギルドの分裂は耳に入っていたため、一度距離を置いて趨勢を見極めようとしていた。だが、宮廷魔術師などという表の社会で高い地位に座す人物が外部協力者に就任したことで、ギルドは自分を切り捨てるつもりではないのかと考えたのだ。

彼にとつてギルドとの商売は、用心こそ必要だが、大変実入りの良い話であり、失うには痛いものだった。それ故、デルピンを通じて再びギルドへ接触し、外部協力者に就任したのだ。

ギルドからすれば、外部協力者として本来の役割を果たしてくれるイーザイルの就任は非常に有難いことであり、先方からの申し出、という点も喜ばしかった。ギルドに自ずと人が戻りつつある、という事実は、多分に都合の良い喧伝材料であったからだ。

また、イーザイルからしても、この選択は悪くないものであった。

ギルドは、カルセルモの協力により分派殲滅作戦の只中にあり、作戦が無事完遂した後では、彼の扱いそのものを変えることは無くとも、その印象が特別良いものになることは無かつただろう。しかし、未だギルドがスカイリム全土を掌握していない状況での協力申し出は、否応無く同族意識を高め、種々のやり取りを円滑にする。

そういった意味で、イーザイルはかなり瀬戸際の好機を逃さなかつたことになる。図らずも、皆が得をした形であった。

ところで、イーザイルは腕のいい銀細工師であり、その名はスカイリムのみならず、シロディールの好事家にまで伝わっている。

そして、彼が協力者に就いたことで商品の流れが幾らか変わったことを、シロディールから目敏く見つける女盗賊がいた。名はヴェックス。

彼女は、大戦でサルモールの略奪に遭い親を亡くした、帝都の孤児であった。

大戦当時、帝都どころかシロデイール全土が混乱していたこともあり、彼女が頼れる『大人』などは何処にも存在しなかった。サルモールはインペリアルを人とは思わなかったし、帝国軍でさえ、身を寄せる同胞を「困窮からサルモールについた間者ではないか」と疑ってかかる始末であった。

やむを得ずヴェックスは、乳歯をぐらつかせながら歯を食いしばり、一人で生きていくしかなかった。

ヴェックスはサルモールの略奪を避け、帝国軍の反撃を尻目に、陰から陰へ身を潜めながら生き抜いた。

大戦では多くの子供が孤児となり、互助組織と呼べる程度には簡素な集まりがそこかしこにできていたが、大抵は背が伸び切る前に死んだ。激動の帝都で生きるだけの力が足りなかったのだ。

しかし幸いなことに、ヴェックスには天性の才があった。体幹が強く静かに素早く移動する特技と、異常な手先の器用さ。それ等は孤児が最も手早く食い扶持を稼ぐための盗み働きの場や、血気盛んな両軍の兵から隠れる際、大いに役立つてくれた。

結果、彼女は多くの同胞達と同じ末路を辿らずにすんだ。

彼女が最も得意とした仕事は、家屋へ忍び込み金目の物を盗み出すものであった。

万事ことがうまく運べば空き巣。下手を打てば強盗。更に下手を打って、怪我ではす

まない目に遭つたこともある。それでも彼女は、顔を俯かせて歩くことだけはしなかつた。眦を吊り上げ、その美しい顔をいくらか険しいものにしながら、何があるかと絶対に負けてなるものかと、矜持だけは曲げなかつた。

人は言うかもしれない。他者の持ち物をくすねる悪党、屑の分際で何が矜持か、と。

しかし彼女にとっては、生きることそのものが戦いであつた。帝都の多くの住民の中でも特に、親も家も無い子供が生きていくことは、大戦で英雄になることと同じだけ難しいものであつた。

だから彼女は己の生を恥じなかつた。文句があるなら、大戦なんて起こして両親を殺したサルモールに言えと吐き捨てる。サルモールが怖ければ、市民を守れなかつた帝国軍に言えと吐き捨てる。

彼女に才があつたとはいへ、生まれながらにして盗人だつたわけではない。両親からの愛情を受け、それなりの倫理観は備えていた。だからこそ、心無い言葉や襲い来る暴力に時折挫けそうになる。その度に同胞の終の姿を思い出しては、「絶対にああなつてたまるか」と、やはり歯を食いしばって生き延びた。

終戦から数年が経ち、ヴェックスが己を『いっぱし』の盗賊だと思ふようになった頃、多くの盗賊がスカイリムから流れて来た。

彼女はその中の一人を捕まえて、勝手のわからない帝都でいきなり仕事と言っても大

変だろう、と酒を交えて簡単な帝都の歩き方を伝授してやった。その代わり、スカイリムで何があつたのかを吐かせた。

実際には、男は少女と呼ぶべき年齢の女盗賊が口にする馴れ馴れしい挨拶に眉をひそめていたが、帝都へ着いて早々に揉め事を起こすのは得策でないと判断し、彼女の誘いに乗つたのだ。

そして男曰く、ガルスなる大盗賊が暗殺され、スカイリムの盗賊ギルドが分裂した。現在、正当後継を決めるために各派閥が争い合っている。自分達はギルドに見切りをつけて、シロデールを新天地と定めた。元ギルド構成員の男はそのように語つた。

ずっと一人だつたヴェックスにとって、男がギルドを見限つたことに対して思うことは無い。何なら、問題があるのは見限られるギルドのほうだとすら思う。

しかし、ヴェックスにとって重要なのはスカイリムのギルドなどではなく、男の齎した盗賊たちの動向こそが、彼女の欲するものであつた。

いくら見限つたとはいえ、古巣の情勢は気になるだろう。スカイリムの情報を得たい者は、シロデールの中でも北部に潜伏するはずだ。目の前の男のように、『最も稼げそうな場所』を求めらるなら、ここ、帝都だ。西部も悪くはないが、男はノルドであり、男の同胞も多くはそうだろう。アルドメリ自治領に近い西部は心情的にも実状的にも選び難いはずだ。可能性は低いが、スカイリムのギルドが脱走者を執念深く追つてくると

すれば、それを避けるには南部か東部、もしくは更に別の国へ逃げるほかない。

そしてそれだけの盗賊が新たにシロデイルへと侵入し、跋扈するとなれば、警邏の目はそちらへ向くはずだ。

ただでさえ大戦後の治安維持に奔走している帝国軍としては、長引かせたい状況ではないだろう。集中的に兵を投入するなら、まずは北部から帝都周辺。そうして北からの侵入路を一掃したのちに、南部から東部へ広く展開するだろう。

裏をかいて西部へ潜伏する者もいるやもしれないが、どの道、帝国軍は西部へ大々的な派兵ができない。休戦したとはいえ、いや休戦を、それも不利な条件で行ったが故に、アルドメリ自治領と近い西部に兵など送れないのだ。

万が一にでも挑発と取られる、ないしは挑発だと言い掛かりを付けられて再び開戦ともなれば、帝国は今度こそ国土を守れるか甚だ怪しいところである。

実際にはサルモールにしても、対帝国、ハンマーフェルの二正面作戦で兵力を大きく減じており、争いになる可能性は低い。だが小さな諍いから、帝国側に不利な状況が生み出される可能性は十分にある。

そのあたりを読んだヴェックスは、穴があるのはやはり西部だと睨んだ。既に終戦しているのだ。帝国軍はともかく、インペリアルインペリアルの市民である自分がシロデイル西部を闊歩したとして、何の問題があるというのか。

ヴェックスは男に餞別として飲み代を奢り、拠点へ戻るとすぐに盗みの計画を立てた。そして目星をつけていた貴族邸や豪商宅を次々に襲うと、ひと月としないうちに生まれ育った帝都をあとにした。

いくらかの感慨が浮かびはしたものの、後ろ髪を引かれる思いはしなかった。存外、そういつた感傷とは無縁な性質なのかもしれない。彼女は初めて知る自分の一面を、少しおかしく思った。

ヴェックスがシロデール西部に潜伏して数年、いつもの如く貴族邸に忍び込み、目当ての銀細工を見つけたとき、彼女は転機を迎えた。

銀細工の側には添え状があり、品が貴族の元へ届いたばかりだということ。更にはそれがイーザイルの作品であり、且つまつとうな流通経路を辿っていないことを示していた。彼女は、これが我が身に降り掛かった望外の幸運だという直感を得た。

そこで、迷うまもなくあえて銀細工をそのままに添え状だけを盗み取り、邸宅を後にした。そして山中行軍や、時には商隊から馬を盗んででも、考え得る限り最速の手段をもってリフテンへと訪れる。

数日後、リフテンの市場を善良な市民としてうろついていたギルド構成員は、自分達と似た身のこなしの少女を見つけ、その相手が間諜の類ではないことをすぐに理解した。その確信は余所者の少女が自分へ接近する意思を見せている様子から察せられ、で

あればギルドへ何らかの用があつての態度なのは自明であつたからだ。

構成員が声をかけると、案の定、ギルド加入希望者だとわかつた。そこで、その晩に簡単な試験を課し、危なげなくこなして見せたために、フラゴンへと彼女を誘つた。

直接案内をせずラットウェイを攻略させるのは、用心と、半ば様式美と化した通過儀礼のためだ。

無事に目的地へと辿り着き、フラゴン内部に通されたヴェックスは、その様子を見て若干意外に思つた。と同時に、矛盾するようではあるが、自分の考えが間違つていないと確信し、自らの選択を誇つた。

逃亡者が続出するようなギルドにしては落ちぶれた様子は然程見られず、銀細工師イーザイルを抱えて取引を行う程度には力を維持、あるいは取り戻している。彼女がシロデイルの貴族邸でした予想は、実際に正鵠を射るものであつた。

構成員の案内でギルドマスター、メルセルの元まで連れられ、そこで初めてヴェックスは貴族邸から盗んだ添え状を懐から取り出した。どういふつもりかと怪訝な顔をしてみせる構成員に対して彼女は言う。

「アンタ等が懇意にしてるお得意様から盗み取つたんじゃ、ギルド入りは叶わない。でも、アタシはアタシの力を証明してみせる必要があつた。だからだよ。それに、その程度もわからない脳味噌チーズ女は、お呼びじゃないだろう？」

メルセルは、イーザイルの銀細工がシロデイール西部に届いてからこの小生意気な少女がギルドへ辿り着くまでの時間を逆算し、その判断の迅速さに驚いた。それは、メルセル自身の考える最速に近いものであったからだ。

彼女に興味を湧いたメルセルはその腕前を見るために、更に幾つかの試験を課した。

結果、自らを『いっばし』だと思っていたヴェックスの鼻っ柱は押し折られた。自分が得意としていた業のほとんどは、ギルドの者ならできて当然、といった具合だったからだ。

ただ一点。唯一鍵開けの業だけは、メルセルをして天才的と言わざるを得なかった。彼女の自信は皮一枚でつながった。そして歯を食いしばり、絶対に『上』までのし上がってやると誓った。その反骨は、ヴェックスという少女にとっても懐かしいものであり、悪くない心地であった。

ブリニョルフ自身は大きなしきのためのフラゴンを空けがちになっているが、帰還する度に報告と情報交換は怠らず、これらの話も当然耳にしていた。ギルドの復興具合の様子見て、新規加入者が増えている。その中に、若く将来の有望な者もいる。何もかもが順調だと思つた。

ただ、だからこそ心配なこともある。ブリニョルフが今、酒を飲んでいるカウンターの主、フラゴンのマスターたるヴェケルは、一度ギルドへ反旗を翻したために稼業を禁じられた。そしてその直後から、徐々にではあるがギルドは栄光を取り戻しつつある。

ギルドが長く低迷するなら、まだ気持ちも違ったかもしれない。しかし自業自得とはいえ、こうも順調に復興が進むのなら、「あの一件さえ無ければ」とそう考えてしまっても無理はない。

もし奇跡が起きて時間が巻き戻ったとしても、当時のヴェケルでは同じ行動を取っただろう。ガマシンは気に食わなくとも、多くの仲間を無駄死にさせかねない状況はなんとかしてやりたいと考えたはずだからだ。

だが、でも、と。人間の感情は時として理屈に反する動きを見せる。

そのヴェケルが、対面に座るブリニョルフに様々な話を聞かせていた途中、他の者の目が自分達から離れた一瞬の隙を突いて、素早く手紙を渡した。ブリニョルフもそれを何食わぬ顔で素早く懐へしまい込み、そのままギルドの明るい未来について歓談を続ける。

ブリニョルフとしては手紙の内容が気になって仕方ないが、怪しまれないためにも会話に集中するべきだと考えた。

その直後、ブリニョルフの思考を読んだヴェケルは皮肉気に笑い「案外、フラゴンの

マスターも悪くないもんだぜ」と嘯く。

自らの葛藤や罪悪感を悟られたブリニョルフは苦笑するしかないが、友がそう言うのならば、そうなのだろう。実際、友の仕草や体運びを見て、衰えている、とは見えない。言うとおおり、自分が思うよりも多忙な毎日を送っているのかもしれない。

仮に痩せ我慢だとしても、それを言えるだけ大したものだと思うし、自分は彼の気遣いをこそ尊重するべきだ。ブリニョルフはそう考えた。

ブリニョルフはフラゴンを出て、また翌日から遠出の支度をしなければならぬと、するべき項目を文字通り指折り数えながら帰路についた。そして帰宅すると、戸締まりをし、侵入の形跡が無いこと、外から監視されている様子が無いことを確認した。そのうえでやつと、懐から手紙を取り出した。

ヴェケルから聞く表向きの話は、自分をひたすら上機嫌にするばかりであったので、かえってこの手紙の存在が気を重くさせる。しかしいつまでも眺めているわけにもいかない。

灯りの側で短く纏められた文面に目を通すと、それはブリニョルフを憂鬱にさせるには十分な内容が書かれていた。

—— しばらくメルセル体制が続けば皆が慣れたかもしれないが、ギルドの復興

が思つたより早い。奴に反感を持つ馬鹿共が、「メルセル抜きでもやれたんじゃないか」と徐々に不満を漏らし始めている。今は俺とデルビンで抑えているが、何か手を打ったほうがいい。連中が担ぎ上げようとしているのは、お前だ。

ブリニョルフはヴェケル本人がその首謀者ではないかと一瞬頭をよぎつたが、友が自分に嘘をつくとは思えない。抑止の側に回ってくれていることに感謝しつつも、手紙には、次点でブレックスも候補に上がっている、とある。すっかり酔の覚めた顔を天井へ向け、手紙を燃やしなから思う。

「勘弁して欲しい」と。

蠢動 ウインターホールド復興

二二、二度の謁見

「では、少々くどいと思われるやもしれんが、最後にもう一度だけ言わせてくれ。そなたの力、私のために奮つてはくれまいか？」

「申し訳ございません、閣下。御身には、我が身に余る褒賞と礼を尽くしていただきました。それ故、そのお心遣いを固辞し続けることが本当に正しい行いなのか、私自身わかりかねているほどにございます。しかし、今の我が姿を見て、亡き父祖がどう思うかが、この身には最も重要で、最も恐ろしいのです。万が一にも、閣下のお心に沿うた私を父祖が見て『金に絆された』などと無礼な見当違いを抱いてはなりません。何せ一度こうと決めれば絶対に筋を曲げない、古い考えのノルドなものですから。誠、悩ましいことですが、御恩有る閣下にそのような愚かな考えを向けぬとも限りません。ならばこの身は一度、ウインターホールドの復興のため働き、然る後に閣下がお立ちになられた際には、非才のこの身が何のお役に立てるかわかりませんが、微力を尽くす所存にございます。

我が身は卑しき旅人にも拘らず、英傑たる閣下に繰り返しお心を砕いていただいたこ

と、それこそを我が名誉とし、堂々と彼の町へ赴きたいと、そう考えます」

私の口上にウルフリックは表向き残念そうにしながらも領き、脇に控えていたアーチルへと目配せをした。そしてアーチルが更に脇に控えている官吏に目配せをすると、ずつしりと重そうな箱を恭しく掲げながら私の前まで持ってきた。

「ではこれ以上の引き止めは無粋であろう。だが、そうだな、あえて言わせてくれ。友よ、これは我等の友情の証である。断じて褒賞などではない。そなたの旅の無事を願ひ、また、我等の再会を願うがための物だ。どうか遠慮せずに受け取ってほしい」

首長が自らの無粋を引つ込め、友情の証として金銭を送るといふ。これを受け取らなければ、こちらが無粋となり首長の顔を潰すことになる。政務に携わる者というのは、どうしてこう、こちらの逃げ道を塞ぐ真似が好きなのか。とはいえこれも取り決めどおり。ならば少々大袈裟に驚いてみせようか。

「なんと！……誠に恐れ多いことではございますが、我が身を友とお呼びくださる閣下のお心意気、有り難く頂戴する次第です。些事から大事に渡りこの身を氣遣っていただけましたこと、重ね重ね御礼申し上げます」

鷹揚に領くウルフリックと、主君の寛大さに感じ入っているアーチルが対照的で少しおかしい。あの男、それなりに後ろ暗いことも解するはずなのに、主のこととなると少々盲目的ではなからうか。まあ、言うだけ野暮か。

アーチルの反対側に控える厳しい男、先程手合わせしたガルマルが、こちらは私を引き止められなかったことを本気で悔やんで不機嫌顔を曝している。此奴は此奴でまたウルフリック第一というかなんというか。私の中でウィンドヘルムの印象は、『一本氣だが面倒臭い』に固定されつつある。

「では、達者でな、友よ。身体を厭えよ。……退出を許可する」

最後の一言を合図に、私は跪いたまま更に深く礼をする。そのあいだにアーチルが私の側まで歩み寄り、同道しつつ謁見の間から退出した。

まだだ、もう少し。あと少しで王の宮殿から出る。出口が見えてきた。私は現在、一応とはいえ賓客であるため、番兵は戦斧を捧げてから石突で地を叩く儀礼を見せ、私達が扉を潜り旅立つのを祝福している。……今少し。

更にやや進んだ交差路で曲がり、小声でアーチルに衛兵の目が無いか確認する。呆れを含みつつ「もう誰も見ていない」と聞こえれば、どっと身体から力が抜けて溜息が出る。

「疲れたぞアーチル。何も手隙の文武仕官達を並べ立てての拝謁である必要はなかったろう？ こっちは庶民なんだ。あんまりいじめてくれるな」

私の愚痴混じりの文句に対し、アーチルは皮肉げに笑う。なんでも、歌にまでなった私の謁見を、あまり簡素にはできなかつたそうだ。ということは……。

「つまり私はお前のとぼっちりを受けたわけか。え？ 『義侠のアーチル』よ。歌の主役はお前だろうが。まったく、有名人の知り合いを持つのも楽じゃないなあ」

今度はアーチルが人目を気にしながら私の口を塞ぎにかかる。現に、近くにいたものが「アーチル？ あの？」と振り返り彼を見る。まだ慣れないのか、恥ずかしがった本人が私の背を押して宿屋まで駆けさせられ、ラーナルクと付き人二人を回収。そのまま郊外の衛兵の詰め所近くの厩まで追い立てるように連れ出された。

「お前、これが恩人に対する態度か!？」

「それはそれ、これはこれだ！ それにお前だってあれだけ暴れて何が『錬金術師』だ！少しはそれらしくしろ！ 大体、お前が私にかけた苦勞を忘れてはいないからな。お前の処遇を問いに閣下の下を訪れたときのあの怪訝そうな表情。顔から火が出るかと思つたわ！」

ああ、そういうえばそんなこともあつたなあ。一年もいると、色々あるものだ。そうだ、丁度いい。詫びにもなるし、この場で渡してしまおう。

「それはまあ、すまん。詫びと言えば少々仰々しいが、これを受け取つてくれ。敵を攻め滅ぼすより、味方の命や矜持を守る戦いをする男だと思ひ、盾が相応しかろうと用立てた。軍で使いづらければ、家の適当な場所にも飾つておいてくれ」

言い争う様子から一変して、アーチルから呆然とした声色で「これは、『黒檀』か？」

と聞こえる。そう黒檀である。私の知識ではその名は樹木のものであるのだが、この地では黒檀と言えば鉞石である。おそらくは黒檀色の鉞石、黒檀鉞とでも呼ぶべき代物だとは思うのだが。何せ私ときたら、黒檀を用いた上等な家具など見たことが無いのだ。やもすればロスリックあたりで目にしたかもしれないが、判別できなければ同じこと。鉞石である黒檀がどの世界でも当たり前前の常識、と強弁された場合、私には反論の余地がない。

余所事を考える私を前に、こんな高価な物は受け取れないだの鬱陶しいので、持ち手の下を見てみると言い放つ。アーチルが覗き込んだあたりには『義侠のアーチルへ』と嫌がらせのような文言が彫り込んであり、要するに受け取ってもらわなければ困るのだ。売るにも売れまい。勝ったな。

文句があるような恐縮するような奴を置いて、私達は戦勝の喜びに呵々と笑い、進む。多少気が済んだので振り返ってみると、大きく手をふるアーチルと、隣に、詰め所で私達を通るのを待っていたのか、トルドスと一人の女性が見える。奥方だろう。しまったな、浮かれた勢いそのままに出立したが、一声かけていけば良かったか？ いやしかし、今更戻るのもな。

トルドスもラーナルクに手を振り、ラーナルクも振り返す。奥方は私と目を合わせるのと、深々と腰を折った。正直、こちらにも迷惑をかけたし、何よりトルドスはラーナルク

の友となつてくれた。あまり下手に出られても困る。夫への気安い様子でも見せるか。「壮健でな！ アーチル！」

「お前も！ もう妙な一団に捕まるなよ！」

サルモールのことを言っているのであるが、若干自虐にも聞こえる。おかしくなつて、後ろ手に手を振りながら笑つてしまふ。良い旅立ちである。

ブリニョルフからイーストマーチでの長逗留が終わる報せを受け取つたあとは、なかなか忙しない日々であつた。まず、私は私で残つていた依頼を片付けつつ、村の者共に追加で薬の作り置きをこさえてやつた。代金は取らない。こちらの特別な事情を聞いていた故とは思ふが、余所者に良くしてくれた村人達だ。恩に報いたかつた。

そして私達より一足先に、トルドスを親元へ返した。「お役目が」と躊躇つたが、私が無理に行かせた。トルドス自身の生真面目さもあつたのだろうが、實際的に役目は果たしているのだし、それならば一年も心配しどおしだつたはずの母君の下へ返してやりたかつた。それに、ラーナルクが別れ難くなるのではないかと気を揉んだということもある。……こちらに關しては杞憂であつたが、あれはトルドスとの別れの際、涙を堪えて、再会を誓つていた。ひたすら忙殺されていた私の知らぬ間に、随分と成長したようだった。そのうちの幾らかは、トルドスが齎してくれたものかもしれない。そう考えれ

ば、一年耐え忍んでくれたトルドスト、息子を送り出してくれたアーチルには感謝の念を抱くばかりである。そのあたりを汲んで、黒檀の盾にあまり恐縮しなくてももらえる嬉しうのだが。

そして、一応は首長に挨拶が必要だろうとウインドヘルムまで辿り着けば、その日のうちに謁見の日取りと、受け答えの取り決めを首長の側仕えから伝えられた。その際、「くれぐれも口外せぬよう」と念を押された。一介の兵士と首長のあいだに起きた美談は、美談のまま綺麗に締めたい、そういうことなのだろう。別段否やは無かったので、了承の旨を伝えた。

そう、美談と言えば、アーチルの直訴とウルフリックの寛恕は、ここウインドヘルムで歌になった。ウルフリックのほうは既にイーストマーチの頂点であるからして滅多な二つ名は付けられないと敬遠されたらしいが、その点、というか、その分も含めて、というか、兵士であるアーチルには遠慮無く付いた。それもあまりに真正面から褒めちぎるせいで、名乗るには少々恥ずかしいヤツがだ。おかげでアーチルは、町中で名前を呼ばれるのを嫌がっている。楽しむなり、二つ名に相応しい男になるなりすれば良いのだ。とはいえ、奴の虚飾を嫌う性格は、私としても好ましいと思うものではあるのだが。そんなふうに関して、確かになかなか聞かない話ではあるから無理もない、と思つていたら、付き人の一人が「十中八九首長の喧伝です」と教えてくれた。物を知ら

ぬということは恐ろしいことではあるが、物を知るということは、いくらかの楽しみを失うことであるのかもしれない、と思つた。まあ、私に予定調和な謁見をさせる首長だ。言われてみれば、いや言われずとも少し考えればその可能性に行き着く。となると、呑気に「自然と詩人が作つた歌だ」と信じていた私が間抜けという話になり……本当に我が頭脳は戦闘以外ではものの役に立たんと実感した。

閑話休題。一味の者曰く、直訴を経て、首長からアーチルへの信用は高まつたらしい。正確に言えば、その後の私の処遇を巡る混乱時に奴が何も情報を得ていない様を見て、直訴を含めてこちらとの関与は無い、純粹な行いだつた、とどのように判断されたようだ。考えてみれば、直訴直前に裏工作が行われているのだ。直訴なんぞという血迷い事の裏には、身の安全の保証があつた、と解釈するのが自然とも言える。しかし、何も知らされず顔を潰される形になつても愚直に説得を続ける姿を見て、それは忠義の臣のものであると首長自身が感じ入つたのだとか。私としては、首長はどうでも良いが、アーチルの評価が確かなものになつたのなら、喜ばしい。仮に何か面倒事が起きても、その名誉が奴の身を守るだろう。少なくとも、ウインドヘルムにおいてはそのはずだ。

そして首長との謁見となつたのだが、途中、重臣のガルマルが私との手合わせを望んだ。予定には無かつたのだが、どうにも私の身柄を諦められなかつたようだ。首長は眉をひそめ、アーチルはおろおろと慌てていたが、寧ろ形式張つた謁見に飽き飽きしてい

た私としても好都合であった。気分転換になればと応じ……なかなか楽しかった。奴は両の手に戦斧と戦鎚を持ち挑みかかって来たため、私もそれに合わせてグレートメイストルツエルンで相手をした。本来、槍を除けば長柄など、一対一では扱いづらい代物である。それを二本も持ち出すなど、余程の力自慢が多数を同時に相手取るため、つまりは戦場で稀に見る程度のはずだ。その『稀』を私個人に用いたあたり、ガルマルなる男も祭り好きだったのだろう。合わせて四本の長柄が乱舞する様は、傍から見ればなかなか壮観なはずだ。本気で勝ちなり殺しなりを望んでいたのなら、両の手にあったのは、どちらも剣であったはずだ。人一人を相手取るにはそちらのほうが相応しい。実際、双剣を扱うだけの技量が無い男には見えなかった。

幾合か打ち合い、頃合いかというところで奴の獲物を弾き飛ばした。驚いた顔は見せたが、すぐに引き締め、負けを認めた。周囲も沸き、首長も一安心。……とここまでは良いのだが、腕前を直に見たこと、ガルマルはかえって諦めがつかなくなっただけ。口を閉じている分別はあったものの、謁見の最中ずつと、イーストマーチを離れる私を恨めしそうに見ていた。負けたのだから諦め給えよ。

その後は先述のとおりである。強いて言うなら、トルドスとの最後の別れを済ませてからのラーナルクが、少々大人しい。歩みは止めないが、何やら考え込んでいる。聞き出しても良いが、本人なりに思うところがあるのなら、しばらくは放っておいてもいい

のかもしれない。友にも「子煩悩」と言われてしまったことだし。不味いことになりそうなら、無理にでも聞き出す必要もあるが……。いや、私より付き人達のほうが上手に解決できるかもしれない。親でも師でもない絶妙な立ち位置にいる連中だ。だからこそ話せることもあるだろう。ちなみに、歩いているのはラーナルクの希望だ。子供だけを歩かせるわけにはいかんと皆が歩いているため、荷台の軽いマルツコは機嫌がいい。色々と考えることはあるが、良い旅日和である。

ウインドヘルムからウインタールホルドまでは、リフテンからウインドヘルムまでの日程を鑑みると、然程のものでもなかった。とはいえ、旅路が順調だったためではない。無論、そもそもの距離が違うと言えそうだが、ウインタールホルドへ近づくとつれ、村が徐々に減っていくのだ。話には聞いていたが、地方の都が廃れるということは、その地方全体の問題なのだ、私はある意味このとき初めて実感した。実際の荒廃具合というものは、伝聞だけではなく、現地に足を踏み入れなければ理解できないものなのかもしれない。

結果、どうせ野宿するのなら進めるだけ進んでしまおう、とばかりに歩き続ける羽目になった。幸い、食料や水はウインタールホルドまで問題ないだけの量を積んである。

それに、道中で時間を浪費しない程度に狩りを行ったため、食事はそれなりのものだった。

更に、やたら距離が稼げたのは、ラーナルクが大人と遜色ない足で歩き続けたためであり、その目には何か決意のような光が見えた。無理はしないように、と強く言い含めてはおいしたが、無理をしたときもあるだろう。そう思い、なるべく本人の勝手にさせておいた。いざとなれば、荷台に乗せてやればいいだけの話ではあるのだし。しかしあの様子では、大人しく荷台へ収まったか怪しいものである。歩き切ってくれたことは、素直に誇らしく思おう。

数日の旅を経て、ウインタールホルドの町に着いた。ここでも、覚悟していた以上の衝撃を受けた。私はこれまで首長の座す町を三つは見てきた。リフテン。ホワイトラン。ウインドヘルム。それらは五大都市と呼ばれる、スカイリムの中でも栄え、力を持つ町である。眼前のウインタールホルドとて、在りし日には大変な栄華を誇っていたと聞く。それがどうだろうか。これは、村だ。これを町だとか砦だとかと呼ぶことは不可能だ。これは、村である。私はこれを復興させると大言を吐いたのか。我が二人の友は、その世迷い言を実現させるために知恵を絞ってくれたのか。何度目であろうか。友の恩を知らず、のうのうと過ごしていた自分を殴りたくなるこの気持ちは。付き人二人も、私の気持ちを察したのか、黙っている。いや、肚の底では呆れているのかもしれない

い。「何を今更」、「お前が言い出したんだろう？」と。ラーナルクは……きよんととして
いる。そうだろうな。散々聞かされていた目的地が、町や砦を名乗る村だとは思わない
だろうからな。

私かなんとも言えない感傷に浸っていると、一年と数ヶ月ぶりのべらんめえ調が耳染
を打った。

「おう、随分待たせてくれるじゃねえか。あの爺様が持ち直してくれたから良かったも
のの、そうじゃなきゃ次代様を丸め込みにやらんとこらだつたぜ」

今しがた感謝と申し訳無さと同時に抱いた友の一人が、そこに居た。傍らにはいつも
どおり微笑みを浮かべたハンの姿が。おそらく、他にも砦の者達が町に散っていること
だろう。それはそうと、今の言は友の優しさのはずだ。ならば乗らねば無粋というも
の。

「何を言う。そちらの工作と連絡の不備によって、私は待ち惚けを食らわされたのだ。
この頭目殿は『お待たせしてしまい申し訳ない』くらい言えんのか」

ブレックスは「うるせえよ」と私の脛を蹴りながら、町へ誘う。たしかに、入り口で
いつまでも棒立ちでいては、町の者に訝しまれよう。見たところ厩は無いようだが、宿
屋か首長の砦なら馬車を止めても文句は言われまい。

……と思いきや、通り過ぎた宿屋にも、見える位置まで近づいた首長の館にも、馬車

を収められそうな厩らしきものは無かった。……これは最悪の場合、マルツコと馬車はギルドや砦の者の移動用と割り切ってしまうほかないかもしれん。というか、首長が住まうのも砦ですらないのだな。館か。

再度感傷に浸りかけた瞬間、館の陰からもう一人の友が顔を出した。

「さて、俺のほうは叔父貴と違つて久しぶりでもないから特別言うことはない………はずだったんだがね。兄弟、町の実状が衝撃的で、動揺しているだろう？

あのなあ、君が計画を口にした当初に、俺も叔父貴も『世間知らずの発言だなあ』なんてことは思つたさ。それをとつくにやり過ぎて、そのうえで成れば上がりはデカいと踏んだから、みんなして兄弟に協力してるんだ。世話をかけただの何だの今更思うのは、随分水臭い話じゃないかと俺は思うぜ」

隣のブレックスも、無然とはしているが、同意見らしい。ハンはいつもどおり微笑んでいる。ブリニョルフは皮肉げの得意げだ。私はこみ上げるものを堪え、腰を深く折つた。

「私もくどいのは好かん。だからこれつきりだ。今まで、私の預かり知らないところも含めて、苦勞をかけたと思う。ありがとう。そしてこれからも苦勞をかける。よろしく頼む」

顔を上げて「以上だ」と締めれば、二人は揃つて「応！」と力強く頷いてくれる。ハ

ンは微笑みが深くなり、ただの笑みである。頭目殿の力を存分に振るえる場が嬉しいの
だろう。

しかし、二人して色々と察しが良すぎないだろうか。それを零すと、「手前がわかりや
す過ぎんだ」とまた蹴られた。理不尽である。更にはブリニョルフまでもが「嘘や詐術
を用いる者が少なかつたのは、ロードランやロスリックの数少ない良心だつたのだから
ね」などと際どい冗談を口にする。いやまあ、私の様子からまた察した故の言であり、実
際、騙すくらいなら力づくで奪いに来る者ばかりだつたのはたしかではあるが。まとも
な嘘つきなど、坊主頭の賊くらいしか思い浮かばんしな。

「さて、件の爺様はもう中で俺達を待つてる。謁見するのは俺、ハン、ブリニョルフ、手
前の四人だ。……本当はフレイを呼ぶべきなんだが、名代のブリニョルフで行く。とい
うか、しばらくこいつは手前にかかりつきりつてことになる。ちと理由があつてな。後
で話す。てなわけで、手前は物陰で旅装から錬金術師らしいローブに着替えてこい。
あ、謁見は二度に分けて執り行う。一度目は表向き。二度目は悪巧み用だ。そんなときは
『銀鎧』で行くからな」

どうにも色々と気になることを言われたが、まずは謁見に集中すべきだろう。しか
し、ここで同胞団とバルグルーフの面子を潰した銀鎧が関わってくるのか。以前「まだ」
と語っていたその時が来たということなのだろうか。それとも「まだ」先か。

馬車を付き人に預け、館から離れたところにある廃屋の陰で装備を替える。武器は……一応持つておこう。言われてから、預けるなりなんなりすればいいはずだ。このスカイリムでは、旅の者であれば、剣の一本でも持つていなければ、かえって怪しまれる。気が利かないと思われるやもしれんが、儀礼的なやり取り、というのにも必要な場合もあるはずだ。それに、余程問題があれば二人が注意するはず。ひとまずブロードソードを帯びておけばいいだろう。

着替えを終えて出ていくと、ブリニョルフとブレックスもそれなりの装いに変わっていた。私が銀鎧となるとき、おそらく二人も盗賊の鎧に身を包むのだろう。『演出』というものがそれなりに大事であることは、私も多少は理解している。

「それから、事前情報として伝えておくがな、爺様を引き込んだのはいいが、魔術嫌いは変わっちゃいねえんだわ。だから錬金術について聞かれても、生業に選んだのは適正があつたから、くらいに抑えとけ。

それで本題はこつからだ。奴さん、蓋を開けて見れば、魔術どころかこの世の全てを嫌つて、いや、憎んでいやがる。可能な限り全部ぶつ壊しちゃいたいんだと。愛しきウインターホールドも、愛しきノルドも、大学も、スカイリムも、帝国も、サルモールも、何もかもだ。俺からすればイカれてると言うしかねえんだが、「何もかも」には手前自身も入らんとよ。「儂とてウインターホールドのノルドであるのだから、当然の話で

あろう？」だと。

正直、それを聞いて爺様があてになるのか際どいと思つたんでな。一度は、表舞台から退場してもらおうかとも考えた。しかし、当の爺様がえれえ乗り気なのよ。それも自分の立場をよく弁えてな。そうなると、いつ芋引くかわからねえ若い次代様よりは、後のことなんざ知つたこつちやねえつてな爺様を担いだほうが、俺等も幾らか動きやすいやと思つてよ。

まあぶつちやけ、その破滅願望のおかげで味方に付けられたつて側面もないではねえからな。諸々鑑みて、都合がいいと判断した。あとは……………」

ブレックスの、謁見における注意事項が続く。聞こえてはいる。一度目の謁見は通常のものであるため、周囲の者に対しても粗相の無いように。大丈夫だ。つい先日、ここよりずっと大きな宮殿で謁見を済ませてきた。大丈夫だ、聞こえている。しかしどうにも足元が定まらない。聞こえて、理解はしていても、言葉ではなくどこか音の連なりとして捉えている自分がいる。

ウィンターホールド首長とやらの為人を簡単に説明された途端、何か嫌な予感、嫌な臭いがしたのだ。友の言葉を借りるなら、「同類」のそれだ。決めつけるのは早い。世を夢んでいても、似て非なる考えを持つのが人という生き物だ。だからいたずらに恐れる必要はない。多分、大丈夫だ。二人が私の様子を見て心配している。「大丈夫だ」と答え

る。事ここに至つて、何の問題がある？ ないはずだ。きつと思ひ過ぎした。

だが、だがもし思ひ過ぎしではなかつたなら、その老人は、幾星霜の遠い過去に置いてきた、不死人となる以前の私ではなからうか？

私は老人を前にして、まともに受け答えができるだろうか。いや、大丈夫だ。わからない。

新しくこのウインターホールドに居を構え、鍊金術を用いて町の者の助けとなりたい。そう願ひ出た一行との謁見を済ませ、奥に下がった。

謁見そのものには、特段、言うべきこともない。私が首長として願ひを聞き届け、許しを与えた。今は使つていない廃屋を修繕して住まう。ついては、修繕が成るまでは宿屋に逗留し、資材は全て自己で負担する。その条件を申し出たため、こちらの懐も痛まぬとして、好きな屋敷を使うよう申し伝えた。尤も、今では何が屋敷で何が工房で何が店舗であつたかなど、わかりもしないが。

それより、だ。夜になれば肚を割つた話ができる。この日をどれだけ待ち望んだことか。先の形式だけの謁見などにどれだけの意味があるというのか。必要だとは理解し

ていても、気が急いで仕方がなかった。早う奴等に会いたい。幼い頃より陰鬱な町の空気に当てられてきた私だ。このように気分が高揚した試しなど、我が生涯において初の出来事ではないだろうか。それだけでも素晴らしき日だというに、このあとにはまだ本命のお楽しみが残っているのだ。

ああ、早う夜になれ。日よ、疾く落ちよ。

寝所で休んでいると、いつもの如く屋根裏らしきところから声がする。曰く、支度が整った、と。

私は妻を起こさぬよう寝台を抜け出し、厚着をしてから書齋を目指す。春とはいえ、ウィンターホールドの夜は凍えるには十分に冷える。私は、出来得る限り長く楽しみたいのだ。身体には気をつけねばならん。病になんぞかかっている暇は無い。しかし、心身、とは言えぬあたり、我ながら笑止なことよ。とうに心を病んでおる自覚を持ちながら、何の手も打たずに来たのだから。しかしそれが故に、彼奴等と手を組むことになったのだ。人生、何があるかわからぬ。ああ、だからこそ面白いのだろう。人の世とはなんと楽しきものか。

夢心地のまま歩き続け、書齋に辿り着いたとき、部屋の中には謁見のときと同じく四人の男がいた。違うのは、うち三人は上質な仕立ての装いから、黒革の鎧に。一人は鏗

金術師のローブから、燭台の微かな灯りですら目に眩しい、綺羅びやかな銀鎧を纏っていた。よもや騙りとは思っておらなんだが、こうして目の当たりにすると、感慨もひとしお、といったところだ。

「貴様が音に聞こえし『銀鎧』か？ ホワイトランにて、同胞団を黽り、バルグルーフの面子を潰したという」

「閣下、者共から『直截な受け答えを』と伝え聞いておりますればそのようにいたしますが、一つ訂正いたしますと、同胞団は黽つたわけではございません。彼等とは尋常に手合わせをいたしました。結果として、私以外の皆が昏倒したまでのことです」

さて、この銀鎧。今のは皮肉か？ それとも、誠、胸中ではそう思うておるのか？

どちらにせよ面白い。なるほど、常人離れた男は、頭の中身も同様らしいな。「それを『黽つた』と言うのよ」と笑えば、「失礼いたしました」と一礼する。此奴とのやり取りは面白いな。

私が銀鎧を楽しんでいると、銀鎧からも一つ聞きたいことがあると。何ぞ不備でもあったか？ 彼奴等のあいだで情報の共有はなされておらんのか？

「者共から、閣下はあらゆるものを『壊したい』のだと伺っております。それは誠にございませうや？ また、『あらゆるもの』とはどの程度までを指しませうや？ 範囲

や、程度の問題です。そして、そのために必要とあらば、様々な忍耐を経ることが可能

でしようや？」

なんと恐れ知らずなことか。小なりとは言え首長に向かつて「必要な我慢ができるか」だと。場合によつては首を刎ねられてもおかしくはないぞ。やはり此奴はどこかずれておる。

「知れたこと。あらゆるものをとば文字通り全てよ。この世にある人、物、町。それに形無きものも。尊厳、常識、伝統。それ等全てを言うておる。……しかし惜しいかな、貴様等の訪ねてくるのが遅かったわ。儂の寿命がそこまでは保たんだろう。故に、我が望みは出来得る限り多く、大きく、既存のものを壊すこと。それが大筋では貴様等の願いに沿うのであろう？　だからこそ、貴様等と組み、力を貸すことを決めた。……答えはこれで良いか？」

銀鎧がまだ何か言いかけたが、賊の一人が制した。少々つまらぬとも思うが、家人に怪しまれぬうちに話を済ませねばならぬのも事実。頃合いであろう。

「では閣下。不肖ブレックスが、我等の描く絵図をご説明いたします。

まず、この銀鎧を大学へ送り込み、ウィンターホールドの町の復興に助力させます。その際、閣下より御信任状をいただくことになるかと存じますので、何卒お願い申し上げます」

「良い。そして町としての力を取り戻すまでは、ことを動かすことまかりならん、と言う

のであろう？ そのための忍耐をと。案ずるな、承知のうえだ。続けよ」

「では、その後についてですが、閣下には上級王イストロッドへ首長会議ムイの開催を要求していただきます。イストロッドが没した場合は、おそらく次代であろうトリグへ。名目は『タロス崇拜禁止に揺れるスカイリムの行く末について』です。これは、応じられずとも構いません。その場合、閣下の御名を以てスカイリム全ての首長に触れを出します。名目は先と同様。しかし上級王が動かなかったとあれば、上級王頼りなし、そのような風聞は広まるでしょう。それまでにこちらで、ウインドヘルム、リフテン、『ドーンスター』、『ファルクリース』の首長達からの参加表明は得ておきますので、触れにはその件を添えていただきます。それにより帝国派の首長達も、上級王の布告ではないにせよ、全くの無視を決め込むことは下策となります。そして閣下には、いずれかの会議において、スカイリムのノルドの代表として立っていただきたいのです。可能であれば、ウルフリック・ストームクロークと同等程度の旗頭としての地位を得てくだされば、言うことはございません」

黙って聞いていたが、思わず吹き出してしまった。愉快だ！

「ノルドすら壊してしまいたい儂をノルドの代弁者に仕立て上げるか！ ブレックスと言ったな。貴様、悪であるな。」

それで、仮にことがうまく運んだとして、ストームクロークの小倅は焦るであろうな。

彼奴は大多数の支持を得て上級王に就きたがつているはずだ。古い先短いとはいえ、儂に『ノルドの顔』の席を奪われては、それも遠退くであろう。今以上の強硬派にならざるを得んな。

それで行き着く先は……、なるほど、貴様、再びの大戦を起こしたいのだな？ 儂とあの小倅が互いに頭を取り合いながら、帝国、ひいてはサルモールとがつぶり四つに組む、そのように仕向けると言うのであろう。壊れるものの規模が計り知れんな！」

限界だ！ 我慢できん！ 家人が起きようが知ったことか。今は、腹の底から湧いて出てくるこの笑いが身を壊さぬよう、吐き出すしかない！

ブレックスなる賊は表情一つ変えぬまま、僅かに心外だと声色に乗せて告げてくる。「積極的に大戦を引き起こすことが望みではございません。我等の稼業において、帝国はまだしもサルモールは邪魔なのです。しかし昨今のアルドメリ自治領の隆盛著しく、これを取り除くには、国家を巻き込まねばなりません。

先の大戦において、サルモールは帝国から一つずつ手足を奪い、当たる敵を二つにまで絞った後に軍を発しました。今度はこちらが同様に動きます。既に、ブラックマーシユ、『エルスウェーア』、『ハンマーフェル』には工作を仕掛けております」

「成程な。皇帝が『帝国の下、一つに』と呼びかけたところで誰も聞きはせん。しかし連合軍として、横暴なサルモールに対抗しよう、であれば、自治を望む者等は話に乗るや

もしれんの。ハンマーフェルは、帝国には裏切られたと思つておろう。直接矛を交えたサルモールへの憎悪は言うに及ばず、と。そしてそれが成つたなら、貴様等はこのスクリムで自由に励むことができる、というわけだな。

まあ、儂が見るのは全て、とはいかんだらうが、多くの血が流れるだらうな。否やは無いぞ。概ね、それを軸として良きに計らえ」

最初は銀鎧に笑わされたが、このブレックスという賊、いや男、なかなかどうして悪党である。此奴がある程度好きに動けるよう、便宜を図つてやらねばなるまいな。

これから面白くなる……と思つたところで、少々物音が聞こえる。何人が起きたか？水を差しおつて……。いや、私が羽目を外し過ぎたのか。自制し、長生きをと思うとるのにまつたく、阿呆なことよ。

ブレックスに今日これ以上に何かあるか聞けば、概略は全て伝えたとのこと。「ならば今宵はお開きであるな」と告げ、寢所へ戻つた。

案の定、目を覚ましていた衛兵や妻から、何かあつたのか、と聞かれたが、適当に誤魔化した。

さて、私は私で寿命と戦わねばならん。彼奴等の絵図を為すのに何年かかる？完全に成るには更に何年かかる？そのとき私は生きてはおるまい。だからこそ、少しでも長くこの楽しい楽しい戯れに参加し続けるためには、日々の養生が肝要である。夜分に

悪巧みをしておいてなんだが、夜更しは厳禁であるな。

二三、作戦会議第三

ウインターホールド首長との二度の謁見？ 作戦会議？ において、まともな受け答えができたか、いまいち自信が無い。それはそうと、今はこの気持ちをどうにか整理したい。

「ブリニョルフ、ブレックス、悪いが少し酒に付き合ってくれ。然程の重大事ではない。ただの愚痴だ。だが、友たる二人にこそ聞いてほしい」

二人は顔を見合わせ、頷いた。そして同時に口を開きかけて、年長の序列かブレックスが言う。

「いいぜ。珍しくトンマがお悩み顔だからな。少しくらいなら付き合つてやらあ。というか、俺からも手前等に話しておきたいことがある。トンマの大風呂敷を更にでつかく広げちまったからな。聞きたいこともあんだろ。面貸せ」

どうも、あちらはあちらで話があるらしい。そんなときに愚痴など申し訳ないような……。いや、三人が集まることも難しくなるかもしれない。話せるときに話したいことを話せるのなら、都合がいいのか？ 駄目だ、やはり頭が回っていない気がする。

視界の端では、ハンが宿屋へ走つて行くのが見えた。色々と手配しておくつもりなの

だろう。いつもながら有難い。……何故こういうことばかり気付くのだ？ いやどうでもいいか。

宿屋へ到着した。時間は遅いが、こんな廃れた町の宿屋でも、酒や食事を出せる時間内ではあるようだ。まばらに人がいる。数人、覚えのある顔があることから、砦の者が既に町へ潜伏しているようだ。この状態で、まだことを起こしてもいけない私達に間者が付いているとも思えんが、念の為に四人部屋を借りる。間者が居ようが居まいが、あまり人に聞かせてよい話でもない。

ちなみに、マルツコと馬車は結局、宿屋の裏にある元家屋（それを廃墟と言う）に屋根があつたため、そこへつないだらしい。屋根と柱は残つても床が無い、という絶妙な廃れ具合のため、選んだようだ。……本当にこの町は友の言葉ではないが、「無い無い尽くし」である。

ハンの手配した酒が皆に行き渡つたところで、まずは再会を祝して乾杯し、ブレックスが切り出した。

「さて、手前等に何も伝えないうまま、盗賊らしからぬウインターホールド再興後の計画を老いぼれ首長閣下に披露しちまつたわけだ。それについてはまあ、一応詫びておく。悪かつたな。

しかし、ブリニョルフはなんとなく察していただろう？ お悩みトンマは別として
も」

今の私は普段にも増して冴えの無い自覚があるものの、「お悩みトンマ」は酷くないだ
ろうか。年頃の娘のようだ。しかし、ブリニョルフには察せられる類の話であつたのか
？

「まあね。ウインドヘルムの貴族連中に接触する叔父貴のところの動きを見ていれば、
何やら企んでいるのはわかつたよ。それに、俺が作った伝手で、カジートやアルゴニア
ン達と色々内緒話をしていたのも。だから、それほどの驚きは無いさ。言うとおりに、『盗
賊らしからぬ』とは思うがね」

ブレックスが頷き、次いで居住まいを正しながら深呼吸をする。この男にしては珍し
い。なんぞ重大事でもあるのだろうか。

「正直、俺がこの計画に舵を切つたのには、間接的にだが、ある情報提供者の存在がある。
本当ならここで手前等、特にブリニョルフには伝えておくべきかもしれんが、俺自身、奴
の扱いと奴が持ってきた話にまだ混乱しているところだな。裏取りを進めている最中
だから、詳細を明かすのはちと待つてくれや。とはいえ、そいつが本当なら色々なこと
に説明がつくんでな。ことがことだけに早合点はしたくねえが、無い話じゃねえと思つ
てる。トンマが大学に行く際にはエンシルつて男に手紙を持たせるつて話をしたろう

？ そいつを絶対に、何があつても渡せ。奴の重要度が跳ね上がった。いいか、必ず、だぞ。

……と、ひとまずそいつは置いてだ。まずは手前だこのトンマ。何を似合わねえ湿気た面^{ツラ}してやがる。計画が原因じゃねえだろ。手前は謁見前からどうも様子がおかしかつた。吐け。脳足りんが考え込んでたつてろくなことはねえんだから、全部喋つちまえ」

……人の様子を観察している場合ではなかつた。私としては、こう、宴もたけなわ、という頃に少し零して終わりにしたかつたのだが。しかし、相変わらず、というか輪をかけて酷い物言いではあるが、これも友の優しさ、友情の現れだろう。実際、思うところ全てを打ち明けたほうが、色々と話は早そうである。ほとんど解決しているうえで消化しきれない思いがあるだけの、正しく愚痴なのだから。

「なら、お言葉に甘えてしまうが……。首長についてだ。あの老人は、アレは私だ。

私の事情は二人共覚えているな？ 首長の為人を事前情報で聞いたときから思っていたが、話してみても確信した。あの老人は、不死人となる前の私なのだ。愛を甘受できず、愛に気付かず、不遜で、傲慢で、それ故に自ら孤独に陥り、他者を憎み、呪い、絶望する。当時の私よりは裕福ではあるが、それだけだ。違うのは、私は不死人になったことで第二の生を生きているつもりになり、あの老人は今なお絶望の人生が続いてい

る、という点だけだ。

とはいえ、話としては、それだけと言えどそれだけなのだ。謁見前は老人に会って、遠い過去の自分をまざまざと見せつけられたとき、どうなるか自分でもわからなかった。何せ、私は努力や克己により自らの殻を破ったわけではないのだ。流れに身を任せ、気の遠くなる永い時を自問自答に費やしていたら、いつの間にか今の私になっていた、という人間だ。己が力で自らの弱さに打ち勝ったわけではない。そのため、『在りし日の自分』を見せつけられ、その頃の自分に戻ってしまっているのではないか、などと不安であったのだが、胸中に浮かぶのは、哀れみと同族意識と、妙な庇護欲だけだった。

ブレックス、先に詫びておく。すまんが、私はおそらくあの老人を見捨てられん。それが計画に支障をきたすのなら、今のうちから対応策を考えておいてくれ。私の愚痴としては、以上だな」

「……いや、先に聞いておいて良かった。手前の言うとおり、俺は場合によっちゃあの爺様を切り捨てるつもりでいた。その選択肢がナシだつてんなら、早目にわかっておいて損はねえ」

思案顔のブレックスをよそに、自分で言っておいてなんだが、「なるほど、そういうこともあるか」と呑気な考えが浮かぶ。言うだけ言ってしまうば、かなり気が楽になったようだ。我ながら単純である。というか、ブレックスは身内には甘い、それ以外には

厳しいな。計画において「肝心要」などと話にも上がっていた首長を切り捨てる考えを持つていたか。そして私は身内側、と。今更ではあるが、友から同じように思われていることが、妙に面映く、こそばゆい。それに、私の我儘を問答無用に取り入れてくれるあたりも、有難い。

ブリニョルフはあえてこの件には触れないつもりのようなのだ。それもまた優しさだろう。私としても、一度吐き出してしまえば、あまり触れたい話題でもない。

「したら、お悩みトンマの件はこれで解決だな。次はこの盗賊ブレックス様が似合わねえ大計画をぶち上げた件についてだがよ。言葉にしてしまえばドデカイ話だが、案外ことは単純だ。」

俺はトンマを通じてウルフリック・ストームクロークという男の人間性を探った。そいつと、大戦からこっち、スカイリム中に蔓延する空気を鑑みれば、何年先になるかわからんが、このきな臭さは内戦状態にまで悪化すると見た。だからよ、どうせ争いになる流れは止められねえってんなら、こっちである程度望む方向へ誘導してやろうってな話なわけだ」

話が本題に移ったのは良いが、なるほど、私の採掘村での長逗留にそんな意味があったのか。つまりは人物と情勢を見極めるための一年だったわけだ。まあ、私の忙殺される日々の意味が付随するなら、徒労感が無くて良いが。

「だが叔父貴、わかっているだろうが、ギルドは外部協力員たる彼のためのウインター・ホールド再興までは力になれても、そこから先へは干渉できないぜ？ 何せ繰り返し返すが、そいつは盗賊の領分じゃあない。ギルドの誰もが、内戦だの『再びの大戦』だのそんなもんには関わりたくない、と考えるだろう。そりゃ、本音を言えば、稼業に悪影響が出るから、内戦なんか起きてほしくはないし、そいつが大戦となつて戦場がスカイリムから遠ざかれば遠ざかるほど望ましい、とは思うがね。手は出さない身で勝手だとは思うが」

「当然だな。手前がトンマに入れ込んでそこまで首を突つ込むことがあれば、まずフレイは黙つちやいねえだろうし、手前の指示に嫌気が差して抜ける下っ端が出るかもしれない。尤も、そうなるより先に手前の排斥が起きるだろうがな。だからギルドとしての支援はウインター・ホールド再興までいい。そこから先は預かり知らぬところとして、稼業の範囲内で手伝つてくれりゃ十分だ。」

「……いや、いつそフレイには再興以後の話は伏せておけ。どうせ、今回の謁見に参加したのが名代の手前じゃなしに奴だった場合、二度目のアレは奴を蚊帳の外に置いてやる予定だったんだ。ギルドが関わらん以上、伝えてもいいことはねえだろ」

「どうもブレックスの歯切れが悪いように思う。先程から飛び交う「らしからぬ」ではないが、ブレックスという男はもつと竹を割つたような話し方をする男だったはずだ。」

此奴が口を濁す話題というと……。

「ガルス、か？」

ブレックスとハンが目を見開いてこちらに顔を向け、ブリニョルフは眉をひそめている。

「手前つて奴は……たまに核心を突くような、鈍いような。いややっぱ鈍いな、鈍い。なんで俺が濁したと思っただこの馬鹿垂れ」

脱力しつつ、机の下で私の脛を力なく蹴る頭目殿を見ると、悪いことをした気がしてくる。なんというか、すまん。私が詫びて何度か溜息をついたところで、ブレックスが顔を上げた。少し肚が据わったか？

「まあ濁す意味があつたかと言われると微妙なんだがな。正直、俺も迷ってたんだ。だがこの話をするとなると、まずはブリニョルフに聞いておかにやならんことがある。

……手前、最悪の場合、ギルドとこの大間抜けを天秤にかけて、後者を選ぶことができるか？ 悲願を捨てて、情を取れるか？ その答え次第では、現状で伝えられるのはここまでつてことになる」

問われたブリニョルフは少々思案顔である。ブレックスが何を明かしたいがために酷な質問をしているのかはわからないが、私としても、ブリニョルフのギルド再興へかける思いは承知しているつもりだ。ブリニョルフに「ギルドだ」と即答されないだけで

も喜ばしいと思うのだから、あまり追い詰めないでやってほしい。

「急に話が極端になったな。それに判断材料が少なすぎる。それで選べつてのかい？」

確認だが、叔父貴はほぼほぼそうはならないと見ているんだろう？ ギルドか彼か、

そういう二択の状況にはおそろくならない。だが本当に『最悪の場合』が来たなら、俺が肚を括れるか。それが知りたいと。認識は合っているかな？

ならまあ、彼を選ぶかな。『友情を取る』なんて言ったほうがカッコイイかい？」

ブリニョルフの言葉を受けて、「喜ばしい」を通り越してしまった。先程のブレックスの身内扱いな返答で浮かれている私だ。畳み掛けられるようで、今まで以上に頭が働いていない自覚だけがある。左手で杯を口元まで運んで、酒を飲み、右手を動かして、肴を食べよう。

「これは予想だが、叔父貴の言う『最悪の場合』ってのは、多分、それほどすぐの話でも無いんだろう？ さつき『裏取り』がどうとも口にしていたし。それなら、そっちの計画はまだしも、ギルドの復興は今以上に進んでいるはずだ。俺の打った手は、ある程度軌道に乗ったからね。仮に俺がいなくなったところで、余程の馬鹿をやらかさな限り、しのぎは無くならないはずさ。その『最悪』とやらがどんな状況なのか、なんとも言えないから、ギルドと彼が手切れになる可能性も無くはない。それ次第では魂石の取引も滞るかもしれないが、別にシノギはそれだけではないしね。ギルドは順調に信用を

取り戻しつつある。時間をかければかけるほどそれは進む。なら、俺が居なくなつたつて回していけるだろうさ。再興までの道筋は、ある程度見えてるんだ。

勿論、そうならずにもみんな仲良く、つてのが理想ではあるがね。それに、彼にはあとで話すことだが、件の厄介事からも解放されるし。……こういう考えを持つてしまふあたり、やっぱり俺は人の上に立つべき人間じゃないかと実感するよ。

しかしそうだな、そのときは……折角伝手ができたんだ。カジートやアルゴニアンに付いて、タムリエルを色々と旅してみるのもいいかもしれないな。もしくはウインターホール드에拠点を移して手にかかる友人を手伝うか。その場合、ギルドに睨まれているだろうから、あまり大つぴらには動けないだろうがね」

気恥ずかしさをごまかすためには酒に呑まれるのが一番手つ取り早いのだが、恨めしいことにこの身体は酔わない。いや、正確に言えば酒も過ぎれば毒であるのだから、許容量を超えれば酔うのだろう。だが如何せん、巡礼のあいだに自己を強化しすぎたせいで、毒に対する耐性が異常に高くなつてしまった。つまりは蟒蛇うわばみなのだ。酔えない。酔えない、が、酒は飲む。杯で顔が隠れるからだ。杯を離れたらすぐに肴を食べる。何か咀嚼していれば、緩んだ顔を曝さずにすむからだ。

やたら早く無くなる酒と肴を見て、ハンが目立たない動きで追加を手配する。いつもながら感心するし、今は本当にありがたい。

「さて、選ばれちゃったトンマは喜色満面といった具合なわけだが」

バレているではないか。

「そういうことなら問題ねえな。手前がこの手の話で、俺はともかくこいつに嘘をつくとは思えねえ。しかし、ここからの話は言うまでもなく他言無用だ。手前が独自に動くにしろ、手足になる人間にも漏らすな。いや、それこそ『言うまでも』ねえか。手前を侮辱する発言だった。すまん。

……情報提供者ってのはカーリアだ。奴はガルス殺害の真犯人はフレイの野郎だと俺に言った。奴等三人はナイチンゲールとしてノクターナルの衛士だったらいいんだが……」

「待て待て、待ってくれ！ おとぎ話が聞こえた気もするが大事なものはそこじゃあない。八大神にかけて、メルセルがガルスを殺しただなんて、そんなことがあり得るのか!?!」

そして俺達はその下手人を担ぎ上げた?!」

あまりに衝撃的だったのか、ブリニョルフが立ち上がって机に両の手を叩きつけている。少々音が漏れたのか、壁の向こうが窺うようにやや静かになった。バツが悪くなったこととブレックスに「落ち着け」となだめられ、ブリニョルフは腰を下ろした。

しかし、カーリアとは。久しぶりに聞いた名だが、たしか先代ギルドマスター、ガルスと恋仲の幹部でありながら、ガルス殺害の実行犯と目されていた人物ではなかったろ

うか。それがブレックスに接触してきて、真犯人はメルセル・フレイだと？ 間違いない。これは私の領分ではないな。私に虚実を見極める冴えは無いのだから、口を挟めばかえって邪魔になるだろう。私は引き際をわきまえる男なのだ。ついでに言うと、私が比較的冷静なのは、ガルスやカーリアと言った話の上でのみ登場する相手への先入観が無いために、さもありません、という感想しか浮かばないからだ。

「だから言ったろう？ 『迷ってる』と。手前に話すとなれば、手前はどうしたってフレイを疑いの目で見るだろう。そして確証が得られたとしても、奴に落とし前をつけようとすれば、確実に捕まえるなり殺すなりする必要がある。仇を前に、それまで手前は食わぬ顔で辛抱できるか？ とはいえ言っちゃまったもんは仕方ねえ。幸い、しばらくはこつちにいるんだから、その間に頭を冷やして、備えておけ」

ブリニヨルフはまだ混乱から立ち直れずにいる。

無理もあるまい。ガルス亡きあとの後継争いはどの道起きただろうが、その規模を大きくしてでもメルセル・フレイを選んだのだ。自らと志を共にする仲間だと信じて。性格はどうあれ、目指す場所だけは同じだと。それが、敬愛する兄貴分の仇であり、ギルドの窮状の原因、その大元だったとすれば、酷い罪悪感と徒労感に襲われるはずだ。信じたくない、という思いも相まって、混乱くらいはするだろう。

ブレックス。計画の件といいメルセル・フレイの件といい、今日は随分大きな話を用

意してきたな。この分だとまだなにかあるのではないかと勘ぐってしまふ。

それにしてもカーリアとやら、よくブレックスに接触しようという気になったな。今の頭目殿は、ギルドとそう悪い関係ではない。メルセル・フレイと懇ろ……とまではいえないにせよ、悪い仲ではないと外からは見えそうなものだが。そのあたりを聞いてみると、ブレックスが事情を語ってくれた。

「奴は今も差し向けられているフレイの追手から逃げ回りながら、いくつかある潜伏先を転々としていたそうなんだがな。情報収集は怠らなかつたんだよ。それだけでも感心しちまうが、自分が思っていたよりずっとギルドの復興が早いもんだから、今すぐに動かねえと、フレイが盤石な体制を築き上げちまって手が出せなくなる、そう考えて焦ったらしい。俺んどこに來たのも、半分博打だったつてよ。現に、奴が俺の前に姿を現したとき、俺は一度は殺そうとして寸前までやっちまったし、そのあともふん縛ったからな。俺がフレイとしつかり繋がっていたなら、奴は既に死んでいるかギルドに引き渡されていた。知ってはいたが、なかなか度胸のある女だぜ。なんなら、ガルスが生きてた頃よりタフになったかもしれないねえな。」

今は、枷を付けてリフトの砦に監禁してる。砦の中だけなら歩けるが、一時たりとも目を離さんよう、必ず二人は側に付くよう命じてある。フレイが白だとわかったのなら、すぐにでも始末できるようにな」

ブレックスはカーリアの身柄を拘束し、証言の裏取りを行っていると口にしたが、どうも口ぶりからするに、十中八九『真』、くらいには考えているのではなからうか。カーリアを褒めるにしても、吐き捨てるような口調ではなく、いつも純粋の鼻を鳴らしながら、であつたし。

「トンマおいコラ。何、『我関せず』なんて顔してやがる。さつき手前にや大学のエンシルに手紙を持たせるつったろ。エンシルはガルスのだちだつたんだ。聞かれて何も答えられねえガキの使いじやつまらんだろが。当事者、ではねえけどよ。ちゃんと聞いとけ」

そうは言うが、私はガルスにもカーリアにも会つたことが無いのだ。そんな人間に深く踏み込んだ話を質問するだろうか？ まあ、聞けと言うなら聞いておくが。

そのまま、ブレックスの衝撃の発言？ とやらから立ち直れていないブリニョルフを余所に、頭目殿が大学訪問時の注意点について話を続ける。しかし、先程は嘴を挟むべきではないと思つたものの、ブリニョルフの狼狽具合は酷いものだ。やはり何か少しくらいは声をかけるべきか。

「ブレックス、少し待ってくれ。すまん。……なあブリニョルフ。仲間裏切られていたかもしれない。自分達の選択が間違つていたかもしれない。そう考えてしまうのは理解できるが、それは、ドツポにはまる、というヤツだぞ。確証の無い話は考えれば考

えるほど、見えるものも見えなくなる。そういうときは、いつそ頭を空にして、真偽がはつきりするまで割り切るのだ。キャリアとやらの証言の裏取りがすむまでは推定無罪としてメルセル・フレイは白。これまで通り、君等の仲間で、ギルドマスターだ。そして裏取りが済んだのなら、そのときは遠慮なく復讐を果たすといい。おそらくブレックスとキャリア、他のギルド構成員達との分け合いになるだろうが、短剣を刺し込む隙間くらいは残っているだろうさ。

とはいえ、裏取りが済むまでの長いあいだどつちつかずでいるのも辛いだろう。だからまあ心持ちとしては、ブレックスには悪いがメルセル・フレイを信じるんだ。キャリアなる者の言うことは嘘だ。メルセル・フレイを貶めるための罠だ。だから君は、安心してギルドのために働けばいい。それでうまく行くさ。裏切られていた場合、改めて信じた分も上乗せして恨みを晴らせばいいだけの話だ」

頭目殿が、皆が皆、手前みてえな脳足りんじゃねえんだ馬鹿垂れ、と脛を蹴ってくる。しかし、人生、時には馬鹿になったほうが楽なこともあると思うのだがなあ。

そう思っていると、頭を抱えていたはずのブリニョルフが、いつの間にかくつくと笑っている。

「悪い、馬鹿にしてるんじゃないぜ。でも奴さんを嫌っている君の口から、庇うような台詞が出てくるとは思わなくてね。いや、しかし真理かもしれない。そうさ、ことは単

純明快であるほうが望ましい。このところ交渉事に当たりすぎていたせいか、人の複雑さに悪い意味で慣れていたようだ。

叔父貴、悪いが彼の言うとおりにさせてもらおう。カーリアの証言は頭の隅に置いておくが、それだけだ。メルセルをよく観察はしても、それ以上のことはしない。というか、あの猜疑心の強い男のことだ。俺の疑いには必ず気付くだろうし、そうなれば先手を打たれるだろうさ。特に今は面倒な時期だから――

あ、話があつちこつちするものだから忘れていた。謁見の前にブレックスが言っていた、我が友の抱える理由、とはなんだろうか。その「件の厄介事」だの「面倒な時期」だのが関係しているのだと思うが、気になる。

私が水を向けると、いくらか割り切った様子のブリニョルフがこともなげに語ってみせる。

「いやね、誰かさんのおかげでギルドの復興があんまり順調なもんだから、余所事を考える馬鹿共が湧いて出たのさ。俺を担いでメルセルを追い落とそう、つてな具合の。

折角、派閥争いを片付けて内を固め、外へ喧伝が叶うように体制が整ったつていうのに、また揉め事を起こしてどうするんだつて話さ。そもそも、やる気の無い人間を担ごうとしているあたりがもう救い難い。いい迷惑だよ。ちなみに、俺が駄目なら叔父貴に話を持っていこうとしていたらしい。ギルドには叔父貴の世話になったヤツも残つて

いるし、相互不可侵の約で少なくとも敵ではない、味方に引き入れられる、そんなふう
に考えたようだね」

それはまたなんというか。私でも悪手とわかる話なのだが。盗賊ギルド構成員とも
あろう者がその程度のことも理解できぬと？ ……いや、それだけ人の感情とは難しい
という話なのだろう。人が妙手か悪手かだけで物事を判断できるのなら、そもギルドは
分裂したりなんかしない。

ただ、ブリニョルフはともかくブレックスは、計画に従事しつつギルドマスターの責
務を果たすなど、とてもではできないができまい。それこそ「体が幾つあっても足らない」と
いうヤツだ。まずあてにはできんと思うぞ。

しかし、そんな話が持ち上がっているのなら、何らかの手を打つべきではなからうか。
「その『手』の一つ目が、これさ。つまりは無視して放置。俺や叔父貴が君の計画にかか
りつきりだと思わせられれば、あるいは俺の『その気は無い』という声なき声を受け取っ
てくれれば、自ずとその手の馬鹿共も静まるかも、ってね。ヴェケルやデルビンには少
し苦勞をかけることになるが。あの二人には、なんなら俺は「外にばかり目を向けてい
て、頼りない」なんて話を広めてくれてもいいと言つてある。要は担ぐには相応しくな
いと思つてくれれば何だつていいのさ。

それでも収まりがつかないようなら、一度一箇所にあつめて、死か、忠誠かを選ばせ

る。どうも、馬鹿共の半数程度は一度離反した連中みたいだからね。『既に一度死んだつもりで拾った命』だなんて根性の据わったヤツはいないだろうから、死にたくないがためにまず忠誠を選ぶだろう。勿論、ある程度痛い目には遭わせるがね。そしてこの二つ目に関しては、メルセルも承知のうえで進め、馬鹿共にもそれを周知する。要するに、これが本当に最後だぞ、と連中の出来の悪い頭に叩き込むのさ。

そこまでやっても駄目なら、はつきり言つて邪魔なだけだから、速やかにご退場願うまでさ」

退場、とは当然この世から、という意味だろう。基本的に殺しは控える盗賊集団だが、必要とあらば手を汚すことも厭わないのが彼等だ。それも盗みに入った先の一般人ならまだしも、組織内で度々問題を起こす不穏分子であれば、それは敵と変わらん。寧ろ段階を踏むだけ、かなり有情とも言える。まあ、ギルドの復興はまだ道半ばなのだ。人員が完全に足りているとは言い難い。そのあたりから、「最悪の場合排除するが、使えるなら使いたい」という台所事情が透けて見える。ある意味、派閥抗争を終わらせて内外に力を示したが故の甘さもあるのだろう。あとは、肅清などの内輪揉めを起こして『ギルドの足元固めは未だ不十分である』という風聞を生みたくない」という思惑もありそうだ。

何にせよ、そう酷いことにはなるまい。

「と、そんなふうに通じていたんだがね。カーリアの件でちと思っただが、もし、もしだぜ叔父貴。馬鹿共が最後まで抵抗するようであれば、そいつらは表向き死んだことにしておいて、そっちの計画かメルセル捕縛のための使い捨て要員として利用できないかな」

「あー、まあその手の輩が必要になることがあるかもしれないねえなあ。ちつと考えてみるか。仮に利用するのであれば何処に匿うかだが、それはリフトの砦を……」

つい先程思った「酷いことにはなるまい」を返してほしい。一年ほど前、人を脅したツケを払う形で、死ぬより酷い目に遭うことになった一人の愚か者を知っているのだ。それを考え出した者等が二人して情を排除し、曰く「馬鹿共」の処遇について話していると、人とはこれほどまでに残酷になれるのだなあ、と遠い目になってしまふ。誇りも何もなく、便利使いの末に死なされるというのは、まあ十分「酷いこと」に含まれるだろう。私が殺したサルモールの者共のほうが、戦って死んだ分、まだいくらかマシなはずだ。死んだあとの処理はまた別である。

これに関しては、私は本当に関わり合いの無い話のはずなので、聞いているふりだけしておこう。先程はひたすら口に運ぶことだけを意識していた酒と肴であるが、味わつてみればなかなかどうして美味しいではないか。ウィンターホールドも捨てたものではない。

その後、町での評判を加味して、錬金術師として半月程度活動した後、大学へ赴くことが決まった。エンシルなるウツドエルフへの手紙は、それまでに認めておくとのこと。さて、以前の友の言であれば、然程心配はいらないらしいが、だからこそ、大学をしつかりと味方につけなければ。

……ところで、「馬鹿共」の処遇についての非道な話し合いはいつまで続くのだろう。少し、気が萎える。

二四、鍊金術師がついっかかり

少しぶりのやらかしを経て、私の胸中にはいたく落ち着いていた。

いや、正確に言うならば、やらかした直後は少しだけ慌てた。しかし色々考えるうちに段々と、「これはどうにもならんのでは？」との思考が脳内を占めて行き、それに伴い精神の沈静化が起き、今に至っている。

この落ち着いた気を持つてすれば、右手に握った『クラブ』も、それに殴打されて倒れている怪しげな魔術師も、この灰色の景色も、静止した周囲の人間も、なんということはない……ように思える。思えるつたら思える。

首長たる老人との謁見を終えてから大学訪問までの日々は、瞬く間に過ぎていった。まずは、修繕する廃墟の選定。そして住民への挨拶。そして鍊金術師である私へ立て続けに舞い込む依頼の処理。それらを熟していれば、予定していた半月という期間はあまりに短く、結局私が大学へ足を向けたのは、それから更に一月が経つてからであった。老人からは修繕を条件に適当な廃墟の利用、専有を認められている。そこで、宿屋を

仮の住処としながら、首長の館と町の入口の中間地点にある、それなりに大きな元屋敷を私の本拠と定めた。ただ家を確保するだけならば、いい加減に選んだところで大して困りはしない。しかし、計画が予定通り運び町の復興が進んだ場合、その貢献を以て私は従者へ任じられることとなっている。そして、その後はウインターホールド首長が上級王であった頃の兜を老人へ献上し、その功績を以て私兵に、といった具合だ。

貴族ではないが、衛兵隊への指揮権をも持つ首長の側近となった場合、住んでいる家が見すばらしいのでは格好がつかない。元々土地の者であれば為人も知られており、『清貧』でおおるかもしれないが、私は余所者なのだ。誰に対してもわかりやすい形は必要である。そしてその際、それらしい家に引越すための余計な手間をかけるくらいなら、最初からある程度の屋敷を確保しておいたほうが色々と面倒が無い。

それにこれは、私にある程度の財力があることを、町の住民へ喧伝する意味も兼ねている。錬金術という暮らしの助けになることが可能な職能を持ち、ある程度裕福な新しい住民。初めのうちは多少警戒はされるだろうが、慣れてくれば、頼りにされるだろう。食い詰め物がやってきた、と思われるよりは何倍もいいはずだ。それに、私の下にはギルドと一味の者が交替で詰めることになっている。頻繁な人の出入りがある以上、寧ろ財力なり何なりが無いほうが不自然である。

ちなみに、人足は主にウインドヘルムの『灰色地区』と呼ばれる貧民街に住む『ダー

クエルフ』を雇用している。ノルド至上主義を地で行くウインドヘルムにおいて彼等は常に肩身の狭い思いをしており、日銭を稼ぐのも楽ではないのだとか。私の選定した屋敷の修繕作業にはそれなりの時がかかるはずであり、雇う人数も相応なものなので、彼等に払う給金もまた然りだ。私にとつても彼等にとつても良い話と言える。

が、当のダークエルフ達の中に、というか半数以上が、ウインタールールドでの普請を面白くなく思っているようだった。二百年前のオブリビオンの動乱当時、大学には多くのダークエルフが所属していたらしい。しかし、動乱以降は日に日に肩身が狭くなり、町を離れざるを得なくなつた、という経緯があるそうだ。そして、時が経つた今でもその被差別の痛みは引き継がれている、と。気持ちは理解できるのだが、自ら人足に応募しておいてガタガタ抜かす姿勢に腹が立つたので、いくらか撫でてやつてから告げた。「いずれはウインタールールドの町全体を、『人種の坩堝』とする予定である。カジートもアルゴニアンもエルフもそこいら中を闊歩するようになるから、気にするな」と。私達は大陸中から魔術師を集める予定なのだ。寧ろノルドこそ少数派となり、大きな顔をするにはまかりならなくなるだろう。ノルドを含めて憎む老人の笑みが目に浮かぶようである。

とはいえ、いつまでも宿屋暮らしでは面倒も多く、屋敷の修繕が済むのは早ければ早いほうが良い。資金面に一切の不安は無いため、人足は十分に雇っている。私個人で

言つても、鍊金術と魂石充填や付呪、それにウインドヘルム首長から下賜された多額の金銭がある。また、ギルドや一味からの援助もある。私は案外、金満なのだ。そうして多くの手を確保したとしても、材料の問題がある。木材や石材、それに建築用の金具は近隣の村や町で買い付けているが、一度に買える量にも、一度に運搬できる量にも限度がある。何せこのウインターホールドという町は、街道もろくに整備されていないのだ。本当に無い無い尽くしである。そのため、買付け分にだけ頼つては屋敷に住むのがいつになるかと危惧し、実は町の外れ、それも今にも海へ落下しそうな崖側の廃墟の建材を、夜中にこっそり拝借している。工具を使えば大きな音が立ち訝しまれるが、私が、柱一本、梁一本と少しずつ人力で運んで普請場に置いておく分には、発覚することも無いだろう。利用に耐え得るかの可否は、現場で判断すれば良い。人足を総動員して廃墟を解体するのが最も合理的ではあるのだが、住民感情を鑑みると、やるにしてもそれは今ではない気がする。そのような理由から、もし、深夜に目を覚まし、星明かりだけを頼りに柱を担ぐ男を見た者がいたとすれば、それは蜂蜜酒の飲みすぎだ。少なくとも私の下へ来た住民がそう話したのなら、私はそう答え、二日酔いに聞く薬を処方するだろう。

鍊金術師としての活動も、心配していたほどのことは無かった。何せ長く鍊金術師が

いない町であったのだ。病に侵されようが、節々が痛もうが、「いつものこと」としてやり過ぎすしかなかった住民達である。私が低価格で薬を処方していけば、たちまち諸々についての話を聞かせてくれるようになった。私も、頭目殿から『いっばし』を名乗る許可を得てから、既に一年半以上が経とうとしている。その間、リフトからイーストマーチ、そしてここウインドヘルムにおいて、実地で活動してきたのだ。薬品作成の腕前だけでなく、診察のほうも慣れたものである。そうして違和感無く住民の不調を聞き取りながら、世間話としてウインターホールドの町や大学についての話を聞くのだ。

耳に入る多くは、やはり「大学憎し」である。大災害の原因と信じ切っている住民にとつては致し方ないと思いつつ、このあたりは、首長たる老人とアークメイジの手腕に期待するしかない。なんなら、共同で声明を出させても良いかもしれない。「大災害に大学は一切の関わり無し。町と大学は、互いに力を合わせ、在りし日の栄華を取り戻さん」と。

大災害当時のアークメイジは、同じく当時の首長に向けて、大災害との関与を否定し、関係の悪化を危惧する手紙を送っている。大学側のその考えが変わっていなければ、大学は町から向けられる一方的な悪意を面白くなくは思っているだろう。根本では町に寄り添うことが巡り巡って大学のためになると理解しているのだろう。共同声明によって住民感情が改善されるのなら、大学側の歩み寄りはそれなりに期待できる。このあたり

は、頭目殿の考えのとおりだろう。それにあの老人にしても、心配は無用なはずだ。なにせ「計画のため」と口にすれば、自分を便利使いすることを許すような為政者だ。それに、住民を困惑させ、「今までの凝り固まった考えを否定できる」というその一点において、嬉々として参加しそうではある。助かるような、困ったような。どうも私は、あの老人を庇護対象のように見てしまう。図体の大きなラーナルクのようなだ。

閑話休題。まあ共同声明云々も、『町の復興』という実益が目に見えてからやつと受け入れられる類の話であろう。何の利も無いままに仇が仇ではなかったと聞かされても、住民の悪感情が緩和されるかは怪しい。何か切掛が欲しいところである。

時々、「何で大学のことなんか気にするんだ？」と胡乱気な視線を投げかけられるのだが、「薬の材料に必要な珍しい品が、大学でしか手に入らないらしい」と答えれば、一応は納得してくれた。目の前の錬金術師は自分達住民のために忙しく働いており、大学に目を向けるのも、結局は自分達のためだと言う。いくら大学を嫌っていても、その状況で献身的な錬金術師たる私を責められる者もおるまい。いても周りが止める。

悪感情といえば、宿屋の主人だけは住民の中でも例外的に大学への悪感情を抱いていなかった。理由は、大学への食料供給の仲買人を務めているから、らしい。要するに、町の大多数から蛇蝎の如く嫌われる相手が、お得意様なのだ。仮に巧妙に隠しているだけで本当は嫌っていても、表に出すことはないだろう。やはり実利である。そのあた

りからうまく攻められれば良いのだが。

それから、計画とは全く関係の無いことではあるが、ラーナルクが私に稽古を就けてほしい、と頼んできた。たしか、大学訪問の予定がずれ込んでいるなど思ったあたりだったため、町に着いて半月頃だったと思う。

ウィンターホール드에到着して数日後から、あれは誰に言われるでもなく夜明け前には起きて、走り込みを続けていた。日中も短剣の素振りを行ったり、また走ったり。昼餉の後には決まって仮眠をとり、起きれば夕餉までのあいだ中、あちこちを走り回っている。この町は然程広くなく、そのうえ塀らしい塀も無い。危ないからあまり遠くに行かないように、と言いつけた結果、町中まちなかをやたら走るようになったようだ。おかげで、錬金術師の倅は元気が有り余っている、と評判である。おそらく、本音では誰か適当な相手がほしかったのではないかと思う。しかし、ギルドの者も一味の者も、屋敷の普請の指揮に回っているため、教えを乞うことができない。私は私で、採掘村での忙殺されるほどの作業量ではないにしろ、新参者が信用を得るために、と町を走り回っていた。それがために一人でできることをと考え実行し、私の手が徐々に空き始めたと感じたために申し出た、ということなのだろう。

人の顔色を窺うのとは違い、周囲の様子をよく観察できていたことにも感心したが、

最も驚くべき変化は、床に就く際、私を待つ頻度が減ったことだ。今まではどれだけ暇が重くならうとも私が床にやってくるのを待っていたあれが、自分の中で線引をしたらしい。この程度なら待つ。それを越えれば、朝に響くから寝る。そんなふうには。イーストマーチでの採掘村からこつち、色々本人なりに考えているようだとは思っていたので、本人のするがままにしていたが、私が考えているよりずっと早く、あれは子供ではなくならうとしているようだ。それがいいことなのか、悪いことなのかはわからない。ただまあ、私としてはあれが自ら望むことであれば極力叶えてやりたいと思う次第なので、稽古を付けてやるくらいはどうということもない。添い寝の時間が減ることをラナルク自身が呑み込めるのなら、錬金術師としての作業は夜半に回しても一向に構わないのだし。

そんなわけで、久しぶりに私直々に愛息をしごいてやることにした。とはいえ一日に見てやれる時間は限られているため、一日一種。それも昼餉前のみである。場所は屋敷の普請場の近くだ。私の付き人が目を光らせている中で手を抜く者はいないだろうが、子供とはいえ稽古の様子を見れば、多少は背筋も伸びるといふもの。それに、住民の目が多い場所で行い、子供をいたぶっている、などとあらぬ誤解をかけられたくはない。走り込み自体は、毎日続けさせる。

まずは短剣術。その特徴は、無手に近い速さと手数、そして接近時の選択肢の豊富さ

だ。

懐に潜り込めば、甲冑が相手でも急所に刃を差し込める。それも難しいと思えば、得物の短さを生かして素早く納め、投げに移行してもいい。肘や蹴りを織り交ぜるのもいいだろう。相手の得物の扱い辛い距離に貼り付いたまま、自分だけは、拳、柄打ち、体当て、短剣、肘、膝、蹴りと、距離と緩急を織り交せて戦う。短剣術の幾らかは無手体術だというのが私の持論だ。握った短い刃に全てをかけるような者は、ごろつきか亡者くらいしか私は知らない。

指導方針としては、かかってくるラーナルクの悪手を指摘しつつ、ひたすら転がすだけだ。考えなしに思われそうだが、短剣術は相手の懐深く飛び込む必要性から、危険だと思えば不格好でも距離を取らなければならない。ならば受け身をとりつつ転がって離脱するのも手だ。それを教えたいがため、という意味もある。

あれは短剣術の稽古ではすぐに傷だらけになるため、まめに回復をかけてやる。私はその後、仕事に戻るが、夕餉まで自分なりにひらすら鍛えるせい、短剣術の日は死んだように眠ることが多い。

次に投擲術。不意打ちに良し牽制に良し。何より、投擲物以外に何も装備が必要無い、という点が最も素晴らしい。身軽であるという事実は、ありとあらゆる場面で有利となる。

投擲術は、投擲紐を用いたものと、素手での両方を行う。人によつては全く違う業だと考える者もいるが、私に言わせれば、手から物体が離れる瞬間、投擲物への方向にどの程度の力が加わつてているかを感じ取れば、あとは慣れである。対象との距離や風向きを考慮しつつ軌道を予測。それに沿うように放つ。言つてしまえばそれだけだ。指先の微妙な制御が利けば、物がナイフであれ石であれ火炎壺であれ、思つた場所へ着弾させられる。

ちなみに、投げるのはどちらの腕でも行うよう指導している。利き腕のみでしか使えないのなら、不意打ちが難しくなる。それでは勿体ない。

投擲術の日も短剣術同様、体全体に疲労が溜まるせいも、同じく死んだように眠る。自覚の有無は別として、手首、肘、肩を酷使することになるため、寝ているあれの腕を揉んでやる。

そして弓術。ハンが寄越した子供用の弓では、既に若干弱くなつていたため、私の手持ちから無強化の『ショートボウ』をやることにした。これでも物足りなくなれば、改めてこちらの素材で作ればよいだろう。

弓術に関しては、私自身の使用頻度が極めて高い割に、細かいことはよくわかつていない。なにせ、文字どおりの死物狂いで覚えたのだ。「いつの間にかできていた」が正直なところである。

徒党を組んで襲いかかる亡者共の接近を拒むため、素早く引いては射ち、射っては引く、を繰り返した。体感的に、引き始めは背中から肩にかけての力を用い、次に腕の力、という気がしている。しかしこれも、自己の筋力と弓を強化するにつれて、おぎなりな引き方でも相手を殺せるようになってしまったため、今ではほとんど意識していない。ラーナルクにしても、今少し体幹ができてからが本格的な稽古になるだろう。無強化のショートボウを用いる場面があるとすれば、投擲で牽制しつつ短剣術で止めを刺したほうが安全で確実かと思われる。

弓術の日は特に利き腕が疲労するため、揉んでやる。また、指先の皮が剥けて痛む度に回復してやった。そんなことに耐える暇があれば、一射でも多く射ち、腕の限界を迎えたなら走ればいい。一見甘いようだが、実のところそうでもない。

そして剣術。といっても、現状ではラーナルクに鉄製の剣を持たせると自身が剣に振り回されてしまうため、木剣での素振りのほかにすることがあまりない。せいぜい目を鍛えさせようかと、盾を構えさせ、そこに私が打ち込む、といった形をとっている。……どうも剣術というよりは盾術の稽古になっている気がするが、まあいいだろう。どの道、両手で盾を構えている段階で気にすることでもない。

剣術の日は最も怪我も少なく、精神的な疲労も軽いのか、あれは私の就寝を待っていることが多い。毎日毎日必ず限界まで追い込まねばならん道理も無いだろうと、今はこ

れで良しとしている。

ラーナルクは日に日に教えを呑み込んで行くし、私も愛息との時間がとれて喜ばしい。採掘村と違い、倅の鍛錬を人任せにせずにする、という実感が嬉しいのかもしれない。身勝手な親ではあるが、親子のどちらも損はしていないのだから、許してほしい。

ウインターホールドの町に久しく鳴らなかつた大工仕事の音が響き、住民達も大なり小なり抱えていた不調から立ち直り、町全体にいくらかの活気が戻った頃、私の大学訪問と相成った。まずは、マスターウイザードのサボス・アレン、そしてエンシルなる男と接触し、味方につける。そのうえでアークメイジを説得し、町の復興に協力させる。別途、エンシルにはブレックスからの手紙を渡す。大丈夫だ。やることはきちんと覚えている。

余談ではあるが、首長閣下は私の大学訪問について、計画が進行していることには愉悅を覚えるものの、憎い住民に活気が戻ったことには腹立たし気であった。本当に困った老人である。仕方が無いので、「いずれは彼等も計画に巻き込まれる身。東の間の喜びを享受させてやれば、それが壊れたときの絶望もまた、より大きくなる」と言うもの「な

どと言つて機嫌をとつた。段々と御し方がわかつてきた気がする。私の口の回りについては、盗賊連中のそれが伝染つたのではないかと思われる。

更に余談ではあるが、長年悩みの種であつた腰痛から解放された老婆が、ほか数人と共に見送りに来てくれて、「気をつけて行くんだよ」「何か変なことをされそうになつたら、大声を上げて逃げるんだよ」と声をかけながら、気付けの一杯とばかりに蜂蜜酒を渡してくれた。別に、これから敵地へ単身乗り込もうというわけではないのだが。しかしどうにも世話焼きな老婆の好意に頬が緩んでしまい、「注意して、行つてきます」などと返してしまつた。私に祖母がいればあんなふうだつたのだろうか。

ウインターホールドの町から続く、宙に浮く細道のような足場を登り、大学へと歩を進める。

よく見てみれば、大学の設備である細道には崩れている箇所がいくつもある。細道の足場は崖を越えた空中にあるわけで、その高度も相まって危険極まりない。何故修繕しないのか。大学も資金難なのだろうか？

足元に注意しながら進んでいると、細道の途中に、広場と言うには狭すぎるが、人が数人並んで立てるほどの空間が確保された場所に出た。そこに一人のダークエルフがいる。

「やあ、ウインターホールド魔術大学へようこそ。私はサボス・アレン。大学には何か依

頼があつて？ それとも学徒となりに来たのかな？」

いきなり目当ての人物と邂逅してしまった。しかも、最近、やさぐれたウィンドヘルムのダークエルフと触れ合い、それに慣れていたせいとか、眼前の男の気さくさに若干面食らった。大学関係者が皆こうだとは思わないが、しかしこのサボスなる男が窓口を務めていたのだとすれば、ウィンターホルドの町の住民の大学嫌いは相当なものである。男の態度は気さくであつても嫌味が無い。先入観の無い人間がこれを嫌うのは難しいだろう。友が言う「余所者に優しい」という言葉を思い出した。なかなかの快男児である。

私が余所事を考えているのを怪訝に思つたらしい。いかん、その手の思考はいつでもできる。私はサボス本人と、研究者エンシル、そしてアークメイジに用があることを伝えた。町と大学について、重要な提案がある、と。そしてその関係上、大学内にある程度自由に動けると助かることも。サボスはいくらか思考を巡らせ、それを続けながら浮かんだ考えをぽつぽつと口にする。

「さて、何やらわけありのようだな。私に、エンシルに、アグスカ。ああ、最後のはアークメイジの名だ。しかし私を含めたこの三人に用と言われても、共通点が無いせいで全く見当がつかないな。立ち話も何だが、部外者をあまり大学敷地内に入れるのも……。そうだ、いつそ学徒となつてしまえば、大学内の施設は自由に使えるぞ。お前は何か魔

法が使えるか？ 学徒として迎え入れるには、最低限でいいから魔法の素養を確認することになっているんだ。例えば破壊魔法の初歩、火炎の魔法や、ほかにも回復魔法など、なんでもいい。灯火の魔法なんかでもいいぞ」

それでいいのかマスターウィザード。私が大学に害を為す気でいる人間であったなら、どうするつもりなのだろう。防犯意識が低すぎるのではと思うのだが。いや、私にどんな思惑があれど、それを抑えつけるだけの実力者がこの大学には掃いて捨てるほどいる。そういった自負なのだろう。つまりはこの気さくな男もそれなりの実力者、と。まあ、でなければ大学の次席には就けんか。

私は、サボスが空間の中央に張った防御魔法に対し、呪術で『火の玉』を放つ。一つ見せれば十分なのだろうが、サボスは味方につけた人物だ。一応、他の注文にも応えておこう。次に回復魔法を、と思ったところで、そういえばスカイリムでは他の魔法と同じく手から回復魔法を放つのであったと思ひ出した。私の回復は奇跡を用いたもので、多くは己を中心として効果を発揮する。あまりこちらの主流から外れるのもどうかと思い、滅多に使わない『放つ回復』を繰り出す。最後に『照らす光』の魔法を唱えて、サボスを見る。私としては良かれと思つて魔法を披露したのだが、マスターウィザード殿の顔からは気さくさの欠片も無くなつていた。

「お前、いや君は一体どこでその魔法を？」 いや、結果はいい。予想し、求めていたもの

と概ね同じものが出てきたからな。しかし過程が、いやそういう問題か？ 何がおかしい？ この、火炎魔法でありながら火炎魔法ではない印象はどこから来る？ 術の原理が根本から違うのか？ そんなことがあり得る？」

独り言の中に疑問符をばらまいている様子が少しおかしくて、私の中に悪戯心が芽生えた。「こんなのもあるぞ」と、ソウルの矢を放つ。これを見たサボスの反応は劇的だった。「それは絶対におかしい！」だったのだから。失礼なヤツめ。

私に向かつて叫んでおきながら、サボスは再び自問自答に没頭してしまった。「分類としては破壊魔法のはずだ。しかし火炎でも氷結でも雷撃でも無い。例えるなら純粹な魔力の発露。そんな術の体系は聞いたことが無い。あり得るのか？ しかも発動の瞬間、周囲の魔力を取り込むような動きがあった。それが確かなら、あれは発動にのみマジカを消費し、その効果自体は周囲の魔力を用いるとでも？ だとすれば恐ろしい魔力効率だ。火炎魔法の数分の一程度で数倍の威力を発揮することにならないか。なら、極大魔法と同じだけのマジカを込めれば、一体どれほどの威力に……」

自分の世界から戻ってこないの、手刀を食らわせる。「痛い！」と鳴いたあと恨めし気な視線を寄越すが、痛くしたのだ。その手の考察はあとでアークメイジやほかの研究員を交えてじっくりすれば良いのだから、今は早く中に入れてほしい。

「いやなんというか、取り乱してすまない。驚いてしまっただけ。試験は合格だ。という

か君は学徒としてより、客員研究員として招いたほうが良さそうだ。私を含めて大学の研究者達は皆、君の使う奇異な魔術に興味津々となるだろうからな。悪いが、君自身の学ぶ時間を確保してやれるか、保証はできないぞ」

格好のおもちゃを見つけて、やたら機嫌が良さそうだ。大学に赴く前にブレックスが言っていたが、基本的に大学の人間は『魔術馬鹿』の『研究馬鹿』で、ほかのことはどうでもいい、という者が多いそうだ。この男もまた、その手合いなのだろう。何にせよ、目標としていた人物から好印象を得られたことは、成果と言えよう。

私はサボスに案内され、大学の門を潜った。門の内側には三つの塔が高い扉で繋がっており、それぞれ『達成の間』、『平静の間』、『元素の間』と名付けられているらしく、入り口が設けてある。門正面にある元素の間の扉が最も大きい。

それにしても驚いたのは、潜った門が近づいただけで独りでに動いたことだ。何処かに機械式の巻き上げ機を引く巨人が隠れているわけでもなく、本当に独りでに。サボスはこれも魔術だと言う。いつだったかも思ったが、こちらの魔法は自由度が高いように思う。……いや、違うな。ウーラシールにおいても、魔術式であろう昇降機が設置されていた。私が知らないだけで、ロードランやロスリックにも様々な魔術はあったのだ。少なくとも、私はシースが聖女達を化生に変えたその方法を知らない。件の昇降機作り方も知らない。戦闘における発動の手順が異なる程度で結論を出すのは早計と言わ

ざるを得ないだろう。こちらの魔法を学ぶ以外にも、その差異を通して私の魔法を更に高めることができるやもしれない。

……自らの探究心を呼び水に、否応なく、とんがり帽子の翁を思い起こしてしまう。シースの魔術如きで亡者になっていいる場合では無かつたのだぞ。まだまだ学ぶことはあつたのだ。馬鹿め。呆れるほどの探究心を持ちながら、何を満足しているのか。馬鹿め。

学院から逃れた暗殺者についても思う。彼は私との友情に殉じたとそう思いたいが、ここに彼がいればどうであつたらう。世俗とは隔離された環境で、思う存分学ぶことができる。権力闘争の道具にされることも、卑しき者と蔑まれることもない。つまらぬ過去を思い出す暇も無く、魔術に没頭したのではないだろうか。

二人共、何故ここに居ないのだろうか。

扉の中の広場中央に、巨大な魔術師の像がそびえている。それを横目に見ながら進む私を振り返り、サボスが怪訝そうにしている。いかん、感傷に浸るのは宿に戻つてからでもできる。今は役目に集中すべきだ。

元素の間に足を踏み入れ、実技演習場のような広間で待つよう言われる。サボスが、エンシルとアークメイジを連れてくるそうだ。手持ち無沙汰なため、演習場を眺めてみる。そこかしこに、明らかに自然発生したものではない光源が浮遊しており、全力で「こ

こは魔術師達の学舎だ」と主張しているようにも思える。例に出したウーラシールにもその気が無かったでもないのだが。なんだろう、魔術に精通している者というものは、それを誇りたくなるものなのだろうか。シースの書庫は……魔術的要素より、不快な音を撒き散らす巨大な機械式の楽器のほうが印象深い。あれは本当になんだったのだろうか。蛇人がレバーを用いて音を鳴らした途端、元聖女達が狂乱したので、なにか思考か精神に作用する特性があったのかもしれないが。しかしそれは音の特性であり機械のものではない。時代を下ったロスリックならまだしも、ロードランにおいてはあのような仕掛けは書庫で見かけなかった。魔術を生み出しただけでなく、機械などの道具の作成にも秀でていた件の白竜の頭の中は、一体、何がどのようになっていたのだろうか。余所事を考えていると、サボスが二人の男を連れてきた。一人はブレックスと同年代らしきウツドエルフ。一人はフードで顔がよく見えないが、老齢のノルドかインペリアルといったところではなからうか。

サボスが口を開き、私の「わけあり」を聞こうとしたその瞬間、世界が灰色になった。更には強い違和感が私を襲う。その出処はすぐにわかった。サボス達が静止している。状況的に、私を持って成す芸の類ではないだろう。もつと言えば、私の動きも阻害されている。酷く粘つく水の中にいるような感覚だ。

敵襲であろうかと身構えていると、私とサボス達の間、穴が空き、一人のローブ姿の

男が現れた。……今の穴、マヌスに引き摺り込まれた時空の歪みに似ている。この大学というところは、つくづく昔を思い出させてくれるな。

だが、男は私の思いなどには一切頓着せず、まるで無視して、前置きも無く無遠慮に話を始める。

「お前達に何の目的があり、お前が何を企んで大学に来たのかは知らない。だが、オブリビオンの門が閉じて以来二百年、このムンダスは安定していたのだ。これはこの世界という大きな枠組みとしての意味で、人の世のことを指しているのではない。お前は、サルモールと帝国の戦争があったと主張するかもしれないが、それは世界の安定化とは関係の無い話だ。それを今になって揺るがす理由はなんだ？ もう直に竜の王が蘇り、お前達の認識では再び世が乱れる。それで十分ではないのか？ いずれにせよ、ムンダスの外、おそらくは『エセリウス』とも異なる理ことわりの世から来たお前が何を為すという？

『デイゴン』の再びの侵攻の尖兵を気取るか？ 『ナミラ』に魂を集めるよう言われたか？ それとも、生者の理から死者の理からも外れた暗闇と払暁を宿すその身において、『アズラ』の目を欺いたか？ まさか『アカトシユ』の祝福を受けた半人半竜とは言わないだろうか？ それはお前の宿命ではない。そんなお前が大学と接触して何を

……」

「うるさい」

気がつけば無強化のクラブで男を殴り倒していた。話が長い上に自分だけ理解している単語を並べ見当違いなことを捲し立て、結局聞きたいのは「訪問の理由は何だ？」と来たものだ。大体、生者だの死者だのと言われたあたりでかなり頭に來ている。そのあたりについては、私こそが最も真実を知りたいと願っているというのに。

本来、火継ぎを行えばダークリングは消えて不死人もいなくなるはずなのだ。暗闇に生まれた火。それによって齎された生と死の概念。その境界が曖昧になる象徴的な、文字どおりな穴こそがダークリングだからだ。私は二度も火継ぎを行ったし、最終的には火を終わらせた。『ロンドール』の言う篡奪を行ったわけではない。終わらせたのだ。つまりは火が起こる以前の、生も死も無い停滞した世界が齎されたはずだ。それが不死人のまま異境であり異郷でもあるこの地で目覚めさせられた。私にとっても繊細な問題なのだ。それをこの馬鹿は好き勝手に……。

……………。

とはいえ、殴ってしまったことはまずかったかもしれない。酷く緩慢な動きであったはずだが、眼前の男には躲せなかったようだ。ひ弱だな。だが、まずは言葉を交えて相互理解を深めるべきだったのではないか、という気がしてくる。しかしなあ、この男が人の話を聞いただろうか？ いや、多分おそらくきくと駄目だったのではなからうか。

それに現状をどうするか、だ。この時が止まったような灰色の景色、これは状況的に

眼前の男の仕業だろう。しかし術者が気を失っても解けない類のものなのか？ それとも、術内で静止していなかった私や男の体感時間でいくらか経てば、解けるものなのか？ わからん。というか死んでないよな？ ……よし、息はある。一応、回復しておこう。

ともあれ、この場で私ができることも無さそうだ。突っ立っているのもなんだしな。壁際にでも座って、男の覚醒を待とう。まったく、妙なことになったものだ。思えば、流石のシースや神々でさえ、時を止める術は持っていなかったはずである。暗月の彼が最も近いかもしれないが……。やはりこの地の魔術は、自由度が高いように思う。学びがいがありそうだ。そうじゃないか？ ローガン。オーベック。

二五、サイジック僧兵とデイドラロード

男が昏倒してから、体感で半日ほど経った。しかし私は、今なお灰色の景色を眺め続けている。

………暇だ。

あまりに暇なので、男が話した、というか一方的に捲し立てた言について考えてみた。奴は「お前達」と口にした。思い浮かぶのは、計画に関わる人間、ブレックス一味にギルドの面々。そしてウインタールホールド首長。……なのだが、それなら接触はもつと早くても良い気がする。大学敷地内ではか接触できない理由があつたのか？ 例えば、この妙な静止魔術が使えない、だとか。いや、安易に相手の力の上限を仮定するべきではない。しかし、だとすればますますわからんな。

もしくは、「お前達」の定義が間違っているとか？ そういえば奴は、デイドラの名を幾つか口にしていたな。それらと私が組んで何かしら企んでいると誤解したのだろうか。

奴の挙げた名で言えば、まず「デイゴン」云々。これはデイドラロード、メエルーンズ・デイゴンのことを指しているのだろう。二百年前、オブリビオンよりタムリエル各

地へ侵攻し、多大な被害を齎したとか。

あくまで聞いた話だが、時の皇帝、マーティン・セプティムがその身を捧げてメエルンズ・デイゴンを退け、結果オブリビオンの動乱は終結した。デイドラの脅威から人々は解放され、マーティンは少なくともシロディールにおいて現在も尊崇されている。

しかし結果として、初代皇帝以来続いたセプティム朝が途絶え、帝国衰退の一つの要因となった。

前の大戦（大戦）において、三ヶ国を擁するアルドメリ自治領と、言わずと知れた大国である帝国の争いは激戦となり、双方の戦力を大きく損耗させた。サルモールの策略がうまく働いたとも理解しているが、動乱からの衰退が、大戦における帝国の苦戦の一因であることに、間違いは無いだろう。

少々話がそれだが、要するにデイゴンとは種を問わずタムリエルに済む全ての人の敵だと言える。別に私はそんなものの走狗となった覚えは無いし、デイゴンとやらが本気で私を配下に置きたいと思っているのなら、そのときは望むところだ。こちらにも、薪の王としての矜持がある。尋常に命がけの腕試しをするまでだ。私が勝つまで何度でも。

次に「ナミラ」云々。これは私のソウルの業を指してのことだろう。どうやってそれを知ったのかは不明だが。ナミラとは悪霊や靈魂、暗闇や嫌悪を司り、そしてそれらを

好むと一般的に考えられている生物を眷属とするらしい。クモやナメクジなどだ。別段、私はクモを嫌ってはいない。益虫として認識している。動きも存外ひょうきんに思えて可愛らしい。フロストバイト・スパイダーは別だ。あそこまで巨大では、立派な害獣である。駆除対象としか思えん。ナメクジは……ファランの城塞にて少々面倒であつたので、特別嫌悪してもいないが、あまり好きではない。

とにかく、私の認識はその程度であるため、ナミラを悪神とは考えていないのだ。それにソウルの業は、以前にも触れたが、善人だろうが悪人だろうが、使える者は使える。それを以て悪神とされるデイドラの配下と決めつけられるのは、少々不愉快である。

……いや、やもすれば男の言は、私の不死人としての社会的な立場を指していたのかもしれない。ナミラとは「見捨てられし者達」の守護者でもあるらしい。私達不死人は、みな故郷を追われた者達である。中には喜んで不死の生？ を謳歌する者もいたが、概ねはそうだ。加護や祝福を受けている自覚は全く無いが、知らぬ間に守護対象と見られている可能性が無いでもない。

しかし私にとっての信仰とは、帰依することではなく、誓約を結ぶものである。独善的に保護者面をしているのだとすれば、是非止めていただきたい。

あとは「アズラ」だったか？ 「アカトシユ」とも口にしていたが、これは違うだろう。アカトシユとは時を操り、この世界を創造したとされる竜神である。男の言でも私はそ

の使徒に該当しないらしいし、竜を散々狩つて来た私とは無縁だろう。

さて、アズラだが、こちらは薄暮と黎明を司り、デイドラとはいえ善神と敬うものもいるのだとか。特に、ダークエルフやカジートにそういった者が多いらしい。これはアズラの、死霊を憎む性格もあるのだという。

……なるほど、男の「生者と死者の理」云々や、「暗闇と払暁を宿す」云々は私という器のことを指しているのだろう。言いたいことも分かるし、概ね正しいと感じる。火が弱り、日が陰った黄昏から薄暮、夜の世界において、生と死が曖昧な不死人となり、その不死性故に只人からは化け物と恐れられ、私は故郷を追われた。後に世界へ払暁を齎す薪の王となったが、しかしその根底は死霊に近いものがあるのかもしれない。

とはいえ、『小ロンド』の亡霊達に刃を届かせるには『一時の呪い』を用いてより霊に近い存在となる必要があったわけ、私としては己を純然たる人だと主張したい。「アズラの目を欺いた」とは甚だ心外であるし、仮にアズラが私を死霊として扱うのなら、善神だろうがデイゴンと同じく尋常に腕試しと洒落込むつもりだ。無論、相手が負けを認めるまで。

と、私なりに色々と分析してみたが、わかったことは何も無い。男が見当をつけるだけの理由は推察できたが、私がそれに正しく該当するかは怪しいものであり、結局、『何もわからない』ということがわかった。つまり現状において男は、私の内面の繊細な部

分へ土足で無遠慮に踏み込んで来ただけの慮外者である。以上、一応の分析結果が出たため、此奴に遠慮する必要も無し、と結論を下した。

それに、いい加減、この灰色の景色にも飽き飽きしてきたところだ。男を起こすしよう。外傷は治癒したのだから、意識さえ戻せばそれで良いはずだ。

しかし、男が目を覚ました途端、反撃に出ないとも限らない。物理的な拘束が有用であるかは不明だが、しないよりはマシだろう。盗賊相手に鍛えた捕縛術で男を後ろ手に縛る。両足も縛り、手足が最も近くなるよう、縄を渡す。うつ伏せのまま反り返る形である。更に、旅の道中、同行者用にと確保していた樽一つ分の飲水を、男の全身にかける。あとは背中に片足を乗せて体重をかけ、右手には太陽の光を付与したブロードソードを、左手には太陽の光の槍を構えたまま保持しておく。

雷の空気を焼く音がうるさいが、男には丁度いい目覚ましになるだろう。……と、思いきや、これだけやってもまだ男は目を覚まさない。大物なのか間抜けなのか。しかし、私にこれ以上待つ気は無いので、頭を剣の柄で小突いて起こそうとする。起きないので続けて小突く。面倒になったので、空いた足で加減せずに蹴る。男がやっとうめき声を上げた。

「つ！ え、あ、私は頭を……。縛られ？ え、濡れ？ え？ ……あ！ お前は！ と
うかその雷撃はなんだ!？」

サイジック会の『僧兵』が目を覚ますと、デイドラと思しき男が自分を縛り、踏みつけていた。両の手にはどちらも雷撃を構えている。

僧兵は特に、男の右手の剣に纏わり付く、太陽の光を凝縮したような雷を目の当たりにして「思わず」といった具合に驚き、次いで自らの仮説への確信を深めた。

一般的にこの地で行われる武器への付呪では、対象を攻撃した際にそれが発動する仕組みで、構えているだけでこうも存在を主張するものではなかったはずだ。極大魂石を用いて火炎を付呪した剣でも、常に業火を放っているわけではないことは、この地の者でも既知であろう。会の同胞の中には似た現象を起こせる者が存在するやもしれないが、僧兵の知識の中には無かった。そのため男に対する、デイドラかそれに纏わる何か、との認識が確かであると判断したのだ。

だが、男は僧兵の思考や反応などには一切の興味を持たず、一切の抵抗を許す気が無く、僧兵の問いについても同様であった。

「二つ、黙れ。私の質問に答える場合、私が許可した場合以外の発言を許さん。どうしても訴えたいことがあるなら、口以外の自由な首から上を懸命に使い、発言の許可を得る

努力をしろ。

一つ。妙な真似をするな。既に私は、お前から『攻撃を受けた』と認識している。これ以上は看過しない。それに、大王の槍をただの雷撃扱いは感心しないな。私の雷は神殺しの光だ。ついでに言うと、水によく通る。ずぶ濡れのお前なら、着弾箇所は大穴を開けるだけでなく、瞬時に全身が消し炭になることだろう。お前が如何なる防御を張ろうとも、必ずやそれを突き抜けてみせる。

私の忠告を聞き入れず反する度に、骨や歯を砕き、鼻を削ぎ、目を潰し、最後には殺す。まあ、私の危機感が瞬時に高まる事態があれば、それが即座に最後となるわけだが。是が非でも、自分の命を掛け金に試してみなければ気が済まんというのであれば、私は一向に構わんど。以上、理解したか？」

僧兵はこの状態での反撃が可能か試みたが、まず姿勢と視界が悪く、対象の位置を正確に把握できないため、危険だと判断した。空間ごと作用する魔術もあるが、それでもらも巻き添えになつては意味がない。男が僧兵に用いた捕縛術は、結果として極めて効果的だった。

それらの判断に数拍の時間を要したが、男はそれが気に食わなかつたらしい。眩しく光を放つ剣を顔に近づけられる。そしてゆっくりと刃先が顔の中心部へ。このままでは鼻が無くなる。いや、纏わり付く雷を思えば、顔面が焼け焦げ、脳にまで達する可能

性もある。僧兵はひとまず男の手を止めるのが先決だと慌て、肯定のため「わかった！」と喚いた。男の「耳障りな声だな」という無感情な呟きだけが聞こえる。

「では質問だ。一つ、お前は何処の誰だ。一つ、何をしに来て、私をどうするつもりだった。一つ、この私達以外が静止した状況がお前の仕業なら、何をした。一つずつ答えろ。先刻の如く好き勝手に嘯さわるなよ。簡潔にな？」

ああ、しかし私の理解できるように話せ。それと付け加えよう。嘘や隠し事があると感じたら、その是非に限らずやはり罰を与える。以上だ。さあ、答えを」

なんと横暴な男なのだろう。僧兵はそう感じ、愕然とした。こんな傍若無人が許されるのだろうか、とも。

第一に、僧兵としてはこの地に転移するにあたり、それでも気を遣ったつもりだ。だからこそ、男をいたずらに刺激しないため、隔離魔術を用いて、男の特殊な事情が周囲に漏れないよう配慮したのだ。それを攻撃だなどと。

所属や名を名乗ることはまだいい。この隔離魔術についてもだ。しかし、簡潔且つ男が理解できるようにとはどういうことだ。男にどの程度、魔術や世界の仕組みについての知識があるのか。知識は無くとも、こちらの説明聞いて納得できるだけの理解力があるのか。僧兵に男の頭の出来を知る術などは無い。だが、男は容赦無くそれを強要する。それに、嘘や隠し事の気配を感じたら罰を、など、完全に主観の話ではないか。僧

兵は、蛮族染みた男の思い込みで自分が死ぬ様を思い浮かべ、あまりに惨めだと思った。自分を踏みつけ、剣と雷撃で脅すこの男は、とても酷いヤツだ。仮に男がデイドラではなかったとしても、それに近い、もしくは匹敵する邪悪さであると僧兵は思った。あるいは、ただの脅し文句なのでは？ と脳裏をよぎったが、男から発せられる雰囲気、僧兵に『真である』と思わせた。僧兵は答えるが、彼知らず声が震える。

「私の名はタンデイル。サイジック会の者だ。ここへは、お前が何を企んでムンダスへ来訪したのかを確かめに来た。しかし通常エセリウスを越えて何者かがムンダスへ侵入してくるなど有り得ない。だからこそ、複数のデイドラロードが手を組み、お前を顕現させたのではないかと……」

僧兵がそこまで口にした瞬間、腰に、何か硬い物がずれる音と共に違和感が走った。次いで、脳を焼くような激痛。振り返ることも出来ず、痛みから叫ぼうにも「ぎやっ……」と小さく漏れたきり、声を発することができない。あまりの痛みに横隔膜が麻痺し、喉に空気を通すというヒトとして最も基本的な生体反応すら覚束なくなっているのだ。痛みと酸欠から気が遠くなるような、失神してしまいたいのに強制的に覚醒させ続けられているような。実際には数拍程度の時間しか経っていないのだが、僧兵には永遠にも思える時が過ぎたとき、腰に温かな感触が起こり、激痛が瞬く間に緩和された。

僧兵が不思議に思い、身を振って後ろを振り返ると、男が僧兵の腰に手を当てている。

回復魔術を用いたようだ。魔力の残滓を感知できる。それと同時に、再び腰に強い痛みが走る。とはいえ今度は先程の激痛と呼ぶまでは至らず、ずっと軽い。原因も身を振ったことであつた。

「お前は頭が悪いようだ。私はお前へ、質問に答えるか許可を下した場合以外の発言を許さない、と言つた。タンデイルよ。お前がここに来た理由まではいいだろう。私の大学来訪のわけを知りたかつたのだな。理解した。それで、その後の言は私の質問への答えか？ 違うな。では、私の許可は得たか？ それも違うな。お前はお前の思う通りに話を続けた。だから、罰だ。

尤も、お前の口にした話は私も疑問に思うところなのでな。あとで改めて質問した可能性は高い。そういう意味では見逃してやっても良かったのだが、一度口にしたことは守らねばな。それに『サイジツク会』という組織？ の名も初めて聞いた。というわけで、腰椎を折つた。回復は痛み止め程度だから、あまり動かんほうがいいぞ」

僧兵は何度目かの衝撃で、一度頭が真っ白になつた。説明の補足をしただけで、自分は腰の骨を折られたのか？ 意味がわからない。つまり自分は、一から十までこの男の言うとおりにしななければ、その度に拷問を受け、最後には殺されるのか？

僧兵は先程、男のことを横暴だと思つた。傍若無人だとも。だが、それでは理解が足らなかつたと言わざるを得ない。腰が痛まない程度に後ろを振り返り男を見て思う。

男は理不尽の塊だ。

おそらく男は、自分が昏倒する直前に吐いた言葉によって静かに激高しているのだろう。仮にこれが平常であるのだとすれば、人間社会に馴染み、生きていけるとは思えない。何かが男の逆鱗に触れたのだ。しかし、それでもこの仕打は無いだろう。痛みを味わった瞬間に零れた涙は、それを塗り潰す恐怖によって止まり、そのまま出てくる気配が無い。

この危険人物へどのような対処を施すかを検討するためにも、一度この場をやり過ぎさなくてはならない。僧兵は、細心の注意を払って、何もかも男の指示に従うことを決めた。

真実では、現在の僧兵にそれほど主体的な思考は存在しない。馴染んだ論理的思考により答えを導き出した自覚はある。だが実際のところ、それは後付に過ぎない。未知の恐怖をその身で体感したその瞬間から、少なくともこの場で男に逆らおうという意思は、一欠片さえも消え去り無くなっていった。

僧兵はか細い声で詫びを入れ、質問は何だったかと乱れた思考を整え直し、間違いが無いか確認してから慎重に口を開いた。

「私がここへ来た理由は、先にも言つたとおりお前の大学来訪のわけを知るためだ。そして、お前をどうするのかは、お前自身を見極めてから判断しようと考えていた。現在

発動中の魔術は『隔離魔術』と呼称されるものの一つで、任意の対象と自ら以外の時の流れを断絶させることが可能だ。断絶された外の時間は、見てのとおり止まっている。私が解除すれば、これらはすぐに元どおりとなる」

余計なことは口にしていない。質問への回答として過不足は無いはずだ。大丈夫だ。今度は酷い目には遭わないはずだ。僧兵は男が口を開くまでの僅かなあいだ、怯えて過ごさざるを得なかった。

「なるほど。それで、私を『見極める』云々に、先程の話が関わるわけか。

たしか、この世界ムンダスの外にあるデイドラの領域オブション、それを更に包み込むエイドラの領域エセリウス。雑な理解かもしれんが、概ね正しい、間違つてはいないか? ……よし。

それで、玉葱……よりは卵のほうが例えとして相応しいか? この世の最も外側且つ強固であるその外殻を突き破り、他の世界の者が異物として侵入してくるということは通常考え辛い事象であるため、ただでさえ一柱でも力を持つデイドラロードが徒党を組んで、ムンダス……というかタムリエルになんぞ醜悪な悪ふざけを仕掛けようと私を送り込んできた、と判断した。それ故に『お前達』、と。そのように考えたわけだな」

僧兵の胸中に今度は深い安堵が広がり、普段は微塵も信仰していないエイドラや、父母や、同僚にすら感謝を捧げた。男は蛮族染みた躊躇いの無い暴力を振るう割に、その

理解力は低くはなく、またこの世界の造りにも一定の理解があるようだ。これは僧兵にとつて、大変な幸運と言えた。何せこの地の一般人を基準に考えれば、まず自分達が、ニルンというほぼ球体である惑星の地表に暮らしている、という事実から説明しなければならぬ。男が正しく蛮族であった場合、まずこの過程で僧兵は幾度と無く『酷い目』に遭つていたことだろう。僧兵の安堵も已む無しである。

しかし僧兵は、同時に強く気を引き締めた。言葉はきちんと通じる。だが世界の造りに一定の理解があるからといって、その程度が自分達と同じ水準とは限らない。どこかで聞きかじつた単語を口にしただけかもしれないのだ。その可能性に僧兵は再び震え上がった。更には、言葉は通じるのに常識が全く通じない恐怖を再認識してしまい、自分とはあと何度同じ思いを抱くのだろうか、精神的負荷により早くも疲労して来た脳が若干の現実逃避に走つた。

「あとは、お前が昏倒する前、『生者の理から死者の理からも外れた暗闇と払暁を宿すその身』、そんなことをほざいてくれたな。よくもまあ人の……。いや、よそう。

どのような手段でそれを感じたのかは私の理解を超えるものだが、概ね間違つてはいないよ。私は人の身でありながら、死しても蘇る不死人である。その本質は黄昏と薄暮を彷徨う被追放者だ。そして、世界に光を齎した準神でもある。つまりは払暁。更に、一個人の決断で世界を終わらせ閉ざした、大罪人でもある。つまりは暗闇。……と、

掻い摘んで説明しても、世界が違うのならば、何のこたかいまいち要領を得まい。少し語るから聞け」

男はそう言つて、自らの事情を語つた。元は何処にでもいる人であつたことから、不死人となり世界を紡ぎ、最後には全てを終わらせたこと。そして、何故だかこの地で目覚めたこと。

僧兵は男の話に注意深く耳を傾けると共に、男の逆鱗が何であつたのかを理解し、自分がそれを無遠慮に触れたことを悟つた。僧兵の中で男の評価は、『理不尽な蛮族』から『猛るデイドラロード』に変化した。

エイドラとは、エルフの言葉で『祖』を意味し、雑にまとめれば、この世界を作つた神達を指している。当時のタムリエルのエルフと人間種の主従関係は話がそれるので置いておくが、タムリエルのエルフはエイドラの子孫を自称していたため、そのように定義された。現在、エルフも含めた人間種のあいだでは八大神が主に信仰されているが、デイドラロードに数えられている『マラキヤス』も元はエイドラであつたことを考えれば、人間に認知されている八柱以外にも多くが存在し得ると考えるべきである。そしてその対となるデイドラとは、同じくエルフの言葉で『祖に非ず』を意味する。つまり、エイドラではないにも拘らず、力を持った者達の総称である。こちらも十六柱が認知されているが、あくまでムンダスへ影響を与えているものが現在それだけだというだ

けで、全くの不干渉を決め込んでいる、または干渉が認知されていないデイドラロードがないとは限らないのである。

それらの事実を鑑み、僧兵は男を『異世界から来たデイドラロード』と定義した。生と死の枠組みを超越し、創世神話に関わるなど、十分過ぎるほどに神である。そしてその神は、自分の迂闊さによって静かに怒っている。サイジック会の一人として、現在のタムリエルの戦士や魔術師など幼子のような存在だと思えばいい。単身やって来たのだが、顕現し憤怒を隠しもしないデイドラロードをたった一人で相手取るのは、無謀が過ぎるといふものだ。

男のこの地への来訪が、何らかの偶然によつてか、何者かの思惑によつてかはこの際どうでもいい。今、僧兵に課せられた義務は、眼前のデイドラロードの答えに応じ、そのうえで自らの迂闊が招いた憤懣を鎮めることだ。何せ、男がどのような権能を持って、いるかも不明なのだから、その怒りがこのムンダスへ何を齎すのか全く予想がつかない。自らの失態が原因だが、それ以上にサイジック会の一人として、この事態に背を向けることは許されない。

僧兵は今まで以上に慎重になり、言葉を選んで男の質問に答えていった。

一度痛い目に遭わせてやったら、魔術師の男は随分と協力的にこちらの質問に応じるようになった。心が折れたのかとも思ったがそういう様子でもないため、少々訝しいと感じる。ひとまず、男が反撃を企てていても、瞬時に命を奪えよう身構えておこう。

先程、男の腰椎を折ったときの感触から、肉体的には普通の人間と全く変わらないことがわかった。不死人のように、華奢な見た目から巨人もかくやという剛力や剛体を発揮する、わけではないらしい。ブレックスから対魔術師の心得として、防御魔法に気をつけるよう言われている。元はサルモール対策の一貫として教授されたものだが、まあ今はいいだろう。肉体的には虚弱でも、それによつて魔法的にも物理的にも他者の干渉から身を守るそうだ。何の抵抗も無く重傷を負わせられたということは、魔術の発動は成っていないということだ。それらしい魔術発動の兆候を感じたら、迷わず殺すことにしよう。

いくらか順調になった質疑応答を経て、色々と分かったことがあるので、少しまとめることにする。

魔術師の男曰く、自分はサイジック会の僧兵であり、私を、複数のデイドラロードがムンダスへの干渉、あるいはその前段階として送り込んだ異物と判断した。これだけの異常事態を引き起こすにはかなりの数のデイドラロードが関わっている可能性が高く、

それ自体も異常事態と言える。そのため、急ぎ駆け付けた。

大学を詰問の場を選んだのは、大学全体に張られた結界や魔術的力場の関係から、ほかの地に比べて魔術発動の効率が良いので、比較的地の利を得られると考えたため。

男の判断と行動は、会の総意ではなく、賛同者はいても独断に近いもの。

灰色の景色は男の魔術によるもので、よくよく聞けば、男を殺すと、そのまま状態が保たれてしまうそう。腹を立てながらも殺さなくて良かったと安堵した。しかしそのまま放置すれば、その空間に歪みが起こるなどの悪影響を及ぼすため、そうかからないうちに会の者が魔術を解除しに来るだろう、とも。しかしその場合、仲間を殺された次の僧兵とやらが私に敵対行動を取る可能性は高い。やはり殺さなくて良かったと思う。今日の私は冴えているかもしれない。ついでに言うと、太陽の光の剣と槍は、腰椎を折ったあたりで消した。単純にうるさかったからだ。

そして肝心の『見極め』についてであるが、私が何を望むかがわからなければ判断のしようがない、というので、計画について話した。男は「そんな世俗な理由で……？」と困惑していたが、私が神の都合で動かねばならない道理が何処にあるというのか。更には、私が望む望まないに拘らず、この世界ではおそらくデイドラロードとして扱われるだろう、とも。会ったことも無い者達の走狗扱いはされずにすんだが、私本人がそれ扱いは。少々複雑である。

そして『お前達』については、撤回するらしい。男曰く、デイドラとは基本的に自己顕示欲が高い傾向があるため、異界から力を持つ存在を顕現させたのなら、その時点で接触があつて然るべきだ、と。それが無いのならば、私の来訪はエイドラによつて成されたか、もしくは超自然的な何か（神だの何だの時点で『超自然的』だろうと思つたが、話が進まないで黙っていた）が働いたためであろう、とのことだった。会に戻り、仲間や文献などから類似する事例が無いが、調べてみるそうさ。私も気になつていたところなので、結果がわかつたら知らせに来いと伝えた。その際には、この隔離魔術は使わないように、とも。この魔術は単純に私が驚く。

男が質問の許可を求めて来たので、応じた。何かしらの権能を持つていると思われるが、それは何であるか、と。

そう言われても、別段私に特別な力があるとは思えない。「せいぜい、死んでも蘇ることではないか？」と笑いながら答えると、男は難しい顔で黙り込んでしまった。小馬鹿にしたと思われたらうか。もしくは、私が煙に巻いた、とでも。しかしそうは言われても、本当に思い浮かばないのだ。

この地の八大神やデイドラ十六柱のように、何を司る、ということも無い。そもそも私は蘇るだけの人のだから、そんなに多くを期待しないでほしい。「都合良く『人』と『準神』を使い分けるな」と何処からかお叱りの言葉が飛んで来そうだが、人間そんなも

のだ。余程の人格者でもなければ、自分の都合のいいように立ち位置を変えたいもの。

あるいは、男の言う暗闇と払暁が私の権能なのかもしれないが、それを司るデイドラロードは既に存在するうえに、仮に私の権能に縋り信仰する人間がいたとしても、加護や祝福を与えてやれる自信は一切無い。多分無理だろう。そのあたりから鑑みて、やはり私は力が強いだけの人である。

ちなみに、サイジック会は、多数の著名な魔術師を排出している権威ある組織であり、基本的には『魔法は少数の選良者だけに許される特権であるべきだ』という考えの下、運営されているらしい。それが直接的か間接的かはわからないが、タムリエル各地の魔術師集団、俗っぽく言えば大学を含めたギルド設立の原因となったそう。大学とて、研究者達の中には自らの成果を秘匿しようと、排他的且つ閉鎖的な思考を持つ者もいるらしいが、サイジック会のそれとは比べ物にならない程度には開放的らしい。まあ、何せ設立理念からして、サイジック会のやや見える選民思想と特権主義に反発してのことなのだ。真逆に舵を切るのは自然とも言える。

とはいえ、会の方針もわからないではない。魔法とは危険な代物だ。扱い方を誤れば、周りを巻き込んで身を滅ぼす。故に誰彼構わず広めずに弁えた人員のみが扱う術とすべき、と言うのも、ある種の正解だとは思うのだ。イザリスの悲劇とて、望んで起こ

したことではあるまいし。それを起こしたのは、始まりの火から王のソウルを見出した神の一柱である。グウィン神族とは違うが、彼女とニトは神と呼んで差し支えはないはずだ。神でさえ過つ。況や人をや、である。

尤も、私達の計画にとつては、大学の開放的な姿勢は望ましい。事前情報のとおりとはいえ、交渉の材料にもなりそうだ。渋るようなら「設立理念に反するのか？」と脅しをかけてやろう。良い話が聞けた。

閑話休題。魔術師の男は、用が済んだので帰りたい、と言う。

人のことをデイドラロードとまで言うのだ。私を退治して行かなくても良いのかと聞くと、通常のデイドラは死亡の後に復活するにしても、数百年から千年程度はかかるそうだ。だからこそ退ける意味があると。中には数年で復活する者もいるそうだから、幅が広すぎやしないかと思わないでもないのだが。その点、私の蘇りはすぐだ。第三者による観測を行ったわけではないから体感での話だが、数分も経過していないのではないかと思われる。故に、ほぼ無意味な敵対行動を取るよりは、極力不干渉としておきながら経過観察に留め、異界来訪の謎を探るべきだ、という結論に達したらしい。そういうことなら止めはしない。私としては、こちらの邪魔にならなければなんだったいい。逆に言えば、邪魔になるなら容赦無く潰す。

これが、『デイドラの駆逐』を至上命題に掲げるスタンダードの番人であれば、無意味

であろうが関係なく襲いかかって来ただろう。一応、表の顔でも活動する私なので、スレンダールにはお目溢しを得られるよう、せいぜいお行儀よくしておこう。おそらく、件の神が悪しきデイドラと考える者等と仲良くしなければ良いのだ。それでも融通が利かないのであれば、先の二柱同様、こちらもお相手仕るまで。

余談だが、当然のこととして、スカイリムに不死人の骨を薪にした篝火などは何処にも存在しない。だが、不死人の蘇りとは別に蘇りとは別に篝火が齎す業ではない。実際、不死院で私は何度も死んだ際、蘇るのは馴染んだ独房の中だった。篝火を見つけてからはそこが蘇る地点に変わったが。つまりは、主観的に『自らの帰る場所』だと感じているところが蘇りの場所となるのだ。そのため、私が今死んだ場合、蘇るのは仮拠点に据えている宿屋の部屋だと思われる。

男の言うとおり、敵対行動はほぼ「無意味」だ。私の怒りを買うことを考えれば、悪手とも言える。

更によえば、弔ってやろうと思いついたまま適当な場所が見当たらずそのままになった『不死の遺骨』が山のようにあるので、各地に篝火を作ろうと思えばできないことも無いと思うのだ。軸となる螺旋剣をどうするのか、という問題は置いておくにしろ。

仮にそれが叶った場合、私が死んだ際に付近で蘇ることができて便利そうではある。手間暇のほうがいいがかりそうであるし、怪しげな儀式を行っている、という風聞が広まる

と計画の妨げになりそうなので、当分はやらなと思うが。

それに、多くの不死人に一時の安息を齎す篝火の薪となるのならまだしも、私個人の利便性だけのために利用する、というのは、薪となる骨の主が悪い気もする。一般的な方法で吊つてやるのが良いのではとも思う。まあこれも、あとで考えよう。案外、必要になる時が来るかもしれないし。

悪手と言えば、男が何の備えも無く私の前に現れたことこそが、今回の一件での一番の悪手であつたと思う。

男は私が宿す特性を言い当てて見せた。おそらくは対象の内的要素を探る魔術でもあるのだろうが、それができていながら何故、と思つたのだ。すると男曰く、隔離魔術の中では通常、自由に動けるのは術者のみであり、デイドラとは言え、その時の拘束には逆らえないはず、だそう。実際私も、動きを阻害される感覚を味わつたのだから、嘘ではないだろう。だが、全く行動できない、というわけでもなかつたため、結果は知つてのとおりである。

要するに、サイジック会などというやたらめつたら高度な魔術を扱う場に慣れたせいで、予想外の事態に対する備えを怠つた、男の驕りが原因であつたわけだ。殴つてしまつたときには「不味い」と思つたのだが、そういうことなら私は悪くない。ないつたらない。悪いのはこの眼前の僧兵とやらだ。

再びの閑話休題。男の「帰りたい」という望みを叶えるため、背中から足をどけてやった。そのまま待つていたが、いつまで経っても男が魔術を発動する様子が無い。曰く、自らと転移先の『座標』を正しく認識していなければ、あまりに危険で転移魔術は使えないらしい。座標、とはなんぞや？　と思いはしたものの、概ね聞きたいことは聞けたので、今回は許してやった。少し、面倒になってきた側面が無いでもない。

それで、どうすれば使えるようになるのかと聞けば、手足を解いて……と言うので却下した。私は男をまだ信用してはいないし、拷問にかけられた恨みから反撃に移る可能性は無視できない。ならばせめて仰向けか、座らせてくれと言うので、私を視界に収めないよう後ろから正座の姿勢を取らせた。縄のせいで、正座以外に座らせ方が無いのだ。

しかしこの男はうるさい。「痛い痛いー」だの「もつと優しくー」だの。腰椎は帰ってから仲間に治してもらえというに。いよいよ面倒になったので、剣をちらつかせて黙らせた。そして座らせたあとは、とつとと帰れと、質疑応答の途中から消していた太陽の光の槍を再度発動し、殊更主張させて圧をかけた。男はそこまでしてやつと帰って行った。

……やはりあの転移魔術とやら、マヌスのアレに似ているように思う。暗月の彼のは、印象の問題だが、もう少し上品に思えた。どちらにせよ、使えれば便利そうだ。私

が、その力の一部を篝火での転移として利用していた王の器は、ここには無いのだから。転移魔術が私にも習得できないか、大学での課題の一つとしておこう。

男が帰った途端、動きかけだったサボスが何事も無かったかのように話しかけてきた。そういえば、その瞬間に割り込まれたのだったな。それに、彼等からすれば、実際に何事も無かったのだ。無理もない。

さて、既に妙な疲労感と倦怠感を覚えてしまっているが、ここからが今日の主目的である。気合を入れねば。

二六、スカイリム筆頭魔術師

「やあ、待たせたな。二人を連れてきたぞ。こちらが我が大学のアークメイジ、アグス師だ。そしてこつちがエンシル」

私はサボスが連れてきた二人と挨拶を交わす。あちらは会ったばかりのつもりだろうが、こちらとしては件の僧兵のせいで、半日は見続けた顔だ。初対面らしい仕草を取り繕うのが微妙に面倒である。

「と、一応紹介はしたが、君が名指しで要望したのだから、必要無かったかな？」

それで、君の持ってきた『町と大学にまつわる重要な話』とやらを聞かせてもらいたいんだが……」

サボスが何故か言葉詰まらせる。話を止めるほど訝しい様子だったか？

自らの振る舞いに自信が無くなり少し慌てたが、サボスが続けた言葉ですぐにそれは杞憂だとわかった。「何故、床が水浸しなのかな？」と聞かれたからだ。

非日常的体験によって感覚が麻痺していたし、あのときは僧兵を脅すのに必要と思つてやったことだが、そうだな、たしかに室内で樽一つの水を零すのは普通じゃない。更に言えば、あちらの感覚では床の水は突然現れたことになっている。間の抜けた話だ

が、私の口からも「あつ」と思わず漏れた。本当に、私というヤツは。

私が己の視野の狭さを嘆き省みていると、アグスと紹介された翁がおかしそうに笑う。

「はてな、つい先程まで、床は乾いておつたように思う。それが突然の水浸し。そして何やら空間魔力もかなり減じておる様子。……もしや、サイジック会の者でも忍んで来たか？」

アグス師の言でサボスが目を見開いて驚き、エンシルは……此奴、表情が分かりづらいな。どことなくギルドや一味の者達を思い起こさせる。

しかし状況証拠だけでこうも見事に起きた事態を言い当てられるものなのか？　そういうえば、サボスも私がソウルの矢を見せた際、「周囲の魔力」がどうと言っていた。この地では、高位の魔術師になると、空間の魔力とやらを感知できるようになるのだろうか？

アグス師は悪戯が成功したような得意気な顔で、また笑う。

「どうやら当たりか。この老いぼれも捨てたものではないだろう？　サボス、エンシル。お前達、もつと私を敬えよ？」

とはいえ、別に大した話ではない。該当する状況に心当たりがある、というだけのこと。

私も数える程度だが、会の者には会うたことがあるでな。大概はただの転移魔術だけで飛んで来よるが、内一度だけ、隔離魔術とやらを用いて忍んで来たことがあった。あれは術の発動こそ自らのマジカを用いるが、術の構成と空間の維持には太陽を通じてエセリウスから直に魔力を引っ張り、不足があればその場の魔力を用いる形をとるのよ。人の身には余る力故な。とはいえ、魔術が解ければ術の維持のために固定された魔力が拡散していくわけだから。別段、エセリウスに影響を及ぼす話でもない。というか、人の身で使える魔術程度では、もう暫くのあいだはエセリウスに何ぞ影響を与えることなど不可能に近いだろう。そしてそこに転移魔術を重ねるわけだ。すると道を作るにもそれを固定するにも周囲の魔力は必要となるうえ、転移元、つまりは入り口側との時の同期を……」

アグス師の魔術談義が長くなって来たところで、サボスが袖を引いている。気分よく講釈を述べていたアークメイジは不満気ではあるが、話が進まないのも正直なところ助かった。しかし、これぞ『魔術馬鹿』といった探求者然とした老人である。

「まあ、そのように、私はこの手の状況に覚えがあったのだ。それに、そなたがそこいらの魔術師と違うことは、サボスから簡単にだが聞いておった。なら、有り得ん話でもなからうと当たりを付けたまよ」

さて、ここまでバレーてしまえば隠す必要も無いだろう。というか、僧兵を帰らせた時

点では、なんとなくあの来訪を秘匿しなければならぬような気がしていたが、落ち着いて考えれば、私にそんな必要は元々無い。あの男が勝手に用いた隔離魔術とやらのせいで、その気にさせられていたのだろう。あの男、いなくなっても面倒をかけるな。今度会ったら文句を言おう。「お前が勝手に思い込んだのだろう」、などという言は私の耳には届かないことになっている。

私としても、妙な隠し立てをせずにすむなら、話が早くてそのほうがいい。僧兵の来訪を是と答えるついでに、ことの仔細も話した。この件について語るなら、僧兵の来訪理由にも触れざるを得ず、そこだけを上手にぼかす自信が無かったからだ。

それにこの魔術師という生き物は、どうもこの地の、というかこの世界の成り立ちについて詳しいように思う。貴族や為政者の中にも知恵者はいるだろうが、純粋な知識量で言えば、おそらくこの大学の者達がスカイリム一だと思うのだ。ブレックスの話では、広い空間にこれでもかと書物を集め、保管している、蔵書室があるらしい。それを鑑みれば、的外れな推察でもないだろう。ならば、この場だけ誤魔化したとしても、いつかは詳らかになるのではないかと思うのだ。

大学は確実に味方とする必要がある存在だ。あとから私の存在定義について判明し、信用を失うことがあつてはならない。先に話して警戒されることもあろうが、この手の話題は後回しにするほど拗れるものだ。

そんなわけで、僧兵の来訪理由と推論。私の反論。僧兵の結論。全部喋った。アグス師はにやにやと意地の悪い顔で笑っているし、サボスは眉間を揉みながら悩ましげにしているし、エンシルは鉄面皮のまま小さな道具を手の中に隠すよう持っている。魔術の暗器だろうか。三者三様、見ていて少し面白い。

『不思議な魔術を使う男』とは聞いておったが、デイドラロードとはな。サボスよ。お前、随分なものを大学に入れてしまうたの」

ひっひ、と笑いながらサボスを詰るアグス師ではあるが、その声色は楽し気で、責めるようなものではない。おそろくいつもそうなのだろう。サボスは少々迷惑そうに、しかし自分の『やらかし』だという自責の念もあるのか強く出られず、恨めしげに見つめ返している。二人は、案外気心の知れた仲なのだな。

「とはいえ、彼の僧兵が言うのは、そう分類される、というだけの話らしいですが。私自身、何かしらの権能を持ち、司っているような自覚はありませんし」

「で、あろうな。話を聞く限り、お前さんの神性はそのソウルの業、だったか？ それの原因と思われる。世界に齎された火。そこから見出された巨大なソウル。それらを宿した、もしくは新たに産まれた神を討ち、お前さんは奪った。そして、その奪ったソウルで己が身をこれでもかと作り変えた。だからよ。」

こちらでも、まあ一般的ではないにせよ、デイドラの血肉が出回ることにはある。魔術

的な触媒にもなるし、錬金術の素材にもなるでの。しかし、それらを口にしたところで、人がデイドラと化すなど有り得ん。経口での消化では、あくまで物質的にしか取り込めんからの。しかしソウルの業とやらは、奪ったソウルがその者の根源に作用する形で変質させてしまうのだろうよ。故にこそお前さんは、『人』でありながら『準神』足り得るのだろうて」

今度は、先の魔術談義と違い、聞き入ってしまった。私自身が、ぼんやりと、なんとなく感じていたことを、言語化されたせいだろうか。それが必ずしも正しいとは限らないが、おそらく理屈ではそうなのだろうと思える。

しかし、異なる世界の理を読み解いてみせるとは、『学がある』というのとはこういうことなのだろう。オーベック、君の劣等感がまた少し深く理解できたぞ。尤も、元より学が無い市民であった私が抱いた感想は、ただの感心でしかないが。

ローガン……はまた違う類の人間だな。あれは学があっても、自分の興味が湧いたもの以外に、それを傾ける気が一切無かった。悪く言えば視野が狭いのかもかもしれないが、私は妙に子供じみたその素直さが好きだった。人それぞれ、ということなのだろう。

そうして、知識を知恵へと昇華させた老人達の差異を面白がっていると、その片割れが尋ねて来る。それも、サボスに見せていた悪戯顔をこちらへ向けて、だ。

「それで、我等はどう接すればよいのでしょうか？ デイドラロードとして、「様」で

も付けて敬い、奉りましようや？ それとも、サボスが勧誘したとおり、客員研究員として遇すれば良からうかの？」

これはどう聞いても、敬う気など無いだろうに。

「自明のことを尋ねられるのは、意地が悪うございませぬ。私が自らを人と思ひ、そちらもそのように感じておられるご様子なのですから、研究員で十分です」

私の迷惑そうな顔が先程のサボスと被り、それが満足なのか、老人はまたひとつひと笑っている。なるほど、いつもこうして人を手玉に取っているのか。これでは、良くて親しみが湧くことはあつても、畏敬の念とはなりづらいただろうな。「もつと敬え」とのことだが、己の行いが原因ではなからうかと思う。

ひとまず、挨拶は済んだ。それも、好感触で。そのため、このあたりが本題を切り出す場面ではなからうかと感じ、私は三人へ大学来訪の理由を告げ、アグス師には首長からの手紙を渡した。同時に、別件だと断ったうえで、エンシルにもブレックスからの手紙を渡した。

「これは……それなりに体裁は整えておるが、実質詫び状だの。控えめに言つても嘆願書か？ あの偏屈爺じじいが書いたとは思へん。随分と折れたものだ。お前さん、一体どんな手管を使ったのやら」

多分、世間ではあなたも『偏屈爺』扱いですよ、とは言わずに黙っておいた。どうも、

この老人に絆されつつある気がする。

しかし詫び状か。私は手紙の大筋の内容しか知らない。つまりは、「町の復興に大学の力を貸してほしい。町としても、大学の運営に協力する心算がある」という、計画についての要請である。それが詫び状とは。首長である、あちらの老人は、必要であれば自分を便利使いするよう言っていた。言っていたが、これは私が思う以上に、かなり本気で計画へ傾倒しているようだ。ますます、躓くわけにはいなくなつたな。

それにしても、内密とは言え首長の使いを前に、随分とあけすけに言つてくれるものである。それはまあ、スカイリム中から様々な依頼を受け、頼られる大学のアークメイジから見れば、村程度の規模にまで落ちぶれた町の首長など眼中に無いのかもしれないが。いや、これはもしやこちらの反応を試している？ だとすれば私は、毅然とした態度で理屈を説かなければならない。情で動く人種ではないだろう。

出来が悪いと自覚のある頭だろうが、無理にでも回してみせる。難色を示すようなら、必要に応じて脅し文句として使ってみせる。その意気で交渉に臨もうとし……、「こちらは構わんよ。実験に必要な品が手に入らないことも多く、困つておつた。互いに損が無いのなら、良からう？」

梯子を外された気分である。少し、面食らつた。眼前の老人には、会つたときからずっと振り回されている気がする。すると、「何を呆けておる？」とせつつかれた。いか

ん、気を害されて、「やはり白紙で」などと言われては元も子もない。しかし、あまりにあつさりとしている。後々、撤回されたりとぼけられたりしないよう、確認が必要ではないだろうか。

「ウインターホールの町は大学に対し、長いあいだ根拠く嫌悪の視線を向けて来ました。ですので、なんとというか、こうもあつさりとおちらの要請を聞き入れていただけるとは思っておらず……本当に良いのでしょうか？」

「私とて、あの爺が手紙のとおり、心を入れ替えた、とは思っておらん。何ぞ、お前さん等にはお前さん等の事情や考えがあるのだろう。しかしそれらは大学とは関わりが無いことだ。少なくとも、町と大学の協力関係は大学の益となる。だから受け入れる。それだけだが、ほかに何かあるのか？」

無い。無いのだが、それは理屈上のみでの話だ。また呆けそうになったので、何か話さねばと思つたら、考える間もなく正直に口から思ったことが零れてしまった。

「……申し訳ない。少々取り乱しました。私がこのスカイリムの地に来て以来、ここまで合理性のみに重点を置いた話し合いは初めてでしたので」

アグス師はそれに対し、心底興味が無い、といった様子で鼻を鳴らす。「俗世、などと見下したくはないが、世の者共はつまらぬ理由でつまらぬ意地を張りすぎる」とぼやく。

ああ、やはり、私が誇る二人の友は、ここに来るべきであったのだ。一組織の長がこ

ここまで割り切って考えられる環境など、ほかに無いだろう。

私は思わず感じ入ってしまった。……と、そこにアグス師のやや後方から、眉をひそめながら首を横に振るサボスの姿が見える。察するに、「これはこの爺様だけだから、大生全員が同じ意見の持ち主だと思わないように」といったところだろうか。やはりこの老人には振り回されればなしな気がする。あと、感動を返してくれ。

しかしまあ何と言うべきか。何年もの雌伏の時を覚悟していた案件が、ウィンターホールド到着から数えても、ふた月とかわからず片付いてしまった。我が友の言ではないが、予定が前倒しになって悪いということは無い。無いのだが、色々と拍子抜けしてしまっただけはある。

例えば、リフトの砦を出立したときは、まずウィンターホールドの町に馴染み、首長をこちら側へ口説き落とすことを考えていた。ブレックスの予想では、一年から五日程度。次に大学だ。こちらには、協力者候補として目星を付けている人物がいるため、事前情報では首長を落とすより難度は低いと見られていた。それでも、アークメイジが難色を示すようなら、それらあてにした人物達を通じて大学全体へ根回しをし、翻意を促す必要がある。それには半年から数年を覚悟していた。計画の要と思いい、そのように気合を入れて来たのだが……。

蓋を開けてみれば、私が採掘村で足留めを食らっているあいだに、ウィンターホール

ド首長の懐柔は一味の者等によって達成されたという。大学訪問でも実際には、まず第一の協力者候補にいきなり遭遇し、ある程度の好感触を得た。サイジック僧兵などという突発的な事態はあったものの、アークメイジへ要件を伝え、その場で承諾も得た。計画は、怖いくらい順調に推移していると言えるだろう。

……というか、私の貢献度が低くないだろうか？ いや、私自身、その場その場で必要なことに対し、手を抜かずに取り組んだ覚えはある。それは間違いない。しかし、ウインターホールド首長の件には一切関わっていないし、大学については、ギルドや一味の誰がアークメイジを尋ねても結果は同じだったのではないかと思われる。そう考えると、私は計画の主要人物でありながら、特に何もしていないような気がしてくるのだ。

一応、私の魔法によって好感度を稼ぎ興味を引かせてみせた、と言えなくもないかもしれないが。……正直、自分で評価するのは難しい。

己の計画への存在意義について少々不安がってしまったが、今は置いておこう。

アークメイジがこれだけ話の通じる人物であるなら、腹案をこの場で提示してみるべきだろう。合理性を好むこの老人なら、別日を設けて云々というよりは、そのほうが好みだと思われる。

私は、まず悪化した住民感情を緩和させるために、首長との共同声明発表を提案した。

そして、町の復興に魔術師達の手を借りたい、とも。更に同時並行で、町の全面的な支援を約束する代わりに、今まで以上に広くタムリエル全土へその門戸を開放することを依頼した。

まず、声明については問題無いとのこと。大学にも歩み寄るつもりがあると町の住民に示すには、書面や伝聞ではなく、大学の代表が矢面に立つ必要がある。そのようにアグス師は理解してくれていた。

また、街の復興には、例えの一つとして、学徒の実習に組み込む案を挙げられた。研究者達は自らの時間を取られることを嫌がるだろうが、学徒の監督はある程度持ち回りであり、文句も出づらい。また、学徒達からしても、多くは町と大学、双方にとつての新参者が該当する。なら、早期から町の復興に一役買わせておけば、町も、その復興も、自ずと己の事情として認識するようになる、とのこと。たしかに、「やらされている」と考え嫌々作業に従事するくらいなら、自らの仕事として誇れるよう仕向けたほうが、能率も、本人の心情的にも良いだろう。そしておそらく、それが町と大学の更なる融和を生み出すはずだ。

学徒募集の布告については、首長の添え状を条件に付けられたものの、こちらも承諾された。添え状については無理もない。なにせ、大崩壊以降のウインターホルドの衰退ぶり、住民感情の悪化は、他地域の人間も知るところである。噂がスカイリム外に

まで届いていてもおかしくはない。大学だけの方針ではない。町にも歓迎の用意がある。そう告示することは、大学に様々な嘆願を行う町側の義務と言ってもいいだろう。あの首長も否とは言うまい。

また、広く学徒を募る件は大学側としても考えていたらしいが、私の来訪を受けて、その念は更に強まったらしい。流石にデイドラロードが訪ねて来ることはないだろうが、大陸中から人が集まれば、中にはその土地の特色ある魔術を携えた者もいるだろう。少なくとも、その可能性は高まる。アグス師はそれが見たいらしい。その方針は計画にとつて大いに助勢となるものであり、私は是非もなくその場でアグス師に領いた。

先に思ったことではないが、時間をかけた入念な協議が必要だと考えていた案件が、立ち話で済んでしまった。私達はまだ、サイジック僧兵が訪れた水浸しの床の上で話を続けている。アグス師の反応を見るに、私を邪険にしているのではなく、面倒な礼儀を排して時間短縮という実益をとった、ということなのだろう。別に私は、礼儀や様式美にこだわる貴族でもない。話が早く進むのなら、立ち話でも一向に構わん。

というか、自惚れでなければ、私のそのような態度が、話を円滑にした可能性もある。なんとなくだが、やはり首長の手紙を渡してからこっち、アグス師に試されていたような気がするのだ。まあ、うまくことが運んだのなら何だつていい。

「さて、では改めてあの偏屈爺とも折衝の機会を持たねばの。声明やら何やら、細かいと

ころを詰める必要がある。サボス、段取りを頼んだ。

それだ。お前さんの要件は概ね済んだかや？　そうか、ならば私にもサボスに見せたという『変わった魔術』とやらを是非見せてほしいのだが……」

「アークメイジ、申し訳ありませんが、今日の予定は立て込んでおります。予定外の応対が入りましたため、押している、と言うべきでしょうな。執務室へどうぞお戻りください」

アグス師が私に、おそらくサボスの試験で見せた魔法の実演を強請ったのだろうか、サボスがそれを口調だけ慇懃に切って捨てた。先程、からかわれた意趣返しだろうか。アグス師の顔が酷いことになっている。睨みつけている、というより、無言のまま顔全体で不快感と憤りを表現しているような。顔を傾け、下から伸びるような動きを見せつつ、サボスの周りをゆっくり回ったり。なんだろう、この笑いを誘う光景は。まるで、そこいらのごろつきが絡んでいるようではないか。それでいいのか天下のアークメイジ。まあ、実演自体はそう時間のかかるものでもない。アグス師をとつとと政務の席に着かせるにも、見せてしまったほうが早いだろう。

私はサボスに対し小さく手元で詫びを示し、アグス師に声をかけた。サボスは一矢報いたことで多少の溜飲は下がったのか、溜息をつけて防御魔術を展開する。私はアグス師がこちらへ注目していることを確認し、火の玉、灯火、放つ回復、ソウルの矢を放つ。

反応はサボス同様劇的だった。アグス師は歓声を上げ、「ほかには無いのか!」と詰め寄ってくるが、今度こそサボスが襟首を掴んで引きずっていった。先にはアークメイジの居住区があるという階段を登りながらも、「最後の! 最後のヤツをもう一度!」というアグス師の声が聞こえる。その後も何事かを喚いているが、徐々に小さくなり、居住区への扉を潜ったのか、聞こえなくなった。場に、妙な静寂が訪れる。

すると、それまでずっと黙っていたエンシルが口を開いた。アグス師やサボスとのやり取りの後ろでブレックスからの手紙を読み、何やら考え込んでいたのは見えていたが。

「ウインターホールと大学の融和、か。随分と無茶なことを考えるものだ。お前一人の計画、というよりはギルドやブレックスが関わっているのだろうか? ああ、安心しろ。お前からアークメイジに話す気が無いのなら、私からそのあたりの裏事情を漏らすことは無い」

この男に「安心しろ」と言われても、そのような気にはなれないのだが。おそらく吐いた言葉に嘘はあるまい。しかし纏う雰囲気、まるで真逆なのだ。下手な受け答えをすれば何ぞ攻撃を仕掛けてくるのではないかと思わせる、鋭利な空気を漂わせている。「私の要件はこの手紙についてだ。何が書かれているか、お前は把握しているのか?」

「こちらに関しては、首長からのそれと違い、そこまで詳しいことは知らない。ただ、眼

前のエンシルは元々大学側の協力者候補として目星をつけていた。そのうえ、カーリアなる者の接触により、「エンシルの重要度が跳ね上がった」と頭目殿は口にしていた。それ故、大学での協力、そしてカーリアに関わる何かしらが書かれているのではないかと思ひ、告げた。『カーリア』という名前自体は出して良いのかわからなかったため、「ガルス」の件で、ある人物から接触があつたと聞いている。一応、名前もな」とぼかした。「あの用心深い男がそこまで明かしているのか。『甚だ不本意ではあるがダチだ』と書かれてるのは嘘ではないようだな」

彼奴め、我等の友情を「甚だ不本意」とはどういうことか。とはいへ、普段からの口の悪さを鑑みれば、有り得そうではある。手紙が口語で書かれているとすれば、なおのこと。

「なら、奴に伝えてくれ。近いうちに、私を奴の流儀で訪ねるように、と。必ず、一人で、だ。仮にこの手紙に書かれている件が全て真実だとすれば、ギルドに大きな騒動が再び巻き起こるやもしれない。ことは慎重を期す必要がある。だが、それが済んだなら、私はお前にかんりの便宜を図ってやることができるだろう。今、言えるのはそれだけだな」

実際、ガルス殺害の真犯人がカーリアではなくメルセル・フレイだとすれば、ガルス死没時に起きたギルド分裂のような大騒動になりかねない。混乱を最小限に抑えよう

とするなら、仮にメルセル・フレイが下手人だとしても、吊るし上げるには準備が必要だ。それも、あの疑り深い目と性格を備えた男に感づかれること無く、だ。このエンシールの反応も納得できるというものである。

それに、その後の協力について口にするあたり、エンシルにとつてもガルスという男は大きな存在だったのだろう。だからこそ、腹を割って話すために、夜中に一人で忍び込んで来い、と。多少は危険かもしれんが、ブレックスにとつても正念場のはずだ。必ず呑むだろう。もしこのエンシルなる男がブレックスを罫にかけて害したなら、そのときはそのときだ。一味の者等と協力して此奴を追い詰め、地獄を見せて後悔させてやるまで。……まあ、そのような阿呆には見えないが。

私は「必ず伝える」とエンシルに告げた。すると、「では用は済んだな」と奴は踵を返してしまった。魔術師という人種は、誰も彼もがこんなに合理性のみを突き詰める人種なのだろうか。それとも、アグス師やエンシルが特殊で、やたら無駄を嫌うだけなのだろうか。何にせよ、今日、大学の敷居を初めて跨いだばかりの客員研究員を一人ぼつんと放置するのは、ちと優しさが足りないのではないかと思う。少し経てばサボスが戻ってくるやもしれんが、それまでぼうっと待ち惚けというのもなあ。

今日はサイジック僧兵と問答したり、アグス師に振り回されたりと、少々疲れた。私もこのまま帰ってしまおう。咎められることは無いとは思いますが、仮にあつても事情を話

せば許してもらえらるだろう。まだ日は高いが、仲間^に報告を済ませたら、少し横になりたい。今日くらいは許されるはずだ。ラーナルクを誘つてゆるり過ごしてもいい。あれは、放つておくと根を詰め過ぎる節がある。そうだ、そうしよう。これは私の我儘ではない。愛息のことを慮つてのことなのだ。そういうことにするのだ。だつて疲れたのだから。

二七、三年経って

大学を後にした私は、一部住民の出迎えを受けながら首長の館へ向かった。これが町の住民の総意ではないことは理解しているが、大学から無事に戻って来た、というだけで凱旋扱いされるのは、嬉しいだのくすぐったいだの微笑ましいだのという感慨より、先が思いやられると苦笑の裏では頭が痛かった。

館に着くと、私は首長に人払いを頼んだ。結果、首長、執政、ブレックスの三人を相手に報告を行った。ちなみにこの執政、首長の親族なのだという。今までは、町の規模が小さすぎるため特に必要とされていなかったが、これから忙しくなると言って首長とブレックスが話を付けていたらしい。本人は相当難色を示したらしいので、正しくは、引きずり出した、というのが実状のようだが。

そしてブレックスはちやつかり、相談役、などという「微妙」と言うべきか「絶妙」と言うべきか迷う立場を得ていた。本人曰く、執政では町に常駐せざるを得ず、動きが制限される。しかし首長の側近でなければ面倒な手続きが発生することも多い。そして緊急時には衛兵隊を人手として駆り出すことがあるやもしれない。そのため、だそうだ。首長の親族は面白くなかったろうが、私は盗賊連中の腕前と厚顔さ具合を知ってい

る。まず問題無いだろう。

閑話休題。私が成果を伝えた時点では、ブレックスを含めて皆が驚くなり訝しむなりしていた。直接やり取りをした私でさえ面食らったのだから、無理もない。私はアークメイジ、アグス師の為人を伝えた。そして、今後の交渉や伝達には、面子より実益を重視した合理的なやり取りが望ましいと、付け加えた。

ブレックスや首長は変わり者なのだと言われ、執政はまだ腑に落ちない様子であった。まあ、新参者が胡散臭い大学からの協力を取り付けた、と聞いて怪しむ気持ちはわかるが、この先はこんなことばかりだろうから、早目に慣れてほしいものだ。

理解を得られたため話を進め、後日、実務担当であるマスターウィザードのサボス・アレンが以後の予定や諸々の折衝のために首長を訪ねてくることなどを伝え、この場は解散となった。

館を出て宿に場所を移し、ブレックスには首長の前では伏せていたサイジック僧兵の件や、エンシルからの伝言を伝えた。デイドラロード云々には、いつぞやの自らの例えを思い出しケタケタ笑い、伝言を聞いたあたりでは神妙な面持ちになっていた。私が見るに、おそらく心配はいらないと思うのだがなあ。

それから慌ただしくしているうちに、気がつけば三年もの時が瞬く間に過ぎていた。停滞、あるいは緩やかな衰退に慣れた町の住民からすれば、変化を感じる三年だったかもしれない。しかし、私が古代ノルドの墳墓で目覚めてからイーストマーチの採掘村へ着くまでの数ヶ月に比べれば、かなり大人しいほうだと思う。

それに、計画としてはまだまだ初動段階であり、取り立てて言うほどの大成果はまだ齎されていない。町の復興という大事業に対して、三年という時はあまりにも短いのだ。寧ろ変化が起きるのはこれからなのだから、心身の健康のためにも努めて慣れてほしい。

まず、私の最初の大学訪問から程無くして、首長、アークメイジ共同の声明発表が行われた。場所は、町の大学側広場である。私も同席した。

オブリビオンの動乱は一部のデイドラ崇拜者が引き起こし、メエルーンズ・デイゴンにより齎された天災であり、世の魔術師に非は無し。ウインタールドに襲いかかった未曾有の大災害もまた然り。大学も被害者にして、一切の非は無し。今後は、スカイリムの誇る魔術大学を町が支え、大学はその信と恩を忘れず、町を助ける。相互の絆を

強く保ち、我等死した後の子や孫には、再び権勢を取り戻したウインターホールドを託さん。

住民は、不本意ではあるが受け入れよう、といった表情であった。本音では「お前等なんか信用するか」とでも考えているのかもしれない。しかしこれでも予想よりはかなり大人しい反応である。

声明の中、大学側に「信」だの「恩」だのという文言を入れて、住民感情に配慮した。アグス師としては、大学が幾らか下手したてに出る程度で話が円滑に進むのなら否やはない、とのことだった。

それでも打ち合わせを重ねる度に、やはり難しいのではないか、という話になった。何せ住民達は父祖の代から何十年と恨みを募らせ、大学を忌避してきたのだ。共同声明如きでその感情が一変するとは考えづらい。というか、悪くすれば「首長を誑かした」として我々や大学に怒りの矛先が向きかねない。折角この地にある程度の足場を築いたのだから、それは避けたい事態だ。それどころか、最初でしくじれば住民は余計に意固地になり、今後の如何なる工作も意味を成さなくなるだろう。『何事も初めが肝心』とはよく言ったものである。

最悪の最悪は、住民を総入れ替えするために鏖殺して、余所の地域から行き場の無い社会的弱者を招き入れることだが……。そこまでしてしまつては、幾ら独立独歩の気風

が強いスカイリムとはいえ、他地域の首長達が介入してくるだろう。下手をすれば、いやしくとも、上級王の名において『ウインターホールド首長討伐』の命が下されかねない。本来、地域間の争いは禁忌であるが、それはスカイリム内で争いが続いた際、エルフによる侵攻を受けた、という苦い記憶によるものである。村程度まで衰退したウインターホールドを攻め落とすのに、然程の時はかからない、と判断されるだろう。よつて、却下である。私も進んで大虐殺を行いたいわけではない。

そこで、準備期間のあいだに盗賊達を使って、予め声明と首長に纏わる噂を町に流した。

曰く、首長は昔から、衰退する町にウインターホールド首長として有効策を講じられない己の不甲斐なさを嘆き、住民に対しては責任と罪の意識を抱いていた。首長は現在、病に侵されている。彼は、残された寿命で何ができるか考えた。その答えが、大学を抱き込んだの町の復興である。誰よりも大学を恨む首長が全てを呑み、忌避も憎悪も笑顔の下に秘して声明に臨む心算である。大災害の件が本当に冤罪なのかは、神のみぞ知る所である。だからこそ、それを一度頭の隅に追いやり、首長の言葉をあえて鵜呑みにしてやらないか？ それか、最期の時を費やし、町に殉じようとする老人への、手向けではないか？ 情けではないか？ 首長らしい暮らしはできず、権威も無く、住民からの尊敬も得られず、他地域の首長達からは歯牙にもかけられない。苦しい思いをして

きたのは、首長も同じなのだ。それでも、大災害に際し、けして町を見放さずに踏みとどまった一族の男なのだ。我々も、少しは協力してやっても良いのではないだろうか。

このような人情話だ。正確には、盗賊達が流したものではなく、彼等が宿屋を経営する一家や衛兵隊を抱きこんで、狙う風潮を作り上げたのだ。閉鎖的かつ住民の絶対数が少ないウインターホールドでは、新参者の盗賊が表立って動けば目立つためである。

首長がよく床に伏せていたことは、住民も知る所である。そしてそれが、何かを決意したかのように精神的に変化したことも。それらの事実を叩き台に、こちらの望むように脚色してやるのだ。

上位者である首長を無力な老人として語る。そして、首長の奮起をわざと褒め称えることはせず、住民に同情と優越感を与える。それにより、「協力してやっても良い」という立場の逆転した視線と空気を作る。

もし「いや、どれだけ苦しかろうが様々な特権を享受してきた首長として、町の衰退を食い止められなかったのなら責任を取るべきであり、それらに我々が関与する義理は無い」などと強弁する輩が現れては困るのだ。だからこそ、住民側を持ち上げる。そして、実際に町を出ていった者が大勢いる中で踏みとどまった、という点を強調し、突飛な声明を執り行いはしても、首長は自分達の同胞である、との意識は手放させない。

ある程度の手応えは感じつつも、実際にどうなるかは声明当日になってみなければ読

めない、という具合だった。しかし住民の反応を見るに、目論見は概ね成功といったところだろう。

私はギルドや一味の者共を、改めて恐ろしい連中だと思った。それを本人達に伝えると、随分と得意気になって、「金や、弱みを握って転がすのは二流。本人が自らの善意で以て動いている、と思わせるのが一流」との御言葉をいただいた。要するに、宿屋一家も衛兵隊も、その義侠心を上手にくすぐられて、自発的に行動したらしい。後ろめたいことがあればどこかでポロが出るかもしれないが、己の行いを正義と信じている者であれば、周囲の説得が困難であっても、かえって義心の炎を燃え上がらせるだけだ。盗賊達は最大効率を得る手腕を持っているらしい。

仮に彼等とやり合う事態になれば、直接戦闘では私に分があるだろうが、彼等は印象操作などの捌め手を用い、気がついた時には四方八方敵だらけ、などということもあり得る。やはり恐ろしい。同時に、私なんぞの称賛で機嫌を良くするなど、存外可愛らしいところもあるのだな、とも思った。

首長閣下本人も、なかなかの芸達者であった。誰が見ても思う『貼り付けた笑顔』を振りまきながら、アークメイジが握手を求めた際には、一瞬体を強張らせ、しかし自然にならないように直ぐに応じ、にこやかに言葉まで交わしていた。気付かぬ者もいるだろうが、気付いた者に対しては実に涙を誘う光景である。その閣下が作る精一杯の笑顔

の裏では、掌の上で転がる住民達を見て昏く嘲り笑っているのだろうと思うと、私としても物憂げな表情になってしまふというもの。これは断じて演技ではない。閣下に乗ったわけでも、保身のために「私も町の人間だ」と印象付けを行ったわけでもない。な
いつたらない。

ちなみに、アークメイジ、アグス師はそのあたりに気付きつつも、全て些事、と頓着していなかった。前もつて、大切な声明発表を成功させるために多少の演出を織り込む、という段取りは成されていたが、彼の魔術馬鹿にはその通達が必要であつたかも怪しい。

あとは、声明どおりに相互援助を惜しまず、町と大学が昵懇であると行動で示し続ければいい。そうすれば、貧しさからは脱却し、町には活気が戻るだろう。日に日に生活環境や町としての権威が往年の水準まで戻る中、大学を恨み続けるのは難しい。

町が恨みを原動力に自力で復興するのなら、後の日に復讐を果たす、などという未来もあり得るかもしれない。しかし、復興にも現状維持にも大学ありきでは、願つたところで叶うまい。宿屋の一家やこれから増える大学との取引を行う者達からすれば、それらの不穏分子は自らの敵でしかない。町の自浄作用……というよりは自衛のため抑えにかかるだろう。

それに、時が経てば経つほど、今の年配層は死んでいなくなる。ある程度復興を果た

した町しか知らない後の若年層からすれば、大学に恨みを向け続けるなど馬鹿らしい話としか思えないはずだ。納得できない者を切り捨てるように少々心苦しいが、計画にとっては致し方ないと言える。せめて、表の顔である錬金術師として、住民感情の世話くらいはしてやろうと思うが。

ちなみに、声明発表には大学側関係者としてエンシルの姿もあつた。これから町でブルックスやカーリアと話をする際、出歩いていても怪しまれないよう、顔見せの意味もあつたらしい。

私がブルックスに伝言を伝えたその日の夜、奴は伝言どおりエンシルの下へ忍んで行った。「近いうち」と言われてその日、というのもどうかと思つたのだが、「奴が俺を殺す気でないなら、御丁寧にしてお迎えしていただくような仲でもねえ」とは頭目殿の談である。私は一応、一晩中待機していたが、朝には片頬を腫らした奴の無事な姿を見ることができ、安心した。腫れは、けじめの一発でも貰つて来たのだろう。同様に感じたのか、私の部屋の屋根裏や壁の向こうなどそこかしこから極微かにホツと溜息が聞こえた。……頼もしい警備員と思うことにしてはいるが、極自然に私の周囲に潜伏するのはどうなのだろう？

実はこれ、私が屋敷の普請を任せきりにしてしまつたがために、現在の住居である屋

敷のあちこちでも、同様の事態となっている。私とそのあたりにあまり頓着しないからといって、当たり前前に人の屋敷を盗賊の根城にしないほしい。

ついでに言えば、私の屋敷は少し離れたところに建てられたブレックスの家と、地下通路でつながっている。緊急時には、互いが避難や援軍のために用いるのである。しかし、わざわざ地下を掘るのに、通路だけで満足する盗賊達ではない。当然のように拡張工事も行い、居住空間を確保している。そのため、ウインドヘルムに潜伏していた一味の者達は、一部を除いて皆、私の屋敷、ブレックスの家、地下空間、他数件の修繕済み家屋に居を移している。リフトの砦は、フラゴンとの連絡時の休息地点とはしているものの、ついでにつまらぬ賊や死霊術師などが住み着いていないか確認するだけで、もう殆ど利用していないらしい。一時世話になっていただけに、少し寂しい気もする。一味の者からすれば、ギルド時代のほうが圧倒的に長く、砦は仮宿、という意識があるようで、気にはしていないようだ。

なお、私の屋敷はギルド構成員も出入りするため、あらゆる場所に存在する潜伏用の狭間は把握されているが、地下空間に関しては一味だけの秘密となっている。ギルドと一味は現在は友好関係にあるとはいえ、将来的に渡り必ずしもそうだとは限らない。必要な用心だと言えるだろう。

閑話休題。そう、話はカーリアの件だ。

ブレックスがエンシルとの密会で何を話したか、ある程度以上のことは聞いていない。私が聞いた範囲では、エンシルはどうやら、カーリアを連れて再び忍んで来るように言つたらしい。そこで翌日の晩、ガルスと親しかった三人が揃い、色々と話をしたそうだった。エンシルやブレックスとしては、十中八九カーリアは冤罪だと感じつつも、忬から信用して背中を預けるには、最後の一押しが欲しい。そのために証拠を求めているようなのだが、唯一の心当たりはガルスの遺体を探つて何か出てくるのを期待するしかない、というのが実状なようだ。そしてそれが何処にあるのかと言えば、例によつて、ではないが、古代ノルドの墳墓だそう。潜入の際には私も出るようになる予感がする。しかし現状ではあまり動かず、メルセル・フレイを下手人だと仮定したうえで、外堀を埋めて確実に捕らえ、破滅させるための工作を進める、とのこと。まあ、そのあたりは奴等に任せるとしよう。

私が聞いたガルス関連はこの程度だ。具体的にどう動くか、などの仔細は一切聞いていない。私はこれから徐々に表の顔で動くことが増えるため、面倒な情報を与えるべきではないと考えたらしい。奴曰く、私は「わかりやすい」故の対処なのだとか。私としても、仮にギルドからの出向者にメルセル・フレイの密偵が紛れていた場合、知らぬ存ぜぬで通すには、元から本当に知らぬ存ぜぬでいるのが手っ取り早いうえで簡単でいい。それに、ガルスに関する話であれば、極力自らの力のみでことを進めたいと頭目殿

が考えていたとしても、無理はないと思う。であるならば、私はそれを尊重したい。仮に私の力が必要であれば、彼の頭目殿は我心を曲げて私に話を持つてくるはずだ。そのあたりの見極めを間違える男ではあるまい。ハンもいることであるし。

ちなみに、カーリアはここウィンターホールドに居を構えた。この三年、家屋の修繕のために入れ代わり立ち代わりウインドヘルムの灰色地区からダークエルフ、いや、『ダナーマー』達が訪れている。同種である彼女がいても、然程目立つこともない。木を隠すなら森の中、というヤツだ。

ついでに言うと、「ブリニョルフをギルドマスターに」という声も、この三年である程度は静まったらしい。ヴェケルとデルピンがうまくなだめたこともあるのだろうが、それでも収まらない過激派に対しては、ブリニョルフ自身が「いざとなれば、ギルドを守るために不穏分子は切り捨てる」とヴェケルを通じて漏らしたのだ。彼を担ぎ上げようとしていた連中は、その「いざ」の時には、ブリニョルフが味方に付くことが前提となっていた。しかしそれがメルセル・フレイに反旗を翻したとき、中立でも黙認でも無く肅清に動くとなれば、話の根底から覆る。それで、意気消沈した、というのが顛末なのだとか。勿論、連中は連中でブリニョルフを懐柔しようとの手この手を尽くした。しかし彼はその全てをのらりくらりと躲しきった。言い方は悪いが、それでも察しきれないあたり、度し難い。

私でもわかる理屈を無視して、結果的に友の身の安全を脅かした馬鹿共だ。心情のうえでも庇ってやる気にはなれない。ましてや同情もだ。しかしそれだけ、人の憎悪や妄執とは恐ろしいという事実の裏返しでもあるのだろう。私も計画を進めるにあたり、大なり小なり恨みを買っているはずだ。思わぬところで足を掬われないうよう、留意する必要があるだろう。

とまあ、そんなこんなで、盗賊連中のゴタゴタはどちらも小康状態となっている。

私としては、友等の望むようことが運べば良いと思うが、結果として穏やかな日が続くなから、それも良しと思える。別に私は荒事を好むわけでもないし、友が命を賭けるとすれば、それは最後の最後で十分だ。多くの者が、私より先に逝く。なるべく長く、元気な顔を見ていたい。……これが私の我儘だという自覚はある。

キャリアの件でダンマーに触れたが、彼等も幾らかがウインターホールドへ移住してきた。

彼等の故郷、『モロウインド』は、レッドマウンテンの噴火という天災に見舞われ、多くのダンマーが死に、残った者達も行き場を失う事態となった。その対処として、時のスカイリム上級王がスカイリム北東部にあるソルスセイム島を彼等に割譲したのであ

る。恩情とも取れるが、おそらくそれだけではあるまい。灰が降り積もるようになり、極めて居住性が悪く持て余すようになった土地を手放し、他国へ恩を売ることもでき。人情と打算の結果、というのが実際のところではないかと思う。しかしダンマー達が一応の居場所を確保できたのは事実だ。だが、それで一息つけたかと思えば、今度はかつて支配していたブラックマーシユのアルゴニアンがモロウインドに逆侵攻をかけ、それから逃げた多くの者が各地へ散り散りになっている。言ってしまえば、今のダンマー達は弱り目に祟り目が続いた末にポロポロになった、流浪の民だ。

その散った土地の中でも、比較的の故郷に近かったウインドヘルムに彼等は集まり……そして灰色地区と呼ばれる環境が出来上がった。

以前にも触れたが、ウインドヘルムは言うまでもなくノルド至上主義がまかりとおる町である。そんな町でのダンマー達の扱いは、決して良いものではない。「灰色地区」とは正式な行政区画名ではなく、通称であり蔑称だ。人足から実際に聞いた話ではあるが、曰く、ソルスセイム割譲の件からスカイリムに望みを賭け、新天地に選んだが、これほどまでに迫害されるとは思っても見なかった。それがわかつていれば、もつと先の、違う土地まで旅を続けたらどう、と。

しかしそれも結果論ではある。私自身が経験したわけではないが、流浪の民とは酷く悲惨なものだと聞いている。遠く故郷を離れ、海路であれ陸路であれ険しい道程を越え

て辿り着いた人類文明圏。そこで安堵を覚えて腰を下ろしてしまつたのなら、再び立ち上がるのは難しいだろう。何せ、性も根も尽きている者がほとんどだつたことは、私でも想像に難くない。その状況から、ウインドヘルムの住民感情などを考慮し、再び旅を言い出したとして、どれだけの者が付き従うか。ソリチュードやホワイトランであれば、多少は違つたかもしれない。しかし、ウインドヘルムというやや閉鎖的な町にいる彼等にそんな事情は届き得ない。ならばスカイリムを横断、ないしは縦断して、『ハイロック』やハンマーフェル、もしくはシロディールまで移動し続ける覚悟が必要になる。今となつては口にすることもあるが、それが本当に可能なのか。いや、まず無理だろう。長々と分析してしまつたが、私に愚痴を吐いた彼も、叶わぬ夢、として諦めた末の虚勢であつたのかもしれない。……これ以上は野暮に過ぎるな。

閑話休題。これも以前触れたが、かつては大学や町には、多くのダンマーの存在があつた。それが、オブリビオンの動乱、大災害を経て、住民からの悪感情に曝され、悪環境に耐えられなくなつた者から町を後にした。しかし今、町と大学は再び手を取り合ふと公式な声明を発表した。

ダンマー達は思った。自分達は普請を通してだが、町に滞在し、今のところは差別的な扱いを受けていない。これならば、在りし日の大学とダンマーとの関係を取り戻せるのではないのか。我々にとつての安住の地は、実は何もスカイリムを通り越さなくと

も、すぐ隣の城塞（村）にあったのではないか。いや寧ろ、灰色地区で耐え忍んだ時は、今のためにあったのではないか。そのように。

勿論これは計画の第一歩である移民募集の一貫として、私も屋敷の普請に集まった人足達にはかなり配慮をした。人足達に十分な給金を支払うことは当然として、宿屋へ宿泊する際の交渉や、宿屋に収まりきらなかつた者達が寝泊まりする天幕へ、温かい汁物や酒の差し入れなども行つた。住民達には、人足であるダンマー一行の窮状を訴え、彼等も苦しみの中にある民なのだ、と親近感を植え付けた。ついでに言えば、その被差別民達は、町の住民の健康を一手に引き受け、首長からの覚えも良い錬金術師である私の屋敷を修繕しているのだ。それが終われば、この先、人が増えることを見越して、少しずつ住居の修繕や廃墟の撤去を行つていく予定だ、とも伝えてある。彼等は厄介者ではなく、町の復興のために率先して汗を流している。そう伝え続けた。その結果が、ダンマー達に対する普通の余所者程度の扱いになつたのであれば、私も骨を折つたかがあるというもの。

そして、私の屋敷の修繕が終わり、あとは地下通路など秘密裏に進行する作業のみを残すところとなつた頃、人足の代表らしき立場になつていたダンマーが申し出てきた。自分達を町の住民として認めてほしい。願わくばその証として、自分達は「ダークエルフ」ではなく「ダンマー」と呼んでほしい。とのことだつた。それが許されるな

ら、ウインドヘルムやソルスセイムからも同胞がこの町の復興を手伝いに集うだろう、とも。

私は計画が着実な一歩を進めたことに歓喜し、すぐに首長から了承を得、触れを出す約束を取り付けた。呼称については、誇りの問題なのだという。種の誇りだということならば、尊重せねばなるまい。多分、これは彼等なりの試金石なのだ。今度こそ安住の地を得ることができるかどうかの。これが認められない場合、結局は灰色地区と同じ扱いだと判断されてしまった場合、彼等はこの町に居着くことなく去って行くだろう。これは特に厳守するべきだと強く主張し、首長からの触れに盛り込んだ。広く「ノルド」としか呼ばれない住民にはまいち理解しづらい感覚かもしれないが、だからこそ、然程の抵抗無く受け入れられるとも思った。もし意固地に「ダークエルフ」と呼称し続ける者がいるとすれば、その者は明確に計画の邪魔だ。私が動く案件であろうし、最悪の場合には行方不明者となるだろう。まあ、そんな阿呆はいなかったわけだが。

広い屋敷の修繕には、結局丸一年ほどがかかった。それから二年ほど経った今では、私の大小の骨折りのかいがあったのか、それなりにダンマー達の数も増えている。ついでに言えば、ブレックスとハンが、十数人の見込みのあるダンマーを一味の見習いとしてしごいていた。聞くに、彼等は種族柄、隠密行動や魔術に適正があるらしく、鍛えれ

ばそれなりの盗賊になるらしい。また、彼等は私の屋敷を盗賊屋敷へと手掛けた張本人達なわけで、勘のいい者であれば、私達の裏の顔に気付かないとも限らない。であれば、言いふらされる前に自陣へ引き込んでしまえ、ということらしい。それに、彼等自身も灰色地区で少々後ろ暗い仕事に手を染めていた者がそれなりにいるので、盗賊ギルドと友好関係にある一味に加わることは、彼等にも旨味のある話だったようだ。尤も、二人の思いとしては、半数もモノになれば儲け物、といった具合らしいが。どれだけ厳しく鍛えるのだろう。

まあ、私としては一味が力を保ち続けてくれれば、色々と便利で有難いため、否やはない。ついでのついでに言えば、「久しぶりに揉み応えのありそうな連中だ」と獯猛に舌舐めずりをしている頭目殿を見て、私も少し嬉しくなった。友の元気な姿というのは、目に優しく微笑ましい。ハンは私の十倍は喜んでいた。いつもと変わらぬ微笑みであつたが、そろそろ付き合ひも長いからな。私にはわかるのだ。

喜ばしいのは、それだけではない。盗賊云々とは全くの別件として、自主的な大学への在籍希望者が多くいる、ということもある。彼等が大学を再び「故郷」と呼ぶ日が訪れたなら、この町の復興も更に進むだろう。また、打算的な面においても、これら希望者と私の魔法や魂石の優先的取引、町からの様々な便宜を以て、大学への貸しとなるはずだ。実際に大学が復興の役に立つのはまさにこれからだが、貸しはこちらが困窮しな

い程度であれば、どれだけでも貸し付けたとて良いものだ。アグス師は……あまりそのあたりに頓着しないだろうから、マスターウィザード、サボス・アレンには是非とも苦勞をしていただきたい。彼の働きに、町と大学の未来がかかっているのだから！ ……一度胃薬と強壯剤でも差し入れてやろうかな。

大学といえば、声明発表からやや経つてからの訪問時に、上はアグス師から下は学徒まで、揃って私の魔法を研究したいと詰め寄られた。しかし事前にブレックスへ相談し、私が扱う魔法の興りと歴史を話した結果、ある程度慎重に扱うべきだ、という結論に達していたのだ。奇跡の類はこの地のエイドラやデイドラがどう思うか全く読めないし、呪術は扱いを誤ればイザリスの二の舞になりかねん。魔術も体系が多く幅が広いうえ、しようと思えば人を異形に変えたり、呪死効果のある結晶を生み出したり、闇を操るなど、ステンダール番人が大挙して押し寄せそうなものが多い。それ故だ。

そこで、私は閃いた。天啓と言ってもいいほど突然、妙案が降つて湧いたのだ。私はサイジック僧兵を呼んだ。正確には声をかけた。連中がいれば、仮に妙な事態になつてもお得意の高度な魔術でどうにかさせられるであろうし、そもこの地に伝えて良いものなのかも、『未知の体系の魔術』に目が眩んだ目の前の魔術馬鹿共よりは冷静に判断でき

るだろう。

そう思ったのだが……来ない。私の声が元素の間に響き渡った後の反響が虚しく響き、静寂が訪れ、大学関係者から白い目を向けられるだけであつた。その視線が少々腹立たしかつたので、「お前達が協力しないのならば、私は好き勝手に魔法を見せ、研究させるぞ！」その結果、タムリエルどころかムンダスが深淵に沈もうが、混沌のデーモンがそこら中を闊歩しようが、神々の逆鱗に触れて再びの動乱が起ころうが、私は責任を持たんからな！」と腹に力を入れて思い切り怒鳴つた。

すると慌てて二人の僧兵がやってきた。一人は以前にも顔を合わせたタンデイル。もう一人は、あとで聞いたがゲレボロスという名だそうだ。二人は、特にゲレボロスのほうだが。「何を考えている！」と私に詰め寄つて来た。そしていつぞやのタンデイルよろしく、自分だけが理解し納得できる単語を用いた論調を喧しく捲し立て、挙げ句にはタンデイルと同じく人の繊細な部分を無遠慮に逆撫でるので、例によつて殴つた。無強化のクラブで。私は学習する男なのだ。うるさいサイジック僧兵を黙らせるにはこれが一番である。仲間の失態から学ばない僧兵とは違うのだ。

少し離れたところから見ていたタンデイルであるが、かなり顔色を悪くしていた。別に私に危害を加えるなり不快感を与えるなりしなれば、こちらから手を出すことはあまり無いのだ。そう必要以上に怯えることもあるまいに。

そうして、サイジック僧兵監修の下、ロードラン、ロスリック式魔法の講義と研究が始まった。私はまず、ブレックスに話したより詳細に、魔術、呪術、奇跡がどのようなものを説明した。私の言葉に大学の者が首を傾げるときには、僧兵が通訳のような役割を果たし、話を進めた。

結果、まずは最も基礎的な業から研究し、その再現や、タムリエル式魔術との応用などを考案したとしても、必ず僧兵立ち会いの下で実験を行うことを約束させられた。これが守られない場合、サイジック会は危険分子と判断し、丸ごと消すと脅された。彼等にとっては、それだけ危機感を持っている、ということなのだろう。皆が神妙な顔で領き、特にアグス師には念入りに伝えられた。実験に枷を付けられたことか子供扱いされたことか、両方か。面白くないと感じた翁おきなは拗ねてしまった。「私とて分別くらいはある。大体、大惨事を起こしてはその対処に追われて研究どころではなくなるわ。その程度の道理は弁えておるといふに、皆が寄つてたかつて……」とか。大惨事を引き起こした後のことを引き合いに出しているあたり、念を押したのは正解だったと言わざるを得ない。普通、大惨事とは、起きては誰もがたまったものではないから「大惨事」と呼ぶのだ。それ自体を忌避せず後の対処の面倒について考えを巡らせているのは、かなり黒に近い灰色である。

私は私で、都合良く僧兵がいるのだからと、転移魔術を何度か見せてほしいと強請った。ゲレボロスがまた何ぞ文句を垂れようと口を開くので、私がクラブを取り出すと、奴は小さく悲鳴を上げながら魔術を見せてくれた。タンデイルから、できれば控えてやってほしいと言われたが、不服である。まるで私がいじめているようではないか。私は侮辱に対して正当な抗議を行ったに過ぎない。それが口頭か棍棒かは些細な違いである。この場においては私がそう決めた。

しかし肝心の転移魔術ではあるが、何度見ても違和感が拭えない。そこで、巨大蔵書庫であるアルケイナエウムでそれらしい蔵書を読み漁った。司書であり番人でもあるウラッグ・グロ・シュープの視線は常に刺々しかったが、その程度で止まる私ではない。日々、僧兵の実演と、蔵書との格闘を繰り返し続けること数ヶ月。私なりに違和感の正体に結論を出した。この地での転移魔術は、召喚魔術の一種である、と。だからこそ、結果のみに注目すればただの移動技術であるのに、マヌスのアレに似た感触を覚えたのだ。

この地での召喚魔術とは、基本的にオブリビオンから精霊やドレモラなどを呼び出すことを目的としている。死霊術や魂縛関連が召喚魔術に含まれるのは、本来死した魂はエセリウムなりオブリビオンなりに還るものであるが、それを繋ぎ止める、ないしは呼び出して定着させるためである。そして、転移魔術はその応用であったのだ。このムン

ダスでの実距離を無視するために一度オブリビオンへの道を開き、オブリビオンから再度道をムンダスへ道を開くことで結果的な転移としている。言い方を変えれば、召喚魔術を使い自らを召喚対象として異次元へ送り、再度それを繰り返すことによりこの地へ帰還する。そういうものようだ。

僧兵に私の結論を伝えると、概ねその認識で間違っていない、との返答が得られた。それだけのためにやたら無駄な回り道をした気がしないでもないが、おかげで魔術に対する造詣が更に深まったため、良しと思える。……何故、連中から直接、理論の講義を受けないかと言えば、奴等と私とではこの地の魔術に対する基礎知識に差がありすぎて、説明が説明にならなかつたのだ。あと、妙に話し方が癪に障った。

以上の結論を元に考えると、僧兵たちの転移魔術を私が習得するのは難しいのではないかと思われる。

私もかつては召喚し、召喚される日々を送っていたが、あれはロードランやロスリツクという地の時空が歪んでおり、多くの不死人のいる時空と常に触れ合い離れを繰り返す特殊な場所であつたが故のものである。この地でサイン蠟石を用いたところで、どうにもなるまい。しかしあの魔術は便利である。実はブレックスからも、習得したあかつきには頼みたい面倒事がある、と言われている。おそらく遠方の地。ファルクリースやマルカルスにでも用があるのだろう。そのような事情も相まって、転移魔術が諦められ

ないのだ。

そこで、思考を洗い直してみることにした。私はなまじ完成された転移魔術の使い手と知己を得たがために執着してしまつたが、何も転移の方法はそれだけではあるまい。

例えば、以前にも例に挙げた暗月の彼。アレこそが私にとつての『本家本元の転移魔術』といった印象なのだが、あの光を浮かべて跳ぶ様子は、素人の直感だが無駄が無いように思えて好ましい。それにロスリックの王子もそうだ。彼は自らや兄を転移させていた。アレが魔術かと言われると正直困る。祈祷師の装束に身を包んだ王子の様子を鑑みても、あるいは奇跡の一種であつたかもしれない。

更に言えば、私自身、限定的ではあるが、転移を繰り返した身であつたのだ。忘れていたが、『帰還の骨片』や『家路』の奇跡は、十分に転移と呼んで差し支えは無いはずだ。転移先が「自らが帰る場所」と思っている地点に限定される、という欠点を除けば、だが。ああ、絵画世界ではまた少し違った趣もあつたが、そのほかでは、概ね篝火がその地点と定まつていた。元は名前のとおり、家に帰る奇跡なのだ。それが帰る故郷から追放された不死人であるがために、故郷ではなく篝火などという仮の休息場所に跳ばされるだけの話であつて。更に更に言えば、王の器の力を用いて、篝火間での転移も行った。これらの例を鑑みるに、私が転移魔術……転移魔法を習得するには、奇跡、もつと言えば王のソウルや神の力、更にはその根源たる『火』を元に研究を進めるべきではない

かと思うのだ。

勿論、私は家路以外の転移魔術を知らない。知らないということは、自由に跳び回る神の物語を知らないということ。まさか神話をでっち上げるわけにも行くまい。

王のソウルとて、始まりの火から見出したばかりのものに比べれば力も弱まっていただろう。神の力も、ソウルとして取り込んだに過ぎない。原初の火など、厳密には見たことすら無い。あるいは、世界を照らし続けていたという意味では、生まれた時から触れていたと言うべきかもしれないが。

それでも私は、三度の巡礼を果たした身である。奇跡も学び、神々の力も多く取り込んで来た。『火』も、残り火とはいえ、大王から継いだ始まりに近い火の残り火と、薪の王達から二度に渡り受け継いだものがある（灰というよりは人らしい外観を保っている）。これだけの材料があれば、奇跡と魔術の間の子のような魔法が作れないかと思うのだ。

分類としては魔術でありながら、用いる力は神性を帯びたもので、術の理論的な手法については家路の応用、のような何か、だとか。曖昧に過ぎる自覚はあるが、私に宿るといふ神性を以てすれば、不可能ではないと思える。

神の奇跡は作り出せずとも、魔術ならあるいは。もしくは、各地に篝火を設置し、それを触媒に王の器での転移を模す程度のものしかできないかもしれない。しかし、何に

せよやってみる価値はある。

今の所、二年以上経つても成果らしい成果は得られていないのだが、直感的に、「これは成るな」という手応えがあるのだ。私の思い込みと言われればそれまでだが。

ああ、そういえば、大学に出入りするうちに、どうも最近、擦れ違う新顔が増えた気がする。

声明発表に前後してタムリエル中に学徒募集の触れを出したとして、それが各地に届き、検討され、実際に学徒がここまで足を運ぶ、その往復に三年弱かかったということだろうか。計算としては合っていると思う。

第一陣が来たのなら、第二陣第三陣も来るだろう。何せ、これまでとは町の態度が違う。そういった報せが第一陣から各地へ届けば、第二陣以降が大学を訪ねる決意を固めるのは、以前よりずっと容易になるはずだ。そして学徒が来れば来るほど、町は復興して、大学への援助もより大きくなる好循環が生まれる。魔術を学びたい者からすれば、年々環境は良くなるのだ。

小さな一歩ではあるが、ここでも復興計画が順調に進んでいる兆しが見えたことに満足して、この日は少し早めに切り上げ帰宅した。

錬金術師としての職務。大学での折衝と研究。首長閣下やブレックスとの情報共有。

元の住民と新たな移住者達との仲立ち。そして、変わらず続いているラーナルクの鍛錬。なかなか忙しい日を送っている。偶にくらいは早く休んでも罰はあたらないだろう。

そう考えて帰宅すると、夕餉の席で思いつめた顔をしたラーナルクから、ある願い事をされた。

「僕に実戦を教えてください」

愛息の年齢にしては早すぎる願いをどうしたものかと悩んでいると、夜分忍んできたブレックスからも頼み事をされた。

「悪いんだけどよ。前に話していたウインターホールド首長がスカイリム上級王だった頃の兜、アレ取ってきてくれや」

簡単に言ってくれる頭目殿である。

閑話、ラーナルクの憂鬱（甲）

イーストマーチの鉱山採掘村逗留中のほとんどの時間をトルドスと過ごし、ウインタールドに腰を据えたラーナルクには、ある悩みがあった。詮無きことと思いつつ、どうしても浮かぶのだ。早く大人になりたい、早く大きくなりたいと願いつつ、こんな悩みを抱えること自体が子供の証明のような気もして、脳裏によぎる度、憂鬱な気分になる。

—— どうして僕は、お父さんの本当の子供じゃないんだろう。

ラーナルクという人物を語るとき、その境遇に目を向ければ、多くは薄幸の少年と認識するだろう。

子供を顧みない、どころか疎んじてさえいる父親と、そんな男を夫としてしまった病弱な母の下に生まれ、挙げ句には孤児みなしことなった。早すぎる天涯孤独の身の上は、時期が悪かったこともあり、そのまま夭折してもなんら不思議ではなかった。

しかしラーナルクは、そうならないだけのいくつかのものを、幼くして『持っている』人間ではあった。

一つ目は、年齢の割に随分と乾いた感性だ。

ラーナルクにとって親とは母のことを指し、父は既に父ではなかった。時々家に帰ってきては空気を悪くし、自分と母が飢えないだけの金を置いては出ていく人間。いなくなれば食い扶持に困るが、いても然程有難いと思えない存在。

それどころか、母の具合が良く、買物に出かけるときなどは、何が気に食わないのか、家に残ったラーナルクを殴り蹴ることも珍しくはなかった。ラーナルクは母に心配をかけまいと必死に耐えていたが、何にせよ、それがラーナルクにとっての父であつた。

だからか、母が死に、父から受ける暴力が頻発するようになったある日、家を追い出されたそのときも、驚愕のあまり立ち尽くす、などということは無かつた。孤児は流石に不味い、と考え、けたたましい音を立てて閉まった扉の前で、父の情に訴え翻意させられそうな口上をいくつか思い浮かべてはみた。しかし、望みが薄いと判断すれば、すぐにその場を立ち去つた。ラーナルクが父親と真に決別したのは、孤児になつて数拍の後、という目を瞞るほどの早さだつた。

二つ目、三つ目は、死を遠ざけるための行動力と、体験によつて齎される知識を確実に己が血肉とし、それを元に思考を発展させる知恵だ。

亡き母親が、町の外には冒険が溢れているのだ、と話していたことを思い出す。それはつまり、冒険に見合っただけの危険を孕んでいる、という事実の裏返しでもある。酒に酔つた父親の横暴にすら逆らえない自分に、町の外で一人生き延びる力が備わっていると考えられない。おそらくは極めて困難なはずだ。

ラーナルクは幼いながらに思考を止めず、恐れではなく現実的な推察により、その脳内から、ホワイトランの外へ活路を求める選択肢を却下した。

そして四つ目は、『死なないため』とそう定めたのなら、必要と思われるあらゆる行動を一切躊躇わない胆力だ。ラーナルクはこれらを武器に、死の季節に打ち勝つた。

まず、日中に休み、活動は夜と決めた。孤児になった初日、いつものように日が暮れてから眠ろうとしたところ、風や地面に体温を奪われ続け、本能的に「これは不味い」と悟つたからだ。ラーナルクは、体温、『熱』がそのまま『命』であるということを知つた。

そういうえば、死んだ母も徐々に冷たくなつていったことを思い出す。なるほど、死ぬとはこういうことか、と理解した。そして、死なないためには極力身体を冷やすべきではないと結論を下した。これから冬に入ろうという時期の孤児としては、最優先で解決すべき命題である。

そのため、城壁の窪みに廃棄された樽で風除けの囲いを作り、休息場所を確保した。足元には薪割り場からくすねて来た薪を並べ、その上には材木置場から同じ様にくすねた板を置いた。盗みを働いた孤児は鬻り殺しに遭う、とは以前より伝え聞いていたことだが、凍えて死ぬのも怒りを買って殺されるのも、大した違いはないだろうとラーナルクは考えた。とにかく、これで地面に直接触れず、風も防げる。

衛兵に見咎められては、一時家屋の軒下などに避難していた。そうしてほとぼりが冷めたら、同じ様に巢を作るのだ。お気に入りの避難所は、宿屋と鍛冶場の裏手だった。宿屋は一般の家屋に比べて、多くの料理を作る関係から調理場が広く、当然、竈も大きい。壁越しでも、それなりの熱は感じられた。また、鍛冶場については大きな炉があるため、暖をとるに最上と言えた。至近にまで近寄らずとも熱が伝わり、身体に活力を齎した。風下ならなおのことである。

時折、濃密な金属や煤の臭いが鼻どころか肺にまで不快感をもたらしたが、それだけだ。凍え死ぬよりはマシだと我慢した。しかし、鍛冶師はただでさえ自らの業を工房関係者以外の人間に見られることを嫌がるため、見慣れない子供が付近をうろつくことに神経を尖らせた。炉や作業場の陰で休める日は、幸運であったと言える。当時のラーナルクの語彙にはまだ存在しないが、何処その不死人に言わせれば、「痛し痒し」と口にしただろう。

火を起こすことも考えたが、夜間警邏にあたるホワイトランの衛兵は、火災事故の元になる不審な火元を常に警戒している。ウインドヘルムやマルカルスと違い木造家屋の多いホワイトランの町中で焚き火など、許されるはずもない。そもそも、薪をどうするのか、という問題もある。頻繁に盗みを働くのは危険を伴うと理解していたために、安易な行動は自ら死に歩み寄るようなものだと考えたのだ。

食糧事情についても、様々な動植物を獣の如く捕食することに、毛ほどの抵抗感も抱かなかつた。

まず、手頃なところでは虫や鼠などの小動物を狙った。秋のあいだで最も優先度の高い獲物は、蝗虫であつた。なにせ毒が無く、多くは冬を越せず死んでしまうからだ。冬でも探せば死体くらいはあるのだろうが、鳥などに食べられ目にするには無くなるだろう。ラーナルクはせっせと蝗虫を捕まえては食べた。

秋から厳しい冬を通して春になるまで、蚯蚓にも大いに世話になつた。しかし、土を掘る必要があることと、寒い季節は活動が鈍くなるのか、あまり数を見つけることは出来なかつた。そもそも、道具も持たない子供に、穴掘りは重労働である。費用対効果が合わない。

越冬中の蜂の巣などはご馳走であつたが（蜂の巣は見張り台の陰から静かに回収し、拾った麻袋に包み、タロス像前の水場に漬け込んだ。水路の水では巣を沈めるための嵩

が足りなかったのだ。蜜が多少駄目にはなったが、安全に蜂の子や蛹を食べるためには、必要な手段だと考えた。尤も、夜とはいえ大変目立つ場所での大変目立つ行為であったため、直ぐに衛兵隊に見つかり咎められた、一度しか口にできなかった。また、蜘蛛や蝶は簡単に捕まえられたが毒を持つ物が多く、無毒でも強い苦味や酸味を味わうこともがあり、あまり好ましい獲物とは言えなかった。ラーナルクがそれらを捕食するかを選択するには、精神的苦痛と空腹感を胸中の天秤に乗せ、覚悟を決める必要があった。

また、鼠や鼬、子犬や子猫を捕まえた時は、目、鼻、舌、肛門などの粘膜に異常が無いか確認した。初めて鼠を捕食したとき、酷く腹を下したのだ。あまりに重症化したため、数日は身動きが取れず、水をすするのが精一杯だった。このときばかりは、そのまま衰弱して死ぬのではないかと思った。実際、症状が更に酷ければ、それが現実となっても不思議ではなかったのだ。

そして自分の食べた鼠の残骸を見てみれば、どうも病気を持っていたのではないかと見当がつけられるだけの異常を見つけた。だからだ。捕獲した獲物に火を通すことが叶わない以上、食前の確認は、加熱調理が不可能なラーナルクにできる、最大限の用心だった。また、毒や病気の無い獲物のなんと有難いことか、と実感した。

そのような痛い目に遭いつつも、小動物の捕獲を諦め口にしない、という選択肢は有り得なかった。何せ食べなければ活力が湧かない。活力が湧かなければ熱が生まれな

い。ラーナルクは栄養学など知る由も無い幼子ではあったが、食べなければ死ぬ、という真理には孤児なりに辿り着いていた。これが、物を食べずとも訪れるのが空腹感、更には飢餓感のみであったのなら、ラーナルクは遠慮無くそちらを選んだだろう。火を通していい獲物を食べる危険性自体は、きちんと認識していたからだ。

ちなみに、明らかに異常が見つかった鼠は一度、その場で縊り殺して罌の餌として試してみた。餌を狙いに来た獣を狙ったのだが、ホワイトランでは狐どころか猫や犬が町の中に侵入することすら稀である（捕まえた子猫や子犬はおそらく飼われていたものが逃げたのだろう）。せいぜい鳥が舞い降りることはあったが、手持ちの道具では、滑空で素早く餌を奪いそのまま飛び去っていく空の住民を捕まえることは叶わず、罌作戦は失敗に終わった。ラーナルクは狩りの難しさを一つ知った。

と同時に、この作戦は労力の無駄だと切り捨てた。ラーナルクは、現状で力及ばない事柄を未練無く諦めることができた。

宿屋や民家から出される廃棄物も漁った。しかしそれらは基本的に骨や野菜の皮しか無く、自分で小動物を捕らえるほどの可食分量を得ることは難しかった。だが、ある程度安定的且つ安全に供給を得られる、という点においては、大変有難いものであった。とはいえ、これらも可食に耐え得る物と腐敗した物が雑多に混ざっているため、過信は厳禁だと、確認が必要であった。また、後述の理由から、あまり腐敗臭を身に纏いたく

なかつたラーナルクとしては、これも「痛し痒し」であつた。

最も入手頻度が低く、反面安全に入手できる成果物は、市場の屋台に放置された食料の内、比較的傷んでいて商品価値が低い物であつた。無くなつても店主は然程気にしないうえに、普段小動物や廃棄物を口にしてゐる少年からすれば、『商品価値が低い』程度の傷みは何の問題もなかつたからである（なお、酷く冷える日に出来心で酒をくすねたこともあつたが、一口飲んで『これはダメだ』と痛感した。酒精の弱い蜂蜜酒とは言へ、十にもならない子供が飲んで良いものではなかつた）。

野草にも手を出したが、食用になり得る物か否かの区別など、ラーナルクにはつかない。そのため、まずは食して身体に不調が無いかを確認し、判断するしかなかつた。中には、弱い薬効成分が含有されており、大量に摂取すればかえつて毒となる物もあつた。腹を下し酷い頭痛に苛まれ奇妙な幻覚を見ながら、ラーナルクは一つ一つ生きるための知識を体得していった。本人にとつて、別段嬉しいことではなかつたが。

それらの目ぼしい糧にありつけなかつた日は、エルダーグリーンの樹皮を剥いで、一晩中かかつて噛み続けていた。キナレスの司祭曰く、往時と比較すればエルダーグリーンの生命力の枯渇は著しいらしいが、ラーナルクとしては口寂しさが紛れればそれで十分であつたし、思い違いでなければ、多少の体力回復効果はあつたように思えた。

また、時折エルダーグリーンの近くを徘徊するラーナルクの境遇を哀れに思つたキナ

レスの司祭も、毎日、とは行かないにせよ、多少の援助はしてくれた。当然、樹皮を剥がしていることは伏せてある。そして、この司祭へ近寄るために、極力身綺麗でいたかつたのだ。孤児に施しをする聖職者なのだから気にはしないかもしれないが、人間、不快な思いは避けたいと思うのが自然だ。だからこそ、風地区に行く際には、どれだけ水が冷たかろうが顔や手を洗い、少しでも清潔にしてから赴いていた。ラーナルクは、人の感情の機微に敏感であつた。

実際には、司祭はラーナルクの行いを『施しを受ける者として本人なりの礼儀を払っている』のだと解釈し、ラーナルクの思惑とは少々ずれた形で好意的に受け止めていた。

また、ラーナルクは他の孤児や浮浪者に比べて、身の振り方も上手だつた。

大前提として、スカイリムは尚武の気風が強い。これは、比較的開放的であるホワイトランも例に漏れない。では、この土地の男には何が求められるのか。それは、とにかく『強さ』である。人徳も知恵もいだろう。しかしそれは強さを身に着けた上で、人間に深みを出すために身につけるもの、とされている。優しいだけの者も、頭が回るだけの者も、スカイリムでは尊敬を勝ち得ない。

では、一定の強さを身につけることが当然とされている社会において、弱き者がどのような扱いを受けるか。それは、言うまでもない。白眼視され、疎まれ、蔑まれる。更

に言えば、市民であつてもそのような扱いは珍しくないのだ。それが、腕つぶしに加えて社会的にも弱者である孤児や浮浪者であれば？

「火を見るより明らか」と表現するのが適当であろう。ホワイトランに限らず、スカイリムでの社会的弱者への視線に含まれる慈悲の念は弱い。

それ故、ラーナルクは、他の孤児や浮浪者のように、通行人に慈悲を乞うことはしなかつた。キナレスの司祭を除いて、他人に頼ることもしなかつた。人前に出る機会が少なかつたこともあるが、ラーナルクのそういった態度は、衛兵隊など治安を司る者達からの警戒感を薄れさせた（実際には必要最低限の物品をくすねてはいるのだが）。

いずれにせよ、衛兵隊が主に犯罪者予備軍として猜疑心を持つて睨んでいたのは、ラーナルク以外の者達に対してであつた。哀れな姿で油断させておいて、スリを働かないか。夜中に鍵穴を触つてはいないか。そのように。

警邏に鉄則などはなく、あるのは先達の教えと自らの経験だけだ。ならばそれらに則つたうえで、疑いの目が感情的に唾棄している者達へ向くのは、致し方ないとも言える。飽きもせず夜な夜な虫や鼠を追いかけ回す、ある意味わかりやすい行動を取るだけの子供など、彼等にとっては放置して良い部類であつたのだ。

そうして秋が終わり、毎日毎日眠りから覚める度に自分が本当に生きているのか確かめる冬が過ぎ、春が訪れた。

この頃になれば、ラーナルクは孤児や浮浪者達から一目置かれる存在になっていた。自分達と違い、身を寄せ合うこともなく一人生きている幼子は、どうしたって目立つ。それなのにその幼子は、大方の予想を裏切りスカイリムの厳しい冬を耐えきってみせた。なかなかできるものではない。

だが、そのような感心を寄せられると同時に、嫌悪の視線が注がれていることにもラーナルクは気付いていた。孤児のくせに。自分達と変わらない身の上のくせに。何を格好をつけているのか。面白くない。

ラーナルクとしては、自らが死なないための最善を尽くしたつもりでいただけなのだが、結果的に、不必要な敵対心を買うという失態を犯したことを悟った。

光の当たる場所で暮らす市民達からは、一括りに孤児だ浮浪者だと唾棄されつつも、持たざる者達は持たざる者達なりに低く狭い社会があり、それなりに序列のようなものも存在する。そこから外れて飄々としている、ないしはそう見える幼子など、目障り以外の何物でもないのだ。

ラーナルクはそれらの視線を鑑み、少しでも身の安全を守ろうと、薪割り場から手斧

をくすねておいた。持ち主に見つかれば罰は免れないため、持ち歩くのは夜間の活動時のみだ。

待ち望んだ春であったのに、ラーナルクにとってはいつ襲われるかもしれない、落ち着かない日々となつてしまった。

しかし、そんな問題などまるで些細な、どうでもよくなるような事件が起きた。ラーナルクにとつての転機であり、ホワイトランの全ての住民にとつても、大なり小なりそのような側面を持つ出来事だ。

よく晴れた日だった。見る者全ての目を奪う綺羅びやかな銀鎧を纏った大男が、あろうことがスカイリムで最も強いとされる同胞団へ、正面切つて喧嘩を売つたのだ。ラーナルクはその様子を、空地区へつながる階段からつぶさに見ていた。

母が寝物語に話してくれた魔法を用いてジョルバスクルの扉を焼き、同胞団全員を相手取つて大立ち回りを見せた。ジョルバスクル屋内へ入つてからも物音がしていたため、サークルメンバーと交戦していたのだろう。しかし、その後出てきたのは銀鎧だった。驚くべきことではあるが、同胞団全員にたつた一人で勝利してしまつたらしい。ラーナルクは夢でも見ているのかと思つた。

その後、我に返つた衛兵隊が銀鎧を遠巻きに取り囲み、首長の元へと連行していった。ラーナルクは珍しく混乱していた。銀鎧は罪人として罰せられてしまうのだろうか。それとも、首長の砦でもジョルバスクルと同じ様に暴れまわるのだろうか。思考がまともでないことも自分にしては珍しいと思つたが、何より腹の底から湧いてくる熱に浮かされ、それどころではなかつたのだ。腹一杯の獲物にありつけたわけではない。酒を飲んだわけでもない。日光浴で温まつたわけでもない。経験したことの無い感覚だ。銀鎧を見ていると、体が熱くなる。

ラーナルクにとって更に驚くべきは、首長の砦から無事に帰還した銀鎧が、あろうことかジョルバスクルへ再び足を向けたことだつた。何故そんな危険なことをと思つたが、身なりのいいサークルメンバーらしき男と談笑しているのが見えた。理解できなかった。あれだけの暴挙に及んだのなら、それ相応に恨まれているのではないのか？ 何故銀鎧は、襲撃を受けた側と関係を構築できているのだろうか。

今ではなくいずれでも、自分にそれができるだろうか。同胞団を翻弄するだけの純粋な力。首長の砦から帰還する力。同胞団に恨み以外の感情を残す手腕。何をどうすれば良いのか、全くわからなかつた。

とにかく知りたい。銀鎧について知りたい。銀鎧の力や考えについて知りたい。そう思つた。

銀鎧が歩くと人垣が割れて道ができる。その様子を見ていたラーナルクは、「いつも、『戦士』だ『ノルドの誇り』だつてうるさいやつらが、かっこわるいな」と嘲り笑った。滑稽だと。

実際の所、ラーナルクは幼心に昏い気持ちを抱いたが、件の銀鎧を相手にしてしまえばいくらスカイリムの民とは言え、分が悪いというもの。彼の銀鎧は単体で完結するデイドラロードだ。世界の礎となった経験すらある。常識的に考えて、人の身で敵う相手ではない。

本人がその気になれば、身に帯びた神性と魔性が相まった奇妙な存在感は強くなり、周りの者達の目を惹き付けて止まず、それでいて理解不能な猛獣のように恐れられる存在である。人垣も割れるし道くらいはできる。

ラーナルクはこれが運命の出会いだと直感した。銀鎧は無用な怪我人を出さないためか、随分とゆつたりとした足取りで外門へと向かい、ホワイトランを後にしようとしている。今なら間に合う。ラーナルクは人集りを大きく迂回するように走り、散々世話になった市場のあたりで銀鎧に追いついた。そこから、人集り障害物を幼子特有の小さな体ですり抜け、銀鎧にしがみついた。

「坊主、何をしている？」

言われて気がついた。自分は銀鎧にどうしてほしいのだろうか？ 多分、一緒に連れて

行つてほしいのだ。この、父とも思えぬ父が暮らすホワイトランから連れ出してほしいのだ。なら、情に訴える口上が無くてはいけない。しかし、熱に浮かされていたせいで、それらは全く用意していない。らしくない失態である。どうする。どうすればいい？

混乱し、千載一遇の好機を逃しかけている現状に涙が溢れてくる。自分を叱咤してどうにか頭を回そうと努めていると、銀鎧のほうから質問された。ラーナルクは問答無用で引き剥がされないことに、言葉にならないほどの安堵を覚えた。そして質問に答えていると、何が面白いのか銀鎧が機嫌良さそうに笑っている。孤児が一冬越えるのは、そんなにおかしいだろうか？

「しかし何故私だ？ 言つておくが私は優しくもなんともないぞ？」

何故銀鎧を選んだのか。これも、言われてから気付いた。頼れる大人であれば、自分の知る限り最も親切にしてくれたのは、キナレスの司祭様だ。何故銀鎧を選んだ？ 同胞団に対する行いを見れば、司祭様のほうが絶対に優しいだろう。数瞬、逡巡したが、存外答えはすぐに出た。人の定めた倫理の外にいるかのような圧倒的な力。ラーナルクはそれに魅せられたのだ。だから答えた。多少、受けが良さそうな演出も加えて。ラーナルクは生きていくために、幾らかの小賢しさも身につけていた。

「……………強かったから。ぼくが強かったら、お父さんに出て行って言われても、いやだつて言えた。」

付いて行ったら、強くなれると思っただから」

案の定というか、銀鎧は翻意を促してきた。しかしここで引き下がるわけにはいかない。銀鎧の強さを身に着けたい。ホワイトランに居たくない。独りで惨めに日々を過ごすのはもう嫌だ。間違っても、もう野晒しで冬を越したくない。そうした様々な思いを込めて、銀鎧の足を力いっぱい締め付けた。

すると根負けしたのだろうか。銀鎧はラーナルクの同行を許可した。しかしここで予想外が一つ。ラーナルクは、自分が従者か丁稚として連れて行かれるものだと思っていた。実際、ホワイトランの戦士がそのような存在を連れてくるのを見たことがある。しかし銀鎧は言った。

「よし、ならば来るといい。今日からお前は私の子だ。よろしくな」

……………子供？ 今日初めて会っていきなり？ 孤児を
？

ラーナルクは混乱のあまり、一種の現実逃避を図った。「銀鎧に会ってから、らしくないことばかりだ」と。

銀鎧の拠点はリフト地方にあるのだという。しかし、銀鎧がリフト地方、というかり

フテンから来たと調べが付くのは不味いとのことで、ウインドヘルムを經由して、リフテン行きの馬車に乗った。

ラーナルクの知識には、リフトもリフテンもウインドヘルムも臆気にしかなく、地理関係も全く把握していなかったが、故あつて遠回りをする、ということだけは理解できた。おかげで馬車の旅は長く、ラーナルクと鎧を脱いだ銀鎧（この時点では、ラーナルクはまだ銀鎧の名前を知らなかった）が話す時間は、いくらでもあつた。

銀鎧は、ラーナルクが孤児となつてから同胞団襲撃の日まで、どうやって生き延びたかを興味深そうに質問した。小動物を獲物としていたことはホワイトランでも話したが、鼠を食べて生死の境を彷徨つた話は思いの外ウケた。そして上機嫌に「鼠は時に強い毒や病気を持つ。お前も苦しかっただろうが、それで済んだのは運がいいほうだ。現に私は鼠を食べて何度か死んだ」と話す。ラーナルクはこの時、自分と打ち解けるための冗談か比喩の類だと考えた。しかし、後にそれが事実であり、目の前の男が本当に人ならざるもの（男は「自分は不死人であり、誰が何と言おうが『人』だ」と頑なに否定するが）だと判明したときには、思わず少し遠くを眺めてしまった。尤も、当時のラーナルクが本気にしなかつたのは、それらを理解するにはまだ幼かつただけ、ということもあるが。

そして他にも雨風のしのぎ方などの話しているうちに、銀鎧が『盗みは悪事である』と

いうまつとうな倫理観を備えながら、「報復として殺される覚悟があり、自らが生きるためにやむを得ないのならば、盗るしかあるまい」という姿勢であることもわかった。おかげで、樽や薪や板や麻袋や食料や手斧など、様々な窃盗は笑い話として処理された。しかし、「これからは生きていくのに不自由はしないのだから、厳に慎むように」とも釘を刺された。ラーナルクとて、好き好んで盗みを働いていたわけではない。否やは無かった。

が、「私の友人達はその手の稼業に手を染めていてな。お前が盗賊の道に進みたいと言うのなら、話は別だ」とも続けられた。ラーナルクはまたしても混乱した。道徳的規範を教えたいのか犯罪を唆したいのか、どちらなのだろう。ラーナルクは銀鎧をもつと知る必要があると思った。

馬車は予定通りウインドヘルムを経由し、乗り継ぎを経て、旅はまだまだ続く。

先述の他にも、様々な話をした。体は弱かったが、優しかった母のこと。自分を邪魔者として扱った父とも呼べぬ父のこと。ホワイトランがどのような町であるかということ。

逆に、銀鎧がジョルバスクルの中や首長の砦でどんなやり取りをしたのかも聞いた。聞いて、なんて命知らずなのだろうかとも思った。しかし、銀鎧があまりになんてことも無いように話すものだから、眼前の男にとっては特別なことではないのだ、と感心し

た。

しかし、首長を煽り倒したのはどういう意図があつてのことなのだろう？ 純粹に疑問に思い、また、心配にもなつたので、「大丈夫なの？」と聞くと、「私にもわからん」と頼りない答えが返つてきた。次いで「問題が無いわけではないだろうが、酷いことにはならん。我が友の策である。仮に正面切つての戦争になつたとしても、友等とお前一人くらいは守つてやれるから心配するな」と言われた。幼いラーナルクには『戦争』がどんなものなのか全く想像できなかつたが、銀鎧が言うなら大丈夫なのだろう、と納得した。

それ以上に、銀鎧の守る人間の中に自分が当然の如く勘定されていることが、身も心も浮き立つほど嬉しかつた。

旅のあいだ、久しぶりにまつとうな食事をとつた。

初めは旅の途中での野営時であつたが、銀鎧はどこから調理済みの汁物を取り出し、ゆつくりと食べるよう言いながら渡してきた。慌てて食べるなら取り上げる、とすら言つて。折角のご馳走を食いつぶぐれてたまるかと、焦る気持ちを押し殺して、極力ゆつくりと食べた。

舌を通して感じる味は、母の作つた夕餉に遠く及ばないものだった。及ばないはずな

のだが、不思議なことに涙が次から次へと零れ、止まらなかつた。横で見えていた銀鎧は、「数ヶ月ぶりの食事は美味しいだろう」と頭を撫でてくれた。久しぶりだから美味しく感じるのだろうか。多分、少し違うのではないかとラーナルクは思った。銀鎧から齎された汁物が、あの惨めで気の休まらない日々から脱したことの象徴になつたのではないかと。だから、口にするにはあまりに膨大な思いが溢れ、涙の形となつて噴き出したのではないかと。

悲しい思いをしているわけではないはずだが、湧き上がる強い情動に耐えるため、現実逃避地味な客観的思考を呼び起こしてしまつた。ラーナルクは、素直に情動へ身を委ねられない自分のそういった癖は少々損だな、と更に逃避を重ねた。

汁物を、ゆっくり、ゆっくりと時間をかけて食べた。汁を飲み、それが喉を通り腹に収まるのを実感する。柔らかに煮られた具を噛み、苦味や酸味やえぐ味どころか、ただ旨味ばかりが溢れるそれをいつまでも噛んでいたいと思つたが、よく煮られた具は溶けるように無くなつてしまう。あまりに惜しく、少し悲しくなつたほどだ。

それを見ていた銀鎧が笑いながら、「ゆっくり食べる約束を守るなら、まだまだ沢山あるから心配するな」と汁物の入つた器を取り出した。結局、三杯の汁を飲み干した。誰かと食べる食事とは、こんなにも暖かく、安らぐものだつたらうか。食事を終えたラーナルクは、腹がくちたせいとか、銀鎧を庇護者と認めて安心したせいとか、強烈な眠気に襲

われた。ラーナルクの心身は共に、休養を必要としていたのだ。

意識が薄れる中でラーナルクは、銀鎧が焚き火の前に陣取り、自分をその膝の上に乗せたことを感じた。焚き火側の側面が温かい。でも、銀鎧に触れているほうの側面も、じんわりと火に当てられてるように、温かい。人肌とは少し違うような……考えすぎだろうか。きつとそうだろう。今は眠いんだ。

ラーナルクはその日、数ヶ月ぶりに熟睡した。生家で凍える心配をせずに眠っていたことなど、もう遠い昔にすら思えた。知らず内に、再び涙が頬を伝っていた。

翌朝はラーナルクの目覚めを待つてから行動を開始したため、少々遅い出発となった。何故起こさなかったのかと聞くと「起こしてほしかったのか?」と問い返された。別に規則正しい生活習慣に拘るつもりはないのだが、旅を主導する立場の大人としてそれでいいのだろうか。盗み聞くに、どうも行者へは無理を言ったようである。しかし銀鎧は自分が起きるまで、その場を動かさず、ずっと火の番をして待つていてくれた。ラーナルクにはそれが嬉しいような、くすぐったいような、恐ろしいような気がしていた。何故この大人は自分にこんなに優しいのだろうか。母は優しかった。でもそれは母というものだからだと思つていた。父だった男は優しくなかった。だから父とはそういうものだと思つていた。しかし、この新しい『お父さん』は、不安になるほどに優しい。何か裏があるのではないか。ラーナルクは幼いながらも、そのように考え、やや警戒心

を高めた。しかしそれはラーナルクの本意ではなく、銀鎧を警戒すること自体が裏切りなのではないかと、自罰的な思考に囚われもした。

とはいえ、ラーナルクの不安は杞憂に終わった。人間、自分に親切な者を警戒し続けるというのも、なかなか疲れる話である。食事は野営だろうが宿屋であろうが、腹一杯になるまで食べさせてもらえた。寝る時は、膝の上か、同じ床で眠った。話しかければ邪険にされることは無く、逆に興味を持つて話しかけられることもあれば、ただ一緒に景色を楽しむ余裕もあつた。おかげで、ラーナルクが銀鎧を警戒することも無くなつていた。

ラーナルクにとって、馬車の旅は楽しいものだった。しかし行者曰く、本来であれば旅とは、馬車だろうが徒歩だろうが、ラーナルクが思うよりずっと疲れるものらしい。そうでないのは、ラーナルクと銀鎧の尻の下にしかれた敷物のせいだ。その敷物は巨大な毛皮を折りたたんだ物で、何処にも縫い目が見当たらない。聞けばマンモスの毛皮だとか。ラーナルクは寝物語にしか聞かない家屋のように大きな獣を思い浮かべて、こんなものを敷物にしていいのか、と尋ねた。だが銀鎧は「売り物にもならんのだ。構うまい」とどこ吹く風だ。それどころか、解体処理にはそれなりの手間暇をかけたというのに、「肌触りの悪いごわついたマンモスの毛皮を買い取る商人などいない」と聞かされたときのことを愚痴っている。その鬱憤晴らしとして、毛皮をやや粗雑に扱っているのだ

とか。ラーナルクは銀鎧の大人気ないところを見て、おかしくなった。と同時に、男にしては何ということは無くとも、自分としては厚遇されているように思え、面映くて仕方なかった。

正確には覚えていないが、半月からひと月弱かけて目的地のリフテン、そこから盗賊の峠である砦まで旅をしたが、その頃には銀鎧を「お父さん」と呼ぶのに抵抗は無くなっていた。

閑話、ラーナルクの憂鬱（乙）

日暮れにリフテンへと到着したラーナルクと養父は、そのまま町で一泊することになった。養父曰く、友に事の顛末を報告する、とのことだった。

門を潜り、視界にホワイトランとはまた違う都市の景観が広がったとき、ラーナルクはしばし目を奪われた。

町中に水路が張り巡らされ、水の匂いがする。近くにある大きな湖とつながっているらしく、淀んだ臭気は感じられない。西日が水面に映えて、綺麗だと思った。水が身近で火事をあまり恐れていないせいか、石壁や地面を除けば、町全体に木造の施設や設備が多い。それが夕焼けを優しく受け止めているようで、ラーナルクはこの景色が好きになった。

尤も、そこにラーナルク個人の嫌悪と鼻根が無いとは言い難い。新しい土地へと辿り着いたのだという高揚感と共に、ラーナルクにとつてあまり良い思い出の無いホワイトランを下げ、このリフテンという新天地を上げて見てしまうのも、致し方ないことではある。

何にせよ、ラーナルクはこの町のほうが好きになれそうだと感じた。

ラーナルクは、『友の家』とやらに向かつて歩く養父の後ろに付いて行きながらも、町の様子を『興味津津』といった具合に見やる。

門から地続きの土地を上層とするならば、そちらの様子はホワイトトランと然程大きな違いは無い。物を売り買ひする者。気怠げに腰掛けで休んでいる者。普請に精を出す者等や、一心不乱に何かを作っている職人。

もつと町の奥へ行けば、蜂蜜酒醸造所や、大小の水産業者の施設があり、多くの人員が働いているそう。それに、ホワイトトラン同様タロス像が安置されているらしい。現在地から遠いせいか、リフテンに例の奇人の同類はいないせいか、タロス崇拜を呼びかける喧しい声は聞こえなかった。

その上層に対して、水路が張り巡らされた土地を下層とするならば、そちらはホワイトトランでは絶対に見られない光景が広がっていた。

下層には要所要所に棧橋が設けられており、幾らかは小舟が係留してある。そこへ、商人や職人に雇われた人夫達が、上層から階段を伝って荷物を運び入れたり、逆に運び出したりしている。水路自体を見れば、狭いながらも壁や舟と衝突しないようにか、人や物に乗せた舟がゆつたりと行き交っている。

あくまで商工業のために用いているのだろうが、水路から見える景観がもう少し良ければ観光にも使えそう。とラーナルクは思った。というより、このときのラーナルク

の心情を正確に表現するならば、「もし舟でお父さんとあそべたら、きつとすぐくたのし
いはず」だ。

ラーナルクの亡き母曰く、このスカイリムには五大都市と呼ばれる五つの大きな町が
あり、このリフテンもその一つらしい。馬車旅の道中に養父からも聞いたが、なかなか
楽しそうな町だと思った。

その反面、上層でも下層でも目に入る浮浪者については、努めて意識の外へ置くこと
にした。

ラーナルク自身、ついひと月前まで似た境遇であったことを鑑みれば、思うところが
無いではない。しかし、それは養父との付き合いが同程度であることも指す。自分は
偶々拾われたが、孤児や浮浪者へどのような考えや感情を抱いているのかわからない。
事実、ホワイトランにて養父がそれらの社会的弱者へ何か施しをするような様子は見ら
れなかった（住民が人集りを作っていたことが大ではあるだろうが）。

ラーナルクは、養父の為人が今少し把握できるまでは、この手の話題に対する自己主
張を控えるべきだと考えた。

それに、浮浪者がいるのに孤児がないのは訝しい。養父の話では孤児院なる施設が
あり、孤児を引き取っているらしい。だが、浮浪者は上層市場の隅に幾人かが、多くは
下層の陰に隠れるようにしてちらほら姿が見える。

ラーナルクに高い砦から下々を見下ろす首長の思惑などわかるはずもないが、一方にだけ温情をかける、というのもしつくり来ない。その慈悲深い施設の実情も怪しいものだ、とラーナルクは少々ひねた感想を抱いた。

町についてラーナルクが色々と思いを馳せていると、一軒の民家へ辿り着いた。おそらくここが目的地である『友の家』なのだろう。しかし、歩いているうちにすっかり日は暮れた。人を訪ねるにはやや遅い時間だが、養父が扉を叩こうとし……その前に扉が開いた。

「やあ、兄弟、お帰り。君の足音と、報告にあつたとおり子供の足音が聞こえたんでね。タムリエル随一の英雄がご帰還なさつたと、逸り出迎えてしまったわけさ」

「やあ、兄弟、ただいま。相変わらず君の勤働きには驚かされる。それはそうと、あまり煽てないでくれ。今度何かやらかしたとき、羞恥が倍增する」

養父の返しに、家主らしき男が呵々と笑い、ラーナルクと養父を家内に招き入れる。扉を潜ってみれば、夕餉のいい匂いがする。

「今日あたり帰ってくるだろうと聞いていたもんだからね。男の雑な料理で悪いが、夕餉を用意しておいた。君はまだしも、そっちの小僧には必要だろう？」

家主はどうやら気遣いのできる男らしい。養父などは「いつも助かる。心が温まる

な」などと上機嫌である。それにしても、家主の先の言はどういった意味なのか。ラーナルクは不思議に思うと同時に、少しずつ胸の中にもやもやとした面白くない気持ち悪さが芽生え、大きく育っているのを自覚した。

気の置けない会話をしつつも各々が席に付き、夕餉と相成った。ラーナルクは養父の隣である。

「さて、夕餉のあいだに報告を聞いてもいいんだがね。早速と言うべきか、君は予定外を一つ引き連れているわけだ。ついでに言えば、大筋については既に俺も叔父貴も耳にしている。明日、砦へ向けて移動することも鑑みれば、今も早い時間とは言えないわけだしね。

どうだい？ 今日はずっと飯を食ってさつきと寝て、諸々の話は明日、叔父貴を交えてからにしないかい？ 君も、どうせ報告するなら一度で済んだほうが楽だろう？」
養父は家主の提案に対し、「いいのか？」と訝しげだ。「以前、報告をおざなりにしたときには、随分と絞られた覚えがあるのだが」とも続ける。絞られた？ 同胞団を相手取って傷一つ負わなかった銀鎧たるお父さんが？ もしかして何かの冗談？

ラーナルクは養父と家主の関係を疑問を覚え、同時に、先程自覚した気持ち悪さが増すのを感じた。少々自棄食い気味に、夕餉を掻き込む。元孤児がなかなか贅沢な食事の仕方をするものだ、と自嘲に自虐まで湧き上がり、苛立ちをかえって大きくなった。

自分の「お父さん」に対して気安い態度のこの男が、どことなく気に食わないのだ。軽薄にも思える飄々とした態度が癪に障る、ということもある。

「そりゃあ基本的には良くないがね。以前の反省を生かしたからこそその万全な連絡体制なのさ。」

君があまり気にせずいてくれるから助かってはいるが、叔父貴が君の周囲に手勢を忍ばせていることは伝えよう？ だから連中からの報告で、基本的には君のそれ無しでも、事の顛末はある程度把握できるようになっている。組織が堂々と動けるなら、こういう利便性があるわけだ」

成程な、と頷きながら、養父もラーナルク同様夕餉を終えたようである。しかし、得意気にも見えた家主が「ただ……」と続ける。

「メルセルも君の動きには注意を払っている。何せ盗賊ブレックスの砦を一人で落としてしまったわけだからね。あからさまな監視は控えているが、ギルドの活動に支障が出ない程度には君の動向を調べさせ、把握している。無論、今回の一件も遠からず耳に入るだろう。」

こちらはメルセル嫌いの君にとっては面白くないかもしれないが、英雄を恐れる小市民の自己防衛、とでも思って流してくれれば、幹部の俺としては有り難いんだがね」

「君の言うとおり、そちらについてはたしかに面白くない。が、メルセル・フレイの指

示で動いている構成員にまで恨みがあるわけではないしな。君に迷惑がかかってもしも苦しい。そういうものだと思って、気にしないようにするさ」

ラーナルクは年の割にはかなり聡い子供である。しかし大人同士が会話をすれば、そのほとんどは理解できない。単語を少し拾って、邪魔にならないよう自分の中で思考を回すだけだ。

養父からは「気になることがあれば何でも聞け」と言われているが、二人きりならともかく、他人を交えてもそれが適用されるのか、ラーナルクにはまだわからない。それに長年染み付いた、大人の男に対して口を開けば手を上げられる、という経験則から、自然と口を開く気にはなれなかった。

気が付けば、養父も家主も夕餉を終えている。それなのに会話は続く。ラーナルクは面白くなかった。そこで一芝居打つことにした。

いかにも会話の邪魔にならないよう気を使っているふうに、顔を背けてあくびをし、脛を鈍くしながら養父へもたれ掛かったのだ。

これには、友人らしき家主と会話をしていた養父も「今日はお開きだな」と苦笑し、ラーナルクの頭を撫でてくれている。このまま甘えていれば、多分寝台まで運んでくれるはずだ。

ラーナルクは抱き上げられながら、『勝った』と思った。何に勝利したのかは全くの不

明だが。とにかく、この小さな策士は満足感に浸っていた。その勝利の余韻を味わおうと、怪しまれないよう後ろを振り返り家主を覗き見ると……。

養父の背中に向けて、正確にはその陰から視線を送る自分に対し、小馬鹿にしたような笑みを浮かべて鼻を鳴らす家主がいた。

ラーナルクが抱いた気持ち悪さ……養父を取られまいとする嫉妬も、そのために小細工を弄したことも、家主にはお見通しだったのだ。家主はラーナルクのことを、つまらないものだ、興味も湧かない、と言わんばかりに視線を外すのも早かった。既に食器を片付けに背を向けている。

ラーナルクの甘美なる勝利の喜びは崩れ去った。代わりに訪れたのは、強烈な敗北感と家主に対する嫌悪感と、一層強くなった敵愾心だ。負けてなるものかと、ラーナルクの幼心に火が付いた。

……言わずもがな、こんなことは些事であるのだが、しかし幼子ラーナルクにとって養父は、やっと思つた庇護者である。どれだけ些末な情動と言われようが、本人にとっては重大事である。「お父さんはぜつたいにわたさない」と心に誓うラーナルクであつた。

ちなみに、それだけ執着されている養父は、それらのやり取りに全く気付く素振りも無く、腕の中の養子を一刻も早く快適な寝台で寝かせてやろうとそれだけを考えてい

る。自らに降りかかる敵意や悪意には異常なほど敏感な男ではあるが、耳目に触れない好意を察しきれぬほど鋭くはないようだ。

寝台に寝かされたラーナルクは養父に添い寝を強請った。そしていつもどおり二人で一つの毛布を被ると、顔を見られないように養父の胸元へ顔を埋めた。甘えているのだと思ってくれればいい。今は、あの家主に対する怨悔の念を悟られたくない。だから顔を隠すのだ。

それに、養父の不思議なぬくもりを直に感じていると、不思議と心が安らぐのだ。

凍える暗闇にたった一つ浮かんだ篝火のような、心身に安堵を齎す穏やかな熱。今の「むしゃくしゃした気分」を紛らわすのには、養父の腕の中が絶好の場所であった。

ラーナルクはホワイトランからの旅を経て、すっかりこの定位置がお気に入りになってしまっていた。

一夜明けて養父と家主が仕度を整え、いざ扉を開き出立しようという段になって、養父がラーナルクに尋ねた。

「坊主、昨晩は夕餉を馳走になり寝床まで貸してもらったわけだが、それについての礼は言ったのか？ その有難みがわからんお前でもないだろう。どうなのだ？」

お父さんは正しいことを言っている。ラーナルクは幼くともそれをきちんと理解し

た。だからこそ、なんと酷なことを言うのだろうかとも思った。不意打ち気味にかけられた言葉だっただけに、昨晚のように取り繕うこともできない。絶望の表情が浮かんでいる。それに付け加えれば、視界の端では家主が笑いを堪えている。それをラーナルクは忌々しく思い、睨みつける。

しかし「お父さん」の言うことに逆らうことも無視することもできない。理不尽でもなく、自分に道理を教えるための言なのだ。だが、でも。

ラーナルクの踏ん切りがつかないと、家主は軽く溜息をつき、これ見よがしに組んだ腕を指でとんとんと叩き、如何にも「礼の言葉を待っている」と態度で示す。ラーナルクの腹立ちが加速度的に増していくが、それにかまけていては養父から叱責が飛ぶかもしれない。ラーナルクは歯を食いしばり、覚悟を決めた。

「……………昨日は、おいしいごはんとねどこをいただき、助かりました。……………ありがとう、ごさい、ます」

「……………すまんな友よ。この坊主、頭の出来は悪くないようなのだがな。如何せん口が重い子供なのだ。許してやってくれ」

「いやいや、何を水臭いことを兄弟。ちゃんとお礼も言える賢い小僧じゃないか。俺が気にすることなんて何一つだつてありはしないさ」

家主は養父へ友好的な態度を取りつつ、ラーナルクへ僅かに視線を向けたときには、

その目に嘲りの色を浮かべている。なんたる悪辣。ラーナルクの胸中に、昨晚の怨悔が蘇ってきた。

……繰り返すが、些事である。そしてあえてどちらが悪いか、という話をするのなら、圧倒的にブリニョルフが悪い。幼子を相手に張り合つてどうするのか。然程気にもしていないくせに、殊更煽り、幼子で遊んでどうするのか。大人気ない、の一言に尽きる。

そしてこれも繰り返しになるが、養父たる男はそれら二人のあいだで交わされたやり取りに、全く気付いていない。戦闘や、明確な目的意識が絡まなければ、恐ろしいほどの呑気さを発揮する唐変木である。

リフテンを出て砦へ移動しているあいだも、ラーナルクにとっては不愉快な時間だった。

何せ、馬車旅のときは常に隣にいてくれた養父は、馬と全く遜色ない速さで駆け、肝心の馬には自分と、その後ろに憎き家主が跨っているのだ。馬の揺れに酔うことは無かったが、延々と下から突き上げられる衝撃に耐え続けるのは、とても愉快とは言えない。

い時間だった。

唯一の救いとしては、駆ける養父と家主がずっと会話をしていることだった。

家主が「実際、どのあたりに見張りが潜んでいると見当をつけたんだい？」と水を向ければ、養父は林の木々や丘陵、岩陰などを指し、家主に説明する。それを受けて、家主も「成程……」と考え込んでいる。

後で養父に聞いた話だが、この時の家主は、自らの隠密の業を高めるため、超一流の戦士が予測を何処に立てるのか、確かめていたのだとか。

尤も、この時のラーナルクはといえば、ひたすらに気に食わない家主が後ろから話しかけて来やしないかと身構えていたため、このときばかりは養父との会話に興じていたことに、胸を撫で下ろした。

そうしているうちに、目的の砦とやらに着いた。ラーナルクは養父から事前に聞いてはいたが、見事に人相の悪い者ばかりだ。それに、養父を「旦那」と呼びながらも、何処かきこちなさを感じる。家主と違って敬う姿勢は評価するが、この芯から受け入れられているのか微妙な反応はなんだろうか。

ラーナルクは砦の盗賊達について、少し警戒心を高めた。

……それもすぐに消えて無くなるのだが。

砦についてすぐ、一行は頭目の執務室へと案内された。

養父曰く、この砦の頭目はもう一人の友であるらしい。家主がアレだったのだ。正直、「友」と言われるだけで少々不安になる。

案内された扉を養父が叩くと、随分と愛想のいい男が「お待ちしておりました」と人好きのする笑みを浮かべながら扉を開く。男はそのまま、頭目の座す室内へと一行を誘った。ラーナルクと目が合ったときも、につこりと笑ってみせる。

しかしラーナルクは、この男の目の奥に、得体の知れない何かを感じた。何かは『何か』だ。強いて言うならば『妙なもの』としか表現できない漠然とした話だ。そして思う。「この人は、ひようじょうも声色もかえずに人をころせそうだ」と。現に今も、笑顔でこそいるものの、本当に機嫌が良く、自分達を歓迎しているがために笑っているのだとは思えなかった。寧ろ、仏頂面で座っている頭目らしき男のほうが、見ていて余程安心できる。砦にいた一味の悪人面など、可愛いものだったのだ。

ラーナルクは、この砦で最も恐ろしいのは、この愛想のいい男なのではないか、と思った。

一行は男に促されて執務机の前の椅子に腰掛ける。ラーナルクは養父の膝の上だ。話し合いの準備が整ったと判断したのか、仏頂面の頭目が口を開く。

「おい、何でこうなった。俺は『同胞団に喧嘩を売ってこい』とは言った。ついでに『不

自然でなければバルグルーフにも』と。だが、『孤児を拾ってこい』とは間違っても言うてねえぞ。

いやな、先触れから聞いちやいたがよ。本当になんで手前つてヤツは、目を離れたほんの一時のあいだにガキ拾ってんだ？」

開口一番、言つてくれるものである。

ラーナルク自身、孤児であつた自分が行く先々で歓迎されるとは露ほども考えていなかった。それでも、「お父さん」の友人であれば、それなりの態度は見せてくれるのではないかと密かに期待していたのだ。それが、一人は大人気なく、一人は厄介者扱いである。当然、面白くはない。

養父も反論するのだが、ラーナルクからしても、論点が微妙にずれているのではないかと思われた。薄々感じてはいたが、自分の養父は優しくはあつても、少々変わり者かもしれない。

と、ここで、意外な援護が入る。

「いや、兄弟。僭越ながら、叔父貴が聞いているのは多分そういうことじゃあないと思うんだがね。そもそも犬や猫じゃあるまいに。そんな簡単に孤児なんて拾つて大丈夫なのかい？」

しかし援護とは言つても、それは養父へのもので自分へものではない。ラーナルク

は自身の立場が依然として危ういと感じた。

それを察知したのか、自分を抱えている養父が頭を撫でてくれる。最近のラーナルクは、この養父に撫でられると、それだけで心に安心感が広がるようになっていた。養父の手は温かく、その手つきは柔らかいのだ。生家にいた男とは違う。

ラーナルクが養父の手を堪能しているうちに、会話が幾らか進展したらしい。そして自分が「坊主」と呼ばれていることが話題に上がったあたりで、突然、頭目が立ち上がり、「手前！」と養父の頭を引っ叩いた。ラーナルクの頭にカッと血が上り、何をするかと腰を浮かしかけた。その瞬間、再び家主から助け舟が入る。まだ拳を振り上げる前とはいえ、少しバツが悪い。

「叔父貴、横から嘴を挟むのもどうかと思うが、一応兄弟の名誉のために言い訳させてくれ。」

彼はその、自分の名前にすらあまり頓着しないんだ。

ご家族を愛しているから名を捨てることこそ無いが、あまりに永いこと呼ばれることも無く過ごして来たから……。

だから多分、その孤児を軽んじていたがため、ではないと思う。……多分」

なんとも歯切れの悪い擁護だと思った。なさけないヤツめ。

しかし、たしかに言われてみれば自分は養父から坊主としか呼ばれていないし、名を

聞かれたことも無い。そして養父が自らの名を名乗ったことも無い。ホワイトランからこつち、「坊主」「お前」「お父さん」で事足りていたため、それでいいと思っていた。何せ、孤児になるまで、ラーナルクの名を呼ぶのは母親だけであり、大人の男である父親は自分を居ないものとして扱うか、声をかけても「おい」だの「こら」だのだけだ。その意識でいたため、養父が自分の名前を尋ねて来ずとも、別段気にも止めていなかった。

……これは、人間性の摩耗した不死人と被虐待児の組み合わせという結果論ではあるが、ラーナルクも養父の男も、『変わり者』という面においては、一部似たもの同士と言えた。

しかし、いやだからであろうか。ラーナルクが養父からかけられた言葉で、思考が一瞬飛んでしまったのは。

「それで、今更だがお前の名は何というのだ？　ちなみに私はノメイで、こつちの若いほうはブリニオルフ、年嵩のほうはブレックスだ」
驚愕であった。『お父さん』という存在が、母のくれた名前に興味を持つなんてことは。

そのため、つい長年の習慣が口から零れ、そして自分の迂闊さを激しく後悔した。

「……………ラーナルク。でも、お父さん……………ッ！　……………前のお父さんはあんまり呼んで

くれなかつた。お母さんがつけてくれた名前」

ああ、自分にとつての『お父さん』は「お父さん」ただ一人のはず。何故、ホワイトランで今も管を巻いているだろうあの男なんぞをそう呼んでしまったのか。これほどまでに自分は愚かしい人間であつただろうか。……そうだ、お父さんは!? 不快に思つてはいないだろうか。他の面々は?

ラーナルクの胸中を占めていたのは、恐怖であつた。自分の不用意なつた一言の呼称で、徐々に日常となりかけていた暖かな生活が消え去つてはしまわないだろうか。「お前なんぞは要らん」と放り出されないだろうか。周囲の人間が、「やはり捨てて来たほうが良いのでは?」と養父に進言しないだろうか。そうして、また夜を一人彷徨う羽目にならないだろうか。

恐ろしくて、恐ろしくて、ただ恐ろしかつた。心身を恐怖に支配された。自己保身のための謝罪すら思い浮かばない。ラーナルクは、あまりの恐怖に押しつぶされてしまひそうだった。

だがそれは、致し方ないとはいへ、悪く言えば養父への侮辱とも取れる考えだった。養父は抱えたラーナルクの頭を再び撫で、聞こえるか聞こえないかの小さな声量で「ラーナルク……」と一度呟いた。そして言う。

「良い名ではないか、ラーナルク。ご母堂には感謝を忘れるなよ。実の父親に關しては、

お前の好きにすればいい。忘れたければ忘れる。覚えていたければ覚えていろ。

ただまあ、これからここが、お前の新しい家になるのだ。帰る場所だ。それは、忘れるなよ。とても大事なことだ。いいな？」

ラーナルクは再び混乱した。今日だけでどれだけ小さな胸の内が乱れに乱れたかわからない。

母は今でも好きだ。だから「お父さん」に感謝を忘れるなど言われればそうする。

しかし、父親であつた男について、忘れるも覚えているも自由とはどういうことだろう？ 養父からすれば、ホワイトランの男など邪魔な存在ではないのか。形式的にも心情的にもきつぱり縁を切れ、とやるべきなのではないだろうか。無論、言われるまでもなく後生大事に覚えていてやる気はない。それでも、ラーナルクにはその言葉の真意がわからなかった。

そのため、産みの親に関する思考は一度棚上げし、この砦が新しい家、帰る場所だという言には頷いた。『とても大事』とまで言うのだ。本当に大切なことなのだろう。ラーナルクは頭と胸の奥底に、母への感謝と、帰る場所がある、という事実を刻み込んだ。

……実際のところ、養父の男が言うラーナルクの実父への言は、少々先の、ラーナルクが数年は成長した頃のことを考えてのものである。それ故、十にもならない幼子に理

解できるはずもない。だからこそ、ラーナルクがそのあたりにまで考えが及ぶことはない。ただでさえ繊細な問題であり、ただでさえ見詰め辛い自分の内面の問題なのだ。ラーナルクがこの問題にある程度の結論を下せるようになるまで、今暫く時を要することになる。

幾らかの時を経て、ラーナルクはすっかり砦に馴染んでいた。それには、まず、養父の友人達が総じて、第一印象よりもずっとラーナルクに優しかったことが大きい。

頭目は手も足も出さずし口も悪いが、よく観察してみれば、その言動は配下への情を持つてのことに思えた。それを汲み取ってか、多少手荒に扱われても、配下の者等は頭目を慕っている。

思い返せば、顔合わせの際に、頭目が養父を引つ叩いたことがあった。足でも小突いていた。あのときは頭に血が登ったが、頭目が声を荒げたのは、自分のためであった。強面だが、同胞団でも相手にならない強者へ食ってかかるほどには、お人好らしい。

一味の者達も、付き合ってみれば気のいい連中だった。少なくとも、誰もラーナルクへ憐れみや蔑みの視線を寄越さない。

考えてみれば、何の事情も無しに盗賊稼業に手を染める者は少数なのだ。であればこそ一味の者達は、ラーナルクの境遇にを理解はすれど同情はせず、『若過ぎる』新入り「が来た」程度に受けとめたのだ。

しかし何事にも限度がある。その『新入り』の養父は、恐怖のデイドラロード（仮）なのだ。遭遇の仕方が仕方だっただけに、「道理を守れば危険はない」などと安心することもできない。ある意味、ラーナルクは砦へ持ち込まれた新たな危険物である、と認識する者も少なくはなかった。

ラーナルクとしてはその遠巻きに恐れつつも疎んじているような視線が気に食わなかったたので、適当な者を一人捕まえて、養父と砦の一味の関係を色々聞いてみた。

すると、あの優しい「お父さん」は、あろうことか当初、砦の全員を殺し尽くしてしまうつもりでいたらしい。更に翌日、砦全体を巻き込んで大立ち回りをし、無理やり手打ちに持ち込んだのだとか。

話し終えて「わかったかよ」と吐き捨てる男に対し、我知らずラーナルクは「お父さんがごめんなさい」と口にしてた。流石にそれはナシじやない？　と思ひ、養子として、一言詫びを入れなければならぬ気がしたのだ。

ラーナルクとしては、同胞団を騙った姿を見ているだけに、可能不可能の面で納得するのは早かった。だが、よもや友と呼ぶ一味にまで同じことを、いやもつと酷いことを

していたとは思ひもしなかった。尤も、詫びを入れられた側もどんな表情で返せば良いのかわからず困惑したのだが。

そして、ラーナルクは臍氣に感じていた事実について、確信に至ることができた。「ぼくのお父さんは変わってる」と。

その『腫れ物扱い』の状況を改善させたのが、ラーナルクが岩内で最も警戒していた、あのやたら愛想のいいハンという男だった。

顔合わせが済んだ日の晩、いつものように養父と同衾しているとき、自分の抱いた彼の男の印象を訴えてみた。すると養父はカラカラと笑い、「お前は本当に聡い子だな」と頭を撫でてくれた。

しかし、撫でてもらえるのは嬉しいが、何故養父が笑っていられるのかわからない。自分を「聡い」というのなら、おそらく訴えた彼の者の印象について、大きくは間違っていないはずだ。なのにどうして？

ラーナルクが疑問に思っていると、養父が種明かしをしてくれた。曰く、彼の者は正しく頭目の信奉者である。故に、自分のために怒りを表明してくれたことについて頭目に礼を言いたい、とでも口実を作り彼の者へ接触すれば、それだけで万事丸くうまくいくだろう、と。

養父を疑うわけではないが、この時、既に養父を『変わり者』認定していたラーナルクとしては、若干の不安を抱きつつ、養父の言うとおりにしてみた。

するとどうだろう。ハンの目の中には慈愛の色が見え、「昼餉の前には頭の手も空くだろうから、そのときに手引してあげよう」と上機嫌に言うではないか。そしてラーナルクが頭目に礼を言い、「おう」とぶつきらぼうな返事を受け取った後の昼餉の席で、彼の者は言うのだ。

「どうもあたしを含めて、この小さな新入りを扱いかねているように思うんでき。でもいつまでもそれじゃあ、ちと不健全でしょう。だからまずは形から入るべきかなと。

それで、頭の正式な客人である旦那の子なら、それ相応にお呼びするべきでしょうな。『坊っちゃん』、あたりが妥当でしょうか」

ハンはラーナルクと目線を合わせながら、「如何でしょう？ ラーナルク坊っちゃん？」と微笑んだ。自分が急に良家の子息にでもなった気がしてくすぐったかったが、否やはなかったため、了承を告げるように大きく頷いた。

それからは、砦の一味全員が、自分を視界に入れると「ボン」だの「坊っちゃん」だのと挨拶をしてくれるようになった。ラーナルクは勿論ハンにも感謝の念を示すために礼を言ったが、それ以上に「お父さんの言うとおりになった！ お父さんはすごい」と嬉しくなった。

それをまた就寝前のひと時に話してみせると、養父は事も無げに言う。

「あのハンという男は、前にも言ったとおりブレックスの信奉者なのだ。俗に言えば『首ったけ』。あるいは『狂っている』といったところだな。だから頭目ブレックスを立てる物言いをしていれば、概ね危険は無いはずだ。寧ろ、此度のように協力的になつてくれることもあるだろう」

ラーナルクは養父の言を聞いて、自らの洞察と実情が線としてつながる感覚を得た。ハンという男の目に見た得体の知れなさは、頭目への執着であつたのだ。だから、頭目に敵対するものであれば何であれ排除するであろうし、頭目が認め、頭目のためになるのであれば、私心を排して尊重する。そういうことなのだろうと納得した。

したはいいが、やはり少々変わつていると思う。そしてその思いは、皆全体にも及んだ。強面のくせにお人好しな頭目。頭目に狂つた副頭目。それらに付き従うことに対し、一切の不満を抱かない配下達。恐れられ、同時に少々抜けがあるように思える養父。この皆は変なところだ。そう思うとくすくす笑いが止まらなくなつた。

そういえば、皆の一味ではないが、リフテンの家主（『ギルド』という大組織の上役らしいが、そんなふうと呼んでやるつもりはない）も、自分をからかいはしたが、憐れんだり蔑んだりはしなかつた。腹立たしいが、一人の人間として見られていたと思うと、嫌い切ることは難しかった。それを理解してしまうと、くすくす笑いは余計に酷くなつ

た。

同衾していた養父が不思議そうに見てくるが、「何でもない」と言っていていつものように養父の胸元へ顔を押し付けた。温かくて、可笑しくて、賑やかな場所だ。

ラーナルクは、盗賊の砦が好きになった。

翌朝から、ラーナルクは砦の様々な場所へ顔を出すようになった。

まずは調理場。床に伏せる母に代わり料理をしていたラーナルクであるから、調理場の手伝いくらいは可能だ。炊事当番は「飯の仕度を手伝おうたあ殊勝なこつたな、ボン。ほれ」と快く迎え入れてくれ、ラーナルクに摘み食いを許してくれた。誰かと一緒に食べる食事でも美味しいが、誰かと一緒に作るのも楽しいと思つた。

練兵場にも顔を出した。そも自分は銀鎧の強さに憧れてホワイトランを出たのだ。まずは強くならなくては。そう思い練兵場にいた面々に「お父さんみたいにつよくなりたい！」と訴えてみた。

肝心の「お父さん」は錬金術の修行に明け暮れており、とてもではないが我儘を言える状況ではない。そのためだ。なお、言語化して理解しているわけではないが、幼子の正直な告白は、時に大人の庇護欲を刺激する、と認識しているラーナルクである。幾らかの打算もあった。

しかし反応は芳しくない。数拍の静寂を置いた後、「て、手解きくらいはしてやってもいいぜ」と一味の男達が請け負ってくれた。だが賢いラーナルクには、その静寂の裏で響いていた男達の「いや、それは無理なのでは？」という心の声が聞こえていた。当然面白くはないが、致し方ない。自分はまだ何者でもないのだ。まずは一つ一つ着実に、だ。

また、数日に一度ではあるが、養父はラーナルクを砦の外に連れ出し、錬金術材料の収集に付き合わせた。

その際、この薬草にはこれこれのような効能がある。この茸にはこれこれのような毒がある、と説明してくれる。錬金術の修行、というよりは、万一ラーナルクが自分とはぐれ、数日を一人で耐えなければならぬときでも困らないように、と食料になる野草を作業の傍らに教えていたのだ。

ホワイトランでは食糧事情で散々な目にあつた元孤児だけに、ラーナルクは養父の心遣いが嬉しかった。とは言え、そのようなことが無ければ一番いいのだが。

更に素晴らしい点は、運が良ければ養父の狩りに付き合えることだ。

不本意ながら、大好きな「お父さん」に『変わり者』の烙印を押さざるを得なかったラーナルクではあるが、狩りのときの「お父さん」は別格だ。銀鎧とはまた別の、戦士の顔を見せてくれる。

呼吸を整え、姿勢を整え、弓を構え矢を番えながら、空いた指には何本もの矢を追加で持っている。そして、ゆっくり大きく息を吸い、少しでも吐き出し、止め、痛いほどの緊迫感と静寂が訪れ……一発必中とばかりに射止める。

相手が大空を行く猛禽だろうが、鹿の群れだろうが、狩猟依頼の出される熊や狼だろうが、考慮に値しない。

獲物が複数いる場合は、追加の矢を連射する。一頭目を仕留めて、異変に気付いた獲物が逃げを打とうとしても、もう遅い。養父はその進路を変えるための減速を見逃さず、射抜く。まだ獲物がいれば、その場から離れたい被食者の心理を読み、その進路へ置いておくように矢を放ち、当てる。

ラーナルクはこの狩りを見るのが、養父の腕の中で眠ることの次に好きだった。「お父さんのすごいところ」が見たいのだ。

今の自分は短弓すら引けない非力な身ではあるが、常に養父の動きや視線を意識して、自分の身体で真似てみる。ラーナルクは誰に言われずとも、精度の高い見取り稽古を常に行っていた。

更に更に素晴らしい点は、その後のお楽しみにある。

獲物を仕留めた養父は直ぐに血抜きや川での冷却を行い、解体して、肉や皮を砦へ運ぶ。しかし内蔵は傷みやすいので、その多くを捨てざるを得ない。だが、直ぐに火を通

せば十分可食に耐え得る臓器もある。肝臓や心臓などだ。それらをよく洗い、塩で揉み、適当な石を探して養父の魔法で高温に熱し、平鍋代わりにして焼く。追加の塩を振って暫く、あたりに堪らない匂いが漂い十分に火が通ったら、思う存分に食べる。こればかりは、狩りの現場に居合わせなければ味わえない。

岩の食事も腹を満たすには十分ではあるのだが、裕福な者でもなければ、動物の肉を頻繁に食すことは難しい。特に、岩には男盛りの面々がひしめいている。自然と肉やチーズは取り合いになる。しかしラーナルクは、養父に付いていくだけでその恩恵に預かれた。これは非常に大きな楽しみだった。

ちなみに、普通は食さない内蔵などの不要部位は、穴を掘って埋めるそうだ。しかし、養父は雑にあたりへ撒く。理由を尋ねると、「これを食いに捕食者である猛獣が寄ってくるなり、縄張りとしてうろつくことになる。どうせ探して狩らねばならんものだから、連中のほうから足を運んでくれるのならば、手間が省けるといふもの」だそうなの。

養父はこのとき間違いない、このリフト地方の食物連鎖の頂点にいる、とラーナルクは思った。……その評価が文明人として如何なものか、という話にまでは、意識が及ばなかった。

しかし、これはこれで肉食獣の分布が乱れ、街道を行く旅人などに被害が出かねない。町の外に出て間がないラーナルクの考えがそこまで及ばないのは致し方なくとも、養父

である男は、それを承知で行っている。

それが正しいと思うでもなく、被害を誘発させたいわけでもない。確信犯でも故意犯でも無く、ただ、見知らぬ者達が遭うかもしれない凄惨な被害に興味が無いのだ。

強いて言うならば、愛息との時間を有意義に使うために、獲物を探すなどの面倒が少し減ればいい、というものだ。それを糾弾する者は、残念ながらこの場にはいない。

ラーナルクは美味しい肉が食べられて、まさに『ご満悦』といった具合だが、しかし、養父は狩りが成功すると、少々複雑な顔を浮かべる。

何でも、可食部は皆へ持ち帰るが、錬金術材料にならない毛皮や装飾品に使える牙などは、町で売られ、錬金術修行のために使われるのだとか。既に殺人的な修行をこなしている養父を知っているだけに、ラーナルクは何とも言えなくなる。

だが、これでもマシになったのだ。始めのうちは、比喻でも何でも無く、日が昇ってから再び日が昇るまで、ひと時の休みもなく修行に明け暮れていた。それも連日。つまり、本当に欠片の休息すら無く、だ（このあたりで、ラーナルクは養父が普通の人間ではないことを知らされた。事情を正確に把握しているわけではないが、「お父さんはすごいんだから、少しくらい変わったところがあつてもいい」とかなりの鼻屑目で以て納得している）。

日に日に虚ろになっていく養父の目を見て、本能的に「これはぜったいに不味い」と思い、ラーナルクは修行の時間を短縮するよう頭目に抗議した。正確には、本物の悪人が自然と身に纏う空気に当てられて『泣きついた』というのが実情だが。とにかく、頭目や不気味な副頭目が何と言おうともこれだけは絶対に通してやる、と覚悟を決めて挑んだ。

とはいえ、その主張はあつさり通った。どうやら頭目も、修行の内容を省みるべきではないかと考えていたらしい。おかげで、ラーナルクが起きて朝餉を済ますまでと、ラーナルクが床に就く頃には、養父を解放してもらえるようになった。ラーナルクは、自分が養父のために働けたことが、この上なく誇らしかった。同時に、あんなに強く逞しかった「お父さん」が廃人寸前になるような目に遭ったことが、不安で、恐ろしく、何より悲しかった。養父も頭目も口を揃えて「必要なことだ」と言うものだから、ラーナルクはそれ以上の口出しを封じられてしまったが。

……また、これはラーナルクの預かり知らぬことではあるが、頭目ブレックスの中では、修行時間の短縮は既定路線であった。

いくら不死人が生命活動に休息を必要としないとはいえ、人間である以上限度はあるはずだと理解していた。だが、あえて殺人的な予定を組み、教導役には皆の中でも鍊金術に長け、且つ男に比較的強い隔意を抱く者を選んだ。

男の砦襲撃からすぐ、食堂で手打ちの宣言をした。それで配下の暴走を抑えることはできた。男とブレックスが（半ば強制的に）友人となったため、大部分は矛を取めた。しかし、それでも腹の虫が収まらない者はいる。だからブレックスは、あえてそれらの者を選んだ。

一つには教導役に甘い顔をされては、何のための修行かわからない、ということもあつた。だが一番の理由は、その隔意を可能な限り拭つてしまいたかつたからだ。

襲撃を受けて不意打ちで眠らされ、真正面から突破され、慕つている頭目は虚仮にされた。許せないのはわかる。しかし、自分達と似たような恵まれない境遇の子供が、泣きながら「お父さんをいじめないで」と訴えてくれば、大人気ない蟠りも、バツの悪さと共に幾らかは消える。

あとは、生徒である男がいつぱしになるまで厳しくしごいてやれば、その頃には仲間意識も芽生え、呑める程度の不満に治まっているだろう、と考えたのだ。

孤児であつたラーナルクも幼いながらに大変だろうが、傍若無人を地で行くデイドラロード（仮）に目をつけられた一味の頭目も、様々なところへ目を光らせなければならず、また大変なのだ。

閑話、ラーナルクの憂鬱（丙）

ラーナルクがウインドヘルムに着いた翌朝、衛兵の男に追い立てられるようにして町を出る羽目になり、更にはトルドスなる子供を紹介され、暫く行動を共にすることとなった。後にラーナルクの最も気の置けない友となるのだが、このときのラーナルクの印象としては、あまり良いとは言えないものであった。

それは、リフトの砦から当時まで続く、ラーナルクの複雑に混じり合った胸中に由来するものと、本人も幾らかは自覚していた。

ラーナルクが砦の暮らしに慣れてきた頃、養父から、旅に出ることを告げられた。元々養父は、ラーナルクと会う以前より、リフトからずっと北にあるウインタールドを目的地と定めていたらしい。つまりこの旅路は予定されていたことなのだが、やつと自分にも『帰る場所』ができたと感じていた幼子にとっては、衝撃的な通達であった。

いや、思い返せばいくら事情があるにせよ、養父の錬金術修行は常軌を逸していた。それだけの無茶を「必要なこと」として呑まなければならぬ理由があったのだと、気付かないラーナルクでもなかったはず。それがどういうわけか、この砦に来てから、正確には養父と会ってから、客観的且つ論理的思考へ及ばないことが増えているように思う。一度それを床の中で養父に零したことがある。すると養父は、「お前にとつてのホワイトランでの一冬は、生きるための戦いであつたのだろう。人は生き死にの戦いの場においては、身体や思考能力の向上を見せることもある。『冬を生き抜く』という一点に焦点を当て、知らぬ内にそのような防衛反応を見せていても不思議ではない」と、そのように答えた。

また、「そうでなくとも、お前の地頭はなかなかの物だ。このまま精進するといい」とも続けて褒めてくれた。ラーナルク自身、自惚れではなく、漠然とだが自分は知恵の回る性質なのだろう、と気付いてはいた。

砦の盗賊達に師事して戦闘や盗賊の業について手解きを受けたが、「飲み込みが早い」とは誰からも言われた。これはラーナルクがまず手本を見せられる際に、その動きをよく観察し、高い精度で模倣できる器用さを備えていたことも理由ではある。しかし一番は、その動きの意味を自分なりに考察し、自分なりの答えを出してから実践に及んでいたことが大きい。見^{けん}だけでその意味まで辿り着けなかつたとしても、実践を繰り返すつ

つ考察を重ね、遅かれ早かれその合理性を理解することができた。そのため、小さな体にまだ早いと判断すれば、自分にあつた動きに修正することもできた。

元々の外界の情報を考察することには慣れていた。ここで言う外界とは、一個人の感じる世界、という意味ではなく、頭脳以外の全て、を指す。つまり己の肉体から齎される情報をも、客観的に判断することが出来ていた。それらの要素が重なり、この『一を聞いて十を知る』を地で行く聡明さを見せた。これこそが、ラーナルクの最も特異な武器であつた。

余談ではあるが、一味の者達はラーナルクへ「飲み込みが早い」と伝えたが、本音を言えば「飲み込みが異常に早い」だつた。自分達が長い時間をかけて磨いた業を、恐ろしい速度で習得していく。若干思うところがないでもなかつたが、『旦那』のような特異な人物に拾われる子供というのは、これまた特異な資質を備えているものなのか、と幾分か得心が行つたのも確かだ。このようなことがあつたため、一味の者達はラーナルクを「坊っちゃん」と呼び、仲間として扱うことへの抵抗がかなり薄くなつていた。

このまま英才教育を施し長じれば、どんな腕利きになるのか、見てみたい。自分達の手で育ててみたい。そう考える者も少なく無かつた。

閑話休題。どのように賢い子供であろうとも、養父自ら「大事なこと」とまで口にし『帰る場所』から自分を引き離すのはどうしたことなのだろうか、と不満はある。ラー

ナルクは理屈ではなく感情面で折り合いがつかず、結果、突発的に発熱を起こした。

養父や一味の者達は、徐々に冷える季節に移ろうとしていることと、皆に慣れたことで気が緩んだのではないか。それ故のことではないか。そのように話しているようだった。しかし実情としては、『帰る場所』から離れたくないラーナルクの葛藤が無意識的に起こした、養父への抗議でもあった。

しかしそれはそれとして、養父に看病してもらえるのは嬉しいものだった。ホワイトランでは、自分は看病をする側であり、体調を崩すことはほとんど無かった。そのため、発熱自体に慣れておらず、少々気弱になるだけでなく、幾らか怯えもした。養父はそんなラーナルクの面倒を甲斐甲斐しく見てやり、熊の胆を用いた薬まで作ってくれた。

養父が寝台を毛皮だらけにして蒸すほどの寝床を作ったり、丁寧に濾こされた汁物を持つてきてくれる度、『自分を心配して手を尽くしてくれるお父さん』と『お父さんに大事にされている自分』という両面から、経験の無い多幸福感に包まれた。それにより、養父へ抱いていた無意識下の反発心も、すっかり鳴りを潜めた。

「お父さん」に優しくしてもらえるのは、こんなにも温かい気持ちになるのだ、とラーナルクは新しい発見に機嫌を良くした。孤児であった時分には、体調不良は死につながると厳に戒めていたが、これなら、今なら、時々熱を出すのもいいかもしれない。ラーナルクは子供らしい現金さで、看病されるあいだにそんな益対もないことを考えてい

た。

体調が回復した頃、旅の出発を延期する旨が伝えられた。

今更ながらに責任を感じ萎縮しかけたラーナルクではあるが、延期の一番の理由は別件であるから心配するな、と微笑みながら頭を撫でる養父を見て、幾らかの安堵を得た。たしかに養父は、というか砦全体が、ここ最近忙しい様子ではある。養父の言の全てが、子供に心労をかけないための方便、というわけでもなさそうで、それについてもほつと息を付いた。

と、同時に、養父や一味の者達が度々口にする「計画」とやらを先送りにするほどの『何か』があったということ。錬金術の修行は区切りを見たようだが、「お父さん」がまた多忙のあまり虚ろな目にならないか心配になった。

ラーナルクが「大丈夫なの？」と養父に聞くと、「今回大変なのは彼奴等のほうだ」とからから笑っていた。ラーナルクは一安心すると共に、忙しない一味の者達を面白がつて見ている養父の目に、若干の意趣返しの色が見えた気がした。「お父さん」はやつぱりちよつと大人気ない。

自分のせいで「計画」に支障が出た、という自責の念から開放されたラーナルクに対し、養父は体力作りと、武芸の稽古を付けてくれるという。

体力があれば体調を崩しにくくはなるし、旅をするのに虚弱では話にならない。それに、ラーナルクはそも『強くなりた』がために銀鎧たる「お父さん」に付いて来たのだ。稽古を付けてくれるというなら否やはない、どころか喜びのあまり養父の周りを跳び回り、気が済めば練兵場へ養父を引っ張っていった。

とはいえ、まだ身体の出来上がっていない幼子である。できることは限られ、教えられる内容もある程度、一味の者達と似通う。

それでも、使い手が違えば、癖もある。一連の動きの中で重視する場所も違う。ラーナルクはそれまでに受けた手解きと同様に養父の動きをつぶさに観察し、考察し、己の血肉としていった。その中でも、投石紐を用いた投石は比較的早期に形となったため、今後を通じてラーナルクの得意な攻撃手段となった。

また、養父はラーナルクに走り込みの重要性を解いた。ラーナルクの最終目標は『銀鎧』である。しかし、走っているだけであの高みに届く様子がいまち想像できない。すると養父は、己の体験談を語ってくれた。曰く、牛よりもずっと大きい、猫と鼬を掛け合わせたような化け物から逃げる際、全速力且つ長距離を走り通さなければならなかった。獣道すらない森の中で、走るには最悪に近い状況であったが、少しでも遅れればそのまま死んでいたはずだ、と。

そのほかに、得物が短剣であろうが長柄であろうが、足腰と体幹が弱ければ、素早

く動くことも、得物の威力を十全に發揮することも難しい、と。養父は肉体を強化した後、各種武器を扱う術を繰り返し練習したと言う。

理屈を理解したのなら、いつまでも文句を言うラーナルクではない。「お父さんもやっていったんだ」と浮き立つ心のままに、練兵場を走り回った。

何にせよ、「お父さん」が指導してくれるという事実が、このときのラーナルクにとって、最も嬉しかった。

砦の者達も、忙しくなった稼業の気分転換にか、ラーナルクに盗賊の業を手解きしてくれた。ここでは目で見て覚える、ということが難しかったが、鍵開けなどは反復練習を重ねることで、簡単な物なら明けられるようになっていた。仕込んだ当人達が、呆れるやら称賛するやら閉口するやら。いづれにせよ、ラーナルクの飲み込みの早さについては、一味全員がある程度織り込み済み、という具合になった。

また、手解きの最中、手を止めずに『盗賊の心得』とやらも説いて聞かされた。

曰く、ヤバくなったらとんずらこけ。

曰く、飯や酒の不味くなることはすんな。であった。

前者は、生きてさえいれば目的を達成する機会は訪れるのだから、命を軽々に投げ出すことをしてはいけない、という意味である。後者は、己の心に従いつつも、最後の一线は守れ、という意味である。

前者はギルドのみならず、盗賊であれば誰でも弁えていることだ。後者は、一味の者達に対するブレックスの教えだ。易きに流れた結果、ドツボに嵌つて抜け出せなくなつた者を何人も見てきた男が、せめて子飼いの者達にはそのような思いをしてほしくないと考え、矜持は曲げるな、と説いたのだ。

前者はまだしも、後者はラーナルクが理解するにはまだ早かつた。ラーナルクにとつても最も不味い、ないしは味がしないと感じた食事は、孤児時代の到底食事とは言えない獲物を物陰で食べていたときか、数少ないホワイトランの父親との食事だ。それよりもご飯がおいしくなくなることなんてあるの？ ただ生きることには必死だつた幼子にとつて、矜持だの意地だのという話は、いまいち想像できなかつたのだ。

そうして、あれやこれやと大人が手を尽くしたところで、いや、寧ろ大人達が世話を焼くからこそ、幼子の心情ばかりは如何ともし難い。いよいよ出立が近づいて来た頃、砦を『第二の故郷』とも言えるようになったラーナルクは、つい養父に泣きついてしまった。寂しい、と。

廊下を歩けば、誰かとすれ違い、挨拶してもらえた。食堂に行けば、広く取られた空間のおかげで、一味の顔が一度にほとんど見られた。練兵場に行けば、多少の傷は拵こしらえても、大事にされていることは十分に伝わった。

何より、養父と自分の部屋では、毎日様々な話をした。今日はどんなことをしたの？ 今日怖い教導役に見張られながら錬金術の修行だった。ラーナルクは何をしていた？ 今日は何……。

ラーナルクにとって、この部屋は、ただ寝るだけの部屋ではない。自分と養父のかけがえのない『親子の時間』を育んだ場所なのだ。

ラーナルクも理屈は理解している。家長の言うことには従うべきだ。そして、自分と「お父さん」の二人家族とはいえ、家長は養父であり、自分は従うべき立場にある。それでも、寂しいものは寂しい。折角できた数少ない大切な物を手放すのは、あまりに惜しかった。

養父は泣き止まないラーナルクに対し、怒るでも叱るでもなく、語りかけた。

「お前は、ホワイトランでご母堂と過ごした時間を覚えているか？」

何を言われたのか、ラーナルクは腑に落ちなかった。言葉の意味はわかる。そして、自分が母を忘れるわけもない。理解できなかったのは、何故そんなことを聞かれたのか、だ。ラーナルクが頭に浮かんだそれらをそのまま伝え、「同じことだ」と返された。

「余程の名家や、いわゆる中流と呼ばれる家の跡継ぎでもなければ、大概は遅かれ早かれ生家を出るときが来る。生まれ育った家で暮らし続けられる者は、案外少ない。そして

お前は……まあ、生家を出たのがかなり早い部類ではあるが、ホワイトランを発つた。今は、この砦を発とうとしている。しかし、ホワイトランの生家同様、この砦で過ごしたことを忘れない。それでいいのだ。ここを故郷とさえ思っていれば、何処にいてもお前は独りにはならない。帰る場所がある。それが大事だ」

正直なところ、ラーナルクの胸中でホワイトランが故郷であるという意識は薄い。印象に残っているのは、母と共に過ごした、少々陰鬱な空気を漂わせた生家の内装。それに、孤児として過ごした寒々しい町の景観だ。

だからこそ、この砦こそが本当の意味で心安らぐ故郷と認識している節もあるのだが……。本当に、これから何処へ行こうとも、自分が砦を忘れない限り、大丈夫なのだろうか。永い時を生きたという養父にはわかることであつても、自分にはまだ理解できない。

それが情けないのか、不安なのか、寂しいのか、自分でも把握しきれない感情が縋い交ぜになって、呻き声と共に再び涙が溢れてきた。

養父は言つて聞かせればそれで解決すると思つていたので、泣き止まない自分を前におろおろしている。「砦の者等も、交代で旅に付き添うぞ」などと口にはしているが、あまり効果は無い。今、この時に限つて、自分は同胞団より養父の手を焼かせているのでは？ と謎の優越感を覚えもした。感情が昂ぶつた際の逃避は、ラーナルクの悪癖だ。

余程まいったのか、養父はサーベルキャットとユキグマの毛皮を用いて作った、寝間着を取り出した。着ぐるみとでも言うのか、言われるままに着てみればすつぽりと身体が収まり、サーベルキャットの仮装とも言える様子になった。養父のほうは、幾らかの縫い目が見える。一頭分の毛皮では、特に四肢の丈が足らなかつたのであろう。

ラーナルクは意外な品を見て考えた。養父は基本的に、自分をあまり子供扱いしない。身体が小さいがための不可能には線引をするが、理屈や道理の面では、真正面から目を見て話す。言つて聞かせれば、ラーナルクなら理解できる、と考えているためだ。

その養父が、弱り果ててご機嫌取りに走つた。これは、養父が先の言葉以上の言を持ち合わせていないか、それを理解できない自分に経験が足りないか、情動を抑えられないでいるかなのだらう。つまり、自分のやるべきことは、言われた言葉を反芻して、それを理解できるようになることだ。そして今それができるだけの何か、が足りないというのなら、一度棚上げするしかない。ラーナルクはそうのように考え、問題を先送りした。幼子らしからぬ思考を回した結果か、涙は治まつていた。

気分を切り換えたラーナルクは、養父のくれた温かい寝間着を堪能することにした。「お父さん」とのお揃いである。嬉しくないはずがない。自分だけでなく養父にも着るようせがみ、どうせならとそのまま猛獣ごっこをしてじやれついた。養父は泣かせた負

い目からか、ラーナルクが疲れて臉が重くなるまで、ずつと付き合ってくれた。

今は納得できないこともある。それでも、「お父さん」は自分を大事にしてくれている。それだけは確かだ。なら、暫くはこのままでもいいのかもしれない。「お父さん」なら、自分に悪いようにはしないだろう、と。

ホワイトランの馬車旅からこつち、不完全ながらも『親』を務めようとした男の努力は、無条件の信頼という形で、実を結んでいた。

ちなみにだが、出立の際、同行者とは別に見送りに着ていた『家主』へ、サーベルキャットの着ぐるみを自慢してみた。年相応の稚気を以て、養父からの愛情と品を自慢したのだが、家主の反応は悔しがるでもなく若干意外なものであった。

「彼と揃いか。……その二着を拵えるのに、並の戦士なら少なくとも三人は死んでいるだろう。『分を弁えろ』だのなんだのって話は彼の望みではないだろうから控えるが。小僧、お前さんは彼の庇護下にあり彼の愛情を一身に受けている幸運を、正しく自覚しなくてははいけないよ」

言われなくとも、という反発心が浮かんだが、この皮肉屋が真面目な顔で言うのだ。傍から見ると、自分は養父の愛を自覚していないのだろうか。そも、愛とはなんだろうか。母や養父がくれる温かなものではないのだろうか。その他にも何かあるのだろうか。

わからない。しかしこの皮肉屋は、大人気なく自分をからかいはしても、悪意のある言動を見せることは無かった。ということは、これも自分が理解できていない何かなのか？ 考えなければならぬ課題が増えた、と思った。

しかしあまりに『わからないまま』の様子を見せているのも癪だったので、力強く頷いてみせた。家主は、ラーナルクの胸中を察しているのか馬鹿にしたように嘲りの笑みを浮かべている。ラーナルクは、やっぱりこの男は嫌いだと思った。

砦を出立してからの道中では、様々なことがあった。

何処に言っても養父は錬金術師として引く手数多であり、多くの人々から感謝されていた。ラーナルクはホワイトランから数えても、養父の、「お父さん」の凄いところは戦闘に関するものしか目にしていなかった。そのため、こうした文化的職能において他者に一目置かれる姿というのは新鮮で、驚きと共に鼻が高い思いを抱いた。「お父さん」のすごいところ、をまた一つ知れて、息子としては嬉しい限りである。

更には、短期的な逗留先である村々では養父が気を利かせて、自分に同年代の遊び相手を用意してくれた。ホワイトランでは多くの時間を母の看病か一人で過ごし、砦に来たからは大人達に囲まれていた。同年代の子供と共に過ごすことは新鮮であり、また養

父の氣遣いが嬉しくもあり、遊ぶこと自体はそれなりに楽しかった。

しかしそれも、新鮮とはいえ楽しいのはそれなり程度であり、それすらも始めのうちだけだった。どうも、子供達の言動が幼稚で馬鹿なものに思えて仕方無いのだ。

家業の手伝いを強要する親への反発。簡単な理屈も理解できない頭。酒に酔った浮浪者でもなかるうに、くだらないことでゲラゲラ笑う感性。どれも受け入れ難いものだった。家業の手伝いくらいで家に居られるなら、安いものだろうに。何故こんな簡単なことがわからない？ 犬の糞の何がそんなに可笑しいのか。

養父は砦での修行ほどではないが、それなりに忙しそうにしていたため、お付きの盜賊達にそれを話してみた。子供と遊ぶのは飽きた、そこまで楽しくなかった、と。盜賊達は顔を見合わせ、ある意味、生まれの不幸だと思つた。幼くして孤児となつても生き抜くだけの頭脳と精神力を持ち、ここ暫くはずつと大人に囲まれて暮らしていた。子供らしさを封じなければ死んでいたラーナルクにとって、同年代の子供とは対等な存在ではなく、しかしそれを許容できるほどに大人にも成り切れてはいないのだ。

とはいえ、『旦那』が決めた子育ての方針である。付き人であり、自分達も幾らかの面倒を見ているとはいえ、ラーナルクが子供と遊ぶことを止めさせるのも躊躇われた。別にいじめを受けたのだという話しでもないのだ。

苦肉の策として、どうすれば楽しく遊べるか、その幼稚な連中を導く物言いを考えて

みてはどうか、と提案した。どう考えても、ラーナルクのような幼子に伝える内容ではない。しかし盗賊達は、ラーナルクの情操教育以上に、『旦那』の怒りを買うことが恐ろしかった。何せ彼の男は、さしたる理由も無く人を殺し拷問することを厭わないのだ。愛息への接し方は、傍から見れば溺愛とも言える。そんな幼子への扱い方を間違えれば、何をされるかわかったものではない。

盗賊達は自己保身から、無難な回答を導き出した。彼の『旦那』と彼等が真に打ち解けるのは、イーストマーチでの長逗留まで待たなければならなかった。

そして盗賊達が地味に戦々恐々としている横で、ラーナルクは退屈な日々を送っていた。何せ子供達には理屈が通じない。自分が楽しめるように導く、など土台無理な話だ。それでも一応の努力はしてみたが、結果は惨敗である。大人しく、子供らしい遊びに興じることとなった。ラーナルクが本当に楽しいと思えたのは、夜になり養父と共に過ごしているあいだけだった。養父の前では年相応の幼子として振る舞っているが、その矛盾には都合良く目を瞑るラーナルクであった。それこそが『子供』である証だと言えるのだが、それに気付けるほど大人びてもいなかった。

そうして幾つかの村々で退屈な時間を過ごしたラーナルクにとって、転機と呼べる出来事があった。街道で、サルモール司法高官一行と、イーストマーチ衛兵隊の争いに卷

き込まれたのだ（正確には、飛来した魔術に怒った養父が、迂回を止めて首を突っ込んでしまったのだが）（更に余談だが、ラーナルクは「お父さん」のかっこいい戦闘を見学したかったため、馬車ごと現場から引き離す付き人に不満を持った。「勘弁してくれ。俺等が旦那に殺される」という一味の者の泣き言を聞いて、渋々了承してみせたが）。

それにより養父は更なる面倒事に巻き込まれ、お付きの盗賊達も入れ代わり立ち代わり、かなり忙しく動いていた。ラーナルクにも、不安にならないように、と簡単な説明がされていた。

その後、折角到着したウインドヘルムをすぐに出立する羽目になり、そこにはトルドスなる年上だろう子供の姿もあった。養父と、少数の付き人と共に行く旅を気に入っていたラーナルクにとっては、トルドスは異物である。邪魔者である。

『故郷』とまで思う砦を後にし、寂しい思いにぐつと蓋を被せて我慢した。そこからどうにか気持ちを切り換え、多少の入れ替わりはあろうとも、養父と、二人の付き人達と共に旅をしてきた。今更この面子に新顔が割り込んでくるなど、ラーナルクは少しも望んではないのだ。それが、トルドスに対する第一印象の悪さにつながっていた。

何より、トルドスを見ると、胸に妙な澱みのようなものができるのだ。

ラーナルクからすれば、トルドスは頭の回る性質ではない。何せ、養父がアーチルなる男に対し、「お前の子供は無事に返す」と告げたのだ。であれば、余程のことがなければ

ばトルドスの身の安全は保証されたも同然だ。なのにこの子供は、いつ自分の首が落とされるかと緊張し通しなのだ。馬鹿らしいと思った。

しかし養父は、そんなトルドスを見て朗らかな笑みを浮かべながら、怖がることはない、と好意的に話しかける。それに、「戦士の教育を既に受けているのだな」とトルドスを褒めるではないか。ラーナルクは面白くなかった。

アーチルが手配した鉱山採掘村に到着した。

ここでも養父は引っぱりだこだった。やれ節々が痛む。やれ跳ねた石片でついた切り傷の治りが遅い。やれ最近呼吸がしづらい。それらの声を、養父は錬金術師として片っ端から対処していった。

更に、養父が腕利きの戦士であるとわかると、要求は日に日に遠慮が無くなっている。やれ夜に狼が出る。やれ鉱山の奥に妙な物がいないか見てほしい。やれ付き合っている村の近くに熊が出たらしい。ラーナルクは、そんなものは衛兵隊か、養父に伸ばされた同胞団にでも頼め、と思った。頼み事をこなす度に、養父は衛兵隊からそれなりの金銭を受け取ってはいたようだが、ラーナルクと過ごす親子の時間が減っていることに変わりはない。

止めに、これは時期的には今暫く先の話なのだが、ウィンドヘルムの錬金術師が養父

を尋ねて来て、膨大な量の仕事を押し付けていった。元々、盗賊達から頼まれている仕事もある。そこにこれだけの作業が加わってしまったせいで、養父は休息を取る暇も無くなってしまうた。

一応、ラーナルクが就寝するときだけは同じ床に入ってくれはする。しかしラーナルクが寝入った頃には、床を抜け出して、作業に取り掛かっている。そして日の出前には床に戻り、ラーナルクが起きるのを待つてくれているのだ。夜中に目が覚めても、養父の姿はほど近い場所に見えた。おかげで、ずっと添い寝をされていなくても、ラーナルクが寂しきや怖ろしきから泣いてしまうことは無かった。

それに、どんなに忙しくとも、自分を不安にさせないよう気遣ってくれていることが嬉しかった（とはいえこれも、件の錬金術師がウインドヘルムから押し掛けて来てからは、毎日、とはいかなくなったが）。

これは砦にいた頃、起床時に養父の姿が見えなかった際、自分が取り乱した一件が関係しているのだと思った。自分でも思ってもみなかったほど混乱と絶望感に支配されたが、「お前のせいではない」「無理に克服せずとも良い」と養父が抱きしめ、優しく背を叩きながら諭してくれたため、そういうものなのだろう、とこの発作についてはあまり深く考えないようにしているラーナルクである。致し方ないこととはいえ、この時分のラーナルクは、養父の言うことなら大概のことは「真である」として盲信的に受け入

れている。

さて。それだけ養父が忙しいとなると、暇を潰すため、盗賊達にまた鍛錬を付けてもらうか、と考えた。しかし、それは難しかった。何せ養父ほどではないにせよ、盗賊達もそれなりに忙しい様子だったからだ。どうも、頭目やギルド？ とやらの指示で、大きな仕事に取り掛かっているらしい。

であれば、おじやま虫のトルドスと過ごすしかない。採掘村はできたばかりなのか、居るのは他所から連れてこられた労働者ばかりで、手隙の子供の姿は見えなかった。……が、はつきり言って気が乗らない。

ラーナルクが村々で共に遊んだ子供達を思う。トルドスはもう少し上の年齢だろうが、自分から見て賢しいとは思えない。対して自分は、誰からも「賢い」だとか「聡い」と褒められる。その自覚もある。この子供と一緒にいたところで、何かいいことがあるだろうか。

そんな少し意地の悪い考えから、トルドスに尋ねてみた。養父や盗賊達の業を見て目の肥えた自分であれば、鼻で笑ってやれるだろう、と。

「……戦士の教育って、どんなことを教わったの？ 剣を扱えるの？ ……そうなら見せて」

トルドスとしても、どうやってこの生意気な目を向けて来る歳下の子供と打ち解ければいいのか戸惑っていただけに、申し出は渡りに船だった。

父から渡された、トルドスの身体に合わせた短い片手剣。彼の錬金術師に見せれば、「大振りの短剣？ 詰めたショートソード？」とその微妙な長さに首を傾げたかもしれない。それを引き抜き、素振りを見せる。腰の鞘を抑えながら、唐竹、薙ぎ、袈裟。素早く両手に持ち替え、逆袈裟、反動を利用するように振り返り、唐竹。中段、上段、中段と三度の突き。

突きの姿勢のまま残心を見せ、数拍後に剣を収めた。

見ていたラーナルクは驚愕の一言だ。

いくら剣が身体に合わせた短く軽い物だと言っても、挙動にぶれが無く、武器に振り回されている様子は見られなかった。必要分だけ力を込め、刃を立てて効果的であろう剣筋をなぞる。

自分も短剣術をかじっているだけに、トルドスの動きが一朝一夕で身につくものではないことを、否応なく理解させられた。小馬鹿にしていた子供に、自分ではまるで及ばない技量を見せられたことが、ラーナルクにとっては衝撃的だった。

トルドスからしても、この素振りでラーナルクからの印象を大きく変えられたのは、僥倖と言って良かった。

何せ、父から言いつけられた役割と注意事項は、なかなかの難題だったのだ。

曰く、父が務めを果たせなかった場合、約に従い、首を要求されたときは大人しく差し出すように。そのときは父もすぐに追うから、寂しくはない。

曰く、彼の錬金術師は悪人でこそ無いが、敵や害になると判断した者への容赦が全くない。それに奴等は何か企みがあるようでもある。問題を起さずとも、お前が知らずうちに奴の逆鱗に触れないとも限らない。下手に探る真似は一切せず、常に注意せよ。

曰く、彼の錬金術師は、息子を溺愛している。これと友誼を交わせれば、何事か出来た際に、目溢しを期待できるやもしれん。息子を落とせ。

一つ目も二つ目も軽く絶望的なうえに、その対応策が「ちびちゃんと仲良くなって、お父さんからの印象を良くしよう」だ。心許ないことこのうえ無い。

更に言えば、彼の錬金術師は自分を無事に親元へ返すと口にしていたが、会ったばかりの人物が約束を守る人物かなど、トルドスにわかりようもない（信義を重んじるアーチルが愛息を預けたことこそ、錬金術師がそれなりに信用できる人物であるという証左なわけだが、それを十二の子供に察しろ、というのも酷な話である。誰しもがラーナルクのように物を考えられるわけではない）。それ故に、トルドスは酷く怯えながら、それをなけなしの矜持で必死に隠していた。

しかし、トルドスが未熟ながら修めた剣術の一端を見せたことで、ラーナルクの胸中

に激しい葛藤が渦巻き……負けを認めるに至った。

本来、子供同士の付き合いで勝ちも負けもないだろうが。ラーナルクとしては当初小馬鹿にしていた相手だけに、『自分より優れた部分もある』と認めるのに酷く労力を要したのだ。

それに、ラーナルクは養父に厚く庇護されている自覚がある。それはたつた今まで喜びを齎す事実でしかなかった。だが、眼前の年上の子供は、アーチルなる父親から、『戦士』としての役目を任されている。

この差はなんだろう。庇護されるだけの自分には無くて、役目を任されるトルドスに有るものとは、何なのだろう。ラーナルクは早急にそれを理解し、己の血肉とする必要があると判断した。そこで、甚だ打算的ながらも、トルドスを友（のように見せて利用する相手）とすることに決めた。

この場は態度の悪かった自分から切り出すべきであろう。ラーナルクは意を決して口を開いた。

「……剣、すごかった。他にも、色々教えてくれると嬉しい。……逆に、ぼくも、わかることは教えてあげる。……友達になつてくれると嬉しい」

トルドスは、その申し出を満面の笑みで承諾した。傍から見れば微笑ましい光景だが、一方は打算まみれで、もう一方も打算と、自嘲を抱いていた。

トルドスの父であるアーチルは、清濁併せ持ちながら、友情とは美しいものだ、という考えを持っている。そこに行く自分はどうだろうか。死にたくないがために、チビ助に近づいて身の安全を図っている。父の指示は、自分の命を守ろうとしてのことだ。自分の行いを責めはすまいが、褒めもしないだろう。今日のことを得意気に話したとしたら、思い違いをするなど鉄拳を喰らうかもしれない。少々、自己嫌悪に陥ったトルドスである。

とはいえ、ありえないことではあるが、盗賊ブレックスがもしこの場にいたとしたら、「悪いのは全部あのトンマだからよ。ガキが余計な気を回すことあねえ」とでも言つて切り捨てただろう。此度の採掘村逗留に関して、全面的に件の錬金術師に非があるかといえどもでもないが、結果として子供が苦勞しているのなら、悪いのは全て大人である。二人の子供は、本来もつと気楽に過ごして良い身分なのだ。傍若無人なデイドラードは、反省を促す踊りでも見せつけられるべきである。

それからの二人は、出会った当初のぎくしゃくした様子が嘘だったかのように、日がな一日遊び続けた。

ラーナルクは、農村に比べれば小動物が少ないものの、虫や鼠を捕まえては、可食に耐えられるかどうかをトルドスに教えた。トルドスの頬は引きつっていた。

トルドスが日課の鍛錬を欠かしたくないと言えば、ラーナルクも一緒になつて短剣の素振りや投擲術を磨いた。日によっては、手隙の盗賊を捕まえて、二人揃つて教えを受けた。

また、少しすれば砦のハンが子供の訓練用武器を持参したため、ラーナルクとトルドスで打ち合いをしたり、弓の的当てに興じることもあつた。真剣での稽古は危険だと言つて、養父に止められていたのだ。

ただ打ち合つたり素振りを繰り返しても面白くないと考えたラーナルクは、養父が銀鎧であることは秘密だが、砦で一味の者達を千切つては投げ千切つては投げと揉んでいたことをトルドスに話した。トルドスも、彼の錬金術師は優れた戦士でもあると聞いていたため、大袈裟とは思わず、二人で動きを再現しながら、その真似を試してみた。

結果的に、養父の挙動をなぞるには、全身の筋力が全く足りていない、という身も蓋もない結論に達したため、二人の稽古には更に熱が入ることになった。

おかげで食事の量が増え、人知れず錬金術師の負担が増えていた。

また、養父の多忙さから毎日とは言えなかつたが、ラーナルクと養父とトルドスと、川の字になつて眠ることも珍しくはなかつた。そして起床すれば、養父の作つた食事を共にとり、昼まで遊び、昼餉を食べれば二人揃つて昼寝をし、起きればまた遊び、日が暮れたら養父と共に夕餉を済ませ、床に入る。

文字通り寝食を共にするうち、ラーナルクもトルドスも、当初抱いていた打算などは何処かへ消え去り、ただの友達になっていた。

それを自覚したのは、あるとき二人で村に迷い込んだ狐を追い回していたときのことだ。最終的には上手に逃げられ、二人揃って背の低い生垣に頭から突つ込む羽目になった。切り傷擦り傷を作りながら、髪の毛に幾つも葉を挟んだ互いの顔を見て、共に笑った。そのときトルドスが「楽しいな」と言ったのだ。

ラーナルクは、トルドスこそが自分の初めての友達なのだと、心と頭で理解した。なんとという充足感と幸福感だろう。

同時に、「お父さん」の愛にも思い至った。養父は、この経験をさせたいがために、これまでどの村々でも同年代の子供を自分にあてがい、このトルドスにしても、無理に突き返さず引き取ったのだろう。養父の愛と、それに気付くまでにやたら時間を要した自分が情けなく、涙が零れた。

蹲って泣きべそをかくラーナルクにトルドスは戸惑い、ラーナルクは、すっかり気を許しているトルドスに向け、思いの丈を話した。トルドスは黙って聞いていた。

この頃から、二人はお互いの両親について話すことが増えた。

例えばトルドスが口を開けば、曰く、父はノルド戦士の規範たらんとしている。それ

は自分の自慢でもある。ただ、自宅に戻ると『家族大好き人間』になり、特に母への愛は何年経つても熱いままだ。夫婦仲がいいのは良しとしても、子供の前だろうが構わず愛し合うのはよしてほしい。いたたまれなくなる。と。

例えばラーナルクが口を開けば、曰く、父はおそらく世界で一番強い。誰もが一目置いているし、自分もいつかそうなりたいと願っている。反面、その圧倒的な力で大概のことは解決できてしまうため、父を知る人間に会ったときは注意が必要である。自分が把握していないところで、とんでもない騒動を起こしているかもしれない。と。

偉大なる父の尊敬するところと、少々困りものなところをお互い話してしまえば、自然と笑いが漏れた。

だが、そうして身内の話しをしていると、どうしてもラーナルクから話せる話題に限りが出てくる。砦の一味を身内に数えて水増ししたとしても、自分がホワイトランを出て、まだそれほど時は経っていないのだ。

ぼくは、おとうさんのことをよく知らない。

ラーナルクは敬愛する養父に甘えるばかりで、養父について理解が不足していたことを憂いた。しかし、憂いたまま立ち止まるラーナルクではない。その日から寝床で養父と一緒にあったときには、毎回質問攻めにしたのだ。

まずは養父の人生について聞いてみた。すると、砦で簡単に聞いていた話と齟齬が出

た。これはトルドスが共に聞いているためだろうと納得した。同時に、秘密の話を知っているという優越感も齎した。

また、同様に「今、何をしているの？」という質問についても、『計画』のけの字も触れられなかった。これも秘中の秘、ということなのだろう。

反面、戦闘の心得や、人生で大切なこと、など方向性を持ちながらも漠然とした問には、かなり饒舌な回答が得られた。

まず、戦闘においては、ことを有利に運ぶためなら、敵に倍する人数を揃えること。使える道具は、懐の許す限り湯水の如く使うこと。

不意打ちが叶うときは、最も強い者から無力化すること。

遠距離からの一方的な攻撃は、人類の考案した最も画期的な攻撃方法であること。

余裕があれば、罨を活用すること。
危なくなれば、躊躇なく逃げること。

等々、凡そ戦士とは思えぬ言がぼろぼろと転び出た。案の定、トルドスが食って掛かる。

養父はそれを笑って流す。

「たしかに、アーチルの思う『正しきノルド戦士』からすれば、到底受け入れ難いだろう。しかし私は、多少くすぐったいながらも優れた戦士と呼ばれている。わかるか？ 『正

しい戦士』ではないのだ。連中の前でそれらの戦法を見せたことが無いため、仔細を承知のうえで使い分けているわけではないだろうが……。

私は、戦いとはどんな手段を用いても、最後に立っている者こそが勝者であり正義だと考えている。生きていれば、また別の敵と戦うこともできようが、死んでしまえばそれまでだ。ソブungalデから現世の戦いに介入することは出来まい？」

理屈は通っているように思えるが、トルドスは村を出るまで、終ぞ納得しかねていた。そして後にアーチルへこの話をし、『義侠のアーチル』とまで歌われた父が彼の錬金術師の言をまっこうから否定しなかったことについて、衝撃を受けた。

いくらノルド戦士とは言え、戦闘、ないしは戦争とれば、自陣に相手より豊富な人員を揃えるのは基本である。察知されることなく会敵したとすれば、不意打ちくらいは当然する。前衛が切り込むなか、離れた場所に射手を配置して、射撃に専念させることもある。形勢が不利になれば、戦略的撤退を選ぶこともある。

それらを全く齒に衣着せず口にすれば、彼の錬金術師の言になるというだけの話である。このあたりは実戦を経験した戦士なら誰でも承知していることなのだが、未だ年若いトルドスに納得させるには、少々骨であった。

閑話休題。では人生訓についてはどうだったろうか。こちらは、一部を除いて然程おかしなこともない。

広い世界で信頼できる者とは存外少ないため、余程仲が拗こじれていない限り、家族や友人は大切にすること。時には、物理的な場所ではなくそれら『人』自体が己の帰る場所になってくれることもある。

取り返しの付かない話でなければ、諦めない限りどうにかなること。その際、闇雲に挑戦し続けるのではなく、上手にできたことや下手を打ったことの考察は怠らないこと。そして、新しい可能性を常に模索すること。

後悔しない選択、というのは極めて難しいため、せめて自分が納得できる選択をすること。どうしても肚が決まらない場合、酒でも友でも女でも、自分以外の力を借りたことで、何ら恥ずかしくはないこと。

ここまでは二人共納得できた。突然「女でも」などと口にするものだから、年頃のトルドスなどは若干赤面してしまったが。

しかし、次に言には首を傾げざるを得なかった。

誰かのため、何かのため、などと口にする者にはあまり近づくな。人は誰しも自分のために生きている。家族のため、友のために生きている、という者もいるが、それは究極的にはただの自己満足だ。それを自覚したうえで口に行っているのならは問題無いが、勘違いしたまま口に行っているのだとすれば、厄介だ。その手の輩は、他人にもその価値観を押し付けかねん。近寄らぬが吉だ。

ちなみに、これは神に仕える者も含まれる。人は神のために生きているのではない。神のために生きる人が居なければ存在できないのならば、そんな脆弱な神など居ないほうがマシだ。

随分過激なことを言うものだ、トルドスは目をむいた。ステンダールの番人に聞かれれば、デイドラ崇拜者でなくとも付け狙われそうだ。

それに、アーチルは度々「首長のため」「タロスのため」と口にすることがある。これも、素直に納得できるものではない。

先述と同様に自らの父へ詰め寄ってみれば、これまた苦い顔をしながらも否定はされなかった。

当然の話だが、アーチルがただの人である限り、ウルフリック・ストームクロークの本心や、タロスの御心を正しく理解することなどできはしない。その状態で、首長のため、タロスのためと口にしたところで、真に彼等のためになるかなどわかりはしない。そう考えたため、アーチルは開き直った。俺は俺の思う忠義と信仰を果たす。仮に俺の考えが見当違いであれば、誰かから叱責を受けるなり、罰が当たるなりするだろう。そうでないのならば、それでいいのだ、と。

アーチルは愛息が普段触れることのない価値観に触れたことを聞き、彼の錬金術師に預けたことは有意義であったと確信した。したが、もう少し言葉を選べないものかと、

やはり少々文句をつけたい気分にはなつた。寢室の壁に飾られている黒檀の盾が、少し恨めしくなつた。

再びの閑話休題。忙しい養父と同衾できる機会を狙つての質問であつたため、例に挙げただけでも数日に渡つての話であつたし、それ以外にも様々なことを尋ねた。

結果、トルドスはトルドスで胸中に乱気流を起こし混乱していたが、ラーナルクはラーナルクで、陰鬱な雨雲を発生させていた。

トルドスはいい。自分の父とは違う価値観に触れて戸惑つているだけだろうから。しかし自分は？ これまで、自分は「お父さん」の一番近くにいると思つていたのに、知らないことだらけだった。

それはまあ、普通の親子に比べて過ぎた時間は短い。しかし聞き出す機会ならいくらでもあつたはずだ。

当の「お父さん」からすれば、心に傷を負つた子供にそこまで多くを求めてはいない。最悪の場合、ラーナルクが死ぬまで自分が養つてやつてもいいか、とすら考えていたのである。

ある意味、息子に何の期待もしていない、とも取れる思考ではある。しかし、自分の歩んで来た道が、地獄の業火吹き出す地の底を血と屍で舗装したものであつたが故に、愛息には穏やかな生を歩んでくれさえすればいい、という思いがある。

そのため、基本的にはひたすら甘やかし、聞かれれば答えてやる、という姿勢でいた。ラーナルクの理解力が極めて高かったことも、その一因である。何せ口酸っぱく説教をしなくとも、大概のことは一度言つて聞かせるなり、どうかすれば言わずとも道理を理解して守る子供であつたのだ。甘やかさないほうが難しい。

しかしそれとこれとは話が別である。養父たる男が如何に息子を愛していようが、肝心のラーナルクがどう思い考えるかが全てだ。

このあと、村を出てトルドスと別れることになるまで、普段どおり二人で楽しく遊びに興じていても、ラーナルクの胸には常に棘のような小さな違和感と痛みが付き纏うことになる。

閑話、ラーナルクの憂鬱（丁）

ラーナルクの養父が、盗賊達から旅の再開を通達される数ヶ月前。ラーナルクの胸の凝りは無視し難いものになっていた。そしてそれは、前述の通達を以て目下最大の悩みとなった。

トルドスは、あと少少で父から託された使命を果たせることに喜びを感じ、また、それが自信に変わろうとしていた。

戦士の顔。男の顔。表現は幾通りもあるだろうが、少年ながらに、自らの力と実績に誇りを持っている。

そこに行くくと、自分はどうか？

己の賢しさに驕り、友の人間性を見誤りかけた。武芸の鍛錬はしており、「上達が早い」とは頻繁に聞くものの、養父のような規格外の存在になれる気配はない。そのうえ、タムリエル中で最も安全であろう養父の庇護下にあり、必ずしも磨いた武芸が必要だというわけでもない。

そして何より、その養父に関してさえ、自分は知らないことばかりである。

もう身内としての意識が強い盗賊達は、ラーナルクを励ましはする。自分達にもお年

頃だった時分の記憶はあるからだ。だが、思春期の悩みというのは、複数の要因が絡まりがちで、簡単な助言で解決することは珍しい。

ラーナルクの場合は、自らの才に溺れた羞恥。友人に先を越された嫉妬。自身の肉体的精神的力量不足に対する憤り。そして養父への理解不足から齎される、自責の念や疎外感。その他大小諸々。

これだけの悩みを、助言程度で晴らすのは、まず無理だ。本人の成長や、経験よって変化する思考に任せるよりほかない。

あまりに放任が過ぎれば拗らせたまま大人になってしまうこともあるため、注意深く見守ることは必要だが……。今のところ『旦那』から付き人たる盗賊達への指示は無い。「そういう時期もあるだろう」との構えである。ある種の正解であるとは思うが、形式的な上役の態度にやきもきする付き人達であった。

そして多くの悩みを抱えるラーナルクと言えば、一時問題を棚上げし、より一層武芸の鍛錬に精を出すことにした。

表向きは「トルドスとはじきにお別れだから、それまで一緒にがんばろう」と友を誘い、並んで素振りや地稽古を繰り返した。

二人が共に過ごし始めた頃は、二人で組手や地稽古を行う際、トルドスのほうが年上

で身体も未熟ながらできていたこともあり、ラーナルクは善戦することすら難しかった。しかし一年近く経った今では、二人の力量はほぼ互角と言つていいものになつていた。

単純な筋力や、体重を使った押し合いならトルドスに分があるだろう。しかしラーナルクは、持ち前の見取りで一年近くもトルドスを観察してきた。癖は全て見抜いているし、剣術の中に見える合理性を短剣術に応用もした。接近して体術を仕掛けるには、身体が小さいほうが懐に入ったあとの選択肢が多いという要素も、きちんと理解している。

それら己の側にある利点を最大限利用すれば、体格と鍛錬の期間に勝るトルドスを相手取つても、ラーナルクは十分に戦えていた。

その事実に対し僅かな充足感を覚えるも、トルドスの手前、良くも悪くもあまり表には出さないような心がけているラーナルクである。更に言えば、常に胸に鎮座する凝りが、すぐにその浮かれた気分を打ち消してしまふ。浮かれた表情も、沈んだ表情も、友であり稽古仲間でもある相手に見せるものではないと考えたためだ。

実際、年上の自分と互角の勝負をしておいて塞ぎ込まれては、トルドスの立場がない。そのあたりに気が回る程度には、ラーナルクにも他者を思いやる精神ができつつあった。

それから然程経たずに、一行は鉾山採掘村を出て、ウインドヘルムへと移動した。

とはいえ、ウインドヘルムではあまりの慌ただしさに数日しか滞在できていない。その数日も、到着したその足で謁見の準備。一日の待機期間。謁見当日、という流れであつた。そして肝心の当日には、謁見後であろうアーチルが一行の背を押し、町から追いつくように急ぎ立てたため、ラーナルクは養父が何か首長に無礼を働いたのではないかと心配になつたほどだ。

しかし町の入口にある厩で話す二人には、険悪な雰囲気は無い。ラーナルクは杞憂であつたことに安堵した。

だが、それも束の間。養父がアーチルへ盾を譲渡したかと思えば、高笑いを上げながら歩き始めてしまった。ラーナルクは最後にもう一度トルドスと挨拶を交わそうと考へていたため、焦る。

焦つて……どうするのだ、とふと冷静になる。今の自分が、役目を追え、子を愛する両親の下にいるトルドスに向かつて、綺麗な別れを演出できるだろうか。感謝してる。一緒にいて楽しかった。お兄ちゃんがいればこんなふうだったかな。お父さんやお母さんと会えて良かったね。

言いたいことは山程あるのだ。間違ひなく本心であり、自分は彼を友と思つてゐる。それでも、それらの言葉を、何の皮肉も当て擦りも無く、伝えられるだろうか。

……………今は難しい気がする。

このまま会わずに行くのもいいかもしれない。ラーナルクがそう考えたとき、衛兵の詰め所から、トルドスと、その母親、アーチルの妻が飛び出してきた。夫が恩人を紹介してくれるものと思つていたら、さつさと出発してしまつてゐるのだ。妻は夫を詰りながら、呼び止めるべきか、そのまま別れの挨拶をするべきか、数瞬のあいだ逡巡した。

するとトルドスが大きく手を振り、「また会おう！」と声を張る。ラーナルクは目頭が熱くなつた。

一年、共にしたのだ。自らの内にある打算的な思考や苦惱など、ある程度察してゐることだろう。それでもこの年上の友は、からりと気持ち良く、再会を願い手を降つてゐる。

なんと良い友に恵まれたことか。ラーナルクは一時だけ自恥を止め、ただ友との友情のために自分も大きく手を振り、「ぜつたいに！」と応えた。それは、久しく感じていなかった爽快感を伴つた。

隣では、アーチルの妻がしつかりと養父と視線を合わせ、万感の思いを込めて深く腰を折つてゐる。養父は敢えてであろうが、あまり大仰にならないよう、気心知れた様子

でアーチルと別れの挨拶を済ます。

こうして、一行はウインドヘルムを出立し、本来の目的地であるウインターホールドへと向かった。

ウインターホールドの町は、はつきり言つて村であつた。

養父や盗賊達の話では、この町とも言えない町を、どうにかこうにか復興させるらしい。養父がやると言うのなら可能なだろうが、他の者が口にしたのなら、ラーナルクは「無理じゃないの?」と思わず零していただろう。

何せ町を名乗るウインターホールドと来たら、物が無く、人がおらず、いても陰気で、寒々しく、いいところなど一つも無いように思えるのだ。ラーナルクでなくとも、同様の感想を抱くだろう。だからこそ、養父の計画に協力する盗賊達は、『一世一代の大仕事』と思ひ励んでいる。

一部の者は、極論ことが成らずとも良いとさえ考えている。敬愛する頭目の音頭の下、大事業に精を出すことそれ自体が楽しくて仕方ないからだ。とはいえ、件の頭目に知られれば「やるからには成功させんだよ」と蹴りを見舞われることが目に見えている

ので、黙っているのだが。

例によつて、と言えるほど馴染んだ光景ではあるが、養父は新しい土地に着くと、必ず忙しく東奔西走する。

養父が圧倒的な戦闘能力を持つ『銀鎧』であることが秘密である以上、錬金術師として土地の者に受け入れられなければならない。そうでなくとも、傷病に苦しむ人々を助けるために動き回る養父は、どことなく楽しそうである。邪魔するのは憚られる。

そこでラーナルクは、手隙のあいだ、自己鍛錬に励むべきだと考えた。

養父が戦いの中で見出した業や、実際の戦闘における勘所など、一つも教わつてはいない。しかしそれは、自分の実力がそこに及ばないからだ。身体ができていないからだ。

ならば話は簡単である。一日でも早く丈夫な身体を作り、一時でも早く養父や盗賊達の教えを完璧に身に着けてみせる。駄々をこねる前に、やるべきことをやるのが先決だと、ラーナルクは走り込みから始めた。

これほど建設的かつ前向きな考えを持たたのは、トルドスと過ごした日々の影響が大きい。ラーナルク一人では、最悪の場合「どうしてお父さんは僕を一番に考えてくれないの？ あいつみたいに、僕をどうでもいいやつだと思つてるの？」などと致命的な勘

違いを起こしかねなかった。

ラーナルクは年の割にはかなり賢い子供ではあるが、一度『要らない子供』として捨てられた過去がある。それを鑑みれば、小さな擦れ違いから、自分を守るための殻に籠もってしまうこともあり得たのだ。

トルドスの存在は、トルドスの友としての価値もそうではあるが、ラーナルクにとって必要なときにそこに居た、という点が最も大きい。

ラーナルクは離れた町にいる友を思いながら、一人町を走り回っていた。

そのうちに、ラーナルクは走り込みに戦闘訓練を取り入れることにした。

ウインターホールドの町には、廃墟が多くある。普通の町であれば浮浪者の溜まり場になりそうなものだが、ここは北の果てである。寒さはスカイリム随一であるし、そもそも浮浪者とは町にそれらを養う余裕がなければ存在できない。そういう意味では、ウインターホールドに浮浪者など居られるはずがないのだ。

閑話休題。

ラーナルクは廃墟のある辺りを走れば、地面や廃墟の起伏が良い鍛錬になると思った。

更に、各廃墟の内装を狼や熊などの獣に見立てた。それを走り去る際に、木の短剣で一撃加えていくのだ。慣れてくれば、対象を変えてみる。それだけで打ち込む姿勢が変

わり、これも良い鍛錬になった。

更に更に慣れれば、対象に無作為性を取り入れた。廃墟に足を踏み入れる一歩前、自らの状態を確認する。手の位置。足の位置。獲物の向き。それらを一瞬で把握し、それを元に打ち込む対象の場所と仮想敵の種類を、時々によって瞬時に決める。

それでも慣れが出てくれば、偶然見えた雲の形や風の音、その前の廃墟を出てから何歩目か、など、様々な方法でお決まりの動きになることを防いだ。

これは後に、誰の知恵も借りずにこの鍛錬方法を考えついたらと養父が知り、啞然としたほどである。本人の賢さ故に忘れがちではあるが、ラーナルクは未だ十の幼子なのだ。

ちなみに、ラーナルクは町内を走り回る自分が、住民達から奇異の目で見られていることを知っていた。しかしそれが、嫌悪感を伴うものではないことも。

ホワイトランから今までの経験を経て、『子供とは多少馬鹿であるほうが良い印象を与える場合が多い』という実感を得ていた。間違つてはならないのは、『奇妙』であつてはいけないことだ。理解しづらい子供とは、ただただ不気味に映る。

しかし、養父が町の住民達に受け入れられようと走り回る最中さなかであれば、その子供である自分は、「親の手伝いより遊びたい年頃なのだ」と思わせておける。そのほうが、住民達の警戒心を買わないと判断した。

自分と養父の身の安全を守りつつ鍛錬に集中するための考察ではあったが、やはり歳不相応な打算である。尤も、それが功を奏したのも事実なのだ。

そうして半月程度経った頃、念願叶って、というか、養父が稽古をつけてくれることになった。ラーナルクはあまりの歓喜に、口を真一文字に結んだまま垂直に飛び上がるという奇行を見せた。

何せ言い方は悪いが、トルドスとでは子供の遊びの域を出なかった。付き人達は、ラーナルクの飲み込みが異常に良かったこともあるが、極力怪我をさせないよう、厳しい鍛錬は施さなかった。

そこに行けば「お父さん」は違う。「お父さん」は僕に甘いから、頼めばきつときびしくけいこをつけてくれるはず。ラーナルクは胸を期待でいっぱいにして、真剣に頼み込んだ。

結果から言えば、ラーナルクの望み通りにはなったが、一部に若干の弊害も齎した。何せ、ただでさえ人の内心の機微に疎く、頼まれれば額面通りに受け取ってしまうのがラーナルクの養父だ。「厳しく指導してほしい」と言われれば、壊さない程度に厳しくしてしまふ。

稽古の時間は長いとは言えず、一日一種目のみであったが、その分内容は濃い。短剣

術、投擲術、弓術、劍術（盾術）を習ったが、どれも傍から見れば酷いものであった。腕前が、ではない。しごきの度合いが、だ。

ラーナルクは何度も転がされ、すぐに傷だらけになる。しかし問題は外から見える擦過傷などではない。打ち身や無理な体制での受け身で筋を痛めることなどざらであったのだ。

養父はそのあたりには疎いのか、外見の傷の具合を見て、時折回復魔法をかけてくれた。ラーナルクとしては先述のとおり、擦過傷やなどより身体の内面が癒やされる有難みに浸っていたのだが、それが養父に知られて稽古を手緩くされてはたまらないと、内面の痛みは隠し、我慢し続けた。

……一応、養父たる男の名誉のために記述するが、男にとって擦過傷や切り傷などは傷の内に入らないのだ。そして、骨折や打撲による内蔵損傷。もしくは四肢、どころか五体いづれかの欠損までいけば、それは即座に死を意味した。巡礼の最中に出会った愛しい敵^{かたき}達は、そのような重傷を見逃してくれることなど、一度だつてありはしなかつたからだ。

つまり男にとって、『まだ大丈夫な傷』と『致命傷（重傷）』とのあいだが無い、あるいは極端に狭いのだ。動いているのなら、大丈夫。そのような意識が男にはある。理屈と常識で考えればそれが間違いであることは明白のだが、数百年単位の刷り込み

と、愛息が「きびしく！」と望むために、そのあたりに全く気付かずにいる。

閑話休題。

ラーナルクは何度も打ち据えられ、地面を転がった。短剣術の日は特にその傾向が強かった。

しかし、養父がかけてくれる回復魔法は好きだった。傷が癒えていく安心感や喜悅のほかに、陽だまりに似た温もりを感じることもできたからだ。養父の身体が持つ不思議な熱にも少し似ていると思い、ラーナルクにとつて治療の時間はちよつとした『ご褒美』とすら思っていた。

しかし、それを傍から見ているダンマー達は、ラーナルクも、その養父も、異常者としか見えなかった。

二人が稽古をしている場所は、練兵場のように小石が丁寧に取り除かれた砂場ではない。廃墟がすぐそばにある関係からも、何が落ちていくかわからない。厄介なのは、それらが残雪に隠れていることが少なくない、という点だ。

そんな場所で打ち据えられ、転げ回ればどうなるか。想像に難くない。すぐに血まみれになる。それなのに、稽古を申し出た子供は頭を切ろうが四肢の皮をこつそり削られようが、「止め！」の合図がかかるまで、養父に挑み続ける。

そして養父が回復魔法をかければ、何にも勝る至福の時間、とても言いたげな顔を見せるのだ。

はつきり言つて気持ち悪かった。恐ろしかった。誰かが言つた「イカれてんじやねえのか？」は、養父たる男の屋敷の普請に駆り出されていたダンマー全員が思つた本音だつた。

後に屋敷の普請が終わつた際、盗賊達は、予定より早く、そして丁寧に仕上がつたことを褒めて給金に色をつけたが、ダンマー達の顔は皆、少々バツが悪そうであつた。隣で異常者達のはしやぎまわつていれば、手を抜くことも難しい。

とはいへ、養父たる男が圧倒的な武力を見せたこと。その後継たる息子も、けして楽をしているわけではないとダンマー達に見せたことは、後々悪くない影響を及ぼすのだが。

そうしてラーナルクの希望通り厳しい稽古を積んだ結果、一年も経てば、元から得意であつた投擲術に加え、短剣術と弓術も、それなりの腕前になつていた。

弓術は、養父自身の品を渡され、それが嬉しくて何度も何度も矢を射つた。おかげで握力の中でも指の力は子供とはおもえないほど強くなつた。単純にまだ強い弓が引けないため、矢の威力自体はそれほどでもないのだが、命中精度はなかなかである。この

まま鍛錬を続ければ、身体が成長しきる頃には、立派な弓兵になれるだろう。

投擲術は目下最大の遠距離攻撃手段である。素手で投げるときは出どころが分かりづらいよう、身体や衣服の陰に放つ直前まで隠したり、腕の振りを工夫したりと、相手の虚を突くことに主眼を置いた。投石紐を用いる場合は、とにかく命中精度を重視する。

飛ばすのは子供の握り拳より若干小さい程度の石であることが多い。紐を用いて投げたなら、当たればほぼ必殺の攻撃になる。その点は弓術と似ているとラーナルクは思う。ただ、悠長にはいられないとはいえ、弓は構えたまま狙いを定めることができない。投石紐は手を離す一瞬だ。弓より投擲物の確保が楽ではあるが、一長一短なのだ。と、ラーナルクは自らの経験で学んだ。

ちなみに、この頃には既に養父へ狩った鳥をご馳走し、散々に頭を撫でられ褒めてもらったラーナルクである。養父としては息子の成長が喜ばしいだけでなく、皆でした約束を覚えていてくれたことが嬉しかった。そしてそれはラーナルクも同様であった。「お父さん」に自分の成長と、その証である成果を見せられて、頭までたくさん撫でてもらえた。最高の一日だと思った。

では早速、初の獲物を食そうではないか、と調理したはいいものの、味自体は微妙としか言えなかった。罫を用いて慎重に捕まえ絞めた物と違い、当てることを重視した投

石で仕留めたのだ。着弾の段階で鳥の脆い骨が砕け、内蔵までかなり損傷していたため、肉の味が落ちていたのだ。しかしそんなことはどうでもいいとばかりに、養父は「うまい！ うまい！」と繰り返し、実は自分でも微妙な味だと思っていたラーナルクも、それを聞いてふつつつと喜びが湧いてきていた。間違いなく、幸せな親子の時間だった。

閑話休題。

残りの短剣術であるが、驚くことに、戦闘に重きを置いていない盗賊であれば、十に二つはラーナルクが勝ちを拾えるようにまで上達していた。

足腰の鍛錬を欠かさなかったこともあるが、走り込みに取り入れた工夫は、ラーナルクに咄嗟の判断力を齎した。それなり以上に目が良く、何より元々考察力に優れる子供である。相手の様子からどこを狙っているか当たりをつけ、実際の動きから先の展開を予想する。それができれば、あとは安全を確保しながら懐へ潜り込み、急所を狙うなり、投げや極め技を打つだけだ。

十のうちの八つを逃してしまうのは、単純な膂力不足と、身長が伸び切っていないために打てる手が少ないせいだ。相手を観察し動きを予想するのは、ラーナルクだけではない。更に言えば、身長の高い者が取れる手段は自ずと限られる。予想自体は難しくない。

逆に言ってしまうえば、ラーナルクの身長が伸び切り、投擲、不意打ち、卑怯打ちなど、

あらゆる攻撃手段を身に着けた際には、誰が止められるのか、というほどの手練になる未来図が見えてきている。それを誰も心配していないのは、「いざとなれば、あの『非常識』がなんとかするだろう」と考えているからである。

実のところ、ラーナルクの養父たる『非常識』は、ラーナルクが己の意思で何事か為そうと言うのであれば、基本的に止めるつもりはない。残念ながら周囲の者達の目論見は外れていると言える。

ただ、友等と進めている『計画』の妨げになるようであれば、まずは話し合い、それでも聞かなければ実力行使も厭わないつもりではいる。これは、その段になればラーナルクも一人前の戦士、ないしは盗賊であるため、それ相応の扱いをしようという親心なのだ……如何せん、ラーナルクの単純戦闘力に敵わなくなりそうな面々としては、安心できる話ではない。

自他共にある程度形を見るようになったと言える短剣術ではあるが、あくまで稽古での話である。

そこでラーナルクは付き人に頼み込み、町の外で狩りをすることにした。鹿や狐では

つまらない。鍛錬に鍛錬を重ねた、短剣術の成果が知りたいのだ。

そこで、付き人が手隙になる日を選び町の外へ出て、狼の群れを探した。熊やトロールはまだ早い、と付き人が頑として譲らなかつたからだ。ラーナルクとしても、先達がそう言うのならば、否やはない。

ところが、なかなか群れが見つからない。それもそのはずである。ラーナルクの養父は錬金術師兼戦士として町に常駐している。そして錬金術材料が不足すれば、基本的には自分で採集に向かうのだ。当然、野生動物に出会うこともある。その場合は、片端から狩り尽くしてしまうのが男のやり口だ。

町の人間からは安全が確保されて感謝されているし、自分も、町内とはいえ柵もないウインターホールドを走り回れるのは、そのような害獣が近くにいないおかげだと理解はしているものの……今このときに限っては有難迷惑であった。

結局、狼の群れを探すのには、付き人達の都合も考慮せざるを得ず、ひと月以上の時間を要した。群れを発見した瞬間、全員が素早く身を伏せる。

相手は風上。鹿だか何だか、仕留めたのであろう獲物を食べている。他に見張りが四匹。計、五匹。視界はやや開けているが、隠れる岩や倒木、窪みが無いではない。いける。ラーナルクはそう判断した。

付き人達もそれぞれ弓を構え、投げナイフを投擲する素振りを行い、準備を整える。

ラーナルクが男として成長するのに必要とは理解しつつも、この場でそれに挑もうとしているのは、何せあの『旦那』の息子なのだ。万一があれば、どのような叱責が飛ぶかわからない。寧ろ普段の溺愛ぶりから考えれば、叱責で済んだなら御の字だろう。付き人達も気を引き締める。

今回の狩り。基本的にはラーナルクが主導する。本人の希望でもあるし、付き人達もゆくゆくは人の上に立つであろうこの子供に、他人へ指示を出す経験を積ませたい、という狙いもあった。

一行は、狼達に悟られないよう、風下を移動し、視界の開けた場所に移動した。まずは投擲で一体を仕留め、その後、襲いかかってくる狼を近接戦で仕留める。その際、狼が不規則な跳躍に用いる足場があつては困るのだ。

ラーナルクはとある岩の陰に潜伏場所を決め、付き人達もそれに従つた。場所の選定は、まず及第点、と。

ラーナルク達が選んだ潜伏場所には、土が盛られた箇所と、抉れた箇所が隣り合つていた。天然の堀のようである。ラーナルクは付き人達に、そこへ潜むよう指示を出す。こちらが多勢であり強敵だと狼たちが判断し、逃げられては困るのだ。スカイリムの狼は好戦的でありまず問題ないはずではあるが、目的のためには必要な行動である。付き

人達は、これにも素直に従った。

さて、いよいよ戦闘である。思えば、準神（養父が自らをそう呼称するため、あまり『デイドラロード』とは呼ばない）たる父から稽古をつけてもらったことはあっても、自分を殺しに来る者と相對するのは初めての経験である。

だがしかし、だからこそ必要な経験だとも思う。また、少々打算的であり甘ったれた考えではあるが、付き人達が自分の提案を頭ごなしに否定しなかつたということは、自分にはそれなりの実力があり、最悪の場合は付き人達が助けてくれるということでもある。初陣としては最高の環境ではないだろうか。

そう考えれば、不必要に強張った身体も解れ、呼吸も落ち着き、霞がかつた思考も晴れてきた。いい調子だ。

潜伏してから幾らか時が立ち、付き人達がラーナルクにまだ始めないのか、と尋ねてくる。ラーナルクは、まだだ、と返し、狼達の監視を続ける。

狼の群れは、厳密な縦社会である。長が居て、その下にも序列がある。獲物にありつくのは、群れの序列の高い者からだ。

おそらくはあの偉軀の狼が長だろう。まだ獲物を夢中で食べている。あまりに時間をかけて群れが移動してしまつては意味が無いが、獲物はそれなりの大きさに見える。狙うなら、長の腹が満ちて、手下達が獲物に群がり少し経つた頃。

……………今だろう。

—— 不意打ちが叶うときは、最も強い者から無力化すること。

「お父さん」の教えだ。ラーナルクは群れの長に狙いを付けた。岩陰に隠れた自分の更に身体の陰に隠して、投石紐を低い位置で回す。あちらまで届く音を僅かにでも減じたかった。

と、異変を感じたのか手隙の者が警戒に当たる分担なのか、長が首を上げてあたりを見渡している。バレたか!?

ラーナルクは、一瞬の焦りからそのまま観察する余裕を無くし、石を放ってしまった。長は首を巡らせ、こちらとは反対を見ている。……命中。

後頭部に投石を受けた長はそのまま動かなくなつた。死んだとは限らない。獣の頭骨は分厚い。しかし一時的にでも無力化できていればそれでいい。

獲物に夢中だった手下達は、異変に気付きながらも攻撃がどこから来たのか判断がつかない。好機だ。

ラーナルクは更に投石で、視線を外していた一匹を無力化した。そこで、残りの三匹がこちらに気付いた。

近寄られる前にもう一匹、と思い投石を行うが、投げる姿を見ていて喰らうほど、スカイリムの狼も間抜けではない。素早く横っ飛びに躲し、距離を詰めてくる。

どうする？ 三匹を一度に相手取るのは難しい。付き人達は……いや、あてにするべきじゃない。危なくなれば助けてはくれるだろうけれど、まずは僕だけでやるんだ。

ラーナルクは狼の知恵に賭けた。躲かれた投石紐を、右手でこれ見よがしに回し、誇示する。そこに、どうせ当たりはしない、とても思ったのか、大胆に距離を詰めてくる一匹がいる。

槍の間合い。狼で言えば一足で首筋まで噛みに行ける距離まで近づき、跳んだところで……ラーナルクは左手から投げナイフを狼の目に向かって投げた。

距離が近く空中で身動きが取りづらかった狼は、そのままナイフを喰らう。跳躍後のため勢いは衰えないが、一瞬間が背けられた。

そこに、右手で回していた投石紐を、投擲器ではなく鈍器として狼の頭に振るう。十分に加速した石は、質量以上の威力を發揮し、先走った狼を沈めた。

残った二匹は、ラーナルクを警戒して簡単には近寄ってこない。狼から見える敵は、ラーナルク一人なのだ。柔らかそうな肉の二つ足が、たった一体で群れの半数をやった。こいつは油断できない。二匹で連携し、最後は同時に掛かって噛み殺そう。

ラーナルクに狼の思考は読めないが、大人しくしても状況が好転するとは思えない。無力化した狼が、立ち上がらないとも限らないのだ。長期戦が論外ならば、こちらから攻めるしかない。

ラーナルクは左手に投げナイフ。右手に、逆手の短剣と回転させた投石紐を構えて、やや体躯の小さな狼へと接近する。「お父さん」の教えでは、不意打ちの際には強敵から仕留めるが、そうでなければ、弱い者から確実に仕留めるのが生き残る秘訣だ、と教わっている。どんな弱者でも、そこにいる、というだけで脅威になるからだ。

それまで自分から掛かって来ようとはしなかった相手が突進してきたことに、二匹の狼は一瞬身体を強張らせる。しかしそこは獣の中でも狡猾な狼である。

ラーナルクが狙った個体は右へ左への的を絞らせないよう動きながら徐々に下がる。そこへ、もう一匹が後ろから近寄る。前方の一匹が気を引くように吠え掛かる一方、後方の狼は音もなくラーナルクの足首を狙って噛み付いてきた。

間一髪躲したものの、ラーナルクは自分が下手を打ったことを悟った。別に、群れを全滅させなくても良かったのだ。二匹を投石で倒し、一匹を変則的ではあるが、学んだ技術で倒した。十分な成果だった。

残りの二匹がこちらを警戒して近寄ってこないのなら、投擲を続けて、戦闘は割に合わないと思わせ撤退させる、という道もあつたはず。

しかし、そこに思い至つたのは、前後を狼に挟まれてからだ。

どうする？ 飄々と身を翻し続ける前方の個体に、虚を突いて仕掛けるか？ いや、

それじゃあ後ろの個体が黙っていない。狼の力で足にでも噛みつかればお終いだ。

なら、警戒しやすい前方に意識を割きつつ、素早く振り返って後ろから倒す？ 駄目だな。多分今と同じ状況になるだけだ。……万事休す？

—— 危なくなれば、躊躇なく逃げることに。

あ、そうだ。……別に今から逃げてもいいんだ。

ラーナルクは前方の個体にナイフを投げ、わざと躲させたところで、次いで石も投擲する。着地を狙われた狼は、重傷こそ避けたものの、胴に石を喰らい、呻く。

それを見る間もなくラーナルクは振り返る。そして覚悟を決め、短剣一本を頼りに後ろから機を伺っていた個体に詰め寄り、右半身で突きを繰り出す。しかし、狼は突き出した短剣を掻い潜り、ラーナルクの足を抑え下腹に噛みつきこうとする。が、それらは誘いだった。狼の反撃を予測していたラーナルクは、前に出ている右足を軸に小さく回り、左膝で狼の頭を蹴る。と同時に、突き出した短剣をそのまま引き戻し、柄で反対側から挟むように叩きつける。

仕留めるには至らなかつたが、動きを鈍らせることはできた。

その隙に潜伏場所を目指して脇目も振らず走り……………。

「ごめん、無理！ あとのは助けて！」

付き人達に援護を求めた。

熟練の盗賊は、もう目と鼻の先に潜んでいるというのに、狼にその存在を悟らせな

かった。窪みから立ち上がった二人は、無防備な腹を晒す狼達へ一射ずつ放ち、動きが止まったところですぐさま駆け寄り、喉を裂いた。

そのまま、投石で無力化された狼の死亡を確認しつつ潜伏場所までラーナルクの獲物を抱えて来た。

ラーナルクは「何だこの振動は？」と思うほどの鼓動を打つ心臓に戸惑い、全身に不足した酸素を取り込もうと激しく上下する横隔膜にえづいている。それに、酸欠で思考がぼんやり鈍い。

しかしながら思う。ここ数年、それこそ孤児時代から置いてきた思考の冴えを感じた。これが死なないための力？ 助かったけれど、あまり世話になる状況に陥りたくないなあ。……ある意味「お父さん」とお揃いの特技であるのに、そこに思い至ることもない。やはり、疲労から少々鈍くなっている。

ラーナルクの限界に近い様子を見て取った付き人達は顔を見合わせ苦笑し、狼の解体作業に入った。肉はまだしも、毛皮は金になる。

作業をしながら一人の付き人が言う。次いでもう一人も。

「ボン、俺に言わせりゃこの初陣、満点に近え。お前さんは必ず大物になるぜ。精進しな」

「ああ、俺たちや、お前さんが三匹もやれるとは思ってもみなかったし、ちと蛮勇だった

が、あれだけの度胸を見せられるとも思つてなかつた。

それで最後のあれき。身の危険が迫つてテンパつてりや、普通視野が狭くなる。でも坊つちやんは、自分で機を作りながらも攻めに回らずトンスラこいた。挙句に、俺たちが奇襲をかける絶好の位置まで引つ張つてから声をかけた。

腕つぶしと、勇気と、やばくなつても冷静でいられる胆力。これがまだ十一のガキだつてんだから痺れるぜ」

全身が不調を訴えているラーナルクには皮肉にしか思えなかつたが、落ち着いてからの帰り道では、自分の成果と、戦闘内容を顧みて、それが皮肉ではないのではないかと、と思ひ至つた。

それからのラーナルクは、折を見て害獣退治に出かけるようになった。

町の住民達は、「錬金術師の倅は元気が有り余り過ぎて、かけっこだけじゃ足りなくなつたんだ」と噂した。誰も、付き人ではなくラーナルク本人が狩りを行っているなどとは、考えなかつたのだ。当たり前と言えば当たり前である。

鍛錬を積み、考察し、実戦で試し、考察し、また鍛錬を積む。ラーナルクはその実力

を順調に伸ばしていた。

しかし、成長するからこそわかることもある。これではまだ足りない。でも何が足りない？ 自分の頭なら、大概のことは理解できるはずである。何故わからない？ いや、本当にわからないことか？ 本当は……。

そうして行き詰まると、決まって逃避じみた考えが浮かぶ。

こんなとき、お父さんならどうしたかな。お父さんならどう考えるかな。なんて言うかな。

他人の思考など完全に把握できるはずがない。しかしラーナルクの抱えている悩みはそういう問題でもない。それを自覚しているだけに、くだらない悩みだ、と雑念を振り払うようにより一層鍛錬に打ち込む。

そうして、ウインターホールドに来てから、三年の月日が経とうとしていた。

ラーナルクは順調に成長し、背も伸びた。早めに訪れた成長期のせいだ、十三ではあるが、平均からやや低い程度の上背はある。

弓も、毎日鍛錬したかいがあって、養父から貰ったショートボウはとうに卒業し、今では『エルフの弓』が引けるまでになっている。

投擲術には更に磨きがかかり、狙ってから放つまでにほとんど間を置かない。また、距離が離れていても、自在に命中させてみせる。

劍術と盾術も、衛兵隊の新米以上には使える。何せ相手の動きを先読みするかのよう
に盾を扱うため、劍を封じ、劍を持つ腕を封じ、なんなら体幹の初動も、視界も封じて
見せる。そこまで見事な盾術を見せられれば、もはや劍術がどうという話にならない。
短劍術については、もやはラーナルクの養父かブレックス、もしくはギルド幹部級で
なければ相手にならない。

左右にそれぞれ構えた短劍は手の延長であり、自由自在に動く。かと思えば、好機と
見れば瞬時に徒手格闘へ移行する。更には、短劍の柄には長く細い糸が結わえられてお
り、投げナイフのように扱えるうえに、糸を手繰って強襲するなりそのまま手元に戻す
なり、変幻自在である。

そしてどちらの腕も利き腕として使えるよう訓練したため、自らの短劍を小振りな盾
と見立てて、相手の劍を弾き、いなし、絡めることもできる。

ブレックスあたりが「誰がここまで仕込めつつあったコラ」と配下を睨めば、皆が目を
背ける。言い訳をするなら、「だって面白いくらい色々覚えるんでさ」といったところ
か。特に、糸を用いた業など、酔った付き人が曲芸として一度見せただけのものなのだ。
それがいつの間にか戦闘用に改良されている。そんな珍事を自分達の責任にされても、
というのが者共の本音である。

例外的に、養父の男だけは息子の腕前を見る度、目尻と頬がだらしなくなる。密かに、

「子に殺されて人生に幕を下ろす、というのも面白いかもしれない」などと考えている節もある。不老の不死人の考えは、いくらか常人離れしている。

そんな養父に、ある日意を決したようにラーナルクが申し出た。

「僕に実戦を教えてください。できれば、獣の相手ではなく、お父さんでなければ通用しない、墳墓や遺跡なんかのダンジョンへ。僕に……本当の実戦を」

ラーナルクにしては珍しく、これこそが、胸に長く鎮座する凝りを取り除く唯一の方法だと、直感的に判断したのだった。

二八、試験前試験（上）

愛息からは実戦経験を積ませてくれと懇願され、友からは計画の進展を促された。さて、どうしたものか。私は「一旦保留」を宣言し、ラーナルクには明朝、付き人と共にいつもの稽古場に集まるよう指示を出した。

言つてはなんだが、この二件は一度に片付けることが可能である。……というかおそらく、あの悪戯親父は配下の報告から私をそのように誘導しようと、言い出す機を伺っていたのだろう。抜け目ないことである。しかし私にも多少は考えというものが有る。

というわけで、後から話を持ってきた相談役殿（忘れがちではあるが、あの男、町の重鎮でもあるのだ）の家を訪ねた。私も、従者に任ぜられることが内定している身である。首長に近い者同士が接触することに、何の怪しいところもない。盗賊連中相手に堂々と話ができるようになったのは、そうでなかった頃の手間や労を鑑みれば、ある程度^{あつま}の成果であると言える。少々感慨深い。

ちなみに狭い町であるため、私の従者内定は既に住民達の耳にも入っている。前祝いだ、と一部住民が宿屋で宴会を開いてくれたことがあつたが、なかなか心が温かくなる集り^{あつま}であつた。少々排他的な色が強くある町だが、一度懐に入れば身内として扱うそ

の地域性は嫌いになれない。

まあ大崩壊からこつち、従者なんぞという役職の者は存在しなかつたようなので、町の復興が順調に推移していることへの喜びもあつたのかもしれない。人間、明日は今日より良くなる、と希望が持てれば、気前は良くなるし、多少のことには目を瞑るようになるものだ。それはあらゆる面で我々にとつて都合がいい。

私自身、多少の情が湧いてきた住民達を利用していることに全く思うことがないでもないが、それはおそらくあちらも同様。お互い様であろう。時間が経てば、打算抜きで酒を酌み交わすこともできるはずだ。

閑話休題。

相談役殿は、訪ねてきた私の言に若干渋い顔をしながらも、道理を認めて許可を出してくれた。そしてその場で、「どうせ衛兵隊の手には余る案件だ」と丁度いい討伐司令書を寄越してくれる。用意がいい。全く以て、持つべきは仕事のできる友である。

一夜明けて。

「色々と考えた結果、まずはラーナルクの腕試しだ。これからこの四人で賊退治に向かう。出立前から既に『試し』は始まっている、とラーナルクはそのつもりでいるように」

「いや旦那。坊っちゃん腕前は旦那も知るところでしよう？ 最近じゃ、サシならトロールやホラアナグマだって仕留められるようになりやしたぜ？ そいつは頭だって知ってる。だから俺たちちやてつきり、旦那が坊っちゃんを連れてダンジョンへ向かうもんだとばかり思ってたんですがね」

私の言が不服だったのか、一味の一人が抗議の声を上げる。……いや、この半分以上はラーナルクの代弁か？ 親子とは言え、試される若輩者が試す年長者へ不満を口にすれば角が立つ、と思ひ矢面に立つたか。

いつぞや我が友は私を「子煩悩だ」と言ったが、今では盗賊連中と私とでどちらが「子煩悩」なのかわからんな。どうも、『期待の新人候補』から『一味の末子』と認識が変化したように見える。

我が愛息がそれだけ此奴等に受け入れられた、という事実は喜ばしいものの、もしラーナルクに何か重大事が出来たら、此奴等は自らの役目を果たせるのだろうか？ 仮にだがその場合、まず私は怒り狂っているだろう。冷静に損得を勘定して進退の進言をするのは、此奴等の役目だ。そのあたりは玄人としてあてにしているのだから、しっかりしてほしいのだが。

思考が逸れた。ラーナルクの腕前については、私とて疑うものではない。そのへんの傭兵と違って正面切って戦えるだろうし、私と盗賊達が仕込んだ卑怯戦法を用いるなら

ば、打てる手は山程ある。大概の相手は話にもならんだろう。……分析しておいてなんだが、我が子ながら未恐ろしい才である。

しかし、私にも言い分は有る。

「ああ、お前たちの言うとおり、ブレックスもそのあたりを想定して、首長の兜の話をしたのだろうよ。

しかしだ。私は基本的に誰かと連携を取ったことが無い。永く、一人で戦い、動く者を全て塵殺してきた。つまり、ラーナルクを連れて行つたは良いものの、きちんと連携らしい動きができるか、互いの隙を庇い合うことができるのか、こればかりは試してみなければわからない。つまりは私側の都合だ。

もう一つ。ラーナルクに十分な腕前が備わっていることは知っているが、それが鉄火場でも十全に発揮されるか、私はこの目で見たことが無い。お前達は散々見てきたかもしれないが、私が一度くらい確認したところで罰は当たらんだろう。ラーナルクには少々肩透かしな思いをさせるかもしれないが、親のわがままで思つて我慢しなさい」

初めは盗賊に目線を合わせていたが、後のほうはラーナルクに語りかけている。ダンジョンの探索を臨む若者からすれば、多少の不満はあれど、ある程度の道理を認めたのだろう。内心の整理を付けて、歯切れよく返事をした。

「とはいえ先にも言ったとおり、これは兜奪取に同行させるか否かの試験でもある。そ

のつもりで挑むように。私の目に『力不足である』と映れば、誰が何と言おうとも時期尚早であると判断し、お前は置いていく。出立は昼餉を済ませてすぐだ。全員分の用意ができれば、町の入口に集合すること。以上」

ラーナルクは一瞬体を強張らせたが、すぐに先と同様の返事をする。

そして踵を返すと、すぐに屋敷へ走った。かと思えば背囊や肩掛けの布袋を幾つか掴んで屋敷を飛び出し、ブレックスの家に駆け込んでいく。夜逃げでもする勢いである（朝だが）。試しは「出立前から」という言の意味を正しく捉えているようで大変よろしい。まあ、それが理解できんほどの愚図だとは欠片も思っていないかったが。

……にしても、残された盗賊二人からの視線が痛い。私とてあれは可愛いのだ。別にいじめているわけではない。寧ろ石橋を叩く思いで段階を踏んでいるのだから、その親心こそ汲んでほしいものだ。

本当に、どちらがあれの親なのかわからんな。いや、どちらも、なのか？　すると私がお父親で、盗賊連中がまとめて母親か？　随分と強面でむさ苦しく後ろ暗い母親がいたものだ。

私はあれの身の安全を第一に考える。連中はその力量を何度も間近で見てきたために、その心情をこそ第一に考える。教育方針の齟齬によって夫婦仲が拗れ……。止めよう。少し気持ち悪くなった。

どの道、我ら親子を『家』として見るなら、家長は私だ。このスカイリムでは特に家長の発言権が強い。それでなくともブレックスと対等である私は、事を起こす際、盗賊連中の暫定的な上役になる。故に文句を言われる筋合いは無いはずなのだが……。この気安さも、勝ち取った絆ということにしておくか。

私はラーナルクを手伝おうと動き出す盗賊二人の首根つこを掴んで宿屋へと引つ張って行く。私は『試し』だと言った。当事者からは助言も助力も許さん。大人しく飯でも食っている。

席に付いて、辛気臭い顔の盗賊が私の目を盗んでなんで『ズル』をしないかと思張っている、そこにラーナルクが駆け込んで来た。見れば店主に、保存性の高い食料や酒、水を融通して欲しいと交渉している。あれが私の倅であることは、この町では周知の事実である。その立場と子供らしさを最大限に活かした交渉術で、ラーナルクは相場よりいくらか安く食料を揃えてしまった。『話術』というかなんというか、あれにかかれれば値段交渉も優位に働くのか。ますます末恐ろしい。

交渉が済んだら運ばれてきた物資を袋に詰めて、入って来たときと同じく忙しなく出ていった。昼餉の最中に慌ただしいことだが、居合わせた住民たちは「相変わらずの元氣小僧だ」と朗らかに笑っている。穏やかなひと時だ。

その様子を見ていたむさ苦しい母上方は、やっと落ち着いて食事に専念することにし

たらしい。あれは身内とばかり過ごしていたからな。値段交渉も住民の反応も、初めて見たのだろう（私もだが）。それで多少は納得し、任せてみることにした、と。

いつまでもぐだぐだ抜かすなら多少の闘魂注入も必要かと考えていたが、此奴等の様子を見るに、違う思いが浮かんできた。

「此度の件、色々と思うところあるかもしれないが、一度それは脇に置いて聞いてくれ。

お前達も気付いていようが、あれは、どうもしばらく前から悩んでいるようだ。しかし私は、お前達からの報告を聞いても、その本質まではぼんやりとしか察しきれん。おそらく、すぐに解決するものでもないのだろう。

そんな難しい時期に、私の目が届かんあいだ、あれの面倒を見てくれてありがとう。ただ世話を焼くだけでなく、慈しみ、愛し、親身になって接してくれた。本当に助かった。礼を言わせてほしい」

言っているうちに、その気は無かったのだが自然と頭を下げていた。盗賊達が頭を上げるよう慌てて言う。あまり頑なでも周囲の目を引くか。私は素直に従った。

「礼は、へい、確かに受け取りやした。……ただまあ、実のところ礼を言いてえのはこっちのほうなんです。」

あつしも含めてですが、一味の連中はガキなんざ拵えたこともねえヤツやら、居てもとうに別れたろくでなしばかりでさ。そんなクズ共の集りだからか、坊っちゃんや

ら物怖じしない性質だったからか、両方か。旦那もお察しのとおり、あつしらは坊っちゃんを手前の倅みてえに見てる節がありやす。旦那の手前、ちと厚かましくはありませんが。

みんな、坊っちゃん世話の焼いてるあいだ、頭に付き従うのとはまた違う、まっとうな人間らしい温かみを感じる事ができやした。

いやま、稼業が稼業ですからね。んなもんは一時の幻想だとは理解してんですが。でも、そんな時間をくれた坊っちゃんにも、勿論旦那にも、感謝してんでき、へい」

これまでのことを思い礼を言ったら、思いの外、本音で礼を返された。私の胸にも温もりが広がるが……。ちと悪戯心が湧いた。

「そんなに言うなら、あんな恨めし気な視線を寄越すこともないだろう」

「それとこれとは別でさ」

しんみりとするほどの礼を吹き飛ばしていけしやあしやあと言うものだから、思わず声を上げて笑ってしまう。今度こそ周囲の目を引いた。倅は大急ぎで旅装を整えており、その親は付き人と上機嫌で食事を楽しんでいる。事情を察しようにも、よくわからんだろう。

まあ良いのだ。我ら親子は『変わり者』で通っているらしい。それも、やや好意的な目で。ならば時折話題を提供してやるくらいが丁度いいだろう。

それからあれこれと話をし、食事を終えて宿屋を出た。

町の入口には、ラーナルクのほうが先に辿り着いていた。隣に一人、一味の者を帯同させている。はて、賊退治は「四人」と宣言したため、増援を認めることはないというに。訝しい。ラーナルクがその程度も理解していないはずがない。なんぞ頓智とんちでもかけて認めさせる肚だろうか。言い負かされてしまうと駄目だとは言いづらくなるので、できればよしてほしいのだが。

「早いなラーナルク。突発的であつても期限までに仕度を整えたこと、まずは合格だ。良くやった。

それから、今回の一件を言い出したのは私だがな。ことのあいだ、つまりは再び町へ帰還するまで、私はお前に雇われた傭兵として動く。戦力としてもそれなり程度だ。凡蔵ぼんくらが一人配下にいることを念頭に、一行の長として、一から十まで指示はお前が出しなさい」

『合格』という単語にひとまずの安堵を得たらしい。愛息を危険地帯に連れて行くかどうか、という話なのだ。私は徹底的に試すぞ。

「ではお父さん、遅ればせながら質問があります。この場で、退治する賊の情報を明かし

ていただくことは可能ですか？ 目的地や、規模など」

「いいとも。標的は、ここから北西にしばらく行つたところにある、難破船を根城にした連中だ。衛兵隊と一味の者から報告が上がっているが、正確な規模はわからん。確認できているのは十、といったところだ。それ以上は、現地で見なければ何とも言えん」

ラーナルクは私の回答を受けて、やや考え込み、いくらか機嫌を良くした。表情にはほぼ変化が無いが、私にはわかる。十人以上の賊集団が相手ともなれば、それなりに実戦と呼んで差し支えはない。今回は私という駒を放り込んで蹴散らすこともできない。それなりに歯ごたえはある、と踏んだのだろう。

次いで、用意した背囊のうち、幾らかを隣の盗賊に渡している。なるほど、此奴は余剰物資を持ち帰らせるためか。目的地が不明だったため、ある程度余裕を持つて支度したわけだ。それはいい。

しかし、欲を言えば最初にそのあたりを確認しておけば……。いや、本人もそれは気付いている。そのうえで、遠隔地まで移動することも考慮し仕度を整えて来たのだ。不問としよう。仕度を間に合わせたこととそれら柔軟な対応で、加点一、とでもするか？

だが、見過ごせない確認不足がある。こちらは減点三十だ。

別段、何点以上で試験合格、などと決めているわけではないが、あまりに減点が酷ければ、苦言を呈することになるかもしれない。

今度こそ仕度が整ったのか、ラーナルクは出発を宣言する。……もう少し意地悪をしてみるか。今の私は、空気の読めない凡蔵な傭兵だ。

「馬は使わんのか？」

「はい。途中から山中を進む予定です。その際、馬は邪魔になりますし、馬を用いて山を迂回しても、到着までの時間は然程変わらないと見ています。この面子なら体力的には問題ないはずなので、少々急ぎ足の徒歩で行きます。

それに、仮に現地まで馬で行ったとしても、不意を突かれ賊の逃走にでも利用されれば、面倒なことになります」

うん、今度は文句無しである。加点二としよう。それに、出会った頃の口の重さが嘘のようだ。普段はまだ重さがあるが、公私のけじめをつけ、切り替えられるのだろう。このあたりはトルドスや盗賊達に感謝しなくてはならんな。

私の満足気な首肯を見てほっとしたのか、ラーナルクの顔にも喜色が見える。愛うい奴。

他に質問が無いことを確認し、全員が背囊を背負ったところで、一行は町を出た。

道程はラーナルクの先の言のとおり、途中までは街道を進んだ。私やラーナルクが時

折狩りに出ており、最近では衛兵隊の巡回も少しづつ範囲を広げている。特に危険も無く、穏やかなものだ。

これが試験でもなければ、良い休暇となったであろう旅日和である。季節は晩夏から初秋といったところで少々時期外れだが、小春日和とでも言いたくなる。真夏でもなければ年中冬の如く寒いのがこのウィンターホールドという土地なのだ。暖かい日差しは貴重である。

……私が言うのもなんだが、よくこんな土地に好き好んで住もうだなどと考えたな。ノルドの寒さへの耐性は、少し異常だ。私が不死人でなければ、とてもではないが耐えられなかっただろう。

何事もなく半日ほど進んだところで、今日はもう野営にすること。明日はこの場所から、街道を反れて山に入るらしい。

すぐに日も暮れる。確かに頃合いではある。あるのだが、別に夜間での山中行軍を苦にする面子でもない。とはいえ、それをするにも一長一短あるわけで。このあたりは好みの問題と言えよう。加点も減点も無しだ。……最初の確認不足が響くなあ。

野営の仕度は、思ったよりずっと手際のいいものだった。ラーナルクが屋敷に帰って来なかったことなど片手で足りる程度しか無いはずだが、そのあいだに習得したというのだろうか。相変わらず物覚えがいい。

ちなみに、ラーナルクは火起こしに燧石ひうちいしを用いていたが、その他にも、極めて低威力に抑えた火炎の魔術の『スクロール』まで持参していた。随分と用意のいい愛息を見て、純粹に驚いてしまった。

私の間拔けた視線が小さな羊皮紙に向けられていることに気付いたのか、尋ねるまでもなくその心を答えてくれる。曰く、速やかに火を起さなければならぬのに、雨天や装備が濡れている場合、燧石だけでは時間がかかりすぎる。そしてそのような場合であれば、命に関わる事態である可能性が高い。ならば高価であつても軽く嵩張らずにすむ道具を携帯すべき、と。

我が愛息は、私の言う「試験」をかなり真剣に受け止めているようである。それはいいのだが、スクロールとは随分と贅沢なことである。

ああ、そういえば以前、懐が許すなら道具はいくらでも使え、というようなことを言った気がする。私の、遠距離から弓矢でちまちまと敵を削つたり、ひたすら苔を食いながら『糞団子』を投げて毒殺した経験から来た助言であつたのだが、よもや火起こし程度にスクロールを用いるとは。いやまあ、スクロールは確かに邪魔にならないし、我が家はそれが許される程度には金満ではあるのだが。発想が、なんといか非凡だ。一応、加点一としておこう。実際に役立ったのなら五だ。

火を囲み夕餉を摂りながら、明日の行動について打ち合わせを進めていく。どうやらラーナルクは、子煩悩^ブ集団^グの親玉^スからこのあたりの地図を借り受けていたようで、全員にそれを見せ、指し示しながら説明している。加点一だな。

ブレックス一味のように、頭目の求心力と配下の篤い忠義が根底にあるのなら、極論、説明など不要である。指示だけ出していけば、一味の全員が疑問を抱かずブレックスの思うとおりに動いてみせる（実際には指示が必要かも怪しい。言われずとも頭目の胸中を察して、勝手に最善手を取り続けるだろう。恐ろしい集団である）。しかし即席の一行ならそうはならん。面倒な揉め事や、後々の理解不足、連携不備を防ぐためにも、合理性を以てきちんとした打ち合わせを行うべきである。

このあたりは一味の者、というよりはギルドの教えではなからうか。メルセル・フレイや幹部達を見ていけば、そうした仕組み、というか体制が出来上がっていると考えられる。発案が出来物ガルスのものか我が友ブレックスのものか伝統的なものかは別として、それを教授されたのだろう。……ラーナルク自身が考えついた可能性も否定できないのだが。

打ち合わせによれば、明日は夜明けとともに街道を避けて山中を進み、賊の拠点である難破船まで近づく。これは、街道を監視しているやもしれぬ賊を警戒してのこと、という意味もあるようだ。直線距離で言っても山中を抜けたほうが近いので、悪くない判

断だと思われる。予定では日暮れ頃になる。

そして、完全に日が没したら夜襲をかけて一気に殲滅、とのこと。盗賊の技能を持つ者が三人と、姿や足音を消せる人間が一人いて、馬鹿正直に真正面から挑む必要もない。ふと気になったので、仮に率いるのがそのへんで雇った傭兵三人であればどのように動くか、ラーナルクに尋ねてみた。すると欠片の迷いもなく返答が来る。

「昼間に傭兵を囿として正面から攻めさせ、僕は背後から奇襲をかけます。その際、傭兵達には無理に攻めかからせるより、挑発に重きを置かせます。隠密行動も取れない者では夜間でも感づかれるでしょうし、視界が悪ければ、地の利のある相手に有利です。ならば開き直って昼間に仕掛けるほうが余程いい。勿論、報酬は首の数ではなく、こちらの指示した働きに応じたかどうか、とします」

道理である。不得手なことをさせて土壺に嵌るくらいなら、それらは助勢と割り切ってしまったほうが安定するだろう。当てにならない味方など、壁か囿くらいにしかならん。加点一である。

そう感心していると、まだ続きがあるようで、ラーナルクが更に口を開いた。

「またその際、傭兵の力量や性分から鑑みて一人選び、報酬に色を付けます。これは、最も腕が立ち、最も強欲な者が望ましいです。増額分は実際に前金で渡してもいいですし、信用させられるのなら口だけでも構いません。」

雇い主の目が届かないところでは、傭兵共はすぐに逃げ出すかもしれません。しかし一人でも踏み留まる者がいれば、奇襲の時間を稼ぐくらいはできるでしょう。

賊も傭兵も死んでくれれば面倒が無くて良いのですが、今後の風評を鑑みて、僕が自ら手にかけることはしません」

………逃走を防ぐための報酬云々はまだいい。いや、それさえも驚いてはいる。ラーナルクが傭兵を率いたことは無いはずなのだ。前々からあらゆる事態を想定していたのか、今、考えたのか。どちらにせよ見事である。加点一。

問題は最後だ。味方でさえ、金払いを惜しんで死んでくれれば御の字とは。しかも始末しない理由は、外間が悪いから、ときてる。一応、私でも報酬くらいは払うぞ。盗賊連中は十三の子供にどういふ教育をしているのか。まあいい。今は子の成長を喜んでおこう。頭が回って悪い、ということもないのだし。私は我が子が清廉潔白であろうが腹黒であろうが構わん。が、この件が終わったら、盗賊連中と話合いの席を設けるとしよう。場合によってはクラブが必要になるかもしれない。

話終わったラーナルクへ、眠るよう勧める。夜番は、通常どおり交代で務めることになった。今回限りなら、睡眠の必要性が薄い私が一晩中起きていても良いのだが、これは試験である。ラーナルクが今晚、警戒しつつ休息をとれるのか。翌日、万全ではない状態でも問題なく動けるのか。そのあたりが見たいからだ。

さて、明日はどうなるやら。私は、ラーナルクが戦力にならずとも失望などしないと思言できるが、それではあれ自身が己を許せなくなるだろう。かと言って、未熟な愛息を危険地帯に連れていき、死なれでもすれば私が亡者になりかねない。試しに手心を加えることはできん。できんが……あれにとつて良い結果になつてほしいと、今は地平線の遥か下に沈んでいるであろう太陽に祈りを捧げる。姿の見えぬ太陽は何も応えてはくれないが、代わりに火の中の薪がパチリと爆ぜた。

二九、試験前試験（中）

一夜明けて。……正確には、夜明け前には全員が起床し、野営の始末を済ませた。

ラーナルクにしても、無理をしている様子はない。どうやら、野営であつても十分に心身を休めることができるようだ。加点一である。私の心配は杞憂に終わった。伊達に孤児だったわけではない、ということだろうか。盗賊連中はあれを精神的に甘やかすが、けしてぬるい育ちはしていないのだ。

東の空が白んでいるのを横目に見ながら、山中へと入った。

さて、ここから日暮れ頃まで歩き通しの予定だったか？ これも『試し』である。本人曰く、体力的には問題は無い、らしいが、それが作戦全体を俯瞰して見たときに、『万全』であるのか、『それなりの余力があつたと判断できる』程度なのか、そのあたりは見極めたい。

命を落とすことが無いよう、ないしは命懸けにならないよう事前準備が大切なわけであるが、鉄火場においてはそのような事態がまま起こり得るものである。そして大抵の場合、そういつたときにこそ、気力体力が限界間際であつたりする。というか、追い詰

められた結果、諸々が限界を迎える、といったほうが正解だろうか。これは私の永い巡礼で得た経験である。

では、その不足の事態に際して、『万全の状態』で挑むのか、『それなりの余力』で挑むのか。どちらが望ましいかなど言うまでもない。

ラーナルクが昨日、どのようなつもりで「問題は無い」と発言したのか、その認識の深いところを見たい。

と、私が思考を巡らせていると、件のラーナルクから「質問をいいですか？」と声をかけられた。声量はかなり落としている。折角、街道にいるかもしれない賊を警戒しているのに、話し声で見つかっては問抜けもいところだ。質問自体は問題ない。

「お父さん、すみません。昨日聞きそびれました。」

お父さんは、戦力的にはそこいらの傭兵程度に抑える、とのことでしたが、それはお父さんの持つ不思議な魔法や指輪などの効果も含みますか？」

……正直、指摘されるまで私もそこまで考えていなかった。直接戦闘も、魔法の類も、ラーナルクの言うとおりにかなり制限しようと考えていたが、私の魔法や指輪の効果は、何も戦闘に関するものだけではない。

さて、どうしたものか。何もかもスカイリムの平均的戦士の水準に合わせるといいうなら、回復の奇跡なども使えなくなるわけだが。……いや、あまり意味が無いな。抑える

のは戦闘力だけにしよう。私はラーナルクへその旨を伝えた。

「ありがとうございます。では、今からでも構いませんので、隠密用の指輪を装備していただけますか？」

「たしか、姿をほとんど見えなくし、足音に至っては完全に消すという」

「言われたとおり、ラットウエイ襲撃やブレックス一味襲撃の際に用いた、隠密用の三つの指輪を装備する。」

「折角声量を落としてまで話をしているのだ。私だけが足音を立てて移動しては意味が無い。」

「何より、ラーナルクを含めた三人は隠密行動が可能だというのに、私だけがそうでないとなれば、昨晚話した仮定そのとおりになってしまう。私が賊に対し正面からの囹役を買って出て、三人が背後から奇襲。単純に賊の討伐だけを考えるのなら悪くはないかもしれないが、取れる有効な戦術がそれ一つでは、なんのための『試し』なのかかわからん。私はラーナルクの思考も試したいのだ。」

「などと偉そうに考えてはいるものの、指輪を付け替えて思ったが、これは私から言い出すか、言われずとも行っておくべきだったような気がする。非凡なる息子よ。頭の回らぬ父を許せ。この指摘は加点一である。後ろめたさをごまかすためではない。」

「普段なら戦闘の気配が近づくにつれ、今少し思考の冴えが齎される気がするのだが、

此度はどうも鈍いように思う。

ラーナルクを試す、というある種の非当事者意識を持っているがために、緊張感が足りていないのだろうか。……あり得る。ついでに言えば、付き人が二人いることも大きい。正直な話、この面子であれば賊が十であろうが、討伐自体は然程難しくないように思うのだ。

ラーナルクがどのような手で賊を討つつもりなのかはまだわからないが、ここ数年での伸びを鑑みれば、盗賊達のいやらしいやり口もそれなりには修めていることだろう。定石で言えば、眠っている賊を一人一人静かに始末し、残りも不意打ちで黙らせる。首尾良く行けば、それは最早ただの作業だ。見つきりさえしなければ、極論、百人が相手だろうが特に支障は無い。仮に見つかっても、残った賊は百人も居ない。せいぜい片手で足りる程度だろう。何の問題も無いな。

失敗したかもしれん。『試し』を行うのなら、もう少し難度の高い案件にするべきだったか？ いや、だがそもそも首長の兜奪還に同行させるかどうかの『試し』なわけで、あまり高難度ではそもそも試す意味がなくなり、だがそれがあまりにぬるくては『試し』にもならないわけで……。

私は、『やはり頭の回らない者が慣れないことをするものではない』、という教訓を得た。得たところで、数百年似たようなことを繰り返してきたこの身は、学習能力が極め

て衰えているように思える。特に、頭脳に関して。

これが魔法の習得であれば、解釈、理解など、然程苦にするものでもないのだが。

今はまだ父を立ててくれる出来た息子であるが、私が戦闘力ばかりの阿呆だと真に理解してしまった場合、どんな目が向けられるのか。今から少々恐ろしくはある。

そうこう考えていると、山の木々から明るい地面が見えるようになってきた。どうやら、山裾まで来たらしい。

ラーナルクの様子は……十分に余裕がありそうだ。ウィンターホールド中を毎日走り回っている成果が出ているようである。加点一。

ただ、一つ問題が生じた。地図では難破船のすぐ側まで木々が広がっているように書かれているのに、実際には開けた海岸が広がっている。まだ距離はあるが、このまま進めば、見張りに見つかるかもしれん。

時刻から言っても、日暮れまではもうしばらく猶予があるようだ。山が地図より狭かったためか、一行の足取りが早かったためか、両方か。遅いよりはマシであろうが、いずれにせよ若干予定が狂った。

さて、我ら一行の長殿は如何なされるおつもりか。当初の予定通り、木々に隠れて夜を待つか、それとも何らかの手を打つか。

「二度、このまま木々に隠れて休息とします。短時間の仮眠を取ってください。それでも日暮れまでは猶予があるでしょう。折角ですから偵察を……」

言いかけて、ラーナルクの顔色が青くなる。なんぞ視線の先に化け物でも出たかと思いい振り返るが、何もいない。さて、この存外顔に出やすい（慣れない者は「何を考えているかわからない」などと世迷い言をほざくが、私や盗賊連中ならすぐにわかる）息子がここまで取り乱す理由と云えば、一つしか思いつかない。私は十中八九当たりだろうと思いつつ、ラーナルクの反応を待った。

「……………お父さん、すみません。これも聞きそびれていました。」

傭兵としてのノメイ氏、またはウィンターホルドの錬金術師としてのお父さんがこの討伐にかけられる時間的猶予は、どの程度ですか？ 更に言えば、僕にかけられた期限はありますか？」

「おお、流石に気付いたか。安心しなさい。錬金術師としては、十日ほどは予定を空けると、皆に伝えてある。あまり住民やブレックスにも心配をかけるものではないからな。伸ばしても二日程度か。あまり意味は無いが一応答えておくと、凡蔵傭兵としてなら、この討伐が終わるまで、だ。」

お前に対しては特に無いと言えは無いのだが、諸々鑑みて、半月から二十日ほど、と考えていた。そのあいだであれば、いくらでも時をかけて構わんぞ」

慰めのつもりで努めて明るい声色で返答したのだが、ラーナルクはこの世の終わりのような顔をしている。自分で気付いたのだ。減点を三十から二十五にまで軽減してやろう。あとでこのあたりの話もしてみるか。

しかし大袈裟なヤツめ。盗賊連中から話を伝え聞く限り、私の前でなければ、なかなかぶてしい態度でいることが多いようであるらしいのに。というか、一行の長がそのような顔をするものではない。

ひとまず、毅然としているよう窘めた。ラーナルクは頷き、指示を出す。切り替えはできたのか、声に力が戻っている。

「では、お父さんに偵察をお願いします。お父さんの指輪の力であれば、日が出ていてもまず見つかりません。そのうえ、遠見もできますから最適です。

できれば、船をぐるりと一周回るようにお願いします。外からわかる範囲だけでも、敵の配置が把握できれば大いに助かります。こちらからでは見えない裏手に、逃走用の穴や小舟が用意されているかもしれませぬ。それを把握しているといかないとでは、動きに違いがでます。追加の指示は偵察結果を鑑みて出します。……冷たい水に入らせてしまうのは心苦しいのですが。

そのあいだに、二人は休んでおいて。お父さんが戻り次第、休息を代わってもらおうか
ら」

物怖じせず、必要な行動、それを行う理由をきちんと伝える。良い指揮官である。誰だつて面倒はごめんだ。「何だつてそんなことをしなきゃならねえ」などと反感を持たれる前に、自分から説明を惜しまない姿勢を見せることは、決して損にはならない。加
点二。

逆に言えば、そこまで言つてわからぬ愚図であれば、作戦前か作戦決行中にでも始末してしまふが吉であらう。使えない味方は強敵より厄介である。

が、一つだけ無理があつた。私は水の冷たさ程度で凍え死ぬことはないのだが、これに關しては言つていなかつただらうか？

「概ね承知した。しかしラーナルクよ。私は、泳げんぞ？

正確に言えば、ただの人であつたころには苦もなく泳げたのだが、不死人となつてからは、不思議と泳げなくなった。鎧や服を脱いでも、足が付かない深さになると沈むのだ。

だから、船の裏手の偵察は、水深にもよるが、私では無理かもしれん」

「……………では、訂正します。少々遠巻きでも構いませんから、主に陸地から可能な限り難破船を探ってください。水辺は無理のない程度で大丈夫です」

私は了解の旨を告げて、木々の中から飛び出す。後ろから「お父さんでもできないことつてあるんだ」などと聞こえる。随分と呆氣にとられていたな。我が愛息は、この不

出来な父をやたらと買い被っているようだ。おそらくだが、『できること』の数で言えば既にお前もそう変わらんと思うぞ？

私の場合、直接戦闘であったり、ソウルの業であったり、それを利用した魂縛や付呪であったり、この地では特殊な魔法であったり、錬金術であったりと、多少人には真似しづらい領域に手が届く、というだけの話だ。ああ、最近死んでいないから忘れ気味だが、死んでも生き返るな。生者の営みも、可能だが多くは不要だ。

とはいえ、それだけと言えばそれだけなのだ。手持ちの情報からものを考えられるラーナルクの『できること』は、これからもどんどん増えていくことだろう。一方、私のそれはほとんど望み薄だ。叶っても数える程度だろう。

さてなあ。このあたりの誤解というか幻想から目覚められたのなら、あれの悩みの解消の鍵になるような気もしているのだが。

しかし、それはつまり父としての威厳が損なわれるという恐るべき事態を同時に表してもいるわけで……。今度アーチルにでも相談してみるか。奴の息子も年頃だ。案外似た悩みを抱えているかもしれない。もし奴にこの手の悩みが無く、万一こちらを小馬鹿にでもしてきたのなら、ウインドヘルムで『義侠のアーチル』を高らかに歌い続けてやる。

それはそうとして、一行の長から仰せつかった仕事はこなさねばならん。

身を隠せる起伏や岩などはあまり無いのだが、相手はブレックス一味ではない。見張りの視線を意識して立ち回れば、然程問題はあるまい。

まっすぐ近づくと船首側に出たが、陸に乗り上げるようになっており、高い位置が手前ではちと見づらいな。しかし、その一等高い舳先へつきに一人の見張りの上体が見える。まっず一人と。

舳先に向かって右手は海だ。どの程度偵察できるかは海岸の形状にもよるのだが、ひとまづは回り込むべく海へ入る。私の指輪は足音だけではなく、足に当たる波の音さえ消してくれる。こういう事象を目にすると、竜の学院の探究心と技術力には驚かされる。とはいえ、我が友はその学院からいいように使われていたわけで。指輪は便利でも好きにはなれん組織である。

足が水に浸かつてすぐに判明したことだが、存外すぐに水深が増すため、海に入つての偵察はほとんど不可能であった。木々の中から出たあたりで船尾側もちらと見ておいたが、船首側とさして変わらない地形をしていた。おそらくは、水深云々も同様だろう。

俯瞰して見ると、現在陸地となっている場所は、槍の穂先の如く海へ突き出す形に

なっている。これは全くの想像だが、潮が満ちて水嵩が増した頃、天候の荒れた夜にでもこの陸地に船腹を擦る、というか押し付けるようにして難破したのだろう。となると、この船はあまりウィンターホールドに立ち寄ることの無い船であったか、航海士がそうであったと考えられる。何せ、この場は入り江のようになっていたため、詳しいものであれば、そもそも近づこうとはしないはずだ。何らかの事情があり坐礁覚悟で沖を避けた、とも考えられなくはないが。

いずれにせよ、このような事例を見て、これから加速度的に進むはずの町の復興を鑑みると、早急に灯台と港の整備を行う必要がある。海運が叶えば、物資の搬入も楽になる。町の住居は移住者の数に応じてその都度対応するとして、やはり先に灯台と港だな。物資があれば、住居の確保とて容易になる。移住者をまとめて運んで来ることもできる。私は頭の隅に、ブルックスへ相談する復興計画の優先順位について、記憶した。

ちなみに、海側へ舳先を僅かに過ぎたあたりで、一人、屋外にて寛いでいる賊を見た。こちらは見張り、というわけではないのだろうか、これで二人だ。

一度海から出て陸に戻り、船尾側へ移動する。その途中、船腹のあたりに三人の賊を見つけた。船腹は中程に大きな穴が空いている……というか船自体が二つに折れており、なんなら千切れているという表現が相応しいようにすら思う。何せ、外から船内が丸見えなほどのだから。

甲板には渡ししの橋がかかっていたが、船底付近にそれは見当たらない。賊も、別れた船底の右に二人、左に一人、といった具合だ。

勝手に塹に定めている賊に言っても詮無いのだが、自分達の居住空間くらい、もう少しマシにしてはどうなのだろうか。私達が襲撃する際、船内の移動が面倒ではないか。地上との連絡路も、階段が甲板へ向けて、一つ取り付けられているだけだ。そのほうが防衛しやすくなるのは理解できるが、そんなことは私の知った話ではない。

そのまま船尾側も確認したが、思ったとおり、船首側の地形と同様のつくりになっており、海からの偵察は困難であった。そのまま船尾から海を越えてまっすぐ視線を巡らせれば陸地が見えるため、移動してから遠目に左舷側の偵察ができなくはない。しかし、それをするには海を渡る必要がある。

ラーナルクは追って指示を出すと言っていた。今はあまり時間をかけず、一度戻るべきだろう。ついでに言う、船尾で椅子に座って寛いでいる賊が一人いた。これで計六人か。

スカイリムの北の果の地で、賊が全員船の外に出て見張りを行っているとは考えづらい。残りは船内で休んでいるのだろう。

となると、賊の数は十程度という報告にもうなずける。ちと見張りが多いように思うため、正確には十から十五、といったところか。

さてさて、私は言われたとおりに偵察を終えたが、ラーナルクが出す次の指示とは何であろうか。息子の指揮下において行動する、というのも、存外悪い気分ではないな。頼もしく成長してくれたものだ。

その頼もしい長殿は、賊の数について、報告を受けて気付くだろうか。まあ、おそらく問題あるまい。先程の顔色を見れば、己の行動を洗い直し、あらゆる想定を巡らせているはずだ。私が言わずとも思い至るだろう。

山裾まで戻り、見てきたことを報告する。付き人二人は「問題無い」とでも言うような表情。実際、そのとおりなのだろう。

ラーナルクはと言えば、少し考え込んでいる。私にこれ以上の失態を見せまいとしているのだろうか、あまり縮こまっても良い結果にはならんだろう。まあ、それも含めて『試し』か。

「お父さん、お手数をおかけしました。お父さんの懸念どおり、現状、難破船に居る賊の数は、十五程度と見積もるべきでしょう。

ですが、それで全員だとは限りません。そのため、これよりこの場を野营地とし、お父さんが町へ帰還する限度である、最長九日間の張り込みを行います」

気付いた、気付いたな。一度失敗して精神的に若干の余裕が無くなった息子を見るの

は、正直に言つて楽しくない。だからこそ、本人のためにも見落とし無くことを進めてほしかったわけだが。気付いたな。善哉。いやまあ、私は問題無いだろうと信じており、何の心配もしていなかったのだがな。加点三である。

「九日を超過しても成果が得られない場合、お父さんを除いた三人で更に数日張り込みます。それでも現状以上の情報が得られない場合は、把握している人数が全て、と判断して襲撃をかけます。」

仮に、お父さんが離脱したあとにそれなり以上の敵増援があつた場合、一人を使いに出して、こちらでもウインターホールドから増援を呼びます。

こちらの戦力が傭兵一人分減り、敵戦力に当初の報告と大きな開きができるわけですので、一度、態勢を整えることは道理と考えます」

不測の事態にも備えるか。いいぞ。完璧だ。加点五としよう。今が試して無ければ、頭を撫でくり回しているところだ。私が人前でその手の触れ合いを行い、ラーナルクが嫌がったことは無いが、そろそろ見栄や外聞も出て来る頃合いだろう。ここ一、二年のあいだ人前では控えている。息子を可愛がりたいときに可愛がれないとは、なんと辛い役目であろうか。

「お父さんからの報告で難破船に留まっている人員の数はおよそ把握できましたが、賊働きのために本拠を離れている一行がいけないとは限りません。我々の目的があの一昧

の討伐である以上、討ち漏らしがあつてはいけません。更なる監視と偵察は必要です。

また、街道の監視を懸念して山中を通りこまで来ましたが、実際に監視がいるのかどうか、居るならどの程度なのかの確認も必要です。元々、仮に居たとしたら監視以外の全ての賊を難破船で一網打尽にした後、帰り道に討ち倒す予定でした。しかし、報告よりも大きな規模の一味である可能性が高まりましたので、偵察に時間をかけるあいだに、そちらも確認しておきます。

いずれにせよ確証を得ることは難しいでしょうが、『他に賊は居ない』という見通しを立ってられないければ、軽々に攻め入ることは悪手です。変事に気付かれて、こちらの把握していない賊が逃げ散れば厄介なことになります。

……二人共、休憩は終わりにして、適当に獲物を狩つて来てくれない？ あと水も。僕が用意した分では、とても足りないから」

ラーナルクの話しぶりは、私の顔色を窺っている、と思われないよう卑屈な視線こそ向けては来ない。が、付き人達に話している際にも、ちらちらとこちらへ視線を寄越してしまっている。これは、安堵からだろうか。自覚は無いが、私の顔はどうせまた締りの無いことになっているのだろう。仕方あるまい。私は『息子の凄いところ』が見たいし、ラーナルクは見せたいのだ。尤も、私は凄くないところも愛らしいので見たいが。

ラーナルクの指示に従い、付き人達は狩りにでかけ、私達は野営の準備を始めた。

ラーナルクは、先程気付いた失態を気にしてか一人でやると言っていたが、気付いたのならそれでいいのだ。少しずつ、必要な事柄を覚えて行けばいい。十三の子供が、そんなに気にすることなどないのだ。

それに何より、親子の共同作業というのが楽しい。枝ぶりの良い場所を選んで、四方からそれらを縄で寄せる。更に、折った枝の葉をうまく組み合わせて簡易の天幕とする。また、折った枝を立てるあたりに溝を彫り、雨が降っても天幕の中に水が染みてこないようにする。ついでに、天幕内の地面にも枝を敷く。

本当ならマンモスの毛皮でも出してやりたかったのだが、今回はラーナルクの見通しの甘さと急な作戦変更によつて、物資が不足しているのだ。それを私が補つてやるのは、『試し』にならん。不測の事態での対応力も採点基準である。

などとは言うが、戦闘以外での私の魔法が解禁されたため、私がいるあいだに限り、薪は使わないことにした。煙で賊共に察知されてはつまらんからだ。鍋を温めたければ、少々面倒だが、私が直接呪術を用いるか、炎の力を持つ武器で温めるよう指示された。元の持ち主が草葉の陰で泣くかもしれないが、今は私の所持品なので、知ったことではない。

これは私から水を向けたのではなく、ラーナルクから言われ、決まったことだ。天幕を用意しているあいだに、ある程度吹つ切れたようである。使えるものなら親でも使え

と、控えめに言つてこき使われた。

ソウルの業で取り出したマンモスの毛皮は不可で呪術は可という矛盾しているよ
うだが、ソウルの業を使う傭兵はおらずとも、火炎の魔術を習得している傭兵の存在は
十分にあり得るため、だそうだ。理屈が立ったなら、それを使わず体力を浪費すること
こそ非合理かつ怠慢だ、と判断したらしい。これは寧ろ加点二であるな。正直なところ、
弱い火を出し続けるのは、なかなか骨が折れたが。

野営の準備が整つた頃に、付き人達が戻つてきた。成果は……兎が二羽か。時化した連
中である。私が文句を言つと、「旦那じゃねえんですから、『狩りに行け』と言われて、言
われたとおりに獲物を持ち帰れるだけ上等つてなもんですぜ」と返された。

理屈はわかるが、食べきかりの子供がいるのだから、せめて鹿くらいは獲つて来いと
言うに。

こここのところ、盗賊連中は我が愛息を鍛えるのに夢中で、己の鍛錬が疎かになつてい
る気がする。というわけで、「罰として、狼か鹿程度の食いのある獲物を持つてくるま
で、狩りの当番は付き人で固定しては如何か？」と長殿に打診してみた。すると、まだ
少年らしい線の細さを残す長殿はクスクス笑い、付き人達にそのとおり勧告した。言わ
れた二人は「そりゃあねえぜ！」だのうるさいが、長殿が決めたのだ。文句は言わせん。
宣言してもいいが、この笑顔を保つためにも、私は断固として狩猟当番を強いることに

する。

そうして、適度な緊張感を保ちつつもなんだかんだと和やかな、休暇のような様相を呈した監視と偵察の日々が始まった。

監視を続けて七日目。ラーナルクを筆頭とした討伐部隊の一行にもそろそろ焦りの色が見えてきた頃だが、凡蔵傭兵を名乗る男に至っては、何処吹く風、といった具合だ。ラーナルクとしては父の前で確かな成果を上げなければ、という思いがある。しかし実のところ、男からすれば『試し』はもう終わったようなものだ。

男が今回の『試し』でラーナルクに求めたのは、戦闘能力などではない。そんなものは付き人達の話や、日々の稽古で『戦士足り得る』と既に認めている。見たかったのは、不完全な情報から状況を推察し、必要な手段を講じる手腕。現地で追加される情報と、変化する状況に対する柔軟な発想。つまりは思考力や判断力といった、対応力だ。

男は、自らの自覚のとおり、あまり頭が回るほうではない。だからこそ、同じ道程を辿りながらも、何度も命を落とした。そうして無理にでも戦闘能力を磨いたわけだが、同時に、事前の考察力と、現場での洞察力や判断力も培われた。これが有るか無いかの

差は大きい。何せ、それらの力の有無を自覚し始めた頃から、自身の死亡回数が目に見えて減ったからだ。

事前に考え、現地でも考え、答えを出したのなら、肚を括って断行する。これができれば、初めて訪れる場所でも、然程苦戦することはなくなっていた。だからこそ、己が最も慈しんでいる息子に、それが備わっているのかを確認しなかった。

こればかりは事前に通達しては『試し』にならない。そのため、兜奪取前の『試し』を「親のわがままで」と言つて煙に巻いたのだ。計画を進めたいブレックスにも、「肝心な場面で己が何をすれば良いのかもわからぬ愚図では、役に立たん」と自らの経験を踏まえて話を通した。彼の頭目をして、それは道理だと認めざるを得なかった。

これで、ラーナルク本人の希望する稼業が自由気ままな冒険者だ、というのならば、『試し』など必要なかった。戦闘で遅れを取ることはまず無いだろうし、その能力すら年々高まるであろうことを鑑みれば、何の心配もはいらぬ。盗賊の、敵の意識の隙を付くいやすい戦法も使える。それなり以上にやっていけるだろう。

しかしブレックスや男には、ラーナルクに任せたい仕事がある。それは本人の悩みを解決する一助にもなると考えているし、うまくことが運ばば、幾つかの面倒事も消えて無くなるかと踏んでいる。

だが、それも本人にある程度の自負があつてこそ、だ。それが無ければ、話を打診し

た途端に、ラーナルクと男の築いてきた関係が全て崩れかねない。自分には力がある。だからお父さんは自分を頼ってくれた。ラーナルクに芯からそう自覚させるためにも、『試し』が必要であったのだ。

そして、ラーナルクは既に男を満足させるだけの力を見せた。言ってしまう、男にとってこの先の襲撃などは、消化試合のようなものだ。討ち取られる賊からすれば、冗談ではないだろうが。

男としては、自分がいるあいだに別行動を取っていた賊が合流すれば良し。一切の躊躇無く一網打尽にする。自分の離脱後に敵戦力が合流した場合、愛息が危険な目に遭わないとも限らないが、そのときは建前を捨ててその身を守るつもりでいる。とはいえその場合は、ラーナルク自らが「態勢を整える」と口にしたのだ。無理はすまい。仮に現状の敵戦力へ襲撃をかけるにしても、三人で十分だろうと踏んでいる。

更に言えば、男がラーナルクに伝えた、自らの滞在期限が十日だ、というのは、全くの嘘である。実際はラーナルクに伝えた二十日を最大期限として、相談役を通じて町には報告してある。そのため、ラーナルクへ告げた期限を過ぎたあとは、距離をとって陣取り、一部始終を見届けるつもりでいる。万一愛息に危険が迫っても、遠見遠射の鷹の指輪を装備し、フアリスの黒弓に『羽根矢』を番え雨霰と降らせる気である。場合によっては、弓矢を『鬼討ちの大弓』と大矢に変えてもいいとすら考えている。その場合、人

であつた賊がただの肉片となり、装備品などの戦利品が目減りするだろうが、些細な問題である。

「どれだけ厳しく『試し』だなどと言つたところで、本当に死なれてしまえば元も子もない。危なくなれば、躊躇せず助けるつもりでいる。」

それはそれで、かえつてラーナルクの悩みが深刻化しそうではあるが、力量の足りない者を更に危険な場所へ同行させるわけにもいかない。その場合は、また別の手を考えるか、長い時をかけて諸々を解決するしかないだろう。

ある程度の割り切りは見せたラーナルクではあるが、張り込みが長引くにつれ、自分の犯した失態が脳裏に過るようになった。余裕が出て来た、と言えなくもないが、襲撃に備えた今の状況では好ましくないだろう。

男は夕餉の際、悩める青少年である息子を自分の隣に座らせ、話をすることにした。訴えかけるのではなく語りかけるときは、対面ではなく隣がいい。

「ラーナルク。父が一つ、お前が今、何を考えているのか、当ててやろう。町を出る前に、この討伐指令の期限を確認しなかつたことを気にしているな？」

ラーナルクは凶星を突かれ、一瞬息を呑んだが、認めないわけにもいかない。ゆっくりと頷いた。付き人達は様子を見守っている。

「これがなあ。お前が『冒険者になりたい』とでも言うのであれば、別に問題は無かったのだ。

基本的に首長府が冒険者へ討伐指令を出すときは、失敗を織り込んである。それがそれだ。自らが誇る衛兵隊でもない、何処の馬の骨とも知らない者が、何故戦力としてあてにできる？ 相手はごろつきに毛が生えた程度の存在だ。

だから期限なども無い。達成されれば儲けもの、といった話だ」

もう少し正確に言うならば、首長の従者などに納まり、そのうえで冒険者として活動するのならば、少なくとも戦力としては見られているだろう。だからこそ、執政から名指しで指令を下されることもある。

しかし、酒場や宿屋で触れを受け取るだけの場末の冒険者に、為政者側が何の期待をすると言うのか。そのような自分の目の届かない場所での話まで勘定に入れる考えの甘い首長が居たとすれば、親族か側近がその地位から引きずり下ろすだろう。

「しかし、今のところお前が冒険者になりたいと言いつ出したことは無い。父の見る限り、そう思っている節も無い。

であればだ、お前にはそのうち色々仕事を頼みたいと、私やブレックスは考えている。そうなる、お前に期限の無い仕事など有り得なくなるのだ。わかるな？」

ラーナルクは男やブレックス一味が町を牛耳ろうとしていることは知っている。そ

のために、多少後ろ暗いことに手を染めていることも。その手伝いをするとなれば、期限までに、案件を確実に成功させる。それが前提条件となる。失敗した際の副案も有ろうが、大なり小なり計画の見直しが必要になるだろう。そして、重要な案件ほど、失敗したときの修正度合いは大きくなる。故に、それは許されない。おそらくは男が出張ることになるはずだ。

ラーナルクとしては、そんな重要な案件に取り掛かる「お父さん」の助けになりたいのだ。ならばたしかに、自分に、失敗しようがいつ成功しようが構わない、などといった気楽な仕事が続いてくることはない。

ラーナルクは再び頷いた。今度は、先程より力が無い。

「お前は賢い子だ。十分すぎるほど身に沁みていることだろうが、もう少し付き合いなさい。お前が生涯、今日の日のことを忘れないために、だ。」

……あるところに一人の英雄が居た。名はグンダ。私個人とは友でもなく矛を交えただけの間柄であったが、人々は彼を『英雄グンダ』と呼んだ。父も二度戦ったのだが、とんでもなく強かったぞ。特に二度目だ。大柄を自負する父に倍する体躯。それに見合った大振りの斧槍と重厚な鎧兜。何より、その重量に見合わぬ機敏な動き。想像してもみなさい。デカくて重いヤツが速いのだ。弱いわけがない。『ズルをするな』と思ったほどだな。

最初、父は、自らの持つ指輪のような、魔法の装備を身に着けているのだと思った。しかしグンダを討ち倒したあとで装備を検分したが、それらしい効果は無かった。彼は己が身一つで、それだけの強さを身に着けたのだ。正に、『英雄』と呼ばれるに相応しい男だった。

ラーナルクは逞しい想像力で、グンダの巨軀と、その戦う姿を思い描いてみた。「お父さん」に倍するとなれば、それはもうほぼ巨人だ。それに見合った斧槍？ どれだけ長くて重いのか。常識的に考えて、それは鉄塊であり武器ではないだろう。そして、盗賊ですら捉えられない速さを持つお父さんが言う『機敏』な動き。口には出さないが、ラーナルクは男と同じく「インチキだ」と思った。英雄と讃えられるのも無理からぬことである、と。

「しかしなあ。彼はこうも呼ばれた。『遅れてきた英雄』と。……私がスカイリムに来る以前の事情、話は覚えているな？ 私が火の無い灰……いやまあ、薪の王としての残り火があるわけだから、『火の無い』というのもちと違うのだが、今は置いておく。

私が灰として呼び出されたのはな、グンダが、彼が継世とも言うべき火継ぎに間に合わなかったからだ。だから私が呼ばれた。彼は不足無い力を備え、試練に臨んだ。結果論でしかないが、間に合いさえしていれば、父と同じ準神になれるだけの存在であったのだ。私と彼を分けたのは、火継ぎに間に合ったか、間に合わなかったか、ただそれだ

けの違いだ」

ラーナルクは、男が言いたいことも、このあと言うだろうことも理解していた。それでも、男の言葉を待った。お父さんの声で以てそれを聞き、記憶に焼き付けるために。「お前に任せる仕事如何で、世界がどうこうなることはまずない。しかし、仮に失敗した場合、それによつてかけがえのない者を失うなり、取り返しのつかない事態になるなり、そういった可能性は十分にあるのだ。

彼の英雄は絶望から命を絶つことも無く、いつ訪れるかも知らぬ未来に望みを託した。それがどれだけの覚悟を必要とした決断であつたか、父には想像することしかできない。だが、あまりに悲哀に満ちたものであつただろうことは、理解しているつもりだ。

我が愛しの子よ。頼むから遅れてきた英雄になつてくれるな。世評などは、どうでもいい。私にどう思われるかなども、どうでもいい。お前自身のために、為すべきことを為し、成すべきことを成し遂げなさい。

……父の説教はこれで終わりだ」

ラーナルクが焼き付けようと考えたその声は、酷く哀愁漂うものだった。おそらく、その英雄と自らを重ねているのだろう。

本当は「でもお父さんは間に合つて、成すべきことを成したんでしよう？」と言いたい。だが、男が聞きたい言葉はそんなものではないだろう。悲しみと、哀れみと、尊敬

と、憤りと、絶望への共感と。そのほかにも、ラーナルクの思いつかない様々な思いが、男の胸中には渦巻いているように思える。

グンダなる男は、お父さんに大きな痕を残したようだ。それが疎ましいような妬ましいような、しかし自分が踏み入って良い領域ではないような。グンダに触れた話は然と胸に刻んだが、その存在自体は、あまり好きになれなかった。

だからといって、男の思いを無駄にはできない。自分は決して『遅れてきた英雄』などとは呼ばれない。そうならないために、全ての力を尽くす。あえて微力とは言えない。普段から鍛え、備え、思考を止めず、難に臨んでは須らく達成してみせる。

ラーナルクは、自らの失態でお父さんにあのような哀愁を齎さないと、固く誓った。

話しているうちに夕餉も済んだため、ラーナルクは天幕に下がった。今日の夜番は付き人の二人が担当する……のだが、無駄に殊勝な顔を浮かべている。男のした話の規模が御伽噺に過ぎて、どう反応すれば良いやら、迷っているのだ。それを見た男は二人の頭に手刀を落とし、「盗賊が腹を読まれてどうする」と叱っている。そして、自分が離脱するまでの夜番を申し付けた。情けない声を上げる付き人達だが、お父さんの真剣な話をどこか他人事として聞いている連中が悪い、とラーナルクは少しいい気味だとすら思った。

ラーナルクは横になり目を閉じて、先程聞いた話を、繰り返し、繰り返し脳内で思

い出していた。お父さんの声を。夕餉の香りと味を。俯いていたために並んで見えていた、自分とお父さんの足を。爽やかな夜風を。五感全てで、父の教えを聞いていた情景を記憶しようとした。

既に、絶対に忘れない、という自信はある。それでも、父が自分に伝えたかった思いを、余すところなく血肉にしたかったのだ。それは、「これ以上は翌日に障る」と判断する時刻まで、ずっと続いた。

翌日の昼、見張りに立っていた父がラーナルクに告げる。

「吉報だぞ我が息子よ。骨の有りそうな輩が、手下を率いて難破船へ向かっている。おそらくあれが頭目だろう。荷車に戦利品も見えるな。襲撃は楽しくなりそうだ」

からからと笑う男を見て、「お父さんのそういう感覚だけはまだわからないな」と思うラーナルクであった。

三〇、試験前試験（下）

昨日の昼、こちらの読みどおり出稼ぎに出ていた賊が罫へ戻ってきた。

出稼ぎ組は全部で八人。難破船にいるのが十五程度との見込みであるため、全部で二十五弱、ということになる。賊にしてはそれなりの大所帯と言えよう。

出稼ぎ組の帰還を受け、襲撃をかけるとラーナルクは決めた。そろそろ私の告げた期限が迫っていることもあり、このあたりで区切りとしたようだ。実際、時をかければかけるほど良い、というわけでもない。賊による被害は拡大するし、その分だけ首長府に寄せられる失望の目は増える（尤も、ウインターホールドは未だ町以外の村々について手付かずであるため、略奪を受けたのは、他地方である可能性が高いのだが。外交上、「本拠が自領にあるにも拘らず何の手も打っていない」などと咎められては不味いのだ）。

襲撃をかけるにしても、別に私という戦力云々が大きな要因ではない。罫にある調理場や天幕の数を見れば、難破船の中で居住している者共を勘定に入れたとしても、おおよその人数は割り出せる。賊の頭目らしき別働隊（あるいは本隊）が戻ったことで、その数に合致したのだ。ならば、これでほぼ全員が揃ったと判断し、行動に移るのは悪い

考えではないだろう。

ラーナルクの説明によってそれらの考えが一行に共有された。凡蔵傭兵としては、雇い主の言い分に従うまでである。

作戦、というほどでもないが、段取りはこうだ。

まず、連中はそれなりの戦利品を得ている様子であった。余程お固い性質の頭目でもなければ、賊共は酒盛りでもするだろう。宴も、大いに盛り上がるはずだ。それが静まった頃合いを見て、襲撃をかける。

あるいは、奴等なりの品を捌く経路があり、そこへ乗せるために戦果到着直後は慌ただしくなるかとも思ったが……その様子もない。

分捕った武器に血や泥が付着しているのに、特に気にした様子が無い。私はブレックス一味の無駄のないやり口に慣れてしまったが、腕っ節のみを頼る小規模な悪党など、その程度なのかもしれない。ああ、勿体ない。すぐに洗えば、錆や変色も抑えられると言うのに。

私は、もう少しで我々の戦利品になるであろう武器を遠目に見ながら、雑な扱いをする賊共に苛立ちを覚えた。我々の懐に入る金銭を目減りさせるとは、許せん輩だ。そんなことだから賊なのだ。

更にあるいは、奴等が文字どおり夜通し騒ぎ続け、そのまま夜明けを迎えるかもしれない。その場合は、払暁と同時に西から攻め入る。

不思議なもので、多くの者は日の出に際し、東の地平線へ目を凝らしてしまうものなのだ。これは、世界の別を問わず、人という生き物の本能なのではないかと思うことがある。

だからこそ、その反対側から。そして、襲撃に気付いた者から優先的に仕留めていく。これが昼間であり、『日を背にして山の斜面から逆落とし』というのであれば、陽光を背にする意味もあるだろう。だが、日の出の光量では然程目に負担はかからん。であれば、単純に意識の逆をつくほうが得策であろう。それでも逆光であれば、卑怯戦法の細工がバレにくいという利点はあるのだろうが、ラーナルクはそれよりも不意打ちの優位性を選んだ。

襲撃にあたっては、私の教え、というよりは盗賊の流儀が採用されることになった。つまりは不意打ちをするにしても、敵の強弱云々より、とにかく静かに、とにかく素早く、確実に無力化していく、とのこと。

もし手強そうな者が居てその妨げになりそうな場面があつたなら、全員でかかつてでも迅速に黙らせる。大切なのは、賊に対し圧倒的少数である我々が、如何に連中を処理するかということ。言ってしまうえば、作業的であればあるほど望ましい。そういう話

だ。

……盗賊連中の『盗みに殺しはナシ』『仕事はスマートに』という心情は知っているつもりだが、こと戦闘になった途端、完全に暗殺稼業の人間に早変わりするのはどうなのだろう。此奴等が血生臭い話に慣れているのか、それともこんなことは序の口で、本職である闇の一派は更に驚くべき腕前を備えているのだろうか。以前にもあまり近寄りたくないと思った集団であるが、今回の一件で、私は更にその念を強めた。

そして、あわよくば奇襲攻撃で全員を片付けられれば御の字だが、まずそうはならない。その場合はラーナルクの合図で攻撃に移る。その際、敵頭目の相手は私の担当である。

これは、純粋な戦力の配分として、戦士である私は頭目の足止めに注力し、盗賊たる付き人達やラーナルクがその素早さを遺憾なく発揮して取り巻きを迅速に倒す、という役割分担からだ。今回私は凡蔵傭兵だと断つてあるのだ。実際、そのあたりにしか使い道は無いだろう。

一応、別に死なれても構わん傭兵を最も厄介な相手にぶつける、という意味もある。時間が稼げれば、死んでくれてもよし、と。

更にいえば、頭目を中心として見るなら、比較的外周に位置する取り巻き共を倒すよう指示を出した場合、彼等の戦力差に怖気ついて、傭兵が逃げ出すかもしれない。その点、

敵の中心にぶつけられれば、どうやっても逃げようがない。その場合は傭兵を納得させるだけの方便が必要だろうが、まああれなら上手にやってみせるだろう。最悪、頭目の目の前に蹴り出してしまえばいい。

このあたりも含めて、作戦は全てラーナルクが立てた。付き人達も助言程度はしていたが、私が睨みを効かせていたため、核心的な部分には踏み込んでいない。大筋はラーナルク一人で考えたものだ。

昨晚、私は此度の『試し』で伝えたいことの大概を伝えている。あれが最後まで気付かなければ、町に帰還した後、加減点を含めて説明と説教をするつもりであったのだが。実際そうはならなかったのだから、作戦の大まかな動きと襲撃方法を加味して、加減点二だ。

ラーナルクと付き人達は更に念入りな作戦を決めようとしていた。曰く、頭が居るのは船内のどのあたりであると予測されるため、それと対峙するのは後か先かどうのこのと。

話し合っているところ申し訳ないとは思ったのだが、それ以上の作戦会議は私が中断させた。あまり綿密な打ち合わせをされても、凡蔵傭兵たる私がついていけない。場合によっては、足を引っ張ることに成りかねん。現場で想定外の事態に直面することもある。土壇場に当たっては、『高度の柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対処する』程度で良

いのだ。それで問題があるのは軍団規模同士の衝突での話である。今の私達には関係の無いことだ。

夜になった。

武具への処理の甘さから予想できたことだが、賊連中は宴を楽しんでゐる。何もせずとも敵が勝手に弱ってくれるなど、凡蔵傭兵を名乗る男にとつて、スカイリムに来るまで有り得ないことだった。男としては「楽ができていい」と思う反面、些か冷めた目で見てしまう。

今なお宴は続いているが、ラーナルクの号令の下、討伐隊一行は既に難破船近くにまで接近している。強かに酔った者から天幕や船内で横になろうとするだろう。それを順に処理していくのだ。

それに、よく見れば数人の女も見える。捕虜ではなく、賊の一味として、だ。酔いに任せて行為に及ぼうとする輩も出るだろう。一行としては願つたり叶つたり。隙だらけのところを手早く始末できる。

男とラーナルクは二手に分かれ、それぞれに付き人が一人、付いている。

男にはラーナルクの、襲撃に関わる全ての行動を見届けたいという欲がある。緊張感も何もあつたものではないが、事実そうなのだ。しかし、賊働きや暗殺行為の採点など、男にはできない。不足の事態に陥つた際でも、咄嗟の対処を任せられるのは、本職である付き人達であろう。男が死んだところで野営地にて復活するだけだが、当然ながらラーナルクは一度死んでしまえばそれまで。最大限安全性に考慮しての人員配置となつた。

この配置もラーナルクが言い出し、男は胸中で加点一だなどと考えつつ、親子双方にとつて甚だ不本意な決定ではあつた。互いが互いに、日頃からの鍛錬の成果を見せた、見たいと望んでいたためだ。二手に分かれてから、付き人達は共に上役である親子のご機嫌取りに苦心した。

実際にはそれが必要であるほど未熟でも阿呆でも無かつたが、親子は、特に父親のほうは息子のこととなると、途端に堪え性が無くなる傾向があつた。襲撃前ということを目撃すれば、少しでも心を平静に保ち、普段どおりの挙動を心掛けなければ、思わぬ事故につながるかもしれない。

付き人達から見て、ラーナルクは問題無いと思われた。必要なときに理屈で最善手が理解できたなら、迷わずそのみに傾注できる胆力がある。

問題は、繰り返すが父親のほうだ。『試し』だと口にして町を出てから、どうもいまい

ち集中していないように思える。大概の脅威を片手間で跳ね除けられる人物であることを思えば、面と向かつて文句を言うのも憚られたのだが……。

ラーナルクと、一時、別行動を取ることになり、目に見えてやる気が無くなっている。この『試し』に出てから、平常心を心掛けながらも張り切る愛息の姿に目を細めていたために、山場を自ら観測できないことが歯痒いのだろう。気持ちはわかるのだが、何ぞへまをやらかささないか、心配で仕方がない。戦闘に關してのみ信用しているため、それを裏切つてほしくないものだ、と付き人達は音を立てずに溜息を吐く。

一行は、男達が船首側の物陰、ラーナルクともう一人が甲板に潜伏した。付き人が男を宥めていると、賊に多少の動きが見える。

焚き火を囲んだ酒宴から一人離れ、千鳥足で船へとつながる階段を登る者がいる。身に着けている品も悪くはない。天幕ではなく船内で生活しているあたり、賊の中でもそれなりの立場の者なのだろう。だが、無防備な姿を曝してしまえば、それも無意味だ。

集団から離れて船内に下がる最初の一人は、あえてラーナルクが担当することになっている。ラーナルクは他者の命を奪うことに抵抗が無いが、まだ直接的な殺人は未経験である。討伐の一行の誰一人として、ラーナルクがその程度でしくじるとは考えていないが、この場で童貞を切る若者を戦力に数えて良いのかどうか、早急に確認しなければならない。

ならないのだが、凡蔵傭兵はその凡蔵ぶりを遺憾なく發揮し、歯ぎしりをしながら賊を見送った。付き人もそろそろ、いい加減にしてくれと青筋を立てている。

ふらふらと頼りない足取りのまま自室であろう部屋まで辿り着き、寝台に転がる賊。しばらく酔っ払い特有の意味のない挙動を見せたり、何事かを呟いているが、それも少しして止んだ。

ラーナルクは一人、部屋へ侵入し、細い棒状の暗器を取り出す。先端は鋭く尖り、中程と石突には垂直に交わるよう、短い持ち手が付いている。掌底で固定し、指二本をかけ、挟む形だ。

それを、酔いつぶれた賊の心臓目掛けて、寸分の躊躇いも見せずに差し込む。そのまま、傷口を広げないよう注意しながら二度三度と角度を変えて抜き差しし、心臓を破壊する。

酔った賊は、僅かな吐息を聞かせただけで、永遠に沈黙した。

わざわざ暗器を用意したのは、少数対多数が既定路線であり、夜間の襲撃が想定されたためだ。

殺すだけなら短剣一本あれば事足りるが、それでは血の臭いで賊に襲撃が発覚してしまう恐れがある。毒を用いたとしても、確実性に劣る。ならば、初めからほとんど出血

させない暗器を用意し、更にそこへ毒を塗ればいい。

ラーナルクは討伐案件の期限確認こそ怠ってしまったが、賊の殲滅に対しては、極めて真摯であつた。それが父である男の評価につながると理解していたためだ。

普段はこの手の暗器を好まない付き人達も、作戦の内容と敵集団の数から、やむを得ぬこととして揃いの装備を所持している。

どうでもいいことではあるが、凡蔵傭兵にはその手の装備は持たされていない。扱おうと思えば扱えるのだが……。男の場合、戦闘力を下げたところで、鈍器を用いて頭蓋を損傷させるか、首を折ってしまうほうが早い。

事実、ラーナルクから「お父さんの分は用意していません」と言われている。ラーナルクとしては「お父さん」への信頼の証、という側面もあるのだが、当の「お父さん」は、支障は無いと思いつつ、若干の疎外感を覚えてもいた。

ともかくにも、ラーナルクが使い物になることが付き人にも理解できた。一般的には童貞喪失にはそれなりの感慨や衝撃があり、茫然自失となる者も少なくはないのだが、ラーナルクにそれらしい反応は無い。

予想していたことだが、ラーナルクは極論『自分とお父さん（とついでに盗賊達）を除いた全ての命は、自分の益になるかならないか』という価値基準で眺めている。せいぜいトルドスクらいは、いざというとき躊躇するなり助命できる理屈を付けるなりして

やる程度だ。そこから考えれば、賊の命程度、容易く摘み取つてみせるだろう。ましてや此度は「お父さん」へ力を見せる好機である。安全性を確保しつつも静謐かつ迅速に一人でも多くの賊を仕留める、という思考が、現在のラーナルクの脳内のほぼ全てを占めている。

この様子を初対面の者が見たなら『薄気味悪いガキ』だとも思つたかもしれないが、この場には、ラーナルクがそうなるよう仕込んだ面々しかいない。ある意味、最も業の深い者達であるかもしれない。救いは（あるいは悲劇か）、ラーナルク本人がそれを望んだ、ということだが。

閑話休題。

ラーナルクの仕事ぶりを見届けた途端、若干離れた位置に居た付き人の一人が動き出す。既に一人目の賊に続き、二人の賊がそれぞれの部屋で高軒をかいている。付き人は音も無く二つの部屋を出入りし、これらを素早く処理した。大切なのは、一見しただけでは死んだと気づけないようにすることだ。匂いのきつい酒を傷口にかけたり、死体の姿勢をいじるなど、多少の細工をほどこしている。

首を壁際に向けるなどはまだ常識的だが、加害者たる付き人やラーナルクが接近した時点で酷い寝相を見せていた者などは、適当に姿勢や寝具を乱しておく。中には、前衛的調度品に見えなくもない奇抜な姿勢を取らされた賊もいる。この場に、死者への冒流

が云々という説教をする八大神の司祭はいない。いるのは一人残らず悪党である。

同様の手口で五人ほど片付けたあと、付き人が船外の物陰に潜む男へ合図を送る。男は傾いた甲板のあたりを目掛けて魔術を放ち、いびき軒にも似た音を出す。ラーナルクや付き人が賊を仕留めて残りを顧みると、幾人かは高軀をかいていた。だというのに船内があまりに静かでは、今も飲み騒いでいる面々が、違和感を覚えるかもしれない。危険は極力減らすに限る。それを可能にする手段があるのなら、なおのことである。

その後、二人ほどを同様の手口で始末したあたりで、船内での暗殺は切り上げることにした。ラーナルクと幾らかの戦果を上げた付き人は、男達とは反対側、船尾側の物陰に潜む。

船外の酒宴で盛り上がっている頭目や、その側近が天幕暮らしたとは考えづらい。もう何人かは、宴が終われば船に戻るだろう。しかしその様子はない。

ならばと、付き人達は大胆にも酒宴に近づくことにした。そして、酒で火照ったまま焚き火の周りで眠っている者を、船内同様に排除するつもりなのだ。

動き出す直前に「見とけよ」と言われたラーナルクも、「旦那は今暫くここで」と言われた男も、目を見開いている。

たしかに、焚き火の周りではしゃいでいる者達の影に紛れれば、近づくことは可能か

もしれない。そも、光源としての火は不安定だ。風に揺れ、薪の組まれ方にも左右される。そしてそれを囲む者達も、酔いに任せて好き放題に騒ぎ、はしゃいでいる。焚き火の外周は、常に影が不規則に舞い踊っている。

それに紛れて伏せた姿勢のまままで近づけば、目立たないうえに動きを見られても光と影の錯覚だと思われる可能性はないでもない。

しかしそれでも、たった二人で二十人近い集団へ近づくと、その胆力が凄まじい。あるいは、酒に酔った賊に見つかるような腕前はしていない、という絶対的な自負の為せる業やもしれないが。

北に位置する難破船に対し、南側。たかが焚き火とはいえ、船体に反射した光で若干明るくなっている。潜むには不向き。

よって付き人達は、東西から挟み込むように忍び寄る。下卑た笑い声の中心から離れて、横向きに眠る一人に狙いを定めた。射程圏内まで近寄り、己の身体は標的のそれへ完全に隠しながら、肋骨の隙間を通して心臓を刺し、鼓動を打つ力強い臓器を、力の入りづらい不安定な姿勢からでも確実に止める。

暗器を差し込む位置は脇からとした。体位と心臓の位置関係上、心臓の上部から刺さなければ、血が漏れ出やすくなる。そのまま、賊の近くに転がっていた酒を死体にかけて、離脱する。

同様の手口を用い、西で二人、東で六人。

東の戦果は望外のものだ。眠りこけていた者の他にも、気分が昂り二組の男女が睦み合っていた。最良の気分のまま静かに素早く意識が途絶えたのだから、比較的マシな部類であろう。

船内での不意打ちを合わせれば、襲撃作戦は、賊一味に察知されないうまま、その半数近く葬る上々の滑り出しを見せた。付き人達は更なる戦果拡大を狙って様子を窺ったが、少し嫌な予感がしたため、示し合わせるでもなく同時にそれぞれの上役の元へ戻った。

二人が戦果の報告をしている丁度そのころ、気分良く酒を飲んでいたはずの頭目の顔から表情が抜けた。口元の杯を下げ、右に左に首を巡らせ、言う。

「臭え。船を見てこい。天幕に下がった連中もだ」

一部、酒が回って反応できない愚図もいたが、それだけで残りの賊のほとんどは、自分達の頭目が異常事態を告げていると察した。

酒を捨て、雄叫びを上げつつ素早く自らの得物を手にする。頭目が「臭い」と言うのだ。ならば丸腰で動き回るのは自殺行為に他ならない。

賊の反応を見て、付き人達は顔をしかめる。結果論だが、宴の側にまで接近したのは

悪手であつたかもしれない。それより、毒矢の早打ちで奇襲をかけてしまったほうが、被害を拡大できたのではと思う。混乱も誘えただろう。

ラーナルクの大方針に従っているとは言え、作戦会議では自分達にも発言が許されていた。経験不足を補うための先達だろうに。奇襲するにしても、静と動の線をどこに引くのか、それを教えるのも自分達の役目のはずだ。

凡蔵傭兵を名乗る男からすれば、それすらも含めた全ての結果でラーナルクを判断するのだろうか、僅かでも『良い出来である』と認めさせてやりたい、盗賊達の親心である。

ついでに言えば、この手の勘所について採点官たる男は、文字どおり凡蔵なのだ。繊細な静と動の線引など、説明されなければわからない。この点に関しては付き人達の杞憂というものであつた。

男としては、奇襲をしかけ、発覚すれば純粹な暴力で殲滅すればいい、と考えている。その暴力が厄災と言ふべき異常性を伴い、大概の場面を突破できてしまうから、また性質が悪いとも思う。凡人であろうが天才であろうが、人には人の定石というものがある。神の基準で物を考えないでほしい。付き人達が常に抱える悩みの一つだ。

どうする？ 賊が異変を察知するのは時間の問題であり、その猶予はほとんど無い。討伐隊の視線がラーナルクに集まる。

ラーナルクが短剣を取り出し、大振りに後ろから前へ宙を斬りつける。全面攻撃の合図だ。

久しぶりの奇襲らしい奇襲は楽しかったのだが、私はほとんど物陰で待っていただけである。正直に言えば暇だった。

その鬱憤を晴らすかのように、私は黒鉄の鎧を身に纏い、頭目らしき良い鎧姿の男へ目掛けて、猿声を上げつつ呐喊する。私の役目は頭目の足止めと、敵全体の目を惹き付けることだ。目立ち、かつ時間を稼がなければならない。

その点、黒鉄の鎧は丁度良い。闇に紛れる黒が敵の警戒心をかえって違和感無く集め、無骨な造りは黒いドワーフ製か黒檀の鎧に見えなくもなく、然程奇異でもない。そして何より強固である。戦闘力を抑える代わりに、装備は多少良いものにした。

「何だ、手前は！」

問いかけながらも、両手持ちの戦斧を振り下ろす頭目。悠長に話をする間抜けではな
いとわかったのはいいが、それでも聞いてしまうのはお約束というものなのだろうか。
打ち払いながら、適当に答える。

「冒険者以外の何に見える？　酒場で良さそうな討伐案件を見つけたんでな。小遣い稼ぎに丁度いいと思って来た」

折角の宴を邪魔されたことか、それとも、騒ぎになっただけにも拘らず動く人員の少なさから、ある程度の被害に見当を付けて怒っているのか、頭目は自ら攻撃することを止めない。

本来であれば、数で圧倒してしまえばいいのだ。それが、私が頭目に呐喊すると同時に、四つの悲鳴が聞こえた。おそらくはラーナルクが二人、付き人達がそれぞれ一人ずつを不意打ちで倒している。これで頭目を除けば残りは七人程度である。

剣戟の音や悲鳴は聞こえるものの、こちらの三人は闇に紛れて動き続けるため、相手はまだこちらの総戦力を測りかねている。少数精鋭だとは感づいているだろうが、だからと言って特別な手が打てるわけでもなし。頭目は見えている相手から確実に殺していくしかない。つまりは、私だ。

時間稼ぎと思って初めは塔のカイトシールドと無強化のロングソードを用いていたが、ちと思うことあつて無強化の『サイズ』に持ち換えた。これは名前こそ大鎌であるが、正しくはバルディッシュと呼ぶべき長柄の大鉈だ。使い勝手はいいのだが、ポールウエポンとして優秀なハルバードを愛用しているうちに、半ば忘れ去られていた不遇な武器である。出番を作れて良かった。気のせいかな、武器も喜んでるように思える（ち

なみにどちらも無強化であるのは、下手に強化した得物では、相手の得物や鎧ごと、撫で斬りにしかねないからだ。凡蔵傭兵の戦闘力ではあるまい。

で、だ。長柄同士、既に数合打ち合っているわけなのだが……。この頭目、それなりにやる。馬鹿正直に『凡蔵傭兵』の力量で相手取っていたなら、初めの一合目か、切り返しの二合目で死んでいただろう。作戦としては、それでも然程構わないのだが、出すのも面倒なので、ちよつと此奴は取っておくことにしよう。

頭目の唐竹の一撃を右に躲し、やや流れた体勢から踏ん張る反動で、掬うようにサイズを首元へ斬り上げる。

それを見越していたのか、頭目は仰け反りながら切っ先を避け、あまつさえサイズの柄を蹴り上げる。

重量武器が意図せず跳ね上がったのだ。私の両手は得物と共に頭上にあり、胴はガラ空きである。

薙ぎが来るかと思つたが、直前で軌道が落ちた。万歳をするような重心が浮いた姿勢であるということ、足も不安定だということ。分厚い鎧に守られた胴より、咄嗟には動けまいと先に足を潰しに来たらしい。こういう嫌らしさは好きだ。

だが大人しく片足をくれてやるわけにもいかん。頭目の狙いは私の左足、脛から甲。ならば逆側の右足で地を無理にでも踏みつけ、持ち上がった左手を肘打ちでもするよう

に引き付ける。

結果、不安定でも左足一本を浮かせるくらいはできた。できたのならば、逆も然り。頭目の戦斧が地を抉るが、その戦斧の腹を浮かせた左足で踏みつける。斜めになつていた腹を踏んだがために、持ち手にも無理が生じたらしい。頭目に一瞬の隙ができる。そこに、万歳から解放されたサイズの石突で鎧の最も厚いであろう箇所を狙い、突きを放つ。

横蹴りを放ちたかつたのだが、体勢を整えることにした。頭目の変則的な一撃を躲すために妙な動きをしたため、足下がお留守なのは事実だつたのだ。

やや距離ができたが、頭目が攻勢を緩めることはない。すぐに距離を詰め、勢いそのままに戦斧を振るう。

襲撃されているのだ。それも、複数人から。可及的速やかに目の前の敵を排除しなければ、事態は好転しない。ならば問答も無用。気合や雄叫びを上げはしても、ただただ攻撃あるのみ。

悪くない腕を持ちながらも戦術の幅が限定されるというのは、なかなか恐ろしい話なのだなあ、などと不憚に思う。他人事だからこそ呑気に構えていられるのだろう。自分が頭目の立場であつたのなら、世の全てを呪いながら、死物狂いでありとあらゆる手を尽くす。

ただ悲しいかな、今の頭目には、戦斧を振るうしか尽くせるだけの手が無いようだ。此奴の戦術眼は多少だがわかった。では膂力はどうであろう。私のサイズを蹴り上げた様子からモヤシでないことは確かだが。

それまで躲すことに主眼を置いていた得物を、敢えて打ち合わせる。勿論、力は加減しているが……耐えるか。やはり悪くない。そのまま数合打ち合うのだが、打ち合い、弾かれる度に頭目は気合を入れて、渾身の力で戦斧を振るう。ここが正念場だと理解しているのだろう。此奴、段々惜しくなってきたな。

振るって躲してと普通に戦うより、一合一合弾き合うように打ち合わせるほうが、時間稼ぎにはなったようだ。周囲から聞こえる悲鳴が途絶えたことに気がついた。取り巻きは死に絶えたか。

そして私と頭目の袈裟斬りがかち合おうというとき、視界の端に黒い飛来物が見えた。軌道は頭目のこめかみだ。

「ラーナルク！」

私が怒号とも言える声を上げると、飛来物である黒く塗られた短剣は、飛来した軌道をそのままぞって戻って行った。

なるほど。どうも取り巻きの排除が早いと思っていたら、ラーナルクが両手でそれぞ

れ紐付きの短剣を操っていたらしい。そんな物を、付き人達の相手をしている横から差し込まれては、まず誰も助からんだろう。援護でも、止めでも。それを繰り返すだけで、簡単に死体の山が出来上がる。街道沿いの野営地では「未恐ろしい」と思ったが、現時点でも十分に恐ろしい子供である。

仮に私があればを相手取るならどうするだろうか。左右の手から時間差で牽制の魔法を放ちながら接近し、そのまま押し切る、くらいしか思いつかん。ラーナルクの前に他の人員や障害物があるだけで、あの鞭のような短剣は一気に脅威度が増す。いや、本当に恐ろしい。そしてそれだけの鍛錬を積み、実戦で使えるまでに高めた努力が素晴らしい。あとで『いいいいいい』してやろう。

その自慢の愛息であるが、私の聞き慣れない大話を聞いて、身を強張らせている。いかん、これはおそらく勘違いをさせている。

「ラーナルク、まずは見事。父は思うところあつて凡蔵を止め、この男と遊んでいたのがな。これほど手早く取り巻き共を始末できるとは思っていなかった。良い腕だ。父は満足している。」

そして先程の一言であるが、あれは別に叱つたわけではない。単に『勿体ない』と思つてな。それ故、急ぎ止めたのだ。援護自体は的確であり、父の思惑が絡まなければ、この襲撃を成功させる一撃に相違無かつたらう」

ラーナルクの援護は私の戦いに水を指した形になったわけだが、それ自体は何一つ間違つてはいない。今の私は一傭兵に過ぎないのだ。小駒で大駒に隙を作らせ不意を付けるのなら、寧ろしないほうが怠慢というもの。

だからそれ自体は繰り返し返し賞賛した。ラーナルクの表情や全身から強張りが解けるまで、だ。ラーナルクにとつての『父親からの叱責』とは、未だ深い傷痕として残り、燻り続けているようである。

それはそうと、今度は「勿体ない」の種明かしだ。

「ラーナルク、此奴はお前にくれてやろう。遊んでみるといい。なかなか楽しいぞ。

……お前はお前で、その子供は私の自慢の息子でな。この現状を見ればわかるだろうが、それなりの使い手だ。もし倒せたのなら、見逃してやってもいいぞ」

付き人達が声を揃えて「旦那！」と怒鳴る。愛息よ、これぞ正しく『怒号』と言うのだ。仲間である私へ向ける目が血走っているではないか。

まあ、私が頭目へ『ラーナルク殺害』を公認したようにも聞こえるだろうから、無理もないのだが。とはいえ、私の魔法を使えば、即死でないなら基本的には問題無いのだし、そう心配することも無いと思うのだが。

その点、ラーナルクと頭目のほうが理解が早い。

ラーナルクは、頭目を倒すことがこの『試し』の総仕上げだと気合を入れて構え、頭

目は命の賭けどころだと気を静めている。若干対照的で、それもまた面白い。頭目のほうは、急展開を迎える事態にやや戸惑っているが。

「なに、約束は守るとも。見逃すからには、追手はかけん。ああ、但しウィンターホールドや近隣での悪事は止める。ホワイトランあたりに居を移せ。お前なら土地が変わってもやっていけるだろう」

「手前がどこか手を抜いてやがるのはわかっちゃいたが、これほどの一行とはな。年貢の納め時とも覚悟を決めたけどよ。……約束、信じるぞ」

言うだけ言つて頭目は呐喊した。途中、落ちていた剣を脚甲に任せて蹴りつけ、更には愛用の得物であろう戦斧まで投げつけた。

剣は躲したラーナルクだが、走る速度も乗った戦斧は微妙に刃を上下に揺らしながら回転している。頭目の小細工であろう。伏せたり飛んだりはできない。長い得物を横つ飛びに躲すしかない。

が、そこにも剣と、火の着いた薪が迫る。それらを躲し、短剣で弾いたところに、取り巻きの得物であろう戦斧を振り下ろす頭目がいた。あの思い切りの良い戦斧の投擲は、予備にあてがあつたからか。これも地の利だな。

それに、ラーナルクの曲芸地味な短剣術を見て、接近戦にしか活路は無いと判断したのだろう。直線状に在つたあらゆる物を使い、距離を詰めた。別段減点するほどではな

いのだが、多少攻撃を食らつても敵の狙いを潰す動きがラーナルクにあつても良かったな、とは思ふ。

ラーナルクは見^{けん}に優れている。相手を観察し、後の先、ないしは先の先を取つて封殺するのだ。だからか。闇雲とも言えるがむしろらかな動きを相手にすると、多少後手に回る気が見える。

……いや、勘違いでなければ、左腕、もしくは左肩に違和感がある。よもや先ほど投擲した短剣を引き戻させた際、無理な動きになつたかな？　だとすれば悪いことをした。

恨み言くらいは聞いてやるが、万全の状態で戦いに臨める、という贅沢はそう無い。まあ、これはこれで良い経験だ。付き人達の視線がいよいよ以て刺々しいのだが、努めて無視しよう。

さて、どうなるやら。というか、ラーナルクは気づくかな？

頭目は休まず戦斧を振り続けるが、まだ大人に比べて若干小柄で、元々の素早さも飛び抜けているラーナルクは捉えきれない。伊達に走り込みを続けてはいないのだ。

逆に、ラーナルクも頭目を攻めきれない。長柄武器を休まず振り続けられると、単純に長さの足りない得物では反撃しづらいのだ。短槍は別としても、長柄武器は重量武器と同義で、それ故、『受け』や『流し』はほぼ使えない。躲し続けるほかなく、かすり

もすれば形勢が変わるとなれば、防戦一方も已む無し、と。

頭目に明確な隙でもあればいいのだが、私が面白いと思うだけあって、そのあたりは石突や蹴りや、何なら持ち手の間の柄までも鈍器として使い、頭目自身の距離を保っている。曲芸短剣の長距離や、ラーナルクが最も得意とする純粋な短剣術の至近距離に持ち込ませない。

どちらも攻め手に欠けると思っていたら、ラーナルクが大振りを防いで大きく後方へ飛んだ。というより、自ら跳んだのだろう。

急ぎ詰めれば、再び頭目の距離。だが、大振りの後で、若干の隙がある。ラーナルクは再び短剣を飛ばそうとして……跳んできた戦斧を慌てて躲す。戦斧は背後にあつた難破船の船腹に突き刺さった。

頭目は常に主導権を握り続けるために駆け、途中に落ちていた、先に己が投げてラーナルクが躲した剣を拾い、斬りかかる。

戦斧とは違い、威力を殺せないことはない。しかし頭目も、剣が流されないよう、威力より手数で勝負し、ラーナルクの僅かな隙には突きを繰り出す。今のラーナルクでは、頭目の突きで伸びた手を取って投げなり極めなりするのは難しいだろう。

そうこうしていると、ラーナルクの動きが鈍くなってきた。……体力の差は如何ともし難いか。走り込みで足腰を鍛えてはいても、まだ身体ができていない。そも、こちら

は監視や隠密での襲撃など、働き詰めなのだ。直前まで寛いでいた頭目に余裕があるのは致し方ない。

一応、私も覚悟を決めておくべきか、と思つたあたりで、ラーナルクが後ろに転がった。苦肉の策であつたのだろうが、己の優位を確信している者にその手がどう働くか。

頭目は今の今まで、私との立ち会いですら一度も使わなかつた短剣を懐から取り出し、ラーナルクに投げつける。ラーナルクが不安定な姿勢でそれを防ぐ。防ぐが、姿勢は更に崩れる。頭目は止めとばかりに剣を投げつけ——

—— 難破船の千切れた船腹へと一目散に駆け出した。

私は、珍しく完璧に予想どおりだつたせいか、あまりにあまりだつたもので、思わず呵々と笑つてしまう。

おそらく心境としてはラーナルクも似たようなものだつたのだろう。落ち着いて紐付きの短剣の片方を、向かつて左の船底に投げて刺し、同様に右の船底にも刺した。更に同様の紐付き短剣を取り出すと、頭目の足に絡まるよう投げつけ、両端の短剣はやはり船底に刺さっている（曲芸短剣、一組だけでは無かつたのだな。加点一）。

結果として、千切れた船底から海へ逃げようとした頭目は、見えづらく黒く塗られた一本の紐によつて無様にひっくり返つた。更にはもう一本の紐により下つ腹のあたりでつつかえ、尻を突き上げながら俯せの姿勢で沈黙している。頭目のそれまでの苛烈な

戦いぶりも相まって、あまりに間抜けであった。

なんというか、それはそうなるだろう。「見逃す」だの「信じる」だのとやり取りし、それが果たされたことなど、私は知らない。それは頭目も似たようなものはずだ。約束とは基本的に、相互の根底に正義の心があつて成り立つものだ。私のそれはとうの昔に擦り切れてしまつたし、頭目の心に正義があるなら、そも賊などやつてはいないだろう。当然、最後には逃げを打つはずだ。

そもそも、私はラーナルクを見殺しにする気も、頭目を見逃してやるつもりも無かつた。最悪、即死でなければどんな重傷も奇跡での回復が可能ではあるが、愛息にそんな重傷を負わせたいわけがない。いざとなれば何をしてでも、身を守るつもりであつた。

しかし、そうなると今度はラーナルクが己の力不足を嘆きかねない。頭目のがむしゃらな動きを前に後手に回つたあたりで冷や冷やしたが、杞憂に終わつて何よりである。

だが、ラーナルクは気付いていた。だからこそその後手。常に相手の動きを把握することとに注力していた。おそらく、ラーナルクに見えたいくつかの隙は、自ら演じたものであろう。一つ間違えば頭をかち割られていた状況においても、相手を誘導してみた。大した戦士である。これは加點三十くらいあつても良いのではないだろうか。

ラーナルクに近寄り、念のために回復をかけてやる。見たところ、かすり傷程度しかないようだが、左肩のこともある。ほかにも、やや無茶な動きを見せていたようにも思う。別段減るものでもないのだから、たつぷり大回復を味わってほしい。

して、間抜けた姿勢からは直りながらも、その場に座り込んでいる頭目である。

自分が生き残るには、この胡散臭い一行の言うことを真に受けず、死中に活を求め逃走を図るしかない。そう思ったのだろうが、先読みしていたラーナルクによって見事阻まれた。結果論ではあるが、最初からこの頭目が逃げ果せる未来など、あり得るはずもなかったのだ。……少々不憫である。

とはいえ、この頭目も馬鹿ではないのだ。全面攻撃前の勘働きもそうだが、部下の統率にも問題は無かった。此奴自身も阿呆ではなく、その場その場での判断も悪くはなかった。言ってみれば、ただ死なせるには、ちと惜しいのだ。

その頭目に付き人が近寄り止めを刺そうとするので、慌てて止める。付き人は「まだ何か？」と険のある目で見てくる。先程の手合わせについて、根に持っているようだ。私が愛息を真に危険に曝すはずがないというに。やはり、此奴等のほうが余程に過保護である。

「さて、賊の頭よ。この期に及んでは、お前の生殺与奪はこちらの自由だと理解しているだろう。どうだ、死にたいか？」

「こんな髭も生えてねえガキに負けたんだ。死にたくはある。でも死にてえヤツは、そもそも逃げねえだろ。馬鹿なこと聞くんじゃねえよ」

「尤もだな。なら疾く選べ。この場で死ぬか、我等……というか此奴等に付き従うか。後者を選ぶ場合、お前に真の自由は生涯訪れんだろうが、働き如何によつては悪くない待遇を得られることもあるだろう」

頭目は訝しんではいるが、混乱はしていない。それもそうだ。負けた相手に対し、死ぬか、仲間になるか。歌でも現実でもよくある話だ。それを示すように、「んなもん選ぶまでもねえだろうが。ご随意に。主様方。クソツタレ」と吐き捨てる。

おそらく、盗賊たる付き人達の配下になった場合の去就について考えたのだろうが、それを選ばなければ死ぬのだ。言うとおり、「選ぶまでも」ない。

付き人連中が「こんな賊崩れなんてどうするんだ」という目を向けてくるが、まあ私にも考えがある。ブレックスも、おそらくは否とは言うまい。そろそろ、ウィンターホールドも復興が進んでいることだしな。

これの去就について話をするときは、ラーナルクも同席させよう。あとは、ギルドからブリニョルフを呼ばねばな。もうここから町に帰るまでにラーナルクが下手を打つことは無いだろう。いやあ、終わってみればたった数日の出来事であったが、随分と長く感じた。父親業というのも楽ではない。

ひとまず今は、自分が倒した賊の扱いについて首を傾げている愛息の頭を撫でくり回し、『いいこいいこ』してやる。年頃になって若干の羞恥心も見えるが、満更ではない様子なので止めない。少なくとも、私に強く名前を呼ばれた程度で身体が強張らなくなるまで、今暫くは甘やかし続けよう。

あ、街道にいるかもしれない見張りを、忘れずに討ち倒しておかねばな。もし異変を察知しては面倒だ。物資や宝物の類は迅速に回収し、とつとと出立するでしょう。……いや、出立を長殿に進言しよう。一時反故にしたが、町に戻るまでの私は凡蔵傭兵だ。

三一、本試験と不死人の決意

難破船に巢食う賊共を討伐したあとは、速やかにウィンターホールドへ帰還した。

私は一味の頭以外を生かしておくつもりが無かったので、残りの人員は頭から配置を聞き出し、帰りの道中に始末した。特殊な技術を習得していれば話は別だが、別にそんなことも無かった。

というか、小さな賊集団に一芸に通じた輩を期待するほうが間違っている。頭だけでもそれなりの収穫なのだから、そう欲張るものではない。期待せず確認だけした、程度の話だ。

町に辿り着いてからは、縄で縛った賊の頭を引き摺るように、目抜き通りを進む。

今回我々は、首長府からの正式な討伐指令を受けて赴いたことになっている。そして私は、錬金術師としての活動と近隣の安全確保等、町への貢献により、首長の従者就任が内定している身である。行って、討つて、帰つて、「終わったぞ」の報告だけでは片手落ちというものだ。

野良の冒険者であればあとから衛兵隊が確認し、報酬を渡す。と、それでも良いのかもしれないが、ゆくゆくは首長の私兵となり衛兵隊の指揮を執る立場へ上ることを鑑み

れば、既に首長府の人間として振る舞うべきであろう。

まあ証拠云々言うのなら、賊の首か片側の耳でも切り落としてくればそれで済む話なのだが、この男には使い道を見出してしまった。ついでに言えば、屈強な鎧姿の男が縛られ連行されているという絵面はそれなりの衝撃を伴うことを計算に入れて、このようなり口と相成つたのだ。

そんなわけで、何よりもの証拠として賊の頭を生け捕りにしたぞ、と町の住民達に見せ付けている。

が、私の一番の目的はそこではない。実を言えば、我が愛息のお披露目としての意味合いのほうが大きい。

ラーナルクの戦い方は非常に技巧に富んでおり、泥臭さとは無縁である。だが纏った革鎧には幾らかの汚れや傷、更には僅かに血も付いている。傷のほとんどは頭との一騎打ちで付いたものだが、賊の討伐に参加したことは間違いない。

それを目にした住民達は、ラーナルクを驚きと共に見ている。

これまでラーナルクは町の住民達から、「鍊金術師の倅」か「年相応の元氣小僧」くらいにしか思われていなかった。

それが、近辺の猛獣や野盗の類を一掃した男が指揮する一行に加わり（猛獣や野盗の半分はラーナルクの手柄であるし、討伐に当たり実際に指揮を執つたのもラーナルクな

のだが)、無事に凱旋してみせた。

これが素封家や貴族家の子供なら、箔を付けるために屈強な護衛を引き連れて初陣を果たすこともあるだろう。

しかし我々一行は、衛兵隊では手出しを躊躇う案件に臨んだのだ。町の事情通を自称するおしやべりな住民が口を開けば、賊が我々よりずっと多勢であったことは知れるだろう。伊達や酔狂で戦力外のお荷物連れて行く状況ではない。

つまりラーナルクは賊討伐にあたり、最低限、足を引つ張らない程度の実力を備えていることになる。

住民の多くはラーナルクが普段から荒事に接しているとは知らないはずだが、ダンマーを中心に、移民達はあれが私に「厳しく」稽古を付けられたことを知っている。噂はすぐに広まるだろうし、盗賊達がいつもの手口で後押しすれば、なおのことである。私としては、近いうちに上級王でもあったウインタールールド首長ハンセンの兜を取りに行くことを考えれば、このあたりでの顔見世が適当だと思っただのだ。

本来、私の就任に関しては兜献上で従者へ。暫くした後、町の復興への尽力を認められ私兵へ、という段取りであった。

しかし今回の賊討伐を挟んだことで、おそらくそのあたりは前倒しされる。賊討伐で従者へ。兜献上を以て私兵へ、と。

少々急ではあるが、何せウィンターホールドは貧しいのだ。屋敷も自分で確保するよ
うな男に対して渡せるものなど、名誉や行政への参加権くらいしかない。

これが他の町であれば、どんな手を使ってでも褒美の金品を用意しただろう。

だが、このウィンターホールドの復興はまだまだ道半ばである。

衛兵隊の数も徐々に増えているが十分とは言いがたいし、そもそも執政からして首長の親族を無理に引つ張り出している有様なのだ。ウインドヘルムあたりなら身に余る褒美に成り得そうな『首長府の一員』という切り札であろうとも、名誉職の意味合いが今なお強い。

逆に言えば、だからこそ私が首長の私兵に納まったところで、やつかみも受けづらい。なんなら、普段からあれこれと私の世話を焼きたがる老婆達など、「首長に阿漕な真似をされているのでは？」などと妙な心配をしかねないほどだ。

そのあたりはまあ、私がブレックスと連携してうまく世論を誘導すればどうにかなるだろう。いずれにせよ、褒美を下賜する側にとつても受領する側にとつても、落とし所として丁度良いのだ。

名誉を重んじる古きノルドの町の実情としては、お寒い限りである。

なにはともあれ、このウィンターホールドの地で、この二つの案件を以て、私は首長の私兵へ就任する。

ある意味、リフテンの友人宅で話した、町での地位を築く、という目標の一部は達成できたと考えてもいいだろう。

未だ私が動かずとも恒常的な収入が得られる状態ではないが、ある程度の稼ぎはある。そして地位も手に入れた。計画は順調である。

だがそれでは足りない。

だからそれと同時に、ラーナルクをウィンターホールドの戦力として町の面々に認めさせる必要がある。

これから町の復興のため、あれをあちこちへ使わすことが増える予定だ。その際、何をするにもいちいち子供の『お使い』だとか大人に秘密の『冒険』だとかと誤解されては、思うように動けない。そのためだ。

初めのうちは戸惑うかもしれないが、慣れれば頼もしさを覚えるだろう。「首長の私兵は、次代においてもウィンターホールドの守護を疎かにするつもりはないようだ」。そんなふうには。

一応、兜の入手があれの本試験ではあるのだが、先の判断力や戦闘技能を見るに然程の心配はいらないと考える。

まだ巨人やドラウグルの中でもデスロードの相手は辛かろうが、そうでなければ卓越した技工と隠密を駆使し、そう苦もなく兜の入手はなるだろう。

……などと樂觀視していたのがいけなかったのか。

『ユンゴル墓地』での兜入手には、思わぬ面倒と、望外の喜びがあった。ラーナルクにとっては苦勞しか無かつたろうが。

現地までの移動に不備は何一つ無かつた。寧ろ、至れり尽くせりと言って良いものだつた。

まず出立からして、此度はウインターホールド全体の名譽に関わることということ
で、首長閣下は町を上げての出陣式を執り行つた。

日取りは我々が賊討伐から帰還した半月後。私の従者就任も済み、全員の体調が万全
になつた頃だ。

主な面子は閣下と、その隣には大学から言祝ぎに來たアグス師。その後方でそれぞれ
控えるブレックスとサボス。そして実行部隊である私、ラーナルク、付き人二人、それ

に衛兵隊からも（比較的）腕利きが四人。実行部隊には大学側の協力者として、サボスがそのまま加わる。

町の名誉は大学の名誉。大学の名誉は町の名誉。そんな認識を作り上げたい両者としては、こういった小さな気遣いも疎かにはしない。

共同声明発表時と同じく満面の笑みを貼り付けた閣下を見て、男泣きを堪え切れない住民も見受けられた。閣下の忍耐と尽力の下で町が順調に復興しているとあれば、それなりに感じ入ることもある、ということだろうか。純朴で可愛らしいことである。皮肉ではない。

また、閣下の側に控えるのが執政ではなくブレックスで良いのかと思いはしたものの、執政の老人については「いつの間にかいなくなっていた」というような印象を作りたいらしい。

元々、本人の意思を無視して引き摺り出された執政としてはそれで不満はなく、いずればブレックスの息のかかった人物をその席に据えるのだとか。復興してきた町にうま味を感じて、親族連中が出しやばって来ては面倒、という理屈である。

あまり我儘が過ぎるようであれば、首長の親族の何人かが、あるいは病で急死してしまふことがあるやもしれない。病の原因は別としても、その診断を下すのも私だしなおお、真に悲劇的な話である。……こちらは皮肉だ。

私は以前、友人宅において「二人で町を牛耳ってみないか？」と誘った。

しかし現状を鑑みるに、町を牛耳っているのはブレックス一人な気がする。良いのだろうか？

いやまあ、良いのだろう。馬鹿の考え休むに似たり。私は友を信じて己の為すべきことを為すのみである。

最悪の場合は全て壊し、殺し尽くしてしまえばいいのだから、簡単な話だ。そして我が友たる頭目殿は、そうさせないだけの分別を持っている。何も心配はいらないだろう。

道中の移動も、実に快適であった。

私のソウルの業は折を見て町の人間に見せてきた。特異な魔法(?)を説明するより、隠し通すほうが面倒だからだ。

そのため、衛兵隊がおり体力に物を言わせて走り抜ける、などという真似はできずとも、支障は無かった。

馬車には必要最低限の物資を乗せ、空いた隙間に交代で休みながら、行軍は続いた。行軍。……行軍である。だがスカイリムに来てからこつち、昼も夜も無く走ったり、山中を駆け通してあったことのほうが多い。はつきり言って愛息と共に過ぐす休暇くらいにしか感じられなかった。

現地、ユンゴル墓地に到着してからも、どうということは無かった。

賊が罅にしているということも無かったし、浅い場所に猛獣が住み着いている、ということも無かった。

大学の文献にもあったのだが、このユンゴル墓地の主、ユンゴル。同胞団の祖であるイスグラモルの近親者であったらしい。古代的な言い回しで書いてあったため勘違いがあるかもしれないが、概ね間違っていないだろう。

つまり、言ってみれば他の古代ノルド墳墓に比べても、特別古いものであったのだ。スカイリムに作られた古代ノルド式墳墓としては、最古の物かもしれない。何せスカイリム開拓団団長の近親者の墓だ。その可能性はある。

それゆえか、幾体かの骸骨が散見されはしたものの、ドラウグルとして襲いかかってくる者はいなかった。

無害でありながら纏わり付いてくる、不思議な光の妖精だか精霊だか、そんなものが賑やかしかったこと以外、特筆すべき事項は無い。

問題が起きたのは、墓地内部を暫く進んだ後だ。我々の目の前に、巨大な仕掛け扉が姿を現した。

この仕掛け扉は、ドラゴンの爪の形をした鍵を用い、扉に描かれた絵柄を操作し、開

けるのだ。大学の文献で概略図を目にしたことはあったが、実物はなかなか壮観であつた。単純に彫刻として美しいとも。

そして肝心の爪はというと、どういふわけか扉のすぐ手前にある台座に鎮座している。

侵入者を阻む鍵が墓地の中にあるというのはどういふことなのだろうか？

疑問に思う私を他所に、付き人達がすらすらと謎を問いて行く。

曰く、この手の仕掛け扉には謎掛けに規則性があるらしい。それなりに慣れていれば、周囲の状況を観察することで、正解に辿り着くことができるのだとか。

出陣式までしておいて盗賊を連れ歩くのはどうかと思つたのだが、やはり頭脳労働担当が居てくれて良かった。ラーナルクでも時間をかければ解けた問題かもしれないが、如何せん経験が足りない。ちと厳しかっただろう。

そうして扉が開くと、妙な空間に出た。

一本道の足場が続いているのだから通路と呼んで良いはずなのだが、その両脇に水が湛えられているのだ。

何のための空間か、否が応でも疑問に思う。仕掛け扉に守られていたことを鑑みれば、油断すべきではない。

それに、経験則からだろうか。正直、嫌な予感がした。

声を発するのも憚られたので、暫し様子を見るよう、後ろ手に指示を出す。

が、ここまでの順調過ぎる道程で気が緩んだのか、衛兵隊のうち二人が指示を無視して通路へ侵入する。

そして中程まで行き「ほら従者殿、心配し過ぎです。何もありませんよ」と笑う。それは、一応は正しかった。衛兵二人が通路の中程に進んだその時点までは、たしかに何も有りはしなかったのだ。

だがその一拍後には、何処からか現れた奇妙な仮面の魔術師に紫電を浴びせられ、衛兵達は悪臭を放つ炭と化した。

私は全員に散開と後退を命じる。あの雷は密集しているとまとめて焼き払われるようだ。

炎のほうが持続性が高く攻撃範囲は広いが、雷はとにかく速い。人を一瞬で炭化させる雷が魔術であろうが奇跡であろうが、厄介なことに代わりはない。

全員が仕掛け扉の手前まで後退したことを確認し、さてどう戦ったものかと思索する。後ろのほうでは、仲間が死んだことに呆然とする衛兵と、余程親しかったのか、慟哭と罵声を浴びせる衛兵がいる。

ウインタールドの衛兵隊は、良くも悪くも荒事から遠ざかっていた。我々が町を訪れるまでは害獣の駆除程度。その後はそれすらも必要なくなり、日々の巡回と喧嘩の

仲裁が主な仕事となった。

その一因、というかほぼ全ての原因は私にあるのだが、あまりに出来がお粗末である。私が私兵に就任したあかつきには、此奴等全員、しごき倒してやろう。

私が苛立ちと共に攻略方法を考えていると、奇妙な魔術師はその場で浮遊しながら、こちらへ対峙し続けている。

……この先へ進む者へは容赦しないが、そうでなければどうとでも、ということなのだろうか。

緊張感を返してほしい。これでは無駄に警戒した私が滑稽ではないか。阿呆らしい。

苛立ちが腹立ちに変わる。ラーナルクが投擲での先制攻撃で様子を見ようかと提案してきたが、もう面倒になってしまった。

ので、『ゴーの大弓』と大矢を取り出し、番える。

そしてそのまま胸のあたりを射つ。

見た目は浮いた骸骨なのが、着撃音はなかなか派手だった。魔術師はその音に違わず吹き飛び、もんどり打って転がる。

姿勢を正すのを待ってやるいわれも無いので、そのまま二射三射……と続けざまに放つ。

一射で死んだ様子がないので、脊椎を念入りに壊そう。ああ、杖を持つ手が無事では

面倒だな。肩と掌も射つ。実は見えない足があつて、弱点も下半身らしき場所なのだろう。射つ。

着撃の度に派手に吹き飛ぶのだが、それでも死なない。此奴、我が友の弓矢を受けてこれだけ耐えるとは、なかなかしぶとい。見れば魔法で半透明の殻を作っている。あれで物理的衝撃を減退させているわけか。やるな。

しかし守つてばかりでは状況が好転することはない。魔法で身を守るくらいなら、損害覚悟で雷を放てば良いのに。

とはいえ、そうさせないよう絶え間なく矢を打ち続けているのは私なのだが。寧ろ防御魔法を展開できているだけでも大したものだ。

ただ、段々飽きてきた。やはり頭部が弱点なのではなからうか。あの儀礼的な仮面諸共射ち抜いてくれようか。

と思つたあたりで、後方から「仮面は壊さないでくれ！」と声がかかる。サボスだ。どうもあの仮面、貴重な物らしい。そういうことはもう少し早く教えてほしいものだ。危ういところだったぞ。

しかしサボスの顔色は悪い。私が考えている以上に貴重なのか、もしくは大変な力を秘めた代物なのかもしれない。

そうであれば、サボスが一行にいるのは僥倖というものだ。忠告が無ければ、間違い

なく頭部を中心に射撃を続け、仮面を破壊していただろう。

仕方がないので、胸部や、魔術師が纏う襪ほろから見える背骨を中心に射ち続ける。

その度に魔術師は空間を跳ね回るのが……どうも絵面が悪い。

なんだか私のアレを一方的にいじめているように見えるのか、衛兵隊どころか付き人からの視線も何か言いたげである。味方は緊張した面持ちのサボスと、目をキラキラ輝かせている愛息だけである。

だけ、ではないな。最後の一人だけで十二分だ。

私が普段使うファリスの黒弓は神をも射殺せるだけの強化を施してあるとは言え、一見、黒く塗っただけの普通のロングボウに見えないこともない。

そこに行くところのゴーの大弓は明らかに剛弓だ。弓幹ゆがらはゴツゴツと無骨に節くれ立っており、友自身が討ち取った古龍の骨でも用いているのではないかと思えるほど。何人張りの弓なのか、考えるだけでも馬鹿らしい代物である。

それを難なく連射する「お父さん」の姿が、久しぶりの『雄姿』と映ったのだろう。私も、愛息から尊敬の眼差しを向けられて大満足である。心なしか、弓を放つ間隔が早く短くなっていく。

そうして数十射を打ち込んだところで、魔術師の防御魔法が切れた。

調子に乗って打ち続けていた私の口から「あ」と間の抜けた声が漏れたが、番えて放つ

た矢は戻らない。

無防備になった魔術師を粉々に砕きながら吹き飛ばし、数拍の後に灰となった。

私は急ぎ灰を物色する。サボスから仮面について直接言及されているのだ。これで魔術師を殺せば仮面も共に消える、などという結末であれば、バツが悪いどころではない。

しかし私の焦りも心配も杞憂であった。仮面はすぐに灰の中から見つかった。折角ラーナルクに良い格好を見せられたのだ。締まらない終わり方では困る。

仮面はサボスに預けて、私は矢の回収に勤しむ。

投げ渡したことが不満だったのか「もつと丁重に扱ってくれ！」とサボスから叱責が飛ぶが、私としては何の役に立つのかわからない仮面より、友が自作した矢のほうが大切だ。真似て作ることはできるだろうが、この弓と矢はある意味、形見である。作れる作れないの問題ではない。

ついでに、死んだ衛兵隊の装備も回収した。死体はただの炭であるため断念したが、せめて装備と所持品があれば、葬儀には困るまい。私の指示を無視して死んだ者に対しては矢の数分の一も感慨がわかないが、人間社会で生きるにはそういうわけにもいかない。面倒なものである。

奇妙な魔術師が守護していた通路を進み暫く行くと、宝箱と、玉座らしき物の背が見えた。

衛兵隊の二人はここが終点だ、おそらく兜は宝箱の中だ、と浮かれている。

だがどう考えても怪しい。

私は念の為、全員にその場で待機するよう命ずる。そして宝箱に鎖が付いていないか確かめる。大学の文献にも貪欲者らしき存在は記されていないが、万が一、ということもある。しかしその線はなさそうだ。

であれば、宝箱と接するように配置されている玉座が怪しい。

……そう言えば、だ。ここは『ユンゴル墓地』なのだ。『ユンゴル』なる人物の墓なのだ。しかし、今までそれらしき身なりの良い遺体には遭遇していない。

ならばあの玉座の裏（玉座の向きからすれば表であろうが）にユンゴルがドラウグルとなり待ち構えているという可能性は高いだろう。

謎なのは、何故玉座が入り口側を向いていないのか、ということだ。

私がスカイリムに来訪した際の墳墓でもそうだったし、他の多くの墳墓でも大体の様式は同じ。主な埋葬者は棺に収められているか、在りし日を思わせるよう玉座に座らせてある。

それが何故か逆向きなのだ。イスグラモルは何を考えていたのだろうか？

あるいは単純に古代ノルド墳墓の様式が定まっていなかったのか、とも考えた。しかし、おそらくは違う。

ユンゴルの死は、本人にとってもイスグラモルにとつても、予定外のものだった。色々と御伽噺のように書かれた文献が元ではあるが、要するに水死したらしいのだ。

イスグラモルにとつて、北の大陸からこのタムリエルに同行した仲間達は、全員が掛け替えの無い同士であったことだろう。

危険な旅路に、弱者や凡蔵を連れて行くとは考えづらい。

だが、結果的にユンゴルは死した。なればこそ、墓を訪れた者へ「我こそが墓の主である」と相対させるよりは、あえて逆を向かせて、気持ちだけでも自分達と同じくある前を見つめて進むのだ。そうユンゴルにも、自身にも示したかったのではないだろうか。

いやまあ、椅子の向き如きをどうこう考察したところで正解がわかるわけでもなし。今は兜の入手、ひいてはおそらく存在するであろうユンゴルのドラウグルに集中すべきだ。

そんなわけで、私は再びゴーの大弓を構え、ラーナルクに指示を出す。

「ラーナルク。おそらくあの玉座にユンゴルなる相手がいるはずだ。父が一射見舞う

故、それを合図に衛兵隊と共に攻めかかりなさい。

同胞団の祖であるイスグラモルの近親者だ。生半な戦士だとは思わぬ。即席ではあつても、連携を密に。指示はお前が出しなさい。

衛兵隊も、小僧に使われるのは気に食わんかもしれんが、私の倅はそれなりに鍛えてある。協力してくれ」

ラーナルクは私のやることにある程度見当が付いているのか、神妙に頷く。付き人達は、いざというとき私の制止も振り切つてラーナルクを助けるつもりなのだろう。こちらでも覚悟を決めている。

衛兵隊の二人は私が玉座の背に向けて何がしたいのか思いつかないのか、呆けている。これは予定している訓練の強度を上げる必要がありそうだ。何せ今現在の衛兵隊は、後々に最低でも小隊以上を率いるだけの人材となつて貰わなければ困るのだから。

私は先程の魔術師相手とは違い、早さではなく威力を求め、狙いを付ける。

一射入魂。仮にユンゴルが座しているのなら、頭はどのあたりか。いや、頬杖をついている場合、その場所は左右どちらかに逸れる恐れがある。

ならばもう少し下。頭部ではなく頸椎、それも根元付近……

……ここだ。

十分に引き絞つた弓の張力を解放し、矢が玉座の背に衝突する。

耳をつんざく音。それと同時に、伝わった衝撃により冗談のように前方へ身を投げ出すユンゴル。やはり控えていた。私は得物を即座に『コンポジットボウ』と『大きな矢』に持ち換える。近距離ならこれが一番威力と速射性を期待できる。

遅れる衛兵を置き去りにし、宝箱を踏み台に玉座を飛び越えるラーナルク。勢いそのままに、俯せに倒れたユンゴルの首を短剣で狙う。

しかし、流石は古き戦士。俯せのままもたもたしていたのは、誘いであつたのだ。

飛びかかつてきたラーナルクに対し、寝たまま身体を半回転させ、黒檀の大剣を振るう。足と背と腕の力を最大に用いる。奴は身体の使い方が上手だ。

奇襲へ反撃されたラーナルクは大剣の威力に逆らわず、受けた短剣は素直に手放し、己も錐揉みする。

ユンゴルが追撃とばかりに突きを見舞うが、ラーナルクの身体がぐんと手前に引かれる。どうやら飛びかかる前に宝箱の縁へ紐付きの短剣を仕込んでおり、その紐を強く引くことで突きを間一髪躲したようだ。……我が子ながら何でもありだな。空中で動きを変えるのはずるくないか？

若干無理な姿勢ではあるが、反撃を躲した。奇襲の利が無くなったのなら、ここからは尋常な勝負でしかない。卑怯戦法は相手が生者だから通用するのだ。

ちと問題なのは、この空間が少々狭いことだ。ラーナルクが得意とする曲芸短剣術の

射程は活かすのが難しいだろうし、黒檀の鎧で固めた相手にどの程度の効果が見込めるかも怪しい。

そして最も厄介なのは、そも連携が取りづらいということだ。狭い空間では、一対一の状況になりやすい。援護をするにしても限度がある。それをどう乗り越えて連携するかが課題なのだが……。

ラーナルクが反撃を躲して下がったときには、呆けていた衛兵隊も戦列を作り並んでいる。しかし私に言わせれば遅いの一言だ。

もし連中がラーナルクと共に飛びかかっていたのなら、突きを躲されて隙だらけだったユンゴルに、深手を負わせることができたやもしれん。

それが実際にはどうだ。奇襲という最大の好機を突っ立って見送っていただけの間など、戦いには不要だろう。私の一射を合図に攻めろという指示は聞いていなかったのか？

私はこの時点で衛兵隊の命に見切りをつけた。

おそらくはあれも同様のはず。なんなら上手に肉の盾として扱うくらいはするかもしれないが、私にはあの凡蔵共の使い方がわからん。

ユンゴルはどこか頼りなさそうに、ゆらりと立ち上がる。それがかえって不気味だ。精神的な圧を加える以外にも、戦闘時の挙動と差異を設けて相手の反応を遅らせるた

め、意図的にゆったりと動いているように思える。

非常に落ち着き、敵を打ち倒すために有効な手を打つ戦士だ。伝説の英雄に連なる者が簡単な相手だとは思わないが、これはちと厳しいか？

ラーナルクはユンゴルを見やりながらも、衛兵の一人に弓を構えさせ、もう一人には盾と剣を構えさせた。一人が射撃で注意を引き、もう一人が攻撃を防ぎ、とどめは自分が。そんなところだろうか。

我が愛息にしては無難な策であるが、致し方あるまい。そもそも上等な頭の出来を發揮できる場面ではないし、連れがお粗末では選択肢が限られる。

まずはラーナルクが低い姿勢で仕掛けた。牽制が主だろう。大軍の将であればまだしも、少数の即席隊では指揮官が率先して動かなければ、指揮される者の意気も高まらない。

初撃は足首を狙うために地を這うような呐喊だが、ユンゴルの剣で難なく防がれる。それはラーナルクも承知のうえであったようだ。ユンゴルの注意が足下に向いたところで、呐喊の勢いを全て上方向へ変換するように地を蹴り伸び上がり、首を狙う。

……と、そこに矢が飛来し、ユンゴルの肩に当たるが、鎧に弾かれた。衛兵の放った矢だ。

自分の頭と腕のすぐそばに仲間からの援護射撃が着弾したことで、ラーナルクの動き

が反射的に一瞬強ばる。更にはユンゴルが片手を大剣から離し、至近にあるラーナルクの頭部へ細かい殴打が迫る。

そのまま首を狙うのは困難だと判断したのか、上がった頭を横倒しに振り下ろし、その反動で上段蹴りを見舞う。が、それもユンゴル自身が頭を突き出し、兜で防がれる。

重ねて悪いことに、ラーナルクの下がった頭部付近へもう一人の衛兵の剣が刺し込まれる。私は、自分でもカツと頭に血が上った自覚を持った。

ほんの一瞬、どう動けば危険が少ないのか状況判断に時間を割いたラーナルクへ、ユンゴルが大上段から大剣を見舞う。

ラーナルクは仰け反り、更にユンゴルの追撃の蹴りも躲しながら、勢いそのままに二度三度跳ねて奴から距離を取った。ラーナルクは目がいたために相手の攻撃を紙一重で躲すことが多く、仰け反りも頻繁に見かけるが、今のは危なかった。

一時的に窮地を凌ぎはしたものの……、何なのだあの二人は！

近接要員がいるときの射手とは、基本的には決定的な一撃を見舞うためにいるのではない。敵に隙を作り、味方に迫る危機を防ぐためにいる。

鷹の騎士ほどの技量があれば別であろうが、そうでなければ出しゃばるものではない。仮に際どい機を狙うにしても、それは近接要員が別の箇所を攻撃するのと全くの同時でなければならない。さもなければ、今のようには味方の邪魔に成りかねない。

ユンゴルの動きを思えば、奴が出しやばらずとも結果的にラーナルクは同じ動きを取っていたかもしれない。しかしそれは結果論だ。ついでに言えば、味方からの攻撃まで警戒しなければならぬ、という状況は格上を相手取るにあたり非常に不味い。

　　そしてもっと悪いのは剣と盾の衛兵だ！ 奴は三人の中でただ一人盾を構えている意味を全く理解していない。奴の仕事はユンゴルの大剣を封じるか、ラーナルクへの攻撃をいなすことだ。

　　守備専門ということではない。ユンゴルの注意がラーナルクへ向けば、そのとき不意を付いて攻勢に出ればよい。そうやって注意を散らし標的を絞らせなければ、相乗的にこちらの攻撃機会は増える。いかな英雄とて苦戦は免れまい。

　　それに盾は立派な鈍器であり、敵の視界を奪う役割も持つ万能武器だ。戦い用はいくらでもある。

　　盾を持つ者の仕事は、間違つても体術を繰り出している味方の後ろから剣を刺し込むことではない。

　　……いや、援護に衛兵を指定したのは私だ。この「連携」などとお世辞にも言えない状況は私が作り出したとも言える。そう考えれば怒りは多少収まるが、気が滅入ることは避け難い。

　　そうして私がげんなりしつつ戦闘を見ていると、攻めに転じたユンゴルとたつた数合

の斬り合っただけで、盾持ちの衛兵が悲鳴を上げた。ほら見ろ、片腕が落ち、盾が無くなった。あまりに練度が低い。斬られるにしても、せめて剣を持つ手だろう。あれでは本当に肉盾にしかならんな。

しかし衛兵を見捨てるとなると、もう一人の無事な衛兵が邪魔だ。帰ってから有る事無い事言い触らされては堪らん。

……いつそ二人共殺すか。付き人の一人も死んだことにして裏の仕事に回ってもらえば、衛兵隊だけを犠牲にした、という評判は回避できるだろう。

足手纏のせいで愛息が死ぬなど絶対に許せん。音を立てないよう残った衛兵に弓を向けたところで、隣に居たサボスが声をかけてきた。

「家庭の事情だ。君の厳しい教育方針に口を出すつもりは無いがね。でも味方を、というのはやり過ぎだろう。」

どうかな。一人欠員が出たようだし、私が代わりに加わっても構わないかな？ 数の上では変わりないし、あの古代の英雄を相手取るにしても、戦力的に丁度いい塩梅なのではと愚考する次第であります、隊長」

最後のおどけた物言いは、頭に血が上った私を落ち着かせるためのものだろう。更に言えば、衛兵隊なんぞより大学関係者のほうが余程付き合ひがある。その分、気安いだ。

というか、そうだ。ここには友好関係を深めたい大学のサボスも居たのだ。それを忘れて『愚図は殺してしまえ』などと。愚図は私ではないか。馬鹿が。何を考えている。私が自省するあいだにも、戦況は刻一刻と悪化している。ラーナルク自身も短剣でユングルの大剣をいなしではいるが、一人では息もつかせぬ攻勢に対し目に見えて傷が増え、危うい場面も見受けられる。

私はサボスの目をしっかりと見据え、頷いた。

サボスは心得た、とばかりに戦列に並ぶ……どころかラーナルクの前に踊り出て、防御魔術でユングルの大剣を受け止める。あのマスターウィザード、思ったより鉄火場に慣れているな。

サボスの防御魔術は範囲が広い上に強固であった。あれなら戦士ではないサボスでも、ユングルを相手に暫くは持ちこたえるだろう。

それを見てラーナルクは素早く下がり、深呼吸をし、息を整える。

そして考える。今は一時的にサボスが前に出ているが、本来これはラーナルクの試験なのだ。私がラーナルクにユングル討伐を指示した以上、サボスに任せきり、という話は許されない。

とはいえ、先述のとおり取れる手段が限られているのも事実。ついでに、援護の衛兵は凡蔵と来ている。さて、どうする我が息子よ。

「アレン師！ 合図と共に僕が前に出ます。同時に、持続回復魔法をお願いします。それ以上は不要です。」

弓の人！ 僕が戦うあいだに身を屈める瞬間があります。そのとき、兜でもいいので奴の頭部を射ってください。引き手が辛いでしょすが、根性で維持し機を待ってください！」

サボスはこちらをちらを振り返るが、私は再び頷く。スカイリムで二番目に魔術へ精通した男が全面的に助力しては、何の試験かわからなくなる。ラーナルクの見極めは正しい。

一方、「弓の人」呼ばわりされた衛兵は「無茶を言うな！」と文句を垂れている。満足に行く援護が期待できないのだ。衛兵に値千金の一射を放たせようと思えば、ラーナルク自らがそう仕向けるしか無いだろう。

しかし凡蔵の言い草に、私のほうがいよいよ以て殺してやろうかと思う。だが、彼女の不平もラーナルクの戦いを眺めるうち、次第に収まっていった。

ラーナルクのとつた戦術は、いわゆる『力押し』というヤツだ。大剣をいなし躲しはするものの、サボスの回復魔法をあてに、自身の負傷は無視する。

そして額が割れようが腹を裂かれようが、即死級の致命傷でないのなら動き続ける。躲し続け、攻撃し続ける。

ラーナルクがユンゴルの脇を斬る。即座にラーナルクの肩にユンゴルの肘が落ちる。奴の追撃の逆袈裟を不完全にいなし、奴の崩れた姿勢を見てすかさず肘を蹴って押し折る。だが奴はあえて折られた腕を振るい、鞭のように撓る裏拳をラーナルクの鼻面へ食らわせる。

躲せないと覚悟を決めていたのか、ラーナルクは裏拳に合わせて顔を捻り威力を減退させる。そのうえ、鼻と口からの出血を潤滑油に最小の動きで拳をすり抜け、接近。ドラウグル特有の丸見えの骨盤に短剣を引っ掛けて重心をずらし、身体ごと突撃して動きの起点たる腰を刺しに行く。

密着している小さな体が鬱陶しいのか、ユンゴルは大剣の柄でラーナルクのこめかみを打つ。お返しとばかりに、ラーナルクは自分の頭を打った大剣の持ち手の指を短剣の柄で潰す。

何でもいい。ユンゴルという、自分より確実に格上な古代の英雄に僅かでも傷を負わせられるなら、痛みも、死の恐怖も、どうだっていい。そんな戦い方だ。

結果、「弓の人」も覚悟を決めたのか、呼吸を整え、弓に矢を番えて戦いを見守る。

駄目だ。息子が命懸けで私の課した試験に挑んでいる。駄目だ、堪える。いや、しかし。無理だ。限界だ。

私は何々と、それも腹の底から声を吐いて笑ってしまった。

ラーナルクに問題はない。ユンゴルとの死闘に集中しきっている。

しかし比較的余裕のあるサボスや衛兵、腕の欠けた凡蔵を引き摺って来た付き人達も、怪訝な顔をしている。

だつてそうだろう？ ラーナルクは私のような不出来な男とは違う、天に愛された才人なのだ。

今までもずっとそうだった。物分りが良く、忍耐を知り、人との関わりを覚え、戦い方を覚え、技を編み出し、それを十全に發揮する。

百戦錬磨の私が断言しよう。『言うは易く行うは難し』を易々とするのは異端児だ。異常なのだ。

その、準神さえもが認める天才が、ここ一番で選んだ戦法が、泥と汗と血に塗れた凡戦とは。

間違いなく死闘ではある。だが、見るべきものがあるわけではない。天才児が鍛錬の全てを發揮しているとはいえ、そもそも未熟な身体での話だ。私に言わせるなら、動きも遅ければ膂力も弱く、技も拙い。天才的な閃きや策など一切無い。

あるのは、ただただ捨て身の狂気だけだ。

だが何故だろう。文字通り命懸けで凡戦を敢行する我が子が、堪らなく愛おしい。今

すぐ戦いに割つて入つて抱きしめてやりたいような、永遠に見続けていたいような。なんだこの気持ちは。

ユンゴルが薙ぎを放ち、ラーナルクは仰け反り躲そうとするが、今度はしくじつた。顔面を狙つた剣先は、頭蓋にこそ届かずとも歯と顎骨を砕きながら顎の筋を断つた。

ラーナルクの血まみれの顎がだらんと垂れる。鬱陶しかつたのだろう。ラーナルク自ら繋がつた顎の皮を切り裂き、下顎を捨てた。残つた舌が外からでも見える。

ああ、なんと美しいのだろう。

エイドラでもデイドラでもいい。人を『定命の者』と見下し我が物顔を曝す不屈き者共よ。

私のような異邦人とは違いこのムンダスに生まれ落ち、『神に見放された地』との異名を持つスカイリムを己の才覚で生き延び、今こうして命を燃やし輝きを放つ、一人の少年を見ているか？

知らぬ存ぜぬというならばそれでもいい。節穴の目しか持ち合わせぬ神能無しに用は無無しい。見ているというのなら、臍を噛め。

あれは私の子だ。血が繋がっていなかろうが、私の子なのだ。誰にも渡したりはせん。

ラーナルクがユンゴルの唐竹を避けるが、肩までは逃れきれていない。ならばいつ

そ、とばかりにラーナルクは左腕を突き出し、手首を砕かれながらも前腕の尺骨と橈骨の間に大剣を挟む。

ユンゴルの膂力を以てすれば大剣を捻るだけで腕を千切れそうなものだが、ラーナルクは間髪入れずに反撃し、奴の前腕を切り裂く。

腱を切られては、如何な英雄とはいえ人体の構造上動きが阻害される。

ラーナルクはユンゴルの腱が自然に治癒される前にと、攻撃を畳み掛ける。

おお、今は亡き大王よ。貴方はダークソウルを抱えた小人の子たる人に闇を見た。故に恐れたのでしょうか。

しかしこの少年をご照覧あれ。この少年の放つ光に、闇がありませんか？

勿論、我が愛息にも腹黒さはありません。しかし人とは、意思有る者とは、世界を違えようともそのようなものではありませんか？

光と闇の双方を抱き、どちらに天秤が傾くかはその者次第その場次第。そういうものではありませんか？

少なくとも貴方の火を継いだ私には、目の前の少年が闇の落とし子には到底見えませぬ。

ラーナルクが懐から己の血で濡れた投擲紐を取り出し、ユンゴルの目を打つ。濡れて重くなった紐は、奴の視界を一瞬奪う役割をしかと果たした。

ユンゴルがたたらを踏んで下がる。威力云々より、距離を取るべきと判断したのだらう。しかしそれはラーナルクの思惑通りだった。先程まで奴のいたあたりに落ちていた衛兵の円盾を拾い縦に立てて顔面目掛けて投げつける。いつぞやの同胞団を思い出すな。ダメ押しとばかりに前宙し勢いを付けた踵で盾を蹴り、奴の人中へ深くめり込ませる。

大技が決まったのは良いが、ラーナルクは着地後、素早く距離を取ることができなかった。それが仇となり、上体を反らせたままのユンゴルに足を踏まれる。逃げようが無いラーナルクの土手つ腹へ、ユンゴルの横蹴りが刺さる。壊れた腕を挿し入れ肉の盾にしながらも吹き飛び、しかし猫のように宙で体勢を立て直す。同時に、胃液と血を吐き捨てる。それでも視線だけは強敵から逸らさない。

気付けば、私の頬を涙が伝う。

父親らしいことなど、どれほどしてやれただろうか。

ホワイトランで、私の足にしがみついて来たラーナルク。

盗賊の砦で、私がいなければ眠りに落ちることさえ覚束なかったラーナルク。

旅を経て、自身に対する葛藤を抱えるようになったラーナルク。

懸命に研鑽を積み、今、それを遺憾なく発揮しているラーナルク。

どの記憶も愛おしい。どのラーナルクも愛らしい。

ああ、病に倒れた我が父母よ。申し訳ありません。子を持つとはこのような心持ちであつたのですね。この身が至らぬばかりに、貴方方が存命のあいだに報告すること叶ひませなんだ。

代わりと言つては何ですが、私は生涯、この子を愛しましょう。この子が死した後も、私の人間性が限界を迎え朽ち果てるまで、この子を愛し抜きましょう。

完全に悦に入つた我が胸中とは別に、身体は自然と弓を引き絞つていた。いざというときには、ユンゴルを針鼠にしても息子を救い出す。

ラーナルクがユンゴルの袈裟斬りを屈んで躲し、蹴手繰りを見舞い体勢を崩す。

そこに放たれる矢。私ではない。ユンゴルは崩れた体勢で更に兜の額に矢を受け、仰け反りながら顎が完全に上がっている。衛兵は涙を流しながらも、ラーナルクとの約束を守つた。

ラーナルクは満身創痍とは思えない撥条ばねで飛びつき、ユンゴルの顎から短剣を差し込み、頸椎を破壊する。

だが、それでも古代の英雄は止まらない。怪しい鬼火を目の奥に湛え、大剣を片手で操る。

それは刺突。軌道は大振り。だが問題は、自身に密着したラーナルクを、自身諸共刺

し貫く心算だということ。

付き人が飛び出す。私は、弓を下ろす。きらりと光る細い物が見えたからだ。

ラーナルクがずたずたに傷ついた腕の手首で、紐を引く。

いつ仕掛けたのか、偶然だったのか。ユンゴルの剣筋に逆らわない方向への力だったからだろう。ラーナルクの背後の程近い場所に張られていた糸はユンゴルの腕を巻き込み、剣筋を変えた。

ユンゴルが思うよりも若干だけ速く、剣を置いて腕だけが動いてしまった。

結果、ラーナルクの心臓付近を刺すはずだった大剣は、右肺を掠めるに留まる。

そしてその勢いのまま自らの胸にも大剣を差し込んでしまったユンゴルを見て、重心は完全に崩れ、それでいて上体に纏まっているのを確認する。

ラーナルクはユンゴルの顎に刺した短剣を手放し、新しい短剣を胸に刺す。それを手掛りに腕と身体ごと紐を巻き込んで半回転し、人生で最も手強かったであろう相手を背負い投げる。

更にはユンゴルの頭部が床に叩きつけられる瞬間、蹴りを加えて首を折り曲げる。

これが裸のドラウグルであれば、投げ技など如何程の効果も無かつただろう。臓器を抜かれ、乾燥させられた体は、酷く軽い。

しかしユンゴルは古代ノルドの英雄であり、身に纏う鎧は最も重たい黒檀できてい

る。だから、定命の者と同じく投げ技も決め手となる。

石造りの床に叩きつけられる瞬間、硬い骨が完全に壊れる音がした。ユンゴルの首は明後日のほうを向いている。

度重なる短剣での傷と投げが止めとなり、ユンゴルはそれきり動かなくなった。

ラーナルクは残心を怠らないが、ユンゴルのソウルが私に齎されたことで、戦いの終わりが決定付けられた。

「ラーナルク。よくやった。私はお前を誇りに思うよ。……ああ、返事はいい。すぐに怪我の手当をしよう」

下顎がほぼ無く、舌が力なく垂れ下がっている光景は、傍から見れば醜怪であろう。しかし私には、ただ名譽の負傷としか映らなかつた。頬に一筋の刃傷を負って、「男前になつたな」と仲間同士冷やかしか合うのと、何が違う？

私は触媒を構え、心の底から祈つた。そして密かに、私に王の器を授けたあの王女へ、自慢した。いいだろう？ 私の息子の生き様は、これほどまでに輝いているぞ、と。

英雄の墓所にしては狭い空間に、『太陽の光の癒し』の眩く、それでいて温かな光が広がる。

大回復でさえ骨折を容易く治すのだ。白教の中でも限られた聖女しか使うことの叶わないこの奇跡であれば、我が愛息の怪我を完治させることなど容易い。

糞の役にも立たなかつた衛兵は回復薬で済ませ、不具として生き長らえさせようかとさえ思っていたが、ついでに快復してしまった。まあ、どうでもいい。

重要なのは、興奮が覚めて痛みが開始していたところにそれがすっかり消えてしまう文字通りの奇跡を体験し、「すごい！　すごい！」とはしゃぐ最愛の息子だ。

この、世にも愛らしい光景を見て、私は一つの決意を固めた。

盗賊ギルドがスカイリムで永く栄えるために、友等との計画は問題なく進める。

だがそれと同時に、ラーナルクが住みやすいスカイリムを作る。そのためであれば、幾千だろうが幾万だろうが幾億だろうが、屍を積み上げても構わない。

今の私には、友ブリニョルフも、息子ラーナルクも、同様に大切なのだ。

そして悲しいかな、凡蔵を自覚する父にできることと言えば、その程度しか思い付かないのだ。

さて、そうと決まればもう一人の友ブレックスに相談だ。なにせサルモール殲滅は既定路線になってしまったのだから。

アルドメリ自治領などというものは地図上から消し去り、可能であれば文献も破棄したいところだ。

ラーナルクはノルドなのだから。連中は居ないほうがいい。

となると、これまで以上に湯水の如く金があるな。いい加減、リーチ方面にも着手す

るか。ブレックスからもせつつかれていますし。

いやまったく、人間、生きがいができると活力が湧いてくるものだな！

三二、凱旋

ユンゴルを撃破しハンセの兜を入手してからは、すぐに墓地を出た。

いくら一行の怪我を完治させたとはいえ、予想外の危険が無いとは限らないのだ。安金は千金に値する。気にし過ぎる程度で丁度いい。そのため、付き人達の墓荒らしも最低限だ。

そもそも墓地が比較的小規模であることを鑑みれば、ユンゴル自身が身に着けていた装備や装飾品、宝箱の宝物を除けば、然程目ぼしい物は無いと思われる。

イスグラモルは墓をこさえる程にユンゴルを惜しんでいたわけだが、彼が率いたのは北方からの開拓団なのだ。何かと入用であつたのは想像に難くない。その中から、ユンゴルが一人の英雄として恥をかかないだけの宝物と装備を捻出しただけでも、彼の人物の愛を感じるというもの。

事実、ユンゴルの纏う黒檀の鎧は、私が始まりの墳墓で薙ぎ倒したドラウグルの物に比べて、上等なように思える。良い職人が手掛けた逸品であつたのだろう。

まあ、それらには有り難く全て丸つと頂戴していくわけだが。

こちらはこちらで、出陣式まで執り行って送り出された身だ。死人も二人出ている。

土産が少なければ凱旋式が寒いものになるし（万一、兜以外に宝物が何も無かつた場合、私の手持ちを排出することになっていた）、物は使つてこそ価値がある。

ユンゴルも我が愛息との戦いを経て天に召されたであろう。ならば残つた世俗的物品の数々は、世俗的にきちんと活用すべきである。

というか、ドラウグルには残滓と呼ぶべき程度しか魂が残されていない可能性もあるにはあるが……、よくわからん。

私が獲得したソウルの量はそれなりのものであつた。だが、ソブンガルデを夢見るノルド戦士達の死体処理が、靈魂を地に縛り付けるものとは考えづらい。

するとドラウグル作成の術とは、本人の靈魂はソブンガルデへと旅立ちつつも、その影のような何かを定着させるもの。と、一応の推察を立ててはみるが……、やはりよくわからんな。時間ができれば、また大学で文献でも漁つてみるとしよう。最近はウラツグとも馴染みになり、視線が柔らかくなつて居心地も良いのだ。

閑話休題。

彼の英雄の鎧は相応に重いため、首長閣下が用いることは流石に叶わんだろう。だが、調度品として飾るくらいはできるはず。謁見の間も多少は格好がつくというものだ。町が復興するにつれ、訪れ来る賓客も増える。目の肥えた連中に侮られない品は貴重なのだ。

……などと墓荒らしを正当化する。建前は大事だ。話が大きいときは特に。

それに、ブリニヨルフと出会った墳墓でも感じたが、埃つぼく陰気臭い場所に好き好んで長居したい者はいない。そんなわけで、一行を急かすようにして墓地から出た。

親切にも、ユンゴルの座す玉座からほど近い場所に地上への出口があった。推定最古の古代ノルド墳墓がこの様式なのであれば、おそらくスカイリムに存在する古代ノルド墳墓の大概はここと似た造りなのだろう。始まりの墳墓もそうであった。

まあ、その手の文化を持ち込んだのがイスグラモル率いる開拓団なわけだから、当然と言えば当然の理屈なのだが。

ついでに言うと、私のこの忙しい態度が嬉しい誤算を呼んでくれた。

衛兵隊が、対ユンゴル戦においての私の不参戦に関し、好意的な勘違いをしてくれたのだ。

私としては、ラーナルクにこれから仕事を任せられるだけの力量があるか確認できれば、あとは正直どうでも良かった。ラーナルクさえ生きていてくれれば、最悪の最悪、サボスが死んだとしても必要経費だと割り切れた。

のだが、「ユンゴルの死の原因とされている『海の亡霊』や、不思議な光る精霊(?)のような存在。そして予想外の仮面の骸骨。それらを警戒した結果、ユンゴル戦に全力

を注ぐことができなかつた」とそのように解釈されたい。

それにはサボスの助け舟もあつた。曰く、骸骨の仮面は古代に栄えた竜教団の高僧の証であり、通常一人で墓地に眠ることは無い。アレと同等の存在が仮にまだ眠っていた場合、それがユングと対峙しているときに襲つてきた場合、対処可能なのはこのウィンターホールド首長の従者だけだ、と。

はつきり言つて嘘だ。言葉のうえでは虚実が半々に織り交ぜられているが、実質的な比重は八対二で嘘だ。

私も、大学の文献で読んだために多少の事情はわかる。あの仮面の骸骨が古代竜教団の高僧であることは間違いない。ただし、あの仮面を授けられた時点である程度の任地を与えられたと同義であり、一つ所にそう何人も配置されるほど安い存在ではないのだ。

サボスのこれ助け舟はあれだ。自分の参戦が遅れたことの正当化だ。何せこの男、不意を突かれたとはいえ高僧の脅威を認識しながら衛兵隊が焼かれるのを見過ごし、ユングル戦においても一人の腕が切り飛ばされるまでのんびりと構えていたのだから。

サボスとしても言い分はあるだろう。そもそもその話、戦力配分はその従者殿が行つたのだから、文句があれば矛先はそちらだ。それに大学からの協力者とはいえ、何故『協力者』が命懸けの働きをしなければならないのか。主戦力はあくまでウィンターホール

ドの町の人間ではないのか。などだ。なんとなく態度でわかる。

私がサボスを責めることは無いし、焼かれた衛兵隊は自業自得である。しかし、何か言い訳が無いと衛兵隊の抱く心証が悪いのも確かだ。そこで私の言に乗り、さも『自分も警戒に当たっていたが、従者殿の許可が出たため参戦した』という話に持つていった。

このマスターウィザード。比較的善人の部類ではあるとは思うのだが、スカイリム魔術の総本山を實質的に回しているだけあって、清濁併せ持つ人物のようだ。

私としても、私が責められず、大事な協力者である大学の印象が悪くならないなら、そのほうが望ましいといえはそうではあるものの……。少々怖い男だと感じた。

いずれにせよ、目的を完遂し帰路につく我々一行の士気は高かった。

使命感と、じきにそれが達成されるであろう充足感。言い方は悪いが、二人の死人はそれを飾る尊い犠牲、という雰囲気になりつつある。

実際、野営の際に衛兵隊の一人が酔いながら私に言った。

「あの二人は、相手が悪かったんだ。ドラウグルならまだしも、まさか墓地にあんな化け物があるなんて普通は考えない。戦ったわけではないが、きつと今頃はソブングルデで古き英雄達と酒を酌み交わしていることだろうよ。」

しかし、だ！ あの仮面野郎はもつと相手が悪かった！ まさか墓へ踏み入る面子の

中に、我が町の従者殿が控えているなんて思いもしなかったはずだ。思い出しても笑えるな。強大な力を持っているはずの魔術師が、何もできずに跳ね回っていたんだ。……良い土産話ができましたよ」

折角水を向けられたのだからと、私もそれなりに冗談を返した。

「実を言うとな、まっすぐ中心を射続けても跳ね方に面白味が無いと思い、わざと的をずらして射っていた。

こちらは仲間をやられているのだ。滑稽に踊ってもらわねば腹の虫が収まらんといいもの。違うか？」

別にそんなことは一切考えていなかったし、跳ね回ったのは仮面の骸骨がどうにか私の矢を躲そうともがいた結果なのだろうが。「然り!」「そのとおり!」と合いの手が入る。

私も町に帰れば首長の私兵に就任するのだ。町の軍事の頂点として立場は守らねばならんし、上意下達を容易にするためにも、下の者達とはそれなりに打ち解けていたい。

仮初でもいいのだ。要は「声をかければ話を聞いてもらえる」程度に思ってくれればそれでいい。私には、ブレックスのような統率力も魅力も無い。であれば、彼奴よりは柔らかな方向性を示さねば。

その後も道中色々と話しているうちに、ラーナルクの去就について問われた。

「従者殿のお子さんがあれだけ戦えるつてのにも驚かされましたけど、そうなることやっぱり衛兵隊に入れて、そのうち従者や私兵の地位をお継がせになるんで？」

「微妙なところだ。何せ人手が足りないからな。使えるのなら、今回のように息子でも使うさ。」

ただ、君達と時折行動を共にすることはあるかもしれないが、基本的にはあちらこちらへ便利使いしようと考えている。だから、正式には所属させない。

従者や私兵云々も、本人のやる気次第、かな？」

私の言でラーナルクが僅かに反応した。衛兵隊の二人はわかったようなわからないような顔を浮かべてから、「よろしく頼むぜ」などと絡んでいる。だが、絡まれている愛息の意識の向きはこちらである。

ラーナルクは試しの儀を熟した。一人前の力量があると私に示した。故に、私の代わりにこの地方の問題解決に奔走させられるのは、心情的にも問題ないだろう。

何せ「実戦経験を積みたい」と願ってきたのは本人なのだ。これから嫌というほどそれを積ませてやろうという話である。私には愛息が無表情に見えるその実、緩んだ頬に力を入れているのがありありとわかる。

気になったのは、衛兵隊には所属させない、という一言だろう。

仮に自分を遊撃隊の如く動かすにしても、その所属は衛兵隊でも構わないはず。父は町での立場を築くことに腐心している。ならば自分もその後継としての姿勢を早くから示しておけば、得こそあれど損は無い。しかし、衛兵隊への正式な所属はさせないという。解せない。そんなところか。

先の言の意図は、特別隠さなくてはならないわけでもない。しかし、これに関してはブレックスやブリニョルフとも話を詰めて、何よりラーナルク自身の様子を注意深く見極めなければならぬ。

聡い我が子のこと。おそらく既にぼんやりとは気付いているだろうが、打ち明けるのは今少し先だ。

町での凱旋式は、出陣式以上に賑やかなものとなった。とはいえ出陣式とは違い、正式な式典ではない。あえてなし崩しの体を取る。

町まであと数日、といったところで、付き人の一人が先触れとして駆けた。ソリチュードなどの大きな町であれば、実質的な軍事作戦終了の後、日を改めて形式的な凱旋式を執り行うこともあるだろう。

しかしウィンターホールはまだまだ復興の最中。いちいち金をかけてはいられない。

それに時には、予定された式典より帰還したその足で宝物を皆々に披露するほうが、演出の色が濃く出ることもある。このあたりの機微はブレックスの発案だ。

そして何より、私の面倒も減る。

ついでに言えば、首長閣下やアグス師は我々の帰還を疑っていなかったろうが、町の住民達からすれば『失われたウィンターホールの誇りが取り戻された』という一大事である。というか、我々の生還が既に一大事である。そこいらの賊退治とはわけが違っただ。

数年前まで、周辺の害獣退治にも困る有様だった町だ。それが、新戦力が加わったとは言え、冒険を終え、なおかつ目的の品を手に戻還するなど。

住民達としては、ウィンターホールの町に新たな歴史が刻まれた瞬間、とても思っているかもしれない。私から見ても、歴史云々は事実そうだと思える。兜の帰還は、わかりやすい復興の兆しになるからだ。

ちなみに、我々の（主にラーナルクと衛兵隊二人）装備は、泥と血に汚れ、傷だらけのままである。

私は、亡き友等が騎士として華々しい活躍を遂げていた故郷での話から、『凱旋式』の

前には身だしなみを整えるものだと思っていた。単純にそのほうが格好がつくからだ。そのため先触れを出した段階で、街道近くの水場に寄って装備の汚れを落とすよう進言したのだが、衛兵達から「とんでもない！」と叱られた。

曰く、この尚武の気風逞しいスカイリムでは、傷も血汚れも全て戦士の勲章。それを厭うノルドなどいはいはしない、のだそうだ。

所変わればとは言うが、現地の戦士がそう言うのなら、そうなのだろう。地獄を這い回った私や盗賊連中には無い感性だが、その傷んだ装備の放つ戦いの残り香こそが、険しい冒険を感じさせる何よりの証なのだ。

私としては、面倒が無いならなんだっていい。情緒がない、などとは言わないでほしい。ただまあ、我が愛息が町の住民達から歓声を浴びる想像をして少々照れ臭そうにしている様は、なんとも眼福であった。

これは酷く疎まれ、頓着されない時期を味わっているからなあ。表立って持ち上げられる、という経験は初めてのことだ。そうでなくとも、普通に生活していればそうそうある機会ではないのだから、存分に味わい、楽しんでほしい。

少しずつ経験を積み成長していく愛息を眺めていると、早く独り立ちさせてやりたいとも思うし、ずっと子供らしいところを私に見せてほしいとも思う。親心とは勝手なものである。

町の入口の外にまで人が出てきている。まだ『大きな村』以上『小さな町』未満の人口しか持たないウインターホールドだ。目抜き通りが人で溢れた、ということではないはずだが、気の早い連中はどこにでもいるらしい。

ここまでは衛兵隊と付き人達が交代で荷車を引いていたが、興奮した様子で駆けつけた住民が荷車をひったくった。こんな仕事は自分たちに任せて、英雄は英雄らしく、堂々と歩いてくれ、と。

殊勝なことを言うが、どう考えても、お祭り気分には浮かれて自分も主役のお溢れに与りたい、という算段に思える。一行の皆が顔を合わせ、苦笑し、「まあいいか」と歩き出した。

町の入口である、やたら立派な外壁を潜り、思う。初めてこの町を訪れたときは、見事な外壁が町のみすぼらしさを強調していると感じた。しかし今では、この外壁に相応しい町までの道筋が見えている。少々、感慨深い。

荷車の引手を買って出たお調子者も、存外悪いものではなかったらしい。従卒の如き人間がいるおかげで、我々一行の一人一人が、より英雄然として見える。

そのあたりまで計算して断られまいと申し出たのなら、なかなかどうして。住民の中にも目端が利く使えそうな人材がいるではないか。これからどんどん人手が必要にな

るのだ。強面の相談役殿に進言して、住民達の中から行政に係わらせる人間を募集しよう。実態が徴用であろうとも、あの男のこと。そのあたりは上手にやるだろう。少なくとも私が恨まれなければ構わん。

門の中には、古くから町に住むノルド達も、新参者の中では古参のダンマーも、極最近やって来た少数のエルフやカジートもアルゴニアンも、様々な顔が目抜き通りの脇に控えている。これもまた、一つの成果であろう。

私が気分良くしばらく進むと、区画整理（という名の廃屋撤去兼材木確保）で広場のようになつた場所で、首長閣下が満面の笑みを浮かべ歓迎の意を評している。側には、アグス師のみならず、大学の主な教授陣。それに聴講生の姿もいくらか見受けられる。あの研究馬鹿共が進んで祝いくるはずがない。これは無理やり連れ出されたな。

とはいえ、以前、共同声明発表を行ったときは、もつと大学に近い町の外れであったのだ。こうして町の中心部まで大学関係者の立ち入りを許す程度には、住民達の心境も変化している、ということであろうか。であれば喜ばしい限りだ。

私を感慨から覚ますように、閣下の声が入る。

「我がウインターホルドの誇る勇者達よ。よくぞ無事に戻つた。まずは再び儂にその顔を見せたこと、何よりの武勲であるぞ」

多少面倒ではあるが、一行の代表は私だ。全員が跪いた後、口を開く。

「有り難く、恐れ多いことにございます。我等は閣下の剣。閣下の盾。閣下の下へ戻るは当然にございます。」

……しかし申し訳ございません。私の力不足にて、二人の戦士を死なせてしまいました。この罰、如何用にも受ける所存にございます」

「そうさな。姿が見えんとは思つておつた。だがなあ、儂は露ほどもその死を嘆いておらん。」

尋ねるまでもないのだがな。儂の剣は、盾は、儂のためによく戦い、よく死んだのであろうか？」

「無論にごさいます。武運拙く命こそ落としましたが、封じられし古代竜教団の高僧と相對し、旅立ちました。その証はアレン師がお持ちです」

献上するわけではないが、サボスが骸骨の身に着けていた仮面を掲げ、皆に見せる。あとで大学の連中が好き勝手に調べ、揉みくちやにするのだろう。

「なんとな！ それほどの手練が相手であつたとは。であれば尚のことよ。」

このウィンターホールドからは、久しくソブングアルデへ旅立つ者も居らなんだ。寧ろ、これで少しは儂も、父祖に顔向けできると言うもの。彼奴等も鼻を高くして、戦士の館の戸を叩いているだろうて。

……死したる二人もまた、紛れもなく英雄であつた！ 英雄の遺族へは篤く手当を行う故、安心せよ」

私は短く返事をし、感謝を述べる。

……この手のやり取り、ウルフリック相手のときも思つたが、面倒なうえに齒が浮くな。

騎士であつた友人等の思い出話を元に取り繕つてはいるが、元来私はただの市民だ。騎士階級でもなんでもない。ただ、戦わざるを得ない地獄に叩き落されたがために、戦士と成り、戦士と名乗っているにすぎない。要は、とても、疲れる、のだ。かつたるい。私の鬱憤を察したのかどうかは知らないが、閣下が話題を変えろ。

「して、どうじゃ。主らの冒険譚は追々聞かせてもらうとして。例の物は手に入ったのかの？」

先触れから聞いているだろうに、とは思ふが、顔に出してはいけない。

私は、他の宝物とは別に予め用意していた木箱を、付き人から受け取る。その中から清潔な布で包んだ品を取り出し、解き、永き時を経てあるべき地へ帰還した兜を恭しく掲げた。

一瞬、閣下の目が揺れる。いつも人前では道化かと思うほど演技の仮装を全身に貼り付けているこの翁であるが、失われていた誇りには思うところがあるのやもしれない。

兜が私の手から離れる。

若干震える手でウインターホールド首長は兜を眺め、ゆっくりと撫ぜる。そして己のサークレットを外し、多くの者達が見守る中、兜を身に着けて見せた。

重みを確かめるようにか、やや頭を垂れている。こちらからでは逆光で表情が見えない。

そうかと思えば閣下はそれまでの緩々とした動きとは打って変わり、素早くも雄々しく両手を広げ、町中に響けとばかりに声を張り上げる。

「今、ここに！ スカイリム上級王ハンセが帰還した。これにより、栄光の時代が再び蘇る！」

儂は今一度、宣言しよう！ ウインターホールド中興の祖となり、在りし日の繁栄を必ずや取り戻すと！ しかし儂一人の力では、到底叶わぬ大事業である。この兜が長らく失われていたようにな。

だからこそ、皆の力が必要だ。ここにいる全員の力だ！

見ればこの場には、ノルドではない者も多く居る。しかし最も大切なことは、その者の胸にウインターホールドの火が灯されているかどうかだ。

……そこなダンマーの御主！ 御主の胸に、『ウインターホールド』は有りや無きや

!？」

突然指名された男は、驚き、どもりながらも「あります！」と大声で答える。

「では、そんな大学の！ 貴様の胸に、『ウインターホールド』は有りや無きや!？」

指名されたのはアグス師だ。師は恭しく腰を折り、悠然と答えてみせる。

「無論、大学は何時如何なる時も、ウインターホールドの町と共に有りて」

師の後にも、閣下は数人を指名し、同じ問を投げかける。返答は皆、同じ。『是』だ。

「これほど喜ばしく、これほど頼もしいこともない。儂はこの命の限り、町に殉じよう。どうか皆の者。今日の日の胸の火を忘れず、儂に付いてきてほしい。」

……さて、小難しい話は終わりじや。今日はこれより町を上げての宴とする。木組みの大きな焚き火をこの場に用意せよ！ 勇者達を労え。腹の限界まで飯を喰らえ！

酒を飲め！ 全て儂が持とう！」

首長自らの大盤振る舞いに、居合わせた面々が湧き上がった。タダ飯タダ酒に浮かれただけだろうが、首長は自分の頼みと宴の宣言を、ほとんど間をおかず言い切った。そのせいで首長の頼みへ応じたようにも聞こえる。

あとは熱狂のまま飲んで食って歌って踊れば、自然とそれが事実として残る。いくらかの不満分子がいたとしても、大概は同調圧力に負けて大人しくなる。

それでも元気な輩は、人知れず旅に出るか、寿命の蟬せみが思いがけず短くなることだろう。私を含めて、その手の働きを得意とする人間が、この町には犇むしめいている。どうか

すれば人口比率の関係から、リフテンより酷い有様かもしれない。

計画は、まだ予断を許さない。完全に軌道に乗れば話は別だが、まだ失敗できる段階ではないのだ。悪いとは思うが、対処は厳しいものになる。

そも、今日のこれとて色々仕込みを入れて演出したのだ。こちらの努力を気分的なもので壊されては、溜まったものではない。

私が後ろ暗いことを考えていると、衛兵隊や住民達に酒樽の前まで引つ張られた。

まずは飲め。そして冒険譚を話せ。次いで飲め。そんで話せ。したら飲め。やつぱり話せ。でもって飲め。飲め。飲んで飲んで、一緒に騒げ。……そんな調子だ。

しかし私は、特段の話上手というわけではない。話下手でもないが。

ここで一番面倒臭いのは、生き残った面子のあいだで話に齟齬が生まれることだ。

それに、言い方は悪いが、私個人の目から見ればぬるい『ダンジョン』だった。そこまで熱の入った語り口にはならんだろう。愛息が命懸けで遂げた試験であるため、けし口に出しはしなくとも。

とにかく、私は語り手として相応しくない。なので、近くにいた愛息ラーナルクを私の前に引つ張り、立たせる。

この子の口が重たいのは知っている。しかしだからこそ丁度いい。多少他の者と話

が食い違つたところで、言い間違えたのだと解釈されよう。

それに賊討伐前の値段交渉や最中の指揮を見る限り、必要であればきちんと話せるのだ。これから凡蔵衛兵隊との接点が増えることも鑑みれば、話し上手になつておいて損は無い。

そんなことをラーナルクに告げると、「なんて酷い！」とでも言いたげな目で私を見るではないか。賊の頭をけしかけたときも、ユンゴルを任せるときも、こんな顔はしなかつたはず。おそらく世間一般的には、試験内容のほうが余程酷かつたと思うのだが。ずれた子である。

私を気にかけてくれる世話焼き老婆達も寄つて来て、ラーナルクを自らの孫のような存在として認識した様子だ。質問攻めと飯の世話が止まらない。

いよいよ以て「お父さん助けて」の視線が強くなつてきたが、冗談交じりに『町へ帰還したら試験は終わり』とは言つていないぞ」と告げる。それを聞いてハツとした様子ではあるが、勿論私が絡まれないための方便だ。

父は面倒なことになる前に、相談役殿の側へ避難する。あの強面は人除けにお誂え向きだ。

付き人達もこちらの意図を察したのか、大袈裟な身振り手振りで衆目を集めるように語り、衛兵隊にも話を振っている。筋書きをそうして固めるつもりだろう。

この手の冒険譚や武勇伝の類は、最初だけまとまっていればいいのだ。あとは酔いも手伝って徐々に話が大きくなる。多分、明日には私は仮面の骸骨の軍勢を一人で射殺したことになるだろうし、死んだ二人の衛兵は私がそれらを相手取るあいだの時間稼ぎを決死の覚悟で行ったことになっているかもしれない。

まあ、誰も損をしないのだから、そのくらいは良いのではないかと思う。実際、遺族への手当を篤く、というのは大事だ。金銭的援助も、心的幫助も。

寂れた町にお似合いな練度しか持たない衛兵隊を、これから一人残らず精銳に叩き直さねばならない。町ぐるみで「町に殉じるのは名誉あること」という空気を作つてもらいたい。そうすれば、どれだけ訓練が過酷でも、自分から止めるとは言い出しにくくなる。そして目論見どおり衛兵隊が精銳揃いになったなら、あとは憧れやら何やらから勝手に入隊希望者が続くようになる。

これも計画のため。悪いが、まだまだ気を抜くわけにはいかんだ。一事が万事。始まりこそが肝要である。

……とはいえ、今は楽しめばいい。折角の宴なのだ。そしてこの手の催しを、他にも定期的に行おう。楽しい思い出があれば、苦しいときでも先にあるそれを想像して、堪えられるものだ。飴と鞭である。存分に泣かせるから、存分に笑ってくれ。

三三三、四年経つて（前）

私の私兵就任から、早四年が経とうとしている。

別に特別大きな出来事があったというわけではない。急激な変化も、だ。町の復興の進捗は、順調と言えば順調なのだが、多少の誤算もあった。

友等曰く、これほどの大事業にも拘らず恐ろしいほどの早さで進んでいる、とのこと。私が先の通り、変化は然程急ではない、というようなことを言うと、眉根を寄せるか、虫の居所が悪いときは説教をくれる。

しかし私としては、防げそうな話で移住希望者に待ちぼうけを食らわせていることもあり、あまり満足の行くものではないのだが。

私は、基本的には『人』さえいえば大概の話は成ると思っていた。だが、それを受け入れる町という『器』も大切なのだと思いつた。人だけでも駄目。器だけでも駄目。双方揃って始めて物事は成るのだと、よわい齡……いくつかわからないこの歳になって始めて実感を得た。今後の教訓にしたい。

閑話休題。

大きな出来事も急激な変化も無かったが、私が時に思いを馳せる理由について強いて

言うなら、ラーナルクであろう。あれに何か変化があったり、それに気付いたとき、流れた年月を数えているのでは、と思う。つくづくあれは、私に忘れ去った人としてのあれこれを思い出させてくれる。

あれが成長するように、町もまた四年であちこちが少しずつ変わった。というか、町は復興途上なのだから、少しの変化も無ければ困ると言えばそうなのだが。

まず、変化の一つとして町が物理的に規模を増した。これが誤算によるもの、というあたりが面白くない。

住民が増える度に廃屋の撤去や立て直しを行って来たが、それでは家も、それを立てる土地も足りなくなってしまう。そこで、拡張工事を行ったのだ。

私からすれば、家など雨風を凌げればそれで構わんだろう、という思いがある。なんなら、篝火一つあれば十分なくらいだし、無くても夜通し警戒していればいい。

しかし、復興に浮かれる住民達からすれば、そういうわけにもいかないらしい。

いずれはほかの都市と同じく権威を取り戻すであろう我が町。そこに住む自分達の家が見窄らしいなど、我慢ならない。それに、どうせあとから移住してくる者達のせい

で家も土地も足りなくなるのだから、今のうちにそれなりの家を確保しておきたい。のだとか。

初めにそれを聞いたときには、馬鹿らしくて撫でてやろうかと思つた。しかし相談役殿や首長閣下も同意見であつたため、私兵たる私は呑むしかない。

もう一ついやらしいのが、住民が駄々をこねる際に持ち出した理屈というのが、私が町へ来た際、閣下に願ひ出た条件だつたのだ。つまり、費用は住民が持つため望む家と土地を与えられたし、というヤツだ。

ウインターホールドではここ数年、普請場にはことかかない。住民達は別段裕福なわけではないが、肉体労働で金を稼ぐことはできる。盗賊連中は、どうせ巡り巡つて自分の懐に入る金だ。と金払いがいい。そしてその金を使い、現在の住居を拡張するなり、狙つていた廃屋を建て直すなりしている。

遅しいというかなんというか。

ただ、それに際し大学の魔術師達が大いに役立つてくれたことは、今後を見据えれば大変に嬉しい事実だつた。もつと言えば、『魔術師が既存の働き以外にも有用だ』と判明したことが唯一の成果』、と言つて良いものである。禍福は糾える縄の如し、とはこのこと。

ウインターホールドの町は、街道と大災害で削られた結果の崖に南北を挟まれてい

る。門をくぐって西を見れば岩山、東を見れば巨大な外壁だ。

そのため、単に町の拡張と言っても、現実的には岩山を掘削する必要に迫られる。街道を潰すような真似をすれば、他地方の首長達から響慶を買うのは言うまでもないからだ。

安全性が確保できないために外壁の外への拡張は今回見送った。だが、いずれは岩山の掘削だけでは足りなくなるのも明白。

というわけで、街道を潰さないよう外へ拡張する工事も並行して行っている。使える人員を総動員したところで、全員を岩山の掘削工事に回しては余剰人員が生じ、非効率だからだ。

街道の向こうへ出るには、街道の地下を掘る、ないしは街道自体を掘り下げ隧道化させる、またはアーチ上の橋を作って住民が街道の上を移動する方法が考えられる。

最も手間が無いのは橋を作ることだが、その向こうが急勾配な下り斜面であることを鑑みれば、街道の地下を掘ってしまうのが将来的にも良い気がする。

いずれはホワイトランよろしく「何々地区」と区画整理を行い、外壁の中を行政区と首長に近い者達の住まい、街道を跨いだ向こうの下り斜面を一般区画、と差別化を図っても良いかもしれない。

私がこれだけ色々と考えを巡らせられるのも、先のとおり魔術師の力、その中でも『水の精霊』召喚魔術が土木作業に極めて適していることがわかったからだ。

召喚術師達を使う主な召喚魔術は三つ。炎、氷、雷の精霊を呼び出すものだ。高位術者ともなればデイドラである『ドレモラ・ロード』を呼び出すことさえ可能らしいが、こいつらは糞の役にも立たない。

炎も雷もドレモラも、戦闘の役にこそ立つが工事には向かない。前二者は作業員が近寄るだけで被害が出るし、口ばかり偉そうなドレモラは戦いにしか興味が無く、建設的な作業に従事しようという気が一切無い。挙げ句作業員を襲おうとしたので、腹が立ち紛れに叩き潰してしまったほどである。二度と湧いてこないよう、念入りに潰した。呼び出したのはこちらだ、などとは言ってはいけない。

閑話休題。

そこにいくと、氷の精霊は大変素晴らしい。あれらも素手で触れば皮膚が貼り付く程度には危険だが、その度合は他の精霊に比べて圧倒的に低い。この極北のウィンターホールドで、素肌を曝している人間のほうが少ないからだ。というか仮に曝していたとしても、その場合体表は冷え切り乾燥しているため、皮膚が貼り付く、という事故も起きづらい。

側にいるとやたら寒いのが欠点だが、元々スカイリムの民は寒さに強い。ノルドでな

くとも、この地に移り住んで長い者にはある程度耐性が付いている。寧ろ、私が最も寒がりかもしれない。生き死にと好き嫌いは別の話だ。舐められるので表には出さないが。

氷の精霊だが、導入当初はそのまま岩肌を殴らせていた。それだけでも硬い氷によって少しづつは岩を削っていたのだが、盗賊砦の地下拡張工事を行った私からすれば、進みの遅さが我慢ならなかった。

そこで始めに私がルツツエルンで岩肌に亀裂なりを入れて、そこを起点に掘らせてみた。すると岩が崩れる崩れる。そこからの工事は段違いの進捗を見せた。

普請場に居る他の作業員は、精霊が出した岩を運び出したり、精霊同様に自ら鶴嘴を振るった。こうして作業を共にし、同族意識を高めるため、私は町に来て早々に大学を訪ね、復興への協力を仰いだのだ。

術者の力量によって進捗度合いに差がでたが、それは仕方がない話だ。精霊の召喚時間や精霊そのものの頑強さにも、術者の力量差が出る。ただでさえ延々岩肌を殴り続けるため、それが精霊への負担となり、召喚して存在させ続けるよりは早く消滅するのだ。

しかし私は、氷の精霊の有用性を目にしてすぐ、大急ぎでマジカ回復薬を量産した。これらを、元々他の作業員に比べて高額な賃金を支払っている魔術師に対し、極めて良

心的な価格で提供している。どれだけ精霊が消滅しても、何度だって召喚し直してくれればいい。

こちらは工事が捗って嬉しい。あちらは魔術の熟練度が高まり、賃金を得て、更には町の住民にも好感情を与えられて嬉しい。両者が得をする、素晴らしい取引である。いくら術を唱え続ければ心身が疲弊するとはいえ、その労に対しての益は余りあると考える。

ので、術師の目元にできた窪みや隈も、こけたように見える頬も全て無視して、私は付き人にマジカ回復薬を気前良く配らせた。サボスからも、「素行不良者や成績不振の聴講生を送るから、存分にこき使ってくれて構わない」と言われている。問題があれば私のやり方で裁定して良いとも。だから私は何も悪くない。

氷の精霊は、安全管理の面でも役立つてくれた。正確には、人であれば大惨事になる事故であつても全く問題ない、という利点があつたのだ。

この手の工事には付き物だが、掘削中に頭上から岩が落ちてくることがあつた。幸い作業員に怪我人はおらず、氷の精霊が数体、落石を食らつて消滅したくらいだ。何の問題もない。

既に何度も精霊を召喚して顔色を悪くした術師が恨めしげな目をしていたが、何が不満なのか全くわからない。魔術師にとっての鍛錬の良い機会ではないか。

町の拡張工事が一段落した今は、崖をつづら折りに削って港を造る作業に入らせている。逆に、崖を下った海岸からは掘削で発生した土砂等を用い、少しずつ埋め立てを進めている。こちらは拡張工事以上の大事業である。そのため、この先大学への入学希望者がどれだけ増えようが、少なくとも召喚術師が金に困ることはないだろう。

そしてこちらでも、氷の精霊は大活躍するはずだ。何せ、工事の主力でありながら崖から落ちてでも全く問題ないのだから。

術者は安全な場所に居て、作業員である氷の精霊のみを危険な斜面に立ち入らせる。大きな体躯の精霊が作業できる足場が作れているのならば、人がその分進んでも差し支えない、という安全確認の役まで負ってくれている。

表情が無いのもいい。落下して潰れようが、罪悪感を抱きにくい。海岸で作業する人足に死傷者が出なければ、何体落下しようが知ったことではない。その点も素晴らしい。

精霊の手の届かない細かな作業だけ、人足が念入りの安全確保の元で作業に取りかかれればいい。大規模な工事の参加者全員にそれだけの万全な装備や意識を持たせるとなると一苦労であるが、要所要所だけ、と思えばそうでもない。それでも人為的事故を起こす馬鹿は知らん。

更に望外であったのが、あれらは牛馬の代わりにもなる、ということだ。水の精霊に荷車を引かせてみたのだが、何の問題も無く引けていた。

精霊にそのまま綱や鎖を巻き付けては冷却により破損しかねないため、軛くびきを石で作製するなどひと手間かけたが、労を鑑みても余りある出来だった。満足である。

これで普請の進捗は加速するし、行商の馬代わりに使っても良いかもしれない。本当に素晴らしい精霊だ。

このあたりで幾人かの大学関係者が眉をひそめていたが、使えるものを使って何が悪いというのか。

……とはいうものの、普請場から普請場へ土砂や岩石を運ぶ程度ならまだしも、町から町へと移動するのに精霊を使っているのは、術者が保たないだろう。あくまでこれは、マジカ回復薬をほぼ無尽蔵に用意できる環境があつての話だ。ちと無理があるのは理解している。

ただまあ、既存の行使に囚われない可能性を示すくらいはできたのではないかと思う。何でも使いやすいようである。

都市計画を練っていたブレックスなどは、水の精霊の利便性についての反応が私よりずっと露骨だった。

崖から転げ落ちて消滅する精霊と、召喚し直さなくてはならず肩を落とした術師を見て、「笑いが止まんねえな」とケタケタ楽しそうだったのだから。

曰く、これが町に根を張る住民であったのなら、本人や家族への手当てで余計な出費が嵩んでいただろう、とのこと。しかし精霊であれば消費されるのは実質マジカ回復薬のみである（食べて眠れば回復する術者の体力は考慮しないものとする）。実質的な行政の長としては、楽しい話なのかもしれない。我々一党は割りかし金満とはいえ、資金が無限にあるわけではない。抑えられる費用は抑えておきたいのだろう。

本質的にはお人好しなのだろうが、こと利害の話になれば途端に厳しい面を見せ、効率を第一に考える男だ。そこに優しさを期待してはいけない。身をもって洗鍊金術修行礼を受けた私が言うのだから間違いない。

ちなみに大学では現在、鉱石変化の応用で、岩石を一時的に脆くする魔術を開発中である。

これができるのなら、私が一々岩肌に亀裂を入れて回らなくても済むため、是非がんばってほしいところである。言うまでもなく、工事の進捗が格段に速くなる。

が、予想外の方向から開発研究へ「待った」がかかった。各地の首長達だ。何処からか話を聞きつけた彼奴等は、「その岩石脆ぜいか化魔術は広めず、教える人員もよく選定してほ

しい」と強い要請が送られて来ている。「それが為されなければ腰を据えて話をする用意がある」とも。実質的な強制と脅迫である。

まあ、わからないでもない。多くの町は、外壁や首長の砦に石材を用いている。それを脆化させられるとなればどうなるか。攻城戦のありようが一気に変わる。権威の象徴であり、住民の安全を確保するための外壁が、でかいだけの無用の長物に成り下がるのだ。それどころか、敵の動きを察知しにくくなる分、無いほうがマシな障害にすら成りかねん。

独立組織である大学がこれらの要請に従う謂れは無いのだが、それを口実に町が責め（攻め）られては敵わない。

我々としても工事が捗ればそれで満足なので、要請を承諾することに否やはない。

アグス師を筆頭とした魔術師連中も、研究によって新しい魔術を完成させられればそれでいいのだ。悪用を考えるくらいなら、魔術新開発の手順や方式を他の魔術にも試したがるだろう。

しかし私は指摘されるまでそういった用途に全く気が付かなかつた。私の思考の根底には、邪魔な障害物は壊すか迂回するか、しかない。「壊せるようにする」という発想は無いのだ。

この件に関してブレックスなどは、「何で気付かねえんだよ。利便性が高いってこと

は、それだけの劇物だつて話だろうが」と呆れていた。解せない。悪いのは私ではない、十中八九そのあたりの機微に気付いておきながら素知らぬ顔で研究を進めていた、大学の魔術師達だ。

そうは言っても、実のところ各地の首長等の恐れはほとんど杞憂というものである。アグス師曰く、脆化魔術は遠からず完成するが、首長等が懸念するようなことにはならない、のどとか。

脆化魔術発動のためには、その対象である岩石の組成、つまりどのような鉱石から成る物質であるのかを正確に把握する必要があるらしい。しかも、その組成を崩さないまま剛性だけを変化させるには、多大なマジカを必要とし、対象への理解が不完全であれば、マジカを消費したうえで不発に終わるのどとか。

要するに、仮に首長等が恐れるような使い方を試みられたとしても、前もって外壁に他地方から仕入れた石材でも用いていけば、あとはマジカを浪費して疲弊した魔術師を射殺せばいいだけの話なのだ。

師は魔術の完成と共にその欠点も首長達に公布する予定だ。そうすれば大学も町もあらぬ疑いをかけられることもなく、各地で土木工事が活性化するだろう。

首長等は今まで手が回らなかつた場所に対処できて嬉しい。魔術師は雇用機会が増えて嬉しい。ついでに土砂の運び出しなどで人足が雇われ、その日暮らしをしている比

較的下流の人間も食い扶持が確保できて嬉しい。皆が幸せになる素晴らしい結果だ。数少ない、誰から見ても真つ当な魔術の活かし方であろう。

スカイリム魔術の総本山たる大学、その長に就くアグス師がその手の社会貢献に目を向けているかは不明である。

全くの好奇心から研究に取り掛かった可能性は大であると思うし、多少の義侠心や仁愛の精神を持ち合わせている可能性は『無』ではない。というか、「利便性の高い魔術を開発せしめたあかつきには、入学希望者や各地の首長からの依頼等、多大な権威と実益を得られる」という至極打算的な理由であるかもしれない。あれでも海千山千の首長達と渡り合っている御仁なのだ。

まあ、人の内心など考えても仕方あるまい。寧ろどれか一つが理由であったというよりは、全て本当のこと、というのが一番ありそうである。

人の心とは、一種類の顔料を溶かした絵具のようにはできていない。

大学について思いを馳せているうちに思い出したが、以前より開発を進めていた私の転移魔術は、一応の完成を見た。

いやまあ、正確に言えば、魔術というか奇跡だ。発想の転換というか、できてみれば

「そんな手段で良かったのか？」と拍子抜けした次第である。

簡単に言ってしまうと、『私』という準神の軌跡を物語として綴り、それを神の奇跡として成立させた。それだけだ。

これにより、私の行動範囲は格段に広がり、相談役殿からせつつかれていた問題に取り掛かる二つ目の準備もできた。

ちなみに、当然ながらスカイリムでこれを用いられるのは私だけであるし（私に対して強い信仰心を抱く奇特な人物でもいれば別だが）、ロードランにおいても習得できるものはいないだろう。

そして、私自身は準神としての矜持は持ち合わせているものの、自らの軌跡を文字通りの『奇跡』として認識できるほど厚い面の皮をしていた、という事実には少々堪えた。

発動にはまだ慣れず少々時間がかかるうえ、原理についてあやふやなところもあるの
で、自分なりにおさらいしておく。

まず魔術での切り口を諦めた理由であるが、単純に理論構築が難解に過ぎた。

初歩的な召喚魔術の習得は叶った。何十年何百年と時間をかければそのうち、オブリビオンから軍勢を呼び寄せ動乱の再来を起こすことも叶うことだろう。しかし、転移魔術には結びつかなかった。

当初はその召喚魔術への造詣を深めば、いずれはサイジック僧兵の扱う地点にまで辿り着けるだろうと考えていた。

だが、如何せん私の認識は甘かったようだ。どれだけ文献を読み漁っても、僧兵へ何度と無く実演を強請ってみても、いまいち成果と呼べる感触は得られなかった。

点と点が繋がる感覚というか、道が拓けた感じがせず、延々と躓きを見せた。

連中の魔術体系は、私の想像以上に高度なものだったらしい。あの傲慢な態度も領けるところなのだ。許容するかは別の話として。

例えるのなら、スカイリムの民が使う魔術の程度が地を這う獣なら、奴等は鳥なのだ。

同じ空間を共有してはいるし、鳥に触れる機会が無いわけではない。しかし、その機会には主に鳥の都合である。獣の意思で鳥の居場所である空に上がることは叶わない。

私は空いた時間（私兵、錬金術師、父親業、町の表裏の運営を除いたもの）は全て大学の蔵書室での知識の獲得に努めてきた。

魔術の才能がそれほどあるわけでもないため、実践となるとまだまだ素人の域を出ないが、知識量や理論の構築にはそれなりの自信がある。何せ、非不死人が忘れては覚え直すところを、忘れる暇もなく覚え続けるのだから。休息の不要な体はこういつたときに便利だ。ついでに言えば、『記憶力』だけは妙にいいのだ、私は。

そんな私の出した結論が、「別の観点が必要」というものだった。諦めた、というより

は終着点への経路が間違っているのではないか、という考えだ。

なまじ僧兵の転移魔術やマヌスの魔術的次元転移法を見て体験したがために、『転移』とは魔術によって齎されるものである」という固定観念がいつの間にか生まれていったのかもしれない。

そこで思い出したのが、暗月の彼だ。

彼はソウルの矢や月光の弓矢を多用しており、また彼に纏わる戦闘技能にも魔術に關するものが多々有ったため、てつきりあの転移も魔術によるものだと考えていた。

しかし思ったのだ。「彼は神である。ならば奇跡の類でもおかしくないのでは？」と。思い出してみれば、ロスリック王子とて転移を使っていたが、あれは相対した感じ奇跡の部類だ。であれば、奇跡を用いての転移も可能はず。

そもそも、大王の太陽の光の槍もそうだが、神々は己の得意とする奇跡を容易く用いていた。おそらく、彼等にはそれが奇跡だという認識すら無かったはずだ。『奇跡』という感覚は、どこまでいっても我々人間のものである。

で、だ。肝心なのは、「その奇跡のような転移を、神々よろしく私でも奇跡と思わず使えるのかどうか」という話だ。

結論から言えば、単独では力不足であった。私は準神であり、神の如き力も使える。

おそらくロードランやロスリックであれば、精進の結果として私にもできることが増えたかもしれない。

だがここはスカイリムだ。世界が、違うのだ。その成り立ちも。神と人間の関係も。そのせいでスカイリムの民では奇跡の行使が叶わないと判明してしまったのだが、今は置いておく。

さて、ではどうするのか。足りないのならば、補えばいいのだ。つまりは専用の触媒と、私自身の物語を綴った叙事詩の作成である。

私の手持ちの武器に『火継ぎの大剣』というものがある。最後の火継ぎを行う際、立ち塞がった王達の化身が持つていたものだ。数多ある篝火の軸たる螺旋剣を、そのまま大きくした物だと言えば間違いではない。

篝火に用いるため、これ自体が祭具ではある。しかし、スカイリムに来てから（おそらく正確には火の時代を終わらせたそのときから）は格段にその力を落とし、僅かな熱を宿すだけの棒と化していた。

捻じれた螺旋の形状をしており、切れ味が極端に悪い。ほぼ鈍器である。腕のいい鍛冶師に打たせた名剣に高度な火炎の付呪を施した品のほうが、余程使える真つ当な武器に仕上がる。

閑話 休題 武器としての性能は置いておく。

問題は、この鈍なまくらをどう触媒に仕立て上げるか、という話だ。

スカイリムの修道院にて祈祷を行ったところで、どうにかなるとは思えない。寧ろ、祀っているエイドラの怒りを買うのではないかとすら思える。

そこで閃いたのだが、ひとまずはどういう理屈でか力を落とすとしたこの螺旋剣に、己が篝火の軸であったことを思い出させてやることにした。

用いたのは、私が大量に所持する不死人の骨だ。我々不死人が一時の安らぎを得る篝火とは、不死人の骨を薪に燃えている。

私は館の中庭に、王の器に見立てた金製の大きな盆を設置し、そこに剣を突き立てた。あとは骨を通常の焚き火のように組んで剣の火の力を発動させれば、篝火らしい体裁は整った。

しかし、まだ外見だけだ。この傍らで休息を取ったとしても、体力の回復や傷の治癒どころか、この場を死した後の帰る場所と認識できるかも怪しい。

そこで再び閃いたのが、これを千日続けてみては？ というものだった。

別に『千』という数字に特別な意味があるわけではない。おそらくは、ロードランでもスカイリムでも。だが、あの忌々しき蛇めは私を「千年待った英雄」と言った。そこから何となく、『千』という数字が浮かんだのだ。

私があれば心底嫌ってしようが、大王に近い存在であったことは確かであるし、最初の火の炉の入り口を守っていたのも奴だ（尤も、カアスなる立場を異ならせる同種も、同様に入り口への立ち入りは可能らしいが）。あの世界の根源たる『火』について、何かしら縁があつてもおかしくはあるまい。

というか、奴が千年待ち、私が火継ぎを成した事実が、『千』という数字に意味を持たせた可能性はある。私はこれでも一応、最初の火継ぎを遂げた王なのだ。

この方法が正しい保証などどこにも在りはしない。そも、私は魔法についていくらかの知識を持つてはいても、祭具や呪具を作成する専門家ではないのだ。思いついたことをやってみるしかあるまい。

一方で、「これは成功するだろう」という半ば確信めいた思いもあつた。太陽を求道し続けた友は、手製のタリスマンを用いていた。そしてそれは、拙い出来とは裏腹に、有象無象の聖職者が保つ物と比べても、強力な力を秘めていた。要するに、気持ちが大事なのだ。

あちらの魔術の総本山たる竜の学院では、何よりも知識を求められる。あまり良い印象の無い組織ではあるが、必要性は確かだ。

呪術では『火』への畏れと理解を求められる。だからこそ、『火』を御した気である文明社会とは、やや距離を置くことになる。

だが奇跡に最も必要なのは、知識でも畏れでもない。誓約を守る固い決意と、己がそれを為せると信じる心だ。だからこそ、誓約を交わした神に対し不敬であろうとも、己と己が誓いに背かぬ限り、力を行使し続けられる。

少なくとも私はそう考えている。

螺旋剣を火で包むようになってから、日に夜明けと日没の二度、骨を薪として焚^くべる習慣ができた。

念のため、人の館を勝手に自分達の縄張りに行っている不届き者達に、火が消えそうにならないか監視を命じた。私がいま頓着しないからと言って、ここには年頃のラーナルクも住んでいるのだ。それくらいの言いつけをしても罰は当たるまい。

というか、連中には確実に夜番がいる。定期的に中庭の火を見張る程度、さしたる負担でもあるまい。

物語の作成は、そのあいだに行った。ブレックスに頼んで、ソリチュードの吟遊詩人の大学から人を派遣して貰ったのだ。高額な給金を約束したかいもあってか、大学の中でも高名だというインゲなる中年の女性がやってきた。

彼女はかなりの凝り性であった。また、時間的猶予がかなり存在したこともいけなかった。前者が原因としては大であろうが、書き直しに次ぐ書き直しが起こる。出来上

がったのは、題材がどうかは別として、一個の大作である。

何度も逃げたいと思いつつ、「主人公がいなきや文字どおり『お話にならない』じやないかい」と自分の足跡を大長編に仕上げるあいだずっと拘束された私の苦勞を、是非察して欲しい。

しかし、それが出来上がったとなったら話は別だ。おそらくスカイリムでは受けないだろうが、彼女は達成感に溢れていたし、私も満足感に溢れていた。

これが私を賛美するだけの話であつたのなら、気恥ずかしくて一度だけ目を通すのが限界であつただろう。だが、それだけではなかつた。

一人、道に迷つて右往左往したり。巡礼を進めるために必要な道具の入手のために東奔西走したり。サイン蠟石を用いた、私と、友や名も知らぬ戦友との交流であつたり。そういった私の巡礼の色々が、そこには記されていたのだ。

私は彼女の前で何度もそれを読み返した。時には涙も流れた。

一大叙事詩となつたそれは、読むにしても時間がかかる。だが彼女は、私がそれを読むあいだ、リユートを弾きながらずっとその様子を見守つてくれた。

私がある程度満足して礼を言うと、彼女は「大金を頂戴しながら間違いがあつちやあいけないからね」とおどけてみせた。私は追加報酬を提案したが、彼女は私が詩に対して見せた態度で十分だと言つて遠慮した。

それならば、と。私は、彼女に何か困り事があった際、必ず力になると約束をした。彼女は「困り事なんて無いに越したことは無いんだけどねえ」と皮肉げにまたおどけた。私は、彼女に好感を抱いた。

こうして人と打算抜きで友誼を結ぶのはいつ以来であろう。勿論、『友』と呼ぶにはまだお互いを知らなすぎる。ただ、いつからかと考えてみれば、アーチル以来ではなからうかと思う。

最近は人心を惑わすような真似ばかりをしていた。それに罪悪感を覚えるわけではないが、特別その手の暗躍を好んでいるわけではない。

そんな日々を訪れたインゲ女史との交流は、私の心に温かいものを運んでくれた。

そうこう準備を整え迎えた千日目。何の偶然か手持ちの骨が丁度尽きた。これで「何の成果も得られなかった」では拍子抜けもいところだが、物は、きちんとできた。偶然どころか、ある意味必然だったのかもしれない。私が私の奇跡を行使するために作る触媒だ。物語めいた偶然は、神話を彩る一要素である。

期待を胸に、螺旋剣を引き抜く。と同時に、模造品の王の器が割れた。「砕けた」と表現したほうが相応しい壊れ方だ。これもまた、役目を果たした、ということなのだろう。手にした瞬間にわかる。これは触媒足り得ると。火の力は然程強まりはしなかった

が、元より武器としての役割は期待していない。それよりなにより、これを用いて転移の奇跡を行使したくて堪らなかつた。可能かどうか、などは気にしない。できる、のだ。そんなわけで、一番差し障りの無い人物を選んで跳んで見た。この時間なら、相談役殿も自宅にいるだろうと思ひ、執務室へ転移する。

視界がぼやけ暗転する。体感では数拍、といったところだが、実際は一瞬なのだろう。順序をそのまま逆にしたように視界が安定した途端、ブレックスが半回転した振り向き様、両手に握つた短剣で私の首と胸を狙う。

しまった。執務室の中央へ出るはずが、背後に立つてしまったらしい。それは誰だつて驚く。私だつて驚く。

後手に回つたため、大きな武器は邪魔になる。両手に『バックラー』を装備し、短剣を二本とも弾く。剣を出さなかつたのは刺激しないためだ。

……と思ひきや、背中と肩に矢が刺さる。背後と、天井か？ 毒も塗つてあるな。だが残念だつたな友よ。私は毒には強いぞ。ほぼ反射で攻撃に転じたであろうブレックスが、この段階で相手が私だと気付いたようだ。焦つたような顔をしている。

……と思ひきや、床が抜けて落とし穴に落ちた。思ひの外、深い。しかも、暗くてはつきりとは見えないが、落ちた先には尖つた木杭まで用意してある。先の友の表情を見るに、仕掛け罠は最初の一つが発動すればそのまま他の罠も連動するようにできているの

だろう。止められないのなら、それは焦るな。仕方ないのでスモウハンマーか『デーモンの大槌』を足元に生成して盾にしよう。

……と思いきや、長い落とし穴の壁に仕込まれたありとあらゆる魔術の罠が作動し、火炎と氷の礫と電撃の嵐に巻き込まれた。たった今、大槌を生成したばかりで、打つ手が無い。ついでに、火炎と氷はまだ我慢できるが、電撃は肉体の行動を阻害するよう、身動きが取れない。いつぞやリフト地方の砦でも思ったが、殺意が高過ぎやしないだろうか。

結果、私は死んだ。気づけば自分の館で目覚めていた。スカイリムへ来てからの、地味に始めての死であるように思う。

ラーナルクや友を残して逝かずにすんで良かったような気もするし、始めての死が強敵との戦や権謀術数を用いられた末の処刑ではないことに、何とも言えない情けなさを覚える。しかも動機は「新しい奇跡を試したい」なのだ。救いようがない。

反省した私は、徒歩にて友の屋敷を尋ねることにした。転移奇跡開発の報告と、先の詫びをしなければならぬ。

そうして宅の戸を叩き、驚いた顔の（そういえば実際に死んで生き返るのを見せるのは始めてだった）盗賊に迎え入れられ、執務室へと案内された。

室内には、屋敷に詰めている盗賊全員と、今日は普請場にいるはずのハンと、先にも見た顔の相談役殿、いやこの面子なら頭目殿のほうが相応しいか？ がいた。

私としては詫びる立場であるので相手が高圧的に出たとしても致し方ないと思えるが、それにしては詫びる態度に思える。まるで初めて出会ったときのような……。

ああ、もしや私が乱心してブレックス殺害を企んだ、とそのように思われているのかもしれないな。頭目殿の一安心した顔を見るにそうは思っていないようだが、部下達は相変わらずこの男に首つただけである。やはり、盗賊達は過保護だ。

見当違いならそれはそれで。ぼんやりとだが相手の心情がわかったために、事情を説明した。

転移奇跡開発に成功したこと。喜び勇んで友であるブレックスに見せようと考えたが、屋敷の応接間等ではなく、執務室の、それも主の椅子の背後に転移してしまったこと。非は完全にこちらにあるため、償いをせよ、というのなら全面的に飲むつもりであること。

そこまで一息に語ったが、盗賊達の警戒は完全には解けない。これは私との信頼関係云々というより、奴等にとつてブレックス以上に優先するものなど一つたりとも無い、ということなのだろう。聞きようによつては、奇襲に失敗した私が、取り繕うための言い訳を披露しているようにも思えるのも確かだ。

頭目に危害の及ぶ可能性が完全に払拭されない限り、警戒心を緩めはしない、か。この場にラーナルクがいなくて良かった。あれは私のこととなると、やや盲目的かつ攻撃的になる節がある。相手になる面子が今まで世話になってきた連中となれば、人知れず涙を流してしまいかもしれない。というか、賊側もやりづらくて仕方ないだろう。

さてどうするか、と思案していたら、頭目殿自らが「やめやめ」と阿呆臭そうに手を振る。「散れ」という合図だろう。盗賊達は渋々退室し、一部が部屋の隅に下がる。退室した者もこつそりと室内を伺うつもりであろうが……。ハンだけは堂々とブレックスの後方に控えている。この男は本当にブレないな。

友曰く、私の言い分を信じる、とのこと。触媒作成の千日に及ぶ儀式は、一味の者達に夜番を頼んだほど。奇襲を企てているのなら、その手段を明かす意味が無い。それに、このトンマが俺を殺したきや、真正面から押入ればいい。等々。

それを聞いて者共はある程度納得したようだが、トドメに「お前等、こいつはとびきりの抜作だぞ？ 最近ボロを出さないから忘れてたろ」と来た。次いで「ああ、なるほど」と納得してしまう者共も者共なのだが。

ただ、一つ気になったので一応言っておこうと思った。「友よ、私はお前を殺したりしないぞ」と。当の友は明後日のほうを向きながら「ああ、そうかい。そいつは有り難くて涙が出るぜ」と言う。照れ隠しだな。私にはわかるのだ。

して。誤解が解けたなら弁償の話だ。ここは誠意を見せるために私から切り出すべきだと考えた。背後や天井からの矢はまだいい。しかし落とし穴にあれだけの魔術を仕込むのは、並々ならぬ額が動いたにそういない。おそらくはエンシルに頼んだのである。それら全てを台無しにしてしまった。気持ちの面を除いても、やはり実利の面で償いは必要だ。

……と思いきや（今日何度目の予想外だろう）、その類は一切要らん、と断られてしまった。

曰く、魂石の充填と流通。最近、かなりの質を保つようになってきた私わたし作成薬品の輸出販路拡大。私の武力を下敷きにした、ブレックスの現在の地位の構築。それに伴う利権。その他諸々数えると、まだだいたい私に借りがある状態らしい。

ついでに言うのと、私を必殺の罠へと嵌めた事実に対し、どうも苦々しく思っているようだった。

私としては自分の不注意から友を驚かせてしまったので謝意しかないのだが。ブレックスからしてみれば、友人を殺した、という負い目があるのだとか。言われてみれば、死んで生き返るところを初めて見せるのは、この男も同様なのだ。話には聞いていたとしても、事実かは不明のまま。信じる疑うの話ではなく、確証が無ければ普通安心はできない。

……その話を聞くと、なおのこと申し訳無さが際立つ。

私が矢を食らって落とし穴に落ちる時、ブレックスは手を伸ばそうとしていた。表情は……この格好付けの名誉のために伏せておくが。

私には、少なくともラーナルクの存在がある限り死に切ることはない、という確信がある。しかしそれは他者にはわからない感覚だろう。いくら私が平気だと思つていても、友はそうではなかったのだ。

弁償云々ではない。私は友へ、心を傷付けたことを謝罪した。あえて金品や貸し借りの話はしなかった。ただ、謝りたかった。

友はいつぞやよろしく「もういいつつつてんだろ」と私の足を蹴る。ハンも、「あのエンスルなる男。頭やガルスの大將の友人ではありませんがね。私は今一つ信用できませんで。そんな折に旦那が罠をきっちり試してくれたわけじゃないですか。いやあ、助かりました。罠の性能を試すために罪人を使うつても、どこからか話が漏れれば外聞が悪いもので」と朗らかに言う。

友には、ただただ感謝の念しかない。この男は本気で私の身を案じ、無事を喜んでくれている。

ハン……冗談めかして場の空気を和ませるのはいいが、目でも笑え。「もし本気で襲いにきたらタダじゃおかねえ。うっかりでもしばく。というか、殺そうと思えば一応

死ぬんだな」という本音が透けるどころか丸見えで、肝が冷える。

三四、四年経って（後）

そういえば私の転移奇跡（名を『旅路』と言う）だが。これはあまり乱発できる類のものではないようだった。一度の行使で、酷く力を消耗するのだ。

王の器を以て行使するのが本来の形。それを触媒と叙事詩（聖書）を用意したとはいえ、一人の力で行おうと言うのだから、さもありなん。これが準神と神の違いだと考えれば、それなりに納得もいく（ロスリックの王子殿は呪い持ちであり、また別の話だろう）。

その代わり、「場所が近かろうが遠かろうが、一度は一度」という数え方のようで、転移先が遠くなるほど力の消耗が激しい、ということもないようだった。これに関してはかなり有り難い。そもそも遠出するときくらいでしか使わないのだから、益しかない。そしてこれは副次的な話だが、私にマジカ回復薬は作用しないことが判明した。単純な体力回復薬も同様だ。

その他、毒や能力を高める類の薬は効果があつた。あくまでこの体が回復薬を受け付けないらしい。

ブレックス宅で起きた事故を繰り返さないように、『旅路』について試しているうちに

判明したことだ。

失った力の回復をと思いエストの灰瓶を傾けたのだが、ふと思い立ってマジカ回復薬を飲んでみた。折角大量にあるのだから、私が使っても罰は当たらんだろうと思ったのだ。それに、マジカ回復薬が私にも使えるのなら、強力な魔法を放ち放題である。そのうち起こるであろうサルモールとの戦争でも、一方的に蹂躪することが可能かもしれない。

だが、そううまく話ばかりとはいかなかつたのだ。先述のとおり、この体は二種のエスト瓶でしか回復しない。もしくは、それ用の装備でしか。

魔術的原理だの理論だのはおそらく通用しない。「不死人の体とはそういうものなのだ」という、説明にならない説明しかできない話であるように思う。言ってみれば「かなり変わった体質」というだけの話であるしな。そのくせ毒はしっかりと効くのだから眉をひそめるくらいはした。

まあ、なんとなくそんな気はしていたので別にいいと言えればいい。

ただ、ソウルの奔流を乱射して軍勢を薙ぎ払ったり、太陽の光の槍を投げ続けて敵の城壁を壊せたら楽しそうだな、とは思っていただけに、少し、本当に少しだけ残念に思わなくもない。

というか、大学の連中はソウル体系の魔術の基礎を習得し、その回復にはマジカ回復

薬を用いている。彼奴等が良くて私だけ駄目だというのは、少々不公平ではないかとそんな気分はする。別に、それほど気にしてはいないのだが。いや、本当に。

そのあたりをブレックスやアグス師に話してみると、「普通、転移や漂着などという一大事に見舞われたら、まず何ができて何ができないのか、いの一番に確認しないか？」というようなことを二人から言われた。

スカイリムに着いてすぐ後の友に出会った、だとか言い訳は浮かぶのだが、そのブリニョルフとて互いの事情を割りと早い段階で打ち明け合っている。要は色々と確かめる暇はいくらでもあつたのだ。私は吐きかけた言葉をぐつと堪えた。

その様子を、場所も時間も別々に話したはずの二人は揃って同じように白けた目で詰つて来る。

私とて好きで愚者街道を往きたいわけではない。ないのだが、相手は特に面倒事を押し付けている二人であり、なおかつその言に全く以て反論能わず、やはり諸々の駄々は飲み込むしかなかつた。二人はまたしても揃って、ため息をついた。なかなか、悔しい。

閑気分の悪い話題はとつと切り上げるに限る。
話
休
題

マジカ回復薬で思い出したわけではないが、拡張工事が順調に進捗しているのを眺め

ていた頃、私に錬金術の弟子ができた。

……要らないが。

名はコランドという。

……滅多に呼ばないが。

いや、私以外の錬金術師自体は欲していたのだ。だから早いうちからサボスへ、「大学に錬金術の得意な者がいれば紹介してほしい」と頼んでもいた。

私は私兵としての働きをしなくてはならないし、それ以外にも色々と用がある。いい加減、町全体の面倒を一人で見るのは限界に来ていた（とは言うものの、大学に入学が叶った者からすれば、何故わざわざ『町の錬金術師』如き存在に納まらなければならぬのか、という話だそうで。「今なら漏れ無く『首長お抱え』の称号も付いてくる！」と宣伝したのだが、効果は無かった）。

だから町に新しい錬金術師がやってくること自体は喜ばしい。しかし何度考えても、なにゆえ同業者ではなく弟子なのか。

コランドは、聞けばわざわざリフテンから私を追って来たのだとか。

リフテン下層に店を構える酔狂な御仁の下で修行に励んでいたらしく、少し前に一人前と認められたそう。

そうして、リフテンか、師の商売敵にならぬよう何処か適当な近隣の町や村で働こうと考えていたときに、私の噂を聞いたと。

曰く、リフテン貴族のスノー・シヨツド家や、遠くマルカルの豪商が伝手を離れたがらない腕前。曰く、ウルフリック・ストームクロークに懇願され、「一年だけ」という約束で困難な調合依頼を受けた逸材。等々。

前者は盗賊共がでつち上げた全くのほら話であるし、後者は事実が捻じれに捻じれて伝わっている。あの横柄なウインドヘルムのお抱え錬金術師は気にしないだろうが、私が受けたのは下請け仕事だ。

コランドとしては、自分がリフテンで修行していた頃に同じ町で名を上げた錬金術師が存在する、という事実が我慢ならなかったらしい。「何故気づけなかったのだ！」と憤つたらしいが、存在しないでつち上げなのだから気付きようもない。

そうとは知らぬ当人は私の館の戸を叩いて、自分と錬金術で勝負をしると詰め寄つて来た。

正直なところ面倒だったものだから、私は「噂は所詮噂」と説いて、町の錬金術師を務めてくれるよう頼んだのだ。だが、噂の真偽がどうであれ、一度火が付いたからは白黒はつきりさせなければ取まりがつかない、のだとか。

それで、まあ、あまりにしつこかったものだから、不快感を全く隠さないまま勝負を

受けた。何度かブロードソードを取り出しかけたが、私の手元にソウルの淡い光が宿る度に強張った顔の付き人が止めるので、堪えた。

ただ少々予想外だったのは、それがどういいうわけか町の催し物になってしまったことだ。

町は復興の途上で、まだまだ物が少ない。やっと流しの鍛冶師が根を下ろしてくることにになり、急ぎ鍛冶場を作っている程度の規模なのだ。吟遊詩人も滅多に寄り付かない。

要するに、町の住人は娯楽に飢えているのだ。

そんな折、元々は錬金術師として住民に受け入れられた首長の私兵に対し、よりにもよって錬金術で喧嘩をふっかける向こう見ずが現れた。さあこれは見物しなくちゃ損だ、とかなんとか。

普段、町の住民達には色々と世話をかけている自覚がある。勿論、その分町の暮らしは豊かにはなっているが、どこか人気商売の気がある私としては強く出づらい。そのため、最終的には「もうどうにでもしてくれ」という気になっていた。

投げやりになったのがいけなかったのだろうか。いつの間にか町の広場に錬金器具の作業台が二つ設置され、小規模な祭りの様相を呈してしまった。

ほとんど面倒だとぼやきながらも、酔ってやかましい野次馬の輪の中で、私達の勝負

は始まった。

何が楽しいのか、大学からアグス師が来て審判に収まっている。曰く、デイドラロドが只人に翻弄されている姿が見たかった、とか。引つ叩いてやろうかと思つた。

開始時刻は朝餉が済んだ頃。日が中天に昇るまでの間に指定された数種の薬品を作り、その出来を競う。

こんなものを眺めていても退屈だろうと思いきや、何をトチ狂つたのかハンが解説役として出張っている。素人にもわかる、丁寧な解説だ。例え話もうまい。

だが、「今、それは必要なのか？」と私は聞きたかつた。言いくるめられそうだったので止めたが。私と奴とでは頭の出来が違う。

あの男、強面な相談役の腹心として、実はそれなりの立場を築いている。元々人心掌握に長けているうえ、人当たりの良い穏和な態度が、行政側の人間の持つ威圧感を覚えさせないのだろう。司会進行とアグス師を交えた解説を行う姿は、みんなに親切な区長のおじさん、といった風情だ。その溶け込みっぷりはある意味、盗賊の鑑と言える。

それはそれとして、勝負自体は特筆すべきことも無く私が勝つた。

始めはアグス師の審判に唾を飛ばしながら食つて掛かつたコランドだが、師から私の作つた薬を飲むよと言われて従つた直後、膝から崩れ落ちた。いつの間にか料理まで持

ち寄つて宴会を始めている野次馬共が盛り上がる。

だが、そこでコランドは諦めなかった。曰く、折良く昼を境に第一試合が終わった。昼餉を挟んで第二試合だ、と。今度は制限時間内での生産数で勝負だ、と。

我がことでありながらおぎなりになり、勝負の形式をきちんと決めていなかった私も私だ。しかし、あまりにしつこすぎないかと腹が立つ。もう、「殴つて気絶させて解散」でいいのではないかと思ひ詰め寄ろうとしたとき、アグス師に「この手の馬鹿は有耶無耶にするとあとが面倒だぞ」と耳打ちされる。野次馬も、勝負を受けろ受けろとうるさい。

しぶしぶ第二試合とやらも受けて……やはり私が勝った。

私は盗賊連中に可愛がりを受けて腕を磨いた後は、行く先々で実地訓練を積んできた。イーストマーチではあの横柄男の下請け仕事を熟しもしたのだ。寧ろ、質を高めるより数を揃えるほうが得意である。

再び崩れ落ちたコランドは、恥も外聞も無く悔し涙を流した。そうして少し場がしんみりしたところで勢い良く立ち上がると、「弟子にしてください、師匠！」とよく通る声を張り、頭を下げてきた。

いやその呼称は既に師弟関係にある者が使うべき、と疲れた頭でずれた物言いをしていると、野次馬共が盛り上がる。どうやら、潔さと、その道での向上心を失わない不屈

さに感じ入ったらしい。弟子にしてやれしてやれとうるさい。

酔っ払い共が「男を見せる！」と好き勝手に騒ぎ立て、アグス師が意地悪く笑い、「これは承諾しなければ収集がつかないのでは？」「もう本当にどうにでもしてくれ」と思った私は、流されるままにコランダの弟子入りを許可してしまった。

男泣きに泣いて我が手を握るコランドと、げんなりした顔の私と、馬鹿騒ぎを続ける野次馬共を見て、盗賊連中がげらげら笑っていた。妙にその声が耳に届き、ひたすらうるさかった。

勝負には勝ったが、結果としては負けた気分である。

それ以来、コランドは元気な挨拶をしに、私の館を訪れる。工房付きの家屋をちゃんと用意してやったのに、わざわざ毎朝大声で。

その場で追い返すのも外聞が悪いので、朝の食事はコランドも共に卓を囲むことになった。丁度いいので、その際に溜まっている依頼を伝えることもある。

意外だったのは、ラーナルクがこの何かと喧しい男に好意的な態度を見せたことだ。曰く、お父さんの仕事が減るのは好ましいこと。

更には、仮に何か薬関係で不祥事があつた際、厳密にはお父さんの責任となる場合であつても、罪を被せられる立場の人間を確保できたことは大変好ましい、とのこと。

色々注意が必要な気もしたが、この頃には十五も過ぎていた。今更性根は変わらんだろうと考え、とりあえずこんな父を慕ってくれる愛息の頭を撫でた。

ちなみに、ラーナルク自身も並の錬金術師程度には使える。盗賊連中から教わったものと、私の仕事を「見て覚えた」らしい。「『できないこと』のほうが少ないのでは？」と思える、恐ろしい子である。

そのためコランドは、ラーナルクのことを兄弟子と捉えて、敬い接している。実年齢は壮年のコランドのほうがずっと上だが、その手の上下関係には自分を含めて厳しいらしい。まあ、私の可愛い息子とうまく付き合っていけるなら、その点についてのみ今のところ文句は無い。

そんな若干迷惑な弟子でも、いないよりは良かったらしい。コランドが来てから多少は時間に余裕ができたので、衛兵隊の訓練を本格化させた。有体に言えば強度を上げてしごき倒すことにしたのだ。衛兵隊には通常業務もあるため、基本的に訓練は日替わりである。

訓練だのしごきだのと言っても、やったことは単純だ。毎日ひたすら走らせ、非番の訓練組は「へばってだからが本番」とばかりに小隊同士の戦闘を繰り返させた。勤務に就

く非訓練組は警邏ついでに行軍訓練だ。脱落者無く指定の地点を全て回るよう、指示してある。……そう考えれば、ずっと訓練だな？

走り込みと行軍訓練だけは、私の私兵就任以来続けさせていた。そのため、最低限の基礎体力は既にできている。

それに一応、五日に一度は休日を挟むようにはした。つまり四日訓練を行い、一日の非番。これらを班ごとにずらして行い、通常業務へ支障が出ないようにしている。闇雲にしごいても、疲弊するばかりで身体がついてこなくなるだろう。

心も同様だ。気持ち折れて立てなくなることがある、とは私こそが痛いほど知っている。ついでに、町で私の悪評を有る事無い事触れ回られても困るのだ。

小隊同士の演習では、人員や装備を固定せず、流動性を持たせた。指揮官と隊員。前衛と後衛。剣と弓。全員が一通り経験し、全てに『精通』まではせずとも、連携における役割を『理解』するように。また、負傷などで欠員が出ても、すぐ役割を代われるように、という意図もある。

私も正規の訓練を受けたわけではないので経験からだ、攻めるも守るも、仲間と呼吸を合わせることが第一だ。一人でも勝手な動きを見せれば、そこから崩されることはままある。

話。あえて定石を外した動きで意表を突くこともあるが、それもまず基本を押さえての

ある程度きりが付いたら、締めに関練りで組手を行う。小隊でも、個人でも。連携と個人技能の更なる強化が名目上の主目的だが、本音は恐怖への耐性を付けさせるためだ。

ここでは「殺しまではせずとも、別に重傷者が出たとて構わない」程度のつもりで揉んでやる。怪我は私が治せばそれで済む。そのうえで日常的に死にかけていれば、ユングル墓地でのような無様は曝さなくなるだろう。そう考えてのことだ。

とはいえ私がいくら張り切ろうとも、衛兵隊がそれに付いてこられなければ意味が無い。誰もが強い克己心を備えているわけではないのだ。

一応、演習での役割の入れ替えは、訓練への慣れによる意欲の低下防止も兼ねている。だが、そんな一工夫だけでは腑抜けた衛兵のやる気は向上しない。

そのため、演習の結果や個々人の努力が見えれば、小遣い程度の手当を出すようにした。酒をまとめて買うなり、ひと月のあいだ汁物に入れる具を一品増やすくらいはできる額だ。元々衛兵隊の給金は、身体を作るために用途を「食材購入」と指定して増額してある。そこへ上乗せする形だ。

更に、成績優秀者は給金の倍増と、隊長格への就任を言い渡した。最終的にはこの場

の全員を小隊長以上の地位に就けるつもりだが、早い者勝ちで名誉と高い報酬を約束する。第一小隊長と第十小隊長では、明確に扱いの差異がある、といった具合だ。

尤も、それらの飴だけでは到底足りない様子だった。

そこで、ラーナルクを訓練に参加させてみた。

あれは兜入手の一件からこつち、町全体から一目置かれている。同行した衛兵隊員は若い戦友の話を吹聴したし、付き人達はここぞとばかりに乗った。盗賊連中が動いたせいで、町であれを知らない者はいない。

そんなラーナルクを参加させた目的は、自分達より上等な腕前の若人を見せて奮起させる……ことではない。言い方は悪いが、見せしめだ。

甚だ不本意な話なのだが、どうも私とあれとの鍛錬は『かなり大変多分に度を越している』らしい。付き人の一人が相当に言葉を選んだ挙げ句、漏らした言い草だ。

確かに生傷は絶えないが、無理はさせず回復の奇跡もまめに唱えてやっている。幼子の昔ならいざ知らず、今は手足もほほ伸び切った。それに、あれのほうからせがんでくることはあれど、鍛錬を強制したことは一度も無い。

……無いのだが、彼奴等の言う世間一般ではそうらしい。

私とその評価を面白くなく思おうがなんだろうが、そう見えるのならば利用しない手

はない。別段、愛息との鍛錬を隠し立てする理由もないのだから。

そうして、私は衛兵隊の前でラーナルクをひたすら転がし続けた。

ラーナルクが訓練に参加した初日の組手の話だ。

あれが盾で身体を隠しつつ呐喊。右へ左へ虚実を交えながら私の懐近くまで接近し、盾を私の剣の持ち手あたりから大振りに跳ね上げる。反動で、舞うように自らの剣を私の右足の付根内側へ刺し込んで来る。ここまで近づけるようになったとは、素晴らしい。だが遅い。私は真半身になりつつ一足分前進し、剣を鎧の草摺で受け、外へと流す。そして近づいた前足の膝でラーナルクの顔を蹴り上げる。

ラーナルクの体勢が崩れて盾が役立つ場面ではなくなってしまった。それを悟ったあれは瞬時に迷いなく盾を捨て、蹴られて仰け反った姿勢を利用し、私が剣を持つ右手に足まで使い絡みつく。ラーナルクはまだ剣を捨てていない。腕を極めつつ、急所への刺突を狙っているのだろう。首？ いや遠い。肘……脇だな。

そうはさせまいと極められた腕ごと地面に叩きつけてやろうと思うが、見れば背を下にしている。私の考えを読み、一度の衝撃ならば耐えて見せるとの意気なのだろう。天晴だ。だが事前にバレてしまつては意味が無い。私は身体ごと左手側へ倒れながらラーナルクを振り回し、大きく弧を描いて地に振り下ろす。ラーナルクは衝撃に耐えるどころか、遠心力で腕からすっぽ抜けてさうになっている。これでは急所に一撃、とはい

くまい。

流石にそのまま腕に掴まっていては背どころか頭から落下しかねないため、空中で咄嗟に関節技を解くラーナルク。だがまあ、離れるなら離れるで、顔を蹴って目潰しを狙うくらいのも置き土産があっても良かった。おかげで、ほら。宙へ浮いた身体へ私の蹴りが易々と入る。ラーナルクは土手っ腹を蹴られてそのまま十数歩分吹き飛び、練兵場の壁に激突した。後頭部はどうにか守ったようだが、衝撃で即座に飛び起きることは叶わないらしい。その一瞬が命取りだ。

ラーナルクが起きてこないのなら、私から攻める番だ。滑るように移動し、速度を活かして壁際でくたばっている愛息へ蹴りを叩き込む。避けられず、直撃。ならばもう一度。今度は両腕で防いだ。防御ごと蹴り抜こうと、更にもう一度。だが今度は右肩で蹴りを滑らせつつ、どうにか壁際から転げ出た。

私が追撃を、と思えば蹴り足の右太腿に短剣が刺さっている。右肩から背に流れる私の蹴りの威力を利用し、右肩を軸に腕を回転させて革鎧の薄い場所に短剣を見舞ったようだ。そう、相手の攻撃は、自らの攻撃の好機でもある。攻防は極力、一体の挙動であることが望ましい。いいぞ。

ただ、無理に使ったせいで、右肩から腕がだらりと垂れている。関節が外れた……というより、肉が潰れて骨が割れたのだろう。血に濡れて裂けた服から傷が見えるが、

徐々に皮膚がどぎつい色へと変色しつつある。出血しつつ鬱血しているとは。この手合わせ中はどうも、使い物にならない。

さて、ラーナルクは右腕が使用不能になった。私は右足に短剣が刺さって動きが鈍っている（実際のところ支障は無いが、鍛錬故、そういうことにしておく）。お互い四肢の一部を損傷したわけだが、動きの基点となる足を取られた私のほうが不利であろう。

折角の好機。活かさぬ手はあるまい。どう攻める？

………と待ち構えていたら、ラーナルクがふらりとよろけて、そのまま倒れた。どうも、無理に立った方がいいが、頭が衝撃で揺れていたらしい。これは仕切り直しだな。

そんなわけでもないどおりラーナルクへ回復をかけていると、衛兵隊の怯えきつた表情が見える。どうも、私が愛息を殺しにかかっているよう見えたらしい。

僅か十数えるかそこの組手で何を馬鹿な。

たしかに、ラーナルクの右肩は壊れたし、計三度蹴りを見舞った腹も臓器を痛めていたが、治るのだから問題あるまいに。実際、この程度で泣き言をいうようであれば、我が愛しの息子はユンゴル相手に殺されていただろう。

鍛錬とは真剣に行うから意味がある。真剣とはつまり命のやり取りだ。多少の手心は加えるにせよ、骨が折れたただの腑ふが傷ついたただのと喚いたところで、敵は止まってくれない。その状態でどう反撃に転じるかを身体に馴染ませるのだ。

回復の奇跡が無くとも、効能の高い回復薬は少数とはいえ市場に出回っているし、何なら私を作れる。今は弟子もいる。死にさえしなければ、何の問題もない。我がウィンターホールド衛兵隊に、傷痕隊員はあり得ない（ちなみにだが、名誉除隊もない。此奴等には悪いが、平穩な生活へと逃がす気が私には無いのだ）。

ラーナルクはそのあたりを正しく理解している様子である。回復をかけながら、あれは良かった、あれは甘かったと論評してやれば、充実した顔で耳を傾けている。

その間も「次は自分達か」と戦々恐々しているのが大層鬱陶しかった。だが、誠に遺憾ではあるがここで衛兵隊を見限っては話にならない。ので、衛兵隊へは今までどおりの程度でしか組手を行わない、と告げた。但し、希望者は徐々に強度を上げていく、とも。

手当や報酬などの飴は示した。自分達よりも厳しい鍛錬の様子も見せた。度し難い阿呆でなければ、欲と怯えからある程度真面目に訓練をこなすだろう。そして、常に限界を超えさせるような訓練に耐え続けていれば、必ずそれらは身につく。何せ怪我の類は漏れ無く私が治すのだ。戦線離脱の道は丁寧に潰してある。であれば、訓練は否が応でも血肉となる。私がさせる。

すると今度は、新しい欲が出てくるだろう。実力が付けば、自信が付き、自信が付けば、更に上へという欲が。もつと強く在りたい。自分はそこの凡蔵とは違う、精銳

なのだ、と。そのための自己申告制である。

ノルドの中には、ウインドヘルムのガルマルのように剛の者も居るには居るのだ。奴が頭一つ抜きん出ていたとしても、近い実力を持つ戦士が皆無というわけでもあるまい。そして一年間かけて眺めた結果、イーストマーチの衛兵隊は総じて練度が高い（中には盗賊に始末された凡蔵の如き者も混じってはいたが）。

同じノルドがその水準に至っているのだ。ウインターホルドの衛兵隊がそうならない道理はない。

と言うか、私が直々にあちらより少人数を揉んでいるのだから、イーストマーチの上澄み程度にはなってくれなければ困るのだ。計画に支障が出る。

まあ、私だけではそうそう上手にことを運べはしなかつただろう。だが、盗賊連中の世論操作もあり、結果として四年間で衛兵隊の訓練はそれなりの成果を見せた。

未だイーストマーチの衛兵隊には及ばないが、五大都市以外の者等であれば、ある程度渡り合えるであろうところまでは。あとは続けるだけだ。継続は力なり。既に四年続いているのだ。この先も然程問題なく継続できるはずだ。もう四年、ないしは五年あれば、使い出のある連中に仕上がるだろう。そうして基礎が出来上がれば、色々と備えている秘密兵器を加えた独自の演習を繰り返し、完成だ。そのときが楽しみで仕方ない。

これまた衛兵隊の話題で思い出したわけではないが、散々しごいた面子の中には、ラーナルクにけしかけて試験にした『元「賊の頭」』の姿もあった。名は、レンドとなつた。私の考えた此奴の使い道とは、衛兵隊の中堅所に置くことだったのだ。

今のウィンターホールド衛兵隊は、まだ全員を見張れる程度の人数しかない。しかし順調に復興が進んだ数年後には、衛兵隊の規模は何倍にも拡充している予定だ。とてもではないが、私と盗賊連中だけでは見張りきれない。

そこまで組織が大きくなればどうなるか。確実に不正を働く者が出てくる。何故いい切れるかと言えば、私ならそうするからだ。

常日頃厳しい訓練に耐え、町の住民達からは尊敬の目を向けられている。そうなればある種の特権意識が芽生え、多少の甘い汁は当然の権利だと考えるようになる。

極めて凡庸な私が『仮に衛兵隊の一員だったのなら』と真剣に考えた結果、そのような結論に至つた。ならばそれは特別的外れなものではないはずだ。

そして、それは此奴等『現衛兵隊』かもしれないし、此奴等の下に付けた『未来の部下達』かもしれない。

私自身は不正を絶対悪だとは考えていない。衛兵隊の本分は、脅威からウィンター

ホールド地方の住民を守り、時には首長の剣として外敵を討つことにある。職責が果たされ、不正の程度が目にも余る惨状でなければ、私からとやかく言うつもりは無いのだ。

しかし、それが組織として健全かどうか、という話になれば別だ。そして不健全な組織では、属する人員の質そのものの低下を招くことになる。これは亡き友等から聞きかじった話と、私がスカイリムで見えてきた人間の有り様ありようから判断した。

そのため持論と矛盾するようだが、衛兵隊の質を保つためにはどうしても不正に対して手を打つ必要がある。

そこで考えたのが、不正に走る方向をこちらで操作するための鬱憤晴らし要員を用意できないか、ということだった。つまりレンドを不正の元締めとして置いておき、不正を働く者を把握したり、その程度を操ろう、という話だ。

賊討伐から帰還した後にブレックスへ相談したが、珍しく良い考えだと太鼓判を押された。ただ、念のために顔は変えておいたほうがいい、とも。

私もそれについては考えていた。そのため、以前、我が友ブリニョルフから伝え聞いていた顔面改造医の元へレンドを送り、人相を変えたうえで衛兵隊へ所属させた。レンドという名も偽名だ。

本人は「男前にしてもらったうえに甘い汁まで公認で吸っていいとは、気前がいいな」と軽口を叩いている。だがこの男、それで気を大きくする阿呆でもない。

こちらの力が単純な暴力や盗みの業に留まらないことをあえて見せつけた、ということには気付いている。そして前もって伝えてもある。「真の自由は生涯訪れない」と。

はいやいだ様子を見せるのは、言ってみれば服従の証だ。自分は馬鹿な考えを持ってはいない。与えられた環境に満足している。だから自分を危険視して早まったことをしないでくれ。目の奥底に怯えを隠して明るく振る舞う様からは、そんな声が聞こえる。

安心してほしい。私も、使える駒は嫌いじゃない。監視や不正をどの程度見逃すかの線引は盗賊連中の感性に任せるが、私は此奴が裏切らない限り、大事にこき使うつもりだ。

末永く仲良くしよう。

盛大に前置きが長くなったが、この四年間を振り返るきつかけになったラーナルクについて、である。

心配事も増えはしたが、なかなか面白いことになっている。だからこそ、私は決意するに至った。至ることができた、と言ったほうが正確か。

まず、訓練に参加させたことで衛兵隊と更に打ち解けることにはなった。というか、どうも同情されているらしい。私から虐待を受けているのではないかと。本人は憤慨して自分から望んだことだと弁明したらしい。だが、折角仲を深める話題ができたのにそれを殺すのも勿体ない。せいぜい同情を引き出して、衛兵隊の心を掴め、と言つてやった。あれの顔には「甚だ不本意だ」と書いてあつたが。愛い奴。

とはいえ、そろそろ私が絡んでも問題なく腹芸をこなせるようになってほしいと思つていたところだ。若干無理にでも納得させた。どうしても我慢できないときは、ハンをお願い出せ、とも。かなり複雑な表情をしていたのが、これまた何とも愛らしくてたまらなかつた。

そうして何をやらせたかと言えば、この四年間は衛兵隊と共にひたすら仕事を押し付けた。

衛兵隊との合同訓練の他にいつもの鍛錬も続けていたわけなので、ほぼ休み無しである。

そのせいか、なかなか精悍な若者になつたと思う。上背こそ私より頭半分低いが、平均的なノルドの中でも大柄だ。それでいて速度を殺さないよう引き締まっているのだから、なかなかの男ぶりと言える。

流石は我が愛息である。外見には似つかわしくないのを承知のうえで、いいこいいこしてやりたくなる。

ただ、ちと顔が良過ぎる。度を越して、だ。女殺し、と言えるくらいには良過ぎる。ただでさえ腕が立ち、立場ある私の倅なのだ。更には、言うまでもなく、頭も切れる。本人が乗り気かは別として、甘い雰囲気を作ったうえでの小粋な冗談の一つや二つなど、造作も無く披露できるはずだ。

そんな非の打ち所が無い我が愛息である故、何処の馬の骨ともわからぬ女に唆そされな
いか、父は毎日、気が気ではない。『男』の先輩としての経験上、『男』とは時として畜
生程度の知性しか発揮できないことがある。若いうちは特にそうだ。本能に負ける、と
いうことが無いとも限らない。あれも男である以上、「家のラーナルクに限って」とは言
い切れないのだ。

その心配から、自由な時間をなるべく削ろうと更に仕事を振ってしまったのだが
……。あれはどうも面倒事に巻き込まれる星の下に生まれたのか、冒険に愛されている
のか、上がってくる報告は興味深いものが多い。

例えて曰く、来る海上交易に備えての灯台整備、その前段階としての調査について。
現地にて怪しげな物音を聞く。辿った結果、灯台地下に広大な空間を発見。そのほとん
どがシャウラスの巢と化しており、高い危険度と有用性により、私兵殿の出陣を乞う。

などだ。

実際に私が駆けつけてみれば、報告通り、灯台の地下に掘られた空間にはシャウラスの卵がびっしりとあつた。

賊が住み着いてやいないかと軽い気持ちで（実際、主目的は行軍訓練であつた）見に行かせて、まさかそんなものを見つけて来るとは誰も想像していなかつた。ついでに言えば、それだけのシャウラスがファルメルとやらの世話も受けずに、何を餌にしてここまで繁殖したのか、全くの謎である。壁に生えた茸では到底足りない。わからないことだらけだ。

シャウラス自体は、生きていた個体の全てをラーナルクと衛兵隊で片付けたらしい。地を這う幼虫も、変態後の成虫もだ。

普通なら、あとは卵を回収するか焼き払うかして話は終わりとなる。だが我が愛息は、私に錬金術師としての顔があることを忘れてはいなかつた。

私は灯台の様子を確認してすぐさま、ブレックス、エンシル、サボスと協議し、ウィンターホールドの地下にシャウラスの養殖場を増設することにした。

管理を誤れば灯台の二の舞に成りかねないが、そこは魔術大学の出番である。壁をシャウラスが掘り掘げられないほど硬い岩に変えて、完全に空間を固定した。岩石脆化魔術の応用、真逆の効果のものを用いたわけだ。

シャウラスの卵はニルンルートのように特別高価で貴重な錬金術材料ではない。しかし労せず大量かつ消費地の至近で手に入るのなら、それに越したことはない。

ついでとばかりに数種の茸の栽培にも着手している。シャウラスの餌になるうえ、逆にシャウラスの死骸を養分に茸が繁殖することもある。アグス師の執務室にも錬金術材料の養殖場はあるらしいが、種類は豊富でも規模は小さい。大量生産が可能な施設があつても良いだろうと判断したのだ。

またあるときは、曰く、山賊が根城にしていた洞窟から、極めて珍しい貴石を発見した。当方、並びに付き人にもその価値は凶り知れず、相談役殿の助言を乞う。ときたものだ。

なおそれに続いて。古代ノルド墓地にて、先日同様の貴石を発見。物自体も、それを修める小箱も共通しており、関連性が高いと思われる。とも。

余程状態の良いものであれば、閣下のサークレットを新調してもいいかもしれない、程度に考えていた私は度肝を抜かれた。

後日ラーナルクが持ち帰った貴石をブレックスに見せてみれば、それは『バレンシアの石』と呼ばれる物だったそうだ。貴石は全部で二十四個あり、スカイリムのどこかにあるはずの王冠に全てを収めると、それを成した個人のみならず、個人が属する組織全

体へ幸運を齎すのだとか。

それがどれほど珍しいかと言えば、盗賊ブレックスでさえ文献や噂話でしか聞き及んでおらず、少なくとも盗賊ギルドには数世紀のあいだ存在しなかったのだ、という。

紛うこと無い秘宝であり、そんなものを通常業務のついでにほいほいと見つけてくる我が愛息に溜息が出た。

私は愛息をこき使っていたに過ぎない。海運のためには灯台が不可欠であるために、その機能を確保せよ。賊が出たとの陳情を受けたので退治して来るように。怪しげな集団が古代ノルド墓地に住み着いたらしいから、退治して来るように。それだけの話だ。

これが普通の冒険者であれば、依頼をこなして、執政か、我がウインターホールドで言えば相談役殿から報酬を受け取って終わり。それだけのはずだった。

しかしラーナルクは、灯台へ行けば、僅かな異音から地下に蔓延る大型害虫の巣窟を発見し、町の益とする。洞窟や墳墓へ行けば、賊共の話を盗み聞きし、秘宝の存在に辿り着き奪取する。

— 実を言えば他にも色々あるのだ。デイドラ崇拜者らしき集団を発見。刺激した結果の被害を鑑み、報告を優先するためその場は口裏を合わせ離脱した。だとか。

帰還途中にサルモール司法高官一行と遭遇。咄嗟にホワイトラン名家バトルボーンの名を騙りやり過ぐす。行き先を確かめるために単独での追跡行に移る。だとか。

何故かラーナルクが関わった案件は、冒険の色を帯びることが多い。そのせいなのか、衛兵隊の中でもラーナルクを英雄視するものが増えてきている。その手の騒動の主役になるのは、『シヨール』の導きなのだとか。

自ずと、あれへ下される指令へ同行したがる者が続出し、そんなに元気が有り余っているのならと訓練の強度を一段階引き上げたこともあった。

まあ、物語の登場人物になりたいと考える気持ちは、私にも理解できる。実際はそれほど良いものでもないというに。

が、重要なのはそこではない。非凡なる我が息子は、その才を活かすに見合った身体と経験を十分に得た、と私が確信できたことが重要なのだ。

もう、冬の寒さに恐怖する幼子でもなければ、狼の群れを相手に苦戦していた少年でもないのだ。今なお年若い、どこへ出しても恥ずかしくない戦士に育った、と。

そう判断した私はある日、ラーナルクを館の地下空間に設けられた第二の執務室へ呼びつけた。そこには、町の相談役であるブレックスとその陰ハンがおり、ほかにも盗賊ギルド幹部ブリニョルフ、ウィンターホールド魔術大学研究員エンシル、それに元盗賊ギルド幹部カーリアの存在があった。

あまり一堂に会することのない面子に、何事か、と身構えるラーナルクへ私は事情を説明し、そのうえで言う。

「息子よ。お前は強くなつた。今こそ、その力を父に貸してほしい。つまるところ、父はそろそろメルセル・フレイが邪魔なのだ。その排除の下準備を、お前に任せたい」

告げられたラーナルクは、やや狼狽し、目を泳がせている。珍しいことではある。しかし予想していたことでもある。

ホワイトランからこつち、至らぬ親ではあつたが、私はこの子をずっと見守り続けて来たのだ。そして幼子は青年へと、孤児は戦士へとなった。私はそのときだと考えたが、どうだ、ラーナルクよ？

三五、女盜賊と若者

「来たかラーナルク。先程衛兵隊から報告は聞いたぞ。賊討伐の帰り道に見つけたサルモールの連中とイーストマーチ衛兵隊、そのどちらも始末したそうだな。山中の戦闘へ横槍を入れる形での奇襲だったとはいえ、見事な手際だ。

父もそろそろウルフリックへの嫌がらせじみた工作を始めるべきだと考えていたところだからな。丁度良かった。まあお前のことだ。そのあたりは察したうえで働きたったのだろうか」

場所はウインターホールド首長付私兵の館、その地下に隠匿された一部屋である。

魔道具を贅沢に使っているのか、暖炉も無いのに暖かい。機能性を重視して配置された家具と若干数取めてある調度品が、『執務室』といった風情を醸している。

カーリアが観察した、館の主である男の性格とはいまいち噛み合わないのだが……。彼女はこれと良く似た部屋がブレックス邸の地下にも存在することを知っている。おそらくはブレックスの配下が手配したのだろう、とあたりをつけた。

「そもそもの話、このウインターホールドの地で余所者同士が好き勝手をしていたのだ。裁定を下す権利はこちらに有り、だ。あとはブレックスに任せておけば、上手に引っ搔

き回すだろう。心配は要らん。仮にばれたとしても、連中とて文句は言えまい。

しかしなんだ。その組み合わせはいつぞやの旅路を思い出させるな。あのときは私が衛兵隊に味方してアーチルと知り合ったのだが、此度は適度に痕跡を残しての麁殺か。その判断、手際、悪くないぞ」

人目を憚るように拵えられた場所での密談。大凡、真に町の舵取りが決まるのは、この場での話し合いによってなのだろう。実際カーリアの予想は、概ね間違つてはいない。若干の訂正を加えるとするならば、実質的には『話し合い』ではなくブレックスからの『通達』である場合のほうが圧倒的に多い、ということだろうか。

……それはそうと。

「ねえ、時間は有限よ。いい加減、本題に入らないものかしらう。」

「おお、そうだな。客人を待たせるのは良くない。」

が、しかし、だ。お前はブレックスの友であつて、私の友ではない。私にとつては言葉どおり、ただの『客』なのだ。それを弁えてほしいと思うのは贅沢なことか？」

けして余人に気付かれてはならないと気を張つてこの会合に参加したというのに、男はのんびりと若者を勞つている。

それに苛立つたカーリアが話を急かすと、男は同意しながらも逆に太い釘を刺してくる始末だ。我知らずカーリアの眉間に皺が寄り、奥歯が噛み締められる。

尤も、男にも一応の言い分はある。

自分は友の頼みで協力するのであつて、何処の誰ともわからぬ他人に顎で使われる覚えはない、というものだ。正当な主張と言えばそうなのだが、この成就が近づいて気が急いでいるカーリアにとつては、いくらかもどかしさを覚えなくもない。

「さて、客人だけではなく我が友等も同じ気持ちだろうからな。言われたとおり、本題に入るとしよう。

息子よ。お前は強くなつた。この父が、『仕事』を任せるのに十分だと判断するほどに。今こそ、その力を父に貸してほしい。父には手出しできん話なのだ。助けてくれ」男は続けて「などといきなり言われても困るだろう。まずは紹介からか」と口にし、カーリアを始めとした全員の立場や關係を、呼びつけられた若者へ説明している。

若者……男の言に耳を傾けながらそれぞれの様子を觀察しているラーナルクであるが、普段に比べて幼さの見える様子だとカーリアは思った。鍛錬場でのしごきや任務に赴く姿を遠目に見たことはあるが、そのときは中々に精悍で、将来に期待できる若武者だと思つたのだ。おそらくは、突然に呼びつけられた戸惑いからだろうが、どうもそれ以外にも理由があるように見える。

カーリアがラーナルクを觀察しているあいだにも、男の話は続く。

「この発端は、ギルドの先代マスター殿にまで遡る。件の人物については、お前も盗賊連中から折に触れて聞いて聞いているだろう。とはいえどこかに漏れがあってもいけない。既知の話もあろうが、おさらいとでも思つて聞きなさい。」

ついでに言えば、私が真に事情を理解しているかという確認も兼ねている。しかし私は、要点をまとめて話すのは苦手だからな。時系列順になぞつていくぞ」

男の後半の言はラーナルクだけではなく、軽口混じりにブレックスやブリニョルフへと視線が向いている。間違いや補足があれば都度頼む、ということなのだろう。

「まず、先代殿の名はガルス。ブレックスの友であり、そこなカーリアと恋仲だった男だ。」

彼はギルドの最盛期を築き上げた大黒柱だった。多くの友を持ち、個人的にも組織的にも大きな力を持った。それが突然に没したため、ギルドは大混乱に陥った。しかも病没ではなく、暗殺されたとあつてはな。結局は後継争いまで起きた。脱走や分派している者達を止めることもできず、ギルドは概ね今の形に落ち着いたわけだ。このブレックスもメルセル・フレイを嫌つてギルドを出奔した口だな。

……ちと話がそれた。わかつた。わかつたから睨むな。

ええと、そうだ。傷を負いながらも帰還したメルセル・フレイの証言により、下手人はここにいるカーリアだ、とされた。

ギルドは文字通り血眼になってカーリアを探したそうだが、この才女は随分と腕が立つらしい。結局、ギルドが身柄を確保することは叶わなんだ。まあ、そうでなければ今こうしてここに立っているわけがないのだがな。

ところが、だ。どうも真相は違っていたようなのだ。下手人はカーリアではなく、それを告げたメルセル・フレイその人だと言うではないか。

父としては真偽のほどは知らぬし、どちらが下手人であつても大した違いは無いのだが。強いて言うなら、父はあの男が好かんからな。彼奴が下手人であつたほうが何かと都合がいい。

何れにせよ、我が友ブレックスがそう言うのだから、そうなのだ。先代殺しはメルセル・フレイの犯行。誰が否やを唱えようが、これが真実だ」

男の物言いに、カーリアの頭へ血が上る。だが、先程も釘を刺されたばかりだ。ここで口を出しても仕方がないと、フードで視線を隠しつつ、男を睨み付けるだけでこらえる。それにしても「真偽は些事」とは随分な言い草である。それほどまでにブレックスを信頼しているのか、この件に然程興味が無いのか。男と接点の薄いカーリアには判断がつかない。

だが男にとっては他人事であつても、カーリアにとっては積年の恨みを晴らせるかどうかの瀬戸際なのだ。どうしたって気分は落ち着かないし、男がどこまで頼りになるの

かも、いい加減そんな言い草のせいで不安になる。

ブレックスからは予め「信用も信頼もしている」と聞いてはいるが、直接の接点がほとんど無いキャリアでは、そこまで信を置くことができない。

尤も、それはそっくりそのまま男の抱く思いと同じものである。余裕が無い分だけ、キャリアの胸中が乱れている、というだけの話だ。

キャリアの視線に気付いてか気付かずか、男は話を続ける。

「よって友等としては、裏切り者へケジメをつけなければ収まりがつかん。二人の我が友が仇討ちを強く願うのなら、父はそれに協力してやりたい。それに話が先代殺しともなれば、ここに居る面子だけの問題ではない。ギルドの問題だ。よって、ギルド内でも腹芸のできる者を見繕い、協力させる。

ただ、一つ問題がある。この父がギルドへ赴き、彼奴の胸を剣で一突きするのは容易い。しかし、この場の皆はそれでは納得せんのだ。特にブレックスなどは、彼奴から全てを奪い、失意の中でその生涯に幕を下ろさせることを望んでいる。父はそれを尊重したいと思う。

そこでだ。あの業突張りをただ殺すのでは面白くないと、父達は一計を案じたのだ。そのためには、まずメルセル・フレイを貶めるための下地が無ければならない。

ついでに言う、だが。メルセル・フレイ……というより、リフテン首長へ多大な影

響力を保持する彼のブラック・ブライア家が計画の妨げになりそうなのだ。父は可能であれば、穏便な方法でこれを排除したいと思っている。石に躓く度に砕いては、ちと外聞が悪い。

そして、ブラック・ブライア家の権力のうち、無視できない一部が、ギルドの存在なのだ。

無論、ギルドの全員がブラック・ブライア家に協力的というわけではない。が、メルセル・フレイトとブラック・ブライア家当主、メイビン・ブラック・ブライアの二人に限って言えば、完全に持ちつ持たれつの関係にある。

お前も散々盜賊連中の業を見てきただろうが、奴等の職能は敵対する者にとって、「何をされるかわからない」という恐怖を齎す^{もたら}。ギルドはブラック・ブライア家に借りのある立場だが、その恩恵はリフテン随一の名家をしても大きいのだ。そしてこの両者の結びつきが強ければ強いほど、どちらか片方のみを対象とした調略は難しくなる。ならばいつそどちらも排除してしまおう。そういう話になった。

手前味噌ではあるが、父の働きもあつて先代殿が没した当初に比べれば、ブラック・ブライア家からギルドへの影響力は徐々に弱まっている、らしいが……。それでも両者の結びつきは今なお強い。父はそれが非常に面白くない。

つまるところ、父はそろそろメルセル・フレイトとブラック・ブライア家が邪魔なのだ。

前者を友の望む形で取り除き、友の宿願成就と計画の障害排除を両立したい。その諸々の下準備を、お前に任せたいとそう考えている」

男にはブレックスやブリニョルフへの気遣いが見えるが、カーリアやエンシルについてはそうでもない。あくまで当事者であり、友人であるブレックスが同席を求めたため、蚊帳の外に置くことはしなかった。その程度の認識なのだろう。

カーリアとしては、自分こそが最たる渦中の人物だ、という自負がある。それ故、忸怩たる思いも湧いてくるのだが、館の主である男によつてあらゆる計画の変更を余儀なくされた結果、カーリアには男の協力を仰ぐ道しか無くなっていた。男と協力関係を結ばなければ、目的達成への道が閉ざされた、と言つても過言ではない。

そう言う意味では、男を憎たらしく思う。それでも今のカーリアには、ブレックスを通じて男を頼る他ない。

釘を刺されてしまった手前、男が何か考え違いを口走ろうとも、ブレックスあたりが訂正するだろう。自分の発言権は無くなつたも同然だ。あとでブレックスと改めて話し合うにしても、この場にいるあいだ、どうせやることもない。

カーリアは、どうしてこうなつたのか、と男が若者へ話をするあいだ、若干の現実逃避に走つた。

自分達ナイチンゲールは、史上最も優れた盜賊であり、同時に最も誠実なノクターナルの守り人だと確信していた。

ダンマーは総じて長寿であるが、見た目通りの若年であつたカーリアは、在りし日、たしかにそう考えていたのだ。しかしそれは自分だけの思い込みであつたと、骨身に染みることとなつた。

信頼していたメルセルはギルドの財産を横領し、私腹を肥やしていた。誰よりも愛しい想い人であつたガルスは、決定的な証拠こそ掴めずとも、メルセルを怪しみ、調査していた。

自分だけ、私だけが何もわかつていなかった。カーリアはガルスの亡骸を墓地に残したまま、後悔と絶望で溢れる滂沱の涙を気にもせず、ほうほう這々の体で逃げ出した。

それから、カーリアにとって地獄の日々が始まつた。

メルセルは衝動的にガルスを殺めたわけではなかつた。自分の行いが大なり小なり露見していると考え、綿密な計画を立てたうえでガルスを稼業へと誘き出した。そして秘密を共有する同志であり大恩ある先達でもあるギルドマスターを殺めると、その毒牙をカーリアにまで向けた。

カーリアは必死に抵抗して逃げ出したが、今になって思えば、メルセルとしてはカーリアを始末できようが取り逃がそうが、どちらでも良かったのだらうと思う。

ガルス共々殺害を完遂できたのなら、それなりの筋書きを用意し、涙の一つでも零したかもしれない。「あのメルセル・フレイが……」とギルド構成員の同情を誘えば儲け物。

取り逃がしたとしても、復讐者の仮面を被り、構成員達の怨嗟をカーリアへと向けることができる。

そう考えれば、寧ろメルセルは自分をわざと逃したのかもしれない。敵を目の届かないところへ追いやる危険性は承知しつつも、一人でできることには限度がある。ならば構成員達の負の感情の矛先を残しておいたほうが、何かと都合がいい。

カーリアはそのように考え、おそらくそれは事実だと確信している。

どちらにせよ、カーリアの去就に関わらずメルセルは新体制のギルドで辣腕を振るう。ギルドの規模はいくらか縮小されるかもしれないが、人の下に就くことを好しとしない男だ。不利益には目を瞑るだろう。

反面、カーリアには泥を嚼る毎日が待っていた。ガルスがメルセルを疑っていたように、メルセルもガルスを監視していた。そして一度動き出したなら、即座に大量の人員を使い、残ったカーリアの動きを封じた。

ガルス近親者へ嘘を吹き込み、カーリアを孤立させる。唯一、魔術大学のエンシルには直接の手出しが不可能であったようだが、ウインターホールド自体を見張つていれば接触は困難になる。何せウインターホールドの町では余所者は目立つのだ。ダンマーならなおのこと。カーリアが身の潔白を早期に証明する手立ては失われた。

その結果、カーリアはいつ終わるとも知れない逃亡生活に身をやつすことになった。騒動の直後は、どの町に行つてもギルドの者が血眼になつてカーリアを探していた。少し落ち着いてからも、メルセルの雇つた賊や情報屋が常に徘徊していた。カーリアは追い立てられた鼠のように、野山を住処とするしか無かつた。

ガルス存命中は、カーリアにとつて我が世の春だつた。小さな王国とまで称されたギルドを我が物顔で歩き、稼業へと出向く。そして当然のように仕事を完遂させて、仲間称賛を浴びながら愛しい人に報告をし、後始末を終える。

それがたった一度の裏切りによつて全てが覆された。天国は地獄へ。歎びは絶望へ。誇りは自他への不信へ。何もかもが裏返つた。ただただ、惨めだつた。

いや、『たった一度』などと考へているから自分は駄目なのだろう。ガルスは猜疑心の強い狭量な男ではなかつた。であれば、メルセルを疑うことは、それ自体が苦痛を伴つていたはずだ。自分はそれに気付いてやれなかつた。恋人が一人苦しんでいるあいだ、自分はその庇護下で得意な顔を振りまいていただけだつた。

カーリアは自らを呪った。こんな愚図は死んだほうがガルスのためになる、とさえ思った。

しかしどうしても。どうしても愛しいあの人の仇を討つまでは死ねない。その思いだけを支えに泥水を啜り、陰から陰へと鼠のように逃げ回る日々を送った。全ては恨みを晴らすため。許されざる悪行を白日の下に晒し、報いを受けさせるため。

カーリアは復讐の鬼になっていた。

そんなカーリアに転機が訪れたのは、ガルス死没から数年が経った頃だった。ウインドヘルムの町で、ブレックス一味とギルドが暗躍しているという情報を掴んだ。

カーリアは混乱した。詳細までは知らずとも、ブレックスは郎党を引き連れてギルドを出たと聞いていた。それがメルセル率いるギルドと同じ町で仲良く動いている？

その割には両者の距離感が気にかかる。

ブレックスがメルセルに取り込まれているのなら、状況は絶望的だ。ブレックスはカーリアをこそ仇と見定め、自分を追い詰めるためであれば喜んでメルセルに協力するだろう。いや、協力どころか寧ろ自ら仇討ちを成し遂げることに執着するかもしれない。

だが、ウインドヘルムでの両者の動きを見るに、どうも競い合いながらも不干渉を決

め込んでいるように見えた。

協力関係が築かれているのなら、どちらの組織がどの有力者をを落とすか、という棲み分けはできているはずだ。しかし競い合っている？ ならば何らかの事があって不戦の協定を結びはしていても、同盟とまでは行っていない。そう考えるのが妥当だと思えた。

うまく行けばブレックスを味方にできるかもしれない。

そう考えたカーリアはブレックス一味の動きを監視しながら、ギルドの経済状況を調べることにした。それは並大抵の苦労ではなかったが、絶望の中に見えた一筋の光明は、彼女にとって何よりも何よりも甘く暖かかった。

だが調査が進むうち、状況は自分が考えているほうから明後日に向かっていることがわかった。彼女は再び混乱した。

彼女には腹案があった。逃亡中に伝え聞く限りの話ではあるが、ギルドへの最大の支援者となりつつあったブラック・ブライア家を第一の標的とするものだ。そこへ打撃を与えて、メルセルの対処能力を奪いつつ、防壁の一つを崩す。一挙両得の策である。

これは『敵の敗北を確実にするには、そいつの味方を潰せ』という、ガルスのお教えを元に考案したものであった。

それが、ブレックス一味と行動を共にする一人の男によって、策そのものが意味の無

いものに成り果てかけていた。

カーリアの考えでは、ギルドは向こう数十年かけてブラック・ブライア家の傀儡になつてゐるはずだつた。ガルス死没は、それほどまでに大きな影響を齎すことも十分あり得るからだ。

だからこそ、落ちぶれたギルドを率いるメルセル・フレイにとつてブラック・ブライア家は頭の上からならない最大の支援者となり、そこへの打撃は効果的なものになるはずだつたのだ。

だがギルドの復興は予想外の速度で進み、ギルドとブラック・ブライア家の力関係は、それほど大きな傾きを見せていない。今ではギルドが新しいしのぎや支援者を開拓したことにより、対等に近い関係にまでなつてゐる。真つ先に多額の支援を行ったブラック・ブライア家としては面白くないだろう。

この状態でブラック・ブライア家のみ打撃を与えたところで、ギルドには彼の家を『切り捨てる』という選択肢が選べてしまう。それでは意味が無いのだ。

カーリアはブラックス一味にも気付かれないようウインターホールズの移住者に紛れ、ブラックス一味の、いやブラックス個人の見極めを行った。

一味はその性格上、ブラックスの思うがままに動く。そのため当初は、一味全体の動きを把握できれば、ブラックスの思惑を知ることにも可能だと考えた。

だがブレックスがカーリアの存在を念頭に動いていたとしたら？ ブレックスがカーリアを油断させ、謀り、罠に嵌めようと図っていたのなら？ 配下の動きもそれに即したものになる。であれば、カーリアにブレックスの真意を見抜くことなどできなくなる。

だからカーリアは覚悟を決めた。自分を仇と信じ、姿を現すどころか存在を臭わしただけで殺しにかかってくるかもしれない男の下を、自分から訪ねていった。巨人の宝が欲しければ、巨人の営巣地に踏み入るしかないのだ。

ウインドヘルムでの一味の暗躍を監視しつつ、フラゴンを出たあとの足取りを追った。そうして疑念を期待に変えてからも、ウインターホールドにて慎重に様子を探った。

カーリアのこれらの動きにブレックス含めて一味の者達が気付けなかったのは、決して一味の技量が低いからではない。カーリアは若く、更にはガルススの推挙があったとはいえ、ナイチンゲールの守り人なのだ。個人の力量だけなら、少なくとも見積もつてもギルド幹部級。高く見積もれば、隠術と弓術においては他の追隨を許さない腕前を持っている。

そんな彼女が一味に敵意を抱くでもなく、ただ観察に徹していた。人は敵意やその痕跡には敏感になるが、そういった邪な気配の無い動きを察知するのは難しい。

危険を冒したかいはあった。カーリアは賭けに勝ち、友人を一人取り戻した。ブレックスはカーリアが接触する以前から真犯人について疑問を抱いており、警戒しつつもカーリアの話に耳を傾けた。

するとブレックスが指示を出すまでもなく配下の者達が裏取りを行い、それは概ね『真である』と判断された。カーリアの逃避行が本当の意味で終わったのは、この時点であつた。

次いで、二人目の友人であるエンシルとも再会を果たした。エンシルは元々カーリアを下手人とは考えておらず、消去法でメルセルこそが真犯人だと当たりをつけていた。

それ故に計画の変更を余儀なくされたのだが、もののついでとばかりに主導権まで奪われた。

ブレックスが主導するのならば、まだ我慢もできた。カーリアにとつても馴染み深いこの強面の男は、カーリアの愛する男の友人であり、二人の仲を祝福してくれていた。間違つても口には出さないが、存外、好意を隠すのが下手な男だ。カーリアは自分の予想が十中八九間違っていないだろうと考えている。

ナイチンゲールでこそないものの、仮にメルセルへの復讐の主導権を預けるとしたなら、スカイリム中でもこの男以外に納得できる者はいなかった。カーリアのブレックス

に対する信頼は厚かった。

だが、実際に主導権を握っているのは、カーリアとは縁の薄いウインターホールド首長付き私兵の男。ギルドの外部協力者であり、ブレックスが不承不承言うには「ダチ」らしい男。

男に主導権を預ける最大の理由は、計画の鍵となる若者が男の養子であり、若者への指示は男以外の何人たりとも出すことが叶わないことと伝えられた。

しかしカーリアは本当にそれだけだろうか、と思う。

言つては悪いが、カーリアからすれば男はそう知恵の回る性質には見えなかった。ブレックスであれば、表向きは立てるようにして手玉に取り、傀儡とすることも難しくはないはずだ。特にブレックスの陰であるハンはその手の人心掌握に長けていたと記憶している。

それをしないということは、不機嫌そうに言う「ダチ」が偽りではなく、ガルスには及ばないであろうとも、真なる友情を感じているということ。

元々ブレックスは、カーリアへの復讐心もあつただろうが、メルセルに反発し、ギルドを脱退するほどの激情家でもある。だと言うのに、カーリアには、ブレックスが男を尊重して一步引いているかのような雰囲気を感じ取れてしまう。そのあたりから、やはりブレックスと男の信頼関係は自分が思う以上に厚いのだろうと思われた。

カーリアにはそれが歯痒く、もどかしい。復讐の甘い蜜は、心から信頼できる者とのみ分かち合いたい。だが現状は、何を間違えたか一人の部外者が我が物顔で話の中心に居る。

復讐とはどれだけ美辞麗句を並べようが、結局は徹頭徹尾、感情の問題である。だからこそ、カーリアは己の抱く不満を正当なものだと思つた。復讐が感情で成すべきことなのであれば、余計な損得や理屈を排したあとに残つた感情こそが、最も純粹で崇高な理念になり得ると考えたからだ。

なのに、どうして……。カーリアが現実逃避から帰つてくるころ、男から若者への現状確認が終わつたようだった。

「幾つか、質問をよろしいでしょうか？」

「勿論だともラーナルクよ。寧ろ、私はお前と違い記憶力にしか自信が無いからな。長話をしているあいだに話の流れが自分でもいまいちあやふやになりかねん。疑問が湧いたならその都度質問してくれるほうが有り難い」

「では遠慮なく。まず、何故その役目を仰せつかるのが僕なのでしょう？」

「端的に言えば、盗賊の業を修めている人間の中で、最も腕が立つのがお前だからだ。父がメルセル・フレイを嫌っているように、あちらも御同様のようだ。ブリニョルフに聞いたが、間違いなかった。父が私兵の仕事をおぎなりにしてギルドへの干渉を強めれば、確実に彼奴の警戒を買う。」

その点で言えばお前も同様だ。猜疑心の強いあの男のこと。父の子である、というだけで無警戒とは当然行くまい。だが、お前はリフトの砦からこつち、どうかすれば父とより盗賊連中と過ごした時間のほうが長いくらいだ。

更に都合がいいことに、お前も知るとおり二人の付き人のうち、一人は必ずギルドの者だった。おかげで、大変用心深く慎重であらせられるギルドマスター殿は別としても、構成員のあいだにはお前を受け入れても良い土壌が出来上がっているらしいのだ。勿論、付き人の中にはメルセル・フレイの息がかかった者もいたからな。全員がそうというわけではないが」

「そのあたりは俺からも少し補足させてもらおう。」

兄弟の言うとおり、お前さんはギルドの連中からも一目置かれている。特に年嵩の者にその傾向が強い。メルセルが怪しもうが警戒しようが、そいつらがお前さんの身を守るだろう。

ついでに、俺としては都合がいいような困ったような事情もあつてな……。

兄弟達には話してあるんだが。実は兄弟が協力者になってくれたあたりから、メルセルを引きずり下ろそうって動きが度々あったんだ。折角落ち着いてきたギルドを再び混乱させかねない馬鹿共だよ。信じられるか小僧。連中、よりにもよって俺を担ごうとしたんだぜ？ 見る目が無いにもほどがあるだろう？

結局は穏便な方向に落ち着いていたんだが、人の感情つてもんはそう簡単に割り切れはしないらしいな。

連中が最近お熱なのが、お前さんなんだよ、小僧。メルセルを排してお前さんを担ぎ、居心地の良かったギルドを取り戻そうと考えているらしい」

「……それはつまり、僕が舐められている、という話ですか？ 僕ならば傀儡にできる、と」

「いやまあ、悪く取ればそうなんだが、実際はもつと緩い雰囲気だな。連中も、お前さんの腕前や頭の切れは認めている。盗みの業そのものはまだだが、お前さんは若い分、伸び代がある。『自分達が手解きをし、これからも面倒を見てやるつもり』の人間が上に立つのなら、そう悪い扱いは受けないだろう。少なくとも現フレイ体制の息苦しさは解消されるはずだ』。連中の考えはそんなところさ」

若者はその後も幾つかの質問を投げかける。

計画への理解を深めようとする思慮深さにも見えるが、カーリアは違和感を覚えた。

そしてそれは、エンシルを除く全員に共通したものであった。

普段のラーナルクに指令を下したのならば、ラーナルクからの確認は最低限で済む。ウインターホールドを取り巻く環境。自分の置かれた立場。ブレックスや男など、指令を下す立場の人間の思惑。それらを鑑みて、最適な行動を己の脳内で弾き出せるからだ。

そこいらの若い衛兵隊員がそのような態度で任務へ臨もうものなら、私兵たる男のごきが数段厳しいものになる。だが、ラーナルクがその手のしくじりを見せたことは、ここ数年で一度も無い。ラーナルクにとっては、少ない情報からであつても『理解可能な推定事実』なのだ。

そも、現場では予想外なことが度々起こる。そしてその場で判断を下すのは、現場指揮官であるラーナルクだ。つまり、どれだけ事前に打ち合わせをしておいても、結局は現場の裁量で動かざるを得ない。ならばやはり必要以上に詳細な確認は時間の無駄だろう。多忙な養父や相談役の手を煩わせることもない。そういつた認識であつた。

なのはどうしたわけか。今日は質問が多い。カーリアにはその様子が違和感として映つた。

「つまり僕の役目は、僕へ好意的な構成員を足がかりにギルド全体へ広く味方を募り、お父さん達が動く然るべきときに備えて協力者を可能な限り用意しておくこと。そう考

えてよろしいですか？」

『言うは易し』の典型だがな。概ね間違っちゃいない。欲を言えば、お前さんのシンパを作っておければなお良い。あ、ギルドには年頃の女もいるが、そのあたりは上手にやれよ？ 味方に付けられれば心強いが、仲が拗れたら厄介な敵になりかねんぞ」

ブリニョルフがおどけて不良中年らしく訓示を垂れる。対してラーナルクは「あなたじゃあるまいし」と反論し、不良中年は「俺は常に、関係を綺麗にしておく主義だ」と胸をはる。女遊びを否定しないあたり、伊達男ぶりは相変わらずなようだ。

次いでラーナルクは「出立はいつ頃がいいですか？」と聞いた。普段なら有り得ない質問に、カーリアですら決定的だと思った。それは、養父たる男も同様であった。

「……父の下を離れるのが怖いか、ラーナルク」

若者の肩が、気の毒なほどに跳ね、強張った。

鍛錬の様子を見てると信じられないが、養父の男は子を溺愛し、養子の若者は父を強く慕っているとのことだ。そんな子供が、父の役に立てる好機だと言うのに出立に逸るわけでもなく、寧ろ先延ばしにする、いや、『したい』と思わせるような言を吐いた。

仮に日取りについて都合があるのなら、ここまでの説明で既に明かされているはずだ。男がそれほどの重要事項を失念していたとしても、ブリニョルフやブレックスが補足している。

ラーナルク自身にも自覚が無かったわけではないだろう。それでも、最愛の養父から直截に指摘されたことが、堪えられない。

「お前がどうしても、と拒むのなら、無理強いはいしない。計画のことは言うまでもなく父の我儘であるし、ギルドの件も同様。父がブレックスに協力してやりたいというだけの話。お前も此奴に多少の恩や義理はあろうが、お前が我が下を離れ、身を危険に曝さなければならぬほどの理屈ではない。無論、お前が断つたところで、父がお前を見損なうことは露ほども無い。」

それに父の二人の友人はどちらも知恵者であるからな。お前の手を借りられないとなつても、何かしら妙案を思いつくだろう。気負うことはない」

男にそんなつもりは無かつたのだろう。しかし、内心で狼狽している若者にとっては、突き放した言い方にも聞こえてしまった。

「……お父さんはウインタールド首長の私兵であり、町と大学を繋ぐ掛け替えの無い人物です。その息子である僕が臆病風に吹かれて安全な巢に籠るなど、許されることではありません」

「誰が許さない？ 誰が決めた？ お前に其奴等の心当たりがあるのなら、言いなさい。この父が成敗してくれる。私の自慢の息子を虚仮こけにする輩に、生きる資格は無い。」

大体今回の一件は極秘任務だ。対外的には『武者修行に出した』とでも発するつもり

でいる。つまりお前が話を受けても断つても、周囲から受ける視線が悪くなることはあるまい。お前の言う『単に籠る』状態であつたとしても、これまでどおり町のためにその腕を振るう毎日が続くだけだ。存外、そのほうが住民達の受けはいいかもしれない。そしてそれを理解していないお前でもあるまい？」

自分でも馬鹿な発言をしたと思つたのか、ラーナルクの浮かべる表情は苦い。そこに普段より格段に働かない頭への苛立ちと、それでも何か言い繕わなければならないという切迫感が重なり、若者の浮かべる焦燥は増すばかりだ。

「……ラーナルク、我が息子よ。お前は『考えを読ませない』と評判で、自覚もあることだろう。しかしこの父にはな、大凡何を考へているのかが透けて見えてしまうのだ。お前が何を恐れ、何を隠したが、何を恥じているのか」

若者はハツとした顔で養父を見つめる。そして慈愛に満ちた視線を真正面から受け、耐えきれず視線を切つた。

養父である男は続けて言う。

「お前という人間への観察のみであれば盗賊連中のほうが長けているかもしれないが、こう言つた方向への感情の揺らぎについてはな。父のほうが詳しい。何せ父は今でこそ色々と割り切つてしまえる性質になつたが、昔のお前より、更に、ずっと、弱く小さな人間だつただから。まあ、父親の意地として努めて『強い父親』ばかり見せようとし

たこともあつてか、お前には『弱い父親』というのは想像しづらいかもしれないが」

ラーナルクの胸中は、男の指摘するとおりだった。『変わっている』と思つたことは有れど、『弱い』などと考えたことは一度たりとてない。養父の失敗談などは、寧ろ強すぎるが故の弊害だと考えていた。それはそれで間違ひではないのだが、スカイリムで拾われたラーナルクに、不死人となる以前の男の様子を想像することは、極めて難しい。無理と言つてもいい。

だからこそラーナルクは半信半疑にもなるし、しかしお父さんが言うのなら、と自分の秘部が見通されている恐怖に戦おのかずにはいられない。

黙り込んでしまった若者に対し、男は水を差し向ける。

「そんな父が、今一度、問おう。父は既にお前を一個の戦力として勘定している。だからこそ、この父を助けてはくれまいか」

たつぷり数十を数えるほどの沈黙の後、若者は、ラーナルクは、絞り出すように答えた。

「その任、お受けいたします。吉報をお待ち下さい」

それは若者にとっては初めての経験である、父親の前から立ち去りたい、という逃げの言葉だった。

三六、東の首長の誤算

「今までは兄弟の子だつてことで皆がお前さんに気を遣つていた。でもギルドに着いたからにはそうはいかないからな。初めての経験だろうが、新入りらしく、上手にやれよ。……とは言うものの、彼が自信を持つて送り出したんだ。そのあたりも卒無くやつてのけるんだらうな。全く、可愛気の無い小僧だよ」

二頭の馬に荷物を積み、ブリニヨルフとラーナルクがそれぞれ轡くつわを取つてゐる。内一頭は長く共にあつたマルツコである。養父たる男が、饑別に持たせたのだ。馬はまた買えばいい、と言つて。

他にもギルドからの出向者である付き人が同道し、計三人の盜賊が街道を往く。

第一の目的地としてまずはウインドヘルムを経由し、その後、リフテンを直指して乗合馬車を捕まえる予定だ。ついでに言えば馬車はリフテン直前で降り、一時ブレックス一味の傭となつていた砦にも寄る予定である。いつぞやの旅程を逆行する形だ。

ウインターホールドから馬車を使わないのは、単にまだウインターホールドに乗合馬車が常駐するほど復興が進んではいないからだ。しかし、それも時間の問題だ、と町の上層部も商人達も考えている。人が集まれば金が集まり、金が集まれば人が集まる。

そうすれば利を求めて様々な業種の積極的な参入が見込める。あとは好循環に任せればいい。町の復興は順調だ。

「ああ、そうだ。建前上、お前さんは兄弟と反目して、半ば出奔する形でウインターホールドを出たことになっている。お前さんを戦士として後継に据えたい兄弟。外の世界を見て、自分の道は自分で決めたいお前さん。ちっとベタな話だが、それだけ信憑性も出るし反論も難しい。で、兄弟は外聞を気にしてそれを追認、と。表向きは武者修行の旅だな。

その程度の作り話でメルセルの目を誤魔化せるかは微妙だが、何も無いよりはマシだし、自然だ。大好きな『お父さん』の嫌味を言われたって、頭に血を上らせるんじゃないぞ。どうせ最後には始末するんだ。そう思って、我慢しろ」

ラーナルクは沈んだ気持ちのまま、旅程について思う。ウインドヘルムに着いたら、トルドスに会えるだろうか。できればアーチルとも顔を合わせて、ウインドヘルムの情報を仕入れておきたい。間諜だけでは探りきれない内部の情報も、自分であれば話してくれるかもしれない。

それに、砦に立ち寄るのも少し楽しみだ。砦に滞在したよりずっと長い期間をウインターホールドで過ごしている。自宅と言えば「お父さん」の館の印象が強い。それでも、あの砦はラーナルクにとっての原点とも言える場所だ。ホワイトランを捨て、「お父さ

ん」や盗賊達と過ごした、かけがえのない場所。離れるときは酷く寂しく思ったが、こうして戻ってくることもできるのなら、そう悪くないとも思えた。

「そうだ、大事なことを忘れていた！　メルセルに髪の話はご法度だぞ。ちよつと言いつらいんだが、兄弟が初めてフラゴンを訪れたとき、力を見せる必要があつたんでな。奴さんの頭をなかなかの男前に刈り上げちまつたんだ。もう十年近く前の話だからすつかり元通りになって、見た感じでは全くわからんがな。とはいえ、あの執念深い男が忘れて水に流したとは考えにくい。触れないのが吉、だ。

それから、メルセルとは別の理由でデルビンという男にも、髪の話は同様だ。理由は見ればわかる。男なら、情けを知るべきだ」

……のだが、ラーナルクが自分なりに心の整理をつけている最中さなかにも、ブリニョルフの軽口は止まらない。

先達からの注意事項でもあるため全くの無視もできず相槌を打っているが、そろそろラーナルクも癪に障つたらしい。

「……ブリニョルフ、さつきから何なんです？　髪の話はまだしも、他の話はブレックスの親父おやじさんから聞いています。今更くどくと伝えられなくとも、僕は大丈夫です」

「おや、そうかい？　そいつはとんだお節介で失礼をばいましたね、坊まなこつちちゃん。しかしながら、私わたくしめの節穴まなこ眼には坊つちちゃんが不安がつておられるように見受けられま

したもので、ついお節介を働いてしまいました。何卒ご容赦くださいませ。平に、平に、このとおりでございます」

飄々とした口調で、これぞ『慇懃無礼のお手本』とも言える仕草で以て頭を下げるブリニョルフ。それを見たラーナルクは視線を逸しつつ眉根を寄せて舌打ちを打つという、如何にも『不快である』という態度を見せる。

思えば、この伊達男は初めて顔を合わせたときから自分を小馬鹿にした態度を見せる。おそらく、それは自分の被害妄想ではないはずだ。ラーナルクはそう考えている。「しかしなあ、小僧。自分で『大丈夫』だと口にするのなら、まずは俺達二人にそれを見せてほしいもんだがな。

お前さんは決断をして、俺達は既にウインターホール드를発った。つまりはどうに作戦行動中だという話だ。そして言うまでも無く、その作戦の要は、小僧、お前さんだ。初めて『お父さん』と離れて心細いのはわからんでもないがな。シャキツとしてもらえないと、こつちとしても不安で仕方ないんだよ。どうも我が兄弟は、お前さんを猫っ可愛がりして育てたように思えるな。

一応言っておくが、お前さんが使い物になるかどうかの見極めは俺に任されている。兄弟は太鼓判を押し、叔父貴も『最低限は仕込んだ。使い物にならないことはないはずだ』と手放しに褒めちやいたが、俺はお前さんをよく知らない。『これは駄目だ』と感じ

たなら、二人には事情を話して、ボロが出る前にとつとウインターホールドへ送り返すからな」

ラーナルクにとって、他でもないこのブリニヨルフという先達から痛いところを指摘されることほど、不愉快な話も無かった。

見当違いの揶揄や罵倒であれば聞き流せる。相手が滑稽に見えるからだ。しかし、いちいち自分の凶星を突いて来るこの手合は、はつきり言つて苦手な類の人間なのだ。

ラーナルクとて、作戦遂行の能力があることを内外に示せ、というブリニヨルフの言葉は理解できる。ほとんど身内と言つて差し支えないこの面子ですら不安にさせるよ
うで、どうしてギルド内部に派閥を形成できるだろうか。

そう頭で考えても、表情はどうしても仏頂面を浮かべてしまう。ブリニヨルフはそんなラーナルクを見て溜息を一つ吐くと、いくらか口調を和らげて切り出した。

「なあ小僧。お前さんが気乗りしない本当のところは、俺と一緒だから、とかそんなつまらん話じゃないだろう？ ウインドヘルムに付けば、ギルドへ帰還する者とも合流する。そうすればこんな緩く砕けた話はできなくなる。何か蟠わだかまりがあるのなら、今のうちに吐き出してしまふことだ。そうでなければ、重圧で潰れるか、致命的な失敗をやらかず。兄弟の顔にも泥を塗ることになる。そんなことはお前さんの本意じゃあないはずだ。

聞かせる相手が俺だという点については、大人になって目を瞑れ」

逃げ道を塞がれた。ラーナルクはそう思った。

自分が作戦遂行にあたり、問題になりそうな精神状態である自覚は持っている。解決方法として、先達に相談することが有効だとも。そして、ここで口を開かなければ意地を張る子供だ、と自ら白状するようなものであることも。

ブリニョルフは単に親切心と多少の意地の悪さで論じたに過ぎないのだが、ラーナルクには卑劣な誘導尋問に思えて仕方なかった。何でこんなヤツがお父さんの友達なんだ、とも。

甚だ不本意ではあるが、ラーナルクはブリニョルフに話を切り出した。

「……今回の作戦、お父さんはどうして僕を指名したのでしょうか」

「彼が言っていたじゃないか。盗賊の業が使える面子の中で、一番の腕つきがお前さんだったからだ、と。まさか忘れたのか？」

忘れるものか。ラーナルクにとつて「お父さん」の一言一句が絶対だ。例え現実と多少の齟齬があろうともそれは世界が「お父さん」の常識と食い違っているだけのことだ。「お父さん」に間違いはない。ラーナルクは、客観的に世情と養父を観察し理解したうえで養父を絶対視する、という極めて器用な思考を身に着けていた。

そんなラーナルクが「お父さん」の言葉を失念するなどということは有り得ない。

そして、ブリニョルフがわざと直接的な回答を避けたことにも気が付き、腹立たしく思った。たしかに自分の戦闘の腕は、「お父さん」にも認めてもらえるほどではある。しかし、今回の作戦で重要なのは戦闘力ではない。そこはいくらでも代用が利く。自分である必要はない。

ラーナルクは更に、「ブレックス達なら、メルセルに近い人物を寝返らせて駒とする」くらいはやってのけるのではないかと、とすら考えた。自分というギルドの面々からどういった反応を受けるか未知の駒を使うよりは、余程確実ではないかと。そしてそれは、このいけ好かない男もわかっているはずだと。

だからはぐらかされたような気がして、腹が立つ。

「お父さんは、僕に独り立ちする必要が、親離れの必要があると判断したのでしょっか？」

自分の発言とは直接結びつかない質問を聞き、ブリニョルフもラーナルクが腹を割って話すつもりなのだと察した。

だからこそ、最も触れられたくないであろう胸中の脆く、古傷にも関わる場所を触るような真似をする。

「お前さん、兄弟が自分を疎んでいるとか、『要らなくなった』んじゃないかなんて考えて……」

「そんなわけがないでしょう！」

ラーナルクはブリニヨルフの言を遮るような大声を出した自分に驚き、付き人は一応周囲を警戒し、ブリニヨルフは元孤児の古傷が歪に塞がっていることを悟った。

「お父さんが僕を捨てるはずがない。お父さんは僕を愛してくれている。それは絶対です。絶対なのだから、誰だろうと否定は許しません。」

……けれど、どうしても、埋めたはずの記憶が過るよぎんです。あんな男が相手でも、自分が捨てられたんだと理解したときに覚えた絶望感と虚無感。それに達観。……もしくは諦観？　かもしれません。それをまた味わうんじゃないかって、心の何処かで怯えている。

絶対なはずのお父さんの愛を、僕自身が信じきれずにいる。疑ってはいけないのに。それは、今まで貰った、日溜りみたいな、篝火みたいな温かさを否定することなのに。許されないことなのに」

外套の上からでも衣服を突き破りそうなほど、ラーナルクは自分の腕に爪を立て、握りしめている。

ブリニヨルフは軽口を挟むこともできずに、黙ってその様子を見ている。

「裏切りだ。僕はなんて愚かで、恩知らずで、恥知らずなのか。こんな僕が存在する価値なんて。」

いやでも、それじゃあきつとお父さんが悲しむ。それに僕が思い悩んでいると知れば、それもきつとお父さんの悲しみにつながる。

これほどの親不孝者もないでしょう。そして僕は傲慢にも、お父さんが悲しむとわかつていながら、自分の葛藤を優先させてしまふ。お父さんの愛を僅かでも疑つてしまった自分がどうしても許せないのに、そうすることが止められない」

これは随分と拗らせたものだ、ブリニョルフは軽く天を仰ぐ。そしてウインタールドに残つた友へ少々の恨み言を吐く。「面倒な息子を押し付けてくれたな、兄弟と。」

放つておけばいつまでも自罰的思考の螺旋から抜け出せそうにない若者に対して、ブリニョルフは最後に二つ、伝えておくことにした。

「お前さんの悩みはお前さんのものだ。兄弟が何を言つたところで解決するもんでもないだろうし、ましてや俺ではな。だからまあ、『一応、伝えておこう』程度の話を書いておけ。」

兄弟は、ほら、知つてのとおり寿命が無いだろう？ だからかな。前に聞いたんだが。

兄弟はお前さんが何者であろうとも構わないのだと。英雄と歌われる戦士になつて私兵の後を継ごうが、超一流の盗賊として希代の大悪党になろうが。反対にお前さんが穏やかな暮らしを望むのなら、死ぬまで自分が面倒を見てやつてもいいと本気で思つて

いる。

期待しているとかしてないとかの話ですら無い。一人の男として立派に立とうが、穀潰しの腰抜けとして館に籠もつていようが、兄弟としてはそう大きな問題じゃないんだ。どっちだって、彼にとつてお前さんが愛しい息子であることに変わりはないんだとさ。

今回みたいに自分の息子にも広い世界を味わつてほしいつて思うのは、単純にそのほうが人生に張りが出て楽しかろう、つて親心だよ。それ以上でもそれ以下でもない。兄弟はそう考えているつてだけの話だ。それだけ、覚えておきな。

あとはお前さんの問題だ、小僧。せいぜい自分で考えることだな。一応、ウインドヘルムまでに外面そとづらを取り繕えるようになってりや、目を瞑つてやるよ」

ブリニヨルフから齎された「お父さん」の思いによつて、ラーナルクの脳内は更に荒れ狂つた。混沌とした複数の渦が干渉しあつていたところに、大嵐が巻き起こした竜巻がやつてきた。最早收拾が付かない。

そこへ更にブリニヨルフからの二つ目の訓示を口にする。

「もう一つはあれだ。お前さんと兄弟がしているつていう鍛錬。聞くところによるとかなり厳しいものらしいじゃないか。しかし不思議なことに、双方どちらもそれを全く気にしていない。

兄弟はお前さんのことを特に気にかけているからな。全く考慮していないってことはないだろうが。ただまあ俺としては今回の件も、似たような心持ちでいるんじゃないかと思うぜ。

彼からすれば『息子が強くなるのであれば必要な過程である』とかそんな理屈で、お前さんが色々と悩み苦しみ、自分の愛を疑われることだって、多分納得しているんじゃないかな。彼の無二の友たる俺様はそう考えるのだよ、小僧。

そこに、以前話したろう？ もう何年も昔のことと忘れたかもしれないが……。これから行くリフトの砦を出るときのことだ。たしか『彼に庇護され、愛される幸福を自覚しろ』だったか言ったはずだ。そのあたりのことも合わせて考えてみれば、そのうち自分の答えも出るだろうさ。……いけない、二つが三つになっちゃった」

ラーナルクは歩き続けながら、ブリニョルフの言葉の意味を考えに考えた。しかし、その程度で答えが出るならラーナルク本人も周囲だって苦労はしないだろう。結局、あまりに乱れる胸中への当座の対処法として、全てを穏和な作り笑いの下へ隠すことにした。

身を引き裂く嵐を宿したまま、ブリニョルフの言う外面だけはどうか整えてみせた。折しもそれは、ウインドヘルムの厩が見えてきた頃であった。

若者の様子は危うくあるが、目を瞑るとは自分の吐いた言である。どう考えても立ち

直ったとは思えないラーナルクを横目に見やりつつ、ブリニョルフは再度兄弟分へ恨み言を投げながら、この手のかかる弟分を見守ることにした。

「……見送りまで済ませてから言うのもなんだけどよ。本当に坊主を行かせてちまつて良かったのか？」

「これは異なことを。お前とてあれの巢立ちには最適な時期だ、と賛同してくれたではないか」

「そういうこつちやねえよ。俺が心配してんのは手前だトンマ。

これから爺様にや上級王や各地の首長達と折衝を重ねてもらう。勿論、事前交渉は全部こつちで済ませておくが、土壇場で相手が話をひっくり返さんとも限らねえ。

ただでさえ不安要素のあるデカイ話だ。失敗は許されねえ。だから手前の担当が『間に合いませんでした』じゃ話にならねえ。……大丈夫なんだろうな。しつこく確認して悪いが、いつもどおり動ける、とあてにしていんだよな？」

ラーナルクがウインターホールドを出立した後、首長邸へ並んで歩を進めながら、二人の男が話している。

一人はこの町の首長付相談役、ブレックス。もう一人は旅立った青年の養父である首長付私兵の男だ。

男は相談役の問に、何でもないふうな態度で答える。

「勿論だとも。期待していきなれ。まあ、あれが居なくなつて寂しさを感じないと言えど嘘になるが。私も子離れを覚えねばならん時期なのだろうよ。それに、どうしても会いたくなれば会いに行けないこともない。折角新たに生み出した『旅路』だ。使わなければ損と言うもの」

それは子離れできていると言うのだろうか。ブレックスは隣を歩く友人が堪え性のない性格をしていることを思い出し、十中八九こつそりと無事な姿を確認しに行くだろう、と当たりをつけた。

呆れるブレックスを余所に、男は続ける。

「それに、あれに父親らしいところを見せようと努力した結果かな。ここ数年で、以前より思慮深くなった気がする私だ。お前とて多少なりともそのように感じたからこそ、私一人に任せようと考えたのだろうか？」

言ってみればそうだ。初めて会ったときには腕力と恐怖で自分たち一党を従えようとしていた非常識人だったのだ。それが計画のために行動し、大学の書物を読み漁り、町の運営について頭を悩ませるうちに、多少の協調性が芽生えたように思う。

だからこそ男の言うとおり、計画の要とも言える案件を男に一任しようと考えた。……尤も、一党の者を総動員しても手が足りないため、「それならいつそ男に任せてしまつたほうが面倒が少ない」という事情が半分以上だという側面もあるのだが。

それはそうと、どうにも男から凶星を指されるのは癪に障る。今まで散々尻拭いをさせられているだけに、得意気な顔をされれば尻の一つも蹴り飛ばしてやりたくなる。

「まあ見ておいてくれ。カルセルモ師や件の女店主を懐柔する腹案はある。どうにもならんと思えば、破綻する前にすぐ報告も上げる。安心してくれ」

ブレックスは「だといいいんだがな」と軽口を叩きつつも、溜息を吐く。

男に対してラーナルクの不在による精神の安否を尋ねたわけだが、彼自身も似たり寄つたりであることには無自覚であつた。そこを男から逆に指摘され、最終的には尻を蹴り上げることになった。いつもどおりの光景である。

ラーナルクがウインターホールドを旅立ってしばらくの後。ウインドヘルム、王の宮殿においてウルフリックは、会議に臨んでいた。

報告書に目を通す眉間には、時折、皺が寄り、『全て順調』とはいっていないことがわ

かる。

「ウィンターホールドの翁は随分と手広くやっているようだな。もう数年も経てば一都市として見劣りしなくなり、更にときが経てば、『スカイリム六大都市』と称される日も夢ではないやもしれん」

側に仕える者がその眩きを何かの冗談かと思ひ「流石にそれは……」と口を挟むが、ウルフリックは自説を曲げなかつた。それどころか表情にいくらか深刻さが増す。

「私が知る限り、ウィンターホールドはたしかに寂れた村でしかなかつたのだ。

どれだけ強大な城壁がそびえようと、陸地と共に千切れた様子がかえつて大災害の悲惨さを物語る。そうして多くの者が気味の悪い思いをし、長くはいつかない。大学と反目しながらも大学に寄生しなければ死にゆくだけの惨めな村。それがウィンターホールドだつたはずなのだ。

であるのに、一人の男が足を踏み入れてから全てが変わつた。衛兵隊は害獣や賊を狩り周辺の安全を確保した。不定期ながらも乗合馬車も寄るようになった。職能を持つた者が居着き、行商人も絶えず訪れる。特にカジート行商帯キャラバンなどは顕著だな。あそこは猫共にもノルドと同様の商いを許している。更には現在、港を整備しているそうだ。海運により復興が加速するのも遠くない将来だろうな。厄介なことだ」

付き人や居合わせた重臣達は、ウルフリックがウィンターホールドの様子を正確に把

握していることに驚いた。

と同時に、何故、我等が首長がここまで警戒しているのかがわからない。

「お言葉ではありませんが閣下。彼の町は比較的、『親ストームクローク』の色を顕わにしております。ソリチュードとのあいだに位置し、良い緩衝地帯となる町が力を取り戻しつつある現状は、我等にとっても喜ばしいことではありませんか？ 歓迎こそすれ、厄介とは如何なることでしょう？」

「貴様等の言う『親ストームクローク』も全くの間違いではない。しかし正解でもない。ウインターホール드가明確に掲げているのは『反サルモール』。表立つては『反帝国』も『親ストームクローク』も明言してはおらんのだ。その違いに気付いている者はまだ少ないが、あれは潜在的に、敵より厄介な競合相手になり得る。

しかし我等が緩衝地帯を欲するのも事実。ブルーパレスやドール城の恥知らず共に味方されないためには、こちらから友好的な態度を取り続け、それを崩すことは許されん。

一方で、我等とソリチュードが相容れず、その中間地点に存在するというだけで、あの町は東と南の防衛を一切考えずにすむ。そして『反サルモール』を掲げてはいても、基本的に全ての種族に対し融和的な態度をとっている。そこにインペリアルやハイエルフも含まれる以上、帝国側としても強くは出づらい。しかも現在のアークメイジはたし

かインペリアルだったはずだ。町と大学が距離を縮めた今、折衝役などに出張つてこられては、それこそ帝国は何も言えまいよ。忌々しいことだ」

ウルフリックは重臣の一人の質問に答え、最後には吐き捨てるような口調を抑えようともしなかった。

しかしそれでも重臣達の顔には疑問符が浮かんでいる。それも特に年嵩の者にその傾向がある。逆に、年若い貴族や側仕えには、何か感じ取った様子も見られる。

このあたりの世代間の意識格差を埋めることも必要かと思ひ、面倒ながらも口を開いた。

「私も、せいぜいここ七、八年の動きしか知らん。件の錬金術師がガルマルと派手にやり合つたからな。嫌でも記憶に残る。

だがな、十年もせずに町がここまで復興するか？ どれほどの財を注げばいい？ どれだけの武人を衛兵隊に組み込めばいい？ どれだけの特産物を生み出せばいい？ 私には想像もつかん。はつきり言つて異常なのだ。復興の速度が。本来、それに必要なあらゆるものが不足しているあの町では特に。

貴様等がいまいち得心のいかない様子なのも無理は無い。私とて、首長という立場になければ気付けたか微妙なところだ。平たく言えば、我等にはウィンターホールドが衰退していく様を見て、聞いて、感じる時を過ぎたからこそその先入観があるのだ。大災

害の直接的な記憶こそ無くともその衰退の印象が強く残る限り、奴等が何をしてどう変わろうとも、侮蔑の感情は残る。

しかし、それらの前情報を全て無かったものとしてみればどうだ？ 天変地異も、それによる衰退も無い、まっさらな状態からの始動だ。

例えばだが、開拓村を新たに興す計画を零から立案するとする。これに一、二年。実際に送り込む人員を集め、移動させる。これに一年。そこから四、五年で今のウインターホールドが成り立つのか、という話だ。少々毛色の違う例えだが、あの町の抱えていた諸問題を鑑みれば、あながち的外れとも大袈裟とも言えない

そこまで言われてやつと、全員が危機感を抱いた。中には未だ理解の及ばない者も居たが、周囲の様子を見て神妙な顔を作っている。……そのような一部は置いておくとして。

ウルフリックは言外に「若い世代は気付いているぞ」と重臣達に告げた。それは対立を煽りかねないやり口ではあったが、現状を正しく把握させるためには、必要な手順だと判断した。実際、首長自らが「自分も根の考えはお前達と同じだ」と漏らしたため、これが非難ではなく共有すべき意識の問題なのだと思うされた。

しかし、そうは言っても、実際に何か打てる手があるわけでもない。それは、ウルフリックが口にする「厄介」だの「忌々しい」だのという言にも現れている。明確かつ有

効な対処法があるのなら、愚痴を零す前に行動するのがウインドヘルム首長、ウルフリック・ストームクロックという男だからだ。

やや重くなつた空気を払拭しようと、重臣の一人が「思い出した」とでも言うように話題を提供する。

「手広く、と言えば上級王への嘆願書には驚かされましたな。しかし実際には丁重ながらも素気無く断られ、使者も書面も送り返されたとか。

彼の翁は古い先短い身の上ですから、焦つたのかもしれないな」

「いやいや、町の復興に気を良くして、増長したのやもしれませんか?」

話題の転換と共に、場の空気が明るくなった。

上級王へ向けて『昨今のタロス崇拜禁止に揺れるスカイリムの行く末について』などという漠然とした議題で首長会議開催を提言したのだ。馬鹿らしいとしか言えない。

そして相手にされないかわかれれば、今度は各地の首長へ向けて、全く同じ名目での首長会議を呼びかけた。こちらはあくまで私的なものとして扱われるため、ムートとは呼べない。上級王への提言のみであれば、異常な復興を邁進する彼の町のこと。何か裏があるかとも思ったが……。まあまず無いだろう。

送られた書状はソリチュードとウインターホールド自身を除いた計七つ。そこから出席する気の無い自分を除けば六つ。中道を表明するバルグルーフとて、そんなものに

参加するほど暇ではないだろう。五つ。マルカルスも豪族である『シルバー・ブラッド』家と誼よしみを通じてある故、同様。四つ。五大都市以外の都市は近隣の大都市に倣う傾向がある。であればホワイトランに近いファルクリースも無い。三つ。モーサルやドーンスターは立地的にもソリチュードの意向を気にするだろう。乗るわけがない。一つ。残りのリフテンは一部貴族がウインターホールド復興に助力していると聞かすが、首長はまた別だ。五大都市ですらない復興途上の町が音頭を取るような会議に出席するとは思えん。零。

一度上級王によって退けられた案件。何を以て各首長達が賛同し、集うと思ったのか。やはり年齢故の焦りか増長か。ウルフリックも同じように考えた。

その後も諸事について話し合いが持たれ、特に荒れることもなく定例会議は終了、解散となった。

その直後である。謁見の間の扉が先触れも無く開かれ、扉が開ききるのを待たず隙間に身体を振じ込みつつ官吏が駆け付けて来る。明らかに慌てており、出来得る限り早く報告を行いたいと全身で表していた。現に跪いた官吏の開口一番は「報告申し上げます！」だった。

ウルフリックが抱いた油断に、罰が下されたのだろうか。神々や古き英雄達は常にソブンガルデから下界を見ており、ウルフリック・ストームクロークという男の気の緩み

を叱責しに來たのだろうか。

報告の内容は、彼のウインドヘルム首長が思ってもみないものだった。

「ウインターホールド首長主催による首長会議へ、リフテン、ドーンスター、ファルクリース。そしてマルカルス！ 各地の首長が参加を表明いたしました！ その書状もここに！」

ウルフリックの脳内に浮かんだのは、驚きだ。

そして口からは「やられた！」という怒りの叫びが放たれた。

ソリチュードとウインドヘルムを除けば、五大都市は三つ。内ホワイトランは先述のとおり中道。ならばリフテンとマルカルスに焦点が置かれるが、この兩名ともが参加すると表明している。

そしてこれも先述のとおり、ウインターホールドはソリチュードとウインドヘルムの中間地点にある（厳密にはイーストマーチ寄りの位置にあるが、街道や標高差を鑑みれば、大体そのような立地と言える）。そしてわざわざ全ての首長の意見が出揃う前に情報を寄越した。わざとだろう。

つまりこれは踏み絵なのだ。お前は敵か？ それとも味方か？ と。そのような恫喝してみた手法は、力の強い者が弱い者へ去就を迫る際に用いるものだ。まるで立場が逆な今回のやり口に、ウルフリックは頭へ血が上るのを自覚しながらも、抑えることがで

きなかった。

しかしこれを突き放し無視することもできない。ウインターホール드가敵に回れば、対帝国戦線がずつと東に動く。それはウインドヘルムへの攻撃が容易になるということ。そんなものは認められるわけがない。

更に言えば、どんな手品を使つてかマルカリスを味方に付け、これだけの危ない橋を渡るのだ。暗に「ウインドヘルムを敵にしても戦える」と主張している、ともとれる。その真偽は別としても、徒に敵対するのは愚の骨頂であろう。ウインドヘルム首長として、この会議への参加を表明せざるを得ない。

そしてソリチュードを除く三都市が参加するのなら、ホワイトランもそれに倣わざるを得ない。中道と言うからには、参加しなければ『親帝国派』、『親ソリチュード』と見なされかねない。そもそも、会議の命題は『スカイリムの行く末について』なのだ。『反』だの『親』だのといった派閥に拘らないというのなら、何故参加しないのか? という話になる。それを気にするバルグルーフではなからうが、都市の貴族達が黙つてはいないだろう。首長として身動きが取れなくなるし、自身の方針とも矛盾する。受けざるを得ない。

そうして九都市の内、ソリチュードを除く全ての都市の首長が参加するとなれば、残ったモーサルスの意向など関係無くなる。否が応でも参加せざるを得ない。

どうしてこうなったのか。怒りでまともならない頭でウルフリックが考えついたのは、そう、マルカルスだ。

あのスカイリム西端の都市とは、『マルカルスの半分を治める』との評判を持つシルバー・ブラッド家を通じて、いずれは『親ストームクローク』として大きな力になってもらうはずだった。それが何故、ウインターホールドなどという復興途上の町に味方したのか。

参加表明が遅れたため、会議の準備に当てられる時間があまり無い。これから忙しくなることを苦々しく思いながらも、マルカルスで何があつたのか可能な限り詳細に調べることがあると、ウルフリックは強く思った。

衝動 ムートもどき

三七、あるデイドラロードの手記

—— リーチ攻略一日目。

私は出来物と評判の先人に倣い、出来事や考えを手帳へ書き記すことにした。

とはいえ、毎日まめに書く保証も無い。先人の日記とは違い、手記、とでも表するのが相応しいように思う。

そも目的からして、『自分の考えを纏めるため』『見落としや計画への悪影響が無いかの確認のため』という趣きが強い。何なら、これをそのままブレックスへ見せながら中間報告を行つてもいいと考えている。

そういう意味でも、基本的には他人に見せることの無い日記とは違う気がする。

それに、日付に関してはかなりいい加減だ。『リーチ攻略一日目』としたが、実際のところ、私は未だリーチへ足を踏み入れていない。いい加減な物なのだ。覚え書き、程度の物だとするのが妥当であろう。

一応それらしく書くなら、まずは天候からだろうか。

スカイリム西北部から西部にかけて、つまりはハーフィンガルからリーチの空模様は

曇天。

まるで、起床時に欠かさずあつた愛息の挨拶が聞こえなかつたため何となしに落ち込んでいる私の胸中を映し出しているかのようだ。初日から気が重い。

—— 二日目。

天候は相変わらず曇天。鬱陶しいことだ。

前日に引き続き、ハーフィンガルを適当に散策してみた。

……初日から早速、自分の行動を書き損ねている。やはりこのような覚え書きを残すこと自体が性に合っていないのか。それとも、ラーナルクのこと行動に支障を来すほどにこたえているのか。

前者ではどうにもならんが、後者であれば気を引き締めなければならない。私が言い聞かせて見送つたのだ。その当人が弛んでいるようでは、今頃、使命に燃えているであろう愛息に申し訳が立たんというもの。やるぞ。やらねば。やるのだ。

して、肝心のハーフィンガル散策行である。

別に強行軍で最終目的地のマルカルスまで駆け抜けても良かったのだ。しかしハーフィンガル地方の空気と、遠巻きにでもソリチュードの様子を見ておきたかつた、という理由があつた。未だ、このスカイリムに知らない土地は多い。

実際ハーフィンガルは、なかなか面白そうなどころであつた。

それなりな規模の賊が砦を築いていたし、噂によれば海賊も現れるらしい。そしてそれらを衛兵隊が見つけ次第、潰して回つてゐる。そして潰されてはまたどこから湧いてくる。そんな土地だとか。

私自身の目でも見かけたし、山中で出会つた狩人に食事を振る舞いながら聞きもした。なんとも賑やかな場所である。

つまり、それだけの富がスカイリム全土からこの地に集まっている、ということなのだろう。そしてそれは首長の座すソリチュードへ、と。本丸を目にする前から、相手の大きさが感じ取れるというものだ。

また、地理的にはスカイリム西北部に位置するハーフィンガルではあるが、北側の山や崖が風を遮っているためか冷たい海風はあまり感じず、南部は比較的温暖でさえあつた。

植生も豊かで、とてもウィンターホールドやウインドヘルムと同じ北部地方とは思えない。スカイリム中央部のホワイトランに似ている。錬金術の素材収集には困らなそうだ。

—— 三日目。四日目。

一両日かけてソリチュードを偵察した。天候は曇天が悪化し、雨。しかし偵察するには動きやすく、願ったり叶ったりとも言える。

尤も、偵察自体は肝心の町の中までは入れていないため、ほとんど城壁と崖壁しか目にしてはいない。

元々そのつもりではいたのだが、情報は多いに越したことは無いので、少々悔しい気もある。

しかし……、何と記すべきか……。

話には聞いていたが、この町は、大変、独創的な立地だと思う。

普通、町というものは拡張性を考慮して平地に作ることが多い。山城やその城下町であつても、山肌へ沿うように。それがどういいうわけか、崖、というか巨大な岩のアーチの上に町が作られている。

天変地異とも言える自然災害に見舞われた町を復興しようと尽力しているこの身には、何を考えてこんな危機管理のなっていない場所に町を構えたのか、不思議で仕方がない。もつと直截に言えば「馬鹿ではなからうか」とも。

政争による一時的なものとはいえ、このソリチュードから帝国皇帝が誕生したなど、崖の上の危うげな町を見るだけでは俄にわかに信じ難い。

本当に、何を考えてこんな立地にしたのか。

……とはいえロードランやロスリックにこの手の『安全性をまるで考慮しない町』が無かったかと言われれば、正直返答に困る。

寧ろ私の古巣のほうが酷かったのでは？ とすら思える。どの世界でも、世は複雑怪奇である。

閑話休題。

ソリチュードの出入り口は、基本的に上り坂を突き当たりまで行つたところの正門一つのみ。

当然の如く衛兵の数も多いが、単純に人の出入りが激しい。忍び込むのは難しい。攻める際にも、急な斜面を駆け上がらなければならぬ都合上、正攻法で攻め落とすのは極めて困難であると思われる。

おそらく、私一人が突撃したとて、巨大な門を破壊する前に射殺されるだろう。軍勢を率いても、相当な犠牲を覚悟しなければならぬ。

上り坂を途中右に折れて降つた先には、港湾施設が整っている。

東帝都社の倉庫があることから、規模はかなり大きなものだ。色々と立派な様子を見せつけてくれるその景観を、いずれは我が町にも、と目に焼き付けた。

もしかすれば、この海側のどこかから町の内部へ侵入するルートがあるかもしれない。土中に階段でも拵えれば距離的には不可能ではない。

ただ、あれだけ立派な正門を擁しているのだ。後ろ暗い者は避けたがるはずで、なればこそ衛兵隊の裏口への警戒は無いはずがない。

よしんばその手の裏口が使えたとしても、賊を数人潜入させるのがやつとな小規模なものと思われるし、それ自体が極めて困難だろう。

一応ブレックスにも相談してみるが、おそらく友のこと。潜入が可能かどうか、既に調査くらいはしているのではなからうか。それで何も言つて来ないのだから、やはり望み薄だろう。

結局、多少被害が大きくなろうが大手門に攻撃を集中させるほか無いのでは、と思う。

一応、市井の民や町への被害、それに付随する悪評を気にしないのであれば、多分、おそらく、町を破壊することは可能だ。本当に、可能不可能のみに主眼をおけば、お

やることは単純。岩のアーチ上に町があるのなら、そのアーチを崩してしまえばいいのだ。

それだけでソリチュードは壊滅し、ウインタールールドと同じ道を辿るだろう。

……いや、『現上級王の座す地』という政治的価値を鑑みれば、その凋落ぶりは更に悪いかもしれん。

しかしそれを現実のものとする手段が極めて限られる。私の頭で思いつくのは、太陽の光の槍をひたすら岩のアーチの根本へ投げつける、というものだ。

石の鱗を持つ古龍を討ち取る奇跡であれば、岩石を砕くこと自体は可能なはず。

問題は、「二体何投すればアーチを崩すことができるのか」ということと、「轟音を撒き散らす奇跡を連発していれば確実に衛兵に見つかる」ということだ。

殺されても殺されても毎日毎日投げ続ける、のも手ではあるが、私の不死性の露見や労力、実現性を鑑みれば、工夫も何もなく正面から大手門を攻略すべきだと思われる。

岩石脆化魔術や火薬を使うことも考えたが、魔術は町側でも対応しているだろうし、それら工作は絶壁を登るなり町側から降りるなりしたうえ、作業地点にしばらく留まる必要がある。やはり衛兵に見つかるだろう。

一応、最終手段かつ九割冗談の策と前置いたうえで、ブレックスへ提案してみる。

—— 五日目。 六日目。

ソリチュードの馬屋にて丸一日暇を持て余した後、マルカルス行きに乗合馬車に乗った。

これは、予めブレックスからも通達されていたことだ。私がそれを、うっかり忘れてりはしなかった、という証をここに残しておく。

なんでも、マルカルスのあるリーチ地方では『フォースウオーン』と名乗る者達が隊商などを襲撃する事例が頻発しているため、余程自らを腕利きだと吹聴したい者以外は

こうして馬車を利用するらしい。

私としてはその手の賊は、個人であれば「容易い相手だ」と、馬車であれば「獲物が多し」と判断して、どの道襲いかかるように思えるのだが。

とはいえ今回はことを起こすまではできるだけ目立たない行動を、という話になっている。馬車が無難であろう。

上記理由から、現在マルカルス行き馬車は便数を減らしているらしい。私としては馬車を待つあいだソリチュード周辺を偵察できたので、別段不満は無い。

などと呑気に構えていたら、案の定襲われた。

突然矢が降って来たかと思えば、「リーチはフォースウォーンのものだ！」との主張と共に四方八方から攻め手が寄せてきた。

襲撃がそれだけを理由にしているのかは流石に不明だが、だとするならば「このリーチにフォースウォーン以外の人種（厳密には、フォースウォーンとはブレトンの中の一部族であるらしい）が存在していることそのものが気に食わない」という話になる。

身を守るために身を寄せ合うのは生物としての本能でもあるが、やはり連中相手では徒歩だろうが馬車だろうが襲われるものは襲われる、ということだ。

結論から言えば返り討ちにしたわけだが、連中、なかなか優れた戦士であった。装備は極めて軽装であり、武器として如何にも蛮族めいてはいたが、そうとは思えない戦闘力

を有していた。

そもそも、私を含めて馬車の乗客は襲撃の有無を念頭に置いていた。そのため、誰が言わずとも自然に全員がそれぞれの目線で警戒していたのだ。しかし私を含めて、襲撃が起こるまでその存在に感付いた者はいなかった。

優れた戦士であると同時に、優れた隠密術を身に着けている。厄介な連中だ。

相手取ると決めたのなら、先手先手を打っていかなければ、何度か死ぬ羽目になるかもしれない。要注意である。

余談ではあるが、乗客から数名の犠牲者が出た。

私は御者の安全以外に興味が無かったので、特に同乗者を護衛しようとは考えなかった。が、結果的に助かった面々からはそれなりに感謝された。

犠牲が出たこともあり素人目に見ても襲撃者が手練であると理解できたらしいので、私への不信感は起きなかつたようだ。

その点に関しては、連中の力量が役立った、とも言える。まあ、町での情報収集にでも利用させてもらおう。

—— 七日目。八日目。九日目。

その後は襲撃に合うこともなく、マルカルスまで辿り着いた。

馬車にはフォースウオーン御手製の矢が刺さり、犠牲者の血痕も付着したままだ。にも拘わらず馬車が町を目指して走っているということは、襲撃は失敗したということ。仲間を撃退した戦力を警戒したのだろう。やはり、蛮族めいた見た目に似合わない連中である。警戒度を更に上げる。

—— 十日目。

マルカルス到着。別地方を偵察し、リーチでも襲撃に遭った割には、中々順調な行程だと思われる。

—— 十一日目。

『マルカルス市警隊』と揉めた。

というか、一度目をつけられてからは延々と難癖をつけられ、あまり言いなりでも不自然だろうと軽く抵抗したら、問答無用で牢へ入れられた。

一晚経つて自由の身となる際には、「次は『シドナ鉞山』行きだからな」と脅された。おかしい。これでも私はリフテンからウインターホールドまで旅をした経験がある。

少々非常識な面を曝した自覚はあるが、少なくとも錬金術師として村々を回っていたときの様子に問題は無かったはず。

その私が『多少、腕に自信のある傭兵』を装い行動して、何故市警隊に目をつけられるのか。

断言できる。今回のこれは、私の世間知らずさからではなく、連中の異常さから起きた出来事だと。

—— 十二日目。

シルバー・ブラッド家雇われの傭兵達と揉めた。

前日の市警隊との一件で腹を立てつつも、これがマルカルの土地柄なのかと考え、警戒を更に強くしていた。

そのうえで町を見て回っていたら、件のシドナ鉱山の付近に来ていた。そこからの流れは昨日を繰り返すような不気味さすらあった。

傭兵達に怪しまれ、こちらが何を口にしても不審であるの一点張り。終いには私刑にかけられた。

前日と違ったのは、曲がりなりに公権力である市警隊に逆らうのは不味いと思い我慢したのだが、傭兵共に遠慮は無用だと考え、物陰で処理したことが。

武具の類は戦利品としていただき、死体は細切れにして町内部を流れる川に流した。権力者の子飼いである傭兵共のままの死体が複数見つければ大事件であろうが、

行方不明なら疑惑で済む。傭兵共がさほど時間をかけず私を物陰に押し込めたこともあり、目撃者は少ないはずだ。

とはいえ、二日連続で異なる権力者の下つ端連中と揉め事を起こしてしまった事實は、少々私の使命感を削いだ。目立たないためにも、数日は大人しい調査に従事しようと思う。

—— 十三日目。そこから二十二日目まで。

市警隊や傭兵との揉め事は、思ったより私のやる気に影響を与えていたらしい。手記を書くことすら怠ってしまった。これではいけない、と自分を奮い立たせた。

というか、報告に一度戻ったウインターホールドで、ブレックスに心配された。友に気を揉ませるようではいかん。ここからは気を引き締めていく。ちなみに、日付はブレックスに教えてもらった。

ブレックスへ話す際、その日その日に起きた出来事を時系列で一つ一つ話していったため、報告自体に不備は無い。無いが、それをまたこの手記に書き起こすのは面倒だ。だが、何か行動を起こすときに私が自身の行動を把握できていなければ不備があるやもしれん。略式ではあつても、記しておくべきだろう。

一つ。町内部で生計を立てている少数のフォースウォーンと協力関係を築くことが

できた。曰く、偏見なく接し、公平な取引ができる人間は少ない、のだとか。

一つ。宿屋で下働きをしている女を味方に付けた。情報も入ってくるし、身を隠す必要があれば便宜を図ってもらえる。潜入調査において安全地帯を敵地に構築できたことは成果と言つて良いだろう。

一つ。首長に謁見が叶った。が、その手腕に期待できるかは微妙なところだ。

一つ。ギルドの外部協力者でもあるカルセルモ師に更なる協力を取り付けるため、ドゥーマー遺跡への護衛を引き受けることとなった。面倒といえば面倒だが、私も鬱憤が溜まつて体を動かしたい気分なのだ。丁度いい。

—— 二十三日目から四十日目まで。

カルセルモ師とドゥーマー遺跡探索を行った。疲れた。その一言に尽きる。

往路も復路も、探索自体も問題は無かった。

遺跡に当然配備されているドゥーマーの衛兵達も、巢食っていたファルメルも、それに飼育されているシャウラスも、師に傷を付けることは私が許さなかった。

しかし、塵殺することは師が許さなかった。曰く、研究のため、だそうだ。

師は何にでも興味を示したし、私はそのあいだ師を護衛するため戦闘しどおしだった。師はすぐそばで剣戟の音が響いていても、全く気にしていない様子だった。ウイン

ターホールドの連中と、似た人種の臭いがした。

更に、「ドワーフ製の罾がどのように稼働するのか、それによりどのような結果が得られるのか見たい」と言われ、捕獲したファルメルやシャウラスを罾に投げ込むよう指示を受けた。同じ罾でも獲物の条件を変えたり、同種の罾でも試してみたり。場所を変え別種の罾で似たことを繰り返したり。

私はつくづく思い知った。私は、研究者には向かない。疲れた。

一応、師はギルドへの協力よりも強いそれを約束してくれた。私を友と呼び「多くのことで君の力になれるだろう」とまで言ってくれたのだ。多大な疲労感を味わった成果はあったはずだ。

—— 四十一日目。

フォースウォーンの王なる男と出会った。

カルセルモ師の口添えもあり、首長の態度が軟化した。元より敵愾心を抱かっていたわけではないが、何ぞ頼み事があれば聞くだけは聞いてやる、そうな。一步、前進である。

しかし余所者が大きな顔をしていると感じたのか、市警隊に再び難癖をつけられた。

どうせ逆らったところで牢に入れられるか、袖の下を要求されるか、宣言どおりシド

ナ鉦山とやらで労役刑に処されるのだろう。「ならばいつそ」と考え、散々逃げ回った挙げ句、日没を待って鉦山へ逃げ込んだ。犯罪者として閉じ込められる鉦山へ好き好んで入る人間がいる、とは考えづらからう。入り口の市警隊は指輪の力を使えば造作も無く突破できた。

そして、その最奥とでも言える小部屋でマダナツクという男に会ったのだ。人を呼ばれそうだったので、即、自害した。遺言のように「人に喋れば気を違えたかと思われろぞ」と言い残してやった。

—— 四十二日目。四十三日目。四十四日目。

連日マダナツクの元へ訪れ、話をしようと思ちかけた。

始めは魔術の類で惑わせようとしていたのだと疑われたので、その誤解を解くのが大変だった。やったことと言えば、回らない頭で言葉を尽くし、いよいよ形勢が悪くなれば自害、という流れを繰り返したただけだが。

初めて顔を合わせてから四日目。「いい加減、頭がおかしくなりそうだからやめてくれ」とマダナツクが降参した。

別に勝負をしていたわけではないが、建設的な話ができる状態に進展したことは喜ばしい。やればできるのではないか、私。

マダナツクによると、奴はシルバー・ブラッド家と取引をしているらしい。

しかしその現状に満足はしておらず、長い時をかけてでも脱獄し、フォースウォーン再興に尽力するのだとか。

正直、ノルド至上主義の気運が高まる現在のスカイリムで、やや辺境とはいえフォースウォーンが一地方を支配する、という変事を許容するノルドがいるとは思えない。計画以前に、主義主張の段階からほぼ不可能だと思える。

だが、何事もやってみなければわからないもの。奴がその大願成就に生涯をかけるというのなら、私があれば話でもなからう。

というか、手間暇かけてかなり込み入った話もできるようになった貴重な情報源なのだ。下手なことを言つて臍を曲げられても困る。ここは適当に相槌を打つておくが吉であろう。

—— 四十五日目。

マダナツクの勧めにより、シルバー・ブラッド家内部を探ることにした。その際、奴が家中に潜り込ませた女中が諸事の手引をしてくれた。マダナツクと会い、ある程度の協力関係を結べたことは、僥倖であつたのかもしれない。

そして調べれば調べるほど、黒いものが吹き出してくる。ブラック・ブライア家とい

勝負ではなからうか。前者は直接的な暴力を用い、後者は謀略を好む、程度の違いだ。尤も後者として、謀略の助勢としての暴力を用いることに抵抗を覚えはしないのだが。……やはりどちらもうくなものではない。

しかし市警隊から身を隠し続けるのも憤懣が溜まる。町に到着して早いうちに宿屋の女と良い仲になっておいて良かった。一線は越えていないが、こういうときに助けてくれるのは有難い。

—— 四十六日目。四十七日目。

シルバー・ブラッド家が市警隊の大部分を抑えていることは既に判明している。ならば、首長府のいくらかも懐柔されていたと驚かない。そのあたりを調べるためにアンダーストーン砦にも調査の手を広げる。

このとき、町内のフォースウオーンやカルセルモ師の協力が思いの外助かった。何事も、一人で為そうとするものではないな、と再確認した。

足りない私は、それを補う人員を確保すべきなのだ。このあたりの教訓は、これからも活かされることだろう。

反対に鬱陶しいのが、市警隊と傭兵共だ。

どちらに見つかっても面倒なことになるので、調査は専ら夜間に行うか、指輪の力を

最大限活用しつつ陰から陰へ動くようにしている。はつきり言つて鬱陶しいことこの上ない。しばらく、町の外の調査に重きを置いてみようか。

—— 四十八日目。四十九日目。

リーチ全体の調査は二日で終わった。というか、切り上げざるを得かなかつた。

色々と見て回れる箇所は多く、観光で訪れたいと思う場所もあつたのだが……。如何せんフォースウォーン共の襲撃が鬱陶しい。しかも、予想以上に幅を利かせている。

これは私なりの統計だが、リーチを歩いて砦を見つけたら、まず十割の確率で戦闘になる。

砦が見えた段階でフォースウォーンの戦士が付近に潜んでいるため戦闘になる。これが八割。残りの砦は漏れなく賊の罠になつてゐるのだが、フォースウォーンに比べて与し易い馬鹿共は鬱憤晴らしに丁度いい。私が嬉々として襲いかかるため、戦闘になる。これが二割。ろくな土地じゃないな。

ラーナルクがリーチでの任に就くときには注意するよう、ブレックスから話を回してもらおう。

—— 五十日目。

別に狙ったわけではない。本当にそういうわけではないのだが、区切りのいい日数の本日、あらゆる調査を打ち切り、力づくでの攻略に乗り出すことにする。

別に私とて確実性の低い強硬策を好んで取りたいわけではない。本当だ。嘘ではない。友に誓ってもいい。ただ、私の堪忍袋の尾が切れてしまったのだから仕方ない。

リーチ全体の調査から戻り町へ入ってすぐ、市警隊の愚図共と傭兵の馬鹿共、この両者と立て続けに揉めた。あの、性根の腐った、何の生産性も無い、害虫にも劣る、唾棄すべき、善性の欠片も見いだせない、塵芥の如き、醜悪で、矮小で、卑しく、下賤な……。ああ、書き連ねて少しは憤懣が抑えられるかと思つたが駄目だ。思い出して余計に腹が立つてきた。

幸い、私の報告を聞いたブレックスも私の意見に賛同してくれた。『快く』とはいかなかつたが、眉間に手を当て長く黙り、「それしかねえんだな?」と念を押すように言い、私がそれに是と答えたなら「わかつた」と。荒んだ今の我が胸中に、暖かな友情が染み入るようだ。

一つ、「やるなら徹底的にやれ。遺恨を残すな」との注文は受けたが、言われるまでもない。存分にやらせてもらおう。お誂え向きというか、ことが済んだあとを押し付けられる者もいるのだ。何の憂いがあるうか。

連中に、目にももの見せてくれる。私は、シルバー・ブラッド家と、その息のかかつた

存在を、
リーチから根絶する。

三八、行動開始

既に陽は上り、澄んだ空気の漂う早朝。見張り塔の上からマルカルの町を見下ろす。

この町に限った話ではないのだが、スカイリムの人間は動き出すのがやや遅いように思う。私がまだ只の人であった頃など、夜明けと同時に、夜明け前には起きて活動を始めていた。しかしここいらでは、夜が明けてから朝食を取り、日が地平線からそれなりに離れた時分に店を開け、町を出歩く者が多い。

郷に入つては、とも言うので否やはないのだが、こちらに来てすぐの頃は多少戸惑った。

とはいえ寒い地域の夜を越そうと思えば、そういつた生活習慣になるのかもしれない。いくらスカイリムの住民が寒さに強いとはいえ、限度はある。下手をすれば眠っている間に凍え死ぬような土地では、無理をせず、日の光が世を温めてから動き始めたとしてもおかしくはない。

「やつ、やべで……」

襟と腰のベルトをしつかり握って、投げる。

断崖に沿うよう作られたドワーフ達の町。馬車の御者は、マルカルスをそのように紹介しながらも、噂程度に考えていたようだった。だが、おそらくは真実であろう。他にもドワーフの遺跡をいくつか見て回ったが、同じ意匠のものばかりであったのだ。

それに、足を滑らせれば真つ逆さまに落ちていく町は、「住民を人に限らなければ、存外、機能的にも悪くはない」といった具合なのだ。

ドゥーマー達の遺跡をいくつか見て思うが、地中の居住空間がやたらと充実している。そもその話として、地表に出て活動すること自体、私達に比べればずっと少なかったのではないかと思われる。

「いやだ、だすけ……」

次も投げる。

ついでに言えば、彼等は自律機動の絡線兵を多数擁している。『足を滑らせる』などという間抜けをやらかささない優秀な衛兵が表を守っているのなら、高低差だの安全性だのといった話は、文字通り『問題にすらならない』ものであったはずだ。

寧ろ、攻め手は斜面を登りながら狭い通路へ集まらざるを得ない。そこに矢や魔術をあめあられ雨霰と降らせてやれば、撃退も容易というもの。狙ってこのように造った可能性は高い。

だとすれば、私達が現在『町』と認識している区域は、滅多に来ない外からの客をも

てなすための玄関口でしかないのではなからうか。そしてそうであれば、景観と攻めづらさを重視した造りであっても、得心のいく話である。

あとでカルセルモ師に話してみようと思うが、おそらく否定はされないのではないかという予想が浮かぶ。

麻痺毒が薄れてきたのか、若干程度には口の利ける者が出てきた。耳障りなだけなので、残り全員の喉を潰して黙らせる。

黙ったところで、その次も投げる。歩哨が騒ぎ立て、にわか俄に騒がしくなる。

マルカルの町は、正面の門を潜って比較的近い場所に宿屋がある。門のすぐ側には市警隊が歩哨に立っているため（落ち着き無く、随分と注意散漫だが）、篝火が焚かれている。

その、宿屋と門付近の明かりのおかげで、朝は城壁の陰になっている市のあたりでも、ある程度は明るく目立つ。おかげで作業が捗る。

別に私のために行っているわけではないのはわかっているが、有難いことだ。

喉は潰れても息はある。我ながら素晴らしい加減だ。まあここまで来れば、生きてようが死んでようが些事ではある。

投げる。

そういえば、今の私は投げられている連中と揃いの、市警隊の鎧を身に着けている。

隠密用の指輪を装備しているため、あくまでも万が一目撃されたときのための用心だ。

仮にそんなことが起きたとしても、市警隊の身形みなりをしたものが死体を運んでいけば、『市警隊が仲間の死体を騒ぎになる前に処理しようとしていた』とでも見えるはず。

尤も、これも既にマルカルス内では大きな問題として扱われているため、「今更、そのような隠蔽工作に意味があるのか？」という疑問を抱かれるかもしれない。

そのあたりは、非常時における非合理的な人の心理、とでも考えてくれることを願おう。繰り返すが、これは用心であり、まず必要のないものなのだ。

首飾りを見落としていたことに気付き、回収する。

全員、投げる前に懐は漁っているものの、こうした見えにくい装飾品は最後に確認しなければわからないものだ。折角の美術品、血で汚れ、衝撃で潰れては勿体ない。

無価値になったそれを投げる。

マルカルスの景観から、断崖繋がりですりちユードの町を思い出した。

「ソリチユード」には、『辺鄙へんびな場所』という意味があるらしい。遠巻きに偵察していたとき抱いた印象は、あながち間違いはなかったようだ。

離れた山から遠目に見た街並みは見事なものであったが、その立地はやはり最悪に近い。今にも崩れそうな崖の上に町が造られているのだから。あれが現地基準でも『辺鄙』扱いであることに、小さな満足感を抱く。

まあ、それを言えば繋がり元のマルカルスとて辺鄙ではあるのだが。

何せ位置がスカイリムの西端だ。ここへ来るまでに、山や谷をいくつも越えさせられた。そのうえ、着いてみれば町は山肌どころか崖に沿った造りをしている。趣深くはあるが、辺鄙なのは間違いないだろう。

最後の一人を投げて、ひとまず終了である。

いやあ、今日もよく飛び、よく落ちたものだ。

投げて手から離れた直後に何故か視線が合うことが多いのだが、皆、怯えや恨みを湛えた視線をくれる。無駄に悟った目をされてもつまらるので、寧ろ心地良い。私は自分の仕事に満足した。

ともあれ、あまり浸つてもいられない。市警隊の中でも多少は気骨のあるものが残っている。近頃は機能不全もいいところだとはいえ、甘く見て発見されても馬鹿らしい。隠密用の指輪が作動していることを確認しつつ、すっかり騒がしくなった町の入り口を避けて、銀山へと移動する。

私の大して丈夫でもない堪忍袋の緒が切れてからというもの、日に一度、市警隊か傭兵達を捕えて高所から投げ捨てる、という作業を繰り返している。数は、一日あたり市

警隊の小隊程度。

余計に捕まえられたときは、翌日以降に投げる分としてとつてある。こういうのは、一日でも途切れると格好が悪いのだ。

あまり貯蓄が増えても困るため、そのときは投げる数を増やすか、いつだったかの備兵達のように細切れにして川へ流している。全部そうしないのには、一応、きちんとした理由がある。

それから、連中は可能な限り生かしたまま高所へ連れ込むことにしている。

実利的な話をすれば、私が登る高所まで血痕が残つては面倒である。気分的な話をするのなら、落下地点が派手に血で汚れると胸がすく思いを味わえるからだ。落下後もまだ息があるようなら、踏まれた虫のようで面白いしな。

そのための麻痺毒も作成した。『持続性と毒性に優れていながら対象を死なせはしない』という、大変、調整の難しい物だ。売りに出せば高値がつくことは間違いない。

これがあれば、捕えてから投げるまで保管しておくのにも、高所へ運び込むのにも、投げる際にも暴れられないためにも、役立つ。頗る便利で、自身の錬金術の冴えを感じる。

それに、投げ方も少し工夫してみた。比較的近くに落とすときは、そのまま投げればいい。私の膂力はなかなかのものだ。しかし離れた場所へ投げ落とすときには、大きな布を用い、投石の要領で連中を投げる。このとき高く投げれば、落下地点へどちらの方

向から投げられたのかわかりづらくなる。

地面が水平である箇所など、マルカルスには稀有である。元より、真上から落下させたところで、傾斜や凹凸により、血も腑も一様な飛び散り方はしない。投げ方のひと工夫で誤魔化してしまうのだから、便利な町である。

投擲術や錬金術など技の使い所に物申されそうではあるが、良し悪しはこの際、二の次だ。私の気分が優れる。それだけで十分である。

ただなあ……。既に日課を続けて三十日近くは経過しているはずなのだが、今のところ途絶えた日はない。本当に、連中の練度はどうなっているのかと訪ねたい。

これが我がウインタールホールド衛兵隊であったのなら、殺してくれと嘆願が上がるまで扱いてやるくらいには酷い。

初日は流石に騒がしくなった。

三日続ければ、連中の自尊心が傷ついたのか、血眼になって下手人である私を探し始めた。尤も、私がそうであるとは見当もついていないしなかった。これはおそらく、今でもそうだ。

つい先日揉め事を起こした相手がいるのにそこへ思い至らないというのは、度し難い無能なのか、それとも心当たりが多すぎるのか。おそらくは後者寄りの両方だろう。救

い難い。

町に度々怒号が響いた。「マルカリスの平穩を脅かす不屈者へ鉄槌を！」「市警隊の威信にかけて！」「野郎、ぶつ殺してやる！」等々。

この頃は私も、見つかつては不味いと慎重に行動していた。日課を断念しようとは露ほども思わなかったが。

五日経つ頃が盛り上がり山の山であつたらうか。町を歩いて絡まれても面倒だと思ひ日中は宿屋で酒浸りになっていると、連中、宿屋まで押し入つて「怪しい者はいないか！」と喚き散らすではないか。

不味いと思つたものの、マルカリスの人間なら一度や二度は市警隊と揉めたことはあるようで、私だけが特別に怪しまれることもなかった。

この頃、体感的にはマルカリス全体が賑わつているようには思えたが、あとから思えば、市警隊達のものとは市民達のそれは全く別の色を帯びていた。

良くも悪くも『死』がそれなりに身近なスカイリムである。その中でもこのマルカリスはフォースウォーンのせいで襲撃事件が相次いでいる。

流石に、市内での連続殺人は未経験とはいへ、マルカリス事件も記憶に新しい。これが他の大都市であれば話は違ったかもしれないが。

要するにマルカリス市民が慣れるのに、然程、時間はかからなかったというわけだ。

少なくとも恐慌状態に陥った市民を、私は知らない。

それに、私は市警隊と傭兵達しか的にかけてはいない。「特定の間人だけを狙った事件だ」と見当がつけば、自分に関係の無い話であるとし、安心できる。

「物騒な事件が早く片付けば」くらいは思いはするかもしれない、横柄な連中へ溜まった鬱憤から、「いい気味だ」と考える者は少なくなかった。

気炎を上げて盛り上がるのは市警隊達だけで、市民の視線は冷ややかだったのだ。

そして十日経つ頃には、マルカルスから逃亡する市警隊員まで現れた。己の職責を放棄するとは、許し難い怠惰である。

勿論、きちんと捕まえて投げてやったし、極少数、私の手を逃れた者達は、城門付近に潜んでいたフォースウォーンに襲撃されて死んだ。

何故それがわかるかと言えば、逃亡の翌日には首の刺された木槍が城門前に立てられるからだ。

流石に城門付近とは言っても、衛兵隊の目が届くほど近くでの襲撃は難しい。そこで、町からやや離れた場所まで追跡してから襲うのだ。首については、戦果を誇る意味もあるのだろう。欠かさず報せてくれるとは、存外、律儀な畜族である。

市警隊の凡蔵共も、私に投げられればまだ町中での死亡な分、葬儀くらいは行われるというのに。連中がソブンガルデへ赴くのはまず無理だろうが、人らしいけじめはつけ

てもらえる。

しかしフオースウォーンの手にかかれれば、身包みを剥がれるどころか、心臓や肉を錬金術材料として持つていかれることもある。どちらが人道的かなど言うまでもない。

それを理解したのか、二十日経った頃からは自宅や知人の家に引き籠もる者が多くなつた。

連中に算盤を弾くだけの頭があつたことは僥倖であるが、情けないことには変わりない。連中は衛兵隊の中でも、首長府を擁する砦の守備兵なのだ。時と所が変われば近衛などと呼ばれることもある精鋭……のはずだ。

それが、自分達が弱い者いじめをするのは構わないのに、牙を剥かれた途端にこれとは。尚武の気風強いスカイリムであつて、よくもこれだけ腐ることができたものだ。

やや信じ難く、頭の隅では「畏なのでは？」という気もするが、有り得まい。

私は既に、市警隊の半数以上を手にかけている。いや、私が知らされた人員がたしかであるなら、残りは既に四半を切つているような……。

それだけの犠牲を出して私一人を畏にかけるというのは、あまりに非効率が過ぎる。であれば、信じ難くとも連中の無能は事実ということだ。

そんな無能は、衛兵を勤めているだけでも罪である。

私も市の財政に関わる立場になつてわかつたが、財源とは有限なのだ。能が無いのな

ら、せめて畑でも耕しているか、鉋山で銀でも掘っているほうが余程建設的というもの。本人として能力に見合わない危険に晒されることもないのだから、誰も損はしないはずだ。「危険な目には遭いたくないが高給取りなうえ役得も味わいたい」などといった都合のいい話は無いのである。

「……よく飽きもせず、何度もこんな陰気臭いところへ来る。無理はしなくてよいのだぞ、遠き王よ」

「約束したからな、檻ぼろを纏った王よ。約束は守らねばならん」

シドナ鉋山の最奥。粗末な机と椅子の置かれた小部屋に、その男は居た。

粗末といつても、他の者達は己の陣地など毛ほども持つてはいないのだ。十二分に、男が特別な扱いを受けていることが理解できる。

男、マダナツクは処置なし、とでも言いたげに首を振る。ついでに溜め息も。

マダナツクのするこの少し気取った態度は、あまり好きではない。どこかで、もう少し心を折っておく必要があるな。

「あんなものは約束とは言わんだろう。誓紙を交わしたわけでもなく、私に力を見せる、と言つてお前が勝手に始めたことだ」

「しかし、お前はこゝも言ったな？ 『できるものなら見せてくれ。そのときは言うことを聞いてやるぞ』とも。嘲笑しながらであつても口にしたのだ。そして私はそれを実行中だ。ならばこれは約束だ。違うか？」

今度は、ただ視線を逸らして黙つた。眉を潜めているあたり、迂闊な自分の口を苦々しく思っているのだろう。

まあ、あのときは此奴も半ば自棄になつていたからな。注意力が落ちていても仕方ないというもの。

その原因はと言えば私が何度も目の前で死んで見せたことなのだが、更にその原因はと言えば此奴が私の話を聞こうとしなかつたからだ。

私が不死人であるとう言つて聞かせても信じないのだ。ならば死んで見せるしかあるまい。つまりは作戦上の不可抗力であり、よつて私は悪くない。

私が此奴にした話は四つ。

- 一つ。私がシルバー・ブラッド家の勢力を一掃するので、その後釜に納まること。
- 二つ。一の前半条件の達成が十分見込めると判断した場合、それに協力すること。
- 三つ。町の実権を首長と二分する形で握つたあかつきには、我が町ウインターホールドへ懸命に助力すること。

四つ。配下の手綱をしかと握ること。それを違えた場合は、自らが責を負うこと。

五つ。先述の一の前半条件が達成されたなら、一から四までを必ず守り、履行すること。

五は別に無くとも良かったのだが、マダナックが私の力を信じなかったため、ならばお前に伝わる形でやってみせようじゃあないか、という話になった。

当初の予定では、ブレックス達と初めて出会ったときの如く隠密行動に徹し、シルバー・ブラッド家の勢力を素早く無力化しようと考えていた。

しかし、彼の家が損害を隠蔽することは十分考えられる。暴力で人を支配してきた人間は特にその傾向があるが、効果的な反撃ができない場合、影響力が陰るのを恐れて、『無かったこと』にしようとするのだ。

もしそれが現実には起きれば、私の戦果がこの男の耳にまで届くか甚だ疑問である。そこで、派手な演出を用いることにしたのだ。高所から連中を投げ落としているのは、これが理由だ。

やってみてわかったことだが、てきぱきと熟していくよりも、ずっと大きな充実感を覚えることができた。私は憂き晴らしを十分に果たせて、非常に有意義な作戦行動だと活力が湧いている。

そして更に重要なこととして、町全体に「今、現在は非常事態である」という空気が流れている。良い兆候だと感じる。

体制が変わるとき、一度に劇的な変化が起きると反発も大きくなる。しかし、受け入れる側に「もういい加減、誰かどうにか収めてくれ」と嫌気が差していれば、疲労感からある程度は障り無く意向できるものだ。

尤も、その程度は人によりけりなため、注意する必要があるが。

ちなみにこのあたりの話は、スカイリムへ来る以前に友等から聞いた。騎士であった者等は、人の上に立つうえでの苦勞を色々と聞かせてくれたのだ。

町の外へ逃げ出した市警隊云々は、この二の約のためだ。眼前の男は何のかんの言つて、マルカルス首長府や仇敵一族の力を削げるうちに削いでおく腹積もりなのだ。

「で？ 今日**の**報せはもう来たのか？」

私が問えば、マダナツクは是と答えた。囚人の身でありながらどうやって外部と連絡を取っているのか、全く見当がつかない。それをそのまま伝えると、「ここ数日は素通りも同然。毎日の定時連絡だって可能だ」だそうなの。

たしかに市警隊は身を隠す者が多い。多いが、それを補うようにシルバー・ブラッド家は傭兵達を数多く雇い入れている。

雇われれば殺される、との噂が広まっているため相場より高くなっているらしいが、この非常事態を收拾するためと考えているのか、金に糸目はない姿勢である。流石は富豪一族。

とはいえ、どうせ私が投げける前に懐を探るくらいはしているので、間接的に彼の一族から私へ支払われる迷惑料が増えているだけのような状態なのだが……。

それにしても、市警隊が減った分……には大分足りなくとも、傭兵が増えているのは事実だ。監視の目を掻い潜る苦勞は変わらないのではなからうか。

それをそのまま訪ねてみれば、腐りきつていようが市内の事情には精通している市警隊に比べ、余所者が大半を占める傭兵の目など、簡単に誤魔化せる程度でしかない、のだとか。流石というべきか。

噂をすれば、という話だろうか。入り口のあたりが騒がしい。今日は来る日のようなだ。

「おい、手前が囚人だつてことを理解できねえ野蛮人を出しな！ 誰か引き摺ってでも連れて来いってんだよ！」

二の約に従いフォースウオンを動かした場合、当然、マダナツクはシルバー・ブラッド家から報復を受ける。そのため、こういった襲撃は可能な限りは私が対応している。

といつても、そう頻繁に起こるわけではない。私が対処しているということは、彼の一族が命令を下した相手が近日中に落下死する、という帰結を既に何度も見ているわけだ。

頭の中身が糞団子でもない限り、いたずらに戦力を送つても無駄だ、と判断するはずである。現にしばらく、この手の訪問は途絶えていた。今日になって来たのは、こちらの油断を期待したのか、仲間が殺されて傭兵自身が動いたか。

それに、此奴が私に協力し始めたのは、市警隊の逃亡が始まる少し前からだ。曰く、そろそろ臆病風に吹かれる者達が出る頃だ。ただで逃してやる謂れもあるまい？ だそうな。

そのため、彼の一族からの報復行動も、実質的な私兵組織が半壊してから始まったことになる。散発的にならざるを得ないのも無理はない。

ついでに言えば、マダナツクの下へ連中が辿り着くまでに、可能であれば市中のフォースウォーンが始末してしまう。

折角の潜伏を棒に振る真似はマダナツクが控えさせたので、『確実に人知れず始末できる』という確信が有つて初めて為される話なので、そう起こるわけでもないのが。

それら諸々を含めれば、この檻樓を纏つた王は敵の手中にあるとは思えないほど、安全を確保されているのである。いいご身分である。

まあ何でもいい。私は連中の事情に興味が無い。さつさと処理してしまおう。

入り口へ向かい、敵の姿が見える物陰で止まる。距離はかなり近い。何せ狭い鉾山中なのだ。どう警戒しても接近せざるを得ない。

数は……七か。一小隊分。丁度いいな。明日投げる分がもう手に入った。楽ができて何より。

マダナツクと話すために外していた指輪を再度装着し、無強化のショートボウを構える。この場で射殺すのは不味いのだ。矢はスカイリムのどこでも手に入る『鉄の矢』。鏃やじりには麻痺毒だ。

最も手前には、如何にも破落戸ごろつきといった風体の男。これはどうでもいいな。見えづらいが、その後ろに直剣と盾を持った男がいる。奴は少し使いそうだ。というわけで初めに射る。……肩に命中。面白いように身体が硬直して倒れた。

すぐにざわめきが始まるが、それさえも耳障りである。大体、こちらの姿が見えないにせよ、敵襲があつたことは確かなのだ。防御姿勢を取るなり、物陰に隠れるなり、何かしらの反応があつて然るべきであろう。

なのに、ただ狼狽しているだけとは……。金に糸目をつけずに人を雇つても、その出来がこれでは、彼の富豪一族が少々気の毒であるな。まあ同情くらいはしてやっても、潰すものは潰すのだが。

余所事に思考をやりながらのいい加減な速射でも、残り全員を素早く黙らせることに成功した。何とも呆気ない。

呆れはしたが、楽ができたと思えば悪くもない。今日は早めに夕餉をとり、酒を飲む

う。

最近の私は、土地によって微妙な違いを見せる酒の味がわかるようになってきたのだ。ここいらは『ジュニパーベリー』が多く手に入るためか、酒の香り付けに使われることが多い。それがまた肉料理と合うのだ。

おっと。美食もよいが、今は人を訪ねていたのであった。別れの挨拶をしなくては。

「獲物も手に入った。私はこいつらを運ばねばならんなのでな。失礼する。また数日後には顔を出すから息災でな」

麻痺させた連中を布袋に詰めるのも慣れたものだ。

……が、この日課の何が一番面倒かと言えば、これからの作業、仕留めて袋詰めした市警隊達を運ぶのが面倒なのだ。

いや、市警隊はまだいい。町中まちなかで遭遇すればそのまま拉致できるし、隠れ潜んでいるのなら、その場に寝かせておけばいい。

だが最近は傭兵達を手にかけることが増えてきた。

市警隊と違い、此度のように妙なところでも出会でくわすものだから、見つからないように運ぶのが手間である。

「面倒ならやめてしまえ」と言われそうだが、一度始めたことを途中で投げ出すのは格好がつかないし、高いところから此奴等を投げるのは楽しいし……。仕方ないのだ。

それにこれも、市警隊がほとんど出歩いていない今となつては、そこまでの苦勞でもなくなつてゐる。気にすべき視線の数自体が減つてゐるのだから、楽になつたものだ。

今日は鉾山から運び出すのだから、銀鉾石の運搬用荷車に紛れさせれば良からう。

しかし……。多少は私情を盛り込んでゐるが、本命は市警隊ではなくシルバー・ブラッド家なのだ。一連の行動は、彼奴等の戦力を消し去り、丸裸にするためのもの。更には、「お前たちに逃げ場は無い」と知らしめて、逃亡を抑制するためのもの。

今少し日課を楽しんでいたいとも思うが、疾く本命に取りかかりたいとも思う。悩ましい我が胸中である。

三九、マルカルの協力者達（上）

騒乱を通り越して怪奇の町と化したマルカルの夜を、人目を避けつつ歩く男達がい
た。数は七。一人が先導する形を取り、残りの六人が後に続く。

「では、ここでもまた暫しお待ちを。次の合図は犬の鳴き声でございます」

「鹿だの鳥だの、よく考えつくものだ。……いや、私達はそのおかげで助かるのだから、
感謝こそすれ貶める意図はないぞ。本当だ」

連れられたうちの一人が呆れた様子を見せたが、仲間らしき者達が険のある視線で睨
んだため、慌てて言い繕った。

「承知しております。では、くどいとは思いますが今一度確認を。」

まず私が向こうの角の先まで行き、安全を確認します。そこで鳴き声の一つ。聞こえ
ましたら、三名だけ先においでください。……正門が近づいております故、発見される
危険性の高い場所は固まって動かないほうが良いでしょう。

そして三名も無事に辿りついたなら、鳴き声を三つ。あとは残りの皆様も合流し、更
に先を目指します」

「このやり取りも三度目になるわけだが。これだけの用心を重ねるからこそ、今のマル

カルスからの脱出が叶うのだろうか。イーザイル。この恩には必ず報いると、八大神に誓おう。この先も頼むぞ」

「いいえいいえ。手前こそ市警隊の皆様方に恩のある身。それをお返ししているだけで、何の徳になりましようや。お気になさいませぬよう。」

ですがあえて欲を口にするのなら、皆様方がご帰還し、在りし日のマルカルスが戻ったあかつきには、銀細工師イーザイルをより一掃のご鼻屑を以て取り立てていただければ幸いというもの」

商売人らしい注文をつける先導役に苦笑する面々であったが、命と引き換えなのだから安い話だ。

それに、この銀細工師は自分達のおかげで甘い汁を吸ってきた。その恩を忘れずこうして助力するといふのだから、『善きマルカルス市民』である、と市警隊達は思った。尤も、ここで言う善きマルカルス市民とは『市警隊にとつて従順で益をもたらす都合のいい人物』であることは言うまでもない。

更に言えば、男の作る銀細工は一級品である。今回の働きと合わせて、自分達、市警隊が地位と安全を取り戻した際には、雇い主のシルバー・ブラッド家へお抱えの職人兼商人として推挙してやってもいいだろう。

マルカルスにて大きな力を持つ彼の家に推挙するだけでも義理を果たしたことになる

り、市警隊の懐を痛めず借りを返せる。もし仮に銀細工師が彼の家で下手を打ったとしても、市警隊と直接関わりのある人物でもない。問題は無いはずだ。

銀細工師の冗談めかした話ぶりにやや柔らかなった空気を味わい、市警隊達は後の榮転を約束するのだった。

浮かれ話を切り上げて緊張感を取り戻し、銀細工師は先導を続ける。

角を曲がって少し待ったところで、犬の鳴き声の一つ。ここまで来れば町の正門まであと僅か。逸る気持ちを抑えつつ、まずは三人が行く。

先程より多少長めに待たされたところで、何やら話し声が聞こえる。一方の聲が妙に遠慮無く大きく、落ち着かないことから、顔見知りの酔っ払いにでも絡まれているのだろう、と見当が付いた。銀細工師が上手に追い払ったのか、それから今少し待つて鳴き声が三つ。多少肝を冷やしたが、計画どおりにことが進んでいると安心して、残りの三人も行く。

だが、あとから追いついた三人が最後に見たものは、先導役の銀細工師の姿でもなければ、自分達を待っているはずの仲間達でもない。そこには誰の姿も見えなかったのだ。

慌てて周囲を探るが、小さく抑えられた光源しか持たない身では、何も見つけられない。

そうこうしているうちに、顎や側頭部に衝撃を受け、一瞬のうちに意識が途絶えた。自分達が何に襲われ、何処へ連れて行かれるのか、知らないまま昏倒させられたのは幸運なのか不運なのか。

目にも止まらない速さで三人を昏倒させること二度。その度に市警隊を物音一つ立てないまま布袋に詰める男を見て、銀細工師は思う。理性を伴った暴力の、何と恐ろしいことか、と。狂戦士とは、ただの粗暴な者ではなく、このような人物を指すのではないか、とも。狂っているのにも拘わらず、戦士として成立している。それ自体が異常であるからだ。

気安く「今日もご苦労だった」と肩に手を置かれる瞬間、協力者である自分にその矛先が向くことはないと理解しながらも、背中に冷たい汗が流れる。

当たり障りの無い挨拶を交わして別れ、男が六つの布袋が引きずられていくのを皮肉げに見送り、銀細工師イーザイルも物陰から姿を現す。

「ええ、ええ。皆様方をご案内したのは、けて逃れ得ぬデイドラの腕の中。感謝をされる謂われなどございませんよ。今生の行いを振り返りながら、せいぜいお客様方をご満足させてくださいれば幸いというもの。

それにこのイーザイル、皆様方の性根はよつくご存知ですとも。この場での感謝に嘘

はないでしょう。しかし、喉元過ぎれば恩も忘れる畜生以下であるのも事実。この卑賤の身に栄転など有りえませんが。

ですから、恩など感じず、お気にもなさいませぬよう。成らぬ話ですから、私めは浮かれもしなければ落胆もしません。ただ、より強きお方につきますれば。

それでは今後とも、銀細工師イーザイルをご贔屓に。毎度ありがとう存じます。

………なーんてな。このぞくぞくする感じ、結構楽しくて癖になりそうだ。どうしてくれんだ、あの旦那」

数年前から羽振りの良くなった銀細工師は、意地悪く笑いながら、一人上機嫌で帰途に就く。

『銀細工師イーザイルに頼めば、この地獄から逃してもらえる』

そんな噂が、潜伏中のマルカルス市警隊達のあいだに流れて、もう幾日になるのか。

因みに、騒動の下手人に自ら協力を申し出たのもイーザイルであれば、噂を流したのもイーザイル本人である。

それは、多少の焦りを伴うものだった。自分と同じギルド協力者が何やら動いている

ようであるのに、その動き自体は訝しい、と感じたからだ。

そこで、密かに錬金術師ボテラへ接触し、一件がギルドとは無関係かつ内密に行われていることを知った。ボテラ自身が口を割ったわけではないが、察し切るだけの頭をイーザイルは持っていた。

この時点では、ギルドへ報告してギルド内での自らの価値を更に高めるか、黙するか、踏み込んで狂戦士に協力するか決めかねていた。

だが男が日課を始めた初日の手際を見て、巨大な組織であるギルドよりたった一人である男に協力するほうが上策だと判断した。町の情勢が変わるなら、変える側へ少しでも早く味方すべきだ、と。

イーザイルは、男へ市警隊の誘導を買って出た。

イーザイルは、銀細工師でありながら裏の顔を持つていることを、市警隊にもあえて知らせているのだ。市警隊とは持ちつつ持たれつ、それなりの信頼関係を構築していた。

盗品を扱ったり、押収された銀細工の横流しや加工を行い、別物として売りさばいたり。本人も、我ながら悪どいものだ、と自嘲する程度には励んでいた。

そこで、その関係を利用し、自分の伝手を以てすれば安全にマルカリスを脱出することができる、と隠れている市警隊員に甘言を吹き込んだ。日頃から後ろ暗いことをしてきた仲が言うなら、市警隊の警戒も緩む。

それでも、始めは眉唾な話だと思われた。自分達を恐怖の底へ叩き込んだ下手人の、その魔手を、銀細工師如きの手引で掻い潜れるとは思えなかったからだ。

しかし、実際にそれを敢行した者が空から降ってきて死体になることは無かった。また、門外に首を曝されることも無かった。潜伏しているとはいえ、勤務につく者達と完全に連絡を断つたわけではない。多少の情報は入ってくる。

確実に助かったという保証は無い。しかし、失敗したと決めつけるには、あまりに状況が生存説に傾いていた。

何より、いつ襲われるかもわからず震えて毎日を通ぐす市警隊員にとって「生きて逃げられるかもしれない」という銀細工師の手引は、あまりに甘美な誘惑であった。そして、それを跳ね除けられるだけの精神力も残ってはいなかった。

どの道、マルカルスに残っていれば、遅かれ早かれ見つかって死ぬのだ。なら、生き延びられる可能性が高い方へ賭けるしかない。掛け金が己の命であろうとも、だ。

結果として、潜伏中の市警隊の多くが、銀細工師へ依頼を出した。

しかし当の銀細工師は、すぐに事を起こすでもなく、誰をいつ逃亡させるのか、事細かに指示を出した。何日後、何処に、誰と誰が、いつ頃集まるのか、など。

一刻も早くマルカルスを離れたい市警隊は剣を喉元に突きつけて脅した者もいるが、どうやらイーザイルは下手人の近くに間者を置くことに成功しているらしい。その伝

手から、下手人が市警隊のうちの誰の潜伏先を暴き、いつ襲撃を企てているのか、見当をつけているのだという。順番を指定するのは、危険が迫っている者から順に、という話だ。

市警隊達はもどかしく思いつつも、銀細工師の姿勢を「本心から自分達のために働こうとしている」と捉えた。銀細工師への逃亡依頼は更に増えていった。

あとは、間抜けな獲物をおびき寄せて、人気の無い場所で男に引き渡して終わり。これを繰り返すだけでかなりの手間賃がその場で渡されるし、後日金銭以外にも顧客や流通経路を優遇してもらえるとのこと。至れり尽くせりであった。

イーザイルの知る限り、既に十を超えた引き渡しの中で男が手間取ったことは一度も無い。市警隊如きは相手にならない、ということなのだろう。恐ろしいと思うと同時に、頼もしいとも思う。

引き渡した市警隊の扱いについて、イーザイルは一つだけ注文をつけた。「自分が引き渡した市警隊は、市内に潜むデイドラ信者を紹介するので、その者達に身柄を預けてほしい」と。

そのとき初めて男から剣呑な視線を向けられたが、ここで引いてはかえって不興を買うと考え、下っ腹に力を入れた。

潜伏しているとはいえ、ある程度の情報交換はあるはず。その中で逃亡幫助を依頼し

たものが無惨に死亡することがあれば、二度とこの手口は使えなくなる。継続的に獲物を引き摺り出すためにも、呑んでほしい。そう訴えた。

男は返事をするまでに多少の時間を要したが、結果としては領いた。曰く、道理である、と。

間があつたのは自分で仕留められない状況への憤懣を抑えていたのだろう。イーザイルからみても、男はそこまで愚かではなかった。

「魔女様、いるかい?」

「私が魔女なら、あんたはデイドラの詐欺師だよ」

イーザイルが軽口を叩きながら訪れたのは、マルカルスで錬金術店を営むボテラの下であつた。

彼女は町に帰化したフォースウォーンでもある。

正確に言えば、『フォースウォーンを名乗る連中と同じ文化を持ちながら、その集団からは離反した存在』と評するのが適切なのだが、するとリーチ中で暴れまわっている連中を何と呼称すべきか考えるのが極めて面倒なので、イーザイルは連中を暫定的にフォー

スウォーンと一括りに据えた。

閑話休題。

ボテラは、裏稼業に精を出すイーザイルをして、胆の据わった女傑だと言わざるを得ない。

盗賊ギルドは、彼女の協力があつてスカイリム各地に散つていた離反派閥の一掃に成功したのだ。リーチ全土に及ぶ情報網と影響力は、並の人物ではないことがわかる。

これはイーザイル自身が経験していることだが、ある程度の腕を持った職人には、表だけでなく裏の人間からも依頼が来る。ギルドとの関係が正にその一つである。

長くマルカルスに根を下ろし、おそらくはフォースウォーンとも取引可能なボテラへ舞い込む依頼の広さは、想像することも難しい。その伝手を以て、影響力を強めているのだろう。

一時は、この錬金術店も単なる隠れ蓑なのではないかと疑つたこともあるものの、彼女にとっては表裏一体。一方の顔がもう一方の顔を助けているのだろう。実際、錬金術師としての腕前は、宮廷魔道士のカルセルモや執政から直接の依頼を受けるほどである。

彼女は、自分と同じくギルドの外部協力者ではあるが、マルカルスで暴れ回る狂戦士と取引をしたのだという。ギルドですら入手困難な錬金術材料の融通等で、というのが

理由だとはいうが、普通なら危ない橋どころの話ではない。

イーザイル自身はより利のあるほうへ付いたに過ぎない。しかしボテラの場合、『自分であれば簡単には切り捨てられない』という自負があった。

実際、余程のことがなければギルドは彼女を許すであろうし、今回の一件については「ギルドに秘密だなんて知らなかった」と白を切るつもりらしい。

たしかに、あの男もギルド外部協力者でもあるのだ。彼を通してのギルドからの依頼だという話は、十分にあり得る。嘘を嘘と証明できないのなら、ギルド側が言いがかりをつけることになり、協力関係に罅が入ってしまう。ギルドが折れる蓋然性は高い。

更には、ボテラ自身はギルドとのつながりが切れても、それほど困窮しない。しかし、ギルドはまともに機能する協力者の糸がイーザイル一本になる。それは避けたい事態だろう。ギルドの思惑を把握したうえで立ち回り。強かである。

「それで、今日もまた旦那への手引かい？　あまり趣味がいいとはいえないねえ。」

それもわざわざ『薬を買いに来たことの無い者を』だなんて。何処の誰に渡るのが、聞きたくもないのに嫌でもわかるあたりが本当に嫌だよ」

「仕方ないだろう？　連中だつて口にする物なのだから、『健康で鮮度の高い物のほうがいい』つて言い分は尤もだ。」

それに、結局は死ぬにしても連中が引き取つて死体が出ないおかげで、俺の逃亡ほうじょ幫助

は成功しているって話が広まるんだから。必要経費さ。

あんただって、旦那の力になるのは各かじやないんだろう？　なら、これくらいは呑んでくれないとな」

以前ボテラに、何故あの男に協力するのか、と訪ねたところ、隈取を見ても全く身構えなかったのは彼が初めてだったからだ、との回答があった。憎からず思っているのかもしれない。

「……私はそういう血生臭いのが嫌いで町に住んでるんだけどねえ」

どの口がほざくのか、とイーザイルは呆れる。血生臭いのが嫌いなら、盗賊ギルドの離反派閥殲滅作戦なんかに加担したりしないし、今も潜伏中の市警隊員の居場所を自分や男に伝えたりはしない。

「まあ、そう言いなさんなって。もう残っている市警隊も少ないんだ。旦那の目的はあくまでシルバー・ブラッド家。市警隊を片付けたあとは、傭兵を蹴散らしながら彼の名家に相応しい麗しき作法で殴り込みをかけるだろうさ」

ボテラは「だといいだけだね」と一つ溜息をつき、潜伏先が判明している市警隊のリストをイーザイルに渡した。

イーザイルの知る限り、男は自らこの店に足を運んでもいる。リストの名前が分けられたものなのか幾らかは重複しているのかはわからないが、きつと自分が知らされてい

ない市警隊が、明日も空から降ってくるのだろう、と思った。

好奇心が抑えられず見物に出たことがあるが、運良く、いや運悪く目撃してしまい、それきり現場を見ることは止めた。

後ろ暗い手引程度なら問題のない腹黒さを持つイーザイルではあるが、鎧兜がマンモスに踏まれてもしたかのようにべたんと潰れ、血や臓物が地面で弾ける様子を楽しんで作り出している異常者がすぐ側に存在するという事実は、あまり正面から見つめたいものではないのだ。

順調にことが運んだせいで気が緩んだのか、イーザイルは必要以上の用心に頭を回すことになる。

男は優れた、どころか異常極まりない戦士で、その精神性も異常だ。それでも、会話を重ねる分には、どこか抜けた印象を持つのも事実。

いざというときは彼の上役を頼り、男を切り捨てられるよう、ウインターホールドにいるという盗賊ブレックスへ手紙を出した。ブレックスのことは、イーザイル独自の伝手で仕入れた情報だ。

男の頭越しにやり取りすることでも不安を覚えないでもなかったが、身の安全を守るために、破壊につながる可能性は一つでも潰しておくべきだと考えたからだ。

そして返信にはこう記されていた。

『ギルド外部協力者、銀細工師イーザイル殿へ

表には出ていない私の下へ手紙を寄越せたことを、素直に評価しよう。君は優秀な人材のようだ。これからも頼りにしている。

ただ、一つだけ重大な思い違いをしているようなので、それを指摘しておこう。

たしかに私は一党を率いてはいるが、マルカルスではしゃいでいるその男は私の部下ではない。

友人であり、私の稼業に関わらない件であれば、彼が主で私が従なのだ。それを履き違えてはいけない。

もし、万が一、有り得ないことだが、聡明な君がこの忠告を軽んじた場合、我々はきつと、君と君の大切なものを地の果てまで追い詰めるだろう。

要するに手前はそこのトンマにひたすら尽くせや。手前から関わったんだから足抜けは許さねえ。そこのトンマを陥れる真似も許さねえ。分かったらこの手紙をトンマに見せろ』

最後の行は殴り書きのように筆跡が乱れていた。まるで、それまでこらえていた怒り

が吹き出したかのようだった。

イーザイルは致命的な失態を犯したことに気付いた。不安要素を潰そうと手を回し、かえって不安要素を作ってしまったのだ。それも特大の。

というか、自分がブレックスを頼ったことをあの狂戦士に見せろとはどういう見なのだろうか？ その場で殺されることは無いだろう。でなければ理屈に合わない。

だが相手は異常殺人者だぞ？ 気分次第で、ということも考えられる。

ギルドを頼るか？ 今更？ ギルドよりあの絶対的な力を見込んで頼ったのだ。信用もできず失態をおかした協力者など、切り捨てられるだけだろう。ボテラという協力が存在する以上、その可能性は高い。

逃げるか？ 何処へ？ イーザイルの掴んだ情報によれば、ブレックスなる盗賊は極めて切れる男だとか。おめおめと逃げ遂せるとは思えない。

どうする、どうする……。

と、考え込んでいたところではあったり、件の狂戦士と出会ってしまった。

実際には全くの偶然であったのだが、イーザイルには自分の動きを何もかも把握されているように感じられた。

彼は溢れる涙を堪えきれず、謝罪の言葉を口にしながら手紙を男に渡した。

男は腑に落ちない顔で手紙を受け取り、読み終える頃にはカラカラと笑っている。

イーザイルにはこの反応が、快を表すのか不快を表すのかの判断もつかない。自分の命が、市警隊のように一瞬で刈り取られるのかもしれないのだ。気がつけば、多少、股が湿っぽい。

だが、男は銀細工師の予想を裏切り、「飯でも食わんか？」と誘う。様子から見ても、人生最後の食事、というわけでもなさそうだ。

宿屋に併設された酒場で飲み食いしながら、男はイーザイルの緊張を解いていった。

曰く、自分が抜けている自覚はあるため、お前がそう考えても仕方ない。

曰く、笑ったのは悪人面のくせに心配性な友がどんな顔でこの手紙を書いたのか想像したらおかしかったからだ。

曰く、手紙にもあるとおり、私もブレックスもお前を頼りにしている。これからもよろしく。

など。イーザイルは自分が失態を犯しながらも最悪の出目を引かなかったことに安堵した。そうして口で忠誠を誓いながら、首が繋がっている幸せを美味しい料理と共に噛み締めた。

だが一つ。世間話の一環として、男の愛息の話題が出た。

男曰く、ラーナルクという名で、現在はギルドに属している、とのこと。

男はなんでもないので話してはいた。愛息とやらを思い出す、遠くへやる眼差しも

温かいものだった。

しかしイーザイルにその視線を向けたとき、一瞬ではあるが眼力を強く見つめてくるではないか。

イーザイルは、男の言いたいことを正しく理解し、然しかと頷うなづいた。

仮に男を裏切つてギルドに助けを求めても、何か動きがあつた場合、ギルドが男を処断するのと己の首が跳ぶのとどちらが早いか。考えが及ばない愚図はいない。うまい話だと食いついておいてその実、触れてはならないものへ安易に手を出した自分を呪つた。

おそらく、権益としては今までどおりのものが確保されるだろう。しかし、ギルドは頼れないうえに、ブレックス派……いや、手紙が正しければ狂戦士一派からの信用は地に落ちた。自分自身が重用されることはないだろう。

イーザイルは、息子を鍛えることにした。代替わりを早めようと考えたのだ。彼は、自分の分を知り、信用の回復は次代に託すことにしたのだった。

四〇、マルカルの協力者達（下）

私の父は銀鉦山の経営をしていた。

今思えば、それなりに裕福で暮らしに余裕があつたおかげか、両親の喧嘩を見るのはあまり無いことだった。

父は、その恵まれた生活を鉦夫達にも分け与えたいと考え、給金や待遇の面で便宜を図っていた。

辛い肉体労働の現場であるはずなのに、どこか牧歌的な空気の流れる、優しい場所だった。

カン。カン。カン。鉦山から絶えず聞こえる鶴嘴が鉦脈を叩く音と、鉦夫達の歌声と、表で洗い物や煮炊きをしている女達。それが私の原風景。私は、あの故郷が大好きだった。

幼い私は、そんな暮らしがずっと続くと信じていた。

いつだったろうか。私が十になるかならないかの頃から、父が難しい顔をすることが増えた。

シルバー・ブラッド家による嫌がらせが続いていたのだ、とあとから知った。家族に心配をかけまいとする父のことだ。私が気付くより、もつと前から被害に遭つていてもおかしくはない。

母は首長様に頼つたほうがいいのではないかと父に提案したが、父はあまりよい顔をしなかった。フォースウォーンにアンダーストーン砦を奪われた若い首長がどの程度頼りになるのか、はかりかねていたらしい。

そのうえ、彼の家はマルカルスにて多大な影響力を保持しており、それは年々大きくなっていく。首長のお膝元で大きな顔をしている厚顔な者が相手なのだ。首長の手腕に期待するだけ無駄だと考える父の思いは、察するに余りある。

結局、父は有効な手段を打てないまま、経営権を奪われることになった。

いよいよ苦しくなった際には首長府を頼つたようだが、イグマンド首長が彼の家に対して有効な手段を取ることはできなかった。「何が首長か！」と父が初めて怒鳴り散らすところを見たが、母も私も同じ思いであった。

首長側としては「もつと早くに訴え出てくれれば」と言い訳するかもしれないが、おそらく結果は変わらなかつただろう。今の彼の家の権勢を見れば一目瞭然というやつだ。

父がなまじ抵抗したことが気に障つたのか、他の商敵に対しての見せしめの意味が

あつたのか。父は、というか我が家は、鉾山の権利の他にも、金目の物は一切合切奪われた。

シルバー・ブラッド家に雇われた人足や傭兵達が、家から家財道具や思い出の品を無造作に荷車へ積み込んでいく。父はシルバー・ブラッドの傭兵に縋り付き、私は母と抱き合いながら、その光景をただ見ていた。

父は改めて首長の下へ訴え、その足で彼の家へ直談判に赴いた。首長はやはりあてにならなかつたのだらう。だが、それは極めて愚かな選択だった。それきり、父は返つて来なかつた。

母が現実を受け止めるのは予想外に早く、新しい男を作つてリーチから出ようとした。その際、男は私の義父になることはなく、寧ろ私を邪魔者扱いしたために、母は私を捨てた。母も生きるのに必死だったのだらうが、母の事情と、当時の私が味わつた恨みと絶望とは関係無い話だった。

孤児となつた私は鉾夫の家族達に育てられたが、シルバー・ブラッド家の鉾山経営は父の時代より苛烈であつたようで、生活は苦しくなつた。

私はある程度働ける歳になつたあたりで鉾夫達に礼を告げ、自分の食い扶持を稼ぐためにマルカルの宿屋の女給に収まつた。こうして、私の家族は見事な一家離散を果したのである。

この件で私が思ったのは二つ。力の強い者には最初から逆らわれないことと、シルバー・ブラッド家への恨みを忘れないということ。矛盾するようだが、私の胸中でそれはいがみ合うことなく同居した。

少なくとも、家から何もかもが運び出されているあの光景を忘れられないうちは、この怨讐が薄れることもないだろう。

そうして数年が経ち、自分で宿屋『シルバーブラッド』の看板娘だと自負するようになった頃、マルカルスに嵐がやってきた。

嵐は人の形をしていて、始めはとても大人しかった。せいぜい酔客と殴り合いの決闘をするくらいのも、ごく普通の傭兵の男。

だから私も、いつもどおり世辞混じりに声をかけた。「マルカルスのハンサムさん」と。鼻根にしてくれれば、私の懐に入る金貨も増える。その程度の気持ちだった。

ところがその男は、まるで私の視線を遮っては悪いとでも考えたのか、身をかめたり「誰だ『ハンサムさん』は？」と呟いてきよるきよる見渡したりしていた。

軟派な男がおどけてする仕草とも違う。多分、これまで一度も容姿を褒められたことが無いせいで、本心から決めてかかっているような……。

今どきこんな純朴な男がいるのか、と気がつけば笑いのつぼにはまってしまい、大変だった。

私は積極的に男へ科しなをつくった。乞われれば誰にでも愛想良く酌をし金貨を受け取り、別料金を胸元に振じ込まればベッドを共にするのが商売女の常だ。とはいえ、どうせなら気に入った相手を迎えたいと思うのも人情であるし、女心というもの。

男の体はよく鍛え上げられているように見えたが、男女のあれこれには、存外、初心なのか。私は、半ば押しかける形で男の寝室まで付き添った。

だが、期待していた展開にはならなかった。

男は言い訳のように話した。愛した女性には先立たれた。つい最近、溺愛していた息子とも別れを経験した、と告げられた。

昔の女の話のときは遠い目をしていた。きつと、それなりに時間が癒やしてくれていくはずだ。だが息子のほうは違った。私の、様々な人間を見てきた目が節穴でなければ、愛息との別れはつい最近の話のはずだ。

元々私から粉をかけたところに、そんな弱った話を聞かされてはたまらない。自分の女を使つて慰めてやりたいと思つた。

それでも、私の望む展開にはならなかった。股座は反応していたようなので、私に魅力が無いというわけでもないのだろう。だが、今は駄目だ、という。

きつと、その愛息を通して先立たれた妻を思い出しているのだろう。そうして他の女を頭に浮かべながら私を抱くのは不誠実だとも考えたようだ。

不器用な男だと思った。だからこそ余計に、ここで引き下がってはいけなと思つた。けれど無理に押ししても、男は私を遠ざけるだけだろう。

そこで折衷案として、別料金は受け取らず、同衾だけすることに落ち着いた。手を出さないなら、それもよし。亡くなった奥さんに不義理を働いたことにはならない。手を出したくなつたら、それもよし。心と体が癒やしを求めているということだ。それを駄目だという女なら、私が奪い取ってやる。

男は終始、私を邪険にしてはいなかつたので、最終的には「女の恥になる」と言えば納得してくれた。女の押しに弱い男である。

私は、男の腕の中に収まり、体を預けた。乾いた薪を焚べた篝火のような、優しい匂いがした。

男は片腕で抱いた私に、寝物語の代わりだとマルカルスの話をせがんだ。町の成り立ちでも、どんな人間が住んでいるのかも、最近耳にした噂でも、何でもいいと。

そういうことなら、マルカルス中探したつて私以上の適任者はいないだろう。宿屋で酔客から話を聞き、首長府からの触れを目にする機会だつてあるのだ。

流石にアンダーストーン砦の奥深くにある首長府のことまではわからないけれど、シ

ルバー・ブラッド家所縁ゆかりの人間の話を盗み聞きしていれば、大体の推測は立つ。学は無くたって、庶民なりに頭は働かせているのだ。

男は私のする話を何でも興味深そうに聞いた。男は存外聞き上手で、初日なんて朝になって鳥の鳴き声が聞こえるまで話続けてしまった。おかげで男は絶倫だと噂されたし、私は私で店主クレツプルから生暖かい目で労られた。鬱陶しい。

男の興味は幼子のように尽きず、それは愛息を失った悲しみからの逃避のようにも思えた。けれど眠らずに無事にいる人間なんているはずがない。二日目からは適当なところで切り上げて、男を寝かしつけるようにした。

このときにはもう、私が男を守ってやらなくては、という気分になっていた。どんな屈強な戦士であっても、休息は必要だ。出会って二日目。客と商売女の関係であるはずなのに、随分と絆されたものだ和我ながら思った。

あるとき、男がシルバー・ブラッド家について尋ねてきた。町での評判はどうなのか。私個人はどう思っているか。仕事を受けるなら、やはり彼の家を頼るべきか。

傭兵としての稼ぎや名声を考えれば、私はその間に頷くべきだったのだと思う。それでも、どうしても、男が連中に使われているところは見たくなかった。

だから、「あまり近づかないほうがいいんじゃないかしら。大きな声では言えないけれど、良い噂も聞かないし」と忠告の形を取った。男は少し考えるように間を置き、わ

かった、と答えてくれた。

男がその後、連中の仕事を請け負ったとは、情報通を自認する私の耳にも届いていない。

暫くして。私が一人の客に独占されていることに苦情が入った。

そうはいつても、男は常にマルカルスに在るわけではない。傭兵らしく、町の外へ度々稼ぎに出かけている。だから独占なんて言い草も、私を買えない甲斐性無し共の言いがかりに過ぎないのだから……。

男はそれに対し、ずしりと重い金貨袋でクレツプルを始めとした店中の男共を黙らせた。「私がいるあいだ、彼女は好きにさせてもらう。足りないことはないはずだな？」。正直、少し痺れたし、私の名も上がった。

とはいえクレツプルは、せめて酌にくらいは回らないと、男の身が危なくなる、と囁いた。

それは大袈裟とも言えないし、男も「君の立場が悪くなるようなことは避けたい」と言つて、ベッドで同衾するとき以外は男へ付きつきりではなく、以前のように接客にも精を出すようになった。

……そんな気遣いができるのなら、そろそろ手を出してくれてもいいのに。こっち

だって疼^{うず}きを我慢し続けるのは大変なのだ。

私がそんな不満を抱え始めた頃、マルカルスに事件が起きた。嵐が、人の皮を破り捨てたのだ。

あの憎たらしいシルバー・ブラッド家の狗に成り下がっていた市警隊が何人か、宿屋近くの広場で殺されたらしい。

早朝、店先の掃除のため出たときには、もう死体は無かった。ただ、夥しい、どころか大きな水袋を破裂させたような血痕は複数残っており、大量殺人が現実のことであるのだと知らせていた。

私はその場で戻してしまった。人生でそんな衝撃的な場面を目撃したのは初めてだったのだし、月の物以上の出血など知らない一般市民なのだ。仕方ないだろう。

ただ、四つん這いになり、口元を抑えたとき、違和感を覚えた。胃の中身を戻して苦しいはずなのに、私の手が触れた口角は、唾うように釣り上がっていたのだ。どうやら、あまりに衝撃的だったせいで、私はおかしくなってしまったらしい。

次いで頭に浮かんだのは、男のことだ。こんな事件は前代未聞である。巻き込まれていなければいいのだが……。

と、そんな私の心配を余所に、男はいつもどおりふらりと宿に帰って来た。安心するやら憎たらしいやらで、理不尽だとわかっていてもついに男に当たってしまった。脇のあ

たりを抓つかったのは、素直に悪いと思う。

私と男の平和な日常が戻ったこととは裏腹に、マルカリスの事件はその後、何日も続いた。

事件が続くあいだ、男は寝入ったと見せかけてすぐに外出し、皆が起き出す前にベッドに戻るようになった。男が事件に関わっているのは、おそらくトロールだつて理解できずはすだ。

それでも敢えて私にもわかる形で事件を起こしたことが、堪らなく嬉しかった。そして男は耳元で甘く囁くのだ。「事件があつたとき、私は君と過ごしていたことにしてほしい」と。今更過ぎるし、私は危険な匂いに当てられてまいっていた。

更に事件が続いた頃、最近市警隊を見かけなくて困る、と男が言った。

他の町の人間が聞けば、「恐ろしい事件が起きているのに、町の安全を守る市警隊が見当たらないとは、一体何事なのか!？」という意味に聞こえるだろう。

しかし今のマルカリスでそんなことを言うのは、一連の下手人以外にはいないのではなからうか。私の口角は、腰抜けの連中を思い描いて、知らずうちにまた釣り上がった。

それを男に見られたとき、冷水を浴びたように焦った。しかし男は、悍ましいと遠ざけるでもなく、「市警隊か彼の家に恨みがあるのか?」と訪ねてきた。私は意を決して、

身の上話をした。

男は言った。「そういうことなら、私に協力すれば、きっと、もっと、この催しを楽しめるぞ」と。

私は男に、市警隊の隊舎や自宅、友人宅を洗いざらい話した。

そうして私が教えた住所に隠れ潜んでいた市警隊が殺される度、男の言うとおり、脳髓がぞくぞくするような悦びを味わった。

ああ、お父さんごめんなさい。スヴェンは悪い子になってしまいました。でも仕方ないよね。お父さんをいじめたシルバー・ブラッド家に尻尾を振る連中なんて、みんな死んじやえばいいんだもんね。

男との共犯関係が続き、犯行が何度か続いたとき、下腹部のあまりの熱に耐えかねて男を襲った。なんのканのと言っていたが、耳には入らなかった。それでもしっかりと愛してくれたのだから、やはりいい男だと思う。反面、お父さんごめんなさい。スヴェンはやっぱり悪い子です。

男と関係を持った日に聞いたのだが、男には他にも三人の協力者がいるのだという。それなら私の協力は必要なかったのではないだろうか。男の優しさに甘えて、一人、空回っていただけなのではないだろうか、と不安になった。

しかし表情を暗くした私に、男は「初動こそ最も肝心なのだ」と言った。他の三人も確かな伝手を持つてはいるが、軽々に動くのは難しいのだという。だから、私の密告はとても助かったのだと。

嘘か本当かはわからない。男は人を騙すのが得意だ。初めは純朴な傭兵だと思つたのに、本性は形が人なだけの嵐だったのだ。もしかしたらデイドラかもしれない。それでもいい。嘘でも本当でも、優しい言葉をかけてくれる男が欲しくて、私はまた覆い被さつた。

私には無二の友がいる。あまり自分のことを語らない男だ、しかし、その並外れたドゥーマー文化への興味は、私と遜色が無いと言える稀有な人物だ。

研究に興味は不可欠だ。興味無くして、発見は有り得ない。

いつだったかは、私がドワーフセンチュリオンの動力コアの働きを見たいと言えば、ファルメルを蹴散らし、友へ突進してくるセンチュリオンを受け止め、私のスケッチが完成するまで抑え込んでくれていた。これはドゥーマー文化への愛にも似た興味関心がなければ為せぬ業であろう。やはり、我が無二の友と呼ぶに相応しい。

一つ欠点を上げるとするならば、多少飽きっぽいところがあることか。

一つの実験を始めれば、少しずつ条件を変えて何度も試行する必要がある。しかし彼は途中で飽き、切り上げようとしてしまうのだ。これはいけない。

だが同時に、私が一つの実験にかかりきりになっていると、他の物を指して新しい実験を提案することがよくある。飽き性ではあるが、それは次々と興味が移ってしまうが故の弊害なのだろう。私は彼のその悪癖を、どこか好ましく思っている。

その友が、あるとき市警隊の名簿や巡回順路を調べてほしい、と依頼してきた。

そんなつまらないものをどうするのかと思つたが、調べて彼に教えるだけで、またドゥーマー遺跡行へ共に出かけてくれるというではないか。ならば是非もなし。

研究に興味は必要であるが、逆に言えば興味のわかない雑事は大概の場合 unnecessary 無意味なのだ。少なくとも私にとつてはそうだ。だからそのあたりの些事はどうでもいい。

私はその日のうちに市警隊の責任者を訪ね、魔術の行使も厭わない意気ですて洗いざらい吐かせた。勿論、翌日からは実り多き探索行だ。本当に、得難い友である。

そういうえば彼は、私と同じく盗賊ギルドの外部協力者で、なんと魂石充填を行つている当人だということではないか。

彼のおかげでどれだけ研究が捗つたか。何度も礼を言う私に彼は、ギルド以上に、私

との友誼を深めてくれたら嬉しい、とだけにはかみながら言う。

水臭い！ 我々は既に無二の友だというのに！

そもそも私がギルドの協力者に収まったのは、魂石欲しさからだ。彼が個人的な友人であるのならば、別にギルドとは縁を切っても構わんのだ。

しかし、それは彼自身に止められた。我々の友誼を疎んじたり、研究結果を盗み出すとするとする輩がいるかもしれない。ギルドには味方だと思わせておいたほうが良い、と。尤もだ。危ないところであった。頼もしい友である。

ただ、いくら友の頼みであったとしても、ファルメル語で書かれた日記の翻訳依頼を渋ってしまったことは、許してほしい。

ファルメル。元はスノーエルフと呼ばれていた彼奴等の文化を知ることが、ドゥーマー文化への造詣を深めるために必要なのだ。大事な研究成果なのだ。

とはいえ、新たにドワーフセンチュリオン二体の稼働しているコアを直に触れる機会まで用意されては、流石に頷かざるを得ない。

ドゥーマー機械全般に言えることだが、あれらは魂石から発せられる魔力以外にも、蒸気機関の力を利用して稼働している。つまり熱が重要な要素なのだ。しかしコアは稼働が止むと、表面の赤い部分の材質に変化が見られてしまう。稼働したままのコアに触れて調査できたことは、望外の喜びと言って差し支えないだろう。

手？ 彼の特異な回復呪文にかかれれば欠損していても治るのだから、神経が全て焼き尽きるまでは許容範囲だろう。それ以上は単純に調査ができなくなるため、流石の私も自重くらいする。

あ、そういうええもうじきサルモールから司法高官が来るのだった。これは……、彼に伝えるべきだろうか。

伝えるべきだろうな。彼は私の話なら何でも興味深そうに聞いてくれる。きつとこれを種に、また探索行へ付き添ってくれるだろう。そのはずだ。彼がいなければできない調査や研究が山程あるのだ。我々の道は遙か遠く、しかし光り輝いているぞ、友よ！

四人の協力者を得たおかげで、今のところ計画は順調だ。

憂さ晴らしを兼ねた日課により、シルバー・ブラッド家所縁の戦力を削り、同時にその支配が終わろうとしていることを町中に広めている。

協力者への礼は……。どうするか。

カルセルモ師はまた探索行でいいだろう。イーザイルは利権かな。ポテラは……。全く思いつかん。本人に聞くのが早そうだ。

スヴェンはなあ。父親が持っていたという鉾山の権利をそのまま渡してしまおうか。女経営者というのも悪くはないだろう。

マダナツクも、近いうちに約束を守らざるを得なくなる。フォースウォーン復権、というかマルカルス事件を今度こそ完璧な形で成し遂げたい、と話していたあの男のこと。私の怒りを買う下手な真似はしないだろう。

有り得るとすれば、『町の実権を首長と二分する』あたりを破り、首長を暗殺する、くらいか？ 毒殺であれば病死に見えなくもない。

その場合は……、どうするか。これも正直、考えてなかった。

現首長イグマンンドの血縁者を探して据えるか？ マルカルスに在住する者であれば、そのときは殺されているだろう。

なら他の都市から見繕うもの有りではなからうか。各地の首長はバルグルーフのよくな成り上がり者を除けば、古くからその地位に就く一族であることが多い。

であるなら、他地方の都市の血を遡って行けば、どこかでマルカルスの血にも辿り着く公算は十分にある。私には、フォースウォーンのみにもマルカルスを委ねる気など毛頭無いのだ。

まあ実際は、そもそもフォースウォーンを町の連中に認めさせることが難しいだろうな。

マダナツクはマルカルス事件の際、帝国にフォースウオーンの国を承認させようとしていたらしい。その前にウルフリックが私兵を率いてマダナツクを打倒したため、潰えた話ではあるが。

この情勢下であれば、帝国やスカイリムの弱体化を望むサルモールの思惑にも沿う。帝国に再度承認要求を出すのもいいかもしれない。

サルモールの尻を叩いて帝国に要求を呑ませることができれば、マダナツク率いる勢力は小さくとも正式に国として認可される。その正当性を以てマルカルの実権を握る。どうせサルモールは潰すのだ。その前に利用しておくのも一つの手。

……いや、これも微妙だな。そこまでやるとウルフリックは必ず腰を上げるだろうし、フォースウオーンが暴走する恐れもある。というか、どちらも起こる未来しか見えない。

ウルフリックは支持者拡大のためにもマルカルス事件解決を再現しようとするだろう。その場合、フォースウオーンは今度こそとばかりに気炎を上げる。

マダナツクはまだわからんが、あのやたら好戦的かつ抑圧されてきた連中が賊ではなく正規の市民と軍人になったのなら、全面戦争以外有り得ない。

だが結果は見えている。完全な奇襲が成功したマルカルス事件でさえ失敗したのだ。おそらく、当時はシルバー・ブラッド家が中からウルフリックに協力したのだろう。

マダナツクに実権を与えたあとならば、話がわかるかどうかで使い道があるかもしれない。しかしどの道、日課の最中に来られては面倒になりかねない。

半月以内にシルバー・ブラッド家を丸裸にし、本家の連中も始末できるよう、投げる数を増やすことにする。

気張っていいこう。まだ見ぬ市警隊員が、私を待っているのだから！

四一、お祭りとお悪巧み

宮廷魔術師カルセルモ師。鍊金術師ボテラ。銀細工師イーザイル。そして宿屋の女給スヴェン。

この四人の協力があつて、私はついに市警隊全員の始末を終えた。最後の一人を投げ終えたのは、小雨の振る、寒々しい早朝だった。

天候に反して、私は絶好調であつた。散々いびつてくれた市警隊員を一人残らず血祭りに上げられて達成感に溢れていたし、その多くは今際の際にきちんとそれらしい言葉を吐いてくれた。「助けてくれ」「嫌だ」「どうして」「やめてくれ」。

つきなみ月次な言葉でいい。独創性なんか無くつたつていい。本心から出た言葉であれば、それが唯一無二なのだ。

己の行いを省みて、潔く散つて行く者など誰一人としていなかった。私はその事実に感動すら覚えた。

わざわざ四人も協力者を募り、囚われの王を護衛しながら、やたら面倒な手口で毎日欠かさず複数人を殺害し、逃げられれば追い立て、隠れられれば炙り出し、探し出した。そんな苦勞をしておいてつまらない男気など見せられたら、かえって興が冷めてしま

う。だが、連中は弁え^{わきま}ていた。連中は「小悪党は小悪党らしく情けなく散ってほしい」という私の憤^{いらい}ましやかな願いを叶えてくれた。

今なら感謝の気持ちすら抱ける。ありがとう、マルカルス市警隊。戦士ですらなくなった不甲斐なき者共よ。お前達のことはきつと、覚えている限り忘れないうらう。

さて、そんな絶好調な私だ。すぐにもシルバー・ブラッド家邸宅へ乗り込もうかと思案したのだが……。どうも今日この日ではない気がしてやめた。

宿に戻ってじっくりこない顔をスヴェンに見せてしまったために要らぬ心配をかけたが、別に調子が悪いわけではない。しかし、やはり今日ではないのだ。

最近市警隊や傭兵の相手ばかりしていたため忘れがちではあったが、本命はシルバー・ブラッド家なのだ。ならば本命らしく、攻めるにしても様式というものが無ければならない、と私は考える。だが、今、攻めても、どうもそれらしい様子にはならない気がしたのだ……。

何故だ？ 感覚的な思考ばかりがよぎり、論理立った理由がわからない。

そこへ、スヴェンが言う。「この宿も随分、空き部屋が増えたわね」と。

……脳裏に稲妻が走る感覚。そうか、もう傭兵が居ないのだ。

私が考える理想はこうだ。

市警隊を一掃した私は、敵の親玉であるシルバー・ブラッド家へ攻め入る。

しかし立ちはだかるは百の市警隊に百の傭兵達。……あくまで理想の話であるので、この場だけ市警隊が都合よく復活していても問題はない。

軟弱者共を蹴散らし、少しずつ彼の家邸へ歩を進める私。思い思いの場所から観戦し、湧き上がる民衆。

連中を血祭りに上げることについて巨悪は倒され、町の興奮は最高潮へと至る。

そしてそのまま崩し的にマダナックをマルカルス市政へ参加させる承認を首長へ取り付け、大団円、だ。

それがどうであろう。実際には市警隊は塵殺してしまつたし、傭兵を名乗る腰抜け共はマルカルスから姿を消した。

私が日課を続ける最中、徐々に彼の家に雇われる傭兵が減っているのは把握していたが、とうとう古くからの子飼以外は一人もいなくなつてしまつたのだ。そのため、宿の逗留客が減つている、と。

何なら彼の邸宅も、襤褸を纏つた王を閉じ込めている銀山も、『近づけば崇られる』とばかりに人気が無い。

別に私は市警隊達以外を的にかける気はないし、そもそも崇り方がわからない。だが市民達には、彼の家に関わる場所というだけで縁起が悪く思えるのだろう。だから駄目

だったのだ。

仮に今、私がシルバー・ブラッド邸へ襲撃をかけたとしても。それに気付き、目撃する者がいるだろうか？

邸宅内で大立ち回りを演じたとしても。物音を聞きつける者はいるだろうか、近寄る者はいるだろうか？

私が関係者一同を外へ引き摺り出したとする。それを迎えに来てくれる民衆はいるだろうか？

答えは全て『否』だ。なんと盛り上がりにかけることだろう。私の直感は冴え渡って来たということだ。

そうとわかれば、準備が必要だ。

平和な町であっても、市民は娯楽に飢えている。その中でも、処刑は一つの見世物として人気が高いと亡き友等も話してくれた。

マルカルの住民は、公権力である市警隊が暴力を辞さず、常に圧迫してくる環境にあった。そして、ここふた月ばかりは私の日課によつて陰鬱な気分曝されて来たことだろう。気晴らしの娯楽に飢えていてもおかしくはない。

そしてその催しは、首長ですらおいそれと手を出せない、どこかリーチの中でもマルカルスに限って言えば圧制者と評して不足ない輩を成敗することなのだ。市民達に

も楽しんで貰わなければ。

私はその日、町を走り回り、物を集め人に声をかけ、忙しくした。

夜にはマルカルスで最も高い見張り塔から空を伺い、翌日の天気が晴れ、ないしは曇であることも確認した。

協力者達には、最後の仕上げへの助力を頼んだ。昼頃を頂点にして、彼の家邸前前に人が集まるよう仕向けてほしい、と。

一夜明けて。

日が中点に登ろうかという頃、私はシルバー・ブラッド邸の前に立ち、非常に満足していた。

邸宅の玄関先には、十字に組まれた杭が立ち並んでいる。わざわざ私が朝から運び、打ち込んだのだ。そしてそれを邪魔立てする者は一人もいなかった。もう市警隊も傭兵もいない。私の何を見られようと、構うことは無いのだ。

それを遠巻きに見やりながら、何が始まるのかとざわめく市民達。理想的である。昼食時を選んだのは正解だったな。

実はこれ、以前行った同胞団襲撃を参考にしていたりする。

あのときは、昼食を邪魔された同胞団員が腹を立てて揉め事になりやすくなる、というのが一番の理由だった。

それに加えて、誰しも昼食のために仕事の手を止める時間帯に何ぞ催し物があれば、やはり気になって見たくなるものなのだろう。

こういったとき、市民の中でも発言力を持つボテラや、市民に愛されるスヴェンの存在は有り難い。人を集めるのに最適だった。

ついでに、今は遠き地にいる友の知恵にも感謝を。

……私の『理想の仕上げ図』からこの状況を作り出したわけだが、ブレックスに指示されて行った同胞団襲撃は、私の中で成功体験として根付いているようだ。

野次馬のような群衆。派手に暴れる私。解決する問題。

私自身に視線を集めたい欲求は皆無だが、それでことがうまく運んだ試しがあるのも事実。知らず知らずのうちに、「あのようになりゃ良い」という思いがあったらしい。離れていても、我が友は私の力になってくれる。

私は杭の側に立ち、黒鉄の大盾や塔のカイトシールド、ハルバードや無強化のメイスを取り出し、いかにも『これから荒事を起こすぞ』といった様子を群衆に見せつける。

まあ、おそらく盾も武器も大きな物は使わないだろう。色々と家具がある室内では、

大物長物は扱いづらいうえ、勢い余つて殺しかねない。この中の一族郎党には、これからある役割を担つて貰いたいのだ。できるだけ生け捕りにしたいし、軽傷のまま引き摺り出したい。

勿体ぶつて音を立てながら襲撃の準備をしているとき、私は群がる市民の中にマダナツクの姿を見つけた。これも予定どおり。奴がどれだけ道化を演じきれるか見物である。

必要なことなので構わないのだが、私が手を回さなくとも当たり前のように往来に顔を出すのだな、この王は。

さあ。準備は万端。仕掛けも万全。あとは楽しい殴り込みだと扉を開けようとして……鍵がかかつていた。当然と言えば当然である。しかし出鼻をくじかれた感は否めない。

仕方が無いので、壊してしまおう。私は大槌である『グラント』を取り出し、全力で石の扉に叩きつける。極めて高い筋力が要求される、鉄塊。耳をつんざく音を上げながらも、きちんと一撃で扉を破壊してくれた。衆目もより集まったようである。風は私に吹いているな？

私は邸宅に踏み込み、啞然としている面々を前に声をかける。問答無用で斬りかかる

のはよろしくない。今の私は人に見られているのだから。

「やあ、シルバー・ブラッド家の諸君、初めまして。こんにちは。

私が誰だか疑問だろうから明かすが、ここ最近、市警隊に誅を下していた者だ。マルカルスに巢食う寄生虫、その末端たる市警隊が片付いたのでな。本体を叩きに来た、というわけだ。単純明快だな」

見渡すと、壮年の男。それより幾らか若い男。その妻であろう若い女。そして狼狽える使用人と、狼狽えながらもこちらへ身構える戦士が五人見えた。

ソーンヴァー・シルバー・ブラッド、ソーナー・シルバー・ブラッド、ベトリッド・シルバー・ブラッドだろう。使用人は知らん。戦士は……。駄目だな。こちらは明らかに狼藉者なのだから、有無を言わず跳びかかってくれればいいものを。

「そういうわけだから、昼食時に悪いのだがな。少し表に出てくれないだろうか。お前達を磔にする特別な十字の杭も用意したんだ。頼むよ」

ソーンヴァーが声を上げかける。大方「ふざけるな」とでも言おうとしたのだろうが、別に私に聞いてやる義理は無い。姿勢を低く滑らせ、突貫の勢いを以て爪先をメイスで潰す。上げかけた声は絶叫になった。

地を滑る低い姿勢のまま、残りの者共の爪先や足の甲を次々潰していく。女は衣服で足先が見えなかつたので、脛があるだろう位置を盾の縁で殴りつけた。多分、全部折る

か砕くかできたと思う。

この段になってようやく戦士が動き始める。……戦士というか木偶ではなからうか？ もしくは、素人に動き回られてはかえって邪魔だと考えたか？ だとすれば油断ならない。

私の低い姿勢に注意して腰を落としているが、ふと気付いた。使用人の分までは杭があるが、木偶の分を入れると足りないな、と。

そこで、メイスからハルバードに持ち替え、刺す。「使わない」と思っていたが、嘘になってしまったな。しかし余計な身柄は文字通り持て余すので、仕方がない。

それに、ソウルの業をまざまざ見た敵対者を、生かしておく理由も無い。

二人目が雄叫びを上げながら唐竹に斬り付けてくる。盾で受けようとしたもの……やはり長物は室内では少々不便である。長さは強さではあるが。

両手に別々の武器を持つのが億劫になったため、塔のカイトシールドをしまい、両手で持ったハルバードの柄の中心で剣を受ける。そこで一瞬力を抜き、姿勢を崩したところを跳ね上げ、石突で顎を殴り、返す斧頭で首を断つ。

三人目が後ろから突きを放つのを、胴を中心に回転させた斧頭で弾き、そのまま頭上でもう一回転させた刃を以て頭を割る。

四人目と五人目は同時にしかけてきた。此奴等、やはり木偶ではないな。ただ、私は

ここでもまた一つ思い違いに気付いてしまった。

何故私は、この家の家具の無事を気にながら戦っているのだろうか、と。

一度気付けば馬鹿らしいの一言だ。柄の、出来るだけ石突に近いところを持ち、体ごとハルバードを振り回す。机や棚が派手に壊れるが、同時に戦士達も胴のあたりで上下二つに別れた。

なんとというか、荒事から遠ざかると勘が鈍るな。戦士達にも、騙し討ちのような形になつてしまった。別に悪いとは思わんが、折角の遊び相手は惜しいと思つてしまふ。

五人分の血と臓物が撒き散らかされたが、シルバー・ブラッドの面々はそれを浴びなかつた。どうも足を潰されて床に這いつくばっていたのが幸いしたらしい。これから行うことを思えば好都合である。

私は武具をしまい、両の腕に連中を抱えて表へ運び出す。その際、多少の細工を施すことも忘れない。抵抗されても、折れた足を握つてやれば大人しくなるので楽だ。

表に出て磔にすると、大回復を全員にかけてやる。衆目に曝される圧制者は、惨めに弱っているか、ふてぶてしく吠えているかが望ましい。今日は後者だ。

私は民衆に、マルカルス市民達に問う。

「この中に、シルバー・ブラッド家から何か無体を働かれた者はいないか!」

折角集まったというのに、まだシルバー・ブラッドの恐怖は刷り込まれたままのようだ。

再び声を上げる。

「この中に、市警隊や傭兵共に、理不尽な要求を呑まされた者はいないか!」

言い終わり、しまった、と思う。これがブレックスの手引であつたなら、群衆の中に手の者を潜ませて声を上げさせるはずだ。だが私は、そのような工作をしていない。

この手の問答は最初の一人がいなければ話にならないのだが……。

「されたぞ! 俺は、冤罪でシドナ鉱山に入りたくなかつたら、店の商品をタダ同然に負けろと強要された!」

市民が声をあげたか! そう思つて目をやると、男の後ろにはマダナツクがいた。おそらく、あの者は町に潜伏していたフォースウオーンなのだろう。

あまりあの男を調子付かせたくはないのだが、今は仕方あるまい。

私は「なんという横暴! 卑劣な所業! 他にはいないか!」と煽る。

「お、俺はいつもどおり銀山出口にある溶鉱炉へ働きに出たら、傭兵達に『ウオーレンズ貧民窟の連中は臭くてたまらねえ』つて殴られて、蹴られて、そんで川にまで落とされた! 市警隊は見て見ぬ振りだ!」

「わ、私は、市場で買ひ物をしていたら、『スリを働くつもりだつたのだろうか?』と言ひ

がかりをつけられ、そのまま暗がりへ……」

流石に女の被害はマダナツクの仕込みだろう。熱が高まったとはいえ、衆目の前で恥を晒したい女はいないはずだ。もしいるなら、もっと昏い恨みを湛えた目をしているものだ。

その後も被害の訴えは続いた。ほうっておけば止みそうになかったので（連中、どれだけ恨みを買っているんだ？）、盾をメイスで叩いて群衆の注目を集めると同時に黙らせる。

「マルカルス市民の諸君、貴方達の怒りと悲しみはよく伝わった。余所者である自分でさえ、義憤を堪えられそうにない！」

では聞こう。この者達に相応しい罰とはなんだろうか!？」

「殴られた分、殴り返してやりてえー!」「奪われた物を返してほしい!」「誇りを傷つけたことへの謝罪を!」

うんうん、実際の被害に遭っていたというのにまだ熱狂には至らないとは、マルカルス市民は温厚だな。まあ、直接手を汚したのは眼前の連中ではなく市警隊達が主なのだから、被害と怒りが結びつきづらいかもしれない。

そのせいか、なかなか期待している言葉が出てこないな。

—— 死を。

その一言は不思議と皆の耳に響いた。見れば、また陰にマダナツクが。彼奴、なかなか使えるな。

「ただの死か？　長く町に貢献した名家への、礼儀を以ての死か？」

—— 卑怯者に相応しい死を。苦しみ抜いた末の死を。

「そうだ、この者達は、貴方方から様々なものを奪った。名譽を！　財産を！　尊厳を！　この者達の指を見てほしい！　綺羅びやかな指輪の数々が見えるだろう。見てほしい！　使用人でさえ、金とダイヤモンドの首飾りをしている！

あれらは本来、貴方方の物だったはずだ！　それを不当に奪い、富を蓄え、市警隊達を使い暴力で訴えを黙らせてきた！　シルバー・ブラッド家こそ、マルカルの篡奪者だ！

シルバー・ブラッド家さえいなければ、ウォーレンズなど存在しなかった！　シルバー・ブラッド家さえいなければ、この町で誰も泣くことはなかったのだ！」

嘘っぱちである。

指輪は私が嵌めたものだし、使用人の首飾りも同様だ。流石に使用人が家事に不便な指輪をしているのは不自然かと思ひ首飾りにしたのだが、ダイヤモンドはやりすぎた気がする。

それにどんな町にも浮浪者はいる。此奴等がどれだけ正しく商売に精を出したとし

ても、富めるシルバー・ブラッド家と貧しきウオーレンズ住民は生まれていただろう。例外なのは、暴力的な金銭に物を言わせて復興中の、我が町ウインターホールドくらいなものである。

私が余所事を考えていると、マダナツクに乗せられた群衆が雄叫びを上げる。「死を！ 卑怯者に相応しい死を！ 苦しみ抜いた死を！」。繰り返される。扇動は成功だ。流石は王、といったところか。

あの男のことはあとで考えるところ。見れば、場もなかなか温まったようだ。ならば私も再び道化を演じなければならん。

「そうだ。ここにいる全員に、この者達を殴る権利がある！ 斬りつける権利がある！」。私は、溶鉱炉の作業員にスコップを渡して叫ぶ。

「貴方が日々シャベルを握っていたのは何故だ。ウオーレンズで不自由な生活を送るためか？ 違う！ 今日この日、九大神に変わって卑怯者へ罰を与えるためだ！」

そこまで言っても、純朴な作業員は何をさせたがられているのか、感づかないらしい。仕方ない。

私はソーンヴァアの脛をスコップで殴りつける。いい具合に骨は折れたが、シャベルの柄も折れてしまった。加減が難しいな、これは。

次いですぐに大回復をかけてやる。するとすぐに、血色の良い足が戻ってきた。

「この足をみてほしい。これは罰を受けた者の足か？　貴方の苦しみを味わせた足か？

いいや、違う。まだ卑怯者の足のままで！　なら、貴方のするべきことはなんだ!?」
作業員はようやくやく狂気に侵された。自分に喝を入れるため、初めは蚊の鳴くような、そして徐々に絶叫と呼べるほどの大声を上げて、使い慣れたシャベルで力いっぱい脛を横殴りに叩く。

素人がシャベル匙の刃を立てられなければ骨が折れるまではいくまいが、内出血で変色しつつある。

しかしこれで溜飲を下げてもらっても困るのだ。そうはさせじと、私の作った回復薬を強制的に飲ませる。するとどうだろう。先程と同様、血色の良い足が戻ってきた。

殴った作業員はいまいち要領を得ない様子だが、無視して群衆へ語りかける。

「見てほしい！　罰を受けたはずなのに、この者達の足は誰一人として罪を雪いでいない！　卑怯者のままで！

では、どうする？　もう言わなくてもわかるな。次は誰がシャベルを持つ？

シャベルだけではないぞ。鋤夫には鶴嘴を用意した。力に自信の無い方はこのダガーを使うといい。

狙うのだって、足でなくても構わない。腹でも腕でも、好きなどころを！　ああ、頭

にだけは注意してくれ。うっかり死なせてしまつては、寧ろ救いになる。

……貴方も、シャベルで一度叩いたくらいで晴れる恨みでもないのでしょうか？ ならば列に並ぶといい。私はここにいる全員が正当な権利を行使し終えるまでの薬を用意した！ 安心してほしい！

正当な権利の行使が終わつた方は、連中に薬を飲ませるのを手伝つてほしい。ここにいる全員が仲間だ。仲間の権利を、篡奪者から守つてやつてほしい。お願いする！」縛られ、いのように翱られるシルバー・ブラッド家の面々。出動もなければ鎮圧も無い市警隊。自分達を脅しつける傭兵もいない。自由の身が保証されたままで、恨みを晴らせる。鬱憤を晴らせる。

その状態で群衆は、一人の狂気を目の当たりにした。そしてそれは、驚くほど簡単に伝播した。

長く抑圧され、怒りの発散すらまともに叶わなかつた者達だ。火がつくのは遅かつたが、その分、溜め込んだ憤懣は相当なものだつたのだろう。

あとは酷いものだった。群衆が郎党を含めたシルバー・ブラッド家を翱り、死なせないように薬を飲ませる。

当然、連中は抵抗する。それが余計火に油を注ぐのだが、薬を飲ませられなければ、如何せん回転率が悪い。

私自身、群衆が几帳面にも手で口を開けてさし上げようと努力している様かもどかしくなったので、ソーンヴァアーだかソーナーだかの横つ面を殴り、口が開いたところに瓶ごと突っ込み、更に下から顎を殴った。

回復薬が喉を通ればそれでいいのだ。瓶の破片が口腔内を傷つけようが構わない。どうせまた同じようなことをして、回復薬で治るのだから。

私の直接的な飲ませ方を見て遠慮はいらないと理解したのか、群衆は、抵抗されれば同じように効率的な飲ませ方を躊躇わなくなった。

人というものは工夫する生き物なのか、頑迷に抵抗したソーンヴァアーに至っては、群衆の手で顎が斬られてしまっている。あれでは口を塞ぎたくとも塞げまい。熱狂の中だというのに、賢いな。

私謹製の不必要なほどに質の高い回復薬は、致命傷以外の傷をどんどん治してしまふ。それを見て、薬を飲ませたのは自分達であるのに更に怒りを湧き上がらせる群衆。

……いや、よく見れば顎周りの怪我は薬を飲ませるために常態化しているせいか、治りが遅いようにも見える。

回復薬とは、塗布せず経口摂取した場合は基本的に、体全体を満遍なく治療する。両腕に同等の切り傷を負っていたとして、利き腕だから早く治る、ということもない。だが……これは……。

アグス師にいい土産話ができたやもしれん。こういった実験は、今の大学や私個人の風聞を気にすれば、なかなかできるものでもないしな。

そのうち、シルバー・ブラッド家の連中が声を張り上げた。

「そ、ソーナーは違う。家長は俺だ！ 責め苦を追わせたいというのなら、俺にだけ矛先を向けばいい、この臆病者共め!!」

「兄は、違う。正しきノルドとして、帝国軍としてサルモールとも戦った。知っている者も多いはずだ！ ……私だ。鉦山を経営していたのも、市警隊を買収したのも私なのだ！」

それに、よく聞け臆病者共！ 私は、ウィンドヘルムのウルフリック・ストームクローク首長閣下とも懇意にさせていた。マルカルス事件の顛末を覚えていられるか？ このような狼藉を働いて、無事ですむと思うなよ。死にたい者だけ、私を矚るといい！」

臆病者共とはよくいったもので、群衆の興奮に若干、水を差されてしまった。体力的に多少疲れが見えていたことも原因だろう。

あまりこの空気が続くのはよくないと前に出かけると、マダナックが私の隣に来て、制した。そして手の者を使い、彼の兄弟を糾弾する。

「みんな、騙されるな！ 兄のソーンヴァーも弟のソーナーも、お互いを助けることしか

言っていない！ 男なら、真のノルドなら、妻や家人に被害が及ばないよう口にするはずだ！

それに使用人達を見ろ。自分が助かりたいばかりで、主の助命など全く頭にない！ 普段から上に立つものとして己を律し接していれば、配下の者は自ずと主を助けようという気持ちになるはずだ。それも無い！

こいつらが口にするのは、兄弟愛や高潔さを装った、真に唾棄すべき詭弁だ！ こいつらは嘘つきだ！

それに、東の首長が噂通りの真のノルドであれば、こんな卑怯者達と懇意なはずがない。きつとこいつらが金銭をちらつかせて擦り寄っただけだ！ 卑怯者の嘘に惑わされるな！」

麗しい兄弟愛だけは本当のことだと思うし、ウルフリックと裏で通じていたとしても私は驚かん。西の端にストームクロークの一大拠点兼一大財源ができたなら、あの男は諸手を挙げて喜ぶだろう。

しかし、一つでも疑わしいのなら、口にした全てが嘘だと断じる。力強く言い切つてやることで、群衆への根拠無き説得力は増す。少なくとも、狂気に支配されたこの場では。

私も遊び半分煽り半分くらいのもりで、『義侠のアーチル』を歌つてやる。そして、

そこに脇役として登場する鍊金術師が、私だとも。寧ろウルフリックと親しいのは私のほうだと印象づける。

……西の果てでも恥ずかしい歌を広められたと知ったら、アーチルの奴、黒檀の盾で殴りかかってきそうだな。

歌を披露したのは、適度に休息を取らせるためでもある。祭りはまだ続く。群衆には、一時の怒りに身を任せてへばつてもらつても困るのだ。適度に休みながら、猛る心だけは維持してほしい。今日一日は、ずっと地に足をつけず浮かれていてくれると助かる。

そうして、自分たちが騙されかけたのだと理解した群衆は、更に怒りの炎を燃やす者や、それを応援するように食料を集め始める者も出だした。本当に祭りの様相を呈してきたな。

すると、マダナックが少々得意げな顔で私に声をかけてきた。

「どうしてなかなか盛況な催しじゃないか、遠き王よ。尤も、計画性という一点においては不安の残る出来であったように思うが？」

「いやいや何を言うのか檻樓を纏った王よ。お前を信頼してのことではないか。

これからマルカルス市政のみならず、リーチ全体の為政に参画してもらわねばならん

のだ。この程度は合わせてくれる機転が無いと、我々は不安になってしまう。そうだろう？」

またしても嘘っぱちである。

私が真の道化になりかけたのは事実である。しかしこの油断ならない男に対しては、ハツタリも大事だ。ついでに、こちらが組織立つて動いていることを仄めかす。

実際の協力者はたった四人で組織などと呼べたものではないが、組織立つて動いているのとて半分は嘘ではない。

マルカルスが手に入ったなら、ブレックスが人員を送ってくる算段になっている。そして私の一連の行動は計画の一環であり、今回のように私が単独で動くほうが稀なのだ。

……というか、余所の都市を引つ掻き回して影響力を保持しようとする一都市の首長付私兵、というののもどうなのかと自分で思ってしまう。

いや、私兵就任からしてそれらを加味した話なのだから、正に今更である。

「さて、それでは檻樓を……纏うことも今日限り無くなりそうだが。お前の王としての手腕をもう一度見せてもらおうとしよう。銀山をお前にくれてやることはできるが、それが穏便に済むかどうかはお前次第だ。フォースウオーンがリーチのノルド達に受け入れられるかどうかもな。

せいぜい気張るといい。私の『日課』の標的になりたくはないだろう？」

私の考えとしては、計画の一環として、シルバー・ブラッド家とフォースウォーンをそっくり入れ替えてしまおう、という指針で動いてきた。

だから数々の銀山の所有権も、マルカルス市政への影響力も、マダナツクへ売約済みのような話である。そうはいつても、それを住民達が許すかといえ別の話。なにせ町と村々を歩き来する者達へ襲撃を繰り返してきたのは、他ならぬフォースウォーンなのだから。

そしてフォースウォーンが暴発した際には、マダナツクが折れるか住民感情が治まるまで、私は生贄を捧げなければならない。この男はそれを良しとはしないだろうが、止められはしないと理解もしている。

マダナツクの表情が苦虫を噛み潰したように変わる。私はこの男があまり好きではないので、気分がいい。

マダナツクは礫になった連中の前に進み出て、声を張り上げる。

「皆さん！　どうか私にも、この卑怯者達と同じ責め苦を与えてほしい！」

私はマダナツク。フォースウォーンの王である者です」

群衆に衝撃が走る。それが浸透するのを待つように、マダナツクは一度言葉を切る。

狙い通りなのか、新たな敵の出現に、興奮した群衆は怒りを向ける。

「責め苦を与える前に、どうか事情だけでも聞いてほしい。それが、正しき罰を与えることに繋がるでしょう。」

私は、ここにいるソーナー・シルバー・ブラッドに捕らえられておりました。そしてソーナーがリーチの流通を掌握するために、私の命の保証と引き換えに、私の部下へ、望まぬ襲撃を命じさせたのです。

襲撃によって、親しい人を失った方もおられるでしょう。大切な物を無くされた方もおられるでしょう。体は無事でも、心に傷を負った方もおられるでしょう。

私はこの者達と同じ卑怯者です。私の力が足りず、見張りを目を盗んで自死することができませんでした。

ですがどうか、部下達の所業はお許しいただきたいのです。愚かで愛しい部下達の罪は、全て私のものです。どうか、どうか……」

うまいな、と思うと同時に少々腹立たしい。

私はまず、シルバー・ブラッド家を悪しき者と断定し、それを黜ることは正しい行いだ、という構図を意図して作り出した。多くの者は正しい側に立っていたいからだ。

奴はそれを利用し、「正しき罰」と口にした。自分が正しい側にいるためには、奴の言葉を聞かざるを得ない状況を作ったわけだ。そのうえで平身低頭。フォーヌスウオーンは被害者であるが、正しい心を持つ自分は正しい罰を望む、と。

多分、このあと私も再び出ざるを得んだろうな。私は利用されるのが好きではない。なるほど。味方ではない知恵者とはこうも不快なものか。

シルバー・ブラッド家の連中に比べれば躊躇いがちだが、マダナツクにも暴行が加えられる。マダナツクは暴行にも回復薬の経口摂取にも抵抗しないので、自ずと暴行自体が連中に比べれば軽いものになっている。

そこへ王の助命嘆願のために現れる、町に潜伏していたフォースウォーン達。王は自分達の身の安全を慮っただけで、卑怯であったわけでも臆病であったわけでもない。ただ、王の務めを果たさんとしたまで。攻めるなら自分達も同様に、と。

ついさつきまで隣人だと思っていた者がフォースウォーンだと名乗りでる。それだけでも衝撃的だろうに、涙ながらに許しを請うている。ここで振り上げた拳を躊躇いなく振り下ろせる者は少ない。

しかしそれは精神的な抑圧でもある。暴行はしたい。だが、新しい獲物を虜めるのは憚られる。

だから私がその矛先を思い出させてやる。

「聞いてほしい。ここにいるマダナツクは、たしかに罪人だ。私自身、マルカルスへ来る途中、馬車であつたにも拘わらず襲撃に遭つた。

しかしそれがフォースウォーンにとつても望まぬものだったとしたら。それを強要

した者がいるのだとしたら。その者こそが本当の罪人ではないだろうか！

そしてそれは、皆も知るとおり、ここにいるソーナー・シルバー・ブラッドだ！ 此奴こそが全ての元凶！

貴方の家族が傷ついたのも！ 貴方がウォーレンズに居住しなければならぬのも！ マルカルスが騒乱に見舞われ続けるのも！ 全てこのソーナーが原因だ！ 真に罰を受けるべきはマダナツクやフォースウォーンではない。ソーナーだ！」

我ながら暴論である。

だが、群衆にとっては違う。この場においての扇動者がそう口にするのだから、きつとそれは正しいのだろう。だから自分達には、この怒りも遣る瀬無さもソーナー・シルバー・ブラッドにぶつけていい権利がある。

少々無理があるかと思ひ、もうひと押しすることにした。『錯乱』の呪文だ。大学の文献を読み漁っているうちに存在を知ったのだが、これは感覚的には『魅了』の呪術を魔術的に解釈したものと言つていい。習得は容易だった。それを弱く広くかけてやる。

その効果もあつてか、マダナツクに群がついていた群衆は、私の指し示すとおりソーナーへと再び詰め寄る。

一度水を差された苛立ちも相まつているのか、暴行は先程より凄惨なものになった。マダナツクを初めとしたフォースウォーンの連中はといえば、シルバー・ブラッド家

の者達へ菓を飲ませるのを手伝ったり、疲れて休憩している者へ水や食料を配ったりしている。

共通の敵を懲らしめるため、共に行動した。その事実を以て、マルカルス市民との関係を改善しようというのだろう。催しの運営人員と言えそうな働きぶりだ。勤勉なことは結構である。

あとは本当に見ているだけで良かった。

私が主に非難したのはソーナーだが、ソーナーへの順番を待ちきれない者が他の家人へと襲いかかる。シルバー・ブラッド家の連中は、満遍なく暴行を受けている。

そうして日が暮れる頃。とうとう連中から悲鳴すら上がらなくなつた。心が壊れたのか、既に事切れたのかはわからない。だが群衆の一人はその無反応に腹を立て、頭を鶴嘴で殴つてしまう。

岩盤から鉋石を掘り出す工具を遠慮なく頭部へ振るえばどうなるか。答えは目の前にある。頭蓋が割れて中身が飛び出す。瞬間的に上がった圧で眼球は飛び出し、その後、圧が瞬時に下がるためそれ以上飛び出しもせず、戻りもせず、蛙のような目のまま固定される。

一人が殺しをしてしまうと、ずるい、とでも思うのだろうか。他の者達も残つた連中を殺し始めた。危険だと判断したのか、フォースウォーン達は下がっている。

連中が全員斃り殺しに遭ったあと、奇妙な静けさが訪れる。ここで罪悪感から後悔の念を抱かせてはいけない。罪悪感は何こえのいい言葉で塗りつぶすからこそ、長く凝りとして残るのだ。そしてその凝りは、我々の人事に反発する気概を失わせるだろう。

「マルカルの難事の元凶であったシルバー！ブラッド家は、ここに誅された！マルカルスに住まう全ての人々が正義を願い、勝ったからだ！マルカルス万歳！正しき心に九大神の祝福を！」

最初の一人二人こそ戸惑いがちであったが、やがてそれは群衆の叫びとなった。マルカルス万歳！正しき心に九大神の祝福を！

……素晴らしいな。そうして、まんまと扇動に乗り、世にも非道な拷問の末の殺害を行つた罪悪感を、生涯抱えていてほしい。それが我々のためになるのだから。

さて、十日もしないうちにサルモールから司法高官が派遣されてくるのだったな。

マダナツクにはそれまでにある程度の足場固めをさせておこう。人間、躓くなら物事が順調に進んでいるときほど、酷く落ち込むものだ。あの男の心を折っておくには必要な手順だろう。

シルバー・ブラッド家の面々がマルカルス市民によつて殺害されるという事件から、つまり民衆を扇動した男が『祭り』や『催し』と称し、市民からは『正義の執行日』とされている日から数日が経った頃。

マダナツクは急ぎ足でアンダーストーン砦へと足を運んでいた。首長府の一員として外せない用があるためだ。

マダナツクは祭りの日から精力的に動き回っていた。

まず当日の日暮れ後には、扇動者の男と共に首長イグマンドへ謁見し、執政や個人的相談役に次ぐ参与として首長府への参加を許された。

首長として町で暴動を起こした当人を許す気は無かつたが、市警隊が壊滅した今、それらを使うことは無理な話であつた。その他の衛兵隊を総動員しても、市警隊全てを相手取つた下手人を抑え込めるとは思えない。

そこで、マルカルス事件のときと同じく抜け道から砦を脱しようとしたのだが……。そこに立ち塞がったのは、あろうことが首長府において私兵に次ぐ最高戦力とも言える宮廷魔道士、カルセルモであつた。

彼の魔道士は言つた。「得難き友のため、閣下を往かせるわけにはまいりませぬ」と。相手はただの暴徒ではない。水面下で自身のすぐ側まで魔の手を忍ばせることのできる者。そして、やろうと思えばいつでも自分の命を奪える者。

慮外者の手が思いの外、長く伸びていることを実感した首長は、無力感を抱え抵抗を諦めた。

そうして怪しげな余所者の言葉どおり、マダナツクなるフォースウォーンのリーチが政参画を認めざるを得なくなった。

絵図を書いたのはこの余所者であろう。ソーンヴァー・シルバー・ブラッドからマダナツクという男の処遇については連絡を受けていたため、そんな男がシドナ鉱山の中から全てを指揮したとは考えづらい。ならばこの余所者こそが黒幕であり、マダナツクはこの者の走狗か、協力者というのが納得できる筋である。

フォースウォーンの王など受け入れて問題はないのかと危惧したが、砦を半裸で彷徨かないだけの分別はあったようだ。マダナツクは貴族の礼服を着こなし、配下の者達も衛兵隊の鎧を身に着けている。

厄介な者ばかりがこのアンダーストーン砦に集う。どうして自分の人生はこんなにも思いどおりにいかないものか、と首長が嘆き時ばかりが浪費されていくあいだにも、マダナツクは各所への挨拶周りを済ませ、手の者を配備している。

フォースウォーン勢力が、驚くほど簡単に公権力の座に就いた、就いてしまえたことに、首長は驚きを隠せなかった。

これは、リーチのノルドに刷り込まれた、フォースウォーンはデイドラ崇拜も辞さな

い蛮族である、という印象が大きい。首長とて先入観を捨て去るのは難しい。

そして首長はシルバー・ブラッド家が悪と断罪された日の様子を知らない。だから市民達がフォースウォーンを受け入れていることが信じられなかった。リーチ中の砦を不法に占拠するフォースウォーンなど、首長にとっては市警隊と並んで頭痛の種でしか無かつたからだ。

しかし現実には日を追うごとにマダナツクの存在感は増し、地位は盤石になっていく。

半ば勢いで承認を脅し取られてしまった人事ではあるが、こうなつては首長の権限のみで彼の者を排斥するのも難しい。

何度目かわからない溜息を吐きながら、首長はつい先程アンダーストーン砦に到着した、目の前のサルモール司法高官へと意識を集中させた。

「遠路はるばるご苦労だった。私はイグマンド。ご存知だろうが、リーチの首長の任に就く者だ。よしなに頼む」

「労いに感謝します、首長閣下。私はオンドルマル。こちらこそ、何かと便宜を図つていただきたいと考える身。ご面倒をおかけすると思いますが、ご協力をお願いしたい。

尤も、閣下は俗に言うマルカルス事件のあとにも、情に絆されることなく理性的な判

断を下されました。我々サルモールといたしましても、閣下ほどスカイリムで信をおける方はおらぬ、と評判ですとも」

サルモールから来た司法高官が口にするのは、皮肉と牽制だ。

リーチ首長はマルカルス事件の際、マルカルスからフォースウォーンを追い払ったウルフリック・ストームクロークへの功へ報いる形で、タロス崇拜を容認した。

しかし帝国とその背後にいるサルモールからの圧力に屈し、飲めぬはずの吐いた唾を飲み、ウルフリックを捕縛してしまったのだ。

囚われているあいだにウルフリックの父でもある前イーストマーチ首長は死亡しており、マルカルス首長は、葬儀に参列することすら許されなかつたウルフリックから強い恨みを買っている。きな臭さが年々増すスカイリムにおいても、否応なく帝国側へつかざるを得ないのがマルカルス首長、イグマンドという男なのだ。

司法高官が言いたいのは、余計なことは考えず、これまでどおり大人しく自分達に協力しろ、という話であろう。少なくとも、首長はそう受け取った。

その後も執政など重要人物の紹介が続き、首長にとつては忌々しくもマダナツクの番が巡ってきた。

「お初にお目にかかります。マダナツクと申す者です。今はこうして首長府に受け入れていただいておりますが、フォースウォーンの者達からは王として担がれる身でもあり

ます。

現在、フオースウオーンは国を持たぬ民です。しかし、これを改めたいと私は考えております。

このような挨拶の場で無作法とは存じますが、オンドルマル殿におかれましても、頭の隅に置いていただければ幸いです」

司法高官の眉間に皺が寄る。挨拶の場で際どい政治的発言を、それも首長の顔を潰す発言をするなど、信じられない行いである。本人の言うとおり無作法としか言えず、もつと言えば無礼だと非難することもできる。

だがマダナツクという男の名前には聞き覚えがあるうえ、マルカルス事件のことを口にしてしまったのはオンドルマルであった。この状況で堂々とマダナツクを非難できるとは、サルモール司法高官は恥知らずではなかった。

とはいえ、マダナツクとは先のマルカルス事件において、一時このマルカルスを占拠した者の名であったはずだ。それがどうして、首長府の一員としてこの場にいるのか。

また、マダナツクの発言が非常識なだけならまだ良かったのだ。問題は、マダナツクが帝国に寄越した『スカイリムからの独立嘆願書』である。

これが成ればスカイリムを更に混乱させることができるうえ、帝国の凋落をより印象づけることができる。方策としては、サルモール司法高官として寧ろ後押ししたいくら

いなのだ。

だが、それをこの場で口にするか。蝨族は所詮蝨族であるな、と司法高官はマダナツクに対する評価を数段下げた。

司法高官はマダナツクの発言を嗜め……。そこへ、横から嘴が挟まれる。まだ紹介すら済んでいない男だ。マルカルの礼儀はどうなっているのか。司法高官の眉間の皺が更に深まる。

「しかしですな。これなるマダナツクの訴え、一度は帝国やサルモールにて承認しようという動きもあったとか。それが、この男が投獄されて有耶無耶になってしまったと。

こうして表舞台に戻ることが叶ったのですから、今一度検討していただくことはなりませんか?」

鬱陶しい。司法高官は不快感を隠さず、この顔合わせをすぐにでも切り上げたい衝動に駆られる。

実際に有用な策であろうとも、この場で立てなければならぬイグマンドを前にして発言して良い内容ではない。

サマーセットを立つときには、マダナツクが重用されている、などという話は聞いていなかった。本当に、自分の知らないひとふた月のあいだに何が起こったのか。

苛立ちを抑えながらも現状把握に努めていると、眼前のマダナツクの様子がおかしい

ことに気付く。俯きぶつぶつと何か漏らし、体が小刻みに振るえている。尋常ならざる憤怒に支配されているようにも見えるが……。

司法高官が怪訝にしていると、顔を上げたマダナツクの表情は不気味に過ぎた。例えるなら、昏い怒りと陶酔を兼ね備えているような……。

相手の顔に注意を向けていると、腹に熱を感じる。恐る恐る視線を下げれば、自らの腹に映える短剣の柄らしき物。刺されたと理解するのに時間はかからなかった。そして短剣は拗られ、引き抜かれる。

マダナツクが「約束を違えるからだ！ フォースウォーンを侮辱するな！」と錯乱している。

そこへ先程の男が組み付き、マダナツク殿、お気を鎮めなさい！ と何か薬らしき物を飲ませている。だが司法高官にはもう、よく見えていない。失血と激痛によりその場に倒れ、単純に視点が低いのだ。

正氣に戻つたららしいマダナツクが何事が眩き、呆然としている。「何故、何が？ 私が、何を？」と。首長が衛兵隊にマダナツクを確保させようとするが、男が邪魔をする。場が一時膠着したところで、男がマダナツクへ耳打ちするように話しかけた。何故か、その言葉だけははつきり聞こえた。

「やってしまったな檻樓を纏う王よ。お前のせいでこのリーチは反サルモール勢力と

なつてしまった。不可解なフォースウォーン代表者の登用。使者の殺害。サルモールは、お前と首長府を無関係だとは思うまい。寧ろ総意として行動したと判断するだろう。

サルモールとの話し合いによつて自らの望みを叶えることもできたかもしれない。そんな未来もあつたかもしれない。

だがその芽を摘んだのは、お前だ。オンドルマル殿を殺したのは、お前だ。リーチを巻き込んだのは、お前だ。フォースウォーンを未来永劫日陰者にしてしまったのは、残念だがお前なのだ、マダナツク」

マダナツクはうめき声を上げながら、放心している。

ああ、なんとなく理解できた。自分はこの男に利用されたのだ、と。そして司法高官の目には、マダナツクもまた利用されただけの被害者に見えた。

リーチの都合で及ぶ凶行にしては、誰にとつても得が無い。おそらくはこの男の、リーチの外の都合による犯行。となれば、スカイリムで何事か企んでいる勢力がある。ストームクローク？ いやおそらく違う。一部から報告のあつたウィンターホールド？ わからない。しかしこれを本国に伝えなければ……。

オンドルマルの意識はそこで途絶えた。

この場で最も回復魔法に長けた人物は、件の男と井戸端会議をしている。常備してい

る回復薬では効果が薄い。オンドルマルの心臓は、静かに鼓動を止めた。

思いもよらない凶行により場は騒然としているが、マダナツクが更迭されることはない。フォースウォーンが排斥されることもない。

何故なら、ここにはそれを良しとしない男がいるからだ。この男が首を縦に振らない限り、首長でさえ何も思い通りにはできない。

首長はマルカルス事件によって市民の支持を失い、反対に男とマダナツクの発言力は先のシルバー・ブラッド家殺害の一件で高まっている。

マルカルス首長は、おそらく現在の五大都市において最も無力な首長に成り下がった。できることは、限りなく少ない。

自らの行動が理解できないマダナツクとは逆に自らの立場が理解できてしまうがために、首長イグマンドは、マダナツク同様、呆然としてしまうのであった。

「やはり呪術とこちらの魔術は併用できるようです。私の呪術、魅了を弱くかけて、そのうえから錯乱の呪文をかける。敵味方がある程度識別できる状態で、理性を飛ばし攻撃性を高める、そのような結果が得られるようですね」

「それはドゥーマーの絡繰には……」

「魂石を使用しているとはいえ、効果があるかは厳しいでしょう。元々、生物であっても魅了は効果の可否がある魔法なのです。例外があるとすれば、別個に核コアを持つセンチュリオンくらいでしょうか。それでも厳しいとは思いますが」

「だが可能性があるのなら、確かめねばなるまい。それにドゥーマー関連に効果が無くとも、ファルメルにはおそらく効くだろう。となればそちらの研究を進めることはできはず」

「なるほど。師の発想力には叶いませんな。では後日時間を作りますので、また遺跡探索行と洒落込みますか」

マルカルスを、リーチを、混乱の渦に叩き落した当人は、既に忘れ去ったかのように宮廷魔道士と談笑する。それを見て一人の盗賊が、北へ送る手紙を出すために走った。

閑話、ブレックスの憂鬱

「と、以上がマルカルスからの手紙です。いやあ、あの大将。随分と派手にやらかしたもんですね。『スマートさ』の欠片も無いあたり、らしいっちゃらしいですが」

ウインターホールド相談役の屋敷にて、マルカルスより届いた手紙を、主の右腕が読み上げていた。

少々ひょうげた様子のハンに対し、ブレックスは真面目ぶった表情で返す。

「それでもねえだろ。言ってみりゃ、今回の件は『どう政変を起こすか』っつー話だったわけだ。

俺の想定じゃあ、シルバー・ブラッド家を利で釣り引き入れ、市警隊を排除するために一芝居打つて算段だった。どうしたってあの業突張り共に舵取りを任せられねえ以上、どつかで艇てい入れは必要だ。

そして市警隊は市民の恨みを買すぎた。だから全部の責を市警隊におつ被せて切り捨て、入れ替わるようにこつちの手の者を入れる。シルバー・ブラッド家からすりゃあ多少窮屈になるだろうが、それ以上の利を示してやればいい。ギルド経由の裏取引は銀細工師と錬金術師が引き受けてるしな。俺達が密かに別ルートを用意してやれば、あ

る程度は目を瞑るはずだ。

が、奴は大々的にことを起こして別の輩にその任を押し付けた。排除するのが市警隊のみならずその元締めまでつつーんだから、一芝居の規模はそらデカくなるわな。

だが結果だけ見てみりゃあ、上は首長から下は市民まで脅しつけた形になつてゐるからな。相当好き勝手できるぜ。偉大なりは非常識の賜物つてな」

ハン自身、今回の顛末が悪いものだとは考えていながつたが、それ以上に頭目であるブレックスの機嫌は悪くない。

実状とは違つていても何故か問題ばかり起こすという印象の拭えない男が、多少騒ぎを大きくしながらも当初の目的を完遂してみせた。それ自体は素晴らしい。

特に、一人でことを成した、という点が最も素晴らしい。

これまでは自分達の指示の下でしかその非常識極まりない力を振るえなかつた。言つてみれば、男は極めて使い勝手の悪い呪いの武器のような扱いであつたのだ。それが、自ら考え協力者をうまく使い、ことを治めて見せた。

これはつまり、『ことを成すのに使える駒』という意味での戦力に換算する際、その多寡があやふやであつた男のそれに、ある程度の目星をつけられたことを意味する。

これまでは『荒事あらしごと以外では使い所と使い道を吟味しなくてはならなかつた』ものが、『いっぱし程度いっぱしの人員に非常識な戦闘力を丸々加算したもの』だと勘定できるように

なつたという話だ。

駒は駒でも、紛れもない大駒である。仕事を任せる際の男への信用が高まつただけでなく、計画を練るうえでの戦力配分に格段の余裕ができた。

ブレックス一味の戦力は決して潤沢ではない。

ウィンターホールド復興の陰でダークエルフを中心に脛に傷を持つ者を集めては鍛えているが、それでもギルドと比べれば、絶対数に雲泥の差がある。

だからこそ、頭目も副頭目もスカイリム各地へ飛ばす戦力配置については常に頭を悩ませていた。だが、これからは一味の者の動かし方に大きな自由度が加わることになる。何せ単体最大戦力である件の男は、転移までできるのだ。笑いが止まらないとはこのこと。

それにしても、やりすぎではないか、という懸念はつきまとう。

「とはいえ、大将のやり方で大丈夫なんでしょうか。市民には罪悪感を植え付け、首長やまともな衛兵隊はその圧倒的な力で黙らせる。フォースウォーンの親玉は今は腑抜けているようですが。」

市民はまだしも、首長や衛兵隊がいつまでも大人しくしとると思えません。帝国軍の介入を望み、フォースウォーンと大将の排斥を狙うんじゃないか？

フォースウォーンにしたって、親玉もいつまでも腑抜けてるわけじゃないでしょ

う。寧ろ立ち直ったとき、その目には復讐の炎が轟々と燃え盛つていても不思議じゃありません。それは禍根になるのでは？」

「だからこそその『司法高官殺し』だろうな。首長達が帝国軍を頼ろうとしても、既に現地入りしたウチの連中が『マルカルスは親ウインタールホルドである』と喧伝している頃だろうよ。それを聞いてサルモールのお歴々はどう思うかね。

被害者を装つて二枚舌外交を仕掛けて来ていると考えるか。それとも眞実、首長は被害者だと考えるか。俺なら前者の想定で動くな。後者だとしたら、外から見た場合、あまりに間抜け過ぎる。実状にや多分に同情の余地があつても、な。

間抜けや馬鹿と外交をするのは単純に疲れるんだよ。だからサルモールの連中は自然と自分達の土俵で考えたがる。つまり、どっち道、リーチ首長に未来はねえ。

首長が動かねえなら、衛兵隊も動けねえ。勝手に動いちゃえば、それは反乱クーデター扱いだろうが。折角あの野郎が正義正義と喧しく吹いたんだ。どんな大義を掲げてても、反乱じゃあ市民はついてこねえよ。自分達の行いが悪だったことになるからな。大体、勝手をすればそれこそ市警隊と同じ穴の貉だ。真面目な奴ほど身動きが取れなくなるだろうぜ。

ついでに、ギルド協力者の爺様も取り込んだんだろ？ なおのこと動けねえよ。

仮に邪魔に思つて排除したくなつてもよ、爺様が市警隊討伐に助力したことは喧伝するよう言つてあるからな。これを取り除くことは、あの非常識野郎と、自分が守るべき

市民をいっぺんに相手取るってことだ。あり得ねえな。寧ろトントン拍子にどん詰まりまで追い込まれた首長閣下の、精神的手当てが必要かもしれん」

なるほど、とハンは相槌を打つ。では、フォースウォーンについては？

「あの蛮族どもには、目溢しが必要かもしれねえな。それこそ、西や南の国境近くにある山岳地帯はフォースウォーンのものとして割譲してもいいかもしれん。それを広く知らしめられるかは、そのときの状況次第だな。」

場合によつては『事実上の』ってことになるかもしれん。

なんにせよそのくらいの餉が無けりや、話を聞く限りマダナツクとかいう親玉は抑えるのは厳しいかもしれんな。腐つても王様ってことだろう」

それはつまり、マルカルスに放つたあの非常識人が下手を打った、ということなので、
は？

顔にも口にも出して尋ねてみると、弁護の言が返される。

「あんまアレを庇うのも癪しやくに障るがな。報告を聞く限り、親玉があ野郎を出し抜いて要らんことを画策していた可能性は高い。それを掣肘しておくのは正しい。

やり方が遺恨を残しそうなのは……。多分、経験則からだろうな。奴の場合、殺して終い、つて場合がほとんどだったはずだ。心を折るのは憂さ晴らし程度の余興だな。つまりはどうせ殺す。絶望の中で息絶えるものことなんざ考える必要はねえんだから、

そのあとへの配慮だなんてあるわきゃねえわな。

あつたとしても……俺達がいればなんとかなる、くらいに考えてたかもな。奴は俺達のことを素で『できないことは無い』と考えている節があるからな」

「それはまた光栄な評価ですな。便利屋扱いされてる気もしますが、あの大将のこと、裏表無しに本気でそう思つてそうなのが憎めなくて嫌でさあ」

愚痴を吐くハンに対し、ブレックスは「あれで存外『たらし』だからな」と苦笑した表情をみせる。

そうだ。自分を含めて一味全員、あの非常識人を仲間として受け入れつつある。

まだ完全とは言えない。ブレックス一味同士の結束をあの男に感じているかと言えどそうではない。致命的な失態を犯した場合、頭目が救助を言い渡さなければ見捨てるだろう。

それでも、既に十年近い付き合いがあるのだ。それだけのあいだ同じ陣営として苦楽を共にすれば、人として当然の同族意識くらいは芽生えるというもの。今はギルドに身をおいている若者のこともあることだし。

なるほど。「たらし」とは悔しいが事実なのかもしれない。何のかんの不満を漏らしながらも、自分達はあの非常識人が好きなのだ。

副頭目ハンが複雑な内心に思いを馳せていると、頭目ブレックスが話題を帰るように別の報告書を取り出す。

『日課』だのほぎきやがったときはどうなることかと思つたがよ、マルカルの一件が長引かなくて助かつたぜ。おかげで相談役様のお仕事に集中できるつてもんだ」

ウインタールールド相談役。つまりは真つ当な外交問題ということだろう。

ハン自身の耳にも入っているのは主に四つ。

一つ目は、最も近い都市であるウインドヘルムとの折衝。

二つ目は、二番目に近いソリチュード、またはそこに駐留する帝国軍からのあからさまな反サルモール姿勢についての抗議。

三つ目は、スカイリム北西部にあるサルモール大使館から送られてくる同様の抗議。並びに魔法大学特派員駐留拒否への抗議。

四つ目は、カジート商隊、アルゴニアン船団との交易交渉。

町の復興の指揮を取るだけでも手が足りないというのに、首長や執政がお飾りである以上、その舵取りは相談役たるブレックスが行わなくてはならない。無法者である盗賊一味が町の上層部を乗っ取つたのだから、ある意味、自ら背負い込んだ苦勞である。

「ウルフリックには今までどおりの具合でいいだろう。のらりくらり。『仲良くやっていきましよう』だ。」

マルカルスの方が耳に入れば矢のような催促が雨霰と飛んで来るだろうが、それまでは意識させないためにも放置でいい。目眩ましも効いてるようだしな」

「サルモール大使館襲撃未遂偽装作戦。我ながら上首尾に指揮を取れたと自負しとります」

「仕方ねえから褒めてやるよ。見事だった。

おかげでブルーパレスもドール城も大使館も、みんな揃ってウルフリックに釘付けだし、当のウルフリックもそれを回避しようと躍起になつてら。おまけに奴は足元を見直す手間まで増えた。

勿論俺達も疑われてるだろうが、時間稼ぎには丁度いい塩梅だぜ」

「真犯人が上がらん状態での無実の証明つてのは、まず不可能ですからね。弱小ウインタールールドとしては、強豪ストームクロークにや暫く足踏みしてほしいもんです」

ブレックスとハンが画策して行ったのは、ある一点を除いて何から何まで作られた芝居だ。唯一本物なのは、死んだサルモール警備隊だけである。

まず、ウインタールールド衛兵隊が捕縛した山賊の中からノルドを選び、裏ルートで入手したイーストマーチ衛兵隊の鎧を着せ、その状態で拘束しておく。

そして同じく鎧を着込んだ盗賊たちが、さも『襲撃を計画していたところを警備隊に

発見されてしまった』という体を装い戦闘に入る。このとき、見つかる場所は、警備隊の巡回ルートのうち最も大使館から遠くに設定する。そして、詰問から戦闘に移れば、不自然でない程度に大使館から離れるよう動く。

最終的には潜んでいた人員も合わせて警備隊を素早く塵殺したのち、隠していた山賊達に戦傷を負わせて殺害し、現場に放置する。この工作のため応援が駆け付けるまでの時間が必要であり、そのため大使館からの距離だ。

残るのは、両者共倒れになったのであろうサルモール大使館警備隊と、『イーストマーチ衛兵隊の鎧を来たノルド』だけだ。

この件で真つ先に疑われるのは、言うまでもなくストームクローク軍である。

まだ戦力が整わず世論も成熟していないこの時期に動くほどウルフリック・ストームクロークという男は馬鹿ではないが、『血気に逸った末端が先走ってしまった』という話なら、ウルフリック自身、無いとは言い切れない。

そのことが事の真偽を余計不確かなものにしてしまう上に、これも当然の如く考えられる事態として、『サルモールに打撃を与えつつ、その罪はストームクロークに被せたい何者か』や『今以上にサルモールや帝国軍とストームクロークの仲を険悪したい何者か』の存在も考えられる。

寧ろ、馬鹿正直にイーストマーチ衛兵隊の鎧を着込んでいる実行犯を見せられて、陰

謀めたものを考えないもののほうが少ないだろう。

しかし先述のとおり、ウルフリックでさえ身の潔白を証明するのが困難と来ている。ストームクローク軍は、まだ帝国軍やサルモールと戦うには戦力が足りないが、しかし組織としては一地方の警備隊の枠に収まらない勢力であることも確かなのだ。

そうなれば、「政治的立場から思うように動けない敬愛する主君の代わりに、『真の忠義』を示すために独断専行が必要だ」と考える確信犯が出ないとも限らないのだ。そしてその大馬鹿者に賛同者が居た場合、事件が解明されることはないだろう。

数は力、とは心理ではあるが、己個人の力が及ばないほど大きくなった軍に対し、ウルフリックは歯痒い思いをしていた。

更に言えば、誰もがウルフリックを真犯人とは疑わないであろう状況を見越し、裏をかいて真にウルフリックが指示した可能性も否定できない。

その場合、サルモール大使館への襲撃そのものという政治的衝撃より、何らかの情報を得ようと企むなどの秘密工作であった線が濃厚になる。

もしくは、何者かに罪を被せる自信があるが故にことを起こし、サルモールへの打撃よりほかの者の足を引っ張ることを優先した、という話も無くはない。

考え始めればいくつも可能性は浮かんで来るため、決定的な物証が無ければ、真犯人を特定することはまず不可能である。そしてそのような物証を残すハンではない。

盜賊二人の言う「目眩まし」によつて、誰も彼もが疑心暗鬼に陥っている。

わざわざ「疑つてください」と言わんばかりの仕掛イーストマーチの館けを施し実行に移したことは、ウィンターホールドに何より必要な『時間』という黄金に勝る宝を齎していた。

更に言えば、この芝居は二つ目三つ目の外交問題にも関わってくる。

どれだけ陰謀の存在を考えようが、これらは「先に疑つた者が負け」という側面がある。外交の席で証拠も無く陰謀を指摘するなど、相手に追求の口実を与えるだけの下策も下策だからである。

もしそれが成り立つ場合があるのなら、始めから不仲であることをお互いが承知しており、相手を怒らせることで隙を見出そうとするか、あえて隙を曝して油断を誘おうとするか、などであるが……。

いずれにせよ、サルモール以外とは基本的に友好関係を築く方針のウィンターホールドにとっては、なかなか起こり得ない駆け引きだということだ。

そして、ブルーパレスに居を構える上級王は、基本的にスカイリムの融和を考えている。

同じくソリチュードのドール城に本部を置く帝国軍も、北の地での無用な騒動は避けたいとの考えだ。だからこそ、上級王と帝国軍は協調して動くことができている。

そんな両者が、確証も無しにウルフリック率いるストームクローク軍を非難したり、ウインターホールドに難癖をつけることはまずない。

が、少々事情がことなるのがサルモールという勢力だ。

サマーセット諸島に本拠を置き、先の大戦では帝国と痛み分けにまで持っていた、ハイエルフを中心とした者達。

気が早い者などは、タイバー・セプティム以来続いてきたタムリエルでの帝国の覇権に終わりを告げた、と喧伝して憚らない。

それは完全に間違いではない。事実、名目上とはいえ比べ物にならない国力差の帝国に真正面から喧嘩を売り、引き分けたのだ。帝国からすれば、敗北と言っても過言ではない。

しかしその代償は、サルモール側もそれなりに払う必要があった。

戦力の大半を失う羽目になってしまったし、ハンマーフェルのレッドガード達による根強い抵抗は予想外であった。

それ以外は概ねサルモールの思うとおりに推移しているが、無視していい損害ではない。

そんなサルモールであるから、帝国内にある不和の種は多ければ多いほうが望まし

い。

タロス崇拜に関しては己等の沽券に関わる問題であるから譲れないとしても、それ以外で北の果てであるスカイリムで諍いいさかを起す利点は、本来、無い。

しかしこれが、先の大戦時における帝国軍の主力一派となれば大きく話は変わる。

タムリエル東部ではアルゴニアンが勢力を伸ばしている。南はサルモールが手懐けた。だからこそ、帝国何するものぞ、と兵を挙げたのだ。

だが実際にはどうだ。雪と砂漠。二つの厳しい環境に身を置く戦士達によつて、サルモールは苦戦を強いられた。その結果の白金協定。忌々しいどころの騒ぎではない。

サルモールからすれば、両者の士気の高さも計算外であつた。前者であるスカイリム戦士の奮戦は特に。

ただでさえ南からの侵攻であつたのだ。北部の人間からすれば手伝い戦もいところ。士気など上がりようもない。皇帝を排出したことで、タイバー・セプティムからほど近い時期での話なのだ。既にスカイリムと帝国は別個、という意識ができ上がつていても不思議とも思わない。

それがどういふわけか。一時的に帝国軍に編入されることも受け入れ、自らの故郷を踏み荒らされている帝国軍本隊と戦列を競うように前進し、屈強な肉体を以てハイエルフの戦士達を次々に屠つていくではないか。

ある意味、白金協定はスカイリム、ハンマーフェル戦士団の成した偉業だとも言える。だからこそ、ハンマーフェルと違い帝国に比較的従順な姿勢を見せ付け入る隙のあるスカイリムには、干渉を強めなければならない。

サルモール首脳部はそのように判断したのだ。

尤も、スカイリム住民の奮戦が愛国心のみならず、ただ単純に大規模戦闘に飢えていただけ、という側面があるとはサルモールも知らない。北の住民がそこまで蛮族めいているとは、文明的なサマーセットのハイエルフには、少々信じ難い話であるのだ。

閑話休題。

いずれにせよ、スカイリムへの工作活動に余念の無いサルモールとしては、今回の一件を内々に済ませてやるつもりはない。

最低でも大使館へ駐在させる兵の増員は認めさせねばならないし、スカイリム政財界への更なる進出もこれを機に進めたい。

シロディールに比べれば粗野だとはいえ、スカイリムとて帝国の経済圏の内にある。経済的に依存させることが叶えば、戦闘馬鹿共を戦場へ来させないまま下すことも可能であろう。

更に、今は『反サルモール派』筆頭としてストームクローク軍という存在がいるのだ。これと対立する姿勢を維持するだけでも帝国は双方へ気を配らねばならず、その分だけ

帝国の国力は落ちる。サルモールに損は何一つ無い。

ウインターホールド大学への特派員の件としてねじ込めないか、という意見も出たが、ある意味新興勢力とも言える復興中の古豪を叩くより、東の首長を叩いたほうが効果は大きいと判断された。

そう。サルモールからしてみれば、大学への件もあるのだ。

帝国やソリチュードにも働きかけて、かの魔術師ギルドへは通達を出している。しかしウインターホールド相談役は大学のアークメイジと結託し、「大学は独立独歩を征くもの。帝国の下部組織でもなければ上級王の子飼でもない」との声明が出された。

それほどまでに見せたくない何かを研究しているのか、ただサルモールの人員を受け入れたくないだけなのか。

件の大学に人種的偏見は見られないとか。ならば頭ごなしに攻めるよりは、業腹でも教えを請う姿勢を見せれば存外簡単に受け入れられるのではないだろうか。

サルモール首脳部がそう考えるあいだ、件のアークメイジは一人の男に魔法の実践を強請っていた。「ソウル系魔術による結晶化事故など起こさよと言おうらうに。そも、あの結晶化はソウル系魔術の粋とも呼べる技術と意志を以て意図的に引き起こされる現象じゃろう？ ならば儂等がそれをする理由は無い。主はとつとと実演して見せれ

ば良いのだ。それとも何か。儂等がそんな馬鹿な失敗をしでかしそうな阿呆に見える
と？ いや確かに結晶化の経緯を辿るのは興味深いとは思うぞ。おそらくは人の身に
耐えられぬというだけであつて、もつと強力な肉体と精神を持つ生物であれば、その結
晶は身を守る盾となり敵を討つ矛となるのだらう。研究してみたいというのは悔しい
が認めよう。だがそれをしては主が魔術を見せぬと言うのであれば、流石に我慢する程
度の分別は持ち合わせておる。大体お主な。儂が杖の制作とサルモール相手の折衝に
どれだけ骨を折つておると思うのだ。主の魔術見たさにだぞ。これでうま味がないと
もなれば、儂はお主よりサルモールに付くからの。連中とて魔術は得意なんじゃ。儂の
知らぬ秘術の一つや二つ持ち合わせが……。おお、そうか見せてくれるか。それならば
最初からけちけちせずには領いておれば良いのだ。では早う早う……。何と！ 光線が触
れた箇所から結晶化が！ 武器に付呪することもできるのか!?! これは霧!?! いやし
かし本質的には結晶塊と同じ生命を変質させ死に至らしめる力が……。……………」

配下の者から受けた報告は次のようである。「大学はいつもどおり平和そうでした」。
それを聞いたブレックスは、まだしばらく駐在員の件は後回しにできると判断した。

となればブレックスが頭を悩ませるのは、寧ろ好意的と言つても過言ではないカジ
トとアルゴニアンの商隊について、である。

アルゴニアンの無茶振りはまだいい。整備中の港を大規模化してほしだの、大学の魔術の力でどうか密貿易ができるよう取り計らってほしだの。

ブレックスはこれを文化の違いからくる齟齬だとは考えていない。アルゴニアンとスカイリムにいけないわけではないのだ。そして、自分達と同じようにものを考える。そのうえで言うのであれば、それは言葉どおり以外の意味を考えるべきである。

例えば、ウィンターホールドがどの程度、難しい要求に応えることができるのか、という試しの儀であつたり。

無い話ではない。魂石の発掘隊が組織されたときも、アルゴニアン達はそのような要求をブレックス達に突きつけた。魂縛の術を極めた男がいたため事なきを得たが、これはそれと似たような話であろう。

相手がどの程度の力を持っているか。多少の信用を落とすことになつたとしても、確かめずにはいられないのだ。

普通、信用こそが商取引には最も大切だと考えるノルドやインペリアルとはやや相容れない考え方であるが、船を用いた商いは損害が馬鹿にならないため、やむを得ないところもある。

とはいえ相手の腹積もりがある程度把握できているのであれば、あとは熟すだけである。ウィンターホールドが侮られないため、またこの先の取引が滞り無く行われるため

にも、やってやらなければならぬだろう。

カジートからも同様の要求が為されているが、こちらは純粹に石橋を叩くつもりなのだろう。

カジートはスカイリムにおいて、常に迫害されてきた。余所者が受け入れられること自体が稀なのはどこも同じであるが、スカイリムの悪い意味で変わらない思想や思考は、カジート達にとつて害悪でしかなかつた。

だから試す。臆病さ故に。身を守る必要があるために。目の前の相手がどの程度信用できるのか、慎重に慎重に、推し量るのだ。

アルゴニアンの試しとは違い、こちらは極論、相手の気が済むまで付き合つてやらねばならない。文化的側面と心情的側面が双方存在している。だが、やるしかないのだろう。

男の掲げる『サルモール撲滅』に際しては、エルスウエアからの侵攻が予定されている。アルゴニアンと手切れになつても最悪収益が減るだけで済むが、カジート達の信用、いや信頼を得ることは必須条件なのだ。

だからこそ、ブレックスはカジート達の言う無理難題に可能な限り付き合う。

たとえそれが『拡張した町の一部に、カジート街を用意してほしい。居住区であると同時にスカイリムでの隊商取引の拠点にしたいので、倉庫や道の整備などにも気を配つ

てほしい』などという町の復興計画を洗い直さなくてはならないようなことであつても、ブレックスは向き合う。

男からはそつと、胃薬と滋養強壯に効果のある薬を差し入れられている。氣遣いは有り難いものだったが、自分がそこまで疲れているように見えるのか、と悔しくもあつたので、男の脛に蹴りを入れることは忘れなかつた。

ここへ、住民からの嘆願。首長会議ムト擬きの調整。衛兵隊の組織改革、杖を含めた装備一新。それに男の手伝いではなく自らの本懐である復讐への布石などが重なり、ブレックスの毎日は殺人的に予定が詰め込まれている。

しかしこれを片付けていかなくは、自分の望みも友人の望みも叶わない。友人は信頼に伝えてくれた。ならば今度は己の番だ。やるしかない。

ブレックスは今日も滋養強壯の薬瓶を空け、政務に挑む。

閑話、ボーイ・ミーツ・ガール・イン・フラゴン

男がマルカルスで騒動を起こし、ブレックスが文字どおり忙殺されつつあるなか、盗賊ギルドでもひとつの騒動が起きていた。

いや、騒動と呼ぶには少々面映ゆく、しかし呼ばぬには少々険が立っている。

きつかけは鳴り物入りで加入したラーナルクの存在だ。

ラーナルクは、自分の存在が何かしらの問題を引き起こすことを覚悟していた。

それはそうだろう。ラーナルクの養父である男は、ギルドマスターであるメルセル・フレイと犬猿の仲であり、協力者となつてからも書状でしかやり取りをしていない。上層部や事情通であれば、自然と耳に入ることだ。

ギルド幹部のブリニオルフが件の男の友人であり、ギルドメンバーの少なくない者達が男の付き人として長いときを共に過ごしているため、ある程度は同情的である。しかしそれはそれ。気難しいマスターの怒りの炎にわざわざ薪を焚べたいかと言われれば、否である。

だからラーナルクも、初めの頃は顔馴染と行動してなるべく目立たないよう気をつけるつもりでいたし、どうしても避けられない勝負事に巻き込まれたときには、舐められないためにも全力で相手をするつもりでいた。

ここで新入りらしく殊勝な態度を見せるといふのは、今まで稽古を付けてくれたブレックス一味の沽券に関わる話であるし、何より「お父さん」の顔に泥を塗ることになる。暫定仇であるメルセル・フレイがいる場所で、そんな無様は見せられない。

男やブレックスからは無闇に油断を誘う真似をしなくていい、と言われている。騙し合いにかけて右にでる者はいないギルドマスターである。ラーナルクが自らを『与し易し』と偽ったとて、かえって怪しまれるだけだ。

それに、ラーナルク自身が快適な居場所を手に入れるためにも、ある程度の腕前は見せておく必要がある、と判断したのだ。個々人の腕前を頼りに生きている無頼の集団にあつて、未熟者だと侮られることは、利より害のほうが圧倒的に大きい。

そして、予想どおり挑戦者は現れた。想像していたような軽口を叩き、如何にも面白い挑発をし、煽る。

ただ予想と違っていたのは、それがメルセルの子飼らしき人物ではなく、ギルドに入つて日が浅い女盗賊であつたことであろうか。名を、ヴェックスと言つた。

「坊っちゃん？ 坊っちゃんだつて？ 嘘だろ冗談だつて言つてくれ。ここは首長閣下

やブラック・ブライアのご子息がいらつしやる場所じゃございませんことよ。お、わ、か、り。ですかあ？

それともマジで良家のお坊つちやまが社会見学に来たつてんなら、身の程つてもんをわからせてやるからさ。ちよつと揉まれていきなよ。そうすりや二度と足を踏み入れようだなんて馬鹿な考えを抱かずにすむつてもんさ」

「残念だけれど、この盗賊ギルドつて場所は君が思っているより懐が深いみたいでね。僕みたいな育ちの人間でも受け入れてくれるみたいなんだ。

僕の父は首長の下で私兵をしているから、僕は良家の子息で間違いではないと思う。でも、戦士じゃない盗賊の道つてのも体験してみたくつてここにきたから、君の言う社会見学も満更間違いでもないんだ。

それでもマスター・フレイは許可してくれたんだから、本当に感謝の念でいっばいだよ」

ギルドに着く前にブリニョルフがラーナルクに授けた教えの一つ。「売られた喧嘩は値切らず買え」。

自分でも安い挑発だと理解していたヴェックスも、それをそのまま返されたとあつたなら、今度は挑発されているのは自分のほうである。

自ら吹つけた喧嘩をそっくりそのまま返された。伊達で売っている盗賊が、衆目の

前で恥をかかされて黙っていられるわけがない。

すぐさま両の拳を顔の高さまで構えて「顔をパンパンに腫らせてやる！」と殴りかかった。

牽制の左。右。左。不意の下段蹴りで意識を下に下げて、同じ足で上段。

全て防がれたが、距離が近づいたところで、もつれ込むように肘を側頭部へ見舞う。躲されても組技に移行できる。

………ヴェックスに油断が無かったかと言われれば、あつた。しかし、していなくとも、防げなかつただろう。

ヴェックスの肘の内側を蛇のように腕がくねりうなじを掴む。そこを起点に、ラーナルクは両の脛をまとめて蹴り上げ、自らの体も宙に寝かせるような姿勢を取る。

首を押さええられ、足を蹴手繰られ、上から重量物が落ちてくる少女はどうなるのか。俯せに潰れるしかないのだ。

ヴェックスはあまりの速さに何が起こったのかわからなかつた。それもそのはずだ。生半な速度ではそもそも成立しない技であるし、身につけるにも何度となく血に塗れる必要がある。

腰の上に座ったラーナルクから「まだやる？」と問われて、ヴェックスは余計に頭へ血が登つた。

胸のベルトに差している短剣を抜きながら、体のバネでラーナルクを弾き落とす。

しかし短剣での決闘は徒手でのそれより更に散々だった。『万が一』があつてはいないと集中力を高めたラーナルクにより、一合目から短剣を絡め取られ、そのまま手首を極められて床に押し倒される。

悔しかった。自らを『ボンボン』だと認めるような少年に遅れを取ることが、どうしても許せなかった。

自分はシロデイルの地獄を、たった一人生き抜いて来たんだ。そんじよそこらの『甘ちゃん』とは違うんだ。

そういつた反骨心こそが、ヴェックスの活力や向上心の大部分を占めていた。それが今、一人の少年の出現により、揺らいでいる。

実際には、この少年も世にも厳しい道を歩まざるを得ない星の下に生まれて来たのだが、それを少女が、今、知ることはない。

怒りが収まらないヴェックスは、ラーナルクに片っ端から勝負を挑んだ。

「ここは盗賊ギルドだぜ。パパに鍛えられた腕自慢かもしれないけどな、格闘術だけでやっていけるほど甘くはないんだよ。手も足も出ない距離から投げナイフで仕留められりゃ、それで御の字なのさ」

「いいよ、投擲術も得意だ」

飄々と勝負を受けるボンボンの言い草に再び激高しかけるが、今の自分は挑戦者だ。今に見てろとひとまず自らを抑える。

結果は、的に刺さった短剣だけを見るなら引き分け。野次馬の反応を見るならヴェックスの惨敗であった。

ラーナルクは始めヴェックスと同じように姿勢を正して投げていたが、遊び心が首をもたげたのか、素早く伏せて投げる、後転して投げる、宙で体を寝かせたまま回転しながら投げる、とバリエーション豊かに投擲を披露してみせた。

それでいて的に刺さる短剣の位置はヴェックスと互角だと言うのだから、野次馬共が沸くのも無理はない。

「ざけんな！ 投擲術なんて徒手格闘並みに緊急手段なんだよ。遠距離で敵を仕留めようとするれば、普通は弓を使うもんだ。戦士のパパは弓のお稽古もつけてくれたんだろう？」

「うん。ここ数年、食卓に上る肉の調達は僕の仕事だったから」

この新入りはまだ小馬鹿にした態度を止めないのか、とヴェックスはひたすら腹が立つ。

指先の繊細な力加減が必要な弓術は、ヴェックスにとつても得意分野である。なんなら、投擲術よりもずっと。今度こそ、生意気な『クソツタレ』の鼻をあかせてやれると弓を構える。

……だが残念ながら、少女の思い描くとおりににはならなかった。

端的にいえば、投げナイフでの勝負を弓に置き換えただけ、という有様だったのだ。的に当たっている矢は概ね直角。しかしそれを射る姿勢が全く違った。

数射ほど射って肩の調子を確かめたラーナルクは、一回転して射る。半回転して弓手を変えて射る。大きく跳ねて股下から覗き込むようにして射る。両足をしっかりと踏ん張って、ひたすら速射でいる。その際には、先的に刺さった矢を弾き飛ばす有様でさえあった。

ちなみに、投げナイフでも弓でも見せた曲芸地味な動きは、全てウインターホールドの地にて酔った盗賊共が秘蔵っ子の気を引きたいがために見せた、文字どおりの曲芸である。見ただけでものにしてしまったのは、皆にとつての誤算である。

「戦士のパパから戦う術を叩き込まれてんのはわかったださ。でもここは盗賊ギルド。闇に生きる連中の集まる場所だ。陰に潜み陰を往く。隠密術と、相手の持ち物を知る術が心許ないってんじゃないぜ」

「陰働きは少し自信がないなあ。それはそうと君、めげないね」

戦闘術ほど結果が目に見えてわかりやすくはないため、簡単にルールを決めることになつた。

まず野次馬共を適当な位置に立たせ、腰に布を巻かせる。その左側に墨で印を付けたら、ヴェックスに加点。右側に付けたら、ラーナルクに加点。

そしてそのまま、スリを成功させれば更に加点。加点の度合いは品の価値による。失敗しても減点は無し。但し、周りに聞こえる声で十数えるあいだ手首を掴まれたままである。時間的なロスも生じるし、注意が向くため即座に隠密行為へ移ることも難しくなる。

こればかりはラーナルクの独壇場とはいかなかつた。

ラーナルクとて隠術は得意だ。そのため腰の布に印を付けることはできる。また、腰のポケットに忍ばせた金貨を数枚スリ取ることはできた。しかし懐に忍ばせた金細工に手を伸ばした途端、勘付かれて手首を抑えられた。

数回は成功させることもできたが、バツによる時間のロスは、元々短時間の勝負において痛手と言えるものであつた。

その点、ヴェックスは年季が違う。スリを成功させられる相手かを見極め、厳しいと思えば印をつけるだけに留めた。行ける、と判断しても無理をせず、高価な品には手を

出さなかった。ここにいるのは腕利きの盗賊達なのだ。眠りこけているのならまだしも、後ろに立ったくらいで貴重品を盗めるのなら世話はない。

結果は概ね引き分け。厳密に採点するならヴェックスの勝利であるが、今日ギルドへ来たばかりの新入りが相手だということを加味して引き分け、ということになった。

「あたしも女だ。泣いても笑っても次で最後にする。それでケリだ。文句はつけないよ。ギルドの修練場に、それ用の宝箱がある。そいつを難度の低い物から解錠していつて、制限時間が終了した段階でより進めていたほうの勝ちだ。同程度の宝箱まで進めていたのなら、より解錠の勘所に近い場所を探れていたほうの勝ちにする。だから終わってもピックはそのまま動かすんじゃないよ」

「わかった。これに関しては本当に自信が無いから、素直に胸を借りるつもりでがんばるよ」

結果は……ヴェックスの圧勝であった。

「ほら見たことかこのクソボンが!! アタシに楯突こうなんざ十年早いんだよ! わかったら『姐さん』と呼んでしばらくはアタシの使いつ走りをするんだね!!!」

「勝った途端、すぐく元気になるね、姐さん」

ラーナルクの手先は人並み外れて器用だ。素人でも空けられる錠など簡単に突破し、

見習い級も同様。精鋭級で僅かに躓いたが解錠せしめた。問題は熟練者級の鍵だった。

解錠にあたっての『当たり』の箇所の手応え自体が微細であることに併せて、ダミーの手応えが複数箇所用意されていたのだ。熟練者級の錠がそんなことになっているとはそもそもしらなかつたラーナルクは、そこで躓き、数十本のピックを折った。

そのあいだに、ヴェックスは熟練者級の鍵を突破し、多少時間をかけつつも達人級の鍵まで解錠してみせた。誰がどうみても、ヴェックスの勝利だった。

再び野次馬が沸く。元々ギルドの面々は、ラーナルクの味方でもヴェックスの味方でもない。強いて言うなら、ギルドの次代の担う若い世代二人の味方だ。どちらが勝っても称賛する。

格闘術ではいいところがなく、隠術やスリの勝負でも引き分けだったヴェックスが、持ち前の才能を活かした解錠の勝負では勝ちをもぎ取った。なかなか熱い展開である。

ヴェックス！ ヴェックス！ とコールが響き盛り上がる。そこへ。

「その新入りには色々と経験を積ませようと思っっている。『姐さん』呼びはまだしも、使いつわりは我慢しろヴェックス」

場の空気を冷めさせることに定評のあるメルセル・フレイが姿を現した。野次馬の幾人かは、騒ぎすぎた罰を与えられるのではないかと怯えている。

「ラーナルクと言ったな。君の父上には世話になっている。この場で礼を言わせてく

れ。

それに君の……。いや、ギルドの一員になったからには遠慮はかえって壁を作るだけだな。お前の腕試しはするつもりだったんだ。ヴェックスとの力比べになったのは予想外だったが、陰ながら見せてもらった。なかなかいい腕だ。やや戦闘術に技量が偏っているようだが、ここで過ごすうちに盗賊としての業も身につくだろう。それだけの下地はあるように見えた。

そういうわけだ。よろしくな、有望な新人くん」

場に安堵の空気が流れる。若人達の勝負と称していい大人達が囁し立て馬鹿騒ぎしたことは不問になるようだ。

「ああ、言い忘れていた」

再び空気が冷める。

「ラーナルクはただの新入りじゃない。長い付き合いの者もいるだろう。そして、先述のとおりギルドはお父君に大きな借りがある。

というわけで、だ。誰か酒を買ってこい。蜂蜜酒でもワインでもエールでも構わん。飯もだ。材料も忘れるな。この人数で騒ぎ出したら、食べながら作らなければ足りなくなるぞ」

それだけ言い残して、今度こそメルセルはその場をあとにする。

お許しが出たことを理解してワツと場が盛り上がるが、「あのメルセルが？」と訝しむ者も少なくなっている。

ともかくにも、こうしてラーナルクは盗賊ギルドに受け入れられた。狙ったわけではないが、一悶着起こしたことで受け入れやすい空気を作ったヴェックスの手柄とも言える。本人に言えば脛を蹴られることであろうが。

「そうだ。腕試しはさっきの解錠勝負で最後だけだね。アタシ等の勝負は終わっちゃいないよ」

ラーナルクの顔には「嘘でしょ」と書いてるように見える。もしくは「しつこい」か。「この世の何処かに、『バレンシアの王冠』って秘宝があるらしいんだ。でもこいつに嵌め込むための『珍しい石』がこのスカイリムの何処かに二十四もあるって話じゃないか。それを、アタシとアンタで完成させるんだよ。」

先に完成させたほうの勝ち。同着なら、石を多く集めたほうの勝ち。どうだい？ これに勝てたなら、『姐さん』呼びも勘弁してやるよ」

「あ、それなら僕、一つ持つてるよ。ウインターホールドにいたとき手に入れた」
「何だって!?!」

宴の準備を進めつつ若人を眺めていた構成員達は、幾分か賑やかな日々の到来を察知

していた。

「それで。連中の手勢はどれほどになる？」

「ざつとギルドの四半つてところか。同様に、アンタに従おうって連中も同程度だ」

「相手方が俺の予想よりは多いな。だが心配するほどじゃあない。お前達のような腕利きがいれば連中なんて物の数じゃあ……」

「ああ、そういうのはいい。別に俺達のことだって信用してはいないんだろ？ でも俺達や『それでこそ』と思ってるぜ。

多少のイレギュラーはあつたにせよ、というかそんなもんはガルス時代にもあつた。そのうえでギルドを素早く立て直したアンタの手腕は本物だ。俺たちやそのお溢れこぼれにあずかれりやあ十分。信用も信頼も無いもんだと思つて過度な期待はしてねえよ。元々、湿っぽいのは苦手なんだ。ビジネススライクに行こうや」

「……随分、生意気な口を叩く。少々腹立たしいが、まあいい。続けろ」

「あいよ。で、だ。残りの半分は中立つてことになるんだが、あんたはそうは見ねえんだろ？」

「当たり前だ。お前達の杜撰な調査では洗い出せなかっただけで、隠れた協力者がまだまだいても驚かん。

それに、これだけ俺の排斥の気運があらさまになっておいて、日和っているヤツ、俺の指示に従わないヤツ、この期に及んで気付きもしないヤツ。そんな愚図は足を引っ張るだけだ。潜在的な敵として勘定したほうが傷を負いにくくなる」

「手厳しいことだな。そうしたら、次はどう動きやいい？ やつぱりあの坊主を見張るかい？

……いやしかし、嫌になっちまうな。あの坊主、トンデモ親父にひらすらしごかれた結果の腕前つてんなら同情物だけだよ。もし才能だけであそこまでになったとしたら、おじさんは世の不条理を嘆かずにはいらねえよ」

「鬱陶しい無駄口を叩くな。……基点になるのはそのとおり、あの小僧だろう。だがそれだけでは足りないな。小僧の意を受けて動く、周囲の者を探れ。おそらくブリニョルフが攪乱するために動くだろうが、そちらは無視しろ。

目立たず、さり気なく、静かにシンパを増やそうとする奴等の動きに目を光らせる。そうすれば、連中の準備段階に検討がついて決行の時期も察せられるし、焦りの有無が見えればより深く探れる。

尤も、当分は大人しくして、極々目立たない動きしか見せないだろうがな。注意して

おくに越したことはない。

……そちらから他に何かあるか？ 無ければ行け」

「了解、マイマスター」

音もなく盗賊の男が去ってから、マスターと呼ばれたメルセル・フレイは闇夜に一人思う。

鳴り物入りで大型新人がギルドに加入。喜ばしい話だと皆が浮かれている。そしてそれは、『本命の策』の優秀な隠れ蓑になるだろう、と。

現在、メルセルが用心すべき相手として、第一にブレックスがいる。同盟状態から互いの構成員同士を交流させ、魂石流通やウィンドヘルム暗躍などでギルド全体に一体感を齎した。

自分を排除した後釜に座るのは、おそらくあの男だろう。そしてそれが、自分へ反感を抱く構成員を引き入れる有効な説得材料になるはずだ。

だが、こちらは囹の策を担当しているはず。メルセルには件の手口に覚えがあつたし、何より自由人の集まりであるギルドメンバー達の利害を調整して思う方向へ泳がせるなど、ブレックス以外にできることではない。とはいえ、それだけで手一杯になるのも事実なはず。間違いないだろう。

そして、メルセルはかつてカーリアを取り逃がしたことを忘れてはいない。

彼女の得意技は隠術と弓術だ。機を窺うかがい、派手な囀の陰から文字どおり一矢報いることは可能だろう。

多少気になるところで件の『トンデモ親父』の顔が浮かぶが、アレはウィンターホルド復興に向けて、表舞台に立つことを選んだ様子だ。

戦闘の腕前は確かであっても、頭がそれほど回るようには見えなかった。復興の舵取りで手一杯になる。気にすることはない。

やはり、おそらく本命だろうカーリアの一矢さえ防ぎきれば、自分の勝ちだ。

そのためなら、構成員を何人犠牲にしようが、ギルドそのものを捨て去ってしまおうが、構わない。自らが死なず、財宝を持ち逃げできるのなら、それは失敗ではなく成功。敗北ではなく勝利である。

そうなればそうなったで、様々なしがらみから開放された晴れ晴れとした気分のまま、悠々自適な余生を送ってもいい。別組織を立ち上げてもいい。

ひっそりと闇の一派へ加入するのも手だろう。連中はギルドと協力関係にある。自分が属してしまえば、たとえ居場所が割れても手出しができなくなる。そのときには身柄の引き渡しを防ぐだけの土産財宝もあるのだ。イカれた殺人鬼共を手懐けることなど容易い。

つまるところ、策に感づかれた時点で敵に勝利は無く、自らに敗北は無い。用心は怠らないが、メルセル・フレイは状況を悲観してもいかなかった。

一方、メルセルの下から立ち去った盗賊の男はと言えば。月明かりを避けるように移動しつつ、懸念を抱え、いやどうでもいいことだ、と吐き出していた。

「随分と自信があまりのようだったが、そうそう読みどおりにいくもんかねえ。

まあ俺は実入りのいいほうへ着くだけのことだからな。精々俺達のマスターでいられるよう、がんばってくれよ。じゃなきやアンタの心配どおり裏切っちゃうかもしれないからな」

フラゴンへ、様々な思惑を持った者達が集う。

いや、元々人の数だけそれらはあるのだろう。皆が皆、自らの望みが叶えばいいと思いながら、フラゴンを舞台上に踊る。くるくる踊る。

誰が最後まで立っていられるのか。それはまだ誰にもわからないことだった。

四二、計画（概ね）達成

マルカルスにおいて大いに働き、入れ替わるように町へ入った盗賊達に後始末を任せた私は、ウインターホールドは相談役殿の屋敷を訪ねていた。

作戦中も度々帰還しては報告や相談をしてはいたものの、今回の私の働きについて、ブレックスがどう感じているのか気になったのだ。私個人としては大変満足しているが、『日課』など遊び（余裕の意である。本当だ）が無いでもないだけに、私とは違う認識を持っているのではないかと少々心配になったのだ。

「まずはお疲れさん。詳細も聞いてるが、しかしまた随分と好き勝手にやってくれたもんだな。俺の目算でも大概力業だったけれどよ。手前はその上を行くよな、良くも悪くも」

「すまん。大筋ではともかく、後処理を一党に丸投げしてしまう手際であったのは、詫びねばなるまい。折角仕事を任されたというのに、友の助け有りきでの働きになった。申し訳ない」

「フン。別にお説教ご講説垂れてやろうってんじやねえよ。手前が派手に動いたおかげで、俺の計算以上にマルカルスを従属関係に置けた。その分、降って湧いた苦勞は、手

問賃つてなもんだ。悪かねえよ」

私としては少々後ろめたさもあつた今回の一件ではあるが、相談役殿からすれば然程のことでもないのだろうか。

悪態をついてはいるものの、私にはわかる。これはかなり機嫌が良い。

友をそれほど上機嫌にするような良き戦果を上げた自覚は全くないのだが。

どちらかと言えば、市警隊相手に憂さ晴らしをして、小生意気なマダナツクの心を折ることに愉悦を覚え……。私自身の楽しみのために遊び呆けていた覚えしかない。

勿論、当時からそのつもりだったわけではない。きちんと計画に必要なことだからと理屈だつて考えもしていた。だが、やり終えてから思い返せば、計画を言い訳にプレックスの言う通り『好き勝手』にはしゃいだだけの気もしてくる。

い、いや。そんなはずは……。

自らを問い質し、自責と自罰の念に囚われていると、救いの手はすぐ目の前の友から差し出された。

「何にせよ、手前がマルカルスを親ウインター・ホールドに作り替えちまったからな。やることは山程増えた。

まず銀がでけえ。五大都市に引けを取らない程度には町を復興したいと思つてたからな。いつまでも俺達の手出しつてわけにもいかん。そこにいくとマルカルスの銀が

財源として使えるのは有り難いことこの上ねえ」

「それは私も考えていた。既に我が町は四都市の中でも見劣りしないだけの規模にまでなりつつあるからこそ、我々の稼ぎだけで賄うのは不可能だろう、とも。だからこそ、マダナツクから上納させる分以外にも、協力者や話のわかりそうな現地に鉦山の経営を任せるよう首長の権限において触れを出しておいた。

これで復興までの財源に困ることはないだろう」

これは一件の中でも数少ない、私の自慢できる働きだったのだ。この頭目を相手に胸を張れること自体少ないので、ここぞとばかりに強調しておく。

が、これまた予想外にお褒めの言葉をいただく。

「手前の言うとおり、銀の確保が上首尾に終わったことは望外だ。だがそれだけじゃねえ。

まず、このウインターホルドの東西には何がある？」

「西にソリチュード、東にウインドヘルム、か？」

「そうだ。お上の意向で疎遠になりつつある両者だが、主義主張のねえ商人ならどう思うかね。

西の果てから、大都市と大都市のあいだの復興中の町に銀が流れてくる。働き口はいくらでもあつて、売れる品もあれば、大学由来の買い込める品もある」

「それは、放っておく間抜けはおらんだろうな。首長自ら末端の取引にまで口を出す愚を犯さぬ限り、民たる商人はウインター・ホールドを中継地且つ市場として認識し、必ず足を運ぶはずだ」

「となると、だ。ウインドヘルム、ウインター・ホールド、ソリチュードをつなぐでかい経済圏が生まれるわな。そしてウチはリフテンのスノー・シヨツド家から支援を受けている。ウチが儲けりゃ一口も二口も絡んで来るわな。」

そしてウインター・ホールドの復興財源である銀は西のマルカルスから運ばれてくる。

……まだピンと来てねえみてえだな。手前は一手打っただけのつもりかもしれないねえが、もう既にウインター・ホールドの復興計画はスカイリム中の経済に組み込まれてるっつー話なんだよ」

なんだか急に話が大きくなってきた。いやしかし、五大都市に限って言ってもあと一つ……。

「ホワイトランはどうなる。銀鎧と私はまだ無関係だからいいとしても、町として表立って友誼を結んだ覚えはないぞ。貸し借りも無い」

「このトンマ。スカイリムの中心に位置してシロディールにも陸路で続くホワイトランだぞ？ 周囲が揃って儲かってんのに、交易都市がハブられるわきやねえだろうが」

それもそうだった。

とはいえ話がトントン拍子に大きくなった。少し整理をつけたい。つまりだ。

まず、我が町ウインターホルドの復興が進むことで、ウインドヘルム、ソリチュード間の経済活動が活発になる。

それに付随して、銀を提供するマルカルスにも、当初から支援を行っていたリフテン貴族にも、恩恵がある。

そしてスカイリムの交易が盛んになればなるほど、ホワイトランも儲かる。

結果、五大都市全てに恩恵が有り、すると衛星都市とも言える四都市にも影響はある……。

……。

「もしかして、なのだがな。計画……。私が始めに考えた、盗賊ギルドに対するブラック・ブライア家の影響力を削ぎたい、というそれは、もう私の手を離れているのではなからうか？」

「今更気付いたのか、このトンマは。手前がマルカルスで大はしやぎしてくれたおかげで、ウインターホルド復興計画は手前の当初の計画を超えて、スカイリム全体の国家事業になっちまってんだよ。」

誰かが音頭を取ったわけじゃあねえ。ただ、俺達がやりたいようにやってたら『そう』

なっていた、つてだけの話だ。

おかげで復興自体も確定事項になったぜ。そりやそうだろうか？ この復興計画を面白くなく思つて邪魔したい輩が出たとして、何か策を打つたとする。だがそれは絶対に失敗するつー算段なわけだ。

なんつたつて、この計画でスカイリムみんなが豊かになるんだ。みんなが幸せになるんだ。それを邪魔するヤツはスカイリムの敵だ。大々的な動きにはならなくとも、利権に絡む誰かが水面下で潰しがかかるか、必ず俺の耳に入る」

友の言葉は耳に届いているのだが、頭での理解が追いつかない。

私が当初ブリニョルフの家で大風呂敷を広げたとき、この計画は数十年がかりになるだろうという予感があつたのだ。それでも、しないよりはマシだと考えて提案した。

それが、リフテン近くで新たに友を作り、その友の助言に従つて北の地へ居を移し、衛兵達を揉んでやりながら数年過ごし、極最近西の果てで騒動を起こした。

それで、私の計画は達成されたのか？

知恵者の友が言うのだからそうなのだろう。だが、やはり、理解が追いつかない。

「手前、『苦勞と成果が見合つてない』つて面してるぜ。そのせいで、『こんな簡単にことが成つてしまつていいのだろうか』とでも考えてんだろ」

凶星である。まさに言うとおり。

「いい加減このトンマは手前の非常識さつてヤツを自覚してきた頃だと思つてたんだがな。まだ足りなかつたか。先の言じやあねえが、俺様のご講説垂れてやるから、耳の穴かっぽじつてよく聞きやがれ」

言われたとおり、耳に指を突つ込んで垢を掃除する。

「まず直近のマルカルスでの騒動だな。手前ははしやいだだけと思つているかもしれねえが、そもそも個人だろうが組織だろうがああかの推移も結果も不可能なんだよ」

それは言い過ぎではなからうか。現に後始末を頼んでいるこの頭目と一党であれば、うまく住民を扇動せしめたのではないかと思われる。

「たしかに俺達でも似たことはできた。だが似ているだけじゃあ結果に天と地の差があるんだよ。」

手前は町を恐怖のどん底に叩き起こした挙げ句、町の有力者を公開処刑にかけた。自覚がねえかもしれないねえが、この時点で公権力への侵害。投獄モンだわ。しかしそれはなし崩し的に許された。何故か？ 民意があつたからさ。

手前が恐怖させて手前が持ち上げた住民達が手前を支持した。だから首長は身動きが取れなくなつた。

俺の算段じゃあ、経済的な影響力を強めて、数年後には実権を奪う。つてなことを考へてたわけだが、その手間がいつぺんに吹き飛んだわけだな。マルカルスについては自

覚できたか？」

褒められているのであろうが、あまりに手放しなせいで皮肉を言われているような気分にもなる。不思議だ。

「そんで計画を大きく前倒した全ての原因は、手前のソウルの業とやらだ。

ブリニョルフが魂石採掘隊を組織し、ほぼ独占的な契約を結んだ。手前は嘘みてえに尽きない魂をせっせと魂石に詰めた。供給源だけ確立されてたつてしかたないが、大学とマルカルスのカルセルモつつー需要者と話をつなぐことで、こいつは大きなシノギになった。

覚えてるか？ お前がイーストマーチに留め置かれているあいだ。俺達がウインドヘルムの貴族や豪商共を味方につけようと、ギルドの連中と張り合っていたのを。

何故張り合えたのか？ 相手はギルドだぞ？ 一盗賊団に毛が生えた程度の俺達とは資金力がまるで違う。そこでモノを言ったのは手前が魂石で稼いだ金だ。

俺達は手前の稼いだ金で有力者と伝手を作り、その伝手で採掘隊の運んできた魂石を船でウインドヘルムまで運び、そして各地へと流通させていったわけだ。勿論、陸路でカジート商隊にも流させたが、やっぱり海運の力はでけえわ。蜥蜴共、帝国にまで売りに行ってるらしいぜ。猫共もお国まで運んでるらしいが。おかげで今まで何不自由なく動けたぜ」

ウインドヘルムでの伝手作りは『あつて困るものでもないから』程度に考えていたが、そんなところに役立っていたとは。

しかしアルゴニアンもカジートも商魂逞しいな。種属柄なのか、商売人とはそういうものなのか。

「まだ微妙な顔をしてんな。これも先の言じゃあねえが、あんま鈍いとマジで説教になるぞ。」

魂石で稼いだ結果、俺はこうして相談役なんてもんに収まっているし、手前は大学とのコネを太く強くできたわな。

手前のほうは珍しい魔法の一つや二つ見せればなんとかなったろうが、俺のほうは違う。

胡散臭いどころじゃねえ。後ろ暗いでもまだ足りねえ。

何をどうしたら、脛が傷だらけの盗賊が町の采配なんてできる立番に収まるんだよ。首長の爺様が認めたって、普通は周りが止めるぞ。何で止めなかつたか？ 金に物を言わせて屋敷を二つも立てちまつたからさ。それもあつという間にな。

多少怪しかろうが、「只者ではない」「あまり手を出さない方がいい」とそう思わせられたからこそその今日だ。

そこからの移民を募るのも、労働力を町の拡張工事に注ぎ込んだのも、全部金があつ

たからだ。これが無けりやあ、それこそ手前の言うとおりの何年も何十年もかけて少しずつ話を大きく広げていくしかなかつたろうぜ。

手前は『やれたからやった』程度の認識なんだろうがな。もうホント、いい加減認識を正しく持ってくれや」

『くれや』と言われても、人の認識とはそう簡単に変わるものでも……。

いや、駄目だな。これを言うのと確実に足を蹴られる。私にはわかるのだ。

「ついでに言うとな」

「まだあるのか」

「あるんだなこれが。」

さつき『スカイリム全体の国家事業になったから、復興計画は守られる』みたいな話したろ。『そうじゃなくても、確実に俺の耳には届く』って」

「言っていたな。利で結ばれているとはいえ、スカイリム中が我々の背を押してくれるとは。人の縁というものはわからんものだな」

「うん、いや、そういう人生訓みてえのはまた今度でいいんだわ。俺が言いてえのは、『逆にそうならなかった場合、その相手は十中八九サルモールだと断定していい』ってことだ。何せ俺達は『反サルモール派』だからな。」

これはデカいぜ。防衛時の概念ってのは、基本友好国以外全て仮想敵だ。それが概ね

一本に絞れるつてのは、策謀だろうが軍事的にだろうか、かなりの負担減になる。勿論油断はしねえが、使える人員の問題だな」

我が功がまだあつたとは。面映ゆいどころか、誰か他人の話をされているような気分だ。その者はきつととても立派な人物なのだろう。限られた石で何羽もの鳥を落とすのだから。

……とはいえそろそろ辛い。反撃に転じよう。

「先程からの講釈で私の功績については理解が及んだと思われる。ただなあブレックスよ。」

私の耳には『適材適所。そんな力を持った友を正しく有効活用した俺様はもつと凄い』と聞こえたのだが、気のせいか？

ブレックスは「バレたか」と言つて笑う。いい加減、褒め殺しからは開放してくれるようだ。助かる。

別に本当に自らの功を誇っているわけではあるまい。此奴は、自らが成すべきと思つたことを成すために労を惜しまぬ男だからだ。

ただ、開放してくれたのには、別の理由もあつたらしい。

「さて、そんな計画の立案、実行に多大な貢献を果たした英雄殿にしか頼れない大事業があるんだなこれが」

照れ隠しなのか、少々戯けた物言いをする。私もそれに乗って「何でも言ってくれ。私に任せられないことなどないぞ」と返す。

「そう言ってくれると信じてたぜ。じゃあ首長殿の砦と高級宿屋、迎賓館つったほうが聞こえがいいか？ ポンと立ててやってくれや」

……聞き間違いだろうか。どちらも私にできることではないと思われる。

「凶面は俺が既に引いた。装飾に關しても大学連中が城壁に合わせた文様を考えてくれるし、完成のあかつきには大学同様、魔法的な防御を張ってくれるとよ。当然規模は小さくなるがな。」

迎賓館も同様だ。いざって時には砦と迎賓館に籠もって戦うことになる。こちらは砦よりは外観重視だが、防御機構が備わっているに越したことはねえ」

「待て。待ってくれ。聞けば我々の屋敷のような突貫工事で成せるものではないように思えるぞ。それに、時間的な猶予はどれだけ残されているのだ？」

そもそもウィンターホールで開催する必要があるのか？ ソリチュードは難しいにしても、ウィンドヘルムかホワイトランあたりを間借りすることだって可能だろう」

『中立性を保つ』って意味ではそれも有りだ。こつちに野心がねえとアピールするためにもな。だがウルフリックに力を持たせたくはねえからウィンドヘルムは却下。バルグループを説得するよりこちらで場所を用意してしまったほうが早えから、それも却下

だな。何より、言い出しつべが招かねえと格好がつかんだらうか。

ついでに言えば、『大災害の爪痕と、復興中の町を見せる』って目的もある。あの馬鹿でかい城壁が削れている様なんか、直に見ねえと肌身に感じることはねえぞ。そしてそこから既にかかなりの規模まで復興している町。

ある程度脅威に感じながら儲け話に一口噛みたいと思わせるにや絶好の景色だ」
友の言うことは一々正しい気がする。

では肝心の時間的猶予ほどの程度あるのだろうか。それによつて、工事の段取りも色々違ってくる。

「^ム首長会議もどきが^トここで開催されるまでだから……。マルカルスに参加表明を流布するだろうか？ ウインドヘルムあたりが慌てて裏取り調査をして、それから参加表明するだろうか？

バルグルーフあたりは我が強いから、周囲に説得されてもなかなか『うん』とは言わねえはずだ。そこで時間が稼げる。それでソリチュード以外の五大都市が揃うなら、他の四都市からも表明が来る。計七都市つてあたりか？

だから時間に直せば……ざっくりとしか読めんが、短ければ四ヶ月つてところか？ それ以上はわからん

ただはつきりしているのは、『親ウインターホールド』の色を示したい連中ほどそれに早く来る。ウルフリックなんかはそうだろうな。そしてそれ以外の連中も、わざわざ敵対姿勢を見せることはねえだろう。つまり、大幅に遅れてくるヤツはいねえってことだ。工期の延長はあんまり期待すんな」

「首長の砦は廃屋の改修ではなく、一から作るのだろうか？　だがそんな場所はもう無いぞ」

「また岩山を削りやいいじゃねえか」

「簡単に言ってくれ……。削ってできた空間に、石造りで見栄えも兼ねて砦を作る。それが終われば同様に迎賓館も作る。いくらなんでも年単位の仕事だ。前言を翻すよのだが、こればかりは無理だ」

「いいやイケるね。俺達の屋敷を建てたときには、少数のダンマーしかいなかった。だが今ではその何倍もの移民がいる。他所から新しく雇ってもいい。各地の物乞い連中を集めてでもな。」

そしてこつちもデカいが、当時の何倍もの聴講生が大学にはいる。そいつら全員に召喚術を叩き込んで、氷の魔術で突貫工事だ。

それで手前だな。眠らず、休む必要すらねえんだから、自分で召喚した精霊と並んでお化け鶴橋を振るっていいやいだろ。人足には単純作業だけやらせておけば、時間短

縮になる。穴掘りが終わってからは、大学から更に人員を借りるわ」

この男。目が本気だ。ほぼ私を使い潰す勢いで竣工を目指している。冗談だと思いたいが、この目はけして冗談など伝えていない。私にはわかるのだ。

「……も、もし間に合わなければどうする？」

「もしも案山子もねえんだよ。間に合はん無様を晒せばウィンターホールドが舐められる。そうすりや今までやってきたことのいくらかは無駄になる。やるつきやねえんだよ。」

今、崖を削って港を作っている連中と、山肌を削って下町を作っている連中を全て投入する。町の一大事だつつつてな。それでなんとかしろ。現場監督の手前が率先して汗を流してりや、それなりに空気は引き締まる」

ああなるほど。そちらも使っているのか。町の拡張工事と港湾整備。これは復興計画の中でも二大事業となっている。それを一時的に止められるなら、いけないこともない、のか？

だが……。

「それほどまでに融通を利かせるのならば、もつと早くから取り掛かかっていても良いのではないか？」

「さつきも伝えたる大トンマ。俺の算段ではマルカルスが完全に味方になるにやああと

何年もかかってたんだよ。それを手前が三ヶ月程度で達成しちまうから、こうして計画を修正せざるを得なくなつてんだろうが張り倒すぞ」

言いながら頭への平手と脛への蹴りが見舞われる。なるほど。原因たる男がそれを自覚せず文句を言えば、それは腹も立つか。

「わかつた。どうにかやつてみよう。最悪でも砦ができていれば、迎賓館は無くても格好は付くのだろう?」

「まあな。迎賓館はそのあと高級宿屋として使おうと思つちやいたが、砦に比べれば費用対効果も薄い。五大都市ですらない復興中の町だからな。首長の砦に客を泊めたとて、そこまで目くじら立てる連中もいねえだろ。

問題は側仕え以外の兵までは入らねえだろうから、長屋か一般向けの宿屋を急ぎでつちあげにやらんことだが。まあそつちは木造で十分だ。工事とは別口で材木や職人を発注するから、そこまで負担にはならんはずだ」

こうして、向こう数ヶ月は文字どおり眠れない日々が続くと確定した。

散々褒めちぎられたのは、このためのご機嫌取りだった、とは思いたくない。多分、それは本当に違うはずだし。

ただなあ。友の言が真実なら、私は偉業を成したはずなのだ。それがいったいどうして馬車馬の如き働きを求められているのだろうか? 功有るものはそれなりに遇され

るはずでは？

ブレックスの下から下がり、星々の瞬く夜空に、私の疑問というか愚痴というかは溶けていった。

ソリチュードはブルーパレスで、二人の貴人が周囲の顔色も目に入らぬほど、激しく口論していた。

「ならんというのがわからんのか！」

「父上こそどうしてわかっていただけなのですか！」

「トリグ。お前は実質的な次期上級王なのだぞ！ その身の大事をだいじなんと心得ておるのか！」

「だからこそです。私は次期上級王であって現上級王ではありません。」

一度首長会議を蹴った上級王が、あの首長会議もどきに参加することは許されません。しかしウィンターホールド首長のこれまでの姿勢からすれば、会議に正当性を持たせたいはず。

上級王の子息たる私が非公式に訪ね参加を申し出れば、無下にはされないはずだ」

「参加が認められたとして、それがどうだというのだ。所詮は四都市のうちの一つ。それも復興中の町だ。何故こちらがそこまで下手に出ねばならん」

「下手ではありません。並び立つのです。昨今のスカイリムはこのソリチュードではなく、ウィンターホールドを中心に回っていると云っても過言ではありません。」

五大都市ですらない比較的小さな町が、異常な速度で復興を遂げている。これは反帝国を掲げるウィンンドヘルムとの地政を鑑みても、軽んじて良いものではありません」

「お前のいいたいことはわかる。だが、お前が思う以上に上級王とは権威あるものなのだ。かつてはこの王冠を求めて内乱になったことすらある。」

お前のほうこそ軽々に動いてはならん。古き権威を軽んじてはならん。これは主義の問題ではない。実利の話だ」

「父上の懸念、一々尤もです。ですがここで動かなければ、ソリチュードは手遅れになります。ひいては帝国の判断をも誤らせることとなりかねません。」

ソリチュードのため。スカイリムのため。帝国のため。このトリグはあの町をこの目で直に見て、各地の首長と話し合わなければなりません。

まだ現段階でどの程度の参加があるのかはわかりませんが、ウルフリックは来るでしょう。あまりに立地が近すぎる。噂ではリフテンとも懇意にしていると。となれば九都市のうち、半数弱が参加しても不思議ではありません。巧遅は拙速に如かず、で

す父上」

息子が思いの外しつかりとした理論武装をしていることに感心すると同時に、だからこそ頭を痛くする父親。

言いたいことはわかる。だがそれでも帝国、ひいてはサルモールとの関係を考えればここは見^{けん}に徹し、あとから上がってくる情報を精査すべきだと考えたのだ。

「……申し訳ありませんが父上。更にお言葉が無いようでしたら、トリグは行かせていただきます。」

あくまで非公式でなければなりません。途中で帝国側の人間に見つかりでもすれば大事^{おおいと}。馬車は使えません。徒歩^{かち}で行くなら、旅慣れぬこの身。そろそろ出ねばならぬかと存じますので」

子は背に受ける「待て！」という声を見無視して謁見の間を出る。その目には強い光を灯している。

場合によっては、ウィンターホールド首長の首を刎ねることすら視野にいられて。

四三、お出迎え準備

ガツン、ガツン、と鶴嘴を叩く音がする。

「ブレックスさんの言うことにや。ヤツハツハー、ヤツハツハーのハ」

ブレックスの言う首長の砦と迎賓館は、余裕を持って完成した。人足と応援に来た魔術師で役割分担したのが良かったのだろう。

魔術師達はとにかく氷の精霊を呼び出し岩肌を削り、人足達は削った岩をどんどん運んだ。

人足達の作業は言うまでもなく重労働であるのだが、私が監督している現場で顔色が悪くしながらも氷の精霊を召喚し続けていた魔術師達を見て、手を抜くことなく働いてくれた。

十分な空間が岩肌に掘れたら、そこに埋め込む形で館を建てた。このとき、館のおよその寸法が決まった時点で、周りの空間も装飾を付けながら削るとい一手間が加わっている。担当したのは、盗賊連中に指示された私だ。

砦のほとんどは魔術で建てた。

連中、いつの間にか『岩石脆化』どころか『岩石形質・形状変化』魔術まで編み出し

ていた。『私』という異分子から得られる視点でこれまでの魔術を見直すと、新しい発見があるのだそうだ。アグス師が楽しそうで何よりである。

普通、石造りで建てようとするれば、表面は凸凹する。当たり前だ。いくつもの岩石を組み上げているのだから。

それを連中は、掘り出した岩石の形質を一定の物と変え、更にそれを一枚岩へと変化させることに成功した。

巨大な一枚岩の壁は恐ろしく値が張る。そして下手をすれば攻城戦の常識を変える魔術であるが、それを魔術で意図も容易く成してしまうなど、驚くほかない。おかげでウインタールールド首長砦は、漆喰とは違う、随分と見栄えの良い出来になっている。

おそらく、これから建てられる権威の求められる石造りの建造物は、この様式が基準になるのではないかと思われる。大学の良い収入源になるだろう。

概ね建造物としての体を成したところで、内装や装飾にも取り掛かっていた。誰も彼も、魔術師達の手腕に興奮して、砦自体を更に素晴らしい出来にしようと意気込んでいた。

手透きになった魔術師は、また穴掘りだ。次は迎賓館が控えている。

とはいえ砦で勘所を掴んだ面々である。迎賓館の作業は砦に比べて然程のことも無かった。まあ、砦と違って防衛機構も何も付けなくていいように、モノの寸歩が砦より

小さいのだから、当然と言えば当然であるが。

こちらにも、内装や細々とした装飾は砦が練習台になったおかげで迅速にことが進んだ。砦に比べて『武』の色を抑えて『奢』の色を強めれば良いだけのことだ。

ただ、こちらには砦に無い工夫が一つしてある。

友好的か敵対的かで一々揉められても困るので、ある程度勢力別になるよう分けて、出入り口が別になるよう作つてあるのだ。

「何故？」と問われれば、「人数が多いので速やかに入退出できるよう」と言い訳できる。それ以上は相手の邪推というものだ。それが真実だろうがそうなのだ。

「アグス師の言うことにや。ヨッホッホー、ヨッホッホーのホ」

こちらの建築物は完成したのだが、参加者のほうで少し問題があるようだ。

まずいの一番に参加表明したのはマルカルスだ。

こちらはそもそも政府上層部がまだ混乱状態である。誰かがどこかをつつけば、思いもよらぬところが爆発しかねない、という恐ろしさがある。

首長側もマダナック側も迂闊には動けず、こちらからの指令を唯々諾々をこなすだけだ。一人だけ上機嫌なのは、マルカルスで私に協力し、現在も両者の監視を行う代わりに魂石の供給量が増えてほくほく顔のカルセルモ師くらいだろう。

参加者は首長にするかマダナックにするか両方にするかで揉めているらしい。連中

のごたごたは盗賊達がうまくまとめるから良しとして。

マルカルスが表明した意義は、先日ブレックスが説明したとおり銀だろう。ここが北の僻地へきちとはいえ、交易と貨幣経済が成り立っている以上、銀の最大供給地の動向は無視できない。

だからこそ、二番目に素早く表明を出したのはリフテンだ。マルカルスからの銀がウインターホールドに入り、それが交易の形でリフテンにまで運ばれる。

ちなみに、これを取り仕切っているのはスノー・ショツド家だ。計画の当初から融資をしてくれた返礼がやつとできたことで、こちらとしてもホツとしている。

そして町の中で発言力が大きくなったスノー・ショツド家の後押しを受けて、つまりは「この復興速度は只事ではありませんぞ！」との進言を受けて、首長自らが足を運ぶことになっている。

従うのは私兵と衛兵隊、それにこの縁をつないだスノー・ショツド家だ。ここで会談を穏便に済ませ、また一つ町の中での発言力を増そうというのであろう。こちらとしても、弱くも強くもない出資者が存在感を増してくれるなら、色々とやりやすくなる。

地理的に両都市に挟まれるドーンスターとファルクリースには、それぞれの都市から誘いをかけさせた。

誘い、というか実質『徴集状』である。いくら小なりとはいえ一都市として威を張つ

ているとはいえ、近隣の大都市の動向は死活問題になりかねない。それが西と東の双方から来るのだ。拒絶したらその場で内戦が始まってもおかしくはない。

あまりいじめてもなんだが、この二つの都市からの参加表明は割りとすぐに来た。こちらも首長と私兵と衛兵隊である。

その状態でソリチュード、ウインドヘルム、ホワイトランへ可否を尋ねる使者を送った。ソリチュードは駄目元だ。期待していない。

ウインドヘルムからは色良い返事が来た。距離も近いことであるし、私が首長と顔見知りでもある。首長から上層部一同、見学がてら皆で来るらしい。友好関係の誇示であろうが、それはこちらとしても望むところ。道が分かれるまでは存分に後ろ盾になっていただきたい。

問題はホワイトランだ。バルグループが絶対に行かないと駄々をこねだしたのだ。

いや、本来であればバルグループが正しい。ムートでも何でもないわけのわからん集まりにほいほい出かけていては、首長の威厳が霞む。

ただしそれは政治的力学を一切無視すれば、の話だ。マルカルの銀が切っ掛けだとしても、九都市の内、三分の二が参加する会議。これに参加しないとすれば、何か含むところがあるのではないかと言われても仕様がなない。

探られたくもない腹を穏やかにさせておくには、せめて形式くらいは整えなくてはな

らない。

そういうことで、執政と私兵と衛兵隊と送り出すことにしたらしい。「腹心二人を送っているのだから使者としては十分」と言えなくもないし、首長本人は参加していないのだから「わけのわからない会議など知らない」と言い張れなくもない。

多分この発案はあの執政の翁だろう。それなりの齡とだろうに。遠方への旅と会議。バルグルーフへの最後の奉公と思っているのかも知れない。この家臣の献身を汲み取れないようでは、バルグルーフに二つ名はつかないだろう。

そんなこんなで、首長自らが来たり、使者で済ませたりと対応は様々だ。

私は当初、呑気にどの町も首長が来るものだと考えていたのだが、思い直してみればそんなはずがないのは自明の理であった。ブレックスに指摘される前に気が付いて良かった。

「その妙に陽気な掛け声はなんなんだ。ついでに何を掘ってやがる。もう作業は終わつたろう?」

「掛け声については陽気者ばかりだというお国柄なカタリナ式だ。掛けながら鶴嘴を振るうと疲れが吹き飛ぶ。」

作業は終わったと思つたんだがな。首長の砦なのだから、裏手に非常口を設けなければならぬと思ひ直し、こうして掘っているのだ。敵の追撃を鈍くするためにも広くする

わけにもいかん。そういうわけで、私一人で作業している」

「非常口の必要性について見落としていたのは俺の落ち度だ。ただその役は召喚術師に代われ。お前には厄介な客の相手をしてもらう」

ブレックスは言うやいなや踵を返してしまう。この否やを言わせない感じは、大人しくついて行つたほうがいいだろう。

「だから離せと言うのに。暴れもせずただ話がしたいというだけの私を捕える必要がどこにある」

「そう言われてもアンタ。暴れはせずとも好き勝手歩き回ろうとするでしょうに。大人しくしてもらふ必要くらいありますわな」

一人の男と衛兵が揉めている。

「アレだ」

ブレックスが耳打ちで言う。

「いきなり上街入り口で『自分は上級王サファルの子、トリグである。首長と話がしたい』と宣いやがってな。ホラでも面倒臭えが、事実ならもつと面倒臭え。というわけで政事の相談役様としては『否』だ。どうにか武官の範疇に回すから、適当に翹つて追い

返せ」

耳打ちを終えたブレックスが自称トリグへ近づいていく。

「ようこそおいでなさいましたトリグ様。生憎と首長は体調が優れず臥せっております。要件は執政か相談役の私ブレックスが承りましょう」

「おお！ ようやく話のできる者が来たか。ならお前がいい。聞いてくれ。私は此度開催される会議に、非公式で参加したいのだ。我がソリチュードとの関係を考えれば、納得できぬ話ではあるまい？」

なるほど。ブレックスの、虚実どちらでも面倒臭いという勘はあたっていたようだ。「申し訳ございませんが、ご期待には添えません」

自称トリグが「何故だ！」と詰め寄るが、さもありません。世間を知らなすぎる。私に思われるのだから相当だ。

「まず、トリグ様はお忍びでいらしたご様子。そしてトリグ様と面識のある者がこちらにはおりません。つまり、あなたが本当にトリグ様であるのかすら、こちらには計りかねるのです」

「身元を証明しろと？ 面倒だな。それなら暫く宿に泊めてくれ。そうすれば各地の首長がやってくるであろう。特にウインドヘルムのウルフリック殿とは面識がある。彼の御仁に確認してもらえばすぐわかることだ」

すぐつて……。

「ウルフリック様がこの町へおいでになるのはひと月上先の話です。そのあいだ、身元不明の貴方を町に置いておくことは、防犯上見過ごせません。どうか、お引取りを」なるほど。トリグなりに勝算があつて突撃訪問をかましたわけか。

しかし、勝手に入ってくる各地の斥候ならいざしらず、堂々と「次期上級王である」と名乗られてしまうと、こちらでも形式張つた対応を取らざるを得なくなるわけだ。

なんなら、完全に身分を隠して、ウルフリックの到着と共に事を起こしてくれば良かったのだ。そうすればこちらとて折れざるを得ない。面白くはないが、面倒は減つた。

私が明後日のほうを向いて欠伸をしているあいだにも、トリグの舌戦は止まらない。身分証代わりの剣だとか、帝国軍の誰と知り合いたとか。

少々飽きるのが早いのではないかと思うが、ブレックスがこちらに目配せを寄越す。あとは私が高んとかしろ、ということなのだろう。

「どうしても、と仰るなら。音に聞くトリグ様は武芸に熱心なご様子。であれば、我が町の私兵と手合わせをして、その腕前で身の証を立てる、というのは如何でしょう？」

「なんだ、そんなことでいいのか！ 意外に話がわかる口じゃないか！」

で、あとは私がひたすら痛めつけて「帰りたい」と言わせればいいわけだ。

しかしなあ。相手は次期上級王だぞ。ラーナルクとの鍛錬とは違い、力加減が難しい。下手に恨まれても困る。禍根を残さない程度で心を折る。我が友はなかなか無茶を行ってくれる。

「では、私が相手をしましょう。得物は鍛錬用の木剣でよろしいですね。何処からでもどうぞ」

「ああ、それでは……参る！」

馬鹿正直に真正面から大上段に構えて来たのだが……遅い。額をひと打ちして気絶させる。

気絶させたことで衛兵隊が騒ぎ出すが、全力でこれなら、これ以上の手加減は無理だぞ？

幸い回復薬を嚙下することはできるようなので、上等なヤツを飲ませてやる。最近是我が弟子の腕もそれなりものになってきているのだ。

「……ハッ！ 今、雷撃が起きなかつたか？ いや魔術ではない。剣撃自体が雷のような不思議な感覚で。白昼に紫電を見たのだ」

「……ご感想はよろしいのですが、まだやりますか？」

「も、勿論だとも。ここで腕前を認められなければ、私は私と認められないのだ。そんな馬鹿な話があつてたまるか。次、行くぞ！」

今度は正眼の構えのまま向かってくる。額を打つには木剣が邪魔なので、手首のあたりにひと当てしてどかしてから、がら空きになった額を再び打つ。

先程同様気絶したので、これまた同様回復薬を飲ませる。

「……ハッ！　今、火焰が手首に走らなかつたか？　ぐるりと巻き付くような火焰。そして気付けば再びあの紫電が。い、いや、次だ！」

その後もトリグは何度も気絶させられては妙に詩的な表現で私の剣を表し、そうしてまたかかってくる。

私はその様子を見て、この男のことを『面倒臭い男』から『面倒だが面白い男』と認識するようになっていた。

私と呼ばれたのが丁度昼頃。今はもう日が山の稜線に沈もうかというところだ。

ブレックスが確認にでも来たのだろう。であるのにまだ追い返していないことに怪訝な顔をした。

文句大有りという態度で詰め寄ってくる。

「どういふつもりだ」

「いやな。この男、妙に頑丈なのだ。すぐ伸びるのだがな。帰りがるそぶりも見せん。

それで……すまん。有体に言つて気に入った。鍛えてみたい」

ブレックスが不機嫌顔で脛を蹴ってくる。この蹴り方はだいたいぶお冠なヤツだな。あとで詫びの酒を持って行かねばなるまい。

散々つばら気絶させられたトリグは、己の未熟を痛感したのか、我がウィンターホルド衛兵隊の訓練に参加させても特に文句は言わなかった。というか、どちらかと言えば模範生だ。

朝は誰より早く来て、軽い運動から素振りを。夕は整理体操を誰よりも丁寧に行い、翌日、万全の体調で訓練に挑めるように気をつけている。

初めのうちは付いていくのもやっと、という有様だったのが、今では隊員に少し劣る程度にまでなった。ちなみに我が衛兵隊員の實力は、イーストマーチ衛兵隊の上澄みと同程度である。鍛えたかいがあった。

訓練の項目として、隊員は私との戦闘と隊員同士での戦闘がある。トリグもそれに参加させた。

隊員同士の戦闘では、なかなかどうして我が衛兵隊を圧倒する場面も見受けられる。元々筋が良かったのだろう。足りなかつたのは体力くらいだ。

私との戦闘では……めげない精神は大したものだと思う。隊員達は慣れているが、新参者が何度もくつてかかれるほど温い扱きはしていない。

とはいえ、初めて会ったときのような遠慮ない一撃、というわけでもない。訓練での戦闘はあくまで訓練。教え導けるよう私も腕前をそれなりに落とす。

するとどうなるか。会ったときよりも酷いことになるのだ。

初めて会ったときはとにかく気絶させ続けた。頭に障害が残りはないかと心配になるほどさせ続けた。

しかし訓練では、骨折程度の怪我が頻発する具合に腕前を合わせてやってる。そして腐るほど有る薬で傷痕隊員を出さないようにしている。訓練は永遠に終わらない。

半月もすれば、隊員との戦闘では互角かそれ以上だ。

真正面から攻めても強い。変則的な虚実を交えさせても戦える。逆に、力押しで来られても冷静に対処できるし、虚実を交えられても巖のように耐え反撃に転じる。訂正しよう。足りなかったのは体力と戦闘経験だ。

私が教えたのは一つだけ。「相手にされて嫌なことをしろ」だ。短い訓練期間にならざるを得ないトリグに、アレもコレも教えることは不可能である。だから一つだけ。

訓練でのトリグを見るに、その教えを見事に体得したようだ。最初は面白い玩具くらいに思っていたのに、何とも逸材であったな。

私は特に成績の良い隊員を館に招いて食事を振る舞うようにしている。トリグにもそれをしてやろうと思った。

トリグは、師と仰ぐ男に晩餐へ誘われた。

今ならわかる。人目のある場所で名乗り出た自分は、相当な厄介者だったのだろう。であるのに自分の蒙を啓き、鍛錬までつけてくれる。これが師でなくてなんであろう。

晩餐自体は厄介者の新参者がと恐れ多くて断っていたのだが、隊内では度々あることのように、素直に受けるようすすめられた。ついでにというと、隊舎や宿屋で出る食事より、ずっと美味しいのだとか。

そこまで言われては、断る理由も無い。日も落ちた頃、喜び勇んで師の館の扉を叩いた。

「来たか、トリグよ。入ってくれ。丁度、夕餉の支度もできたところだ。さあ、冷めてしまいう前に早く」

男の勧めに従って扉をくぐると、涎と腹の音を誘う臭いがしてきた。たまらん。

テーブルに並べられている料理を見るに、別に豪盛なわけでもない。どちらかと言え

ば庶民的だ。だというのにこの香り。ブルーパレスではお目にかかれないうら。

部屋にはもう一人、男がいた。

「そう待ちきれないという顔をされると、作ったかがありますな」

「紹介しよう。私の錬金術の弟子でな。コランドという。この料理も、七割方此奴が作ったのだ」

トリグは驚いた。男は錬金術まで修めているのか。すると自分が飲んでいた回復薬は男とコランドの作った物か。

味や効能に差があつたのを思い出す。上等な物が男の作成した回復薬だろう。

「そうだ。折角だから、ここ最近、此奴の回復薬をしょっちゅう飲んでいる上客に意見を聞いてみようじゃあないか。どうだ、感じた不満や注文は無いか？」

正直に言つてもいいのだろうか、とトリグは返答に迷つた。

トリグは回復薬の使用頻度が高い。それだけ金銭的にも世話になつていふこととで……。コランドをちらりとみると、紙の切れ端とペンを持っている。これは多分、失礼には当たらないのだろう。

「何度も助けていただいておいて申し訳有りませんが、その、独特の甘みと苦味が合わさつて苦手な味になっています。少し覚悟を決めないと飲みづらいというか。そんな具合です」

「味ですか……」とペンを顎に当てて考えるコランドだが、そこに男が「味は大事だぞ」と割って入る。

「戦闘の僅かな隙に回復薬を飲もうとする。大概の場合は興奮からどんな味でも飲めないことはない。ただ、普段から苦手意識を持っていると、一瞬躊躇するかもしれない。その一瞬が勝敗をわけるかもしれない。『たかが味』と侮ってはならん」

男の言葉にコランドは恐縮して、急ぎメモを取っている。

「と、折角招いたのに弟子の紹介だけで時間が経ってしまった。早速食事にしよう。今日は肉料理のようだが、味は保証しよう」

男に誘われて食卓に着き、メインの肉からがぶりと頬張る。うまい。

やや辛味を強調する味付けだが、やり過ぎではない。何より焼き加減が絶妙だ。肉の旨味を引き出しながら、歯ごたえでも満足できる。確かに、これは期待させられるだけのことはある。

シチューにも手を出す。これもうまい。こちらにも肉は入っているが、主役は野菜だ。いくつもの野菜が深みのある味を作り出している。うまい。

酒にも手を出す。やや酸味の強い蜂蜜酒だ。食事が進むように、との気遣いだらう。これもうまい。

「どうかな？　我が家の夕餉は」

「どれもこれも美味しいです。宮殿の料理にだって負けていません」

トリグが正直に答えると、男は大笑いしてコランド殿の背をバンバンと叩く。「良かったな。これで錬金術以外にも食い扶持ができたぞ。稼げる腕は、多ければ多いほうがいい」

コランドは錬金術以外の職に触れたことで微妙な顔をしているが、悪い気分ではないようだった。

それに対して男は、打って変わって組んだ手の指を遊ばせて、何かはつきりしない様子を見せた。コランドへの態度も、気まずさを紛らわせるためのものに思えてくる。

「さてトリグ。今日お前を呼んだのは劳いの他にも事情があつてな」

来た、と思つた。いくら自分が衛兵隊を相手に健闘できるようになつたとて、全体の中で一二を争う、というわけでもない。何か別の話がしたくて夕餉に誘われたのだと見当はついていていた。

「じきにこの町でムートに近い会議が催される。知つているな。お前もそれを目当てに来たのだからから。」

そこで一つ、口裏を合わせてほしいのだ」

口裏。何を言わされるのだろう。あまり我がソリチュードに不利益を為すのならば、性根を据えてお断りしなければならぬ。

「お前は衛兵隊と一緒に訓練に精を出して充実した日々を送っているかもしれないが、このままでは会議への参加はちと難しい。……座れ。聞いてくれ。」

お前は町へ来たその日に名乗りを上げた。このままだとウインドヘルム一行の到着を待つて正式に『ソリチュードのトリグ』として扱うわけだが、それまで、ひと月以上も不適切な扱いをしていたことになる。お前の存在をどれだけ隠しても、名乗りを覚えている者はいるだろうし、訝しむ者も出てくるだろう。それは非常に不味いのだ。

そこで、お前は私の勇名を聞いて弟子入りしてきたことにしてくれないだろうか。自慢ではないが、ウルフリック閣下の前で腕前を披露したこともあるからな。無理のある話ではない。

そしてウインドヘルム一行が到着した際に初めて、実はソリチュードのトリグであったのだ、と明かしてほしい。つまり私達は知らずに接していたことにするわけだな。……どうだ？」

正直拍子抜けした。自分の失態を覆い隠すために、男が悩んでいる。こちらこそ詫びねばならないところ。トリグは男に謝意を告げ、喜んでその案に乗ることを伝えた。

それに男の提案は、一部に目を瞑ればほぼ事実を開示しているだけにすぎないのだ。口裏を合わせるも何もない。トリグは堂々と公言すればいい。

自分が解決しなくてはならない話であったというのに、男はホツとした顔で「よくぞ

言つてくれた」と喜んでゐる。後ろめたさが尋常ではない。

酒を呷りながら「これで心配事は無くなつた。あとは飲んで食つて、楽しむだけだ」と機嫌良く料理に手を伸ばしている。自分も、後ろめたいのはそのままではあるが、男が笑つてくれている。それだけで、残りの料理を美味しくいただくことができた。

訓練後に余裕が出てきてから、トリグはこのウィンターホルドの町を散策するようになっている。なにせ前知識と全く違うからだ。

たしかに、驚異的な速度で復興が進んでいるとは聞いていた。しかし、それが始まる前は村と呼ぶのが相応しい有様であつたとも聞いている。九大都市ではなく『八大都市』ではないか。そのような言葉を聞いたこともある。

それがどうだ。廃墟など何処にも無く、海岸沿いの崖には転落防止の石壁がずらりとならんでいる。そして元々町があつた高台を上街として町の有力者が住むように整備し、現在も拡張中の下街と言われる山肌を削つて作られている町には、移民がこれでもかと住み着いている。

下街にはウィンターホルド大学の聴講生も多く住んでいるようで、あちらこちらで魔術談義がなされている。

そして、それとは別に目を引くのがカジートとアルゴニアンである。どうやら商売で来たようだが、人足達は下街の宿屋で羽根を伸ばしている。

衝撃的だった。

この閉鎖的なスカイリムの地で、あらゆる人種が（レッドガードを除く）差別なく一つの町の住民として過ごしているのだ。

スカイリムの町では、何処へ行ってもどうしたつてノルド優先の気風は取り除けない。当たり前といえど当たり前だ。誰が好き好んで先祖代々受け継いできた土地を余所者にくれてやりたいものか。

ただ、一度全てを無くしたこのウィンターホールドであれば、唯一例外的に可能であつたのかもしれない。

それだけ多種多様な人種が集まっていればいざこざの一つや二つもありそうなものだが、起きてみすぐに精鋭たる衛兵隊が群れを成して駆けつけて来る。それをわかつて騒ぎを起こす者もないのだろう。

ここは他種族にとつての楽園だ。トリグはそう思った。

トリグも自然とノルドを優先させる考えを持っている。しかし現実的にスカイリムを治めるとなれば、他種族との付き合いも考えていかなければならない。

であるならば、ここはスカイリムのあるべき姿の縮図だ、と感じた。

ああ、父上。ウインターホールドを知らずは、スカイリムを知らず、です。トリグは
選択を間違えませんでした。この町は直に見なければわかりません。

閑話、変わりゆく町と共に生きる人々

やや駆け足で物語を進めて来たように思う。少しこれまでのことを振り返りつつ、ここ最近の出来事をおさらいしてみよう。

首長がムートもどきの開催を宣言してからというものの、ウインタールドの住民達は皆、現実感の無い、どこか夢の中のような気分で過ごしていた。

会議をするのはいい。しかし主催国がウインタールドだつて？ 数年前まで何にも、それこそ宿屋と、粗末な首長の砦しかない町だったのに。

自分達の親か、その更に上の代に起きた大災害。今となつてはもうそれそのものを知る者はほばいないが、大災害後の惨状は、住民なら誰でも知っている。

あつたはずの町が、突然ケーキを切り取つたように無くなり、無くなつた地面は当然断崖となる。あまりの高さに見るものは目が眩むし、嘘だと思いたい者はそのまま何人か落ちて死んだ。

ウインタールド自慢の大城壁も削り取られた。どんな敵が攻めてきても、この城壁さえあれば怖いなどは無いと頼りにしていた城壁は、陸地と一緒にいとも容易く削り

取られた。それはそうだ。自分達の想像していた敵に、大災害と呼ばれる津波は含まれていない。

家族を失った。友人を失った。顔見知りも失った。気に食わない者を失った。どうとも思わない者を失った。家を失った。馴染みの店を失った。首長の砦を失った。お気に入りの場所を失った。秘密の隠れ家を失った。

何より、誇りを失った。

生き残った住民から移住者が絶えなかったのは、責められることではない。

ただでさえ生活が成り立たないうえ、そも、この地に留まるだけでも辛いのだ。在りし日を思い出し、理不尽に怒り、無力感に苛まれ、無気力に全身を蝕まれる。その繰り返しなのだ。むしろ留まるほうがどうかしている。

それでも、少数のどうかしている面々はいた。

どうにか権威の象徴と憩いの場として、廃材を利用し首長の砦と酒場だけは取り繕った。

そこまでが限界だった。

一段落ついたところで、ずっと努めて目を逸らし続けてきた現状のどうしようもなさ、足を引っ張られた。腕を引かれた。背にのしかかられた。もう動けない。

そうして『村』としか呼べない規模に落ち着いたウィンターホールは、何十年と卑

屈な思いを胸に暮らし、諦観だけを友に過ごしてきた。

それがどうだろうか。錬金術師を名乗る男が人足らしき男達を率いて村にやってきてからというもの、何もかも全てが変わっていった。

あとから振り返れば、魔法か何かに化かされたようだと思える。しかし男達の働きを直に見てきたウインターホルドの面々は、着実に、一つ一つ、まるで設計図をなぞっているかのような、そんな堅実さを覚えたのだ。

頭目の男は錬金術師を名乗り、町中の人間を診察して回った。人足達は別口で、困っていることはないか、小さくてもいいから叶えたい望みはないか、と聞いて回った。

その後男達は、ウインドヘルムからダークエルフを大勢引き連れて来た。この流れは今も細くはなったが無くなってはいない。ウインターホルドの住民達は始め、ダークエルフ達を毛嫌いだ。長くノルドだけで生活してきた、というかそもそも灰の肌をした耳長の種族など、噂話か歌の中にしか存在しなかったのだ。勿論、お目にかかるのも初めてだ。すぐに受け入れろというほうに無理がある。

だが、ダークエルフ達は住民達が放置していた町の復興を、熱心に行っていた。タム

リエル最北端であるスカイリムの中でも一際厳しい寒さの地域でしか目にしないスノーベリー。それが群生しているのがウィンターホールドという土地だ。だと言うのに、普請に従事するダークエルフ達の体からは熱気で湯気が立っているほどだ。

聞けば、ウィンンドヘルムでは貧民街に押し込められて、町を歩けば罵倒され、何かあれば厄事の犯人に仕立て上げられ、とても人としての扱いを享受することが無かったのだという。

だから必死に働く。一日でも早く、ウィンターホールドの住民だと認めて貰えるように。この地のほかに、居場所なんて無いのだから。

住民達はダークエルフ、もといダンマー達の抱える閉塞感に共感を覚えた。それにダンマー達が建てているのは、錬金術師を名乗る男達の館だと言うではないか。

新参者とはいえ町のために奔走する男の家を、これまた必死になつて働き作っているダンマー達。これを応援せねばウィンターホールドの人間ではない。

住民達は何くれダンマー達の世話を焼いた。酒や、夜中には温まるスープを差し入れたり、生活して困っていることを聞き出したり。

住民達がダークエルフをダンマーと呼び始めたのもこれがきっかけだ。

ここでウィンターホールドにとつて何が一番大きかったかと言えば、スカイリムでも保守的な性質を持つ町の住民に、異種族の移民を認めさせた、ということだ。

ダンマーを連れてきた当の本人は「知り合いの首長ですら厄介者扱いしている貧民街の連中なら連れ出しても構わんだろう」と東の首長に許可を取り、「さあお前達の居場所はこちらにしか無いのだ働け」と扱き使っただけのつもりなのだが。

そこは裏で計算の内に入れているのが、人畜無害な人足の皮を被っていたブレックスの手腕である。

閑話休題。

ウインターホールドの住民が、いやウインターホールドという町がダンマーを受け入れたことによつて何が変わったか。

ここで更に言い替えるなら、それはウインターホールドという町に『ノルドらしからぬものを受け入れた前例ができた』、ということである。

それを意識してかせずか、早速とばかりに男は単身、魔術大学へ乗り込んでいく。住民の心配を他所に、アークメイジやマスター・ウィザードと知古を得たらしい。

これより魔術大学は、男の客員研究員としての協力を引き換えに、町の復興に大きく貢献していくことになる。

ほかにも、何処から伝手を引っ張つて来たのか、カジートとアルゴニアンの商隊が頻繁に訪れるようになった。

カジートは街道や町の復興具合に関心を示し、商売だけでなく移民の相談もしている。アルゴニアンも移民については相談しつつ、こちらは崖をつづら折りに削って造っている港の進捗に多大な関心を寄せていた。

陸を行くことの多いカジート商隊と海を行くことの多いアルゴニアン船団の違いが出た形だろう。

そうこうしているうちに、魔術大学が新しい魔術を開発した、とのことで多少騒ぎになった。住民達下々に難しい話はわからないが、どうも防衛上問題が有るとかなんとか。

だが大学側は各地の首長に対し、件の魔術の利点と欠点を含め詳細に弁明し、安全性に何ら問題の無いことを証建ててみせた。

ウインターホルドの首長と大学のアークメイジが和解をしたとき、住民側の誰も、それが真なるものとは思わなかった。

しかし大学が復興に深く関わっている今になってみると、大学の評判は、いつの間にか町のそれにも大きく関わるようになっていた。

この一件では、住民一同、胸を撫で下ろしたものであった。

大学が各地の首長から睨まれないかどうか。そんなことを気にしているあたりで、ほんの数年前のウインターホルドとは全く異なる関係性を築いている、という事実我自

覺的な住民がどれだけいるか。

町に人を受け入れる体制ができ、大学が名を挙げたことで体制が整ったとばかりに、大学はタムリエル全土へウインターホールド魔術大学への奨学を發布した。

始めは半信半疑な者も多くいたが、それらの心配をよそに大学への聴講生は年々増えていった。ウインターホールドの元々の住民達は、次の年には何人の聴講生が来るだろうか、と賭けの対象にまでしている。

大学には様々な聴講生が訪れた。というかむしろ、結果としてレッドガード以外の全ての種族が集まった。レッドガードがウインターホールドを尋ねないのは、この町を復興させた男のせいだ。男は武具への付呪でも達人級であると高名である。

レッドガードの文化的にそういった魂を扱う術というのは、敬うべき御霊を汚す禁忌なのだ。ウインターホールドとしてはレッドガードとも友好関係を結びたいのだが、中心人物が蛇蝎の如く嫌われているとなれば、難しいだろう。

先述のとおり意地でも来ない種族もいれば、来て勝手に驚いた種族もいた。ハイエルフだ。彼等の初めは、二十人前後の小集団で現れた。

全員が魔術師見習いだというのに、エルフの軽装鎧を身に着け、簡素ながらも武装し、

殺気立っている。外套には血痕も見える。ここに来るまでに、何度か襲撃にでも遭ったのだろう。

無理もない。大戦の記憶が新しいこの時分、ハイエルフがノルド主義の強い土地に姿を現せばどうなるか、火を見るよりも明らかだ。いくら自分達は非サルモールだと訴えても変わりないだろう。

先頭の、頭目の女が住民達の目を見やる。珍しいものを見た、という反応は何える。全体的に敵対心は無いようだが、油断はできない。

どうか視線を向ける住民の《色》が多彩過ぎやしないだろうか。タムリエルの縮図でも作ろうというのか？

そこに町の入口を固めていた門番の片方が女に近づく。未だ門を誂えられていないウインターホールドにおいて、門番の役を担う衛兵は精鋭だ。

戦い慣れしていそうな厳しい男に近づかれ、女は咄嗟に自己防衛が働き剣に手をかけた。それは女にとって、致命的悪手だった。

治安維持を担う衛兵に近づかれて剣に手をかける。これでは「これからこの町に殴り込みをかけます」と宣言しているようなものだ。

普通はそんなことはありえないわけで。一般的な衛兵側の頭にもそうよぎって、もう少し穏便にことを済ませようとするものなのだが……。

女にとって残念なことに衛兵達にはそれをやりかねない男に心当たりがあった。ならば最悪を想定して行動しなければなるまい。

衛兵は即座に緊急事態の笛を鳴らし、人数を集める。

女は慌てて事情を説明しようとするが、集まった衛兵達の切っ先は突き付けられたままだ。

どうしてこんなことになったのだろう。女が剣に手をかけてしまったのは、完全に無意識からだった。

サマーセット諸島からシロデールを経由してウィンターホールドに辿り着くまで、何度も襲撃にあつたし、ハイエルフだという理由で憎しみの刃を向けられもした。

本なら船で大陸をぐるりと回リたかつたのだが、サルモールは『反サルモール』どころか『非サルモール』すら裏切り者扱いして、絶対に逃さない。

そのため港の警備は嚴重であり、船での移動は危険だと判断し、辛く険しい山越えの大陸縦断ルートを選択したのだった。

そのあいだに否応無く培われた警戒心と瞬時に戦闘態勢へ移行する癖、そして常にギリギリの体力も相まって、火にあぶられる糸のように切れそうな精神力。それらが噛み合つた末の、最悪のタイミングのやらかしだった。

女は遅ればせながら、全員に武装解除を命じた。剣も鞘に収めて鞘ごと地に置き、外

套まで脱ぎ、懐に暗器を隠し持つてないことを証明した。

こうなると困るのは衛兵のほうだ。自分は職務に従い行動しただけで、現状の『弱者いじめ』のような絵面は望んでいない。気のせいか、仲間からの視線も痛い。

まあそれでも、最初の緊張した状態よりは話ができるか、と一通り決まり文句での質疑応答を済ませてしまおうとしたそのとき、小走りで気の良さそうな男が駆け寄ってきた。

「やあやあ。随分大事になってしまったね。おおよその事情は聞いているし、彼女達に我々を害する意思は無いように思える。というか、諸君も知つてのとおり、彼女達の迷惑がどうであれ、それを叩き潰せる男が我が町にはいるだろうか？　そう神経質になることはないよ」

遅れてきた男が声をかけた途端、場の雰囲気が一変に和んだ。男の所作や立場などもあるのだろうが、一番は人徳だろうな、と何となく思わせる人柄だった。

しかしこれで困つてしまうのが門番の衛兵だ。穏やかに『何となく』な具合に場を收拾されてしまったては、自分の面目が立たないし、同じような事態が起きたとき、どう対処すればいいのかわからなくなる。

そこで遅れてた男（ハンというらしい）に詰め寄つて何やら話しているが、ハンは言う。

「勿論君の対応に間違いなどないとも。彼の訓練の成果が良く現れているね。敵を過小評価せず、可能な限り迅速に味方の数を増やしてことにあたるべし。見事だ。私から彼にボーナスの支給をお願いしてもいいくらいだよ。対応に関しては、今回と同じでいいんじゃないかな。しっかりと門ができればまた違ってくるかもしれないけれど」

上役か同格なのかはわからないが、門番の仕事ぶりに関して随分買っているように見える。だが門番のほうは、今なお仲間の視線が鋭いことを気にしてか（ボーナス云々が原因かもしれない）、まだハンに詰め寄っている。曰く、最終的には武装解除したが、それまでは此方の戦力を量っていただけで、それまでの言動で自分は危険域の殺気を感じた、など。

門番の弁明が鬱陶しくなったのか急ぐ理由があるのか、ハンは「殺気とはこういうものですか?」と聞いて門番を睨みつけた。それだけで門番は何も言えなくなり、数拍後に絞り出した謝罪と共に定位置へと戻っていった。

これは移民の女には預かり知らぬことであるが、ウインターホールド首長の私兵であり衛兵隊長である男の言葉として、衛兵隊に向けて「死にたくなければ、ブレックスとハンだけは敵に回すな」というものがある。

曰く、自分であれば敵に回ろうが適当に転がしてから理由を聞いて、許せなければ殺すし、そうでなければ罰として訓練の密度を上げてしごいてやるだけだ、という。

だがブレックスとハンは駄目だ、と。

ブレックスを敵に回した場合、ブレックスが邪魔だと判断した瞬間、口に出さなくともハンが殺す。ハンが殺さなくとも他の手下が殺る（あえて生かしておくときなどは、都度ブレックスから指示が出る）。だからブレックスは敵に回すな。

ではハンは？　ハン自身が腕利きということもあるが、ハンの手には負えないほどの相手であればブレックスが殺す。そしてブレックスでも敵わない相手であれば、自分に御鉢が回る。自分は友人からのその頼みを断らない。だからハンも敵に回すな。

門番の男は、自分の足がハンという虎の尾の上に乗りにかけていることを、遅まきながら気づいたのだ。ハンのほうにことを荒立てる意思が無かったため、許されはしたが。

閑話休題。

ハンが事の收拾を急いだのは、ごく単純な話。この女頭目、気丈に振る舞い弱みを見せまいとはしているものの、気力だけで立っているだけの体力極限状態なハイエルフ一党を、迅速に首長の下まで案内する必要があったからだ。気力の糸が切れて倒れられでもしたら色々と面倒なことになる。町の玄関口でぐだぐだと時間を食っている場合はなかつたのだ。

足早に移動しながら、簡単に町の案内と、これからの段取りを説明される。

女はそれらを聞き漏らすまいと集中して聞いてはいたが、どうしても尋ねたいことが

あつて遮つてしまった。

「私達はハイエルフの集団です。先程の一件に関してだつてなんとも思つていません。むしろこれまでの道中に比べれば、随分と優しい対応だつたと感謝すらしています。なのに貴方は意図も簡単に私達を受け入れました。何か裏があるかのように。怖いくらいです。

もし何か理由があるなら、話していただけませんか？ 私達に期待されている役目があるのなら、早めに知つておいたほうが上手く動けると思います。知らないほうが都合がいいということでしたら、これ以上の追求はしません。

私達はただ、静かに魔術を学びたいだけなのです」

「いやはや、随分核心に踏み込んで来ますね。流石というべきか、あるいはか。サマーセットからはるばるこの北限までやってこようと思うだけのことはある。肝が座つていらつしやる。女傑というヤツですか？

心配事を抱えていては神経を擦り減らしてしまいますから、一応こちらの意図はお話しますがね。

貴女方に特別何かしてもらおう、つてことは無いんですよ。正確に言えば貴女方が我が町に来た。ウィンターホールド魔術大学に入学した。その事実が欲しい、といったところでしょうか。

道中、この町の噂ほどの程度？」

「まだ実際に目で見たものすら僅かなのではつきりとは言えませんが、真実もあれば、突拍子もないものまで。

私達は集団では目立ちますから、数人ずつの班に分かれて行動し、最終的にウィンダヘルムかソリチュードに集まり、このウィンターホールドを目指す進路を取ったのです。ですから広範囲で噂を耳にはできませんでした、その分ホラ話も山程仕入れてしまいいして」

「なるほどなるほど。いや、ご苦労お察し致しますとも。ではもう少し補足説明をしたほうが良さそうですね。

現在我が町は復興の最中です。大災害は……ご存知ですね、失礼致しました。

村と呼べるかも怪しい少集落だったこの町を復興すること。これが我々の当面の目的です。そのために、大学との関係も改善しました。以前のような町と大学のいざこざはありませんから安心してください。

そして町の復興に無くてはならないほど大学が町に深く関わっているわけですから、我々としても大学の繁栄にひと肌脱がざるを得ません。というか、大学の利がそのまま町の利に直結しているんで、恩着せがましい言い方をするのも違うんですが。

魔術の才が僅かでもあれば誰でも分け隔てなく門戸を開いている大学。その噂を聞

きつけてウインターホールディングを指摘してくる貴女方のような方々。そして『貴女方のようなハイエルフですら偏見なく受け入れた』という評判を得る我々。それを聞きつけて更に集まる聴講生！ あとはもう笑いの止まらない好循環！

どうです？ 『貴女方が我が町に来た』云々という話については十分ご理解いただけませんか？

女はどう反応すべきか頭を高速で回転させていた。

客観的には腹を割って事情を話してくれたようにも思える。ただ、だからこそそれを邪魔するようなら容赦しない、という脅しにも聞こえる。そしてそれはおそらく間違っているのではない。

というかハンが言ったことが本当だったとして、何処かに自分達を貶める策が潜んでいるのではないか？ いや、やはりハンが一部、ないしは全部に嘘をついていたとして、それにどう対処する？ 相手はこの町でも顔役のようだ。そこにハイエルフで新参者の自分達。仮に自分達が正しくても不利な状況になれば、勝てる要素が一つも無い。

そもそも、女は馬鹿ではないが、女の頭脳は研究のためにあるのであって、権謀術数のためにあるのではない。化かし合い腹の探り合い裏のかき合いに使うものではない。

女は一度思考を止め、ハンの言葉を全面的に信じることにした。そしてそれは、後に女の小集団全員に通達される。用心しつつも、まずは信じる。受け入れてもらうには、

自ら郷に従う他ないのだ。

その他あれこれと話ながら、女達は相談役だというブレックスという男に引き渡された。そこで旅の泥等を落として、首長への謁見に映るらしい。この頃には女の顔から迷いは消えていた。

それを見ながら、ハンは疲れた素振りを隠しもせず毒づく。

「フレイみたいな陰謀大好き変態野郎じゃあるまいし、こちとらそんな年がら年中言の葉に裏の意味を張り付かせていられるかっての。怪しむ事情は理解するが、毎度毎度その緊張を解くこつちの身にもなってくれ。なんで厄介事があつたらみんな俺を呼ぶんだ？ 『顔が優しそう』ってこりゃあ作ってんだっての。」

でもなあ。頭に回すなんて本末転倒だし、旦那には間違つても任せられねえし、誰か手の空いてるヤツ……なんて一人もない台所事情だし。結局、俺が走り回るしかねえのか。はあ」

一党の副長を務める男の悲哀は、ウィンターホールドの空に解けていった。

それから少し立って。ウィンターホールド主催でムート首長会議が行われると町に噂が流れた。

始めは誰もが鼻で笑った。そんな馬鹿な。ムートは上級王が招集するものだし、仮に

この町の首長が代理を務めるにしたって……ねえ？ そんなところだ。どうしても数年前までは寒村だの少集落だったのという卑下が消えない。

だが首長の砦に勤める役人の一人が言うのだ。「本当なんだよ！ 相談役と首長様が話しているのをこの耳で聞いたんだ。『じきに発表も行う』って言ってたんだよ！」

これが大ボラならデイドラも裸足で逃げ出す衛兵隊長のしごきが待っている。それを理解しているウインターホルドの住民にそんな馬鹿はいないだろう。

そして男は砦勤めである。けして又聞きの噂ではなく本人が確かに自分の耳で聞いたと。つまりは現実の可能性が高いと。

噂から数日間。住民達は眠れぬ夜を過ごした。それは先住民であれ、移民であれ、大学の聴講生であれ、町と大学の上層部を除いた皆がそうだった。

そうして皆のやきもきした気持ちに限界に達した天気の良い日、町の広場に首長と相談役に私兵、次にアークメイジとマスター・ウィザードが現れ、ムートもどきの開催が発表された。と同時に、スカイリム全土へ布告するとも宣言された。

宣言を聞いた市民はぼかんとした面持ちだった。先住民にその様子は多かつただろう。

聞き間違いじゃない？ 本当に？ この町で？ やるの？ 大丈夫？ でもやるんでしょ？ じゃあ準備とか……。その前に……。お祝いじゃない？

首長の代わりに声を張り上げたブレックスがあまりの静寂ぶりに眉をひそめていると、集まった住民達が爆発したような歓声を上げた。音だけなら達人級の火炎魔術並だとブレックスは思った。

だって。このウインターホールドで。ムートやるって！ 信じられない！ 最初は「騙されたと思って」って言われて手伝ったり。渋々従っただけだったけれど。本当になつた！ この町でムートを！ ウインターホールド万歳！ 復興万歳！ おいまだ復興は続くんだぜ。ああ、私兵の旦那は五大都市に並ぶデカイ町にするって言つてたぞ。マジかよ！ やっぱぶつ飛んでるよあの人！ 最高だ！ 万歳！

なし崩しに始まつたその日の宴は、丸一日続いた。多くの食料と酒が提供され、魔術大学からは色違いの火球が夜空に次々に打ち出されて皆を楽しませた。

更にそれから幾らかした頃、ウインターホールドの広場ではまた人が集められ、マルカルスと相互友好条約を締結したと発表された。成し遂げたのは、首長の私兵が単独で、だとも。

住民達には色々わけがわからなかつた。

ウインドヘルムやソリチュードなら理解できる。どちらもすぐ隣だから、安全保障のためにもどちらかと組むのはアリだ。そんなことは素人にもわかる。

だが何故スカイリム西端のマルカルス？ あのあたりと組んで嬉しいのは、スカイリム中央に鎮座する交易都市のホワイトランなんかじゃないのか？ というか、噂に聞く蛮族のフォースウォーンはどうするんだろう。大体、「成し遂げたのは、首長の私兵が単独で」ってなに???

確かに最近不在であることが多かったものの、自宅で寝起きして、錬金術で薬を作り、年寄りの診察回りをして、衛兵隊をすごっていたのは、住民達が見ている。それでなんでマルカルスに関われる？ 意味がわからない。

あまりに意味がわからなかったので、住民達は大勢で私兵の下へ押しかけ質問攻めにすることにした。住民達は知っているのだ。この私兵、余程理不尽なことではなければ、大体弱気に呑まれて言うことを聞いてくれるのだと。

そうしたらあまりの鬱陶しさに辟易したのか、自棄になったように吠えた。「ええい、この私を誰と心得るか！ 恐れ多くも日の出の勢いのウィンターホールド、その首長閣下に任せられし私兵であるぞ。朝にウィンターホールドに在りて、夕にマルカルスに在るなぞ造作も無いわ！」

誰もがそんな無茶なと思いはしたが、「いや、不可能と思われたことを幾つも可能にしてきたこの男なら」とも考え直す者もちらほらと見受けられた。

住民達からすれば、男は冗談でもなんでもなく、『なんだってできる男』なのだ。

何処からともなく手下を連れてふらりと現れ、自分達を導いてくれる、力強いノルドの男。それはまるで既に神話になったタロスの再現のような。そう、想像するだけで甘美な風に酔いしれられるような。

男は自覚していないが、住民達のなかで男と接触した時期が早い者ほど、こうした考えを持つ者が多い。そしてそれは、徐々に街全体に広がりつつある。ある種の同調圧力でもあるし、厳しい北の地で生きるための寄る辺でもあるのだ。

尚武の気風。独立独歩の精神が強いスカイリムとて、誰も彼もが強く生きられるわけではない。

そもそもスカイリムの別名が『神に見捨てられた地』なのだ。どれだけ厳しい環境なのか、その別名で想像できない者は口を閉ざしてスカイリム関係者とは関わらないほうがいい。

そんな土地では、どんな強い心を持つものとして何かに縋すがりたくなる。親。町の顔役。地方の首長。上級王。九大神。人によって様々だ。

ウィンターホールドの住民達にとっては、九番目のエイドラにあたる一柱の伝説の再現を見ているようで縋りたくなる、というだけの話だ。

それは住民達の心が弱いからでもなければ、男が住民達を上手く誑たがかしているからでもない。人々の文化と、厳しい環境と、英雄を待ち望んだ人々と力を持った男が揃った。

そういう話なのだ。

そして物語は再び動き出す。

それは、熊の意匠を従えた王が外套を靡なかせ、ウインターホールの門前に立つたところから始まる。

これは、本当なら有り得なかつた話。存在しないはずの町で行われる、存在しないはずの会議。

各地の首長達が思惑を馳せながら、この有り得なかつたはずの町と人の正体を暴いてやろうとする、そういう会議。

対して主催者側は、何を以て首長達に対峙するのか。何を腹に抱えて何を語るのか。あえて言うなら、ここが一つの転換点。